



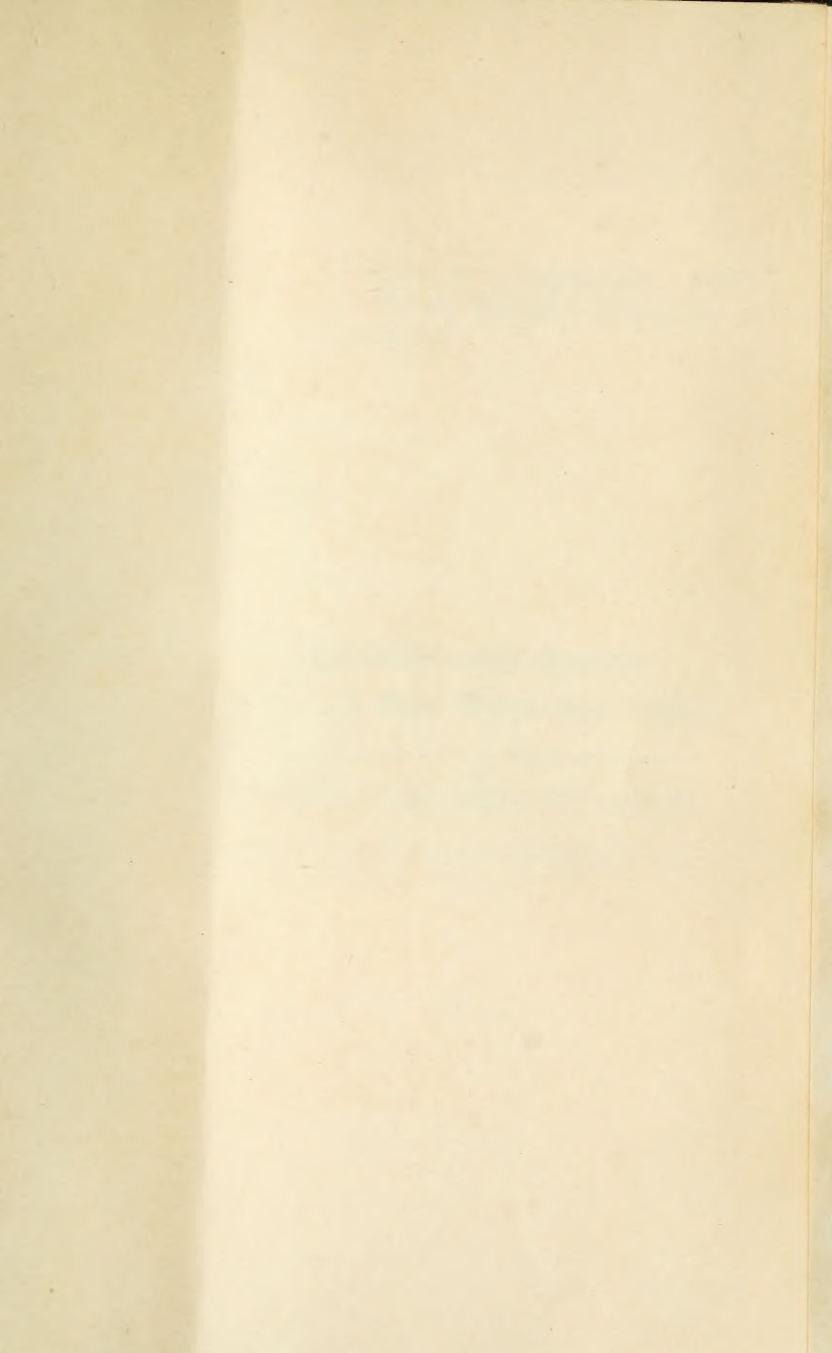
宗典部
第七十卷

BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.41

East Asia

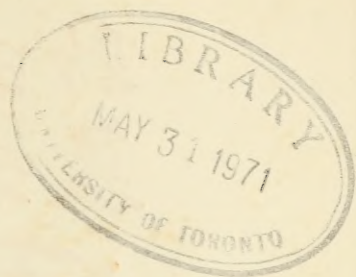
PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



昭和
新纂

國
譯大藏經



BL
1411
T8J3
1929
v. 41

昭和
新纂

國譯大藏經 宗典部 第十七卷

華嚴五教章 目次

卷	上	一
卷	中	三
卷	下	七

祕密曼荼羅十住心論 目次

卷	第 一	一三
卷	第 二	一七八
卷	第 三	二二五
卷	第 四	二四四
卷	第 五	二六四
卷	第 六	二七六

卷第七.....三二七

卷第八.....三三四

卷第九.....三四五

卷第十.....三六九

三論玄義 目次

三論玄義.....三六五

華嚴五教章

宗典部
第十七卷

【題號】は、宋本には華嚴一乘教義分齊章といふ。

【法藏】賢首大師。

【一】此乘にては、一乘三乘等を説くも、主として同別二教の一乘義を建立するに在り。
 【海印三昧】海印とは喻なり、これを絶すると、妄念湛然として、萬象悉く現ずること、大海の風によりて、浪起れども、風息めば、萬象現ぜざるなきに喩ふ。
 【別教・同教】直ちに無盡の義を説く、直顯的説明は別教一乘、三乘に寄せて無盡の義を説く。寄顯的説明は同教一乘なり。

華嚴一乘教分記

卷上

法藏撰す

- 建立乘 一
- 教義攝益 二
- 叙古今立教 三
- 分教開宗 四
- 乘教開合 五
- 教起前後 六
- 決擇其意 七
- 施設異相 八
- 義理分齊 九
- 所詮差別 十

建立乘第一

今將に釋迦佛海印三昧の、一乘教義を聞かんとするに、略して十門を作る。初に建立乘を明すとは、然るに此一乘教義の分齊、開いて二門と爲す、一には別教、二には同教なり。初の中に亦二あり。一には是れ性海果分、是れ不可説の義に當れり。何を以ての故に。教と相應せざるが故に。即ち十佛の自境界なり。故に『地論』に云はく、「因分可説、果分不可説」といふものは是なり。二には是れ緣起因分、即ち普賢の境界なり。此二は無二にして全體遍收せり、其れ猶し波水のごとし、之を思つて見るべし。普賢門の中に就いて、復二門を作る。一には分相門、二には該攝門なり。

分相門とは、此れ別教一乘は彼三乘に別するなり。『法華』の中の、宅内にして指す所の門外の三車は、諸子を誘引して出づることを得せしむるが如きは、是れ三乘教なり。界外

【性海果分不可說】 遮那佛大悟の境地は、本より機感を超越するを以て、言教を以てすべきに非ざるをいふ。
 【十佛】 此れに解境、行境の二あるも今は融三種世間の解境の十佛を指す。本經十地品所載の衆生身等是なり。
 【緣起四分】 因人の機緣に隨ひて言説を起して、圓果の狀を解知せしむるをいふ。
 【波水の如し】 因果二分無二を論ふるに、波水の譬無二を以てす。
 【二】 以下別して因分に就いて廣く義理を明す。
 【法華の中の宅内】 云云。同經第二に出づる譬喩なり。三車とは法華已前の三乘に對合し、大白牛車は法華所說の一乘に合す。
 【一には權實差別】

の露地に授くる所の大白牛車は、是れ一乘教なり。
 然るに此一乘三乘の差別は、諸の聖教の中に、略して十説有り。一には權實の差別なり、三が中の牛車も亦羊鹿に同じ、權に諸子を引いて、務いで出づることを得せしむるを以て、是故に臨門の三車は、俱に是れ開方便門なり、四衢別授の大白牛車を、方に示眞實相と爲す。若し彼三が中の牛も、亦是れ實ならば、長者宅内にして諸子を引く時、彼牛車を指して、只門外に在りといふ。此れ應に亦出でて、即ち牛車を見ることを得べし。如何が出で竟りて、只指す所の車の所任の處に至りて、而も得ざるが故に、復更に索むるや。亦界外にして車を索むるは、但是れ一乘なりと説くべからず。經に彼牛車を求むる人、門を出でて即ち彼牛車を得と、説かざるを以ての故に。又彼先に許せる車を索むるは、唯二乘なりと説かざるが故に。是故に經の中に、諸子出づることを得て、露地に至り已りて、各各父に白して言さく、「父の、先に許す所の玩好の具、羊車、鹿車、牛車、願くは、時に賜へ與へよ。」と。此を以て知ることを得たり、三車同じく索むといふことを。此中の三車は、彼三乘の所求の果に約して説く、是れ元意の、標趣する所なるを以ての故に。若し自宗に望めば、並に皆得果す、若し得ずといはば、如何が出世せん。今俱に得ざると言ふは、一乘に望むるを以ての故に、是故に實を以て權を映すは、則ち方便の相盡きぬ、故に皆得ること無きなり。彼三人を廻して一乘に入れんと欲するが爲の故に、是故に大乘も亦廻すと説く。若し爾らずんば、彼牛を求むる人、既に界外に出づれば、凡夫に同ぜず、羊鹿を

以下三乗と一乗の勝劣淺深を示すに十門を以て分別す【臨門の三車】門外の羊鹿牛の三車をいふ。【四衢別授の大白牛車】此れ正しく長者の與へたるものに、即ち別教一乗に喩ふ。【問ふ臨門の三車は實とやせん云】此は三乗の教各各自宗に望むれば、出世の利益あり、これ實、若し一乗に望むればこれ不實なる意を示す。

求むるに非ざれば、二乗に同ぜず、未だ露地の大白牛車を得ざれば、一乗に同ぜず。若し三が中の大乘の人に非ざれば、更に是れ何の色の人ぞや。自位究竟の處に至るを以ての故に、後に皆進んで別教一乗に入るなり。問ふ、「臨門の三車は、實とや爲ん、不實とや爲んや。」答ふ、「實なり、不實なり。何を以ての故に。是れ方便なるが故に。是れ方便して子を引いて、出づることを得せしむるに由りて、不實に非ず、是れ方便して引くに由るが故に、是れ實に非ず。此二は無二にして唯一相なり。二には教義差別なり。臨門の牛車は、亦羊鹿に同じく、但其名のみ有るを以て、一乗に望むれば、俱に是れ、教なるを以ての故に、是故に經に云はく、「佛の教門を以て三界の苦を出づ」と、亦以て佛敎の言は、但し二乗に約すと説くべからず。經文に簡ばざるを以ての故に、彼牛を求むるの人、教を尋ねて義に至るに、亦二乗に同じく、俱に得ざるが故なり。三には所期差別なり、彼一乗は是れ界内にして、先に許す所の三に非ざるを以て、是故に界外の四衢道の中にして、諸子に授くる時、皆非本所望と云ふ。是故に經に云はく、「是時に、諸子は各各大車に乗じて、未曾有なることを得たり、本の所望に非ず」と、亦非本所望の言は、但二乗に約すと説くべからず。經に簡ばざるを以ての故に。聖言失無きが故に。良に以れば、門前に許す所は、今皆得ること無し。露地の牛車は、本憐翼するに非ず、故に、今之を得れば本の所望に非ざるなり。四には徳量差別なり。謂はく、宅内にして外を指すに、但牛車を言うて、餘の徳を言はず、而るに露地にして授くる所は、七寶の大車なり。謂はく、寶網、寶鈴等の無

【五には寄位に約す】此は五乘に寄せて、十地の階降を顯す。

量の衆寶をもて而も莊嚴する等と、此れ則ち體の具徳なり。又彼は但牛とのみ云うて、餘の相を言はず、此は、白牛肥壯大力にして、其疾きこと風の如し等と云ふは、用の殊勝なり。又云はく、諸の從多くして、而も之を侍衛する等とは、行の眷屬なり。此等の異相は、並に同教一乘に約して、以て異を明すのみ。又彼三が中の牛車は、唯一なり、彼宗には一相の方便を明して、主伴無きを以ての故に。此は則ち爾らず。主伴具足して、攝徳無盡なり。是故に經に云はく、「我に是の如きの七寶の大車有り、其數無量なり。無量の寶車にして速に一に非ず」と。此は一乘無盡の教義を顯す。此義は廣く説くこと『華嚴』の中の如し。此は別教一乘に約して、以て異を明すのみ。五には寄位に約する差別なり。『本業經』『仁王經』及び『地論』梁の『攝論』等の中にいふが如くんば、初二三地を以て、世間に寄在し、四地より七地に至るまでを、出世間に寄せ、八地已上を出世間に寄せ。出世間の中に於て、四地五地をば聲聞の法に寄せ、第六地をば緣覺の法に寄せ、七地をば菩薩の法に寄せ、八地以上をば一乘の法に寄せ。若し大乘は即ち是れ一乘ならば、七地は即ち應に是れ出世なるべし、又一乘は八地に在るべからず。是故に當に知るべし、『法華』の中の三乘の人、三車を求めんが爲に、出でて門外に至る者は、即ち三乘俱に是れ、出世間の自位究竟なり。即ち是れ、此中の四地以去、七地に至るまでの者はなり。四衢別授の大牛車は、此れ出世の上に在るが故に、是れ出世一乘の法なり、即ち是れ此中の八地以上は、一乘の法なり。問ふ、「若し爾らば何が故に梁の『攝論』に、二乗の善を出世と名け、

【六には付屬差別】法華經付屬品の文に、餘の深法とはこれ大乘教と法華經を以て、大乘一乘の區別あることを知れと。

【七には根縁受者差別】根機熟すれば、受法の縁有り不成熟の者はその縁なきをいふ。【能く…何人ぞ】若し一乘大乘の別無くんば、彼の未熟の菩薩何人ぞやの意。

八地従り以上乃至佛地までを、出出世と名くと云ふや。既に三乘は但是れ出世と言はず、如何が是説を作すや。』答ふ、『既に四五の二地を聲聞と爲し、第六を縁覺と爲し、八地以上を出世と爲す。然るに彼第七は、是れ何人ぞや。是故に當に知るべし、彼に二乗を出世と名くと云ふは、即ち大小二乘なり。聲聞縁覺を俱に小と名くるを以ての故に、二乘の名通ぜり、具には下に説けるが如し。六には付屬差別なり。』法華經に云ふが如し。『未來世に於て、若し善男子善女人有りて、如來の智慧を信ぜん者には、當に爲に此法華經』を演説して、聞知することを得せしむべし。其人をして、佛慧を得せしめんが爲の故なり。若し衆生有りて信受せざる者には、當に如來の餘の深法の中に於て、示教利喜すべし。汝等若し能く是の如くせば、則ち佛恩を報ずと爲す』と。解して云はく、餘深法とは、即ち是れ大乘なり、即ち一乘には非ざるが故に、之を稱して餘と爲す。然るに小乘に非ざれば、是を以て深と稱す、亦彼小乘を以て餘の深法を爲すと説くべからず。『法華』の中に正しく小乘を破するを以て、豈其れ深と歎すべけんや。是故に當に知るべし、『法華』の別意は、正しく一乘に在り、故に此付屬を作す。七には根縁受者の差別なり。此經の性起品に云ふが如し、『佛子、菩薩摩訶薩、無量億那由他劫に、六波羅蜜を行じ、道品の善根を修習すれども、未だ此經を聞かず、聞くと雖も、信じ受持し隨順せず、是等をば猶假名の菩薩と爲す』と。解して云はく、此は三乘の菩薩の、根未熟を明すが故に。能く是の如く爾許の劫を経て、是の如きの行を修すと雖も、此一乘經を聞かず信ぜざる者は何人ぞや。

【九には約機顯理】機の不同に由りて理に淺深ありといひ、三一の別を立つ。

【三乗の一相一寂】等之法【一事一寂】にして三乗終教の一相眞如をいふ。彼未だ無盡緣起の法を知らずといふ【本末開合】本とは別教一乘、末と

當に知るべし、是れ前の『法華經』の内の、餘の深法の中、示教利喜の者は是なり。一乘究竟の法に望むるを以ての故に、是故に彼を説いて、以て假名と爲す。若し自宗に望めば、亦眞實なり。此文の意は、『華嚴』は是れ別教一乘を明すが故に、彼に同ぜざるなり。八には難信易信の差別なり。此經の賢首品に云へるが如し、「一切世界の群生の類、聲聞の道を欲求すること有ること尠し。緣覺を求むる者、轉た復少し、大乘を求むる者、甚だ希有なり。大乘を求むる者猶易と爲す、能く是法を信するを、甚だ難と爲す」と。解して云はく、此品の中に、正しく信位の終心に、即ち一切の位、及び成佛等の事を攝することを明すを以て、既に三乗を超ゆ、恐く信受し難きが故に、三乗を擧げて、對比して之を決す。九には約機顯理の差別なり。此經の第九地の初の偈に云ふが如し、「若し衆生下劣にして、其心厭沒せる者には、示すに聲聞の道を以てして、衆苦を出しむ。若し復衆生有りて、諸根少く明利にして、因縁の法を樂ふには、爲に辟支佛を説く。若し人根明利にして、大慈悲心有りて、諸の衆生を饒益せんには、爲に菩薩の道を説く。若し無上心有りて、決定して大事を樂ふには、爲に佛身を示して無盡の佛法を説く」と。解して云はく、此は一乘の法門、主伴具足することを明すが故に、無盡の佛法と云ふ、三乗の一相一寂等の法には、同じからず。此地の中に大法師と作りて、說法儀軌を明すを以て、是故に一乘三乗の文の差別を開示するなり。十には本末開合の差別なり、「大乘同性經」に云ふが如し、「所有る聲聞の法、辟支佛の法、菩薩の法、諸佛の法、是の如き一切の諸法は、皆悉く毘盧遮

は三乗、開とは一佛乘より三乗を開き、合とは三を會して一に歸す。

【毘盧藏大海】毘盧經下卷に、佛の十地を説く、第十名に毘盧遮那智海藏地といひ四乗の河水、遂に智藏海に入るといふ。

【三】此下、該攝門の所明にして、別教一乗の外に、三乗の方便權教なきことを明す。

那の智藏大海に流入す」と。此文は、此の本末に約して異を分つ、仍りて末を會して本に歸し、一乘三乗の差別の理を明すのみ。此上の十證は、龜鏡と爲すに足れり。其別教一乘に、明す所の行位因果等の相も、彼三乘施設の分齊とは、全く別にして不同なり。廣くは經文に在り、略して下に辨するが如し。縦ひ教證に無くとも、彼義異なるに依りて、尙須らく宗を分つべし、況んや聖教雲のごとし、披くに煥然として目に溢てり。而るに株を守るの類、説を聞いて神を駭かす、深く悲しむべし。故に經に云はく、「未だ聞かざる所の經、之を聞いて疑はざるを、希有と爲す」と。

二に該攝門とは、一切の三乗等の法は、本より來、悉く是れ彼一乗の法なり。何を以ての故に。三乗を一乘に望むるに、二門有るが故に。謂はく、不異と不一となり。初の不異の中に、亦二あり。一には三即一なるを以ての故に、不異なり。二には、一乘即三なるを以ての故に、不異なり。問ふ、「若し初の門に據るに、三即一ならば、未だ知らず彼三は、存すとや爲ん、壞すとや爲ん。若し存せば、如何が唯一乘ならん。若し壞せば、彼三乗の機は、更に何の法に依りてか、進修することを得ん。」答ふ、「四句有り。一には即一に由るが故に、壞を待たず。二には即一に由るが故に、存を礙へず。三には即一に由るが故に、壞せざること無し、四には即一に由るが故に、存すべきこと無し。初の二義に由りて、三乗の機は、所依有ることを得、後の二義に由りて、三乗の機は、一乘に入ることを得べし。四句俱に即一なるに、由るを以ての故に、是故に唯一乗のみ有りて、更に餘無きなり。」二

【隱顯の四句】一には即三に由る故に隱を待たず。二に即三に依る故に顯を礙へず。三に即三に由る故に隱れざる無し。四に即三に由る故に顯るべきなし。

【二に同教云云】一本は、以下を卷上の二となす。

【四】以下、同教一乘を明す。初に諸乘を分つに六重初に一乘を明す。

【三乗の中の如き】是因陀羅云云。維摩の芥子中に須彌を納る等の説を指す。

【主伴具足せず】一多相即せざる意

【華藏世界】蓮華藏世界のこと。諸佛報身の淨土。

【十眼】肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼、智眼、明眼、四生死眼、無礙眼、普眼。

【具】或はいふ蓋し行文なるべし。

には一乘即三なるを以て、不異を明さば、隱顯の四句あり、上に反じて之を思ふべし。是故に唯三乗のみ有りて、更に一無きなり。此は是れ、下の同教の中に辨するが如し。二に不一とは、此は即一が三と、上の即三の一と、是れ非一門なり。是れ則ち不一を壞せずして不異を明す。又此中の不一は是れ、上の分相門なり、此中の不異は是れ、此該攝門なり。

二に同教とは、中に於て二有り、初には諸乘を分ち、後には本末を融ず。初の中に六重有り。一には一乘を明す。中に於て七有り。初には法相交參に約して、以一乘を明す。

謂はく、三乗の中の如きは、亦因陀羅微細等を説くこと有れども、而も主伴具せず。或は亦華藏世界を説けども、而も十等と説かず。或は一乘の中に亦三乗の法相等有り。謂はく、十眼の中に亦具に五眼有り、十通の中に亦六通有る等の如し。而れども義理皆別なり。此れ即ち一乘を三乗に垂れ、三乗を一に參ゆ、是れ則ち兩宗交接し、連續引接して、根欲性を成じて、別教一乘に入らしむるが故なり。二には攝方便に約す。謂はく、彼三乗等の法を、總じて一乘の方便と爲すが故に、皆一乘と名く。故に經に云はく、「諸の所作有るは、皆一大事の爲の故なり」等と。三には所流に約して辨す。謂はく、三乗等は悉く、一乘從り流る、故に經に云はく、「汝等の所行は是れ、菩薩の道なり」等と。又經に云はく、「毘尼とは即ち大乘なり」と。四には殊勝門に約す、即ち三が中の大乘を以て、一乘と爲す。別教に望むれば、權實異有りと雖も、同じく是れ菩薩の所乘なるを以てなり。是故

【十通】宿命通、天眼通、神力通、天耳通、他心通、神足通、多身を現す、速に往來す、能く利土を嚴る（以上五神通）漏盡耶即【毘尼】鼻奈耶即【律藏】のこと。【三が中の大乘】三乗中の菩薩を餘の二乗に望めていふ。而も本宗の一乗は、三の中の大乘をいふには非ず三の中の大を無三の一に融同して彼をも一乗と許すのみ。【教事深細】一乗は教深事細、三乗は教淺近にして龜【經に：等と】法華經壽量品に佛靈鷲山及び餘の諸住處に在り云云といふを引いて深教意を示す。【八義意趣】一乗の得名の意を辨ず攝論は、梁譯には第十五卷、隋唐兩

に經に云はく、「唯此一事のみ實なり、餘の二は則ち眞に非ず」と。又云はく、「止息の故に二と説く」等と。此文に二の意有り。一には若し上の別教に望めば、餘の二とは即ち大小二乘なり。聲聞等は利鈍殊りと雖も、同じく小果を期するを以ての故に。一を開いて二に異するが故に、若し同教に望めば、即ち聲聞等を二と爲すなり。又、大を融じて一に同するなり。五には教事深細に約す、經に云ふが如し、「我常に靈山に在り」等と。六には八義意趣に約す。『攝論』に依るに、問答の中に辨ずるが如し。七には十義方便に約す、「孔目」の中に説くが如し。上の諸義に依るに、則ち三乘等を並に一乗と名く、本宗に隨つて、定むるを以ての故に。主伴具せざるが故に、是れ同にして別に非ざるなり。二には二乗を明すに、三種有り。一には一乗と三乗とを、名けて二乗と爲す。謂はく、經の中の四衢所授と、并に臨門の三車の如し。此中には愚法を合して廻心に同ず、俱に是れ小乘なればなり、故に二有るのみ。二には大乘と小乗とを二と爲す。此れ即ち一を合して三に同じ、愚法を聞いて廻心に異す。三には聲聞と緣覺とを二と爲す、此れ廻心と及び愚法とに通ず。又初は一乗に約し、次は三乗に約し、後は小乘に約し、准じて知るべきのみ。三に三乗を明すに亦三種有り。一には一乗と三乗と小乗とを、名けて三乗と爲す。此は法の本末を顯すが爲の故に、上に一乗を開き、下に愚法を開く、故に三有るなり。經の中に、愚法二乘は並に所引の諸子の中に在るを以て、故に知んぬ、三乘の外に、別に小乘有り。三車をもつて諸子を引く、故に知んぬ、小乘の外に、別に三乘有り、三人は俱に出で

本は第十卷、智嚴の五十要問答下卷に詳かなり。【十義方便】孔目章第一卷、一乗の義を分ちて正乗方便乗とし、方便乗を説くに十義を以て分別す。【一に…知るべきのみ】二に二乗を明す。【愚法を開いて…異す】異法小乗は未だ大乘を信ぜず廻心の二乗は既に大に廻入するを以てなり。【三に三乗…故なり】三に三乗に約して明す。【愚法小乗】聲聞緣覺の二乗に於て但自法のみ法空の現を知らざるをいふ。【終教已去】始教有宗には、愚法を以て入涅槃を許すも、終頓圓教にては種子未除を以て許さず。

て、露地に至り已りて、更に別に大白牛車を授く、故に知んぬ、三乗の外に、別に一乗有ることを。問ふ、「何を以てか愚法の二乗は、所引の中に在りといふことを、知ることを得るや。」答ふ、「彼愚法は、大乘終教以去に約せば、並に究竟して、三界を出づと名けざるを以ての故に。何を以ての故に。人執の煩惱、未だ永拔せざるを以ての故に但能く折伏するのみ。故に『彌勒問經論』に云はく、「一切の聲聞、辟支佛の人は、實の如く、四無量を修すること能はず、究竟して諸の煩惱を斷すること能はず、但能く一切の煩惱を折伏するが故に」と。又經に云はく、「汝等が所得は眞の滅度に非ず」と。又經に云はく、「若し此法を信せずして、阿羅漢果を得といはば、是處有ること無し」と。又『大品』に云はく、「阿羅漢等の果を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と。是故に當に知るべし、羅漢の實義は、大乘の中に在り、是故に大乘には必ず三を具するなり。故に『普超三昧經』に云はく、「此の如き大乘の中に、亦三乗有り、即ち三藏と爲す。謂はく、聲聞藏と緣覺藏と菩薩藏となり」と。唯大乘の中にのみ、三藏有ることを得べく、餘の二乗の中には、則ち此無し。『入大乘論』の中に、亦此説に同じ。是故に當に知るべし、門外の三車は愚法に通ぜず、『法華』は小乗に非ざるを以ての故に。其『瑜伽』の聲聞決擇、及び『雜集』等の論に、聲聞等の修行位果、及び斷惑の分齊を辨すると、『婆沙』『俱舍』等と不同なるは、是事なり。是故に當に知るべし、一乗と三乗と小乗との分齊別なり。此義に由るが故に、『大智度論』に云はく、「般若波羅蜜に二種有り。一には共、二には不共なり。共と言ふは、

【又經に云云】法華經第四に小乘の涅槃を評していへる文。

【又經に云はく、汝等云云】法華經方便品の文意。

【摩訶衍經】大品をいふ。

【方等經】涅槃、維摩、思益、迦葉、佛藏、仁王、勝天王等の經をいふ。

【一音異解】佛は一音を以て說法するも、機の利鈍に隨つて、所解異なるをいふ。

【大乘中に自ら三乘有り】普超、大品等の所説。

謂はく、此『摩訶衍經』及び餘の『方等經』は、諸の聲聞と共説するが故に。不共とは、『不思議經』の如し。聲聞と共に共説せざるが故に」と。解して云はく、『不思議經』とは、彼論に自ら『華嚴』を指す是なり。其れ唯別教一乘のみを、説くを以ての故に不共と名く。義をもて准知するに、『四阿含經』の如きも、亦不共と名くべし。唯愚法二乘の教のみを、説くを以ての故に。『大品』等の經の如きは、共に三乘の衆を集めて、通じて三乘の法を説き、具に三乘の益を獲しむるが故に共と云ふなり。此中に、大いに通ずるの小は、愚法に非ず、小に通ずるの大は、一乘に非ず、此三義に依るが故に、梁の『攝論』に云はく、『善成立に三種有り。一には小乘、二には三乘、三には一乘なり。第三の一乘は、最も上に居するが故に。善成立と名く』と、即ち共事なり。若し『大品』等を説くの時、一音異解して小果を得るが故に、三乘有りと言はば、『華嚴』を説くの時、何んが異解して、小果を得ざるや。又『増一』等を説くの時、何んが異解して、大果を得ざるや。是故に當に知るべし、三宗各別なること、理として疑はず。二には大乘と中乘と小乘とを、三乘と爲す。此に三義有り、一には則ち一乘を融じて大乘に同じ、愚法を合して小乘に同ず、故に唯三なり、教理は知んぬべし。此は一乘に約して辨ず。二には大乘の中に、自ら三乘有り、上に説くが如し。三には小乘の中に、亦三有り。『小論』の中の如し。自ら聲聞法、緣覺法、及び佛法有り。此中の佛法とは、但慈悲愛行等のみ、二乘に異なるが故なり。四には或は四乘と爲すに、三種有り、一には謂はく、一乘と三乘とを四と爲す。此れ則ち一を附

【五】以下一乘三乘無量乘の本末を融會して無二なりといふ一段なり。

いて三に異す、二聲聞を合するが故なり。二には謂はく、一乘と三乘と小乘と人天とを四と爲す、此は總じて聞するなり。三には謂はく、三乘と人天とを四と爲す、上に准じて知んぬべし。五には或は五乘と爲すに、亦三種有り。一には謂はく、一乘と三乘と小乘とを五と爲す、二には謂はく、三乘と人天とを五と爲す、三には謂はく、佛と二乘と天と、及び梵とを亦五と爲す、並に准釋して知んぬべし。六には或は無量乘は謂はく、一切の法門なり、故に此經に云はく、「一の世界の中に於て、一乘を説く音を聞く、或は二三四五、乃至無量乘なり」と。此れ之謂なり。上來は乘を分ち竟んぬ。

二に本末を融ずとは、此同教の諸乘等は、會融無二にして、同一法界なり。其二門有り。一には泯權歸實門、即ち一乘なり。二には攬實成權門、即ち三乘等なり。初は即ち權を壊せずして、而も即ち泯するが故に、三乘即一にして、而も三を礙へず。後は即ち實に異せずして、而も即ち權なるが故に、一乘即三にして、而も二を礙へず、是故に一三融攝して、體無二なり。問ふ、「若し爾らば、一門は俱に齊し、如何が復權實有りと説くや。」答ふ、「義門別なるが故に、權實恆に殊れり、理遍通するが故に、全體無二なり。何んとなれば、謂はく、權の起ることは必ず一向に實に頼る、是故に實を攬るに實失せず、實の顯ることは、未だ必ずしも一向に權に藉らず、故に權を泯するに、權は立せず、是故に三乘即一にして、存壞を具すと雖も、竟に必ず盡くること有り。一乘即三にして、隱顯を具すと雖も、終に恆に盡くること無し。此に由りて鎔融するに、其四句有り、一には或は唯一

【一六】以下三乗一乗の教義及び攝益の分齊を明す。初は能被の法、後は所被の機に就く。

【界内にして】爲す。界内に三車を示すを教となし得出を義となせども實に求むる三車なし。

【二に開合云云】以下開合を明す。或は俱に教義；故に「三乗は本來悉く別教一乘なる意、網の外に網目なきが如し。」

乘なり。謂はく、別教の如し。二には或は唯三乗、三乗等の教の如し、一を知らざるを以ての故に。三には或は亦一亦三、同教の如し、四には或は非一非三、上の果海の如し。此四義の中に、隨ひて一門に於て、皆全に法體を收む。是故に諸乘、或は存し或は壞すれども、而も相礙へず。准思して解すべし。餘の、乘の名體等を釋することは、並に別に説くが如し。

（六）けろぎ 教義攝益第二

此門に二有り。先づ教義の分齊を辨じ、後に攝益の分齊を明す。初の中に亦二有り。先づ相を示し、後には開合す。初の中に三義有り。一には露地の牛車の如きは、自ら教義有り。謂はく、十無盡三伴具足す、『華嚴經』に説くが如し、此は別教一乘に當れり。二には臨門の三車に、自ら教義有り。謂はく、界内にして示すは教なり、出づることを得るを義と爲す、仍て教義は即ち分齊無し、此は三乗教に當れり。『深密經』及び『摩訶等』に説くが如し。三に臨門の三車を以て、開方便の教と爲し、思外別授の大牛の車を、示眞實義と爲す、此れ同教一乘に當る、『法華經』に説くが如し。二に開合とは二有り。先は別後は總なり。別の中に、一乗と三乗とに各三句有り。三乗の三句とは、或は教義を具す、三乗の自宗に約して説く。或は唯教にして義に非ず、同教一乘に約して説く。或は俱に教義に非ず、別教一乘に約して説く、彼が所目と爲るが故なり。一乗の三句とは、或は教義

【教義俱に教】三乗の教義を俱に一乘に望めば、開方便の教門なる故なり。

【教義は俱に義】一乘の教義は俱に三乗に望めば、皆示眞實なるを以てなり。

【或は此二句を具す】一、教義俱に三乗を、一乘に望めて、開方便教なる故なり。二、教義俱に義、露地の一乘を、三乗に望めて示眞實相たるを以てなり。

【第二に攝益云云】以下、攝益分齊を明す。

【廻三入一の教】同教の異名。

【若し先に一乗云云】別教の攝益を明す。

【後に出世の身證す】即ち小相品

を具す、自の別教に約して説く。或は唯義にして、教に非ず、同教に約して説く。或は俱に教義に非ず、唯三乗に約して説く。彼無盡の教義を隠すが故に。總じて辨ぜば、或は教義俱に教なり、三乗を一乘に望むるを以ての故に。或は教義俱に義なり。一乘を三乗に望むるを以ての故に。或は此二句を具す、同教に約して説く。或は皆教義を具す、各各自宗に隨つて、差別して説けり。

第二に攝益とは、中に於て三有り。一には或は唯界内の機を攝して、出世の益を得せしむるを、即ち以て究竟と爲す、此は三乘當宗に約して説く。亦「瑜伽等」に辨するが如し。二には或は界外の機を攝して、出世の益を得せしむるを、方に究竟と爲す。此に二種有り。若し先に三乗を以て、其をして出づることを得しめて、後に乃し方便して、一乘を得せしむる者は、此れ則ち一乘三乗和合して説くが故に。同教に屬して攝す。亦廻三入一の教と名く、此は「法華經」に説くが如し。若し先に一乘に於て、已に解行を成じ、後に出世の身の上に於て、彼法を證する者は、即ち別教一乘に屬して攝す、此は小相品に説くが如し。三には或は通じて、二機を攝し、二益を得せしむ。此に亦二有り。若し先に三乗を以て引出して、後に一を得せしむるは、亦是れ一三和合して、二機を攝して、二益を成ず、故に同教に屬す、此は「法華」に説くが如し。若し界内にして見聞し、出世に法を得、出世に證成す。或は界内は見聞解行に通じ、出世は唯し解行、出出世は唯證入す。此等は別教一乘に屬す、此は「華嚴」に説くが如し。

に於て、兜率天に生れ三賢十地を證するが如きをいふ【二機】 界内界外の機。

【七】 判教開宗するに先づ古今の名範を叙ぶ。初に菩提流支 西紀五七二(七七二)の一音教の判。

【二】 には誕云云【隋朝曇延の資、慧誕等の漸頓二教の判】 亦大小俱に陳ぶ【漸悟の者に約して明す】

【直往：頓と爲す】 機の趣人に約していふ。【亦小なき：故に】 所説の法に約していふ。

【三】 には光：同ず【三】 光統師(惠光三正藏經高僧第二十一)の漸頓圓の三教の判。

【一の法門：爲す】 これ化儀には異有れども所説の異は別ならず、圓覺經

(七) 叙古今立教第三

古今の諸賢所立の、教門差別は一に非ず、且く略して十家を叙して、以て龜鏡と爲す。

一には菩提留支に依るに、『維摩經』等に依りて一音教を立つ。謂はく、一切の聖教は、皆是れ一音一味一雨等なり。但し衆生の根行不同なるを以て、根に隨ひて異解す、故に多種有り。如し其本に尅すれば、唯是れ如來の一圓音教なり。故に經に云はく、「佛、一音を以て法を演説するに、衆生、類に隨ひて各各解を得等」となり。二には誕法師等に依るに、

『楞伽』等の經に依りて、漸頓二教を立つ。謂はく、先づ小乘を習ひて、後に大乘に趣く等を以て、大は小に由りて起るが故に、名けて漸と爲す。亦大小俱に陳ぶるが故に。即ち『涅槃』等の教是なり。直往の菩薩等の如きは、大は小に由らず、故に名けて頓と爲す。亦小無きを以ての故に。即ち華嚴教是なり。遠法師等の後代の諸徳、多く此説に同ず。三に

は光統律師に依らば、三種の教を立つ。謂はく、漸と頓と圓となり。光師の釋の意は、根の未熟なるを以て、先に無常と説き後に常と説き、先に空と説き後に不空深妙の義と説く。是の如く漸次にして、而も説くが故に、漸教と名く。根元の流の爲に、一の法門に於て、具足して一切の佛法を演説す。常と無常と空と不空と、俱に説いて更に漸次無し、故に名けて頓と爲す。上達と分に佛境に附れる者の爲に、如來の無礙解脫、究竟果海、圓極秘密、自在法門を説く、故に名けて圓と爲す、即ち此經是なり。後の光統の門下の、遵統師等の

を化儀の頓といふ此と義同じ。

【上連】地前をも

攝するなり。

【傳境に云云】二

は地上をいふ。

【四には：等なり】

四に四宗教の判。

衍法師の慧慈律師

大衍寺の慧慈律師

一、大正藏高僧傳

第二十、一時の

諸徳とは、同時の

名徳を指す。

【五には：等なり】

五に五種教の判。

【兼身法師】齊の

時代、名を自軌、

大乘法師と號す、

兼身は寺名なり。

【六には：是なり】

六に六宗教の判。

【者闍法師】者闍

寺の安慶法師。(西

紀五)七、一五八

(四)には：故に

七に四教の判。

【南岳】山の名。

【思禪】慧思(西

紀五一)五、一七

諸徳、並に亦宗家して、大いに此説に同ず。四には大衍法師等の、一時の諸徳に依るに、四宗教を立てて、以て一代の聖教を通收す。一には因緣宗、謂はく、小乘薩婆等の部なり。二には假名宗、謂はく、成實經部等なり。三には不眞宗、謂はく、諸部の般若即空の理を説き、一切の法は不眞實と明す等なり。四には眞宗、涅槃華嚴等に、佛性法界の眞理を明す等なり。五には護身法師に依らば、五種の教を立つ。三種の教は前の衍師に同じ。第四を眞宗教と名く。謂はく、涅槃一等の經に、佛性眞理を明す等なり。第五を法界宗と名く。謂はく、華嚴に、法界自在無礙の法門を明す等なり。六には耆闍法師に依らば、六宗教を立つ。初め二は衍師に同ず。第三に不眞宗とは、諸の大乗に通じて、諸法如幻化と説くことを明す等なり。第四に眞宗とは、諸法眞空の理を、説くことを明す等なり。第五に常宗とは、眞理恆沙の功德常恆等の義を、説くことを明す等なり。第六に圓宗とは、法界自在緣起無礙にして徳用圓備することを明す。赤華嚴の法門等是なり。七には南岳の思禪、及ぶ天台の智者禪師等に依るに、四教を立てて一代東流の教を説攝す。一には三教教と名く。謂はく、是れ小乘なり。故に彼自ら「法華經」を引いて云はく、「小乘三藏の學者に、親近することを得ざれ」と云ふが故に。又「智度論」の中に、小乘を説いて三藏教と爲し、大乘を摩訶衍教と爲す。二には通教と名く。謂はく、諸の大乗經の中に、法を説いて、通じて三乘の人を説する等、及び「大品」の中の、乾慧等の十地の、大小に通ずるが如き者是なり。亦漸教と名く。三には別教と名く。謂はく、諸の大

智顛と名け智者大師と號す天台宗の祖(西紀五三八一五九七)

【通教】三乘同じく、即ち因縁所生の一切法は、如幻即空なりと、體空の理を明す。

【乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離垢地、已辦地、辟支佛地、菩薩地、佛地】

【別教】二乘に共せざる教説にして、獨り菩薩のみ蒙るもの。

【同教】理事具足して、無ならず、不思議因縁二諦中道を説く。

【八には、見なり】八に二教の例。

【法法師】唐の越州靜林寺の法敏。(西紀五七九一六四五)

【釋迦經】三乗教をいふ、機に逐ひて説く故に、屈曲

智顛と名け智者大師と號す天台宗の祖(西紀五三八一五九七) 乘經の中に、明す所の道理、小乗に通ぜざる者はなり、亦是は頓教と名く。謂はく、法界自在にして、一切の無盡の法門を具足し、一即一切、一切即一等「華嚴」是なり。亦是は祕密教と名く。聲聞等見聞せざるを以ての故に。八には江南の敏法師に依らば、二教を立つ。一には釋迦經、謂はく、屈曲教なり。物機に逐ひ、計に隨ひて著を破するを以ての故に。『涅槃』等の如し。二には盧舍那經、謂はく、平道教なり、法性に逐ひて、自在に説くを以ての故に。即ち「華嚴」是なり。九には梁朝の光宅寺の、雲法師に依るに、四乗教を立つ。謂はく、臨門の三車を三乗と爲し。四衢所投の大白牛車を、方に第四と爲す。彼臨門の中の牛車も、亦羊鹿に同じく、俱に得ざるを以ての故に。餘の義は上に辨するに同じ。後代の信行禪師は、此宗に依りて二教を立つ。謂はく、一乗と三乗となり。三乗とは即ち、別解別行及び三乘差別し、並に先に小乗を習ひ、後に大乘に趣く是なり。一乗とは謂はく、普解普行、唯是れ一乘なり。亦華嚴の法門、及び直進等是なり。十には大唐の三藏、玄奘法師に依るに『深密經』『金光明經』及び『瑜伽論』に依りて、三種の教を立つ、即ち三法輪是なり。一には轉法輪と名く。謂はく、初時に於て、鹿野苑の中に於て、四諦の法輪を轉ず、即ち小乘法なり。二には照法輪と名く。謂はく、中時に於て、大乗の内に於て、密意をもつて、説いて諸法空と言ふ等なり。三には持法輪と名く。謂はく、後時に於て、大乘の中に於て、顯了の意をもつて、三性及び眞如不空の理を説く等なり。此三法輪の中には、但小乗、及び三乗の中の始終二乗を攝して、別教一乗を攝せ

教ともいふ。【平道教】法界圓融事事無礙を説く。

【九には…見たり】九に四乗法の判。

【光七字雲法】法雲（西紀四六七―五二九）

【信行禪師】魏の代の人（西紀五四―五九四）

【普解普行】普法の解行、即ち華嚴の法門をいふ。

【十には…等なり】十には三法輪の判。

【支辨…】本名は諱、譯經三藏にして、新譯七十五部、一千三百三十五卷を譯すと。西紀六〇―一六六（四）

【三性及び眞如不空】遍計、依他、圓成實の三性の外に眞如不空を説くは不變の如、隨縁の一義なし、隨縁の出するは、終教の義を以て眞如を説

す、何を以ての故に『華嚴經』は初時に在りて説く、是れ小乘に非ざるが故に。彼持法輪は、後時に在りて説く、是れ『華嚴』に非ざるが故に、是故に華嚴の法門を攝せざるなり。

此上の十家の立教の諸徳は、並に是れ當時の法將なり。英悟絶倫にして、歴代の明模なり。階位測り叵し、只、思禪師、智者禪師の如きは、神異感通して迹登位に參る、靈山に法を聽いて今に憶在す。諸餘の神應、廣くは僧傳の如し。又、雲法師の如きは、此に依りて宗を開いて「法華經」を講ずるに、天の雨華を感ずる等の神迹、亦僧傳の如し、其餘の諸徳の行解、倫を超えたり、亦僧傳の如し。此等の諸徳、豈夫異を好まんや、但備に三藏を窺め、斯異輪を観るを以て、已を得ずして而も之を分つ、遂に各教に依りて宗を開く、務めて通會を存し、堅嶮頑滯をして、氷釋 朗然たらしむ。聖説の差異、其れ宜しく可契へるのみ。

(八) 分教開宗第四

中に於て二有り、初には法に就いて教を分つ。教類に五有り。後には理を以て宗を開く、宗に乃し十有り。初門とは、聖教萬差なれども、要は唯五有り。一には小乘教、二には大乘始教、三には終教、四には頓教、五には圓教なり。初の一は即ち愚法二乗、後の一は即ち別教一乘なり。此經本の下の文の内に、善伏太子の爲に説く所を、名けて圓滿修多羅と、

かんが爲なり。
【八】以下分教開宗の一段にして、華嚴經の最勝なるを顯し、開宗門に至りては、華嚴經を以て最高權威を有する宗門たることを立證するなり。
【中間の三】始、終、頓の三。
【掩摩勒果】梵に果實の名。

【法鼓經】 同下卷の文なり。

爲すを以ての故に、此名を立つ。中間の三とは其三義有り。一には或は總じて一と爲す。謂はく、一の三乘教なり。此れ皆三人の所得爲るを以ての故に。上の所引の説の如し。二には或は分ちて二と爲す、謂ゆる漸と頓となり。始終二教の所有の解行、並に言説に在りては、階位次第し因果相乘して、微従り著に至るを以て、通じて名けて漸と爲す。故に『楞伽』に云はく、「漸とは掩摩勒果の、漸く熟して頓に非ざるが如し」と。此れ之謂なり。頓教とは言説頓に絶し、理性頓に顯れ、解行頓に成じて、一念不生なるは、即ち是れ佛等なり。故に『楞伽』に云はく、「頓とは鏡中の像の、頓に現じて漸に非ざるが如し」と。此れ之謂なり。一切の法は本來自正にして、言説を待たず、觀智を待たざるを以てなり。淨名の、默を以て、不二を顯す等の如し。又『寶積經論』の中にも、亦説いて頓教修多羅と、名くること有るが故に、此に依りて名を立つ。三には或は開して三と爲す。謂はく、漸の中に於て、始終二教を聞出す、即ち上の『深密經』等の、三法輪の中の、後の二の如き是なり。是義に依るが故に『法鼓經』の中に、空門を以て始と爲し、不空門を以て終と爲す。故に彼經に云はく、「迦葉、佛に白して言さく、『諸の摩訶衍經は多く空の義を説く。』と。佛、迦葉に告ぐ。一切空經は是れ有餘の説なり、唯此經のみ有りて、是れ無上の説なり、有餘の説に非ず。復次に迦葉、波斯匿王の、常に十一月に大施會を設けて、先づ餓鬼、孤獨、貧乞に食せしめ、次に沙門、及び婆羅門に施し、甘饍の衆味、其所欲に隨ふが如く、諸佛世尊も亦復是の如し。諸の衆生の種種の欲樂に隨つて、而も爲に種種の經法を演説

【法有我無宗】薩婆多部、雪山部、多聞部、化地部の末計これに屬し、共に三世實有法體

【依言真如】言説を以て真如の相を以て、生信の

【下の三攝す】下の所詮差別の中な

【二は理云云】以下、理を以て宗の開くにあり、初

の六は小乗、後の四は大乗なり

【非一攝】有爲無爲攝に非ざるをいふ、童子部には非即非離盡の我を立て、これを不可説哉といふ。

【法有我無宗】薩婆多部、雪山部、多聞部、化地部の末計これに屬し、共に三世實有法體

す。若し衆生有りて、無意犯戒にして、勉に隨順せず、如来歳常住の妙典を捨てて、好樂して、種種の空經を修學すと、乃至廣説せり。解して云はく、此れ則ち空理の有餘に約して、名けて始教と爲し、如来歳の常住無上なるに約して、名けて終教と爲す。又「起信論」の中の如きは、頓教門に約して、絶言真如を顯し、漸教門に約して、依言真如を説く。依言の中に就いて、始終二教に約して、空不空の二の眞如を説く。此は理に約して、以て教に分つのみ。若し法苑に據かば、下の卷の中に判に辨ずるが如し。

二には理を以て宗を攝す。宗に乃ち十有り。一には我法俱有宗なり。此に二有り。一には人天乘、二には小乗の中の、童子部等なり。彼は三聚の法を立つ。一には有爲聚、二には無爲聚、三には非二聚なり。初の二は是れ法、後の一は是れ我なり。又五法藏を立つ。一には過去、二には未來、三には現在、四には無爲、五には不可説なり。此は即ち是れ我なり、是れ有爲無爲と説くべからざるが故に。二には法有我無宗なり。謂はく、薩婆多等なり。彼は諸法は二種の所攝なりと説く。一には名、二には色、或は四の所攝なり。謂はく、三世及び無爲となり。或は五なり。謂はく、一には心、二には心所有、三には色、四には不相應、五には無爲なり。故に一切の法は皆悉く實有なり。三には法無去來宗なり。謂はく、大衆部等なり。現在及び無爲法有りと説く、過去は體用無なるを以ての故に。四には現通假實宗なり。謂はく、說假部等なり、彼は去來世無しと説く、現在世の中に、諸法、蘊に在りては實なるべし、界處に在りては假なり。應に隨ひて、諸法の假實不定な

恒有と信ず。
【名：色】色類は
麤顯なる故に色と
いひ、他の四蘊は
微細なれば名とい
ふ。

【法無去來宗】こ
は一切法現在の
有り、去來無しと
するなり。此宗に
屬するもの大衆部
の外、鷄胤部、制
多山部、西山住部
北山住部、法藏部
飲光部と根本化地
部あり。

【現通假實宗】こ
れは現在の眞俗諦
中に皆假實ありと
す。說假部と末經
部これに屬す。

【俗妄眞實宗】世
間の法は虚妄とし
出世間の法は實な
りとす。

【如來藏】眞如の
在纏位の名。
【自體有：性德を
具す】起信に、不
空眞如自體ありて
無漏の性功德を具
すといふものはな

り。

り。『成實論』等の經部の別師、亦即ち此類なり。五には俗妄眞實宗なり。謂はく、説出世部等なり。世俗は皆假なり、虚妄なるを以ての故に。出世の法は實なり、虚妄に非ざるが故に。六には諸法但名宗なり。謂はく、一説部なり。一切の我法は唯假名のみ有りて、都て無體なるが故に。此は初教の始に通ず、之に準ぜよ。七には一切皆空宗なり。謂はく、大乘始教に、一切の法は皆悉く眞空なりと説く。然るに情外に出でて、分別無きが故に。般若等の如し。八には眞德不空宗なり。謂はく、終教なり。諸經に、一切の法は唯是れ眞如なりと説く。如來藏の實德なるが故に。自體有るが故に、性德を具するが故に、九には相違俱絶宗なり。頓教の中なる絶言の教の、絶言の理を顯す等の如し。淨名の默理等の如し、之に準ぜよ。十には圓明具德宗なり。謂はく、別教一乘の主伴具足、無盡自在所顯の法門の如き是なり。

(九)じょうけうかいがふだいに
乗教開入の第五

中に三有り。初に教に約すとは、然も此五教相攝融通するに、其五義有り。一には或は總じて一と爲す。謂はく、本末鎔融して、唯一の大善巧の法なり。或は開いて二と爲す。一には本教、謂はく、別教一乘を諸教の本と爲すが故に。二には末教、謂はく、三乘小乘は、彼従り流する所なるが故に。又は究竟及び方便と名く。三乘小乘は、一乘を望むれば、悉く方便と爲るを以ての故に。或は離れて三と爲す。謂はく、一乘と三乘と小乘

【九】以上、第一第二に乘を明し、第三第四に教を明せしを以て、今この二の閉合を述べ遂に華嚴の本經に教むるなり。初に諸教攝門。

【二】には「云云」これ以て攝乘門。これ五教の中に一乗及び三乗を攝するも、各各五種を成するを明す。

【八意等の如し】要問に、八意有るが故に、一乗と説く【小乗中：始別終同】因行は四諦觀緣起觀、六度の行別なるも、同じく羅漢を得。

【始教：俱別】始別は前の如し、終別とは菩薩は成佛し、定性の二乗は灰身入寂す。

【終教：俱同】同じく般若を開き性空を觀じ共に成佛す。【四に顯：離】皆不可説なるを以て

との教なり。方便の中に、愚法二乘を聞出するを以ての故に。或は分ちて四と爲す。謂はく、小乗と漸と頓と圓となり。始終二教は俱に言に在る等を以ての故に。或は散じて五と爲す。謂はく、上に説くが如し。二には教を以て乘を攝すとは二有り。先づ一乘を明すに、教に隨ひて五有り。一には別教一乘云云、二には同教一乘云云、三には絶想一乘「楞伽」の如し、此れ頓教なり。四には佛性平等に約して、一乗と爲す云云。此れ終教なり。五には密意の一乘、八意等の如し云云、此には始教に約するなり。二には三乘を明すに、亦五有り。一には小乗の中の三、謂はく、始別終同なり、俱に羅漢なるを以ての故に。二には始教の中の三なり。始終俱別なり、入寂有るを以ての故に。三には終教の中の三、始終俱同なり、並に成佛するが故に。四には頓教の中の三、始終俱離なり、絶想を以ての故に云云。五には同教の中の三、始終俱同なり、汝等行する所、是れ菩薩の道等の故に云云。三には諸教相收せば、二門有り。一には以本收末門、二には以末歸本門なり。初の中に、圓教の内に於て、或は唯一の圓教は餘の相皆盡くるを以ての故に。或は五教を具す、方便を攝するを以ての故に。頓教の中に、或は唯一の頓教、亦餘の相是れ盡くるを以ての故に。或は四を具す。方便を攝するを以ての故に。熱教の中に、或は一、或は二、或は三、初教の中に、或は一、或は二、小乗の中に唯一なり、皆上に准じて之を知るべし。二に以末歸本の中に、小乗の内に、或は一なり、自宗に據るを以ての故に。或は五なり。謂はく、後の四教に於て、皆方便と爲すこと有るが故に、初教の中に、或は一なり、是れ自宗なるが故に。或は

なり。

【同教中の…俱同】始は因行の時、二乗の行果を一乗の因に歸る故に一因となる（始同）終には俱に成佛す（終同）。

【三には諸教云云】三に諸教相收門。

【熟教】終教。

【初教】始教。

【二】教起前後を明す即ち如來成道最初の教は、何なるやを明すに、一乗と三乗小乗を對比して論ずる一門なり。

【猶し…如く】菩薩に對して根本一乘法を説けるなり

【主伴具足云云】以下、定中所現の事に就いて説く。

【九世十世】三世に三世あるを以て九世といふ。即ち

現在の法未謝の時を現在の現在に既に已滅せる過去に望めて、現在の過去、未だ起らざる

四なり。謂はく、後の三教に於て、皆方便と作ること有るが故に。熟教の中に、或は一或は三なり。頓教の中に、或は一、或は二なり。圓の中の唯一なり、皆上に准じて之を知るべし。是諸教の下に、明す所の義理交絡せり、分齊皆此に准じて思攝せよ。是れ則ち諸教の本末の句結して綱を成す。大聖の善巧は機縁を長養して、周盡せずといふこと無し。是故に此經に云はく、「大教の綱を張りて、生死の海を互り、天人の龍を度して、涅槃の岸に置く」と、此れ之謂なり。

（二〇）教起前後第六

中に於て二有り。初には稱法の本教を明し、二には逐機の末教なり。初とは謂はく、別教一乘なり。即ち佛、初成道して第二七日に、菩提樹下に在して、猶し日出でて先づ高山を照すが如く、海印定の中に於て、同時に重重の法門を演説す。主伴具足し、圓通自在にして、九世十世を該ね、因陀羅微細の境界を盡す。則ち此時に於て、一切の因果理事等の一切の前後の法門、乃至末代の流通の舍利見聞等の事、並に同時に顯現す。何を以ての故に。卷舒自在なるが故に、舒ぶれば則ち九世を該ね、卷けば即ち一時に在り。此は卷即ち舒、舒又即ち卷なり。何を以ての故に。同一緣起の故に。無二相の故に。經の本に云はく、「一塵の中に於て、三世の一切の佛事を建立す」等と。又云はく、「一念の中に於て、即ち八相成道し、乃至涅槃し、舍利を流通す」等と。廣くは經に説くが如し。是故に此普

も未來に望めて現在の未來といふ如し。十世とは、九世迷ひに相入して一徳句をなすとす、九世に於ていふ

【佛・同時に顯現す】佛在世滅後前後多功の一切の諸事同時に顯るるをいふ

【世間の印法】如し印前に於て、句義に前後あれど文字一字に印現すといふ

【第二に末次の三乗とは云云】二に返轉の末教を明す

【提樹下の外を異處といふ】初とは云云】同時異處を明すに、初に三乘一乘に就

【密迹力士】大寶積經の第三會なり、章主の時、完譯なく、別譯せるもの

【大品經に云云】

法に依るに、一切の佛法並に第二七日に於て、一時に前後して説き、前後して一時に説く。世間の印法の、文を讀むときは、則ち句義前後すれども、文を印するときは、則ち同時に顯現して、同時前後の理に相違せざるが如し、當に知るべし、此中の道理も亦爾なり、准じて以て之を思ふべし。

第二に末教の三乘等とは、二義有り。一には一乘と同時異處にして説き、二には異時異處にして説く。初の義とは、是れ佛敎の故に。末は本を離れざるが故に。本に依りて成ずるが故に。後の義とは、本末相分るが故に。本、一に非ざるが故に。此一に各一類有り。一には三乘、二には小乘なり。行とは一密迹力士經に説くが如し、「佛、初て成道し竟りて、七日思惟し已りて、即ち兜率の中に於て、衆寶等を以て法座を莊嚴し、廣く三乘の衆を集む。梵王、法を請ひ、佛爲に法輪を轉じ、廣く三乘の衆を益して、大小等の果を得せしむ」と。乃至廣く説くこと、法經の中の如し。又「大品經」に云はく、「佛、初に鹿野苑に在りて、四諦の法輪を轉ずるに、無量の衆生、聲聞の心を發し、無量の衆生、獨覺の心を發し、無量の衆生、阿耨多羅三藐三菩提の心を發して、六波羅蜜を行じ、無量の菩薩、無生法忍を得て、初地、二地、三地、乃至十地に住し、無量の一生補處菩薩、一時に成佛す」と。解して云はく、此教證を以て當に知るべし、最初の第二七日に、即ち三乘の法を説き、一乘と同時に説くなり。二に小乘とは、彌沙塞會に説くが如し、「佛、初めて成道し竟りて三昧に入り、七日の後に、乃至鹿野苑に於て、法輪を轉ず」と。故に知んぬ、小乘も亦一

權教にては得果なく、今は界内の機誘引の爲に、權教に依るのみ。
【二に小乗云云】以下、小乗一乘同時異處を明す。
【地論】十地經論第一卷初の文。

【第二に云云】時處俱異を明すに、初に諸教の異説を列擧す。

乘と同時に説くなり。又『普曜經』に云はく、「第二七日に、提謂等の五百の價人、佛に麁室を施す、佛、授記を興へて、當に作佛することを得べし、等と。此經の所説は、三乘等の教に通ずと雖も、有る義は亦人天等の法を攝すといへり。亦一乘と同時に説くなり。問ふ、説時既に同じ、何が故にか説處別なるや。答ふ、「時處に約して、法を寄攝せんが爲の故に、同異を須ふるなり。故に『地論』に云はく、「時處等校量して、勝を顯示するが故に」と。同時とは是れ同教を顯すが故に。處異とは別教に非ざることを示すが故に。別教一乘の、菩提樹下に在して説くが如きは、此は是れ菩提を得たる處、即ち如來の自所得の法、本に稱うて而も説くことを顯すことを明さんと欲するが故に、處を移さずして説くなり。餘の三乘等の法は、機を逐うて改異することを明さんと欲するが故に、處を移し機に就いて、鹿苑にして而も説く、本に非ざることを顯す。

第二に時處俱異とは、一乘と不即の義に由るが故に、時處俱に別なり。或は三七日の後に説く、『法華經』に説くが如し。或は六七日の後に説く、『四分律』及び『薩婆多論』に、説くが如し。或は七七日にして乃ち説く、『興起行經』に説くが如し。或は八七日に乃ち説く、『十誦律』に説くが如し。或は五十七日の後に説く、『大智度論』に説くが如し。或は一年に説法せず、十二年を経て、方て五人を度す。『十二遊經』に説くが如し。有人解して云はく、『智論』の五十七日は、即ち五十箇の七日なり、『十二遊經』の一年と同じこと。此等の教を以て、當に知るべし、三乘、小乗の教は、並に第二七日の説に非ず、一乘教と差

【三乘等…有り】

一乘と三乘小乘とを對比し、同時異處、異時異處を論ずるをいふ。

【二】以下本末二教の説時説處に、前後ある所以を決擇す。

【中論初に説く】即ち第一の文。

【解深…是なり】彼經に三輪を説く初に唯小、次に唯大、後に具三を聞

【維摩經】同經入不二法門品に、文字言説を離れたるを、眞の入不二法門なりと説く。

別するに由るが故に、機宜に隨逐するが故に、或は前後するが故に、是れ一乗の法は、時處俱に定まり、三乘等の法には二類有るなり、故に餘は准知すべし。

決擇前後意第七

然るに、諸教の前後差別知り難し、略して十門を以て、其意を分別す。一には或は衆生有りて、此世の中に於て、小乗の根性始終定まれる者は、則ち如來、初め得道従り乃し涅槃に至るまで、唯小乗を説くと見て、未だ曾て大乘の法輪を轉ずと見ず。諸の小乗の諸部の執して大乘を信ぜざる如き者は是なり。二には或は衆生有りて、此世に小乗の根不定なるが故に、進んで大乘の初教に入りて、即便ち定まるに堪へたる者は、則ち如來、初時に小乗の法輪を轉じて、諸の外道を翻すと見、後時に大乘の初教、即空の法論を轉じて、諸の小乗を廻すと見るなり。『中論』の初に説くが如き者は是なり。三には或は衆生有りて、此世の中に於て、小乗及び初教に於て、根不定なるが故に、終教に入りて、即便ち定るに堪へたる者は則ち初時に、小乗の法輪を轉ずと見、中時に空教の法輪を轉ずと見、後時に空の法輪を轉ずと見るなり。『解深密經』等に説くが如き者は是なり。四には或は衆生に有りて、漸教の中に於て、根不定なるが故に、頓教に入らんと欲して、即便ち定るに堪へたる者は、即ち初に言説の教を示すは、猶究竟に非ず、後に絶言の教を顯すを、方に究竟を爲すと見る。『維摩經』の中の、初の三十二菩薩、及び文殊等の所説の不二は、並に言の中

【楞伽經】卷第四
無常品等三の第一、
變化品第七の文。

【則ち自：起る】
華嚴中の同教に就
いていふ。

【華嚴經の同教】
法界品の攝比丘會
の化儀の相等是なり。

【彼が所目：故に】
一乗教より流出せ
る三乗教なれば、
これ一乗教に外な
らず、綱目は綱綱
の外ならざる如し
【九には云云】下
の二門は別教一乗
に約す。今は普賢

に在り、後の『維摩』所顯の絶言の教を、以て究竟と爲すが如き者はなり。五には或は衆生有りて、此世の中に於て、頓に悟り機熟して、即便ち定まれる者は、佛、初め得道従り乃し涅槃に至るまで、一字をも説かずと見る、『楞伽經』に説くが如し。又『涅槃經』に云はく、「若し如来は常に説法せずと知る、是を菩薩、多聞を具足すと名く一等と。六には或は衆生有りて、此世に三乗の根性定まれる者は、佛、初め従り即ち三乗の教法を説き、乃し涅槃に至るまで、更に餘説無しと見る。上の『密迹力士經』及び『大品經』に説くが如き者はなり。七には或は衆生有りて、此世に三乗の根不定なるが故に、同教一乗に進むに堪へたる者は、則ち自の所得の三乗の法は、皆一乗無盡の教に依りて起る、是れ彼方便阿含は、施設なりと見る。是故に諸の所修有るは、皆一乗に廻向す。『華嚴經』の同教の中に、説くが如き者はなり。又上に引く所の、三乗と一乗と同時に、説くが如き者等なり。又『法華』の中の、三を廻して一乗に入るが如き等是なり。八には或は衆生有りて、三乗の法に於て、根不定なるが故に、進んで別教一乗に入るべきに堪へたる者は、即ち彼三乗等の法は、本來別教一乗に異ならずと知る。何を以ての故に。彼が所目爲るが故に。更に異事無きが故に。會三歸一等の如し。九には或は衆生有りて、此世に具に普賢の機有る者は、則ち如来、初め成道従り、乃し涅槃に至るまでの一切に佛法は、並に初時第二七日、海印定の中に於て、自在に説き盡して、主伴を具足し、因陀羅微細の境界を究むと見る。本より來三乘小乗等の法を説くと見ず。『華嚴經』の別教の中に、説くが如き者はなり。此は

一乗教の教分たる見聞解行の二別に約せし所明、別教今世に見聞し解行する機を示す【十には云云】別

【十には云云】別教一乗の證分、約せし所明にて、教の果海を示し、現に證入する機を舉

【二三】別教一乗は得對する能はざるも、假りに一乘に相對して相違を論ずるは、以下の所明なり。十門あり一、時異。

【因縁行】流布本には思惟行因縁行とあり。今は十地論文に依る。因とは釋尊自得の法、緣とは所化の根器をいひ、自己の所生の爲に説かんとする意なり。

【此時因陀羅等】一時に重々無盡の念劫を攝するをいふ。

普賢教の分齊、見聞及び解行處に約して説く。十には或は衆生有りて、一乘別教に於て、解行滿じ已りて、果海に證入する者は、則ち上の諸教は、並に是れ無盡の性海、緣に従ひて成ずる所なり、更に異事無しと見る。是故に諸教は即ち是れ、圓明無盡の果海、具徳難思にして不可説不可説なり。此は一乘入證分齊の處に約して説く、餘は准知すべし。

施設異相第八

然るに此異相は、事に隨うて繁多なり、約して十門を以て、以て無盡を顯す。何者か十異なる。一には時異なり。謂はく、此一乘は要す初時の第二七日に在りて説く、猶日出でて先づ高山を照すが如し等なり。故に『論』に云はく、「此法勝れたるが故に、初時、及び勝處に在りて説くと。若し爾らば何が故に、初七日に説かざるや。因縁行等」と。論に釋するが如し。又此れ即ち是時因陀羅等の故に、即ち一切の時を攝す。若は前、若は後にして、各不可説劫なり。前後際に通じて、並に此一時の中に攝在す。三乘等は爾らず、機宜に隨逐して、時不定なるを以ての故に。或は前、或は後有り、亦一時に一切劫等を收めず。二には處異なり。謂はく、此一乘は要す蓮華藏世界海中の、衆寶菩提樹下に在り、即ち七處八會等を攝す。及び餘の不可説不可説の諸の世界海、並に此中に在り、一處に一切處を攝するを以ての故に、是故に道樹を動ぜずして、遍く六天に昇る等とは、是れ此義なり。又、此華藏界は因陀羅に通ずるが故に、諸塵に周側す、此稱法界の處に於て、彼一

【蓮華藏世界】説く探玄記に融攝を説くに三重あり一、覺樹の下に八會の人中天上を攝す。二、十方無餘の刹土を攝す。三、毛端微塵の内に等しく重重の刹土を攝す。以下の所明此三を出でず。

【摩竭國】摩竭陀身、群機に應じて説く、體は實に多種あるに非ず。

【如響如音】華嚴の法深妙にして、聲聞等領解し能はざるを喻ふ。

乗稱法界の法門を説くなり。三乗等は即ち爾らず、娑婆界の木樹等の處に在りて、亦一處即ち一切處等無し。問ふ、『若し爾らば何が故に、『佛地經』等、亦淨土の中に在りて説くや。』答ふ、『彼經には、但光曜たる宮殿等在りて、十八種の圓滿を具すと云ふ、亦別して摩竭國等を指さず。彼は地上の菩薩の爲に、佛地の功德を説くを以ての故に、三界の外の受用の土の中に在り、此は三乗の終教、及び一乗の同教に依りて説く。而るに此華嚴は、皆華藏界の内の摩竭國等に在りといひ、娑婆の内とも云はず、亦三界の外とも云はず、故に知んぬ別なり。餘の義は准知せよ。』三には主異なり。謂はく、此一乗は要す是れ盧遮那十身の佛なり。及び三世間を盡して説く、三乗等の、變化身及び受用身等の、説くには同じからず、餘の義は前に准じて之を知るべし。四には衆異なり。謂はく、此一乗經の首には、唯普賢等の菩薩、及び佛境界の中の諸神王衆を列ねたり、三乗等の、或は唯聲聞衆、或は大小二衆等なるには同じからず。問ふ、『若し爾らば何が故に、第八會の中に聲聞衆有りや。』答ふ、『彼中に、初に聲聞を列ぬる意は、寄對して法を顯さんが爲の故に、彼如響如音なるを以て、法の深勝を顯す故なり。後の六千の比丘等は、此れ聲聞に非ず、海幢比丘等の如し、之に准ぜよ。』五には所依異なり。謂はく、此一乗教の起ることは、要す佛の海印三昧の中に依りて出づ、三乗等の、佛の後得智に依りて、出づるには同じからず。六には説異なり。謂はく、此一乗は此一方にして、一事、一義、一品、一會等を説く時、必ず十方一切の世界を結通して、皆此説に同するを以て、主伴を具足して、共に一部を成す。

【佛等：在り】初

發心の時、便ち正覺を成じ、慧身を具足すと、ふ如きこれなり。

【定散等】定は入定を顯し、散は出定を示す。

【並に一時に修す】念に遍く諸行を成ずるなり。

【東方の如し】東を移動せずして同時に西に在る等自在無礙なるをいふ。

【一行即一切行等】若し一の普賢行を起せば、一切の行位に遍きをいふ。

【十佛】本經（華嚴經）第三十七卷の正覺佛等の十佛

第四十二卷の無著佛等の十佛等。

【十通】本經第三十九卷、通自在の文の下にあり。

是故に此經は、一文一句に隨ひて、皆十方に遍じ、多文多句も亦十方に遍す。三乘等は即ち爾らず。但一方一相に隨ひて説く、此主伴該通等無きなり。七には位異なり。謂はく、此一乗は、所有の位相上下皆齊し、仍りて一一の位の中に、一切の位を攝す、是故に乃至佛等の諸位も、信等の位の中に在り、餘位も亦然なり。三乗の中には即ち爾らば、但當位に隨ひて、上下の階降有り、皆相雜はらざるなり。餘は下に説くが如し。八には行異なる。隨一の菩薩、即ち信等の六位を具す、一一の位の中の、所有の定散等の差別の行相、並に一時に修す。東方の一切の世界の中にして、常に入定する等、西方の世界の中にして、常に佛を供する等の如し。是の如く十方世界の中に、盡く法界の行を窮む。亦身を分たす、一時に皆遍滿し、一念に皆遍修す。一一の念の中にも亦此の如く行す。信位の滿心以去、一一の位に皆是の如く修して、更に優劣無し。又一行即一切行等、因陀羅等に通ず。三乘は即ち爾らず。地上の菩薩、猶各分齊有り、況んや地前の者をや。餘は下に説くが如し。九には法門異なり。謂はく、略して十種を擧ぐ、一には彼には三佛有り、此には十佛有り。二には彼には六通有り、此には十通有り。三には彼には三明有り、此には十明有り。四には彼には八解脱有り、此には十解脱有り。五には四無畏有り、此には十無畏有り。六には彼には五眼有り、此には十眼有り。七には彼には三世を説き、此には十世有り。八には彼には四諦を説き、此には十諦有り。九には彼には四辯有り、此には十辯有り。十には彼には十八不共法有り、此には十不共法有り。餘門無量なり。廣くは經に説くが如し。十に

【三明】天眼、宿命、漏盡。
 【十明】本經離世間品に在り。
 【八解脫】內有色外觀色解脫。內無色解觀色解脫。淨解脫。身作證。空處解脫。識處解脫。非無所有處解脫。非有想非無想處解脫。滅受想解脫。
 【十解脫】本經離世間品に在り。
 【十無畏】本經世間品に在り。
 【十世】三世に三世あり、また總じて十世あり、合して十世なり。
 【十諦】十地品第五地にあり。
 【四辯】法、義、詞、樂說無礙辯。
 【十辯】本經離世間品にあり。
 【十八不共法】佛にのみ存する十八の功德法なり、常の如し。
 【十不共法】本經離世間品に十種不共法あり。

は事異なり。謂はく、舍利地山等の事有るに隨ひて、皆是れ法門なり。或は是れ行、或は是れ位、或は教義等なり。而も其事を壞せず、仍りて一の塵の中に皆法界の一切の差別の事を具足して、因陀羅微細成就せり。隨ひて一事の起るに隨ひて、皆悉く是の如し。三乘等は即ち爾らず。但即空即眞如等と説くべきが故に、此に同じからず。又若し神通不思議力を以ては、暫く現することを得べし、是れ彼法の自性の、是の如くなるには非ず、餘は准じて之を知るべし。

華嚴一乘教分記卷上

華嚴一乘教分記 卷中

- 義理分齊第九 四門有り
- 三性同異義 一 六義爲因緣起 二 十玄緣起無礙法 三 六相圓融義 四

三性同異義第一

【一】緣起諸法の果たる、遍計、依他、圓成の三に就いて、今宗と他宗の三性觀を明す。

【經】不增不減經【即ち…不二門】本を動せざると、本を壞せざると、二門異なるを以てなり。

【經】維摩經。

三性同異の説に二門有り。初は別して明し、後は總じて説く。別の中に亦二有り。先には直に説き、後には決擇す。前の中に、三性に各各二義有り。眞の中に二とは、一には不變の義、二には隨緣の義なり。依他の二義とは、一には似有の義、二には無性の義なり。所執の二義とは、一には情有の義、二には理無の義なり。眞の不變と、依他の無性と、所執の理無とに由りて、此三義に由るが故に、三性一際にして、同にして異なること無し。此れ即ち本を壞せずして、而も常に本なり。經に云はく、「衆生即ち涅槃なり、更に減せず」と。又眞如の隨緣と、依他の似有と、所執の情有とに約して、此三義に由りて、亦異なること無し。此れ即ち本を動せずして常に末なり」と。經に曰はく、「法身、五道に流轉するを、衆生と名くといふが故なり」と。即ち此三義と、前の三義とに由りて、是れ不二門なり。是故に、眞は妄の末を該ね、妄は眞の源に徹す、性相通融して無障無礙なり。問ふ、「依

【一には彼所執云】眞如を眞如と知らずして迷ふは根本無明、ここに眞如體起動して似有となる、此有に迷ふが情有なること知るべし。

【猶し鏡…顯す】染穢現するを以て反つて不染の義顯るを釋す。

【依他の中に云々】此下、依他起性の顯有と無性の二義を顯す。

他の似有等、豈所執の是れ情有なるに回ぜんや。』答ふ、『二義に由るが故に、故に異無し。一には彼所執は、似を執して實と爲すを以ての故に、異法無し。二には若し所執を離れては、似起ること無きが故に、眞の中の隨縁も、當に知るべし亦爾なり。所執無ければ、隨縁無きを以ての故に。』問ふ、『如何が三性に、各二義有りて相違せざるや。』答ふ、『此二義は異性無きを以ての故に。』何者が異なる無き。』且く圓成の如きは、復隨縁して染淨を成すと雖も、而も恆に自性清淨を失はず、只自性清淨を失はざるに由るが故に、能く隨縁して染淨を成するなり。猶し明鏡の染淨を現するが如し、染淨を現すと雖も、而も恆に鏡の明淨を失はず、只鏡の明淨を失はざるに由るが故に、方に能く染淨の相を現す。染淨を現するを以て、鏡の明淨を知り、鏡の明淨なるを以て、染淨を現することを知る、是故に二義は、唯是れ一性なり。淨法を現すと雖も、鏡の明を増さず、染鏡の明淨なることを顯す。當に知るべし、眞如の道理も亦爾なり。直に性淨を動ぜずして、染淨を成するのみに非ず、亦乃ち染淨を成するに由りて、方に性淨を顯す。直に染淨を壞せずして、性淨を明すのみに非ず、亦乃ち性淨に由るが故に、方に染淨を成す、是故に二義全體相收して、一性無二なり、豈相違せんや。』

依他の中に、復因縁似有顯現すと雖も、然も此似有は、必ず自性無し。諸の縁生は、皆無性なるを以ての故に。若し無性に非ずんば、即ち縁を藉らじ。縁を藉らざるが故に、

【此れ即ち法門なり】既に自性なれば縁に従ふ。縁に従うて生ぜば自性なしといふ。

【本枕云云】情に於て遍計する根状と、體無とを示す。喻なり。本枕本より鬼に非ず、鬼と見しは情計なりといふ。

【所執の中云云】以下、遍計所執性の情有、理無の二義を顯す。第二に、問答決擇す。

即ち似有に非ず。似有若し成ぜば、必ず衆縁に従はん。衆縁に従ふが故に、必ず自性無し。是故に無自性に由りて、似有を成ずることを得、似有を成ずるに由りて、是故に無性なり。故に『智論』に云はく、「一切の法を觀するに、因縁従り生ず。因縁従り生ずれば、即ち自性無し。自性無きが故に、則ち畢竟空なり。畢竟空とは、是を般若波羅蜜と名く」と。此れ即ち縁生に由るが故に、即ち無性を明すなり。『中論』に云はく、「空の義有るを以ての故に、一切の法は成ずることを得」とは、此れ即ち無性に由るが故に、即ち縁生を明す。『涅槃經』に云はく、「因縁の故に有なり、無性の故に空なり」と。此れ即ち無性即ち因縁、因縁即ち無性なり、是れ不二の法門なり。故に直に二義の性、相違せざるのみに非ず、亦乃ち全體相收して畢竟無二なり。所執性の中には、復情に當りて、執に稱うて有を現すと雖も、然も道理に於ては、畢竟じて是れ無なり。無なる處に於て、横に有を計するを以ての故に。本枕に於て、横に鬼有りと見るが如し。然るに鬼は木に於て、畢竟じて是れ無なり。如し其れ木に於て、鬼は無に非ずんば、即ち横に鬼有りと計すと名くることを得ず。木に於て有らば、計に由るに非ざるを以ての故に。今既に横計す。明かに知んぬ、理無なり、理無に由るが故に、横計を成ずることを得、横計を成ずるが故に、方に知んぬ、理無なり。是故に無二にして唯一性なり。當に知るべし、所執の道理も亦爾なり。上來直に明し竟んぬ。

第二に問答決擇とは、中に於て三門有り。第一には分別の執を護り、第二には執の失を

【問ふ云云】第二重の四句。不變隨緣相由の義を以て答ふ。
 【餘の二句】亦有亦無、非有非無の二句。
 【空眞如】空とは無の意ならず、總て言說思惟を否定する爲の空に外ならず。これやがて眞如の内容を示すものなり。
 【不空眞如】一切を包攝し、充實せしめたる眞如なることを示していふ

【多の義門】依他起の中に、五蘊門十二處門、十八界門、四智心品等の義門あれば非無なり
 示し、第三には其義を顯示す。初の門に執を護るとは、問ふ、『眞如は是れ有なりや。』答ふ、『不なり、隨緣の故に。』問ふ、『眞如は是れ無なりや。』答ふ、『不なり、不變の故に。』問ふ、『亦有亦無なりや。』答ふ、『不なり、二性無きが故に。』問ふ、『非有非無なりや。』答ふ、『不なり、具徳の故に。』又問ふ、『有なりや。』答ふ、『不なり、不變の故に。』何を以ての故に。隨緣に由るが故に不變常住なり。餘の二句知んぬべし。』又問ふ、『有なりや。』答ふ、『不なり。所謂を離るるが故に下の三句例して然なり。』又問ふ、『有なりや。』答ふ、『不なり、空眞如の故に。』問ふ、『無なりや。』答ふ、『不なり、相違を離るるが故に。』問ふ、『非有非無なりや。』答ふ、『不なり、戲論を離るるが故に。』又問ふ、『有なりや。』答ふ、『不なり、妄念を離るるが故に。』問ふ、『無なりや。』答ふ、『不なり、聖智の行處なるが故に。餘の句は之に准ぜよ。』依他性とは、問ふ、『依他は是れ有なりや。』答ふ、『不なり、緣起無性の故に。』問ふ、『依他は是れ無なりや。』答ふ、『不なり、無性緣起の故に。』問ふ、『亦有亦無なりや。』答ふ、『不なり、二性無きが故に。』問ふ、『非有非無なりや。』答ふ、『不なり、多の義門有るが故に。』又問ふ、『有なりや。』答ふ、『不なり、緣起の故に、諸の緣起は皆無性なるを以ての故に。』問ふ、『無なりや。』答ふ、『不なり、無性なるが故に。』何を以ての故に。』無性なるを以ての故に緣起を成す。餘の二句は知んぬべし。』又緣起を以ての故に、四句を離

【又問、依他云云】
依他に二分あり。淨分は圓成實に同じ、染分は遍計に同じ。故に染分の圓成に異るを以て非有、淨分は圓成に同じきが故に非無といふ。

【智の境】 無生智の境。

【理無】 理を能と見、能を境と見る等、理として無なるをいふ。本無なるを、是れにして有とおもふをいふ。

【三】 以下第二に執の過失を出す。初に眞如の四句の過を出す。初に常

れたり。又、無性なるを以ての故に、亦四句を離れたり。並に之に准すべし。又問ふ、依他は有なりや。答ふ、不なり、觀に約して遣るが故に。問ふ、無なりや。答ふ、不なり、能く無性を現するが故に。下の二句は、相違を離れたるが故に、戲論を離れたるが故に。知んぬべし。又問ふ、有なりや。答ふ、不なり、圓成に異するが故に。又遍計の分に約するが故に。又、所謂を離れたるが故に。問ふ、無なりや。答ふ、不なり。遍計に異なるが故に、圓成の分を以ての故に。又、智の境なるが故に。餘の句は之に准せよ。遍計所執の中に、問ふ、遍計は是れ有なりや。答ふ、不なり、理無の故に。問ふ、是れ無なりや。答ふ、不なり、情有の故に。問ふ、亦有亦無なりや。答ふ、不なり、二性無きが故に。問ふ、非有非無なりや。答ふ、不なり、是れ所執性の故に。又問ふ、有なりや。答ふ、不なり、道理無きが故に。問ふ、無なりや。答ふ、不なり。道理無きが故に。餘の句も之に准せよ。又問ふ、有なりや。答ふ、不なり、執有の故に。又無なりや。答ふ、不なり、執有の故に。又亦有亦無なりや。答ふ、不なり、情有の故に。一執の故に。又非有非無なりや。答ふ、不なり、執成の故に。又有なりや。答ふ、不なり、無相に由るが故に。又無なりや。答ふ、不なり、無相觀の境なるが故に。又有なりや。答ふ、不なり、無體の故に。無なりや。答ふ、不なり、能く眞を噉すが故に。餘の句は之に准せよ。

【三】 第二に執の過を出すとは、若し眞如は、一向に有なりと計せば、二の過失有り。一には常の過なり。謂はく、隨緣にあらざるが故に。染に在ても隱に非ざるが故に。了因を待た

【隨緣に：故に】
若し有と計せばそ
は定性の有にして
隨緣して染淨法と
ならず。

【染に在：故に】
本覺の眞如、隨緣
せされば、常に淨
性を守るが故に。
【了因】無量の智
種、本覺の妙智を
いふ。

【經云云】四卷楞
伽第四の文。
【如來藏】如來と
なるべき種種無量
の性功德を藏する
意、眞如を相より
名く。
【經に云云】唐本
には論といふ、起
信論なり。
【自性：等】無明
の風に動ぜられて
染心となるとは、
隨緣の一面をいふ

ざるが故に。即ち常の過に墮す。問ふ、「諸の聖教の中に、並に眞如を説いて、凝然常
と爲す、既に隨緣せず、豈是れ過ならんや。」答ふ、「聖は眞如を説いて、凝然と爲ること
は、此は是れ隨緣して、染淨を成するの時、恆に染淨と作りて、自體を失はず、是れ即ち
無常に異ならざるの常を、不思議常と名く。諸法を作らざる、如情所謂の凝然なりと謂は
んとには非ず。若し諸法を作らずして、凝然なりと謂はば、是れ情の所得なるが故に。即
ち眞の常を失せん、彼眞常は、無常に異らざるの、常なるを以てなり。無常に異ならざる
の常は、皆情の外に出でたるが故に、眞常と名く。是故に經の中に、「不染にして染」と
は、常にして無常と作ることを明すなり。「染にして不染」とは、無常と作るの時、常を失
はざることを明すなり。」問ふ、「教の中に、既に無常に異らざるの常に就くが故に、眞如を
を説いて凝然常と爲せば、何を以ての故に、常に異らざるの無常に就くが故に、眞如を
説いて無常と爲さざるや。」答ふ、「教の中にも亦此義を説くが故に。經に云はく、「如來藏
とは苦樂を受けて、因と俱に若は生じ、若は滅す」と。經に云はく、「自性清淨心とは、
無明の風に因りて、動じて染心を成する等」と。此教理を以ての故に、知んぬ眞如は、常
に異らざるの、無常なるが故に、緣に隨ひて體を隱す、是れ非有なり。」問ふ、「眞如は是
れ、不生滅の法なり、既に無常に異らざるの、常なるが故に、説いて常と爲し、常に異ら
ざるの、無常なるが故に、無常と説くことを得ば、亦云ふべし、依他は是れ生滅の法なり、
亦應に常に異らざるの無常、無常に異らざるの常の義有ることを得べしや。」答ふ、「亦有

【經に云云】 維摩經弟子品の文。

【經に云云】 大品經の文。

【又云はく云云】

【維摩經菩薩品】の文【此中の二義】常と無常に異せざるの無常の常

【眞中の二義】依他の二義に反す

【論に云云】 梁の攝大乘論第一の頌文

【智障】 無明住地即ち根本無明

【譬の過】 初は眞の當體に約し、次に俗の無體に約す

【如情の】 有情の、實在せりとおもふものは假有なり

【第二に云云】 以下、無の過失を明すに二、初は染法

ることを得るなり。何を以ての故に。諸の緣起無常の法は、即ち無自性にして、方に緣起を成ず、是故に常性に異らずして、而も無常なることを得。故に經に云はく、「不生不滅は是れ、無常の義なり」と。此れ即ち常に異らずして、無常を成ずるなり。又諸の緣起は即ち是れ、無性なるを以て、緣起を滅して方に、無性と説くに非ず、是れ即ち、無常に異らざるの常なり。故に經に云はく、「色即ち是れ空なり、色滅して空あるには非ざるが故に」と。又云はく、「衆生即ち涅槃にして、更に滅せざるが故に」等と。此中の二義と、眞の中の二義と、相配して知んべし。此れ即ち眞俗變融して、二にして而も無二なり。故に「論」に云はく、「智障極めて盲闇なるは、眞俗を謂うて別執す」と、此れ之謂なり。是故に若し眞如は、情所謂に同じて、而も凝然常なりと執せば、即ち緣に隨ひて、其自體を隠さず、了因を假らずして、即ち常の過に墮するなり。又若し緣に隨ひて染淨を成ぜずんば、染淨等の法は、即ち所依無からん、依無くして法有らば、又常に墮するなり。染淨の法は、皆自體無くして、眞に頼りて立つを以ての故に。二に斷の過とは、如情の有は、即ち眞有に非ず、眞有に非ざるが故に、即ち眞を斷するなり。又若し有ならば、即ち染淨に隨はざらん、染淨の諸法は、既に自體無し、眞に又隨はずんば法有ることを得ざらん、亦是れ斷なり。第二に無を執するに、亦二の失有り。一には常の過とは、謂はく、眞如無くんば、生死に依無からん、依無くして法有らば、即ち是れ常なり。又眞如無くんば、聖智に因無からん、亦即ち常なり。又、所依無くんば、法有ることを得ざらん、即ち是れ斷

無依、後は淨法無因の故に、失ありといふ。

【第三に云云】次に雙亦の過失を出す。

【第四に云云】次に雙非の過を明す。

【三】第二に依他起の四句の過失を出す。

【若し有と云云】相を辨するに四あり、初に有の過を明す。

【衆緣】因緣、等無間緣、佛緣、等増上緣の四をいふ。【一の緣中云云】外通、諸法生起の因を、神我とするに對す。

なり。又眞は是れ無なりと執せば、亦是れ斷なり。第三に亦有亦無を執すとは、亦上の諸の失を具す。謂はく、眞如は無二なり、而るに雙べて有無を計せば、所計の有無は眞に稱ふに非ざるを以て、彼眞理を失するが故に、是れ斷なり。若し彼所計の如きを、以て眞と爲すと謂はば、理無くして眞有るを以て、是れ即ち常なり。第四に非有非無とは、眞を戲持す、是れ妄情なるが故に、眞理を失ふ、即ち是れ斷なり。戲持は眞に非ず、而も謂ひて眞と爲せば、理なくして眞有るが故に、是れ常なり。

【三】第二に依他起の中に、若し有と執せば、亦二の失有り、一には常の過なり。謂はく、已に體有りて、緣を藉らざるが故に、緣無くして法有らば、即ち是れ常なり。又、有を執するに由りて、即ち緣を藉らず、緣を藉らざるが故に、法有ることを得じ、即ち是れ斷なり。問ふ、「若し依他性は是れ有の義と説くに、便ち失有らば、何が故に『攝論』等の中に、依他性を説いて、以て有と爲すや。」答ふ、「聖の、依他を説いて、以て有と爲すことは、此れ即ち空に異らざるの有なり。何を以ての故に。衆緣に従ひて、體性無きを以ての故に。一一の緣の中に作者無し、作者無きが故に、緣無作なるに由りて、方に緣起を得。是故に、非有に即する有を、依他の有と名く、是れ即ち聖者は、眞際を動ぜずして、諸法を建立す。」若し依他は、如言の有なりと謂はば、即ち緣起有性なり、緣若し有性ならば、即ち相藉らざらん。相藉らざるが故に、即ち依他を壞せん。依他を壞することは、良に有を執するに由る。是故に汝が意は、空斷に墮せんことを恐れて、力を勵して有と立つれども、緣所起

【第二に云云】次に無とするの過失を明す。

【中論等】等とは十二門論、百論、智度論、其他の空論を明す書を等取す。

の法は、無自性なりと達せざるが故に、即ち縁起を壊し、便ち空無に墮して、依他を斷ずることを謂はざるなり。第二に、若し無と執せば、亦二の失有り。若し依他は是れ、無法なりと謂はば、即ち縁に所起無からん。縁に所起無きが故に、法有ることを得じ、即ち是れ斷なり。問ふ、『若し縁生を説いて、空無と爲すが故に、即ち斷に墮せば、何が故に「中論」等の内に、廣く縁生を説いて、畢竟空と爲すや。』答ふ、『聖は縁生を説いて、以て空と爲すことは、此れ即ち、有に異らざるの空なり。何を以ての故に。法は縁従り生ずるを、方に無性と説く、是故に縁生の有をば、方に空と爲すことを得。若し斷らずんば、縁生の因無からん、何の所以を以てか空と言ふことを得ん。是故に、有に異らざるの空を、縁生の空と名く。此れ即ち聖者、縁生を動せずして、實相の法を説くなり。若し縁生は、如言の空なりと謂はば、即ち縁生無からん、縁生無なるが故に、即ち空理無からん。空理無きことは、良に空を執するに由る。是故に汝が意は、有の見に墮せんことを恐れて、猶勵して空を立つれども、無性縁生と達せざるが故に、即ち性空を失す。性空を失するが故に、還りて情中の惡取空に墮せんことを謂はざるなり。』問ふ、『若し依他に二義有るに由るが故に、是故に前代の諸論師は、各一義を述べて、依他を融攝して相違せずんば、何が故に後代の諸論師、清辨等の如きは、各各一義を執して、互に相破するや。』答ふ、『此れ乃ち相成して、相破するには非ず。何んとなれば、末代の有情、根機漸く鈍にして、依他は是れ、其れ有の義と説くを聞いて、彼は是れ、空に異らざるの有なりと、達せざるが爲の

【第三に云云】次に
に雙亦の過を明す

【第四に云云】次に
に雙非の過失を明す

故に、即ち執して以て如謂の有と爲す。是故に清辨等は、依他の有を破して、無に至らしむ。畢竟無に至りて、方に乃ち彼依他の有を得るなり。若し此徹底の性空に至らずんば、即ち依他の有を成ずることを得ず、是故に有を成ぜんが爲の故に、有を破するなり。『又彼有情は、依他は畢竟性空と説くを聞いて、彼は是れ、有に異らざるの空なりと達せざるが故に、即ち執して以て如謂の空と爲す。是故に護法等は、彼謂空を破して、以て幻有を存す、幻有立するが故に、方に乃ち彼有に異らざるの空を得。若し有の滅は、眞空に非ざるを以ての故に、是れ空を成ぜんが爲の故に、空を破するなり。色即ち是れ空なるを以て、清辨の義立す。空即ち是れ色なれば、護法の義存す。二義鎔融し舉體全攝す、若し後代の論師の、二理を以て交徹し、全體相奪すること無くんば、甚深緣起依他性の法を、顯すことを得るに由無けん、是故に相破して返りて相成す。是故に如情の執無は、即ち是れ斷の過なり。又若し無法を説いて、依他と爲せば、無法は縁に非ず、縁に非ざるの法は、即ち常に墮するなり。第三に亦有亦無とは、上の諸の失を具す、以て之に准すべし。問ふ、『若し上來の所説に據るに、依地起性の有無偏に取らば、此れ應に不可なるべし、雙べて有無を取らば、應に道理に契ふべし、如何が亦、上の失を具すること有らんや。』答ふ、『依他起性の中に、共に彼有無の理有りとも、然も全體交徹して、空有俱に融す。而るに所計の如く、亦有亦無ならば、即ち相違を成じて、上の失を具するなり。』第四に非有非無とは、縁起を戲論す、亦理に非ざるなり。何んとなれば、其執は、有無の中に於て、所計成

【四】第三に遍計所執の四句の過失を明す。初に有とする過失。

【聖智所照云云】聖智の所見は、遍計所執は體性都べて無にして、幻影に過ぎずとす。今この所見に反す。

【第三に云云】第三に、三性の本來の實義を明す。初に眞如の義を顯すに四句あり。

【離相の故に】一切の法の差別虛妄の相を離るるをいふ。

【違順自在云云】染に違し、染に順ずること自在なる意。而も空に即して有、有に即して空、是故に自在辯融す。

ぜざるを以ての故に。即ち情謂の非有非無を以て、道理と爲すなり。此れ既に非理なり、亦上の失を具す、思うて以て之に准ぜよ。

第三に遍計所執性の中に、若し所執を計して有と爲せば、二の過失有り。謂はく、若し

所執是れ、其れ有ならば、聖智所照の理は、應に空ならざるべし、即ち是れ常なり。若し

妄執の遍計、理有ならば、即ち情有を失せん。故に是れ斷なり。二に若し遍計を執して情

無と爲せば、即ち凡迷倒無くして、聖に異らずんば、即ち是れ常なり。亦即ち凡無きが故

に、是れ斷なり。又既に迷無くんば、即ち亦悟無からん、亦悟無きが故に、即ち聖人無か

らん、亦是れ斷なり。三に亦有亦無とは、性は既に無二なり。而るに、有無と謂はば即ち

相違するが故に、上の失を具するなり。四に非有非無とは、遍計を戲論す、亦上の失を具

す、之に準ぜよ。第二の執成の過竟んぬ。第三に其義を顯すとは、眞如は是れ有の義なり、

迷悟の所依なるを以ての故に。又不空の義の故に。不可壞の故に。餘は上に説くが如し。

又眞如は是れ空の義なり。離相を以ての故に。隨縁の故に。對染の故に。餘は亦上の如し。

又眞如は是れ、亦有亦無の義なり。具徳を以ての故に。違順自在の故に。鏝融の故に。又

是れ非有非無の義なり。二にして不二なるを以ての故に。定取するを得ざるが故に。餘は

翻説して、上に准じて之を知れ。第二に依他は、是れ有の義なり、縁成の故に。無性の故

に。餘は前に准じて知れ。依他は是れ無の義なり、縁生無性なるを以ての故に。亦前に

准じて知れ。依他は是れ亦有亦無の義なり。縁成無性なるを以ての故に。前に准ず。依

【非有非無の義あり】吾人の情謂の有を離る、故に無又情謂の無を離る故に有といふ。

【五】以下は眞妄離合の相に約して三性を分別す。【攝論】梁論の第六卷に、婆羅門問經の文を引く。

たは是れ非有非無の義なり、不二なるを以ての故に。隨ひて一を取るに、得ざるが故に。前に准す。第三に遍計は是れ有なり、情に約するが故に。遍計は是れ無なり、理に約するが故に。遍計は是れ亦有亦無なり、是れ所執に由るが故に。是れ非有非無なり、此れ所執に由るが故に。餘は前に准じて之を思へ。上來は別して、三性を明し竟んぬ。

第二に總説とは、三性一際にして、隨一に全收し、眞妄互融して、性に障礙無し、『攝論』

の『婆羅門問經』の中に言ふが如し、「世尊、何の義に依りて、是の如きの言を説くや、如來は生死を見ず、涅槃を見ず」と。依他の中の分別性と、及び眞實性に於て、生死を涅槃と爲す、無差別の義に依るなり。何を以ての故に。此依他性は、分別性の一分に由りて、生死を成じ、眞實性の一分に由りて、涅槃を成ず。釋して曰はく、「依他性は生死に非ず、此

性は眞實性に因りて、涅槃を成ずるに由るが故に。此性は涅槃に非ず。何を以ての故に。此性は分別の一分に由りて、即ち是れ生死するが故に、是故に定めて一分を説くべからず。若し一分を見れば、餘分の性は異らず。是故に生死を見ず、亦涅槃を見ざるなり。此意に

由るが故に、如來、婆羅門に答ふることに此の如し」と。又云はく、「阿毘達摩修多羅の中に、世尊の説法に三種有り。一には染汚分、二には清淨分、三には染汚清淨分なり。何の義に依りてか、此三分を説くや。依他性の中に於て、分別性を染汚分と爲し、眞實性を清淨分と爲し、依他性を染汚清淨分と爲す。此義に依るが故に、三分と説く。釋して曰は

く、「阿毘達摩修多羅の中に説かく、分別性は煩惱を以て性と爲し、眞實性は清淨品を以

【六】既に緣起果門の三性同異の義を明せしを以て、以下緣起因門の種子の六義を明す。

【刹那滅】第八所持の諸法の種子、念念に滅し代謝遷變す、これ即ち空有力不待緣なり。【俱有の義】第二に俱は必ず所生の因果と俱時に有る【待衆緣】因の體は衆を生ずるに無力なり、必ず助緣を籌るをいふ。

て性と爲し、依他性は兩分を具するに由りて、二性を以て性と爲す。故に説法に三種有り。一には煩惱を分と爲し、二には清淨を分と爲し、三には二法を分と爲す。此義に依るが故に、是説を作すと。此上は論文に、又眞は妄の末を諗て、相として攝せざることを無く、妄は眞源に徹して、體として寂ならざること無きを明す。眞妄交徹し二分變融して、無礙全攝せり、之を思うて見つべし。

緣起因門六義法第二

將に此義を釋せんとするに六門をもつて分別す。一には釋相、二には建立、三には句數、四には閉合、五には融攝、六には約教なり。第一の門の中に二有り。初は列、次は釋なり。初に列とは、謂はく、一切の因に皆六義有り。一には空有力不待緣、二には空有力待緣、三には空無力待緣、四には有有力不待緣、五には有有力待緣、六には有無力待緣なり。二に相を釋すとは、初は是れ刹那滅の義、何を以ての故に。刹那滅に由るが故に、即ち無自性を顯す、是れ空なり。此滅に由るが故に、果法生ずることを得、是れ有力なり。然るに是謝滅は、緣力に由るに非ざるが故に、不待緣と云ふなり。二には是れ俱有の義、何を以ての故に。俱に由るが故に、方に有なり、即ち是れ不有を顯す、是れ空の義なり。俱の故に能く有を成す、是れ有力なり。俱の故に孤に非ず、是れ待衆緣なり。三には是れ待衆緣の義、何を以ての故に。無自性に由るが故に、是れ空なり。因は生ぜず、緣生するが故に。

【決定の義】 因自果を生ずる時、因の善、惡、無記なるに従ひて、果も亦三性歴然たるをいふ。

【自類改：有の義】 三性は定んで改變せずして、存するをいふ。

【引自果】 色法の種子は必ず色法を生ずる如し、所生の自果催亂せず。

【縁の果：有力なり】 因は自果を引く功能勝る、故に引有力なり。

【恒隨轉】 種子は講體に依附して自類生じ又は縁あれば現じて息まず。

【第二に建立云云】 能生の種子の因には、定んで六義のみあることを顯示す。

【因有力不待縁】

是れ無力なり。即ち此に由るが故に、是れ待縁なり。四には決定の義、何を以ての故に。自類改まらざるに由るが故に、是れ有の義なり、能く自ら改まらずして、而も果を生ずるが故に、是れ有力の義なり、然も此改まらざるは、縁力に由るに非ざるが故に、是れ不待縁の義なり。第五には引自果の義、何を以ての故に。自果を引現するに由りて、是れ有の義なり。縁を待ちて方に生ずと雖も、然も縁の果を生ぜず、是れ有力の義なり、即ち此に由るが故に、是れ待縁の義なり。第六には是れ恒隨轉の義。何を以ての故に。他に隨ふに由るが故に、無なるべからず、縁に違すること能はざるが故に、力用無し。即ち此に由るが故に、是れ待縁なり。是故に『攝論』に、此六義を顯さんが爲に、而も偈を説いて言はく、「刹那滅と俱有と、恒隨轉と應に知るべし、決定と待衆縁と、唯能く自果を引くとなり」と。

第二に建立とは、問ふ、「何が故に定んで六義を説いて、増して七に至らず、減じて五に至らざるや。」答ふ、「正因と爲りて縁に對するに、唯三義有り。一には因有力不待縁。全に能く生ずるが故に。縁力を雜へざるが故に。二には因有力待縁、相資けて發するが故に。三には因無力待縁。全に作さざるが故に。因は縁に歸するが故に。又上の三義に由るに、因の中に各各二義有り。謂はく、空の義と有の義となり。二門に各各三有り、合して唯六有るが故に、増減せず。何が故に第四の句の、無力不待縁の義を立てずとならば、彼は是れ、因の義に非ざるを以ての故に、立てず、之を思つて見つべし。」問ふ、「待縁とは何等

因の中に自徳を成就して、他の縁を待たずし。

【因有力待縁】因縁相資けて、成ずるをいふ。

【因無力待縁】因種所具の衆徳を、全く縁法に譲るをいふ。

【増上等の三縁】等無間縁、所縁縁、増上縁、これ因の爲には疎助縁なり

【論】成唯識論卷二。

【若し縁起秘密云】若し縁教に就

かば、諸法は皆如来藏縁起の法にて

初教の知らざる深旨あり、種現共に

六義を具す。

【第三に云々】兩

單、雙亦、雙非の

四句を以て、六義を分別料簡す。

【一には、決定の義】自四自果を生ずる故に。

【彼引自果…無二】共に有力待縁なればなり。

の縁をか待つや。」答ふ、「因事の外の、増上等の三縁を待つ、自の六義の、更に互に相待するをば取らざるのみ。」問ふ、「因を縁に望むるに、六義有ることを待つ。未だ知らず、縁を因に對して、亦六義有りや不や。」答ふ、「此に二義有り。増上縁を自の増上果に望むるに、六義有ることを得。還りて是れ、親因の攝なるを以ての故に、他果に望むるに、疎縁を成するが故に、六を具せず、親因を他に望むるも亦爾なり。」問ふ、「果の中に六義有りや不や。」答ふ、「果の中に唯空有の二義有り。謂はく、他従り生じて無體なるが故に、是れ空の義なり。因に翻するが故に、是れ有の義なり。若し互爲因果に約して説かば、即ち此一法を、他の因と爲す時は、斯六義を具す。他の與に果と作る時は、即ち唯二義のみ有り、是故に六義は唯因の中に在り。」問ふ、「若し爾らば、現行を種子の因と爲す、豈六義有ることを得んや。」答ふ、「勝に隨ひて具せず、論に説くが如し、種子に六義有り」と、此は初教に約す。若し縁起秘密の義に約せば、皆此六義を具す、此は終教に約す。此教の中には、六七識等も亦、是れ如来藏隨縁の義にして、別の自性無きを以て、是故に六七識も亦、本識の中の六義を具するなり。之を思うて見つべし。

【第三に句數をもつて料簡すとは、即ち二種有り。一には體に約し、二には用に就く。初に體の有無に約するに、而も四句有り、一には是れ有。謂はく、決定の義なり。二には是れ無。謂はく、剎那滅の義なり。三には是れ亦有亦無。謂はく、彼引自果と、及び俱有とを合して、無二なる是なり。四には非有非無。謂はく、彼恒隨轉と、及び待衆縁とを合し

【論】成唯識論卷二。

【若し縁起秘密云】若し縁教に就かば、諸法は皆如来藏縁起の法にて初教の知らざる深旨あり、種現共に六義を具す。

【第三に云々】兩單、雙亦、雙非の四句を以て、六義を分別料簡す。

【一には、決定の義】自四自果を生ずる故に。

【彼引自果…無二】共に有力待縁なればなり。

の縁をか待つや。」答ふ、「因事の外の、増上等の三縁を待つ、自の六義の、更に互に相待するをば取らざるのみ。」問ふ、「因を縁に望むるに、六義有ることを待つ。未だ知らず、縁を因に對して、亦六義有りや不や。」答ふ、「此に二義有り。増上縁を自の増上果に望むるに、六義有ることを得。還りて是れ、親因の攝なるを以ての故に、他果に望むるに、疎縁を成するが故に、六を具せず、親因を他に望むるも亦爾なり。」問ふ、「果の中に六義有りや不や。」答ふ、「果の中に唯空有の二義有り。謂はく、他従り生じて無體なるが故に、是れ空の義なり。因に翻するが故に、是れ有の義なり。若し互爲因果に約して説かば、即ち此一法を、他の因と爲す時は、斯六義を具す。他の與に果と作る時は、即ち唯二義のみ有り、是故に六義は唯因の中に在り。」問ふ、「若し爾らば、現行を種子の因と爲す、豈六義有ることを得んや。」答ふ、「勝に隨ひて具せず、論に説くが如し、種子に六義有り」と、此は初教に約す。若し縁起秘密の義に約せば、皆此六義を具す、此は終教に約す。此教の中には、六七識等も亦、是れ如来藏隨縁の義にして、別の自性無きを以て、是故に六七識も亦、本識の中の六義を具するなり。之を思うて見つべし。

【恒隨：無二】共に無力待緣門に屬す、而して待衆緣は非有、恒隨轉は非無なり。
 【用に就く四句】
 恒隨轉等の二は、共に無力待緣にて無二、故に因の自生に非ず。次の二は有力不待緣にて無二、因有力の故に不他生なり。三に俱有等の二は、共に有力待緣にて無二、有力の故に他生に非ず。非緣の故に自生に非ず。四に總句。前の三句各二義を有し、因の義正に成らず、故に無因生ならず。
 【地論】十地經論第八、十二有支次第相生の因縁を明す下。
 【集論】雜集論第四卷中の文。
 【第四に開合云云】六義の開合を明す【有力云云】有力は、因の果を感ずる勢力作用に

て、無二なる是なり。用に就く四句とは彼恒隨轉と及び待衆緣とを合して、無二なるに由るが故に、是れ自生にあらざるなり。彼刹那滅と、及び決定とを合して、無二なるに由るが故に、他生にあらざるなり。彼俱有と及び引自果とを合して、無二なるに由るが故に、共生にあらざるなり。其三句各其六義を合して、因の義方に成ずるに由るが故に無因生に非ざるなり。是れ即ち斯六義に由りて、因縁全奪して縁起の勝徳を現す。故に『地論』に云はく、「因生ぜず、縁生の故に。縁生ぜず、自因生の故に。共より生ぜず、知者無きが故に。作時に住せざるが故に。無因にあらず、縁に隨ひて有なるが故に」と。又『集論』に云はく、「自種有なるが故に、他に從はず、衆縁に待つが故に、自作に非ず、作用無きが故に、共生ならず、功能有るが故に、無因に非ず」と。問ふ、「此六義と八不と、分齊は云何。」答ふ、「八不は遮に據り、六義は表に約す。又八不は情に反するに約して、理自ら顯はる。六義は理を顯すに據りて、情自ら亡せず、斯左右有るのみ。」

第四に開合とは、或は體に約するに、唯一なり、因に二體無きを以ての故に。或は義に約して二に分つ。謂はく、空と有となり。自性無きを以ての故に。縁起現前の故に。或は用に約して三に分つ。一には有力不待緣、二には有力待緣、三には無力待緣なり。初は即ち全有力、後は即ち全無力、中は即ち亦有亦無力なり。第四句の無力不待緣は、因に非ざるを以ての故に、論ぜざるなり。是故に唯三句有り。或は分ちて六と爲す。謂はく、三句を開いて二門に入るるが故に、前に辨するが如し。或は分ちて九と爲す。謂はく、上の三

約して、體の上の業用に就いていふ

義に於て、隨一に皆彼三を具するが故に。何を以ての故に。若し有力に非ずんば、即ち無力無からん、是故に隨一に三を具するが故に、九有るなり。又十二を分つ。謂はく、上の六義に於て、空有の二門相離れざるが故に、空に隨ひて即ち有なり、有に隨ひて即ち空なり。空が有に六有り、有が空にも亦六有り、故に十二なり。或は十八を分つ。謂はく、上の六義の中に於て、一一に皆三義有るが故に。一には體の有無、二には力の有無、三には縁の待不待に約す、三六十八を成す。或は分ちて三十六と爲す。謂はく、上の六義に於て、隨一に皆六を具す。何を以ての故に。若し一無くんば餘は皆無なるが故に。餘門は思うて之に准せよ。

【第五に云云】 第五に六義と六相の融攝を明す。

【如し爲す】 初に四句を以て情を遣り非を去り、次に六句を以て直に志に前徳を顯し、以て善賢圓滿法界に入らしむ、これ善巧方便なり。【第六に云云】 第六に五教に約して辨ず

第五に融攝とは、然も此六義は、六相を以て融攝して、之を取る。謂はく、六義を融じて一因と爲る、是れ總相なり。一因を別いて六義と爲す、是れ別相なり。六義齊く因と名くるは、是れ同相なり。六義を不壞相と爲すは、是を異相と名く。此六義に由りて、因等成ずることを得るは、是れ成相なり。六義各自義に住するは、是れ壞相なり。問ふ、六義六相の分齊は云何と答ふ、一六義は緣起の自體に據り、六相は緣起の義門に據る。法體を以て義門に入るれば、遂に差別を成す。如し六義を以て四句に入れば、去非に順するが故に、即ち三乘に順す。六相に入るれば、自徳を顯すが故に、一乘に順す。是故に四句と六相と、俱に入法の六便と爲すなり。

第六に教に約して辨ずとは、若し小乘の中には、法執の因なり。此六義に於ては、名義

【小乘中：無し】六因四緣を生いふも因不生の義なし、緣生これに於てを立てず又：善なき故なり【若し：具せず】以下、三乘教所明の因を明す。如來

【法無我因】如來の自性をいふ。如來の自性は不生不滅の眞如の理體、而も是法は無我にして自性清淨なり【七】十玄緣起とは、四種法界中の事事無礙法界の相を説明せるもの、この十玄に緣となして、他を起せば緣起といふ。

【初の義：説くべからず】十佛の自境界は國土海一一如一切一切即一の法にて、唯佛與佛の境界なればなり【國土海云】依正二報に分ち以て攝理の義理を説くも、果分の内容、重重無盡微細相容

俱に無し。若し三乘の轉耶識、如來藏、法無我因の中には、六義の名義有れども、主伴未だ具せず。若し一乘普賢圓因の中には、主伴を具足して、無盡の緣起方に究竟す。又空有の義に由るが故に、相即門有り。力無力の義有るに由るが故に、相入門有り。待緣不待緣の義有るに由るが故に、同體異體門有り。此等の義門有るに由るが故に、毛孔に刹海を容るる事有ることを得るなり。之を思うて知んぬべきのみ。

(七) 十玄緣起無礙法門義第三

夫れ法界緣起は、乃ち自在無礙なり、今は要門を以て、略攝して二と爲す。一には究竟果證の義を明す。即ち十佛の自境界なり。二には緣に隨ひ因に約して、教義を辨ず、即ち普賢の境界なり。初の義とは圓融自在にして、一即一切、一切即一なり、其狀相を説くべからざるのみ『華嚴經』中の、究竟果分の國土海、及び十佛の自體融義等の如き、即ち其事なり。因陀羅、及び微細等を論ぜず、此れ不可説の義に當る。何を以ての故に。教と相應せざるが故に。『地論』に云はく、『因分可説果分不可説』とは、即ち其義なり。問ふ、義若し是の如くならば、何が故に經の中に、乃し佛不可議品等の果を説くや。答ふ、『此果の義は、是れ緣に約して形對して、因を成ぜんが爲の故に、此果を説く、究竟自在の果に據るに非ず。然る所以は、不思議法品等は、因位と同會にして、而も説くが爲の故に、知んぬ形對するのみ。』第二の義とは二有り。一には喻を以て略して示し、二には法に約して

の義を説かず。

【白若し有云云】
以下、初に他の自に即するを示し、二に自の他に即するを示し、三に即するを反顯し、四に反質して非を成ず。

【二に力用云云】
以下、異體相入を明す。

【又二有力云云】
自他共に有力、自他共に無力ならば交徹相入は存せず

廣く辨ず。初に喩をもつて示すとは、十錢を數ふる法の如し。十と説く所以は、圓數に應じて、無盡を顯現せんと欲するが故に。此中に二有り。一には異體、二には同體なり。此二門有る所以は、諸の緣起門の内に、二義有るを以ての故に。一には不相由の義。謂はく、自ら徳を具するが故に。因の中の不待緣等の如き是なり。二には相由の義。待緣等の如き是なり。初は即ち同體、後は即ち異體なり。異體の中に就いて、二門有り。一には相即、二には相入なり。此二門有る所以は、諸の緣起に、皆二義有るを以ての故に。一には空有の義、此は自體に望む。二には力無力の義、此は力用に望む。初の義に由るが故に、相即することを得、後の義に由るが故に、相入することを得るなり。初の中に、白若し有る時は、他は必ず無なるに由るが故に、他は自に即す。何を以ての故に。他は無性なるに由りて、自作なるを以ての故に。二には自若し空なる時は、他は必ず是れ有なるに由るが故に、自は他に即す。何を以ての故に。自無性なるに由りて、他作なるを以ての故に。二有二空、各俱ならざるを以ての故に、彼相即せざること無し。有が無、無が有、無二なるが故に、是故に常に相即す。若し爾らずんば、緣起成ぜじ、自性等の過有らん、之を思うて見つべし。二に力用の中に、自ら全力有り、所以に能く他を攝す。他は全く無力なるが故に、所以に能く自に入る。他有力、自無力は、上に反じて知んぬべし。自體に據らざるが故に、相即に非ず、力用交徹するが故に、相入を成ず。又二有力二無力、各俱ならざるに由るが故に、彼相入せざること無し、有力が無力、無力が有力、無二なるが

【又用云云】體用互に攝むる事を明す。用相入の時、體は何處にありや。體相即する時、用何處にありやの答なり。

【中に於て云云】異體門の相入を明すに、相入を向上、向下の二門を分つ【向上數】一を本數とし、二より十までを末數として相入をいふ。二を本數とし他を末數とする相入の所明知るべし。

【向下數】十を本數とし、他の九を末數とする等、上に准ずべし。

【問ふ既に云云】以下三問答あり。初に緣起相由に約して相入の義を説く。

【大緣起陀羅尼の法】法界の塵と法と一一に、一切の功徳を總持し統攝するをいふ。

故に、是故に常に相入す。又用を以て體を收むるに、更に別體無き故に、唯相入す。體を以て用を收むるに、別用無きが故に、唯是れ相即す、此は因の六義の内に依りて、之に准ぜよ。

中に於て先に相入を明す。初の向上數に十門有り。一には、一は是れ本數なり。何を以ての故に。緣成の故に。乃至十には、一が中の十なり。何を以ての故に。若し一無くんば、即ち十は成ぜざるが故に。即ち一に全力有り、故に十を攝するなり。仍て十にして一に非ず。餘の九門も亦是の如し、一一に皆十有り、准例して知んぬべし。向下數も亦十門有り、一には、十に即ち一を攝す。何を以ての故に。緣成の故に。謂はく、若し十無くんば、即ち一成ぜざるが故に。即ち一は全力無くして、十に歸するが故に。仍りて一にして十に非ず。餘も例して亦然なり。是の如きの本末二門の中に、各各十門を具足す。餘の一一の錢の中、准じて以て之を思へ。此は異門相望に約して説くのみ。問ふ「既に」と言はば、何んが一が中に十有ることを得るや。」答ふ、「大緣起陀羅尼の法は、若し一無くんば、即ち一切は成ぜざるが故に、定んで知んぬ、是の如しといふことを。此義は云何。言ふ所の一とは、自性の一に非ず、緣成の故に一なり。是故に一が中に十有ることは、是れ緣成の一なり。若し爾らずんば、自性にして緣起無からん、一と名くることを得ざるなり。乃至十とは、皆自性に非ず、緣成に由るが故に。此に爲りて、十が中に一有ることは、是れ緣成無性の十なり。若し爾らずんば、自性にして緣起無からん、十と名けざるなり。是故に一

【問ふ若し云云】二に、無性緣成を立つる問答なり。初に各各無性ならば、一多の緣起は成ぜざるべしと問ふ。

【法界家の實德】事法に定性なき義は、本來常恒の眞實功徳相なるをいふ。

【普賢の境云云】無性緣起に上達する、普賢の冒見を以て善處する法界は、具徳自在無障礙なる事をいふ。【華嚴經】普譯卷二十八の文。

【初の異體云云】以下異體門の相即を明す。此體の空有に約して相即の義を述ぶるなり。【向上】一より十に向ひ去るをいふ。

切の緣起は、皆自性に非ず。何を以ての故に。隨ひて一縁を去れば、即ち一切成ぜず、是故に一が中に、即ち多を具する者を、方に緣起の一と名くるのみ。問ふ、「若し一縁を去るに、即ち成ぜずんば、此れ即ち無性なり、自性無くんば、云何が一多の緣起を成ずることを得ん。」答ふ、「一縁無性なるに由りて、一多の緣起を成ずることを得。何を以ての故に。此緣起は是れ、法界家の實德なるに由るが故に。普賢の境界、具徳自在にして、障礙無きが故に。『華嚴』に云はく、「菩薩若し善く、緣起の法を觀すれば、一法の中に於て、衆多の法を解し、衆多の法の中に、一法を解了す」と。是故に當に知るべし、一が中の十、十が中の一は、相容無礙なり。仍りて相是ならず。一門の中に、既に十義を具足するが故に、明かに知んぬ、一門の中に、皆無盡の義有り、餘門も亦是の如し。問ふ、「一門の中に十を攝し盡すや不や。」答ふ、「盡なり不盡なり。何を以ての故に。一が中の十なるが故に、盡なり、十が中の一なるが故に、不盡なり。四句をもて過を護り、非を去けて徳を顯す等、之に准じて解すべきのみ。一別別の諸門の中に准例するに是の如し、緣起の妙義は、應に是の如く知るべし。第一の門竟んぬ。

初の異體門の中の、第二の即の義とは、此中に二門有り。一には向上去、二には向下來なり。初の門の中に十門有り。一には一。何を以ての故に、緣成の故に、一即十なり。何を以ての故に。若し一無くんば即ち十無きが故に。一有體にして、餘は皆空なるに由るが故に、是故に此一は、即ち是れ十なり。是の如く上に向ひて乃至第十、皆各前の如く准

【向下來】十より一に向うて來るをいふ。
【乃至第一】これ即ち向下門の第十大門にして、第一本數とするを指す【一の錢云云】驗顯なり。これは向上向下に通ずるも、一即多を擧げて多即一を略するは、これ緣起の相由是にて判然する故に。

【問ふ云云】以下は、一は所謂迷情のままの一に非ずこれ多の即せる一なることを述べ、他を准知せしむ。【自性】一本無自性に作る。

じて知るべきのみ。向下と言ふは、亦十門有り。一には十。何を以ての故に。緣成の故に、十即一なり。何を以ての故に。若し十無くんば、即ち一無きが故に。一無體にして、是れ餘は有なるに由るが故に、是故に此十は、即ち是れ一なり。是の如く下に向ひて、乃至第一、皆各前の如く、准じて知るべきのみ。此義を以ての故に、當に知るべし、一一の錢は、即ち是れ多錢なるのみ。問ふ、「若し一が十に即せずんば、何の過失か有る。」答ふ、「若し即せずんば、二の失有り。一には十錢を成ぜざるの過。何を以ての故に。若し一が十に即せずんば、多一にして亦十を成ぜじ。何を以ての故に、一は一にして皆十に非ざるが故に。今既に十を成ずることを得たり、明かに知んぬ、一は即ち是れ十なり。二には一成ぜざるの過。何を以ての故に。若し一が十に即せずんば、十は即ち成ずることを得じ、十を成ぜざるに由るが故に、一の義も亦成ぜざらん。何を以ての故に。若し十無くんば、是れ誰が一ぞ、故に今既に一を得たり、明かに知んぬ、一即ち十なり。又若し相即せずんば、緣起門の中の空有二義。即ち現前せずして、便ち大なる過を成ぜん。謂はく、自性等なり、之を思つて知んぬべし。下の同體門の内、此に准じて之を知れ。餘門も准じて知るべきのみ。問ふ、「若し一即十ならば、應當に是れ一に非ざるべし。若し十即一ならば、應當に是れ十に非ざるべし。」答ふ、「一只一即是れ十なるが爲の故に、是故に名けて一と爲す。何を以ての故に。言ふ所の一とは、是れ所謂の一に非ず、緣成無性の一なり。此に爲りて一即多なる者を、是を一と名く、若し爾らざれば一と名けず。何を以ての故に。自性に

【問ふ云云】次に一多は當に同時に前後次第あり前後次第あるまゝ同時なるを問す。【逆順を違せず】前後不同と即同時を釋す。

【問ふ前云云】以上は十義の餘に就いて去來の義を明して今は法體に就いて其相狀を明す。【去來と不動】故

に【無性の義よりいへば去來共に無性、故に即不動なり、波は空なる故に波即水の如し。】

【問ふ、若し云云】始覺の智は本覺の法に冥合して始本不二なれば、今始覺の智に約しても本より去來なりといひ得ることを明す。

【問ふ、智に云云】上述の舊來成は、法によるる智によるやといひ、法智雙融の義を明す。

【第二に同體門云】

由るが故に。緣無ければ一を成せざるなり。十即一とは、准例して取れ、妄執すること勿れ。應に是の如く、准知すべし。【問ふ、】上の一多の義門は、一時俱同なりと爲んや、前後不同なりと爲んや。【答ふ、】即ち同即ち前後なり。何を以ての故に。此れ法性緣起は、逆順を具足し、同體にして違せず、徳用自在にして、障礙無きに由るが故に、皆是の如くなるを得。【問ふ、】上の所説の如きの去來の義は、其相云何。【答ふ、】自位動せずして、而も恆に去來す。何を以ての故に。去來と不動は、即ち一物なるが故に。但智を生じ、理を顯さんが爲の故に、去來等の義を説くのみ。若し智を廢すれば、一切不可説なり。上の果分の如きは、即ち其事なり。【問ふ、】若し智に由らば、即ち先有に非ざらん、云何が説いて舊來如此と言ふや。【答ふ、】若し智を廢すれば、即ち緣起を論ぜず。智に約するに由るが故に、即ち舊來如此と説く。何を以ての故に。成ぜずんば即ち已みなん、成ぜば即ち始終を離るるが故に。智と及び法と、舊來成するが故に。【問ふ、】智に由ると爲んや、法は是の如しと爲んや。【答ふ、】智に由ると爲す、法は此の如しと爲す。何を以ての故に。同時に具足するが故に。餘の義は准じて之を思へ。【大段第一に異體門を説んぬ。】

【第二に同體門とは亦二義有り、一には一が中の多、多が中の一なり。二には一即ち多、多即ち一なり。初の門の中に二有り。一には一が中の多、二には多が中の一なり。初に一が中の多とは、十門の不同有り。一には一。何を以ての故に。緣成の故に。是は本數なり。一が中に即ち十を具す。何を以ての故に。此一錢の自體是れ、一なるに由りて、亦復二が

【問ふ、】智に云云

【云】既に異體門の纏り、以下同體門の相即相入を明す。即ちこれ自己の本來具有する數に就いて論ずるなり。

【一にして十に非ず】一は又體一なると共に、又體一は一は二を成ずる徳を有つ一なり、乃至十を成ずる徳を有す、故に十個の一あり。

【二には多云云】次に向下門の所明なり。

【彼初の一に在り】異體門に濫げんことを恐れて、十の中にある一と簡別す。

【問ふ、此と云云】此門と前の異體門との相入の相違を明す。

【今、此同具す】一の中に本來十を具す、今本具の十と一と相望して相入を論ず。
【二には一即十】

與に一と作るが故に。即ち二が一と爲り、乃至十が與に一と作るが故に、即ち十が一と爲す。是故に此一の中に、即ち自ら具に十箇の一有るのみ。仍りて一にして十に非ざるなり。未だ是れ即門ならざるを以ての故に。初の二錢は既に兩り、餘の二三四已上の九門の中に、皆各是の如し、准例して知るべきのみ。二には多が中の一にも亦十門有り。一に十。何を以ての故に。縁成の故に。十が中の一なり。何を以ての故に。此一は十が與に一と作るに由るが故に。即ち彼初の一は、十が一の中に在り、十が一を離れて、即ち初の一無きを以ての故に、是故に此一即ち、十が中の一なり。仍りて十にして一に非ず。餘の下の九八七、乃至一に於て、皆各是の如し、准例して之を思へ。問ふ、此と前の異體と、何の別かある。一答ふ、前の異體は、初の一を後の九に望めて、異門相入するのみ。今此同體は、一が中に自ら十を具す、前後の異門に望めて、説くには非ざるなり。即ち義も亦准じて之を思へ。二には、一即十、十即一にも、亦二門有り、一には一即十にも亦、十門の不同有り。一には一。何を以ての故に。縁成の故に、一即十なり。何を以ての故に。此十が一は即ち是れ、初の一なるに由るが故に。別の自體無きが故に。是故に此十は即ち是れ一なり。餘の九門も皆亦是の如し、之に准じて知んぬべし。二には、十即一とは、亦十門の不同有り。一には十。何を以ての故に。縁成の故に。十即一なり。何を以ての故に。彼初の一は即ち是れ十なるを以ての故に、更に自ら一無きが故に、是故に初の一は、即ち是れ十なり。餘の九門は准例して之を知れ。問ふ、此同體の中の、一即十等とは、只此

二に同體門の相即を明す。

【此十が一：故に】十を成ずる一の體初の二に外ならざるの意。

【二には十即一】向下門を明す。

【一には十】十を先づ本數として論ず。

【此は且く：思ふべし】今は一錢十錢の現在の事法に就いて論説せる意を示す。
【八】以下、十玄緣起の法説なり。初に立義門なり。

十を攝すとや爲んや、無盡を攝すとや爲んや。一答ふ、一此れ並に智に隨ひて而も成ず。十を須れば即ち十、無盡を須れば即ち無盡なり。是の如く増減は、智に隨ひて取る。即ち十は前に釋するが如し。無盡と言ふは、一門の中に、既に十有り。然るに是十は、復自ら迭ひに相即入して、重重にして無盡を成ずるなり。然るに此無盡重重にして、皆悉く初門の中に攝在するなり。問ふ、但し自の一門の中の、無盡重重を攝すると爲んや。一答ふ、或は俱に攝し、或は但自の無盡を攝す。何を以ての故に。若し自の一門の中の無盡無くんば、餘の一切の門の中の無盡は、皆悉く成ぜざるが故に、是故に初門の同體に即ち同異の二門の無盡無盡、無盡無盡、無盡無盡、無盡無盡、無盡無盡を攝す、其圓極法界を窮めて攝し盡さざること無きのみ。或は但し自の同體一門の中の無盡を攝す。何を以ての故に。餘の異門は、虚空の如くなるに由るが故に。相知らざるが故に。自ら具足するが故に、更に攝すべきこと無きなり。此は但、智に隨ひて而も取るに、一も差失せざるなり。此一門の、既に具足無窮にして無盡ならしめ、及び相即相入等、無盡を成ずるが如きは、餘の一一の門の中に、皆亦是の如く、各無盡無盡を成ずるなり。宜しく是の如く准知すべし。一此は且らく現事の錢の中に約して、彼一乘緣起無盡陀羅尼の法に況す。其法は只此の如くなりと謂はんとには非ず。應に情を去けて理の如く之を思ふべし。

第二に法を約して廣く辨ずとは、略して二體有り。一には立義門、二には解釋門なり。初に立義門とは、略して十の義門を立てて、以て無盡を顯す。何者をか十と爲す。一には

【九】次に解釋門に十門あり、前の十義を釋し、無盡を顯示す。
 【一】には：成ず。一、同時具足相應門。十門の中、是は總門、後の九は別門の所明なり。
 【一切を：成ず】十義具足相應するのみならず、後の九門をも具し、大緣起の至極を盡すをいふ。
 【二】には：解すべ不同門。以下は、法界の萬有個相入する義に約す。

教義。即ち一乘三乘乃至五乘等の、一切の教義を攝す、餘の下之に准ぜよ。二には理事。即ち一切の理事を攝す。三には解行。即ち一切の解行を攝す。四には因果。即ち一切の因果を攝す。五には人法。即ち一切の人法を攝す。六には分齊境界。即ち一切の分齊境界を攝す。七には師弟法智。即ち一切の師弟法智を攝す。八には主伴依正。即ち一切の主伴依正を攝す。九には隨生根欲示現。即ち一切の隨生根欲示現を攝す。十には逆順體用自在等。即ち一切の逆順體用自在等を攝す。此等の十門を首と爲して、能く各一切の法を總攝して、無盡を成ずるなり。

二に解釋とは、亦十門を以て、前の十義を釋して、以て無盡を現す。問ふ、「何を以てか十數をもて、無盡を顯すことを、知ることを得る。」答ふ、「華嚴經」の中に依りて、十數を立てて首と爲して、以て無盡の義を顯す。一には同時具足相應門。此上の十義、同時に相應して、一緣起を成ず。前後始終等の別有ること無し。一切を具足して、自在にして逆順參へて而も雜せずして、緣起の際を成ず、此は海印三昧に依りて、炳然として同時に顯現して成ず。二には一多相容不同門。此上の諸義は、一門の中に隨ひて、即ち具に前の因果理事の、一切の法門を攝す。彼初錢の中に、即ち無盡の義を、攝するが如きは、此れ亦是の如し。然るに此一の中に、具に多を有すと雖も、仍ほ一は即ち是れ、其多には非ざるのみ。多が中の一等も、上に准じて之を思へ。餘の一一の門の中に、能く悉く是の如く、重重無盡なり。此經の偈に云はく、「一佛土を以て十方に滿ぜしめ、十方を一に入るるに、

【此經の偈】 晋譯
本經卷四。

【三には云々】 以下、一本卷中の三とす。三、諸法相即自在門。此は體の空有に約して、互に相即するを明す。

【若し同體云々】

次に別して釋するに、初に同體相即次に異體相即なり

【即ち自ら無盡】 自の中に一切を攝盡し、更にこの一切自ら互に相即相入し、重重無盡なるをいふ。

【此經に云はく云々】 晋譯本經卷六中、取意の文。

【諸度諸地】 十波羅蜜と十地。

【義を以て其事なり】 經文前半の同體相即の義の釋

【何に其事なり】 經文後半の、異體相即の義の釋。

【此經に云々】 晋

亦餘すところ無し。世界の本相も亦壞せず、無比の功德の故に、能く爾なり」と。然るに此一多は復相含容受して、自在無礙なりと雖も、仍ほ體不同なり。所由は、上の錢の義の中に釋するが如し。此に同體異體有り、上に准じて之を思うて解すべし。三には諸法相即自在門。此上の諸義、一即一切一切即一。一圓融自在無礙にして成ず。若し同體門の中に約せば、即ち自ら具足して、一切の法を攝するなり。然るに此自の一切は、復自ら相即入して、重重無盡無盡なるが故なり。然るに此無盡皆悉く、初門の中に在るなり。故に此經に云はく、「初發心の菩薩の、一念の功德深廣にして邊際無し。如來分別して説かんに、劫を窮むとも盡すこと能はず、何に況んや無量無數無邊劫に於て、具足して諸度諸地の功德の行を修せんをや」と。義をもつて言ふに、一念即ち深廣無邊なることは、良に緣起法界、一即一切なるに由るが故なるのみ。彼同體門の中の一錢は、即ち重重無盡の義を得るが如き、即ち共事なり。何に況んや無邊劫とは、即ち餘の一一の門の中に、各無盡の義を顯す是なり。爾る所以は、此經に又云はく、「初發心の菩薩は、即ち是れ佛なるが故なり」と。此緣起の妙理、始終皆齊きに由りて、始を得れば即ち終を得、終を得れば方に始に原く。上の同時具足の如くなる故に、然ることを得るなり。又云はく、「一地に在りて、普く一切の諸地の功德を攝す」と。是故に一を得るに、即ち一切を得。又云はく、「一即多、多即一なり」と知るが故なり」と。十信の終心に、即ち作佛すとは、即ち共事なり。問ふ、「若し同體一門の中に、即ち一切を攝して無盡ならば、一時に俱に現すと爲んや。前後す

譯本經卷九の文。
【又云はく】本經卷一、並びに卷八取意の文。
【問ふ云云】以下六問答は、主として信滿成佛に依り相即の義を談ず。

【餘門は虚空の如し】同體の一門につき、異體の相即を見ざるが故なり
【問ふ、此同體云云】此下、此同體一切の詳細を説く。

【此經の偈】 晋譯本經卷廿九。

【又偈に云はく】 本經卷九。

と爲んや。』答ふ、『一門の中に於て、一時に炳然として一切を現する者は、微細の攝に屬し、隱映互に現じて、重重なる者は、因陀羅の攝に屬す。餘の義は即同即異、即多即少、即有即無、即始即終、是の如く自在に一切の無盡の法門を具足す。仍りて隨ひて一を擧げて首と爲せば、餘は即ち作と爲す。道理一も差失せじ。舊より來た此の如し、此は同體の一門の中に、自在無窮の徳を、具足することを辨ずるのみ。餘の異體等の門の中も、亦准じて之を思へ。』

問ふ、『若し一門の中に、即ち一切を具足して、無盡自在ならば、餘の門は何んの用と爲ん。』答ふ、『餘門は虚空の如し。何を以ての故に。同體の一門に、並に一切を攝して盡さざること無きが故に。』問ふ、『此同體門の中の、所攝の一切とは、但し應に自門の中の一を攝すべし、豈餘門の中の、一切を攝すべけんや。』答ふ、『既に自の一切を攝する、復餘の一の門の中の、無盡の一切を攝す、是の如く重重に其法界を窮むるなり。何を以ての故に。圓融法界無盡緣起は、一無ければ、一切並に成ぜざるが故に。此は俱に法性家の實徳を論するが故に、其邊量を説くべからざるが故に。此經の偈に云はく、『不可言説の諸劫の中に、一切の不可説を演説せんに、不可説劫は猶盡きぬべし、不可説を説くことは盡すべからず』と。又偈に云はく、『一切衆生の心は悉く分別して知んぬべし、一切の利微塵をば、尙其數を算へつべし、十方虚空界をば、一毛をもつて猶量りつべし、一切の利發心は、究竟して測るべからず』と。良に此一乘圓極自在無礙の法門は、一を得るに即

【因果俱に云云】

因果俱に約して
無盡の理を説く
【地論】 十地經論
卷一取意の文。

【六相：括る】 總

別等の六相方便を
以てせば、信地の
因も諸佛法の果も
同値するをいふ。

【又此經】 晋譯本

經卷九。

【又云はく】 同卷

八。

【初見聞従り云云】

これ華嚴に於ける
一に見聞果の次第、
二に解行生、三に證入
生を指す。

【龍女】 成佛の緣

法華經卷四、提婆
品に出づ。

ち一切を得るに由るが故なり。因果は俱に齊くして前後の別無し。故に『地論』に云はく、
 「信地の菩薩は、乃至不思議の佛法と一縁起と爲るを以て、六相總別等の義を以て、而も用
 ひて之を括る」と。明に知んぬ、因果は俱時にして相容相即す、各一切を攝して、互
 に主伴と爲る、深く須らく之を思うて、此事疑はざるべし。又此經に云はく、「何を以ての
 故に。此初發心の菩薩は、即ち是れ佛なるが故に、悉く三世の諸の如來と等し、亦三
 世の佛境界と等し、悉く三世の佛の正法と等し。如來の一身無量身、三世の諸佛の平等
 の知慧を得、所化の衆生も皆悉く同等なり」と。又云はく、「初發心の時、便ち正覺を成
 じ、其身を具足して、他に由らずして悟る」と。是の如く云云無量なり、廣くは經文の如
 し。問ふ、「此等は因中の徳を數するのみ、豈即ち果徳なるべけんや。」答ふ、「此一乘の義
 は、因果同體にして一縁起を成す、此を得れば即ち彼を得、彼此相即するに由るが故に。
 若し得ずんば、因即ち因を成せず。何を以ての故に。果を得ざるが故に、因に非ざるなり。」
 問ふ、「上に、果分は縁を離れて不可説の相なり。但し因分を論ずと言はば、何が故に十信
 の終心に、即ち作佛得果の法を講するや。」答ふ、「今作佛と言ふは、但し初見聞従り已去、
 乃至第二生に即ち解行を成じ、解行の終心に因位窮滿せる者、第三生に於て、即ち彼究竟
 自在圓融の果を得。此因の體、果に依りて成するに由るが故に。但し因位滿する者、勝進
 して即ち果海の中に没するなり。是れ證の境界爲るが故に、不可説なるのみ。此は龍女及
 び普莊嚴童子、善財童子、兜率天子等の、三生の中に於て、即ち彼果を對する義等の如し、

【普莊：天子】華嚴の三童子。本經卷四盧舍那品、卷四十六以下入法界品、卷三十三小相品に出づ。
【問ふ上に云云】三乘の一念作佛と一乘の信滿成佛の差違を示す。

【四には成ずるなり】四、因陀羅微細境界門を明すこれ帝釋宮の因陀羅網に寄せて重々無盡の緣起を重き彼の網目上の珠玉中に映ぜる、影と影との上に、相入を談ずるものなり【此經に云はく】晋譯本經卷二十六初の文これ一微塵中に、三世間（智正覺、器、衆生）を現するなり。

廣くは經に辨するが如し、應に准じて之を思ふべし。』問ふ、『上に一念即作佛と言ふは、三乘の中に、已に此義有り、此と何の別か有る。』答ふ、『三乘は理に望めて、一念に即ち作佛すと爲す。今此一乘は、一念に即ち一切の教義理事因果等の、如上の一切の法門を具足することを得、及び一切衆生と共に、皆悉く同時同時に作佛し、後後に能く辨じ、新に斷惑して亦學地に住せずして、而も正覺を成ず、十佛を具足して、以て無盡の逆順の德を現するが故に。及び因陀羅微細九世十世等、遍く諸位に通ず。謂はく、十信の終心已去に、十解十行十廻向十地、及び佛地等、同時に遍く成じて、前後有ること無し、一切を具足するのみ。然るに此一念と百千劫と、異有ること無きなり。宜く須らく之を思ふべし。此れ即ち第三の、諸法相即自在門訖んぬ。』

四には因陀羅微細境界門。此は但喻に従ひて前に異なるのみ。此上の諸義、體相自在にして、隱映互に現じて、重重無盡なり。故に此經に云はく、『一微塵の中に於て、各那由他無數億の諸佛、中に於て而も說法することを示す。一微塵の中に於て、無量の佛國、須彌金剛圍を現するに、世間は迫進ならず、一微塵の中に於に、三惡道、天人、阿修羅有りて、各々に業報を受くることを現す』と。此三偈は即ち三世間なり。又云はく、『一切の佛刹微塵等の爾所の佛、一毛孔に坐す、皆無量の菩薩衆有り、各各爲に具に普賢の行を説く、無量の刹海一毛に處す。悉く菩提蓮華座に坐して、一切の諸の法界に遍滿す、一切の毛孔に自在に現す』と。又云はく、『一微塵に示現する所の、一切の微塵も亦是の如し』と。

【又云はく】 同卷三の文。これ一毛孔中に三世間を現すと云ふ。

【又云はく】 同卷七の文。

【如理智・境】 如量の境は、如量智即ち後得智の所照なるも、今は如理智に離れざる如量智の境なる意。

【五には…思ふべし】 五、微細相容安立門。この下、

小は大を、一は多を容れ、而も一多相壞せずして、相入するをいふ。

【此經に云はく】 晋譯華嚴經卷四十二取意の文。

餘は云云無量なり、廣くは經に辨ずるが如し。此等は並に是れ實義にして、變化の成に非ず、此は是れ如理智の中の、如量の境なり。其餘の變化等は、此例に入らず。何を以ての故に。此は並に是れ、法性の實徳法爾として、是の如くなり。諸の分別情謂の境界に非ず。但し此は情を去けて之を思ふべし。問ふ、「上一塵の中に、無量刹等を現すと云はば、此は但是れ一重の現なるのみ、何が故に乃ち重重に現すと云ふや。」答ふ、「此方に『華嚴經』を説く時、一切微塵の中にも、並是の如く説くと云ふ、彼微塵の中に『華嚴經』を説く時の如く、亦一切微塵の中にも、亦是の如く説くと云ふ。是の如く展轉して、即ち重重無盡重重無盡なり、宜しく准じて之を思ふべし。」問ふ、「若し此文に據らば、重重無盡なり、何の分齊有りてか、云何が其始終等を辨ずるや。」答ふ、「其智に隨ひて取る、一を擧げて首と爲せば、餘は亦伴と爲る。其首に據らば即ち當中に名く、餘は即ち眷屬にして圍繞せり、上の諸の教義等、並に悉く是の如く、自在に成ずるのみ。及び前の相即相入自在等、皆悉く是の如し、一切の法を攝し、法界を盡窮して、並に悉く因陀羅のごとくに成ずるなり。」

五には微細相容安立門。此上の諸義、一念の中に於て、始終、同時、前後、逆順等の一切の法門を具足して、一念の中に於て、炳然として同時に頭を齊くして顯現して、明了ならざることを無し、猶し束箭の、頭を齊くして顯現するが如きのみ。故に此經に云はく、「菩薩は、一念の中に於て、兜率天從り神を母胎に降し、乃至舍利を流通して、法住の久近、

【又云はく】同卷三の文。次亦同じ

【六には…思ふべし】六、秘密隱顯俱成門。隱と顯と同時に並び存して相離れず、相即するをいふ。
【此經に云はく】晋譯本經卷七の文

【又經に云はく】同卷六の文。

【第一の錢の中の十錢】これ同體門の十錢。

及び益を被る所の諸の衆生等、一念の中に於て、皆悉く顯現す」と。廣くは經文の如し。又云はく、「一毛孔の中に、無量の佛刹莊嚴清淨にして、曠然として安住す」と。又云はく、「一塵の内に於て、微細の國土あり、一切の塵等、悉く中に於て住す」と。宜しく理の如く之を思ふべし。問ふ、「此義と上の因陀羅と、云何が別なるや。」答ふ、「重重隱映して互に現するは、因陀羅の攝なり、頭を齊くして、炳然として現するは、微細の攝なり。此等の諸義は、並に別にして不同なり、宜く細かに之を思ふべし。」六には秘密隱顯俱成門。此上の諸義は、隱顯俱成時に成就するなり。故に此經に云はく、「此方に於て正受に入りて、他方にして三昧より起つ。眼根に正受に入りて、聲塵に三昧より起つ」と云云。「一微塵に於て正受に入りて、一切の微塵に三昧より起つ。一切の微塵に正受に入りて、一毛端頭に三昧より起つ」と。是の如く自在にして、此に隱れ、彼に顯る、正受及び起定、同時秘密にして成ず。又此經に云はく、「十方世界に緣有るが故に、往返出入して衆生を度す。或は菩薩は正受に入るを見、或は菩薩、定従り起つを見る。又彼十方世界の中に於て、念念に正覺を成じ、正法輪を轉じて涅槃に入り、現に舍利を分ちて、衆生を度することを示現す」と。是の如く無量なり、廣くは經に辨ずるが如し。又佛、諸の菩薩の爲に、之を受記する時の如きは、或は現前受記、或は不現前秘密受記等なり。上の第一の錢の中の十錢を、名けて顯了と爲し、第二の錢を、第一の錢の中の十に望めて、即ち秘密と爲すが如し。何

【七には…すべし】
七、諸藏純雜具德門。諸法が能藏、所藏となり、而も一を純と名け、一を雜と名く。かく差別然たるものなれば、其德をいふ。

【八には…思ふべし】
八、十世隔法異門。十世前は横に緣起法を説くに對し、今は豎に十世各別なる者相即入して、前後長短を失はざるを示す。

【故に此經】
本經卷三十一、取意の文。

を以ての故に。此を見て彼を見ざるが故に。相知らざるが故に。相知見せずと雖も、然も即ち此れ成すれば、彼成ず、故に俱成と名くるなり。應に是の如く、准じて之を思ふべし。

七には諸藏純雜具德門。此上の諸義、或は純、或は雜、前の人法等の如きは、若し人門を以て取れば、即ち一切皆人なるが故に、名けて純と爲す。又即ち此人門に、具に理事等の一切の差別の法を、含むが故に雜と名く。又菩薩の如きは、一三昧に入りて、唯布施を行すること、無量無邊にして、更に餘行無きが故に、純と名く。或は一三昧に入りて、即ち施度生等の、無量無邊の諸餘の雜行、俱時に成就するなり。是の如く法界に繁興して、純雜自在にして、具足せざること無き者なり、宜しく思うて之に准すべし。八には十世隔法異成門。此上の諸義は、十世の中に過じて、同時別異具足して顯現す。時と法、相離れざるを以ての故に。十世と言ふは、過去、未來、現在の三世に、各各過未及び現在有り、即ち九世と爲すなり。然も此九世迭に相即入するが故に、一の總句を成ず、總と別と合して十世を成するなり。此十世は別異を具足して、同時に顯現して、緣起を成するが故に、即入することを得るなり。故に此經に云はく、「或は長劫を以て短劫に入れ、短劫を長劫に入る。或は百千大劫を一念と爲し、或は一念を即ち百千大劫と爲す。或に過去劫を未來劫に入れ、未來劫を過去劫に入る。是の如く自在に、時劫無礙にして相即入し、渾融して成す」と。又此經に云はく、「一微塵の中に於て、普く三世一切の佛刹を現す」と。又云はく、

【九には…思擇すべし】九、唯心廻轉善成門。これ縁起の本たる心に就いて明す。

【但し性起…異なる】これ眞如自性のままの轉變、染淨に通じ、三乘の眞如隨縁とは異れり。

【十には…思へ】十、託事顯法生解門。雲等の差別の事相に託して、教義理事等差別の法相を顯し、而も喩即法なるを示す義門なり。

【十種の寶王雲】晉譯本經卷三に説く。

【潤益の故に】法の、人を利益し潤益するをいふ。

【資澤の故に】法は利益を及ぼす利益を含むを、雲の雨を含むに例す。

「一微塵の中に於て、普く三世の一切の諸佛の佛事を現す」と。又云はく、「一微塵の中に於て、三世の一切の佛法輪を建立す」と。是の如く云云無量なり、廣くは經文の如し。此は普く上の諸の義門を攝して、悉く十世の中に於て自在にして現するのみ、宜しく之を思ふべし。九には唯心廻轉善成門。此上の諸義は、唯是れ一如來藏自性清淨心の轉なり。但し性起の具徳なるが故に、三乘に異なるのみ。然るに一心も亦十種の徳を具足す。性起品の中に、十心の義を説く等の如きは、即ち其事なり。十を説く所以は、無盡を顯さんと欲するが故に。是の如く自在に無窮の種種の徳を具足するのみ。此上の諸の義門は、悉く是れ此心の自在の作用にして、更に餘物無きが故に、唯心廻轉等と名く、宜しく之を思擇すべし。十には託事顯法生解門。此上の諸義は、隨ひて別事に託して、以て別法を顯す。謂はく、諸の理事等の一切の法門なり。此經の中に、十種の寶王雲等の事相を説くが如きは、此れ即ち諸の法門なり。上の諸義の貴ぶべきことを顯すが故に、寶を立てて以て之を標し、上の諸義の自在なるを顯すが故に、王を標して以て之を顯し、上の諸義の潤益を表するが故に、資澤の故に、斷齋の故に、雲を以て之を標す。是の如き等の事云云無量なり。經の如く之を思へ。問ふ、「三乘の中に、以て此義有り、此と何んが別なる。」答ふ、「三乘は異事の相に託して、異理を表顯す。今此一乘所託の事相は、即ち是れ彼所顯の道理にして、更に異なること無し、一切の理事教義、及び上の諸の法門を具足して、攝し盡さずといふこと無き者なり。宜しく理の如く之を思ふべし。」此上の十門等の解釋、及

【斷斷の故に】龍のハゲキの肉の重さなり合ふ如く、雲は重なり合ふを、法門の重重なるに喩ふ。

【唯かに在り】如上の義理を諦かに觀察するは、三生中の解行、見聞の二生に於てするをいふ。餘とは三乗の意、今は省くを著しとす。

【上來明す】唯思すべし。十玄緣起無礙法門義を結ぶ【或は同、或は異】遮情破執は三乘に同じ、表德顯法は彼に異る。

【所因、所設、方便云云】三乗が、一乗の爲の所因、所設方便の意。

【經論…問答】本經、十地論、探玄記等、孔目章、五十要問答。

【佛に云はく】普賢十行卷七の偈。【又前に云はく】同卷二十六初の偈。

び上の本文の十義等、皆悉く同時に會融して、一法界緣起具德門を成ず、普眼の境界なり。諦に餘を觀察する時は、但大解大行大見聞心の中に在り。然も此十門、一門の中に隨ひて、即ち餘門を攝して、皆盡さすといふこと無し、應に六相の方便を以て、而も之を會通すべきこと、此に准すべし。

上來明す所は、並に是れ略して、別教一乗の緣起の義を顯すのみ。又其中に於て、諸餘の法相及び問答除疑等は、彼三乗と或は同、或は異なり。所因所設方便と爲る等、廣くは經論、疏鈔、孔目、及び問答の中、彼に於て釋するが如し。彼三乗と全く別にして同じからず、宜しく思ふべし、廣くは『華嚴經』の、普眼境界に依りて、之に准ぜよ。問ふ、此上の道理と彼三乗と、義別にして不同なること、此を信すべし。又何なる文證を以てか、三乗の外に、別に一乗有ることを知るや。答ふ、此經に誠文有り、故に偈に云はく、一切世界の群生類、聲聞の道を欲求するもの有ること尠く、緣覺を求むる者轉た復少し、大乘を求むる者、甚だ希有なり。大乘を求むる者は難易しと爲す、能く是法を信するもの甚だ難しと爲す」と。良に此法は、情を出でて、信じ難きに由りて、是故に聖者、彼三乗を

特て、對比して之を決す。又偈に言はく、「若し衆生下劣にして、其心を厭洩せる者には、示すに聲聞の道を以てして、衆苦を出さしむ。若し復衆生有りて、諸根少く明利に、因縁の法を樂ふには、爲に辟支佛を説く。若し人、根明利にして大慈悲心有りて、衆生を饒益するには、爲に菩薩の道を説く。若し無上心有りて、決定して大事を樂ふには、爲に佛身

するには、爲に菩薩の道を説く。若し無上心有りて、決定して大事を樂ふには、爲に佛身

【大慈悲云云】大正藏經には、衆生利益の句と此句轉倒す。

【〇〇】以下、六相の圓融を明す。六相の總別、同異、成壞の三對を六相と成融の義を平易に説明せるものなり。初に列名す。

を示して、無盡の佛法を説く」と。此一乘は下機の、堪受するに非ざるに由りて、是故に大聖善巧をもつて、彼三乘位の中に於て、其機欲に隨ひて、方便して少く説く。法界の源を窮めざるに由るが故に、權に二身三身等の佛を顯す。今是の如き無上心の機の、大事を樂ふが爲に、方に始めて佛の十身の境界を顯して、窮盡無き佛法を説かんと欲ふを、佛身を現じて、無盡の法を説くと名くべきなり。三乘は但機に隨ふのみ、未だ諸佛の十身の自境界を、顯さざるが故に、佛身を現するに非ず。又機に隨ひて少く、一相、一寂、一味の理等を説く、故に窮盡の説に非ざるなり。何を以ての故に。三乘は此無窮を以て、過失と爲すが故に。然るに此一乘は、無窮を以て實徳と爲すが故なり。又此經に云はく、「一世界の中に於て、一乘を説く音を聞く。或は二三四五乃至無量乘有り」と。此は本末分齊に據りて説くのみ。聖教の文義顯然たり、執情を以て而も驚き恠むべからざる者か。

六相圓融義第四

六相緣起は三門をもて分別す。初には名を列ね略して釋し、二には教興の意を明し、三には問答をもつて解釋す。初に列名とは、謂はく、總相、別相、同相、異相、成相、壞相なり。總相とは一に多徳を含むが故に。別相とは多徳は一に非ざるが故に。別は總に依止して彼總を滿するが故に。同相とは多義相違せず、同じく一の總を成するが者に。異相とは多義相望するに各各に異なるが故に。成相とは此諸義に由りて緣起成するが故に。壞相とは諸義

【第二に：如し】次に六相なる教の興起を明す。
 【一乘圓教：事等】以下十支緣起を詳く列擧す。
 【無盡圓融】法界緣起の相。
 【自在相即】緣起法の體の空有に就き、諸法相即自在門に當る。
 【無礙容持】緣起法の用の有力無力に就き一多相容不同門に當る。
 【乃至：纏】因陀羅微細境界門に當り、乃至は餘の七門を含む。
 【九世十世の滅を得】智現在一念九惑を斷ぜば、即九世十世の惑斷ずればなり。
 【理性は：顯】既に能證の智德顯現す、故に所證の理一顯一切顯なり。
 【普別具足】圓融を論ずるも、次第階級淺深歴然の別たる行動門を覆へ

各自法に住して移動せざるが故に。第二に教興の意とは此教は一乘圓教法界緣起、無盡圓融自在、相即無礙容持、乃至因陀羅無窮の理事等を顯さんが爲なり。此義現前すれば一切の惑障は一斷一切斷にして九世十世の滅を得、行徳は即ち一成一切成、理性は即ち一顯一切顯なり。並に普別具足し始終皆齊くして、初發心の時に便ち正覺を成ず。良に此の如きの法界緣起、六相容融、因果同時相即自在にして逆順を具足するに由る、因は即ち普賢の解行及び證入、果は即ち十佛の境界、所顯無窮なり、廣くは『華嚴經』に説くが如し。

第三に問答解釋とは、然るに緣起法は一切處に通ず。今日らく略して、緣起成の舍に據りて辨すべし。問ふ、『何者が是れ總相なる。』答ふ、『舍是なり。』問ふ、『此は但緣等の諸緣なり、何者が是れ舍なるや。』答ふ、『緣即是れ舍なり。何を以ての故に。緣は全に獨り能く舍を作るが爲の故に。若し緣を離れては、舍は即ち全に成ぜざるが故に。此に爲て若し緣を得るの時、即ち舍を得。』問ふ、『若し緣全に自ら獨り舍を作らば、未だ瓦等有らざる、亦應に舍を作るべきや。』答ふ、『未だ瓦等有らざる時には、是れ緣ならざるが故に、作らず、是れ緣にして而も作ること能はずと、謂はんとは非ず。今作ると言ふは、但緣能く作ることを論ず、緣に非ずして作るとは説かず。何を以ての故に。緣は是れ因緣なり、未だ舍を成ぜざる時は、因緣無きに由るが故に、是れ緣に非ざるなり。若し是れ緣ならば、其れ畢に全に成ず。若し全に作らずんば、名けて緣と爲じ。』問ふ、『若し緣等の諸緣、各少力を出して、共に作りて全に作らずんば、何の過失か有る。』答ふ、『斷常の過有り。若

【第三に問答云云】六段十八問答を以て、六相の義を明かにす。
【若し全に：在るべし】若し椽が全成ならず、分成本とせんか、一椽を去るも全舍残存すべしといふ。
【問ふ云云】以下板瓦等と椽との相即を説く。

【第二に：常なり】前は別即總の總相を明し、今は總即別の別相を明す。
【別とは：別と爲すなり】總の舍を離れて、別の柱椽無き故に、舍を以て柱椽即ち別相とす。

し全に成ぜずして、但少力ならば、諸縁各各少力ならん。此れ但多箇の少力にして、一の全舍を成ぜざらん、故に是れ斷なり。諸縁並に少力にして、皆全に成ずること無らんを、全舍有りとは執せば、因無くして有なるが故に、是れ其れ常なり。又若し全に成ぜずんば、一の椽を去却せん時、舍應に猶成じて在るべし。舍既に全に成ぜず、故に知んぬ少力に非ず、並に全に成ずるが故に。』問ふ、『一の椽無き時、豈かに非ずや。』答ふ、『但是れ破舍にして好舍無きなり。故に知んぬ、好舍は全に一の椽に屬す。既に一の椽に屬す、故に知んぬ、椽即ち是れ舍なり。』問ふ、『既に舍即ち是れ椽ならば、餘の材瓦等は、應に即ち是れ椽なるべしや。』答ふ、『總じて並に是れ椽なり。何を以ての故に。椽を却くれば、即ち無きが故に。然る所以は、若し椽無くんば、即ち舍壞る、舍壞るるが故に、材瓦等と名けず、是故に材瓦等は即ち是れ椽なり。若し即せずんば、舍は即ち成ぜざらん。椽瓦等は並に皆成ぜず。今既に並に成ず、故に知んぬ、相即するのみ。一の椽既に爾なり、餘の椽例して然なり。是故に一切の縁起の法は、成ぜずんば即ち已なん、成ぜば即ち相即容融して、無礙自在回極難思にして、情量を出過せり、法性縁起、一切處に通ずること准知すべし。

第二に別相とは、椽等の諸縁、總に別するが故に。若し別ならずんば、總の義は成ぜざらん。別無き時は、即ち總無きに由るが故に。此義云何。本別を以て總を成す、別無きに由るが故に、總成ぜざるなり。是故に別とは、即ち總を以て別と爲すなり。問ふ、『若し總即ち別ならば、應に總を成ぜざるべしや。』答ふ、『總即ち別なるに由るが故に、總を成す

【第三に：常なり】
三に同相を明す。
椽等、舍を作る事
に於て、同じきが
故にいふ。

【第四に：常なり】
四に異相を明す。
今、椽等は各自性
を守り、形體を殊
にするを異相とい
ふ。初に同相と異
相の相即を説く。

ることを得、椽即ち是れ舍なるが故に、總相と名くるが如し、舍即ち是れ椽なるが故に、別相と名く。若し舍に即せずんば、是れ椽にあらじ、若し椽に即せずんば、是れ舍ならじ、總別相即、此れ之を思ふべし。』問ふ、『若し相即せば、云何が別と説くや。』答ふ、『只相即するに由りて、是故に別を成ず。若し相即せずんば、總は別の外に在るが故に、總に非ざるなり。別は總の外に在るが故に、別に非ざるなり、之を思うて解すべし。』問ふ、『若し別ならずんば、何んの過か有るや。』答ふ、『斷常の過有り。若し別無くんば、即ち別の椽瓦無からん、別の椽瓦無きが故に、即ち總舍を成せざるが故に。是れ斷なり。若し別の椽瓦等無くして、以て而も總舍有らば、因無くして舍有るが故に、是れ常なり。』第三に同相とは、椽等の諸椽和合して舍を作る、相違せざるが故に、能く舍の緣と名く。餘物を作るに非ざるが故に、同相と名くるなり。問ふ、『此と總相と、何んが別なるや。』答ふ、『總相は唯一舍望めて説く、今此同相は、椽等の諸椽に約す。體は各別なりと雖も、成力なりの義は齊きが故に、同相と名くるなり。』問ふ、『若し不同ならば、何の過か有るや。』答ふ、『若し不同ならば、斷常の過有るなり。何んとならば、若し不同ならば、椽等の諸椽互に相違背して、同じく舍を作らざらん、舍有ることを得ざるが故に、是れ斷なり。若し相違して舍を作らざるに、而も舍有り執せば、因無くして舍有るが故に、是れ常なり。』第四に異相とは、椽等の諸椽、白の形類に隨ひて、相差別するが故なり。問ふ、『若し異ならば、應に不同なるべしや。』答ふ、『只異なるに由るが故に所以に同なるのみ。若し異なら

【椽既に丈二云云】椽一丈二尺あるも五丈二なるべきに非ず、これ自相を失し舎を成ぜず

【第五に：常なり】五に成相を明す。今椽等を舎に望めて成相といふ。

すんば椽既に丈二なり、瓦應に亦爾るべし、本縁の法を壊するが故に、前に齊しく同じく舎を成ずるの義を失するなり。今既に舎を成ず、同じく縁と名くるは當に知るべし異なるなり。』問ふ、『此と別相と何の別か有るや。』答ふ、『前の別相は但椽等の諸縁、一舎に別するが故に別相と説く。今の異相とは椽等の諸縁交互に相望めて各各に異なるが故なり。』問ふ、『若し異ならずんば何んの過か有る。』答ふ、『斷常の過有り。何んとなれば若し異ならずんば瓦は即ち椽に同じて丈二ならん。本縁の法を壊して舎を成ぜざるが故に是れ斷なり。若し縁を壊して舎を成ぜざるに、而も舎有りと執せば舎は因無きが故に是れ常なり。』

第五に成相とは、此諸縁に由りて、舎の義を成ずるが故に、舎を成ずるに由るが故に、椽等を縁と名く。若し爾らずんば、二俱に成ぜざらん、今現に成ずることを得るが故に知んぬ、成相なるのみ。問ふ、『現に椽等の諸縁を見るに、各自法に住して、本より舎を作らず、何に因りてか舎の義、成ずること有るを得るや。』答ふ、『只椽等の諸縁、作らざるに由るが故に、舎の義成ずることを得。然る所以は、若し椽は、舎を作り去らば、即ち本縁の法を失するが故に、舎の義は成ずることを得ず。今作らざるに由るが故に、椽等の諸縁現前す。此れ現前するに由るが故に、舎の義成ずることを得。又若し舎を作らずんば、椽等を縁と名けず、今既に縁の名を得たり、明かに知んぬ、定んで舎を作るなり。』問ふ、『若し成ぜずんば、何の失か有る。』答ふ、『斷常の過有り、何んとなれば、舎は本椽等の諸縁に依りて成ず、今既に並に作らずんば、舎有ることを得じ、故に是れ斷なり。本舎を成

【第六に：云云】
六、眞相を明す。
今緣等は各自性を
守りて、舍を作ら
ざるをいふ。
【問ふ云云】 壞相
即成相なるを説き
本義を述す。

【又總は云云】 舍
に就いて六相を略
説し、頌を以て結
ぶ。

【華嚴…卷中】 一
十、卷中之三卷に
一本卷四に作る。

するを以て、名けて緣と爲す、今既に舍を作らざるが故に、即ち緣無からん、亦是れ斷なり。若し成ぜずんば、舍は因無くして有るが故に、是れ常なり。又緣は舍を作らざるに、緣の名を得ば、亦是れ常なり。第六に壞相とは、緣等の諸緣、各自自法に住して、本作らざるが故に。問ふ、現に緣等の諸緣を見るに、舍を作りて成就す、何が故に乃し本作らずと説くや。答ふ、只作らざるに由りて、舍の法を成ずることを得、若し舍を作り去りて、自法に住せずんば、舍の義即ち成ぜじ。何を以ての故に。作り去らば法を失して、舍成ぜざるが故に。今既に舍を成ず、明かに知んぬ、作らざるなり。問ふ、若し作り去らば、何んの失か有る。答ふ、斷常の二失有り、若し緣作り去ると言はば、即ち緣の法を失せん。緣の法を失するが故に、舍は即ち緣無くして、有ることを得じ、故に是れ斷なり。若し緣の法を失して、而も舍有らば、緣無くして有なるが故に、是れ常なり。又總は即ち一舍、別は即ち諸緣、同は即ち互に相違せず、異は即ち諸緣各別、成は即ち諸緣界を辨す。壞即ち各自自法に住す。乃ち頌を爲りて曰はく、

一に即ち多を具するを總相と名く、多は即ち一に非ず是れ別相なり

多類に自同して總を成ず、各各體別異にして同を顯す

一多緣起理妙に成ず、壞は自法に住して常に作さず

唯智の境界にして事識に非ず、此方便を以て一乘に會す

華嚴一乘教分記卷中

【華嚴：卷下】宋本は華嚴一乘教義分齊章卷第二に作る。一本は卷下の二に作る。

【一】以上は能詮の教の差別を明せるが故に所詮の法義即ち教判の内容を詳説す。

【二】十門の中、第一に心識差別を明す。

【小論】 俱舍論卷四。

【增一經云云】 增一阿含經に、愛樂欣喜の四阿頼耶を説けり。

【阿頼耶云云】 阿頼耶識を生滅現象界の根本所依とし眞如を全く不變の一面を説いて、隨縁の他面あるを知らずといふ。

華嚴經中一乘五教分齊義 卷下

法藏撰す

第十に諸教所詮差別とは、略して十門の義差別を擧ぐるが故に、彼能詮の差別一に非ざることゝ顯する、餘は別に説くが如し。

一には所依心識 二には佛種性を明し 三には行位の分齊 四には修行の時分 五には修行の身 六には斷惑の分齊 七には二乘の廻心 八には佛果の義相 九には攝化の境界 十には佛身の閉合

【一】第一に心識の差別とは、小乘論の如きは、但し六識有り、義をもつて心意識を分つ、小論に説くが如し。阿頼耶識に於ては、但其名のみを得たり、『增一經』に説くが如し。若し始に説くが如し、阿頼耶に於て、但し一分生滅の義を得たり。眞理に於て未だ融通すること能はざるを以て、但し凝然として諸法を作らずと説く。故に緣起生滅の事の中に就いて、阿頼耶を建立す。業等の種に從ひて、體を辨じて而も生ず。異熟報の識として、諸法の依となる、方便して漸漸に、眞理に引向す、故に薰等悉く皆即空なりと説く。『解深密經』に云ふが如し、「若し菩薩、内に於て外に於て、藏住を見ず、薰習を見ず、阿頼耶を見ず、阿頼耶識を見ず、阿陀那を見ず、阿陀那識を見ず。若し能く是の如く知る者を、是を善

【内：外】 六根六

【藏住】 八識所重

【薰習を見ず】 七

【阿頼耶：見ず】 七

【阿陀那：見ず】 七

【業等】 唐本に「業

【如來：建立す】 作

【佛空理を根本とし

【瑜伽論】 卷七十

【若し終教云云】

【前教の：故に】

【楞伽】 四卷楞伽

【無始惡習】 根本

【又云はく】 同經

卷二、

巧菩薩と名く。如來、此に齊りて、一切の心意識の、祕密善巧を建立す」と。「瑜伽」の中、亦此説に同す。解して云はく、既に此不見等の處に齊りて、心意を立つるの善巧と爲すが故に、是故に所立の頼耶生滅等の相は、皆是れ密意なり、言の如く取らしめざるが故に、會して眞に歸するなり。若し終教に依らば、此頼耶に於て、理事通融の二分の義を得たり。故に「論」に云はく、「不生不滅と生滅と和合して、非一非異なるを、阿梨耶識と名く」と。眞如は薰に隨ひて、和合して此本識を成すと許すを以て、前教の義等より生ずといふに同じからざるが故に。是故に「楞伽」に云はく、「如來藏は無始惡習の爲に、薰せらるるを、名けて識藏と爲す」と。又云はく、「如來藏は苦樂を受けて、因と俱に若し生じ、若しは滅す」と。又云はく、「如來藏を阿頼耶識と名く、而も無明七識と俱なり」と。又「起信論」に云はく、「自性清淨心は、無明の風に囚りて、動じて染心を成する」と。是の如く一に非ず。問ふ、眞如は既に常法と言ふ、云何が薰に隨ひて、起滅すと説くことを得るや。既に起滅すと許さば、如何が復説いて、凝然常と爲すや。答ふ、「既に眞如常固と云ふ、如言所謂の事常には非ず。何んとなれば、聖は眞如を説いて、凝然と爲すこととは、此は是れ隨縁して諸法と作る時、自體を失せず、故に説いて常と爲す、是れ則ち無常に異ならざるの常を、不思議常と名く、諸法を作らざる、如情所謂の凝然と、謂はんとに非ざるなり。故に「勝鬘經」の中に「不染にして染」とは、隨縁して諸法を作ること

を明す。「染にして不染」とは、隨縁の時自性を失はざることを明す、初の義に由るが故に、

【論】 梁の攝大乘論卷一。

【智障】 所知障、即ち眞理を照見する智を障ふ。

【又十地經云】

以下、諸經論を會通して上の二教の相違を明す。

【攝論】 卷八。

【攝論】 卷一。

【此界等とは】 無始よりこのかたの界なり、一切法等の依」等の佛の釋。

【三十二菩薩云云】 菩薩の言説を以て示せる所は、これ終教位の所明。維摩詰不二の法門は頓教の正所説なるをいふ。

【若し圓教云云】 別乘一乘を明す。

【性海圓明】 性海

界縁起無礙自在、一即一切、一切即一、主伴圓融なり。故に十心を説いて、以て無盡を顯

俗諦を成ずることを得、後の義に由るが故に、眞諦復立す。是の如きの眞俗は、但二義のみ有りて、二體有ること無し、相融無礙にして、諸の情執を離れたり。是故に『論』に云はく、「智障極めて音聞なるもの、眞俗を謂うて別執す」と、此れ之謂なり。此眞如の二義の内に、前の始教の中には、法相差別門に約するが故に、但一分礙然の義を説けり。此終教の中には、體相鎔融門に約するが故に、二分不二の義を説く、此義は廣く起信の『義記』の中に、記するが如し。』又『十地經』に三界虛妄唯一心と云ふが如きを、『攝論』等には始教に約して、釋して頓耶識等と爲すなり。『十地論』には終教に約して、釋して第一眞心と爲すなり。又『達磨經』の頌の如きを、『攝論』等に釋して云はく、「此界等とは、界は謂はく因の義、即ち種子識なり」と、是の如き等なり。『實性論』には終教に約して、釋して云はく、「此性とは謂はく、如來藏性なり、依此有諸趣等とは、聖者『勝鬘經』に説くが如し。如來藏に依りて生死有り、如來藏に依りて涅槃有り」等と、乃至廣説す。是故に當に知るべし、二門別なり。若し頓教に依らば、即ち一切の法は、唯一眞心なり、差別の相盡きて、離一切絶慮不可説なり。『維摩經』の中の、三十二の菩薩の所説の、不二の法門の如きは、即ち是れ前の終教の中の、染淨鎔融無二の義なり。淨名所顯の離言の不二は、是れ此門なり。其一切の染淨の相盡きて、二法として以て、融會すべきこと有ること無きを以ての故に、不可説を不二と爲すなり。若し圓教に依らば、即ち性海圓明に約す。法界縁起無礙自在、一即一切、一切即一、主伴圓融なり。故に十心を説いて、以て無盡を顯

は體を示し、圓明は徳相を示し、共に法體をいふ。

【若し同教云云】

上述の四教の心識は、同教に攝すと便なると共に、別教所流のものなる故に。

【一には法に：收め】

五教の當分は差別して説くも、法體に於ては通じて五義を收むる意を攝め名を顯して説く。

【攝義從名門】

攝理從事門】如来藏不生滅の理を生滅の事の中に攝めて説く。

【理事無礙門】

安和合して不二非の阿彌耶を説く【事盡理顯門】差別の事相盡きて、一心眞如顯現する」と説く。

【性海具徳門】

起の一心に、無盡の義を具すと説く【唯識章】 孔日章

す。『離世間品』及び第九地に説くが如し。又唯一法界性起の心に亦十徳を具す、『性起品』に説くが如し。此等は別教に據りて言ふ。若し同教に約せば、即ち前の諸教に明す所の、心識を攝す。何を以ての故に。是は此れ方便なるが故に。此後り而も流するが故に。餘は之に准すべし。問ふ、云何が一心、諸教に約就して、是の如きの差別の義、有ることを得るや。答ふ、一此に二義有り。一には法に約して通じて收め、二には機に約して分齊をいふ。初の義とは、此甚深緣起の一心に、五義門を具するに由りて、是故に聖者、隨ひて一門を以て衆生を攝化す。一には攝義從名門、小乘に説くが如し。二には攝理從事門、始教に説くが如し。三には理事無礙門、終教に説くが如し。四には事盡理顯門、頓教に説くが如し。五には性海具徳門、圓教に説くが如し。是れ則ち本を動せずして、常に末なり、末を壞せずして、而も恒に本なり、故に五義相融して、唯一心に轉するなり。二には機に約して得法の分齊を明せば、或は名を得て而も義を得ざる有り、小乘の如し。或は名を得て一分の義を得る有り、始教の如し。或は名を得て、具分の義を得る有り、終教の如し。或は義を得て、而も名を存せざる有り、頓教の如し。或は名義俱に無盡なる有り、圓教の如し。其餘の義門は、『唯識章』に記するが如し。』

第二に種性に差別を明すとは、若し小乘に依らば、種性に六有り。謂はく、退と、思と、護と、住と、昇進と、不動となり。不動性の中に三品有り、上は佛種性、中は獨覺性、下は聲聞性なり、舍利弗等の如し。此中に於て、佛一人のみ佛種性有りと説くと雖も、然

は聲聞性なり、舍利弗等の如し。此中に於て、佛一人のみ佛種性有りと説くと雖も、然

の同章をいふ。
 【三】以下、種姓の差別を明す。種姓の第四阿羅漢に、退法、思進法、護法、住法、異進法、不動法、雜漢を分ち、この不動法の中に三種を分つ。
 【大菩提性】性徳の佛性即ち大乘の佛性なり。
 【三乘教云云】始教の種性を明す。初に法爾説。
 【五種性】一、菩薩定性。二、緣覺定性。三、聲聞定性。四、不定性。五、無情有情。これ無漏種子の具不具に就いて分つ。
 【其有種性云云】以下、有種性説を説く。
 【瑜伽論】卷三十
 【本種性】本有無漏の種性。
 【習所成】しほしば修習して成ずる有漏開重種子。

も是れ彼大菩提性に非ず。佛の功徳に於て、未來際を盡して、大用等を起すと、説かざるを以ての故に。是故に當に知るべし。此教の中に於ては、佛一人を除いて、餘の一切衆生には、皆大菩提性有り」と説かず、餘の義は小論に説くが如し。

三乘教に依らば、種性の差別に略して三説有り。一には始教に約す。即ち有爲無常の法の中に就いて、種性を立つるが故に。則ち一切の有情に遍すること能はず。故に五種性の中に、即ち一分無性の衆生有り。故に、「顯揚論」に云はく、「云何が種性差別に五種の道理有る。一切の界の差別得べきが故に。乃至云はく、「現在世のみ般涅槃の法に非ず、理に應ぜざるが故に」と、乃至廣く説く。是故に當に知るべし、法爾に由るが故に、無始の時より來、一切有情に五種性有り。第五の種性には、出世切徳の因、有ること無きが故に、永く滅度せず、是道理に由りて、諸佛の利樂有情の功徳、斷盡有ること無し。其有種性とは、

「瑜伽論」に云ふが如し、「種性に略して二種有り。一には本性住、二には習所成なり。本性住とは、謂はく、諸の菩薩の六處殊勝に、是の如きの相有り。無始世從り展轉傳來して、法爾に得る所なり。習所成とは、謂はく、先に善根を串習して得る所なり」と。此中の本性といふは、即ち内の六處の中に、意處を殊勝と爲す。即ち頼耶識の中の、本覺の解性を攝して、種性と爲す。故に、梁の「攝論」に云はく、「聞薰習と阿梨耶識の中の解性と和合せり、一切の聖人は、此を以て因と爲す」と。然るに「瑜伽」に、既に種性を具する者、方に能く發心すと云ふ、即ち知んぬ、性習の二法を具して、一の種性を成すといふことを。

【本種性】本有無漏の種性。
 【習所成】しほしば修習して成ずる有漏開重種子。

【聞熏習…和合せり】一體の上の義にて、本性住が開重習に由りて増上すといふ。
 【堪任】十倍の満位。
 【問…六云】以下經論の性種、習種の相違を會通す

【論】 瑜伽論。

是故に此二緣起は不二にして、隨ひて闡すれば成ぜず、亦性を先と爲し、習を後と爲すと、説くべからず、但し位は堪任に至りてより、以去を、方に本に約して性種有りと言き、修に約して説いて、習種と爲すと可ふべし。然るに二義有りて而も二事無し、上の『攝論』の二義和合して一因と爲るが如し。故に知ることを得るなり。問ふ、『此二種性と二仁王』及び『本業經』の中の、六種性の内の習種と性種と、何んの別か有るや。答ふ、『彼經は大都は位に約して説く、初習を以て習種と爲し、久習積成を性種と爲すが故に、習種は十住に在り、性種は十行に在りと説く。三賢の前をば、但し善趣と名けて、種性と名けず。『瑜伽論』の中には、久習を習種と爲し、本に約して性種と爲す。而も此二種は、初に非ず中に後には非ず。是故に經に、『習の故に性を成ず』と説き、『論』の中には、説いて『性に依りて習を起す』と爲す。良に、いれば、此二は互に緣起を成じて、二相無きが故に、經論互に説いて、義方に備足す。又經には種性は發心の後に在りと説き、『論』の中には、種性は發心の前に在りといふ。何を以てか爾るとならば、其れ位を得るの時に至りて、功能方に顯るを以て、是故に經には三賢の位の中に在りと説く。然るに彼功能は、必ず所依有り、是故に『論』の中には、位の前に在りと説く、要す功能顯るるに由りて、方に有りと言くべきが故に、經、論に違せず。要す性有るに由りて、方に功能を起すが故に、論は經に違せず。亦是れ互に擧げて、義意融通す。問ふ、『又何の義を以てか、種性は堪任の位に至ると、説くことを知るや。』答ふ、『論』に種性は必ず、性習を具すと説くを以て、既に已

【得位以去…故に】菩薩に十三位ある中、第一住は種住(十信位)第二住は勝解行住(十位)第三乃至第十位は十地、第十三位を如來住とす【問、云云】以下性習の二、緣起同時なるを明し、並に五性各別論を評す。

【問ふ若し云云】以下、修行の位に就いて、五性を假立するを明す。【智論】大智度論卷七十五。【若し世第一名】四善根の第四を、第二行とする故に、第三を第一種性住とす。

に習有れば、必ず已に修行す。若し已に修行して、必ず堪任に至る。若し愚夫從り堪任に至る以來、中間に此串習の行を修せずんば、更に何の位にか修せんや。愚位に於て未だ修習せざるを以ての故に。得位以去は是れ、第二住なるが故に。是故に當に知るべし、愚位從り來、串習の行を修して、彼堪任に至りて、串習方に成ず。故に性習融通することを得て、以て種性と爲す。問ふ、『若し要す習を待ちて、方に性を説かば、愚位には未だ習あらず、豈性種無からんや。如し其れ無ならば、後に有るべからず、先無後有は、性種に非ざるが故に。如し其れ有ならば、習無くして性有らんこと、理に應ぜざるが故に。論』に説かざるが故に。答ふ、『此二既に緣起を爲す、故に習無き時は亦彼性無し、此に由りて亦無性有情を立つ。先無後有は性種に非ずとは、此れ亦然らず、習成する處を以て、定んで先より性有りといふ、愚位は未だ習あらず、故に性を説かず。後に習を起し已れば、無習と名けず。是故に習成するに則ち性有り」と説く、諸乘に隨ひて何の行をも串習せよ、爾時に則ち本彼性有り」と説く。問ふ、『若し爾らば、此は則ち唯是れ一の不定性なり、如何が五性の差別有ることを得るや。』答ふ、『則ち此義に由りて五性を安立す、何んとなれば、謂はく、六度串習の行を修し已りて、位堪任に到るとき、菩薩の種性を成ず。若し小行を習うて忍位に到るとき、聲聞の性を成ず。故に『智論』に云はく、『煥頂忍等を名けて性地と爲す』と。『善戒經』に云はく、『若し世第一法を得る、是を第二行と名く』と。故に知んぬ、前の三善根をば、種性住に屬す。若し『俱舍論』に依らば、順解脱分の善根を得る位

【俱舍論】 卷第十八終。

【順觀點分：説く】 外凡三賢位を種性位に説く。

【此に由りて：説く】 五性は法爾として無く、修行の功成就せる位に依つて假立するを説く。

【菩提心に云云】 關提も廻心せば有性となり成佛すべきを證す。

【三種の人】 謗大乘、五逆罪、一闍提、以下北本涅槃經卷十一の取意。同【善男子：等】 同二十六卷高貴德王品の文。

【二に終教云云】 次に終教の佛性觀を述べ。

に、方に性有りと言く。故に彼論に云はく、「順解脱分とは、謂はく、定んで能く涅槃の果を感ずる、善なり。此善生じざるに、彼有情をして名けて、身中に涅槃の法有りと爲す」と、獨覺も准じて知れ。此に由りて則ち三乘の種性を立つ。若し三行に於て、隨一に修行して、未だ本位に至らず、爾時を立てて、不定種性と爲す。若し三行に於て、全に未だ修行せず、爾時を立てて無有種性と爲す。此に由りて當に知るべし、諸乘の性種性は、皆習に就いて説くなり。」問ふ、「若し愚位には習無し、則ち無性ならば、後に縱ひ習を起すとも、何んが有と爲すことを得ん。」答ふ、「有習は是れ、無習の位に非ざるが故に。是故に習有らば、常恒に有なり、無習は自ら恆に無なり。既に無習を以て、習を作すにあらざれば、亦無性を以て而も性と爲さず、分位差別するを以ての故に。」涅槃經に言ふが如し、三種の人の中に、畢竟死の者を、一闍提無佛性に喩ふるなり。善男子、一闍提の輩、若し善友、諸佛菩薩に遇うて、深法を説くを聞き、及び過ざるも、俱に一闍提の心を離るることを得ず。何を以ての故に。善根を斷ずるか故に。一闍提の輩は亦、阿耨多羅三藐三菩提心を得。所以は何んとなれば、若し能く菩提の心を發しつれば、則ち復一闍提と名けざるなり。善男子、何んの縁を以ての故に、一闍提は阿耨多羅三藐三菩提を得と説くや。一闍提の輩は、實に阿耨多羅三藐三菩提を得。命盡の者の如し」等、乃至廣く説けり。當に知るべし、此中に位の前後に就いて、有無恆に定りて相由らざるなり。

二に終教に約す。即ち眞如の性の中に就いて、種性を立つるが故に、則ち一切の衆生に

【智論】卷三十二
取意の文。

【衆生】亦宣說
北本涅槃經卷
二十七の文、悉有
佛性を證す。

【問ふ云云】經の
有心の句を因故と
して難す。

【問ふ若し云云】
此れ一切衆生悉有
佛性といはば、か
の始教の無性有情
を如何に見るや、
二三の諸論を以て
無佛性の義を明か
にす。

【寶生論】卷三。
卷一。

遍じて、皆悉く性有り、故に『智論』に云はく、「白石には銀性有り、黄石には金性有
り。水は是れ濕性、火は是れ熱性なり、一切衆生には涅槃の性有り」と。一切の妄識は自
の眞性に歸すべからずと、いふこと無きを以ての故に。經に説いて言ふが如し、「衆生も亦
爾なり、悉く皆心有り。凡そ心有る者は、定んで當に阿耨菩提を成ずることを得べし。
是義を以ての故に、我當に一切衆生は悉く佛性有り」と宣説す」と。問ふ、「有るが難じて
云ふが如し、若し諸の心有るもの、悉く當に菩提を得れば、佛も亦心有り、亦應當に
得べきや。若し佛は心有りと雖も、更に當に得べきに非ずと言はば、是れ則ち無性の衆生
も、是心有りと雖も、亦當に得べきに非ず。」答ふ、「經の中に已に自ら濫を簡ぶが爲の故
に、但衆生有心と云うて、佛と云はず。處處に生を受くるを以て、衆生と名く、故に佛に
は同ぜざるなり。」問ふ、「若し並に有性ならば、如何が五種性の中の、無性の者を建立す
るや。」答ふ、『智論』に自ら釋有り、故に『寶生論』に云はく、「向に闍提に涅槃の性無し、
涅槃に入らずと説かば、此義云何。謗大乘の因を示顯せんと、欲するが爲の故に、此れ何
の義を明す、誹謗大乘の心を回轉せしめんと欲するが爲に、無量の時に依るが故に、是説
を作す。彼實には清淨の性有るを以ての故に」と。又『佛性論』に云はく、「問うて曰は
く、若し爾らば云何が佛、衆生、性に住せざれば、永く般涅槃無しと説くや。」答へて曰
はく、「若し大乘に憎背する者、此法は是れ一闍提の因なり、衆生をして此法を捨てしめん
が爲の故に、若し一闍提の因に隨はば、長夜の時に於て、輪轉して滅せず、是義を以ての

【經】 解深密經。

【問】前の云云【以下有性無性に就き、經文の相違を會通す。】

【有る經】 解深密

【一經】 一闍提無

【佛性と説く解深密

【經と、悉有佛性を説く涅槃經。】

【一は了義即ち眞實説、

【他は方便施權の不

【了義説といふ。】

【問】云云【以下

【一切悉く成佛する

【といふに七難あり

【今これを論破す。】

故に、經に此説を作す。若し道理に依らば、一切衆生は皆悉く、本より清淨の佛性有

り。若し般涅槃繋を得ずといはば、是處有ること無けん。是故に佛性は決定して本有なり。

有を離れ、無を離れたるが故に。』解して云はく、又此論の前の文に廣く無性を破す。乃

至、末に云はく、三には失、外道の有は本より定んで有り、無は本より定んで無し。有は

滅すべからず、無は生ずべからずといふに、此等の過失は、汝が邪執の無性の義に由りて

生ず一と、乃至廣説す。問ふ、『前の始教の中には、決定して無性の衆生有りと説き、此終

教の中には、並に皆有性なりといふ、云何が會通せん。』答ふ、『亦『論』に自ら釋有り。

故に『佛性論』の第二卷に云はく、『何が故に復有る經には、闍提の衆生決定して、般涅

槃の性無しと説くや。若し爾らば二經は、便ち自ら相違せり。二説を會するに、一は了、

一は不了なり、故に相違せずと。』解して云はく、若し小乗の中には、但佛一人のみ佛性

有り、餘の一切の人には、皆有りと説かず。若し三乘の始教の中には、漸く小乘に異なる

を以ての故に、多人は性有りと説けども、猶未だ全に彼に異ならず、故に一分の無性を許

す。是故に『論』の中に、判じて權施不了の説と爲すなり。

問ふ、『若し終教に依りて、一切衆生皆當に作佛すべしといはば、即ち衆生多しと雖も、

必ず終盡有らん。若し是の如くならば、最後に成佛せんに、即ち所化無からん。所化無き

が故に、利他の行闕けん、行闕けて成佛せば、應に道理に應ぜず。又諸佛の利他の功德、

斷盡有るが故に、如し其れ一切盡く當に作佛すべしといへども、而も衆生終に盡くるこ

【答ふ云云】一、衆生有盡の難に答ふ。

【設ひ云云】二、損不損の難に答ふ。

【釋】不増不減經「一法界を以て故に衆生界は一法界の理體を全うせし事相にて、また一法界の事相を全うせし理體なるを知らざる意。」
【又文殊云云】三、後佛無化の難に答ふ。

と無しと言はば、即ち自語相違の過失爲らん、終盡無くんば、永く成佛せざるを以ての故に。又一佛無量の人を度するが如きは、衆生界に於て損有りや以不や。若し漸損有らば、必ず終盡有らん、損有りて盡くること無くんば、理に應ぜざるが故に。若し損無くんば、則ち滅度無からん。滅有りて損無くんば、理に應ぜざるが故に。是の如き等の道理に依りて、『佛地論』等に、此に由りて無性有情を建立して、上の諸の過を離る、此義云何。『答ふ』若し衆生、有性に由るが故に、並に全に成佛して、盡くること有りと説くと謂ふは是れ則ち衆生界の中に於て、滅見を起す。衆生既に滅せば佛界必ず増せん、故に佛界に於て便ち増見を起す。是の如きの増減は、是れ正見に非ず、故に『不増不減經』に云はく、『舍利弗、大邪見とは、謂ゆる衆生界増すと見、衆生界減すと見るなり』と、乃至廣説す。設ひ此見を避けんが故に、一分の無性有情を立てて、不減と爲せば、彼終に増減の見を離るること能はず。何を以ての故に。彼諸の有性の者に於て、並に成佛すと見るが故に、則ち斷見滅見を起す。諸の無性の者は、成佛せざるが故に、即ち常見増見を起す。彼衆生界を了ぜざるを以ての故に、是故に經に云はく、『一切の愚癡の凡夫は、實の如く一法界を知らざるが故に。實の如く一法界を見ざるが故に、邪見の心を起して、衆生界増し、衆生界減すと謂ふ』と。又『文殊般若經』に云はく、『假使一佛世に住して、若は一劫、若は一劫を過ぎててもあれ、一佛世界の如く、復無量無邊恆河沙の諸佛有りて、是の如く一一の佛、若は一劫、若は一劫を過ぎててもあれ、晝夜に法を説いて、心に暫くも思むこと無く、

【何を以て云ふ】四、白雲道場の難に答ふ。
 【衆生の定相】故に衆生界は如來藏眞如、無明の縁によりて起れるもの、實體なく定相なしと。
 【衆生界】無きなり。虚空の無邊と遊行と而立するが如く、或佛と衆生の無盡と兩立するを説く。
 【又諸佛云】五佛徳有衆の難に答ふ。
 【是れ則ち】斷ぜしむ。無性有情の果は人天に止る。故に變化應身の利他の功德のみ在りて、初地以上を化すべき、報身の他受用利他の功德斷滅すと。
 【諸佛同體の大慈】生佛共に同體の佛果を得せしむること。

各各に無量恆河沙の衆生を度して、皆涅槃に入らしむとも、而も衆生界亦増減せし、乃至十方の諸佛の世界にも、亦復是の如し。一一の諸佛、法を説いて教化して、各各無量恆河沙の衆生を度して、皆涅槃に入らしむとも、衆生界に於て亦不増不減なり。何を以ての故に。衆生の定相不可得なるが故に。一と。義の意に言はく、衆生界は猶し虚空の如しと。假使無量の勝神通の者、各各無量劫に虚空を飛行して、空の邊際を求めんに、終に盡すべからず、盡くさざるを以て、遊行すと名けざるに非ず、遊行を以て、其をして際を得せしむるに非ず、當に知るべし、此中の道理も亦爾なり。當に得べきを以て、其をして終有らしむるに非ず、終無きを以て、得ること無きこと有りとなし。是故に諸佛は通ぜざることを無きなり。又諸佛の利他の功德、斷滅無きことを成ぜんが爲の故に、一分無性の衆生有りとなし。立つといはば、是れ則ち彼諸佛をして、但變化の利他の功德のみ有りて、亦即ち彼隨他受用の、諸の功德を斷せしむるなり、菩薩の、諸地を證すること無きを以ての故に。又化用の中に、亦但衆のみ有りて、微細を斷滅せん、人として二乗の無漏を得ること、無きを以ての故に。又今より已後の諸佛は、一佛として三乗等の教を、説くことを得ること有ること無し、聖を得る機無きを以ての故に。即ち諸佛同體の大慈を斷ずるなり。又若し意に悉く性有るが故に。必ず皆盡くすること有るべしと謂うて、最後の佛、利他の行を斷せんことを恐るるが故に、一分定んで無性なる者を立つといはば、然も彼後の佛、終に利他の行に於て、圓滿せざらん、其所化、一有情として、聖果を得るもの無きを以ての故に。

【又若し意云云】六、利他行缺の難に答ふ。

【是故に…なり】七、上を總結す。

【問ふ云云】以下修教の種性に、性習の二種性を明す

【返流の因】眞如本覺の無漏智、内より衆生本識中の無明に熏じて、生死に反流し眞證に向はしむる因となる。

【攝論】同卷三。【六根聚經】未譯

【瑜伽の所説】六處殊勝云といふ【地持】同經卷一

但し佛菩薩は、二利の中に利他を最と爲す、何んが一人として、聖を得せしめずして、而も自身に於て成佛することを得ること有らんや。又本皆弘誓の願を發して云はく、『諸の衆生をして悉く菩提を得せしめん。』と。是故に得せしむるが故に、本願虚からず、而も衆生界盡すべからざるが故に、本願斷ぜず。若し爾らすんば、本願に違するが故に、行願虚なるが故に。盡行成、佛は理に應ぜざるが故に。是故に上の諸失を避けんと欲して、無性を建立すと雖も、彼過還りて此宗に墮せんことを謂はず、是故に無性を、究竟了義と爲すに非るなり。

問ふ、『夫れ種性を論ずれば、必ず是れ有爲なり、如何が此教は、眞如に約して性種性と爲すや。』答ふ、『眞如は縁に隨ひて、染と和合して、本識を成する時、即ち彼眞の中に本覺の無漏有りて内に衆生に薰じて返流の因と爲るを以て、種性と爲すことを得。梁の『攝論』に説いて、梨耶の中の解性と爲す。』起信論に、梨耶の二義を説く中の、本覺是なり。又彼論の中に、『如来藏は無漏を具足して、常に衆生に薰じて、淨法の因と爲る』といふ。また『寶性論』に云はく、『及び彼眞如性とは、『六根聚經』に説くが如し、六根は是の如く、無始従り來畢竟じて、諸法の體なるが故に』と。解して云はく、眞如は一切の法に通ずるを以て、今は非情を簡去するが故に、六處の衆生數の中に約して、彼畢竟眞如の理を取りて、以て性種性と爲す。此は『瑜伽』の所説と名は同じ。但し彼は始教に約して、理を以て事に從へて麤相をもつて説く。故に事の中に約して性種を明す。故に『地持』に云

【佛性論】 同卷三
【涅槃經】 北本涅槃經卷二十七

【此等】 爲す
【本覺の性智】 即ち體相不二、理智不二の智に就て立つ

【其智種云云】 以下智種性を明す

【多聞・所なり】 眞如界化境の報化二身の說法により種性を熏發すといふ

【三大内外に照を記く】 眞如の體相用の三大の中、内より體相二大の内、如内蒙あり、外より用大の眞如外重ありて、無明淨化せり

【冥下不二】 内外重冥合不二、唯一眞如に對す

【三に】 種性觀
【以下類教の種性觀】 第三に、知すべし
【以下圓教の種性觀】

はく、「種性體相、我已に略して説く」と、此れ之謂なり。實性論の中には、此終教に約して、事を以て理に従ひて、深細に而も説く。故に眞如に就いて性種性を明す。是故に『佛性論』に云はく、「自性清淨の心を名けて道諦と爲す」と。又『涅槃經』に云はく、「佛性とは第一義空と名く、第一義空を名けて智慧と爲す」と。此等は並に、本覺の性智に就いて、説いて性種と爲す。其智種も亦、眞如に従ひて成ずる所なり。故に『攝論』に云はく、「多聞薰習は、最清淨の法界從り流るる所なり」等と。又『起信』の中に、眞如の體相の二大を以て、内蒙の因と爲し、眞如の用大を、外蒙の縁と爲す。無明の業法と合するを以ての故に、是故に三大内外に蒙を説く、靈力を以ての故に、無明盡る時に、冥合不二にして、唯一眞如なり。

三に類教に約して明さば、唯一眞如離言絶相を、名けて種性と爲す。而も亦性智の異を分たず、一切の法に二相無きを以ての故に、是故に『諸法無行經』に云はく、「云何が是事を名けて種性と爲すや。文殊師利、一切衆生は皆是れ一相なり、畢竟不生にして、諸の名字を離れたり、一異不可得なるが故に、是を種性と名く」と。此を以て之に準ぜよ。上來は三乘に約して説き畢んぬ。

第三に一乘に約せば、二説有り。一には前の諸教に明す所の種性を攝して、並に皆主伴を具足して宗を成ず、同教なるを以ての故に。攝方便の故に。二には別教に據るに、種性甚深にして因果無二なり。依及び正に通じて、三世間を盡して、一切の理事解行等の、諸

【本來…訖んぬ】法界緣起の法は、皆性徳自爾にして本來完全圓滿に成就すといふ。

【大經】 晉譯華嚴經卷八。

【若し門に云云】以下教通門の施設に依つて説く。

【六決定】 觀相善決定、眞實善決定、勝善決定、因善決定、大善決定、不怯弱善決定。

【亦即ち…故に】

圓融門に約していへば、六決定の法は佛相に通じ、而も因相の儘果相なり。

【義は五…齊くす】種性本來五義を全具す、本五教に依つて隱顯するのみ。

【四】 以下一本に華嚴經中一乘五教分齊義卷下之二に作る。第三に行位差別を明す。

の法門を該收す。本來満足して、已に成就し訖んぬ。故に『大經』に云はく、「菩薩の種性は甚深廣大にして、法界虚空と等し」と、此れ之の謂なり。若し門に隨ひて顯現せば、即ち五位の中の位位の内の六決定の義等を、名けて種性と爲す。亦即ち此法を名けて果相と爲す、因果同體にして、唯一性なるを以ての故に。廣くは經に説くが如し、餘は准知すべし。問ふ、「云何が種性、諸教に約就して差別異なるや。」答ふ、「此にも亦二義有り。一には法に約して、隱顯相收を辨じ、二には機に約して得法の分齊を明す。初の義とは、此種性の緣起無礙にして、五の義門を具するに由りて、是故に諸教に各各一門を述べて、機に隨ひて攝けず、義は相違せず。何んとなれば、一には是れ隨執非有門、小乘に説くが如し。二には隨事虧盈門。始教に説くが如し。三には從理遍情門。終教に説くが如し。四には絶相離言門。頓教に説くが如し。五には性備衆徳門。圓教に説くが如し。義は五有りと雖も、然も種性圓通して、隨つて攝し遍く收む、隱顯致を齊しくす。二には得法の分齊を明すとす、或は一切皆無、唯一人を除く、小乘に説くが如し。或は一切皆有、唯草木等を除く、終教に説くが如し、或は亦有亦無、始教に説くが如し、一分無性を許すを以ての故に。或は非有非無、頓教に説くが如し、離相を以ての故なり。或は前の四を具す、一乘攝方便の處に、説くが如し。或は因に即し果を具して、三世間に通ず、圓教に説くが如し、餘は准知すべし。

【四】 第三に行位の差別とは、諸教の中に於て、皆三義を以て略して示す。一には位相を明し、

【方便】 五等心、別相念住、總相念住、四善哉、見位にして大乘の三賢位に當る。
 【究竟位】 三界思の惑を斷ぜし羅漢也。
 【九地】 欲界の一色界の四地、無色界の四地。
 【小論】 俱舍、婆沙等。
 【若し初教云云】 以下大乘始教の行位を明す。初に位相なり。

【瑜伽】 聲聞決擇
 【律集論】 論第八

二には不退を辨じ、三には行相を明す。初とは小乘に依るに、四位有り。謂はく、方便と目と修と、及び究竟となり。又小乘の十二住を説いて、以て究竟と爲す、及び三界九地十地等を説く、廣くは『小論』に説くが如し、不退とは此中に修行して、忍位に至りて、不退を得るが故なり。其行相は亦彼諸經に説くが如し。問ふ、何が故に小乘の行位等の相、廣く顯はさざるや。答ふ、『此中の意は、義の差別を以て、教の不同を顯す。而るに小乘は大に異なること、理疑ひ無きが故に、説くことを待たざるなり。

若し初教に依らば、亦三義を以て顯す。何に位相とは、此中に二有り。一には愚法二乘を引いて、廻心せしめんが爲の故に、廻心教を施設す。亦但見修等の四位、及び九地等有り、名は小乘に同す。或は五位を立つ。謂はく、見道の前の七方便の内に、前の三種を分ちて、空釋位と爲す、遠方便なるを以ての故に。後の四善哉を加行位と爲す、是れ近方便なるが故に。餘の名は前に同じ。又亦爲に乾慧等の十地を説いて、第九を菩薩地と名け、第十を佛地と名くることは、二乘を引いて上に望むるに、足ざるをもつて、漸次に修行して、佛果に至らしめんと欲ふが故に。又彼佛果を十地の外に在かすして、亦同じく地の中に在くことは、彼を引くを以ての故に、方便して彼に同す。二乘の人は現身の上に於て、理果を得るを以ての故に、後に在かざるなり。又此位相及び行相等、廣くは『瑜伽』の聲聞決擇、及び『雜集論』に説くが如し。問ふ、何が故に『瑜伽』等に明す所の聲聞の行位の相は、而も彼『毘曇』等に同じからざるや。答ふ、『不同の相とは二の義意有り。一に

【又十地：爲す】
 十地の初地に入住
 入心を見道、住心
 以後を修道とす。
 【影似】名數上
 には大異あり。
 【四十心】十信、
 十住、十行、十回
 向。
 【攝論】卷十一取
 意の文。

は、小乗は諸法に愚にして、不了の説なることを、顯さんが爲の故に。二には、方便して
 漸漸に、大乘に引向せんが爲の故に。是故に明す所の行位等の法は、皆悉く方便して、
 大に願向して説くが故に不同なり。此れ既に是れ、愚法小乗に非ず、又菩薩に非ず。即ち
 知んぬ、是れ彼三乗教の中の、聲聞乘なり。二には直進の人の爲に、位相を顯さば、彼
 に菩薩の十地の差別を説く。又十地を以て、説いて見修と爲す、及び地前に通じて以て、
 大乘の十二住の義と爲す。何を以ての故に。小乗に影似せんが爲の故に。又彼地前に四十
 心有り、彼十信も亦位を成するを以ての故に。此れ亦小乗の道、前の四方便に似せんが爲
 の故に。是故に梁の『攝論』に云はく、「須陀洹道の前に、四位有るが如し。謂はく、煙、
 頂、忍、世第一法なり。菩薩の地前の四位も亦、是の如し。謂はく、十信、十解、十行、十廻
 十廻向なり」と。又亦廻心教に似せんが爲の故に、信等の四位を以て資糧位と爲す。十廻
 向の後に、別に四善根を立てて、加行位と爲す。見等は前に同じ。問ふ、「何が故に此教に
 立てる所の名數、多分、小乗等に影似するや。」答ふ、「隨ひて方便し影似して彼を引くに、
 勝方便有らんが爲の故に。若し全に彼に異らば、信受し難きが故に。若し全に彼に同ぜば、
 引くと名けざるが故に。」問ふ、「若し二乗を引かば、彼に似することを須ふべし、如し直
 進の爲には、何んが小に似することを假らんや。」答ふ、「二意有るが故に、亦稍小に似す。
 一には、始教の中の直進の人は、機淺なるが故に、盡く大乘の深法を受くること能は
 ず。是故に示す所の位等の法相も、亦小乗に似せり。而れども義理仍ほ別なり。二には、

【瑜伽】 論卷三十

【已成號】 六成就

の第一、聲聞の行

業全く成熟する位

【補特伽羅】 譯し

て數取趣といふ、

人のこと。

【沙門の果】 頂流

一來、不還、羅漢

【般涅槃】 羅漢果

をいふ。

【聲聞を三雨なり】

聲聞に三品の成就

ある如く、緣覺ま

た同じく存す。

【彼論】 瑜伽論。

【三種の成就を立

つ】 三成就の對配

は、菩薩の七地門

に就いて試みたる

もの。七地とは、
一、種性地（未發
心）二、勝解行地
（十信三賢）三、淨
勝意樂地（初地）四
行正行地（第二地
第七地）五、決
定地（第八不動地）

凡そ大乘を以て小に似せて説くことは、皆二義に通ず。一には小を引かんが爲に、二には機淺きが爲なり。是故に此を説いて、始教と爲すなり。一即ち如何なる義か等とならば、「瑜伽」に説くが如し、云何が已成就の補特伽羅の相。謂はく、略の聲聞先に已に、諸の善法を串習するが故に。若し時に下品の成就に安住すれば、兩時に便ち下品の欲樂、下品の加行有りて、猶惡趣に往く、現法に於て、沙門果を證するに非ず、現法に於て、般涅槃を得るに非ず。若し時に中品の成就に安住すれば、兩時に便ち中品の欲樂、中品の加行有りて、惡趣に往かず、現法の中に於て沙門の果を證し、現法に於て般涅槃を得るに非ず。若し時に上品の成就に安住せば、兩時に便ち上品の欲樂、上品の加行有りて、惡趣に往かず、現法の中に於て、沙門の果を證し、即ち現法に於て般涅槃に得。聲聞を説くが如く、獨覺も亦爾なり。何を以ての故に。道は聲聞と種性同じきが故に」と、乃至廣説す。菩薩の位に於て、二乘に似せんが爲に、亦是の如きの三種の成就を立つ。故に彼論に云はく、「若し諸の菩薩、勝解行地に住するを、下品の成就と名け、淨勝意樂地に住するを、中品の成就と名け、墮決定究竟地に住するを、上品の成就と名く。若し菩薩、下品の成就に住するは猶惡趣に往く、此れ第一無量の大劫を盡す」と、乃至廣説す。餘の二大劫を二成就に配す、是の如き等の文は、差別一に非ず、皆上の意を具するのみ、准じて之を知れ。

二に不退位とは「佛性論」に依るに、聲聞は苦忍に至り、緣覺は世第一法に至り、菩薩

六、決定行地（第九善慧地）。七、到究竟地（第十法雲地佛果地）。

【第五決定究竟地】

【二に…等なり】

【苦忍】見道十五心の初、苦法習忍

【三に位中云云】

三に地前地上の菩薩、その位中の修行の相を明す。

【瑜伽】論卷四十

【勝解行住云云】

以下、大乘十二住

中の第一勝解行住

（三賢）位の行相を説くに八種を示す

【或時は虚棄す】

説法するも利益なく、廢棄すべきに至るをいふ。

は十廻向に至りて、方に皆不退なり」と。當に知るべし、此中の聲聞緣覺は、是れ愚法に非ず、是故に皆此れ始教の中の三乘の人なり。又亦可ふべし、菩薩の地前を、總じて説いて退と爲す、其れ猶諸の惡趣に墮するを以ての故に。『瑜伽』に云ふが如し、「若し諸の菩薩、勝解行地に住するは、猶惡趣に往く、此れ第一無數大劫を盡す」と。是の如き等なり。三に位の中の内相差別を明さば、『瑜伽』に云ふが如し、「勝解行住の菩薩轉ずる時、何なる行、何なる相がある。或時は聰慧を具足して、其諸法に於て能く受け能く持し、其義理に於て、能く悟入するに堪へたり、或は一時に於て、是の如くなること能はず。或は一時に於て憶念を具足し、或は一時に於て忘類と成る。諸の衆生に於て、未だ調伏の方便を了知すること能はず、自の佛法に於て、亦未だ實の如く、善巧の方便を引發することとを了知せず。他の爲に法を説き、教授教誡するに、勉勵して而も轉ず、勉勵して轉ずるが故に、實の如く知ること能はず。或時は虚棄す、闇中の射の如し、或は中り、中らず、欲に隨ひて成ずるが故に。或は一時に於て、大菩提に於て已に發心して、而して後に退捨す。意樂に由るが故に、自をして樂ましめんと欲す、思擇に由るが故に、他をして樂しましめんと欲す。或は一時に於て、甚深廣大の法教を聞いて、而も驚怖を生じて猶豫疑惑す。是の如き等の類を勝解行住と名く」と。解して云はく、此は是れ十二住の中の、第二住の相なり。其第一の種性住の行相は更に劣なり、及び地上の行相も皆彼に説くが如し。

【若し終云云】以下、終教の行位差別を明す。初に行相。

【本業經】瓔珞本業經卷上及び卷下の文を引證す。

【仁王經】同經卷下。

【智忍】十住位。

【十住の初】得るな。次に不退位を明す。

【本業經】卷上の文。

【示現退】實に退墮するに非ず、轉善十信の菩薩を策勵せんが爲に、假に示むるに過ぎず。

【共行相】准知せよ。次に行相を明す。

【起信論】信成就發心を明す中、發心の利益を説く文。

【無論】卷四取意の文。

【無論】卷四取意の文。

若し終教に依らば、亦菩薩の十地差別を説く、亦見修等の名を以て説かず。又地前に於て但三賢のみ有り、信は但是れ行にして、是れ位に非ざるを以ての故に。未だ不退を得ざるが故に、「本業經」に、「未だ住に上らざる前に此十心有り」と云うて、位とは云はざるなり。又云はく、「始め凡天地従り佛菩薩に値ひ、正教法の中に一念の信を起し、菩提心を發す。是人を爾時に名けて、住位の信觀の菩薩と爲す。亦假名の菩薩、名字の菩薩と名く。其人は略して十心を行す、謂はく、信進等なり」と。廣くは彼に説くが如し。又「仁王經」に云はく、「智忍以前に、十善を行する菩薩は、進有り退有り、難し轉毛の、風に隨ひて東西するが如し」等と。此に在りて修行すること、十千劫を経て十住の位に入りて、方不退を得るが故に。十住の初より、即ち下の二乘地に退墮せず、況んや諸の惑惑及び凡地をや。設ひ「本業經」に、十住の第六心に退有りと説くことは、「起信論」の中に彼經文を譯して、示現退と爲すなり。慢緩の者の爲に、其心を策勵するが故に。而も實には菩薩、發心住に入れば、即ち不退を得るなり。共行相とは、「起信論」の中に説く。三賢の初位の中に於て、少分法身を見ることを得、能く十方世界に於て、八相成道して衆生を利益す。又順力を以て、身を受くること自在なり、亦繫繋に非ず。又三昧に依りて、亦少分佛の報身を見ることを得、其所修の行は、菩提性に順ず。謂はく、法性之體は慳貪無しと知りて、隨順して檀波羅蜜を修行する等。廣くは彼に説くが如し。又梁の「攝論」の中に、「十信を凡夫の菩薩と名け、十解を聖人の菩薩と名くる」等と、其地上の行相は、前に信して准知

【若し：等なり】

以下、頓教の行位を明すに眞諦の理のみを説くを以て階位を立てず。

【楞伽】 四卷楞伽の第四。

【諸法の正性】 眞如の理をいふ。

【生死涅槃に住せず】 生死即涅槃と見るが故に。

【若し圓教云云】 以下、圓教の行位を明す。

【寄位に約して顯す】 圓教の位次は圓融無礙自在なるも、三乗教に寄同布門の説。

【六位】 十信、十住、十行、十回向、十地、妙覺。

【一位を義なり】 次に圓融門に約して明す。

せよ。是故に當に知るべし、此中の行位、前の始教と淺深の相差別顯なり。問ふ、「此教は豈に通じて二乘を引かざるや。何が故に行位、小乘に似して説かざるや。」答ふ、「此より後の諸教は、並に皆深勝なり、所引の二乘も亦、是れ純熟高勝の機なるが故に、彼に似することを假らざるなり。

若し頓教に依らば、一切の行位は皆不可説なり。相を離るるを以ての故に、一念不生にして、即ち佛に至るが故に。若し行位の差別等の相を見るは、即ち是れ倒なるが故に。若し言に寄せて顯さば、『楞伽』に云ふが如し、「初地即八地、乃至云はく、無所有なり、何の次第か有らん」と。又『思益經』に云はく、「若し人、是諸法の正性を聞いて勤行精進し、説の如く修行するものは一地従り一地に至らず、若し一地従り一地に至らずんば、是人生死涅槃に住せず」と、是の如き等なり。

若し圓教に依らば二義有り。一には前の諸教に明す所の行位を攝す、是れ此方便なるを以ての故に。二には別教に據るに、其三義有り。一には寄位に約して顯す。謂はく、始め十信従り乃し佛果に至るまで、六位不同なり。一位を得るに隨ひて、一切の位を得。何を以ての故に。六相を以て取るが故に。主伴の故に。相入の故に。相即の故に。圓融の故に。經に云はく、「一地に在りて、普く一切の諸地の功德を攝するが故に」と。是故に經の中に、「十信の滿心勝進分の上に、一切の位及び佛地を得」とは、是れ其事なり。又諸位及び佛地等、相即する等を以ての故に、即ち因果無二にして始終無礙なり。一一の位の

【六相】總、別、同、異、成、壞。一一の位此六具して互に無礙なりといふ。

【經の中】音譯華嚴經卷一、卷六。

【二には：記けり】二に分段身を果報に就いて位を明す

【見聞位】一乘無盡の法門を見聞し金剛不壞の種子を成ずる位。

【離垢三昧】煩惱の垢穢を離脱せし境界。此は因果兩三昧に滿ずるも、今は十地の滿心に成ずる因三昧と見て可なり。

【彌勒 善財に云】音譯華嚴經卷六十取意の文。

【當見我と説けり】解行證入は現在世なるが因果の次第を知らしめん爲にかいふ。

【三に行云】以下、三に諸位に於ける行を主として明す。

【三に行云】以下、三に諸位に於ける行を主として明す。

上に於て、即ち是れ菩薩即ち是れ佛なりとは、是れ此義なり。二には報に約して位を明さば、但し三生有り。一には見聞位を成ず。謂はく、此無盡の法門を見聞して、金剛の種を成ずる等、性起品に説くが如し。二には解行位を成ず。謂はく、都率天子等、惡道從り出で已りて、一生に即ち離垢三昧前に至りて、十地の無生法忍、及び十眼十耳等の境界を得、廣くは『小相品』に説くが如し。又善財の、始め十信從り乃至十地にて、善女の所に於て、一生一身の上に、皆悉く是の如きの、普賢の諸の行位を具足するが如きは、亦是れ此義なり。三には證果海位。謂はく、彌勒、善財に告げて言ふが如し、『我當來世に、正覺を成ぜん時、汝當に我を見るべし』と、是の如き等なり。當に知るべし、此れ因果の前後に約して、二位を分つが故に、是故に前位は但是れ因圓、果は後位に在り、故に當見我と説けり。三に行に約して位を明さば、即ち唯し二有り。謂はく、自分勝進分なり。此門は前の諸位の解行、及び得法分齊の處に通じて説く、普莊嚴童子等の如きなり。其身は世界性等以上の處に在りて住す、是れ白淨寶網轉輪王の位に當れり、普見の肉眼を得て、十佛刹塵數の世界海等を見る。若し三乘の肉眼は、則ち此の如くにはあらず。故に「智論」に云はく、「肉眼は唯三千世界の内の事を見る。若し三千世界の外を見ば、何んが天眼を用ふと爲ん」と。故に知んぬ、不同なり。又彼は能く一念の中に於て、不可説不可説の衆生を化して、一時に皆離垢三昧前に至らしむ、餘の念念の中も、皆亦是の如し。其福分は一の鏡光頗璃鏡を感じて、十佛刹塵數の世界の中を照す。當に知るべし、此は是れ、

【自分勝進】自分とは正しく修行すること。勝進とは修行成就して、正しく上進せんとするをいふ。

【普莊嚴童子】愛見善慧王の第二王子、釋迦因位の時の名。

【世界性】界外の淨土、十重世界の第一の名。

【白淨位】第十地の位をいふ。

【能く一手】説なり。晋譯華嚴經卷六賢首品の中、取意の文。

【信解阿含門】衆生をして信解を生ぜしむる爲の、教門施設の方便の意。

【問ふ前の云云】圓教の信滿成佛と終教の初住成佛との相違を明す問答なり。

【此は即ち爾らず云云】一位即一切位なれば、信滿位に行用を起せば、後諸位の行用をも

前の三生の中の、解行位の内の行相なり。因圓に約して示すを以ての故に。若し信滿得位已去に約せば、起す所の行用は皆法界に遍し、經の如し、「能く一手を以て大千界を覆ふ等、手より供具を出して虚空法界と等しくして、一時に無盡の諸佛に供養し、大佛事を作して、衆生を饒益する等不可説なり」と。廣くは信位の經文に説くが如し。又云はく、「一世界を離れず一坐處を起たずして、而も能く一切の無量の身の所行を現する」等、又「一念の中に於て、十方世界にして一時に成佛し、法輪を轉ずる」等、乃至廣く説けり。是故に當に知るべし、彼三乗の分齊と全く別なり。何を以ての故に。三乗の行位は是れ、信解阿含門の中に約するを以て、是説を作すなり。問ふ、「前の終教の中に、不退際の上にして、亦是の如きの八相等の用を得、此と何んの別かある。」答ふ、「彼は此位に於て成佛を示す時、後の諸位に於て皆自在ならず、未だ得ざるを以ての故に。但是れ當位に躋らく、化を起すが故に。此は即ち爾らず。初位の中に於て此用を起す時、後の諸位に於て、並に同時に起す、皆已に得るが故に。是れ實行なるが故に。六位を該ぬるが故に。」問ふ、「義既に不同なり、何が故に一種にして同じく、是れ信滿勝進分の上に此用を起すや。」答ふ、「方便して此一乗信滿の成佛を顯して、信受し易からしめんと欲するが故に、彼教に於て先には説を作すなり。」問ふ、「既に一位の中に一切の位有り、及び信の滿心に即ち佛を得ば、何んが更に後の諸位を、説くことを須ふるや。」答ふ、「後の諸位を説くことは、即ち是れ初の中の一なり。初の如く後も亦爾なり。」問ふ、「若し初に即ち後を具して、初を得るに即

同時に起す。

【白の…成ぜず】
別教自身に於ては、
元來無位なれば、
位に依つて成佛を
いはす。

【信成ず…准ぜよ】
十信の滿位に行成
就する故に、行の
功德滿する所に就
いていふ。

【五】以下第四に
修行の時、長短を
明す。

ち後を得ば、亦後にも亦初を具すべし。既に後を得ずんば、亦初を得ざるべしや。」答ふ、
 「實に爾なり、但し初を得る時に、後を得ずといふこと無きを以ての者に、是故に未だ後を
 得ざれば、而も初を得ずといふこと有ること無きなり。」問ふ、「若し爾らば、云何が諸位
 の階降次第を、説くことを得るや。」答ふ、「此經の中に、諸位を安立するに、二の善巧有
 るを以てなり。一には相に約し門に就いて、位の前後を分つ、三乘に寄同して、彼を引く
 便なるが故に。是れ同教なり。二には體に約し法に就くに、前後相入す、圓融自在にして
 彼三乘に異れり、是れ別教なり。但し門を移さずして、而も恆に相即し、相即を壞せずし
 て、而も恆に前後するを以て、是故に二義融通して、相違せざるなり。」問ふ、「若し是れ
 信等の初門即ち一切ならば、何んが信位の初心に即ち得ずして、而も滿心等と説くや。」
 答ふ、「若し白の別教ならば、即ち位に依りて成ぜず。今は三乘終教の位に寄せて説く。彼
 教の中に信滿不退に、方に位に入ることを得るを以て、今は即ち彼位に入ることを得る處
 に寄せて、一時に此一切の前後の、諸位の行相を得。是故に信の初心に於て説かず、未だ
 不退を得ざれば、位相を成ぜざるを以て、但是れ行なるが故に。」問ふ、「若し爾らば、應
 に住位の成佛と云ふべし、何んが信滿と名くるや。」答ふ、「信成するに由るが故に、是れ
 行佛にして位佛には非ざるなり。餘義は准ぜよ。」

【五】第四に修行の時分とは、若し小乘に依らば、自ら三人有り。下根とは、謂はく、諸の聲
 聞、極疾なるは三生に羅漢果を得。謂はく、一生に於て解脱分を種る、第二生に決擇分を

【水火等の一劫】世界の構成と破壊の間を成住壞空の四劫と立つ。而して破壊せらるるに火災、水災、風災によるとす。かく成等の四劫はるる間を一大劫といひ循環連続して絶えずと。

【娑婆】大毘娑婆論

【戒等の五分】戒定、慧、解脱、解脫知見。

【四波羅蜜】布施持戒、忍辱、精進、相好の業。三十

二相八十隨形好の相好を圓滿ならしむる修行。

【若し始、作す】次に始教の時分を明す。

【俱梨】新に俱胝譯して億といふ。

一。【優婆塞戒經】卷

修し、第三生に漏盡得果す、極遲は六十劫を遷ぐ。中根とは謂はく、獨覺の人、極疾は四生に得果し、極遲は百劫を遷ぎ、上根とは謂はく、佛は定んで三僧祇劫を満す。此中の劫數は、水火等の一劫を取りて一の數と爲し、十箇の一を第二の數と爲し、是の如く展轉して、第六十に至るを一阿僧祇と爲す。此に依りて以て三僧祇を數ふるなり。問ふ、「何が故に下根は遷りて時を遷ぐることに少くして、而して上根等は乃し多時なるや。」答ふ、「能く多時に於て練根の行を修する等は、難しと爲すを以ての故に、是故に多なり。」又「娑婆」等に依るに、菩薩の成佛に二身有り。一には法身、二には生身なり。法身とは、謂はく、戒等の五分なり。此法身を修するに具に四時有り。一には三僧祇劫に、有漏の四波羅蜜を修する時、二には百劫に於て、相好の業を修する時、三には出家苦行して、禪定を修する時、四には菩提樹下にして、正覺を成する時なり。生身とは、但し百劫に相好の業を修して、最後身に於て、伽耶城淨飯王家に、生報の身を受けて、摩伽陀國に於て而も覺道に登る、餘は彼に説くが如し。若し始教に依らば、修行成佛、定んで三阿僧祇を遷ぐ。但し此劫數は小乘に同じからず、何んとなれば、此は水火等の大劫を取りて、數へて百千劫に至り、此を數へて復百千に至るを、一の俱梨と爲して、第一の數と名け、此俱梨を數へて復俱梨に至るを、第二の數と爲す。是の如く次第して、所數を以て能數に等しからしめて、第一百に至るを一阿僧祇と名く。此れ即ち十大數の中の、第一數なり。此數に依りて三阿僧祇を満す、仍りて此教の中には、釋迦の身に就いて、以て此義を分つ。「優婆塞戒經」に

【本業經】 卷下。

【若し：作すなり】次に終教の時分を明す。

【法華經】 第六壽量品の文。

【雜類の世界】娑婆世界を簡び他の世界のこと。【寶雲經】 卷六。

云ふが如し、「我往昔實頂佛の所に於て、第一の阿僧祇劫を満足し、燃燈佛の所に於て、第二の阿僧祇劫を満足し、迦葉佛の所に於て、第三の阿僧祇劫を満足せり。我は往昔に於て釋迦佛の所にして、始めて阿耨多羅三藐三菩提心を發す」と。又『本業經』に依るに、亦百劫に相好の業を修すること有り。但し是れ變化にして、實修に非ざるなり。又一偈を以て、弗沙佛を敬するに由りて、即ち九劫を超ゆ、但し九十一劫に即ち成佛するなり。問ふ、『三無數劫に諸の實行を修して、應に報身を成すべし、何が故に乃し化身に就いて説くや。』答ふ、「此始教は、下巖に就くに由るが故に、二乘有るが故に、此身は是れ彼が知見する所の故に、是れ權教なるが故に、是説を作す。」若し終教に依らば、説くに二義有り。一には定の三僧祇、一方の化儀に約して説くが故に。又此教の中には、實行を修するが故に、實報身を成す、化に約して説かず。故に『法華經』に云はく、「我實に成佛してより以來、無量無邊百千萬億阿僧祇劫に於て」と。又云はく、「我燃燈佛の所に於て、受記を得」等と説くは、皆方便を以て分別するが故なり。亦云はく、「百劫に相好の業等を修すること無し」と。何を以ての故に。小乗の中には偏に智分を修して、福分を修せざるを以て、是故に成佛の時に臨みて、更に百劫に於て、別して彼業を修す。始教は彼を引くをもつて、亦彼説に同ず、仍りて是れ化なり。此終教の中には、其實行を論ず、初發意從り即ち福惠變修す、故に成佛の時に別修無きなり。二には不定の三僧祇、此に二義有り。一には餘の雜類世界に通ずるが爲の故に。『勝天王經』に説くが如し。二には佛徳限量無きに據るが故に。『寶

【若し頓教の時分を明す。】
【一念不生】一念だにも妄念生ぜざる、是を佛といふ

【二】以下、一本に華嚴經中一乘五分齊義卷下之三に作る。以下第五に修行所依の身を明す。

雲經』に云ふが如し、「善男子、菩薩は如來の境界を思議すること能はず、如來の境界は思量すべからず、但し淺近の衆生の爲に、三僧祇に修集して、得る所なりと説く、菩提は而も實には發心より以來、計り數ふべからざるなり」と。解して云はく、此中の不可計數とは、是れ不可計數の阿僧祇劫なり。但三のみに非ざるなり、問ふ、「何が故に前の教は定の三僧祇なるに、此中には乃し定不定有るや。」答ふ、「前の教は生の故に、此教は熟の故に、方便して漸漸に彼三乘を勸めて、一乘に向はしむるが故に、是説を作すなり。」若し頓教に依らば、一切の時分、皆不可説なり、但し一念不生即ち是れ佛の故に。一念とは即ち無念なり、時とは即ち無時なり、餘は准思すべし。若し聞教に依らば、一切の時分は皆悉く不定なり。何を以ての故に。諸劫相入するが爲の故に、相即の故に、一切因陀羅等の諸の世界に、該通するが故に。仍りて各處に隨ひて、或は一念或は無量劫等、時法に違せざるなり、餘義は之に准ぜよ。

第五に修行所依の身とは、若し小乘に依らは、但分段身のみ有りて究竟位に至る、佛も亦同じく然なり、是れ實にして化に非ず。若し始教の中には、聲聞を廻せんが爲に、亦分段にして究竟に至ると説く。佛身も亦爾なり。然るに是れ化にして實に非ざるなり。若し直進の中には二説有り。一には十地の中、有功用と無功用との巖細二位の差別の相を、寄顯せんが爲の故に。即ち七地以還には分段有り、八地以上には變易有りと説く。二には實報に就かば、即ち分段にして金剛以還に至ると説く、十地の中には、煩惱障の種、未だ永

【十住經】 十住斷結縛卷九。
【無漏の智者】 故に第六の果人空無漏智、無間斷に恆に相續す。

【雜集論】 卷五取意の文。
【攝論】 卷十四。

【若し廻向】 通ずべし。不定性の二乗にして、變易身大の者は、變易身を受け、十倍三賢十地に進入す。

【律】 四分律受戒跋度五分律卷十五【同座す】 人空の理に座するをいふ

斷せず、故に留めて金剛に至るを以ての故に。既に惑障有り、何んが分段の身を受けざることを得んや。『十住經』の中に、『十地已還に中陰有り』とは、是れ此義なり。問ふ、『八地以上の一切の菩薩は、煩惱障に於て永く伏して行ぜず、無漏の智果、恆に相續するを以ての故に。阿羅漢の如し。既に現惑無し、何んが更に分段身を、受くることを得んや。』答ふ、『若し是れ凡夫ならば、即ち現惑を以て業を潤して生を受く、聖人は爾らず、但惑種を留めて用以て生を受く、故に『雜集論』に云はく、『一切の聖人は、皆隨眼力を以ての故に結生相續す』と。又梁の『攝論』に云はく、『凡夫に異るが故に、永く上心を伏し、二乗に異るが故に、彼種子を留む』と。解して云はく、聖人は現潤に非ざれども、彼復種を留む、如何が分段身を受けざらんや。若し八地以上には智障を緣と爲して、變易を受くと言はば、所留の惑種は即便ち無用ならん、何んが此第八地の初に於て、一切の煩惱の種を永害せざらんや。彼既に然らず、此れ云何が然らんや。若し廻向菩薩の聲聞の、已に煩惱を斷するに約せば、彼は即ち所知障を以て、變易身を受けて諸位に通ずべし。問ふ、『若し爾らば何が故に有る聖教に、八地以上には唯所知障を依止と爲すが故に、變易身を受くと説くや。』答ふ、『此等は二乗に寄對して、其優劣を顯さんと欲するが爲の故に、是説を作す。然るに此寄對、諸の聖教に依るに、位の不同に約して略して十門を辨す。一には羅漢は即ち佛に同すと説いて、更に位を分たす。律の中に説くが如し、『佛、五人を度し已りて云はく、即ち佛に通じて六羅漢有りて、世間に出づ』と。又同座する等、當に知るべし、此は小乘

【二には…分つ】
二に羅漢を佛に寄
せ、二障の斷不を
示す。

【對法論】 卷十四
【涅槃】 北本涅槃

經卷六四依品。
【四依】 世間の所

依となり、人天を
安樂ならしむ四あ

り、須陀洹、斯陀
含、阿那含、阿羅

漢なり。
【仁王經】 卷下取

意の文。
【遠達】 一本遠行

に作る、第七地の
こと。

【習因】 煩惱の習

氣。
【業果】 分段身。

【五には…如し】
後得智に就かば、

世出世の善根を修
するに差別ありと

いふ。
【初二…同す】 初

地に布施二地に持
戒三地に禪定を修

する故なり。
【道品】 三十七科

の道行品。
【世間と…至る】

教に約して説く。二には亦佛地に於て、阿羅漢を分出す、『對法論』に説くが如し、菩提を得る時、頓に煩惱障及び所知障を斷じて、頓に羅漢及び如來を成ずるが故に」と。此中に煩惱の盡る邊に約して、阿羅漢と名くと雖も、而も亦諸の聲聞の心に、勝欲樂を生ぜしめんが爲の故に、佛果に寄せて以て大小を分つ。三には第十地を阿羅漢と名く。佛地は超過せり、故に彼に非ざるなり。『涅槃』の中に、四依を説いて言ふが如し、阿羅漢とは第十地に住すと、此は因に寄せ果に異にして、以て大小を分つ。此上の二門は始教の中の、二乘を廻する教に約して説く。四には七地以還を羅漢に寄同す。八地以去は是れ菩薩の位なり、『仁王經』に云ふが如し、「遠達の菩薩は三界の習因を伏して、業果を滅して後身の中に住し、第七地の阿羅漢位に住す」と。此は因の中の自在と未自在との位に寄せて、以て大小を分つ、此は始教の直進の中に約して説く。此中に、既に聲聞に寄せて第七地に至る、故に煩惱障及び分段身は、俱に此位に至る。八地以去は是れ菩薩に寄す、行位は前に勝たり、是故に唯彼所知障及び變易身有り。五には初二三地を、世間に寄同す、世間の四禪等を得るを以ての故に。四地をば是れ須陀洹等に寄す、道品を得るを以ての故に。是れ初て出世するが故に。五地をば是れ聲聞の羅漢に寄す、四諦の法を得るを以ての故に。六地をば是れ辟支佛に寄す、十二緣生の法を得るを以ての故に。七地以去をば是れ菩薩に寄す、無生法忍を得るを以ての故に。此は『本業經』に説くが如し。上來は唯三乘教に約して説く、未だ一乘の法を、分出せざるを以ての故に。六には世間と二乗とは、前に同じく六地

初二三地を世間、四地を須陀洹、五地を聲聞、六地を緣覺に寄す。

【攝論】卷十五。

【初地の八過】初

地の菩薩、地前に

比して超過する功

徳入り、入位過

家過、種姓過、道

過、法體過、住處

過、業過、畢定過

【仁王經】卷上。

【九には信は説く】

得法の分齊を顯し

十倍の滿心に、一

切功徳を得て成

佛するを一乘に寄

す、十信を小乘に

寄す。

【若し終教に如し】

次に終教の依身を

明す。因みに宋本

は以下を卷三とす

に至る、第七地をば三乘の菩薩に寄す、未自在なるを以ての故に。八地以去をば一乘の法

に寄す、自在を得るを以ての故に。梁の『攝論』等に説くが如し。此は一乘三乘等に約

して、相を分ちて而も説く。七には初地の八過の中に於て、已に世間及び二乘を過ぐるが

故に。『地論』等に説くが如し。此は三乘の中の比證の分齊に約して説く。八には地前三賢

の位に、已に二乘地を過ぐ、上の『起信論』に説くが如し。又『仁王經』に云ふが如し、

「習種性の中に十種の心有り。已に二乘の一切の善地を超過す」と、此は終教の退と不退

とに約して説く。九には信の滿心の後、即ち一切の小乘三乘等を過ぐ、『賢首品』に説く

が如し。此は一乘に約して説く。十には初凡地に在りて創めて發心する時、即ち二乘を過

ぐ『智論』に説くが如し、羅漢の比丘は沙彌の發心を知りて推して、前に在く」と。此

は一乘及び三乘に通じて説く。是の如きの寄對の門有るに由るが故に、諸説の前後、此に

准じて知れ。若し終教に依らば、地前には惑を留めて、分段身を受く、初地の中に於て、

一切の煩惱の使種を永斷す。亦彼分別俱生を分たず、所知障の中にも亦、一分の羶品の正

使を斷す、是故に地上には、變易身を受けて金剛位に至る。餘の義は、下の斷惑の中に説

くが如し。

問ふ、若し地上に於て煩惱を留めずんば、云何が大悲同事に攝生するや。答ふ、若し

地前及び始教の中に於ては、願智力劣なるが故に、煩惱を留めて即ち助願受生す。今此

れは爾らず、願智恆勝の故に自在に同生す。問ふ、説の如くんば、八地以還の菩薩に、

【見】 貪愛の見。

【若し：如し】 頓
教の依身を明す。
【大般若經】 卷五
百七十六。
【若し：知れ】 圓
教の依身を明す。

略して二類有り。一には悲増上。惑を留めて分段身を受く。二には智増上。惑を伏して變易身を受く、此義は云何ん。」答ふ、「此の如き所説は、良に恐らくは未だ然らず。何んとなれば、若し悲増上ならば、其慧は必ず劣劣ならん、劣慧、悲を導かば、悲は應に見に滯るべし。滯見の悲を豈増上と名けんや。縦ひ悲智齊均なりとも、尙悲増上と名けず。況んや劣智を以て悲を導くを、而も増上と言はんや。若し智増上ならば悲劣ならん、劣悲、智を導かば、智は應に寂に滯るべし、滯寂の智、何んが増上と名けん。諸の菩薩は初従り以來、凡小に異なるを以ての故に、悲智相導き念念雙修す、車の二輪、鳥の兩翼の如し、何んが彼に増減有りと言ふことを得んや。當に知るべし、此れ始終二教、麤細異なるに由るが故に、二の生死有り、悲智互に増上なるに由るには非ざるなり。若し彼智増の者は、小乘の習有りて、諸の煩惱を怖るるが故に、永伏すと云はば、若し地前に於ては、未だ眞如を證せざれば、本習に約して此類有ることを容すべし、未だ純熟せざるを以ての故に。初地以上は、行解純熟して、同じく證し同じく行じ、同じく修し同じく斷ず、如何が是の如きの差別有ることを得んや。故に『起信論』に云はく、「地上の菩薩は、種性發心修行皆等くて差別無し」と。又此教の中に、地上の變易は、位に寄する不同なり、其四種有り、亦下に指すが如し。若し頓教に依れば、一切の行位は既に不可説なり、所依の身分も亦、此に准じて知れ。廣くは『大般若經』の、那伽室利分に説くが如し。若し圓教に依れば變易を説かず、但分段身にして、十地の離垢定前に至る、彼位に至りて、普見の肉眼を得る

【彼際を離す】分段生死の際を轉して、佛身を現す

【七】以下、惑障を斷じて、眞理を證する別を五教に就いて述す。

【若し三乗六六】三乗教の斷惑の分齊を明すに約位滅惑と寄惑顯位の二あり。今は初の二始教に依りて明す

【五識：故に】次には、上の十煩惱を八識により分別す。

【邪師等の三因】邪師、邪教、邪思

【四は分別也】疑と邪見、見取、戒禁取見。

【四俱生】我癡我慢、我慢、我愛の四、俱生起なり

【四俱生】我癡我慢、我愛の四、俱生起なり

を以ての故に、知んぬ是れ分段なり。又善財等の如きは、分段身を以て因位を究むるが故なり。問ふ、何が故に此中に、變易を説かざるや。答ふ、一世界性等以上の身分の如くれば、甚だ極めて微細にして、諸天に出過して、應に變易に同すべし。但し此教は生死の麤細の相を分たずして、總じて過患に就いて、以て一際と爲して、信滿の後に至りて、頓に彼際を離するを以ての故に説かず。餘は准じて之を思へ。

【第六に斷惑の分齊とは、若し小乘に依れば餘は別に説くが如し。若し三乘に依れば、二種の義有り。一には位に約して惑を滅し、二には惑に寄せて位を顯す。初の義とは、若し始教に依れば、三乗の斷惑の差別を具足す、此は是れ、三乗教なるに由るが故に。障に二種有り、謂はく、煩惱と所知となり。先づ二乗の煩惱障を斷ずることを辨す。中に於て二有り。先に障の名數、後に斷得果なり。初の中に煩惱に二有り。謂はく、分別と俱生となり。總じて十種有り。一には貪、二には瞋、三には無明、四には慢、五には疑、六には身見、七には邊見、八には邪見、九には見取、十には戒禁取なり。中に於て、四種は唯分別起なり。謂はく、疑と邪見と見取と戒禁取となり。餘の六は二種に通ず。五識には初の三起すことを得。亦分別及び俱生に通ず。意識の中の邪師等の三因を用て、引くに由るが故に、分別起有ることを得るなり。意識には十種を具す。四は分別なり、六は二に通ず。末那には唯四但俱生なり。六が中には、瞋及び邊見とを除く。瞋は唯不善、此識は有覆無記なるを以ての故に。又一類相續して第八識を緣じて、刹那刹那に我と執するを以ての

【第六に斷惑の分齊とは、若し小乘に依れば餘は別に説くが如し。若し三乘に依れば、二種の義有り。一には位に約して惑を滅し、二には惑に寄せて位を顯す。初の義とは、若し始教に依れば、三乗の斷惑の差別を具足す、此は是れ、三乗教なるに由るが故に。障に二種有り、謂はく、煩惱と所知となり。先づ二乗の煩惱障を斷ずることを辨す。中に於て二有り。先に障の名數、後に斷得果なり。初の中に煩惱に二有り。謂はく、分別と俱生となり。總じて十種有り。一には貪、二には瞋、三には無明、四には慢、五には疑、六には身見、七には邊見、八には邪見、九には見取、十には戒禁取なり。中に於て、四種は唯分別起なり。謂はく、疑と邪見と見取と戒禁取となり。餘の六は二種に通ず。五識には初の三起すことを得。亦分別及び俱生に通ず。意識の中の邪師等の三因を用て、引くに由るが故に、分別起有ることを得るなり。意識には十種を具す。四は分別なり、六は二に通ず。末那には唯四但俱生なり。六が中には、瞋及び邊見とを除く。瞋は唯不善、此識は有覆無記なるを以ての故に。又一類相續して第八識を緣じて、刹那刹那に我と執するを以ての

【有覆無起】性染汚なるも、善惡何れにも非ざる法。【第八識：起らず】第八識には、總じて煩惱起らず、それは異熟生にして、無覆無起なる故なり。

【此分別：故に】以下、三界に依て分別す。【其分別起：なり】惑障の數を擧ぐ。【又迷等：故なり】三界諸法唯心所變と見るが故に心識一切を緣じ、一切に迷ふ。

【第二に云云】次に斷惑得果を明す。斷惑とは二障を斷じ得果とは四果を得るをいふ。【其三人有り】初に次第證の人次に超越證の人なり。【具縛】見修二惑に繫縛せらるる凡夫。

故に、邊見無し。又後の三見と及び疑とは、三因に藉りて生ず、此識には彼無きを以ての故に起さず。又相續に由るが故に、第六の所引に非ざれば五識に同ぜず、是故に唯四なり。其第八識に總じて起らず、唯是れ異熟にして、無覆無記性なるが故に。此分別俱生は皆三界に通ず、曠は唯欲界なり。上の二界の煩惱は、皆是れ有覆無記の性なるを以ての故に。其分別起とは、欲界の四諦に各各十種有り、即ち四十と爲す。上の二界には、曠を除いて諦別に九有り、即ち七十二有り、欲界を并せて合して一百一十二有り。其俱生とは欲界には六を具す、上の二界には曠を除いて、各各唯五なり、故に合して十六有り。前の分別に通じて、總じて一百二十八有り。問ふ、「何が故に前の愚法小乘の中には、十使通じて四諦に迷はざるに、此中には即ち通ずるや。」答ふ、「此に二義有り。一には三乘の中には、煩惱の功力、漸く寛廣なるを以ての故に、一切を障ふるなり。二には又迷等の義、一切の境に、通ずるに由るが故なり。」

第二に斷得果とは、先に分別を斷ずるに、其三人有り。一には若し具縛従り眞見道に入りて、刹那に頓に三界の、四諦の分別の煩惱を斷じて、預流果を得るなり。二には若し倍離欲の人は眞見道に入りて、兼ねて倍離欲を斷じて、一來果を得。倍離欲と言ふは、謂はく、凡夫の時、欲界の修惑の九品の中に、前の六品を伏斷するが故に、倍離欲と云ふ。見道に入る時、即ち前の所伏を永斷するが故に、是を以て彼果を得るなり。三には若し已離欲の人、眞見道に入りて、兼ねて九品を斷じて、不還果を得。「瑜伽」に説くが如し、「見道

【眞見道】根本智にて眞如の實相を見る。

【二には已離欲の人】全離欲ともいふ。凡夫位に欲界九品の修惑、色無色界の修惑を伏す故に眞見道に入り見惑を斷じ、又九品の惑を斷ず。

【瑜伽】論卷二十八。俱生を斷ず云云】以下俱生起の煩惱斷を明す。

【漸出離】漸次に三界を離れ、順次に四果を得。

【頓出離】中間の一來不還二果を超え、直に羅漢果を得。

【頓に三界を斷ず】欲界上二界の三種の九品の修惑を初に三種の上上品次に中上品乃至第九に下下品を一時に斷ずるをいふ。

【對法論】雜集論卷十三。

【其末那云云】以

の果に入る者に、其三種有り。其所應に隨ひて、三果を證するが故に」と。俱生を斷ずとは、第六識の俱生は、九地に各各九品有り。又修道に進む人に、其二種有り。一に漸出離とは、欲界の九品の中の前六品を、斷じ盡して一來果を得、九品を斷じ盡して不還果を得、上二界を盡して羅漢果を得。二には頓出離とは、初果を得已りて、即ち頓に三界を斷じ、漸く九品を除いて、即ち羅漢を得て更に餘果無し。何んとなれば、彼欲界の九品の修惑と、及び上二界と、總じて三種の九品、各各初の一品一時に頓に斷ずるを以ての故に、頓斷三界と云ふ、豎に九品を論すれば、一一に別に斷ずるが故に、漸除と云ふなり。若し爾らば

何が故に、漸斷有りとならば、三界の法に於て頓縁すること、能はざるを以ての故に。【對法論】に云はく、「頓出離とは、謂はく、諦現觀に入り已りて、未至定に依止して出世の道を發し、頓に三界の一切の煩惱を斷じ、品品に別に斷ずれば、唯二果を立つ。謂はく、預

流果と阿羅漢果となり。乃至廣く『指端經』等を引く、彼に説くが如し。其末那の煩惱は、行相微細なり、前の漸頓二人は、皆非想地の惑と一時に頓に斷ず。故に、『瑜伽』に云はく、

「末那相應の任運の煩惱は、唯非想處の欲なるが故に、一時に頓に斷ず、餘惑の漸次に而も、斷ずるが如くには非ず」と。問ふ、「何が故に前の愚法二乘には、頓の出離無きに、此

中に有るや。」答ふ、「前は劣なるが故に、此は超過することを顯さん爲なり。愚法二乘は此勝智無し、彼教の劣なることを顯して、方便して漸く引いて、彼勝欲を起さしめて、

小を捨て大に従はしむるが故に、是説を作す。其れ末那の惑滅を説くこと、小乘に無きこ

下第七末那識相應の俱生起を明す。

【非想地の惑】九品中の、第九下下品の惑。

【瑜伽】卷六十三【任運の煩惱】俱生の惑。

【非想處の欲】末那相應に、我癡、我見、我慢、我愛ある中、今は我愛を擧げて他を攝めていふ。

【其所知障云云】以下、所知障斷を明す。

【其餘：有り】二乘所知障を斷ずると然らざるとありと。

【慧解脱】鈍根の羅漢にして、慧障を斷じ、未だ定の障を斷ぜざるをいふ。

【俱解脱】慧と定の障を斷じて、滅盡定を得るをいふ。

【然るに：故に】上に述べし廻心教と、愚法二乘の斷惑の相違を示す。

とは、亦此に准じて知れ。是は二乗の煩惱障を斷ずることを謂ふなり。『其所知障とは諸の趣寂の者は、無餘に入る時一切皆斷ず、唯是れ非擇滅なり。其餘の一切は斷と不斷とあり。慧解脱は斷ぜずして、俱解脱の人は分に所斷有り。謂はく、八解脱障の不樂無知は、八勝解を修して對治する所なるが故に。』瑜伽に説くが如し。又諸の解脱は、所知障の解脱に由りて、顯るる所なり。聲聞及び獨覺等は、所知障に於て、心に解脱を得るに由るが故に」と。當に知るべし此始教は、愚法を引いて漸く大に向はしむるが爲の故に、此教を安立すること、深く彼よりも勝れたり、故に所知障にも亦分斷を許す。

然るに上の所斷は愚法に同ぜず。彼は唯煩惱の得を斷ずるを以ての故に。此は則ち兩らず、種子を斷ずるが故に。直進の菩薩の斷惑は、二障俱に斷ず。又煩惱の中に、二乗の、界に約して品を分つには同ぜず。但し二障に於て分別起の者をば、地前に現行を伏し、初地眞見道の時、一刹那の中に煩悩を斷ず。其俱生の中の煩惱障は、初地以去に自在に能く斷すべけれども、留めて故に斷ぜず。何を以ての故に。潤生攝化の故に、二乘地に墮せざるが故に。所知障を斷ぜんが爲の故に。大菩提を得んが爲の故に。是故に『攝論』に云はく、「惑に由りて惑盡くるに至りて、佛の一切智を證す」と。解して云はく、惑盡とは是れ所知障の盡るなり。即ち煩惱障を留めて、勝行を起すに由るが故に、此位に至りて佛果を證することを得。又梁の『攝論』に、既に種を留むと云ふ。是故に當に知るべし、煩惱障の種、金剛位に至るといふことを。其所知障は行相細なるが故に、正しく菩薩の道

【界に：同ぜず】三界九地に約し、見修二惑の百二十八別して修惑に八十一品を立つるに同ぜず。

【其俱生の中云云】以下俱生地の二障斷を明す。初に六識相應の惑を遣す。【攝論】卷十四。【對法論】卷十四。【其末那：盡す】

次に第七相應の俱生起の煩惱所知二障斷を明す。【攝論】卷十四。【其第七：故に】以下、第七相應の煩惱障を明す。

【觀智：故に】第六識に人空無漏智起ること、七地以前には間斷あるをいふ。

【後地に：起る】所知障の法執、六七識共に、八地以上七地以前何れにも起るをいふ。【若し所知障云云】六七二識の所知障

を障ふ。是故に地地に別斷して、要す佛地に至りて、方に總じて盡すことを得。是に由りて即ち二障の修惑、俱に佛地に至ると説く。故に『對法論』に云はく、「又諸の菩薩は、十地修道位の中に於て、唯所知障の對法の道を修して、煩惱障に非ず。菩提を得る時に、頗に煩惱及び所知障を斷じて、頗に阿羅漢及び如來を成ずるが故に」と。其末那の俱生の行相、細なるが故に、亦前に同じく、佛地に至りて盡すなり。問ふ、「其二障の修惑諸識と相應して、地上に現行するに、何の同異か有るや。」答ふ、「其煩惱障の内に、第六識の惑は既に故に彼を留む。是故に現も種も、皆智を以て御め用ひて、勝行を成じて過患を起さず。猶し毒蛇を、咒力を以て御めて死せしめず、過を起すこと無くして、而も餘用を成ぜしむるが如く、菩薩の善巧の留惑も亦爾なり。故に『攝論』に云はく、「毒の咒を以て害せらるるが如し」等と。是故に當に知るべし、彼煩惱に於て、或は現或は種皆自在を得。其第七の煩惱は性の潤生に非ざるが故に所留に非ず、行相細なるが故に。七地已還に有時は暫く現す、觀智の間有るを以ての故に。其所知障は皆後地に起し、或は前地に於ても起る。或は現或は種は地地に別斷するを以ての故に。『問ふ、「若し爾らば何が故に有處に、七地已還には有漏心を起す等と説くや。」答ふ、「若し第六識の中の煩惱障を、有漏と爲すに約せば、彼既に留むるが故に、即ち似の有漏なし。若し所知障を有漏と爲すに約せば、即ち實の有漏なり。此二は十地に通ず。若し末那の煩惱は即ち實の有漏なり、七地に至るまで有無不定なり。有る時は暫く有漏心を起すを以ての故に。餘の義は知んぬべし。』又

は十地に通じて存す。

【又此教：如し】始教の斷惑に就いて慈と智との交渉を述す。

【對法論】卷七。

【維摩經】卷三に五無無自性即空といふ。

【若し終教云云】以下終教の斷惑分齊を明す。

【彌勒所問經論】卷八。

【四無量】慈、悲喜、捨の四心、無量の衆生を對縁とする故にいふ。

【楞伽の文】上は觀、下の二乘廻心を明す中にあり。

【其善：淨なり】以下、正しく菩薩の斷惑を明す。

【正使】惑障にして、現行と種子を合む。而して惑體といふも、終教にては、一心眞如に依存する妄法なれば、實には別體なし。

此教の中に感滅し智起る分齊とは、惑の種、滅相に在る時、智は即ち生相同時に相返す。築けば即ち押し、押せば即ち築く等の如し。廣くは『對法論』に説くが如し。又此障法は、識に依りて無性なるを以ての故に、即ち空にして無分別なり。是れ其障の義なり。『維摩經』に云ふが如し、「五受陰洞達しぬれば、空にして所起無し、是れ苦の義なり」と。今此障の義も亦、彼に准じて之を知れ。

若し終教に依らば、諸の聲聞は煩惱障に於て、尙斷すること能はず、但し能く折伏す、何に況んや能く彼所知障を斷ぜんや。故に『彌勒所問經論』に云はく、「聲聞・辟支佛は、實の如く四無量を修すること能はず、究竟して諸の煩惱を、斷すること能はず。但し能く一切の煩惱を折伏する」等と。『楞伽』の文も亦、上に説くが如し。問ふ、「此説は何が故に前教と異なるや。」答ふ、「彼は二乘を引かんが爲の故に、未だ深く説かざるが故に、是故に上を以て下に就いて、煩惱障は彼二乘に同じく、佛地に方に盡すと説く。又下を以て上に同じて、亦二乘は全に惑障を斷じ、分に所知を斷すと許す。今此は實に就く。愚法の二乘は、廣大の心無きを以ての故に、究竟して煩惱障を伏すること能はず。又亦可ふべし。前は三乘の中の聲聞に約し、此中には愚法に約するが故に不同なり。其菩薩の人は二障の中に於て、俱生及び分別を分たず、但し正取及び習氣のみ有り。地前には使の現を伏し、初地には使の種を斷じ、地上には習氣を除き、佛地には究竟して淨む。然るに彼地前三賢の位の中には、初より即ち二乘地に墮せざるが故に、煩惱障に於て自在に能く斷すべ

【初より不退を得るを以て不退を得る】

【攝論】 卷三取意の文。十住已上に無漏智を得と。

【仁王經】 卷下、取意の文。

【初地：爲す】 次に地以上の斷惑。今第六護相應の惑斷を明す。

【習障の一分の處】 習氣に對し正使をい、實には正使全滿するなり。

【第二取意の文】 卷二取意の文。

【後二眞觀：觀す】 初地に至りて、衆生即法身、法身即衆生身と觀す。

【其末那、云はざるの文】 眞觀の相應の惑斷を明す。

【攝論】 卷九、【若し是は、故に】 以下唯識の義を破斥す。彼善は、初地眞見道に、第六法空觀に入る、故に末那一時起らず、正智は金剛心

に在りて、衆生即法身、法身即衆生身と觀す。

けれども、留めて故に斷せず、習障を除く等の爲の故に。是故に梁の『攝論』に云はく、「十解以去に出世の淨心を得」と。又云はく、「十解以上を聖人と名く、二乘地に墮せず」と。『仁王經』に云はく、「地前には人空を得て、而も證を取らず」と等となり。又、『起信論』

に、「小分法身を見ることが得、等と、皆此義なり。此菩薩は唯習障を怖るるを以ての故に、唯識眞如等の觀を修して、彼障を伏滅す。然も煩惱障に於ては直怖れず、對治を修せざるのみに非ず、亦乃ち故に留めて勝行を助成す。初地以上には、習障の一分の處を斷するが故に、煩惱障に於て復更に留めず、是故に二障見修を分たす、初地に至る時正使俱に盡す。故に『攝論』に云はく、「問うて曰はく、若し聲聞の人は、先に見道所斷の煩惱を斷じ、然して後に漸く修道の煩惱を斷ず。何が故に菩薩は聲聞に同ぜざるや。答へて

曰はく、菩薩の人は無量世より來、諸の衆生の爲に利益の事を作す。後に眞如甘露法界を見るに、彼一切の諸の衆生の身、而も實に我所求の處に異らずと觀す。是故に菩薩は、見修道の中の一煩惱は、能く利益衆生の行を障るが故に、即ち見道の中にして、一切俱に斷ず」と。此文を證と爲す。其末那の煩惱は亦初地に盡を斷じ、後に殘習を除く。故に

無性『攝論』に云はく、「染の末那を轉じて平等性智を得。初理觀の時先に已に證得し、修道位の中にして、轉た復清淨ならしむ」と。解して云はく、轉淨とは習氣を除くなり。

正使は先に斷ずるを以ての故に、後には但轉淨と云うて、更に斷と云はざるなり。若し此

は是れ、眞見道に入る時に、暫く伏して起さしめず、正斷に非ずと言はば、即ち轉た復清

淨ならしむ」と。此文を證と爲す。其末那の煩惱は亦初地に盡を斷じ、後に殘習を除く。故に無性『攝論』に云はく、「染の末那を轉じて平等性智を得。初理觀の時先に已に證得し、修道位の中にして、轉た復清淨ならしむ」と。解して云はく、轉淨とは習氣を除くなり。

正使は先に斷ずるを以ての故に、後には但轉淨と云うて、更に斷と云はざるなり。若し此は是れ、眞見道に入る時に、暫く伏して起さしめず、正斷に非ずと言はば、即ち轉た復清

淨ならしむ」と。此文を證と爲す。其末那の煩惱は亦初地に盡を斷じ、後に殘習を除く。故に無性『攝論』に云はく、「染の末那を轉じて平等性智を得。初理觀の時先に已に證得し、修道位の中にして、轉た復清淨ならしむ」と。解して云はく、轉淨とは習氣を除くなり。

正使は先に斷ずるを以ての故に、後には但轉淨と云うて、更に斷と云はざるなり。若し此は是れ、眞見道に入る時に、暫く伏して起さしめず、正斷に非ずと言はば、即ち轉た復清

淨ならしむ」と。此文を證と爲す。其末那の煩惱は亦初地に盡を斷じ、後に殘習を除く。故に無性『攝論』に云はく、「染の末那を轉じて平等性智を得。初理觀の時先に已に證得し、修道位の中にして、轉た復清淨ならしむ」と。解して云はく、轉淨とは習氣を除くなり。

正使は先に斷ずるを以ての故に、後には但轉淨と云うて、更に斷と云はざるなり。若し此は是れ、眞見道に入る時に、暫く伏して起さしめず、正斷に非ずと言はば、即ち轉た復清

位とす。

【寶性論】 卷二。

【無間生習氣】 惑體を斷せし後、殘れる氣分をいふ。

【彼一來果を得ず】 直ちに羅漢果を得る意を含む。

【又此教…如し】 正しく斷惑の相を示す。

【又此教…知るべし】 惑障の體性を示す。

【又經に云はく】 維摩經卷上。

淨と言ふことを得ず。總じて未だ斷ぜざるを以て、何ぞ轉淨と名けん。若し始教に依らば、彼に説くが如くなるべし。是故に當に知るべし此教は、地上には但習氣を除くが故に。『寶性論』に云はく、「不淨とは、一切の凡夫は煩惱障有るが故に。有垢とは、諸の聲聞辟支佛等に、習障有るを以ての故に。有點とは、諸の菩薩摩訶薩等は、彼二種の習氣障に依るを以ての故に」と。解して云はく、「論』に地上を釋して、摩訶薩と名くと。故に知んぬ但習氣障のみ有るなり。此中の習氣は、正使の種子を斷じてより、無間に方に習氣有り。何を以ての故に。未斷以前には微薄無きが故に、種斷の無間に方に微薄有るが故に。『論』に説いて無間生の習氣と名く。問ふ「云何が地上に煩惱の使盡きて、而も二乘地に墮せざることを得るや。」答ふ、「智力勝れたるが故に、智障の正使も亦已に除くが故に。始教小乘の頗出離の人の、欲界の惑の六品を斷じ盡す時、上界の六品も同じく盡すが故に、猶尚ほ彼一來果を得ざるが如し。況んや此菩薩は、道力殊勝なり、又已に智障の使を斷ずと説くが故に。若し地前及び始教には、彼失有るべし。此中には無きなり。」又此教の中には、正しく惑を斷ずる時、智起り惑滅す。初に非ず。中後に非ずして、前中後を取るが故に。云何が滅する。虚空の如く本來清淨なり。是の如く滅す、廣くは『十地論』に説くが如し。又此教の中の煩惱等の法は、皆是れ眞如隨縁の所作なり。是故に眞如に異らず、是れ煩惱の義なり。『起信論』に説くが如し。又經に云はく、「一切の法は即ち如なり等」と、煩惱も此に准ぜよ。是故に當に知るべし、前の諸教と施設不同なり、宜しく准知すべし。

【八】以下一本、華嚴經中一乘五教分齊義卷下之四とす。以下第二に寄惑顯位に十八門あり、今は初なり。【比證二位】比位とは相依比觀の位即ち地前三賢、證位は眞證の位即ち十地。【攝論】卷九取意の文。【地前に：除く】地前に二障の現行を伏し、初地種子を頓斷し、地上に習氣を漸斷する意【又ハハハハ】次に【卷三卷十一、卷七】の文なり。【人我執：減す】煩惱障も所知障を減する意。而も今所知障とは二障の習氣をいふこと第一文の如し。【仁王經】卷下取意の文。【皮等の三惑】皮肉心の三、上中下品の惑。【攝論】卷四及び

【八】第二に寄惑顯位を明すとすは、謂はく、諸の聖教の説に、略して十八門有り。一には二障を減するに寄せて、以て二位を顯す。謂はく、惑智二障を分ちて、比證の二位を顯す、故に、梁の『攝論』に云はく、「地前に漸く煩惱障を除き、地上に漸く智障を除く」と。又云はく、「十解以上は出世の淨心を得す」と。又云はく、「地前には人無我を得と雖も、法無我は未だ淨ならざるを以ての故に、人無我も亦清淨ならず」と。又云はく、「其人我執は前の十解の中に已に除く、今は唯法我執を減す」と。又『仁王經』に云はく、「習種以上に生空の位に入る、聖人の性を得るが故に」と。『本業經』起信論にも亦此説に同じ。二には被等の三惑に寄せて、三僧祇を顯す。故に梁の『攝論』に云はく、「初僧祇には皮煩惱を斷じ、第二僧祇には肉を斷じ、第三僧祇には心を斷ず」と。三には此三惑を以て、地地の三心の不同を寄顯す。梁の『攝論』の、三十三の僧祇の中に説くが如し。地地の中に入心に皮を除き、住心に肉を除き、出心に心を斷ずる等」と。四には二障の蠱細を以て、三位を寄顯す。『地持』に云ふが如し、「二障三處に過ぐ。謂はく、地前と地上と及び佛地となり」と。五には染心の蠱細を以て、三位に寄せて以て三身を顯す。『金光明經』に説くが如し、「諸の伏道に依りて、起事心盡きて化身を顯すことを得、法斷道に依りて依根本心盡きて、魔身を顯すことを得、勝拔道に依りて根本心盡きて、法身を顯すことを得」と。有る人解して云はく、伏道は是れ地前、起事心は是れ第六識なり。法斷は是れ地上、依根本心は是

卷十一取意の文。
 【三十二僧祇】前二、三僧祇(信行、精進行、趣向)十地各に三ありとす
 【地持】菩薩地持經卷七。
 【過ぐ】離るる意
 【金光明經】金光明經卷一の文
 【彼經】前と同じ
 【三無性】相、性、勝義の三。
 【彼經】前と同じ
 【三身】法報化の三身。
 【三相】遍計、依他、圓成實性の三
 【四障】凡夫、外道、二乘所起の惑
 【信乃至十廻向の四】地前の四位
 【四行】信行、般若、三昧、大悲、淨の涅槃の四徳の因
 【四報】鐵、銅、銀、金。
 【聲聞畏苦障】三
 界生死の苦を怖畏し、虚空の滯寂す
 【破虛空器三昧】聲聞法喻合擧す。

れ末那なり。頼耶の本心を縁するに依るを以ての故に、勝拔は是れ金剛位、根本心は是れ頼耶なり。六には三障に寄せて直に三身を顯す。故に彼經に云はく、「煩惱障は清淨にして、能く應身を現じ、業障は清淨にして、能く化身を現じ、智障清淨にして、能く法身を現す」と。七には三無性に迷うて起す所の煩惱を以て、三身を寄顯す。故に彼經に云はく、「一切の凡夫は三相の爲の故に、縛有り障有りて、三身を遠離して三身に至らず。何者をか三と爲す。一には思惟分別相、二には依他起相、三には成就相なり。是の如きの三相は、解すること能はざるが故に、滅すること能はざるが故に、淨なること能はざるが故に、是故に三身に至ることを得ず。是の如きの三相は、能く解し能く滅し能く淨む。是故に諸佛は三身に至る」と。解して云はく、能解とは是れ所執性なり、但し應に知解すべきが故に。能滅とは染分の依他性、應に斷滅すべきが故に、能淨とは在纏眞如、修して淨からしむるが故に。八には四障に寄せて以て四位を顯す。此に二義有り。一には正使に約して、地前の四位四行四因四報を寄顯す。何となれば、謂はく、闍提不信障の使滅し已るを以て、十信の位に信樂大乘の行を成じ、淨徳の因と爲し、及び鐵輪王の報を翻顯す。二に外道我執障を以て、寄せて以て十解の位に、般若の行を成じ、我徳の因と爲し、銅輪王の報を翻顯す。三には聲聞畏苦障、十行の位に破虛空器三昧の行を成じ、樂徳の因と爲し、銀輪王の報を寄顯す。四には獨覺捨大悲障、十廻向の位に大悲の行を成じ、常徳の因と爲し、金輪王の報を寄顯す。又前の四障を翻じて得る所の四行を、即ち佛子の四義と爲す。

【彼果報】 分段身
【本業經】 卷上。

【色習の無明】 色
煩惱の習氣。 【心習】 心煩惱の習氣。

【二無性論】 卷上
【分別論】 通計所
執性。

【雜集論】 雜集論
卷七、略論、瑜伽
等の論。

【何を以て云云】
終後意を以て始教
を評す。

【妄りに】 妄の字

【即攝】 五蘊即我
なすとす。

【離離】 五蘊を離
れて我ありとす。

【見道に】 故に
見道に満智を起
し、我の理を證
するを證す意。

【任運】 煩悩 俱
生運の煩悩。

【實義云云】 以下
終教の實義を述す
【末那の煩悩云云】

已還をば、三界の色心の煩悩、及び彼果報を滅するに寄せ、八地以上をば、色心の二習無明を滅するに寄せ。故に『本業經』に云はく、「七地以上には、三界の色心の二習と果報を滅す、滅して遺餘無し。八地には色習の無明を盡し、九地には心習已に滅し、無明も亦除く。十地には一習無明滅盡す」と。十二には「三無性論」に依るに、二性を滅するに寄せて、以て見修二位の差別を顯す。故に彼論に云はく、「見道に由るが故に、分別性即ち無なり、故に不得と言ふ。修道に由りて依他性即ち滅す、故に不見と言ふ」と。十三には『雜集論』等の論に依るに、分別俱生の二種の煩悩を以て、見修二位の差別を寄顯す。何を以てか但是れ寄位にして、實斷に非ずと知ることを得るとならば、分別の我見の如きは、三縁に籍りて生ず。謂はく、邪師と邪教と及び邪思惟となり。妄に即蘊離蘊等の我を計す。佛弟子の如きは、凡位に居すと雖も、然も正師正教正思惟に依るが故に、直に即蘊等の執を起さざるのみに非ず、亦乃し無我性を顯樂す。此人豈斷じ已りて、見道に入らんや。若し現行無しと雖も、然も種有るが故に、見に入るに非ずと言はば、既に現行無し、則ち應に資糧加行に入るべし。義は既に爾らず、是故に當に知るべし、見道の無我の理を顯さんが爲の故に、彼横計顛倒の曇惑に寄せて、返じて以て之を顯すことを。又任運所起の煩悩は、細にして斷じ難きを以ての故に、修位の漸増の差別を顯す。實義の如きは、但一の煩悩に麤有り細有り、見位には麤を斷じ、修位には細を斷ず。末那の煩悩の如きは、二位に通じて斷ず。『無相論』に云ふが如きは、第二の執識及び相應の法は、羅漢位に至りて

以上六識相應の惑に就き述し、今は第七識相應の煩惱に就いていふ。【無相論】世親の轉識論取意の文。【第二の執法】末那識と相應の我見等の四。【見諦心法】見道の我執の第七、及び相應の四煩惱肉の字末本内に作る。【餘殘：屬す】習氣未除のものは修道斷なり。【十餘：除く】十住、十行、十廻向は、邪師邪思惟を除くと。

究竟して滅盡す。若し見諦の肉煩惱の識と及び心法とは、出世道の十六心を得る時、畢竟じて斷滅す。餘殘の未だ盡さざるをば、但思惟に屬す、是を第二の識と名く」と。無性の『攝論』も、亦此説に同す。上の所引の如し、故に知ることを得るなり。十四には分別の惑の籍る所の三縁に於て、地前三賢の位の別を寄顯す。謂はく、十解等に邪師等を除く。次の如く應に知るべし、此は直進に約して説く。又邪師邪教の所起を以ては、資糧位に寄せて伏す。行相麤なるを以ての故なり。邪思惟の所起をば、加行位に寄せて伏す。行相細なるを以ての故に、此は麤心の二乘に約して説く。十五には俱生の内の六七識の惑を説くに、七地已來を現行有るに寄せ、八地以去は永伏して起らず。此は入觀の有間無間の位の異を、寄顯せんが爲の故に、是説を作す。十六には又六識の煩惱に寄せて四地に至り、末那の煩惱に寄せて七地に至る。八地以去には唯所知障のみに有るを以て、此も亦世間の二乗と菩薩とを、顯さんが爲の故に是説を作すなり。十七には十地及び佛地の、各差別することを顯さんが爲の故に、十一の無明を以て、返じて之を寄顯す。十八には地地の眞俗二智を、顯さんが爲の故に、二十二の無明を以て、寄せて以て之を顯す。『深密經』に云ふが如し、此二十二種の愚癡品、及び十一の塵重に由りて、諸地を安立するが故に」と。既に安立と云ふ、故に知んぬ寄顯なり。此諸義は廣くは、『瑜伽』『對法』『唯識』『攝論』等に説くが如し。

上來は多分、始教に約して説く。以上の諸門は並に是れ阿含門なり。惑に寄せて位相の

差別を顯す。何を以ての故に。十地を護らんが爲の故に。衆生をして十地の中に於て、慢執を離れしめんが爲の故に、位相甚深にして極めて了知し難ければ、惑に寄せて位を顯し、淨信を生ぜしむるが故に。餘義は准思して見つべし。

【若し…准ぜよ】以下、頓教の斷惑を明す。

【一切…べからず】頓教は唯一絕對平等の理體により説くが故に、煩惱の相を見ず。

【若し…准ぜよ】以下圓教の斷惑を明す。

【所障の法…如し】能障所障に就いて、即一切の義を述す。

【但し法…なり】能斷能證に就いて述す。

【斷すべき…故に】差別相そのまま本來清淨なりといふ。

【若し門…等なり】圓教中に前後次第して説くは三乘に從へるものなり。

若し頓教に依らば、一切の煩惱は本來自離なり、斷と及び不斷とを説くべからず。法界體性經に云ふが如し、「佛、文殊師利に告ぐ、汝云何が諸の善男子等を教へて、菩提心を發さしむるや。文殊の言はく、我我見心を發せよと教ふ。何を以ての故に。我見の際には即ち是れ菩提なるが故に」と。此を以て之に准ぜよ。若し圓教に依らば、一切の煩惱は共體性を説くべからず。但し其用に約すれば、即ち甚深廣大なり。所障の法は即ち一切にして、主伴を具足する等を以ての故に、彼能障の惑も亦是の如し。是故に使と習と種とを分たす。但法界の一得一切得なるが如くなるが故に、是煩惱も亦一斷一切斷なり。故に「普賢品」には一障一切障と明し、「小相品」には一斷一切斷と明すは、是れ此義なり。又此斷惑の分齊、上下の經文に准するに四種有り。一には證に約す。謂はく、十地の中に斷ず。二には位に約す。謂はく、十住以去に斷ず。三には行に約す。謂はく、十信の終心に斷ず。四には實に約す。謂はく、斷すべきこと無し、本來清淨なるを以ての故に。廣くは經に説くが如し。又前の三乘等の諸門の斷惑に、若し一障一切障、一斷一切斷なるをば、即ち此教に入る。若し門に隨ひて前後せば、是れ三乘等なり。此は別教に據りて言ふ。若し攝方便に約せば、前の諸教に明す所、並に此中に入る、是れ此方便及び所流所

【方便】故に。同教に四せは方便權故にて圓教の所流所目なりといふ。【九】七に二乗の廻心を明す。初に二種の説を擧ぐるに、小乗の廻心【二】には、明す。次に終教の廻心を明す。【問六云】以下唯講學に於ける難を會通し、無餘依涅槃に入るも、生【瑜伽】卷五十一【顯揚論】卷五十七【二法】斷證せず。無明と本覺の二に於て、一を斷じ一を證せざるをいふ。【化城の同論】法華經化城喻品に、華經して三百由旬の化城を説くと、無餘涅槃が方便説なると同じきをいふ。【楞伽】四卷楞伽卷二取意の文。

目なるを以ての故に。餘義は之に准ぜよ。斷惑門竟んぬ。
 第七に二乗の廻心とは、六種の説有り。一には或は一切の二乗皆廻心無し、更に餘求無きを以ての故に。小乗の中に説くが如し。二には或は一切皆廻心す。悉く佛性力有りて、内薰の因と爲すが故に。如來の大悲力の外縁、捨てざるが故に、根本無明猶未だ盡きざるが故に。小乗の涅槃は、究竟せざるが故に。是故に一切廻心して、大菩提に向はずといふこと無し。此は終教に約して説く。問ふ、『瑜伽』『顯揚論』に、諸識の成就不成就の中の内、聲聞獨覺無餘依涅槃に入る者は、阿頼耶識及び諸の轉識、俱に成就せずと説くが如きは、既に本識轉識皆滅して餘すところ無し、後に心を生ぜば何を以てか因と爲さん、因無くして而も生ぜば理に應ぜざるが故に。答ふ、『彼顯論』は始教門に依る、小乗を引くが故に、所立の頼耶行相は顯現にして、眞より起らず、故に滅有りと説く。又小乗に順ぜんが爲の故に、亦彼般涅槃は究竟にあらざるに非ずと許す。故に入り已りて、復起すにあらずと説くなり。今終教の中には、實に就いて而も説く。既に根本無明如來藏を動じて、梨耶識を成ずるを以て、彼二乗の人は此二法に於て、既に俱に未だ斷證せず、何に因りてか阿梨耶識を滅することを得ん。又彼に於て斷證無きに由るが故に、所得の涅槃豈究竟と爲んや。化城の同論應に便ち失有るべし。又上の四因に由るが故に、心を生ずることを得るなり。問ふ、『心を生じて廻向する時の如きの分齊は云何。』答ふ、『根等しからざるに由るが故に、去るに遲疾有り。遲き者は劫を遷て乃ち起つ。故に『楞伽』に云

【三昧の樂】 滅盡定に入り、分段心身の苦を捨離するをいふ。

【此文は…】 禪論の文は總括的に無餘涅槃に入れる者の生心覺道をとくのみ。

【涅槃經】 北本涅槃經卷二、十一等取意の文。

【七生を受く】 見道以後、欲界の修惑によりて受く。

【苦し、身…】 欲界修惑の前六品を斷じて、一來果を得る者。

【若し…】 欲界修惑の九品を斷じて、不還果に入る者。

【若し獨覺…】 獨覺獨覺に約す。

【又有る義】 大乘義章卷十七末、法華文論の註。

【未だ必ず…】 賢首の評なり。

【賢首の評なり】

はく、「三昧の樂に樂著して、無漏界に安住し、究竟の趣有ること無く、亦復退還せず、諸の三昧身を得て、乃し劫に至るまで覺らず。譬へば昏醉の人の、酒消して然して後に覺むるが如し。彼聖法も亦然なり。佛の無上身を得」と。解して云はく、此文は但し總相をもつて説く。一若し差別して説かば、其利鈍に隨ひて各別に時を運て、皆阿耨菩提心の位に到る。「涅槃經」に云ふが如し、「須陀洹の人も亦復不定なるが故に、八萬劫を運て則ち能く阿耨菩提心に到ることを得。乃至云はく、獨覺は十千劫を運て、阿耨菩提心に到ることを得一と。解して云はく、此は最鈍の須陀洹の人、七生を受け已りて、方に涅槃に入りにて、心心の法を滅して、滅定に入るが如し。復八萬劫を運て乃し心生ずることを得て、佛の教化を受けて、即ち能く菩提心を發すことを明す。若し一身に於て第二果を得て、二生を受け已りて即ち涅槃に入るは、八萬劫を運て即ち能く發心す。若し一身に於て第三果を得て、欲界に還らずして、即ち涅槃に入るとは、四萬劫を運て、能く發心することを得。若し羅漢を得て、即ち現に入滅するは、二萬劫を運て即ち能く發心す。若し獨覺は根利にして、一萬劫を運て便ち能く發心す。此五人發心の時に、即ち十信の菩薩の位に入るを、阿耨菩提心を發すと名く。又有る義は、前の五人は凡より小果を得て、涅槃に入りて後に起ちて廻心して、十信の行を修す。信の滿心已りて、十住の初發心住位に入るに堪へてより已來、根の利鈍に隨ひて各彼劫を運ぐ。未だ必ずしも一向に涅槃の中に在りて、爾許の劫を運るにはあらず。直往の人の、既に一萬劫を運て修信滿足して、能く發心するに堪ふるが如

【三には：説く】
始教の廻心を明す
決定性の者は、無
餘涅槃に入り、不
定性の者は廻心向
大す。
【四には：説く】
頓教の廻心を明す
【殊般若】文殊
師利般若波羅蜜經
【九には：説く】
同教の廻心を明す
【六には：説く】
別教の廻心を明す
【一乘に：なり】
一乘の外に別して
乗なく、二乗即空
の故に。
【經の中に】華嚴
經卷四十四、入法
界品。

く、彼獨覺の人は根最も利なるが故に、亦直往の人に似て、一萬劫を遷ぐ、餘の四は鈍根なり。又差別するが故に、時に多別を得るなり。上來は遅き者を明す。若し極疾の者は、『法華經』に云ふが如し、「我滅度の後に、復弟子有りて是經を聞かず、菩薩の所行を知らず覺せず、自の所得の功德に於て、滅度の想を生じて、當に涅槃に入るべし。我餘國に於て佛と作りて、更に異名有らん。是人は滅度の想を生じて、涅槃に入ると雖も、而も彼土に於て佛智慧を求めて、是經を聞くことを得ん。唯佛乘を以て而も滅度することを得て、更に餘乘無し、諸の如來の方便說法を除く」と。此上は並に終教に約して説く。三には一切の二乘、亦是廻し亦是廻せず。謂はく、定性の者は趣寂して廻せず、不定定性の者は、並に大に廻向す。『瑜伽』の聲聞決擇の中に説くが如し。此は始教の、二乘を引くに約して説く。四には或は廻するに非ず廻せざるに非ず、離相なるを以ての故に。『文殊般若』等に説くが如し。此は頓教に約して説く。五には或は合して前の四を具す。是れ大法の方便なるを以ての故に。此は一乘の攝方便に約して説く。六には或は俱に前の五を絶す。此に二種有り。一には一切の二乘、悉く廻する所無し。一乘に望むるに皆即空にして、廻すべきこと無きを以てなり。經の中の如聲如盲の者の如きは是なり。二には一切の二乘等、並に已に廻し竟りて、更に復廻せず、經の中に普賢の眼を以て、一切衆生を見るに、皆已に究竟するが如き者は是なり。此は並に一乘別教に約して説く。

問ふ、「一乘攝方便の中の廻心の如きは、三乘の中の廻心と、所得の法門の分齊は云何。」

【經：普眼云云】華嚴經卷三十五、性起品。

【舍利弗云云】華嚴經入法界品。

【別に説くが如し】孔子章を指す。

【因行を明し、以下三門は果を明す中】初に佛果の義相を示す。

【前の中に云云】初に常無常の義を五教の次第に依りて述す。

【本性の功德】本來常住不改の眞如法性の功德をいふ。

【佛性論】卷一。

【莊嚴論】卷三。

【若し終云云】次に終教の義を明すに、初は別して報化二身の常無常を明す。

【修生の功德】修因感果の功德、即ち報化二身。

【一得已後：同ず】始覺と本覺一致したる境地をいふ。

答ふ。若し三乗の中の廻心は、即ち十信に入りて已去は、菩提心及び大悲等の法門を修行して、次第に而も去る。若し一乗の中には、下の文の如し。舍利弗及び因陀慧比丘等の六千人、文殊師利の邊に於て、廻心して即ち十大法門及び十眼十身等の境界を得たり。義は即ち是れ、解行の身に當れり、五位の法に遍するなり。餘の義は別に説くが如し。

第八に佛果の義相とは、中に於て二有り。先には常無常の義を明し、後には相好の差別を明す。前の中に若し小乗の佛果は、唯是れ無常なり、本性の功德を説かざるを以ての故に。佛性論に云ふが如し、「小乗には性得の佛性無し、但し修得のみ有るが故なり」と。

若し三乗始教には、法身は是れ常なり、自性なるを以ての故に。亦無常なり、離不離なるを以ての故に。修生の功德は是れ無常なり、因より生ずるを以ての故に。是れ有爲無漏なるが故に。亦是れ常なることを得、間斷無きを以ての故に。相續して起るが故に。莊嚴論に云はく、「自性と無間と相續と、三佛俱に常住なり」と。若し終教に依らば二義有り。

先には別して明し、後には總じて説く。別の中に修生の功德は、是れ無常なり、修生なるを以ての故に。亦即ち是れ常なり、一得已後眞如に同ずるが故に。何を以ての故に。本眞より流するが故に。無明已に盡きて、還りて眞體に歸するが故に。梁の攝論に云はく、「此法身より流せずといふこと無く、還りて此法身を證せざること無し」と。寶性論に起

信論等に、盛んに此義を立つ、彼如く應に知んぬべし。又智論に云はく、「薩波若は三世と合せず。何を以ての故に。過去世等は是れ虚妄にして、是れ生滅す。薩波若は是れ

【攝論】 卷十三取

【智論】 智度論卷

【薩波若】 卷六。

【法身は…等】 三

【或は四句に非ず】

【智淨相】 始覺の

【不思議業用】 始

【總じて説く六句】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

【或は四句に非ず】

實法にして、生滅に非ざるが故に」と。解して云はく、薩波若は此には一切智と云ふ、即ち知んぬ。佛地の圓地は眞如に同ずるが故に、生滅に非ざるなり。又「攝論」に云はく、

「猶し虚空の、一切の色際に遍滿して、生住滅の變異無きが如く、如來の智も亦爾なり。一切の所知に遍じて、倒も無く變異も無し」等と。是故に當に知るべし、直ちに間斷無きが

故に、以て常と爲すのみに非ず、亦則ち眞如の不變の常に同ずるなり。法身は是れ常なり、

隨縁する時自性を變ぜざるを以ての故に、亦是れ無常なり。染に隨ひて機に赴くを以ての

故に、何を以ての故に。諸の功德既に並に同じく眞なるを以て、是故に用を起すことは、

唯是れ眞作なり。故に、「起信」の中に、報化二身を、眞如の用大に屬して攝す。又彼論に

云はく、「衆生の心淨ければ、法身影現す」等と。又云はく、「復次に、本覺を染に隨ひて分

別するに、二種の相を生ず。彼本覺と相捨離せず。謂はく、一には智淨相、二には不思議

業相なり」と、乃至廣説す。總じて説くとは、此法身隨縁の義に由るが故に、是故に功德

の差別成ずることを得、不變の義に由るが故に、是故に功德は眞に即せずといふこと無し。

擧體隨縁と全相不變と、二義銜融して障礙無きを以ての故に、是故に佛果は即ち常即ち

無常なり。四句を具足す、或は四句に非ず。義に隨ひて應に知んぬべし。

問ふ、「若し爾らば如何が非一異と説くことを得るや。」答ふ、「若し始教の中には、眞如

遍するを以ての故に、智は眞如を證するが故に非異なり。有爲無爲不同なるが故に非一な

り。若し終教の中には、功德に二義有り。一には縁起現前の義。三無數劫の功虛からざる

隨緣と不變融通無礙にして四句を亡す。

【若し准ぜよ】次に頓教の義を以て明す。

【若し言六六】離言絶相のうちに、言説を假りてするをいふ。

【卷四】北本涅槃經

【若し圖：思へ】次に頓教の義に依りて明す。

【常等の四句】一常恒に法界に類じて開闢なし(常)二世間に隨ひて現ず(無常)三三義俱に現前す(俱有)四、隨ひてを取れば得ず、又緣起無性なる故に(俱非)。

【修生】十佛身の功德に修行に由りて生ず。

【本有】十佛身本

を以ての故に。二には無自性の義。眞如を離れて、自體無きを以ての故に。此中の初の義と法身の隨緣と、後の義と法身の不變とは、是れ非異門なり。是れ擧體全取するを以ての故に。又此初の義と不變と、後の義と隨緣とは、是れ非一門なり。義差別するを以ての故に、是れ即ち非異を動ぜずして、非一を明すなり。之を思つて見つべし。若し頓教に依らば、相は盡き念を離るを以て、故に知んぬ。唯一實性身平等平等にして、功德の差別有りと言くべからず、亦常と無常とを説くべからず、若し言に寄せて顯さば、經に云ふが如し、「吾今此身は即ち是れ法身なり」と。又經に云はく、「一切の諸佛の身は、唯是れ一法身なり」と。是の如く之に准ぜよ。若し圓教に依らば、佛果常等の義に三説有り。一には用に約するに、佛果は既に三世間等の、一切法に通ず。是故に具に常等の四句有り。二には德に約するに、佛果は既に四義を具す。謂はく、一には修生、二には本有、三には本有の修生、四には修生の本有なり。圓融無礙にして、無邊の德を備ふ。是故に亦常等の四句に通ず。上の二の四義、之を思つて見つべし。三には體に約するに、亦四句に通ず。謂はく、此經の中には、不可説を以て顯さんが爲の故に、是れ常なり。「阿含」と相應するが故に、是れ無常なり。二義無礙なるが故に俱有なり。緣起際に隨ふが故に、俱非なり。此上の三義、若し體といはば即ち俱に體なり、乃至用といはば即ち俱に用なり、融攝無礙なるを以ての故に、皆常等の無礙有り、之を思ふべし。

二に相好を明すと、若し小乘に依らば、三十二相八十種好有り、是れ實法なり。若し

來有する性功德。【本有が修生】十佛の功德、了因の無分別智によりて顯るるをいふ。【修生が本有】了因の無分別智其儘が十佛の性功德に外ならざるをいふ。【體に約す：四句】一、因分可説そのままた果分不可説なり(常)二、體の有(無常)三、顯不顯(無應)四、因分可説果分不可説は共に融攝無礙なり(俱)緣起の際限即ち性起は非常非無常なり(俱非)【二】次に佛の相好を明す。【對法論】卷十四【金鑄馬麥】堅き木片と、馬糧の麥とをいひ、共に智論卷九に因縁あり【攝論】梁論卷十四。【彼功德の法】小乘に戒、定、慧、解脱、解脫知見の五種の功德を以て

三乘の中には、或は亦但三十二相八十種好を説く。是れ化身の相なり。仍ほ即空是れ相の義なり。【金剛般若經】對法論一等に説くが如し。此は始教小を引くに約して説くなり。或は報身に約して、八萬四千の相を説く。並に是れ實德なり。此は直進及び終教等に約して説く。問ふ、何が故に『智論』等に、此化身に於て、金鑄馬麥等の往業の所到を辨じ、三十二相等にも亦各各因を出すや。答ふ、『二乗を引かんが爲に、下に同じて而も説く、業果亡ぜざることを現するが故に。聖道は惑を斷ずれども、報を滅するに非ざるが故に、羅漢の沙を食するが如し、金鑄等も亦爾なり、小乗は以て實と爲し、始教は即空の説なり、是れ方便なるを以ての故に。』大乘方便經に説くが如し。其相好に因を出すに二義有り。一には亦是れ方便して、二乗を引かんが爲に、即ち此身に於て亦、勝れたる因果を示す。實報身は彼見るに非ざるを以ての故に。二には此等は亦、即ち是れ實報の相なり、垂れて化の中に在りて、顯現するが故に、因を出すことを得るなり。』問ふ、『何が故に『攝論』の中に、三十二相等を説いて、法身の功德に入り攝するや。』答ふ、『此にも亦二義有り。一には二乗を廻せしめんが爲に、方便して漸く説く。眞實の法身は、恐くは彼信じ難きが故に、此等の功德を以て、説いて法身と爲して、信受し易からしむ、現に見るを以ての故に。二には彼功德の法を以て、法身と爲すが故に、彼中に攝在するなり。此上は並に始教に約して説く。又三十二等は、即ち無性なるが故に、亦即ち是れ眞如法身なり。此は終教に約して説く。』若し一乘に依らば、十蓮華藏世界微塵數の相有り。彼一一の相は皆法界に

佛身を成ずと信ず
【相海品】 華嚴經
卷三十三。

【雜華經】 華嚴經

【二】第九に攝化の国土の寛狭分齊につき、五教の差別を明す。
【小乘…なり】南闍浮提を釋迦佛の報土とし、他を化境とす。
【摩醯首羅天】大自在天といふ、色界の頂上に位する天。

過す。業用も亦爾なり。十と説く所以は、無盡を顯さんと欲するが故に、『相海品』に説くが如し。又『觀佛三昧經』の中に、此三宗に約して、佛の相好を分ちて、以て三段と爲す。故に彼經に云はく、「略が中の略とは、我今此時會の大衆及び淨飯王の爲に、略して相好を説く。佛人間に生じて、人事に同ずることを示す。人相に同ずるが故に、三十二相を説き、諸天に勝れたるが故に八十好を説く。諸の菩薩の爲に、八萬四千の諸の妙相好を説く。佛の實の相好は、我初成道に、摩伽陀國寂滅道場にして、普賢賢首等の諸の大菩薩の爲に、『雜華經』に於て已に廣く分別す」と。解して云はく、此中の三十二相等は、略が中の略に當る、人天二乘等の爲にするは、即ち初に當るなり。八萬四千等は、義但是れ略に當る、三乘の菩薩等の爲にするは、次に當るなり。佛の實の相好は、『雜華』に説くが如くとは、義は廣説に當る。即ち是れ此華嚴の『相海品』の説を指す。此品に一乘別教の相を説くは、即ち終に當るなり。『雜華』は即ち是れ華嚴なるを以ての故に。餘義は知んぬべし。

【二】第九に攝化の分齊を明さば、若し小乗の中には、唯此娑婆は雜穢の處、是れ佛の報土なり。中に於て此闍浮提は是れ報佛の所依、餘の百億等は是れ、化境の分齊なり。若し三乘の中には、法性の土及び自受用の土あり、今此に説かず。其釋迦佛の隨他受用の實報の淨土は、或は摩醯首羅天に在り、化身は百億の闍浮提に充滿す、是れ所化の分齊なりと説くと有り。『梵網經』及び『對法論』等に説くが如し。當に知るべし、此は始教に約して以て

【涅槃經】 北本涅槃經卷二十四。
【下】に隨ひて説かず。小乗教に順じて説かずと。

【大智度論】 卷五十。

説く、何を以ての故に。二乗教には釋迦の身を以て實報と爲すが爲に、今即ち彼に翻じて其は是れ化なることを顯すが故に、彼天に於て別に實報を立つ。又二乗は界外に實の淨土有りといふことを信ぜざるを恐るるが故に、界内の最勝の處に寄せて説く。其化身は但百億に充つ等、亦彼説に順するなり。或は釋迦佛の報土は、三界の外に有りと説くこと有り。『涅槃經』に云はく、「西方此を去ること三十二恆河沙の佛土に世界有り、無勝と名く」と。是れ釋迦佛の實報の淨土なり、此は終教に約して説く。下に隨ひて説かざるを以ての故に。娑婆は唯是化なることを、顯すが爲の故に。是故に當に知るべし、色頂の身も亦實報に非ず。或は化境は但百億のみに非ずと説く。『大智度論』の中の如し、三千大千世界を以て一數と爲し、數へて恆沙に至るを、一世界性と爲す。又此を數へて恆沙に至るを、一世界海と爲し、此を數へて又無量恆沙に至るを、一世界種と爲し、此を數へて無量十方恆沙に至るを、一佛世界の所化の分齊と爲すなり」と。此は終教に約して説く。攝化漸く前よりも、廣きを以ての故に。又唯須彌山世界に約して説く、此界に局るを以ての故に、未だ樹形等の世界を説かざるが故に、一乘に非ざるなり。或は釋迦の報土は、靈鷲山に在りと説く。『法華經』に云ふが如し、「我常に靈鷲山に在り」等と。法華論主釋して、報身の菩提と爲るなり。當に知るべし、此は一乘同教に約す。何を以ての故に。法華の中にも亦、一乘を顯すを以ての故に、其處教に隨ひて染に即して淨に歸す。故に『法華』を説く處を、即ち實と爲すなり。菩提樹下にして「華嚴」を説く處を即ち蓮華藏十佛の境界と爲すが如し。『法華』

【彼論】 佛地論卷一。

【經】 北本涅槃經卷四。【若し云云】 以下別教一乘の淨土を明す。【第二會】 華嚴經普光明殿會の初品如來名號品。【蓮華藏世界】 十身具足の毘盧舍那法身の領する國土一切諸佛の世界を收攝し、衆寶莊嚴重重無盡の土なり

も亦爾なり、漸く此に同ずるが故に、是れ同教なり。然れども未だ彼處を、即ち十蓮華藏及び因陀羅等と、爲すと説かざるが故に、別教に非ざるなり。或は此釋迦の身を、即ち實報受用の身と爲すと説くこと有り。『佛地經』の初に説くが如し、「此釋迦佛は、即ち二十一種の實報の功德を具す」と。彼論に釋して、受用身と爲すなり、此は亦同教に約して説く。何を以ての故に。此釋迦佛は、若し三乘の中には但化身と爲し、若し別教一乘には、以て究竟十佛の身と爲る。今此は方便して彼三乘を勸めて、釋迦の身は但是れ化のみに非ざることを顯す。信受し難きことを恐るるが故に彼經の中に、佛果の深功德の處を説くに約して、佛身は教に隨ひ、權に即して實に歸することを明し、説いて報身と爲す。即ち方便して華嚴一乘の法を説く時、此釋迦の身も亦彼教に隨ひ、即ち是れ究竟十佛の、法界身なることを顯すなり。是故に此を以て、同教の攝と爲すなり。或は此釋迦の身は、即ち是れ法身なりと説くこと有り。經に云ふが如し、「吾今此身は即ち是れ法身なり」と。此は頓教に約して、言に寄せて以て説く、相盡き念を離るるを以ての故に。若し別教一乘は、此釋迦の身、但三身のみに非ず、亦即ち是れ十身なり、以て無盡を顯す。然るに彼十佛の境界の所依に二有り。一には國土海。圓融自在なり、不可説に當る。若し法に寄せて顯示せば、第二會の初に説くが如し。二には世界海に三類有り。一には蓮華藏莊嚴世界海。主伴を具足して因陀羅等に通ず。是れ十佛等の境界に當れり。二には三千界の外に於て、十重の世界海有り。一には世界性、二には世界海、三には世界輪、四には世界圓滿、五には世界分

【二】には三千…當
 明す。これ十地の
 菩薩の境界なり。
 【萬子已上云云】
 初地以上菩薩を
 喻ふ、本業瓊經
 卷上參照。
 【三】には：不同な
 り。【三】に雜類世界
 を明す。
 【一切の衆生形等】
 衆生形世界を等取
 す。
 【三】第十に佛身
 の開合を明す。
 【佛地論】卷七。
 【五種の法】清淨
 法界と四智心品
 (大圓鏡智、平等
 性智、妙觀察智、
 成所作智)
 【攝論】無性の論
 卷一。
 【鏡智】大圓鏡智
 【境智】所證と能
 證に分つも、その
 體一眞如なり。

別、六には世界旋、七には世界轉、八には世界蓮華、九には世界須彌、十には世界相なり。
 此等は是れ萬子已上の輪王の境界に當り、三には無量雜類世界。皆法界に遍ず。一類の須
 彌樓山世界の數量邊畔の如し。即ち虚空を盡し法界に遍ず。又一類の樹形世界、乃至一切
 の衆生形等の如きも、皆亦是の如し、悉く法界に遍じて互に相礙へず。此上の三位は、
 並に是れ盧舍那十身攝化の處なり。仍りて此三位本圓融して相收無礙なり。何を以ての
 故に、一世界に隨ひて即ち麤細に約して、此三有るを以ての故に、當に知るべし、三乘と
 全く別にして不同なり。
 (二)第十に佛身の開合とは二有り。先は義、後は數なり。義の中に先は法身に約す。或は唯眞
 境を法身と爲す。『佛地論』に五種の法に、本覺地を攝するが如きは、清淨法界に法身を
 攝し、四智に餘の身を攝す。此は始教に約して説く。或は唯妙智を法身と爲す。本覺智な
 るを以ての故に、修智本に同ずるが故に、『攝論』に、無垢無礙智を法身と爲すが如し、『金
 光明經』の中に、四智に三身を攝す。鏡智に法身を攝するを以ての故に。或は境智を合
 して法身と爲す、境智の相、如なるを以ての故に。梁の『攝論』に云ふが如し、『唯如如及
 び如如の智獨り存するを名けて法身と爲す』と。此上の二句は終教に約して説く。或は境
 智俱に泯ずるを法身と爲す。經に云ふが如し、『如來の法身は心に非ず境に非ず』と。此は頓
 教に約して説く。或は合して前の四を具す、徳を備ふるを以ての故に。或は俱に前の五を
 絶す、圓融無礙なるを以ての故に。此二句は『性起品』に説くが如し、此は一乘に約して辨

【數の…説くなり】次に佛に一身多身あるに就き開合を明す。

【佛地論】 卷二。

【攝論】 卷一。

【楞伽經】 四卷楞伽卷一。

【華嚴…下】 宋本は華嚴一乘教義分齊章卷三、一本五教章卷四之下終に作る。

す。次に別して釋迦の身に約して明さば此釋迦佛の身、或は是れ化にして法報に非ず、始教に説くが如し。或は是れ報にして法化に非ず、同教一乘及び小乘に説くが如し、但し深淺を異と爲す。或は是れ法にして報化に非ず、頓教に説くが如し。或は亦是れ法亦は報化、總じて三乘に説くが如し。或は法に非ず報化に非ず、別教一乘の如し、是れ十佛なるが故なり。

數の間合とは或は一佛を立つ。謂はく、一實性佛なり。此は頓教に約す。或は二佛を立つ、此に三種有り。一には生身化身、此は小乘に約して説く。二には生身法身、謂はく、他受用と化身とを、合して生身と名け、自受用と法身とを、合して法身と名く。『佛地論』に説くが如し、此は始教に約して説く。三には自性法身と應化法身となり、『本業經』に説くが如し、此は終教に約して説く。或は三身佛を立つ。常に説くが如し、此は始終二教に通じて説く。或は四佛を立つ、此に二種有り。一には三身の中に於て、受用身の内に自他の二身を分つ、故に四有り。『佛地論』に説くが如し、此は始教に約す。二には三身の外に於て、別に自性身を立つ。法身は是れ、恆沙の功德の法なることを明さんが爲の故に、是故に梁の『攝論』に云はく、「自性身は法身が與に依止と作るが故に」と。三には亦報身の内に於て、福智を二に分つが故に四有り。『楞伽經』に云ふが如し、「一には應化佛、二には功德佛、三には智慧佛、四には如如佛なり」と。此は終教に約して説く。或は十佛を立てて、以て無盡を顯す、『離世間品』に説くが如し、此は一乘圓教に約して説くなり。

華嚴經 中一乘 五教分齊義卷下

祕密曼荼羅十住心論

○當書十卷空海の撰なり。

【一】初に序分を明す。次に歸敬序

【綱尼・欠】以下六大の體を釋す。

五字は胎藏曼荼羅中臺の教主、不二總體の本、法身、不眞言なり。六大の種子とせば、更に呼字を加へ、識大の種子とす。

【制・慧と】四曼の相を釋す、此は三十五の體文に約し、劍等の五字、五類聲中の各初の一

字を擧げ、餘二十字を攝す、壘の字は遍口聲十字の初

字、慧は體文の字皆男聲にて、男は慧を主る。

【呬汗・等持と】十六摩多に約す。五字を擧げ餘十一

字を括る。等持は定のこと、摩多是女聲、女は定を主

る故に。

【制體・持等】胎藏四重海會聖衆所

藏四重海會聖衆所

祕密曼荼羅十住心論

卷第一

(二) 綱尼羅响欠の

劍遮吒多婆樞の慧と

制體幢光水生貝と

日旗華觀天鼓の泐と

埋鑄尅業及び威儀との

是の如きの自他の四法身の

天珠のごとくに涉入して虚空に遍じ

天の恩詔を奉りて祕義を述ぶ

平等に本四曼の

夫れ、宅に歸るには必ず乘道に資る。病を愈すには會ず藥方に處る。病源亘多なれば方藥

非一なり、己宅遠近なれば道乘千差なり。四百の病は四蛇に由りて體を苦しめ、八萬の患

は三毒に因りて心を害す。身病多しと雖も、其要は唯し六、四大鬼業是なり。心病衆しと

雖も其本は唯一、謂ゆる無明是なり。身病の對治に八有り、而も心病の能治に五有り。湯

散丸酒針灸呪禁は身の能治なり。四大の乖けるには藥を服して除き、鬼業の祟りには呪悔

最極大祕法界の體と

呬汗哩嚩騎の等持と

五鉞刀蓮軍持等と

薩寶法業内外の供と

能所無礙の六丈夫

法然として我三密に輪圓せり

重重無礙にして刹塵に過ぎたまへるを歸命す

群眠の自心に迷へるを驚覺して

入我我入の莊嚴の徳を顯證せしめん

入我我入の莊嚴の徳を顯證せしめん

入我我入の莊嚴の徳を顯證せしめん

入我我入の莊嚴の徳を顯證せしめん

入我我入の莊嚴の徳を顯證せしめん

入我我入の莊嚴の徳を顯證せしめん

持の三摩耶形、初句は中臺八葉の五佛の三形、後句は四隅の菩薩の標相

【制幡】塔。幡、光明、蓮華、法螺。次の如く寶幡、開敷華王、彌陀、天鼓雷音佛の三形。

【五結：持等】寶、文殊、觀音、彌勒の標相。【日旗：鼓】大日寶幢、開敷華、觀自在王（彌陀の異名）、天鼓雷音。

【陸寶法業】金界の四佛の四親近の各一を擧げ、十六大菩薩を表示す。

【内外の供】内の供の嬉鬘歌舞と外の供の香華燈塗を示す。八供養菩薩是なり。

【埴鑄越業と威儀】上の三曼荼羅に具する種種の威儀所作埴鑄は埴刻の誤か即ち埴は塑像、鑄は金像、刻は木像

をもて能く銷す。藥力は業鬼を却くること能はず、呪功は通じて一切の病を治す。世醫の療する所は唯身病なり。其方は則ち大素木艸等の文これなり。心病を治するの術は大聖能く説きたまへり、其經は則ち五藏の法是なり。謂ゆる五藏とは、修多羅、毘奈耶、阿毘達磨、般若、總持等の藏なり。是の是きの五藏は、譬へば牛の五味の如し、乳と酪と生熟の兩酥と醍醐と、次での如く之を配せよ。四藏の藥は但輕病を治して重罪を消すること能はず、謂ゆる重罪と言ふは、四重と八重と五逆と謗方等と一闍提と是なり。醍醐の通じて一切の病を治するが如く、總持の妙藥も能く一切の重罪を消し、速に無明の株根を抜く。衆生の住宅に略して十處有り。一には地獄、二には餓鬼、三には傍生、四には人宮、五には天宮、六には聲聞宮、七には緣覺宮、八には菩薩宮、九には一道無爲宮、十には祕密曼荼羅金剛界宮なり。衆生は狂迷して本宅を知らざれば、三趣に沈淪し四生に踰躡す、苦源を知らざれば還本に心無し。聖父は其是の如くなるを惑みて、其歸路を示す。歸路に徑紆有り、所乘に遲速有り、牛羊等の車は紆曲に逐て徐く進み、必ず三大無數劫を經、神通の寶輅は虚空を凌ぎて速に飛んで一生の間に必ず所詣に到る。入天の二宮は燒燬を免れずと雖も、之を三趣に比すれば、樂にして苦に非ず、故に慈父は且く入天乘を與へて、彼極苦を濟ふ。二乘の住處は是れ小城なりと雖も、彼生死に比すれば、已に火宅を出でたり、故に大覺は假に羊鹿車を説いて、麁く化城に息む。菩薩權佛の二宮は、亦未だ究極の金剛界に到らずと云ふと雖も、前の諸の住處に比すれば、亦是れ大自在安樂無爲なり、故に

業は土佛等。【能所無礙】能生の六大と所生の四曼との無礙を顯す【天珠：涉入して】三大の、三大の諸法に周遍するを、帝釋宮の羅網の玉珠の影、互に涉入するに喩ふ。【入我我入】諸佛を吾身中に、吾身を諸佛身中に引入する意。【夫れ宅云云】以下大意序。【五藏】小乗の三藏、有ゆる大乘經兩部の眞言經。【衆生の住宅云云】以下宅乘を明す。【衆生：無し】初に三處を明す。【聖父は云云】後の七宮を解す。【人天の二宮云云】廣く釋するに、初に人等の六宮を明す。

如來は大小の二牛を與へて、其歸舍を示す。如上の二宮は、但し宅中の荒穢を芟難して、猶し未だ地中の寶藏を開かず、空しく大海の鹹味を嘗む、孰れか龍宮の摩尼を獲ん。淺より深に至り、近より遠に迄るまで、轉妙轉樂なりと云ふと雖も、由し是れ蜃樓幻化の行宮にして、未だ三秘密、五相成身、四種曼荼、究竟眞實の金剛心殿に入らず。彼人天より顯の一乘に迄るまで、竝に是れ應化佛の心病を對治するの樂、他受尊の狂子を運載するの乘なり。宗に名くれば則ち七宗、鐘を竝べて和漢に馳せ、車を言へば則ち三四轍を雙べて東西に遊ぶ。各各已が鞍を美めて已が楯を忘れ、並に他の疵を發きて他の善を蔽す、是非紛紜として勝負不定なり。吠聲の徒、朋黨相扇ぎ、雷岳の響周比瘡瘡す。是れ則ち方を設くるの本懐に非ず、還醫王の雅意に乖けり。譬へば寫を惡みて補を求め、藥を愛して毒を惡むが如し、誰か知らん病體へば悉く藥、方に乖けば竝に毒なることを。嗚呼痛ましき哉、嗚呼痛ましき哉、縱使耆婆は更に生じ、神農は再び出づとも、豈此を棄てて彼を取り、毒を惡み藥を愛せんや、鉤挽野葛も病に應ずれば妙藥なり、何に況んや木黄金丹は誰か除病延算の續なからん。苦しき哉、末學は大虚を小室に逃し、鳴鐘を掩耳に偷む、水を惡み火を愛し、心を捨て色を愛することを。若し能く明かに密號名字を察し、深く莊嚴祕藏を聞くときは、則ち地獄、天堂、佛性闡提、煩惱菩提、生死涅槃、邊邪中正、空有偏圓、二乘一乘、皆是れ自心佛の名字なり。焉をか捨て焉をか取らん。然りと雖も、祕號を知るものは猶し鱗角の如く、自心に迷へる者は既に牛毛に似たり、是故に大慈は此無量乘を説いて

成金剛心、證金剛身、佛身圓滿の五
 【四種曼荼羅】大、三、法、羯の四。
 【金剛心殿】瓊瑤經に依るに、具には不壞金剛光明心殿といふ。
 【宗】に愛することを。總じて稱漢人師の宗計を評す。

【七宗】俱舍、成實、三論、法相、律、天台、華嚴。
 【三四遊ぶ】三車家法相、三論、四車家(天台、華嚴)の論、和漢兩土に起れるをいふ。

【映聲の徒】末學の徒。
 【雷鳴の響】叩岳と雷鳴共に惡聲、今可否を分たず非するに喩ふ。

【鈎挽野葛】毒草
 【木黃金丹】白、木黃精と仙藥。

【白心佛】白心本具の十界曼荼羅の毘盧遮那佛をいふ
 【乘乘】四分に約し、顯の法門を示

一切智に入らしむ。若し豎に論ずれば、則ち乘乘差別にして淺深有り、横に觀ずれば智智平等にして一味なり。惡平等の者は、未得を得と爲し不同を同と爲す。善差別の者は、分滿不二、即離不謬なり。之に迷ふ者は藥を以て命を夭し、之に達する者は藥に由りて仙を得。迷悟已に有り歎無くして到る。有疾の菩薩、迷方の狂子、愼まざるばあるべからず。

秘密曼荼羅金剛心殿の如きに至りては、是れ即ち最極究竟の心王如來大毘盧遮那自性法身の住處なり。若し衆生有りて、輪王の種性に生じ、大度有りて勇銳にして、前の諸の住宮を樂はずんば、則ち大日所乘の一體速疾神通の寶轡を許し、具に灌頂の職位を授けて、刹塵の無盡莊嚴の寶藏を受用せしむ。淺深優劣を具に列ぬること後の如し。『大毘盧遮那經』に、「秘密主、佛に問うて言はく、世尊云何が如來應供正遍知一切智智を得たまふ。彼一切智智を得て、無量衆生の爲に廣演分布し、乃至是の如きの智慧は何を以てか因とし、云何が根とし、云何が究竟とする。大日尊答ふらく、『菩提心を因とし大悲を根とし、方便を究竟となす。秘密主、云何が菩提とならば、謂はく、實の如く白心を知る。又問ふ、菩提に發越するの時、心の所住の處の相續の次第に幾種かある。佛具に之に答ふ。故に經の初品を名けて住心といふ。今此經に依りて、眞言行者の住心の次第を顯す、顯密二教の差別も亦此中に有り。住心は無量なりと雖も、且く十綱を擧げて之に衆毛を攝す。

(一)には異生羗羊住心。二には愚童持齋住心。三には嬰童無畏住心。四には唯識無我住心。五には拔業因種住心。六には他緣大乘住心。七には覺心不生住心。八には一道無

差別も亦此中に有り。住心は無量なりと雖も、且く十綱を擧げて之に衆毛を攝す。

す、而も無量乗あるをいふ。曼荼の諸

【智智】曼荼の諸尊各五智三十七智等剎塵の智を具するをいふ。

【分滿不二】密教に入らば、前に經し豎の十界は横に自心に具すと悟る

【即離不謬】横豎の義門混せず。

【大毘盧遮那經】住心品正宗の初。

【故に經：住心】此は十住心は經の初品の大綱肝要の法門なるを示す。

【住心無量：攝す】此は異生羶羊等の十の住心は大綱とし、無量の衆毛の住心を攝し、又地獄等の果報及び寂然界等をも攝す。

【二】以下正宗分なり初に名を列ぬ

【三】別に十、初段を開くに十、初に

異生羶羊心を明す中、先づ合して惑業を明すに、初に惑を擧げて釋す。

爲住心。九には極無自性住心。十には祕密莊嚴住心。

異生羶羊住心第一

異生羶羊心とは、此れ則ち凡夫の善惡を知らざるの迷心、愚者の因果を信ぜざるの妄執なり。我我所執を常に胸臆に懷き、虛妄分別を鎖に心意に蘊めり。陽餓を逐うて渴愛し、華燭を拂ひて身を焼く。既に羶羊の草姪を思ふに同じく、還孩童の水月を愛するに似たり。曾て我が自性を觀ぜず、何んが能く法の實諦を知らん、教に違し理に違すること此より生ず。冥より冥に入り相續して斷ぜず、循廻を車輪に比し、無端を環玉に均しくす。昏夜長遠なり、金鷄何んが響かん、雲霧靄々たり、日月誰か奪げん。來途始め無し、歸舍幾の日ぞ。火宅の八苦を覺らずして、寧ろ罪報の三途なることを信ぜんや。遂に乃ち滋味を水陸に嗜み、琴色を乾坤に耽る。鷹を放ち犬を催して填腹の禽命を斷ち、馬を走らせ弓を彎いて快舌の獸身を殺す。澤を涸して鱗族を竭し、藪を傾けて羽毛を斃す、合せ圍むを以て樂とし、多く獲るを以て功と爲す。網を解くの仁を顧みず、豈華に泣くの悲みを行はんや。荒姪度ること無くして、晝夜に樂むこと只し。或は他の財物を抄掠し、人の妻妾を姦犯す。四種の口過と三種の心非、人法を誹謗し闍提を播植す。時として作さざること無く、日として行ぜざること無し。忠ならず孝ならず、義も無く慈も無し、五常も羅網すること能はず、三乗も牢籠することを得ず。邪師を祖として習ひ邪教に依り憑る。曾て出

【湯鉢・燒く】 五
鈍使中の食愛を擧
げて他をすす。
【既に云云】 以下
は反覆して食等の
三惑を明す。
【法の實諦】 四聖

【火宅の八苦】 迷
界の四苦と愛別離
怨憎會と求不可得
と、五陰盛苦。

【等色】 女色。

【四種の口過云云】
以下、合して口意
を釋す。妄語等の
口の四過と貪瞋邪
見の心の三。

【邪師】 六師外道
十六知見等なり。

【故に大日云云】
以下第二に住心品
を引證す。

【心相續】 最初生
起の一心漸次に増
明し、斷ぜずして
金剛論際に至るを
いふ。

【智度論】 卷三十

【經の中に云云】

十二因縁に約して
無始生死を説くに

要を求めずして一向に眼前に營む。是の如きの衆生を名けて愚童羗羊と曰ふ。故に大日世尊は秘密主に告げて言はく、「秘密主、無始生死の愚童凡夫は、我名と我有とに執著して、無量の我分を分別す、若し彼我の自性を觀せずんば我我所生す。」又云はく、「秘密主、愚童凡夫の類は猶し羗羊の如し。」

注すらく、善無畏三藏譯して云はく、此より已下の十種の住心は、佛心相續の義を答ふ。淨心最初の生起の由を明さんと欲ふが故に、先づ愚童凡夫の違理の心を説けり。無始生死とは、「智度論」に云はく、「世間の若は衆生、若は法、皆始有ること無し」と。經の中に、佛の言はく、「無明に覆はれ愛に繋がれて、生死に往來すること始て不可得なり、乃至菩薩は無始も亦空なりと觀すれども、而も有始の見の中に墮せず」と。愚童とは具には愚童薩埵と云ふ。謂はく六道の凡夫なり。實諦の因果を知らず、心に邪道を行じ苦因を修習す。三界に戀著して堅執して捨てず、故に以て名と爲す。凡夫とは、正譯には應に異生と云ふべし、謂はく無明に由るが故に、業に隨ひ報を受けて自在なることを得ず、種種の趣の中に墮して、色心の像類各各に差別せり、故に異生と曰ふなり。其所計の我は、但語言のみ有りて而も實事無し、故に我名に執著すと云ふ、我有と言つば即ち是れ我所なり。是の如きの我我所の執は、十六知見等の如く、事に隨ひて差別すること無量に不同なり、故に名けて分と爲す。次に虚妄分別の所由を釋するが故に、若し彼我の自性を觀せずんば則ち我我所生すと云ふ。若し彼諸纒は皆悉く衆縁より生ずと觀察せば、是中に何者か是れ我なら

無明と愛とを擧げ餘の行、取、有の三支を顯す。【始不可得】無始の義。【此は是れ云云】以上、惡業の二を明し、今は苦道を

【麤惡・義】惡口兩舌綺語をいふ。【是の如きの云云】以下、正しく罪報を明す。

【華嚴經】十地經論第四に釋する經を指す。新經第三十、十地品に出づ。十不善業道を説けり。

ん、我は何れの所にか住せん。蘊に即し蘊に異し相在すとや爲ん、若し能く是の如く諦に求むるときは、當に正眼を得べし。然るに彼自ら觀察せず、但し展轉相承して久遠より已來、此見を祖とし習ひて、我は身の中に在りて能く所作有り、及び諸根を長養し成就す、唯此のみ是れ究竟の道なり、餘は皆妄語なりと謂へり、是を以ての故に、名けて惡童と爲すなり。羶羊は是れ畜生の中に性最も下劣なり、但し水草及び姪欲の事を念うて、餘は知る所無し、故に天竺の語法として、以て善惡因果を知らざる惡童凡夫の類に喩ふ。此は是れ羶羊凡夫なり、所動の身口意業は皆是れ惡業なり。身の惡業に三有り。謂はく殺盜姪なり。口の惡業に四有り、謂はく妄語、麤惡、離間、無義、是なり。意の惡業に三有り、謂はく貪瞋癡是なり。是の如きの十種の惡業は、一一に皆三惡道の果を招く。且く初の殺生業に就いて之を説かば、衆生の皮肉角等を食するに由るが故に、有情の命を斷ち、彼をして、苦痛を受けしむるが故に、地獄の苦を感ず、其血肉を味著するに由るが故に、餓鬼の果を感ず、一切衆生は皆是れ我四恩なり。無明愚癡に由るが故に、彼血肉を愛して其命根を斷つ、此愚癡の罪に坐せらるるが故に畜生の果を感ず、若し人中に生ずる時は、亦二種の果を感ず、他の命根を斷つが故に短命なり、他の苦痛を生ずるが故に多病なり。殺生業の三惡趣の果を招くが如く、餘業の果報も亦復是の如し。具に『華嚴經』に説くが如し。十惡を本と爲して無量の惡業有り、此惡業に乗じて無量の惡報を感ず、惡果無量なりと離も三趣に出でず、謂ゆる地獄餓鬼傍生なり。人及び阿修羅の二趣は是れ純惡に非ず、雜業

【四】二に廣く解するに初に五輪山海を明すに先づ所依の器界を明す。

所感なり。是の如きの五趣は皆器界に依りて住す、此器界に五輪山海等の差別有り。依正の二報は共に説くこと後の如し。

初に五輪山海を明し、次に四大洲等を顯し、後に五趣を擧ぐ。

所依の器界の總頌

器界は何に従りて起る

水金は相續して出づ

八海の深さは八萬なり

四洲と八島とは

五輪の頌

大虚は邊際無し

水輪は厚さ八億なり

火大は何れの處にか在る

五輪は何に由りてか出づ

注して曰はく、「起世經」俱舍「瑜伽」等の論に依らば、空輪とは最下の虚空なり、其邊際限量を言ふべからず、而して風輪等は依止して住す。風輪とは虚空に依止して、風輪生ずること有り、量の廣さ無教なり、厚さ十六億踰繕那なり、梵に踰繕那と云ふ是れに十六里なる其體は堅密にして虚空に依れり。水輪とは大雲雨を澍ぎて滴り車軸の如し、厚さ八億踰繕

其體は堅密にして虚空に依れり。水輪とは大雲雨を澍ぎて滴り車軸の如し、厚さ八億踰繕

其體は堅密にして虚空に依れり。水輪とは大雲雨を澍ぎて滴り車軸の如し、厚さ八億踰繕

其體は堅密にして虚空に依れり。水輪とは大雲雨を澍ぎて滴り車軸の如し、厚さ八億踰繕

【起世經】十卷。隋の闍那輪多譯、起世因本經と同本異譯。文は第一に出づ。俱舍論 三十卷 六百の本頌を釋す世親造、唐玄奘譯

文は第十一に出づ
【瑜伽論】瑜伽師
地論百卷、彌勒著
薩説、唐玄奘譯。
文は第二に出づ。

【五】以下、二に
山海を明す。

【雙と軸】第二の
持雙山と第三の持
軸山。

【寶樹と善見】第
四第五の山。

【馬耳と象鼻】第
六第七の山。

【魚山】第八の山
【鐵】第九の鐵圍
山、水を出づること
と三百二十由旬半
廣量亦然なり。

那なり。徑は十二億三千四百五十踰繕那なり。周圍は三倍せり、風輪に依りて住す。金輪と
は有情の業力別風を感じて、起りて此水を搏撃して上結して金と成る、厚さ三億一萬踰繕
那なり、廣さは水輪に等し、周圍は三倍せり、水輪に依りて住す。

（五）九山八海の頌に曰はく、

妙高は十六萬なり

寶樹と善見とは

馬耳と象鼻と

六海の廣さは八萬なり

鹹水は三億に剩れり

注すらく、九山八海とは、

は中に處して住せり、餘の八は周布して妙高山を繞れり。八山の中に於て、前の七をば内
と名け、第七の山の外に大洲等有り、此外に復鐵輪圍山有りて一世界を圍れり。妙高山王

の水に入り水を出づることは、竝に名各八萬踰繕那の量なり、四寶をもつて合成せり、次
の如く四面の北東南西は金、銀、吠瑠璃、頗胝迦寶なり、寶の威徳に従ひて色は空に顯れ

たり、故に瞻部洲の空は吠瑠璃の色に似たり。是の如きの山海は何に從りてか生するや、
是は諸の有情の業、増上力をもて、復大雲は起りて金輪の上に雨ふる、滴車軸の如し、

積れる水は奔濤して即ち山等と爲る山の上に皆寶樹有りて莊嚴せり。

起世經に云はく、此山及び七金

雙と軸と其邊を繞れり

金色にして青天に入れり

魚山とは鐵の前に在り

第七は一十餘なり

内の七には扶藁を出せり

【第一の山云云】
以下、妙高山を總
る八山八海の分量
を明す、今は第一
の持變山なり。

【持變山の内海】
須彌山と此山との
中間にあり、八海
中の第一。

【物勿頭華】 黃蓮
華といふ。

【鉢頭摩華】 紅蓮
華といふ。

【優鉢羅華】 青蓮
華といふ。

【芬荼利華】 白蓮
華といふ。

【大海の：同じ】
各許水に入るごと
八萬由旬。

【竭地洛迦】 光の
記に、西國の樹名、
此國の南方にも有
りて樹木といふ。

と。又瑜伽略寫に
は、諸國修羅此樹
木を以て須彌を櫛
ふ、此山に有るを
以て名とすといふ。

【善見】 光の記に
莊嚴殊妙、見る者
善と稱する故に名
くと。

第一の山とは、梵には提駄羅山と云ふ、此には持變と云ふ、山の頂に雙跡を有するが故なり。等く七金山と名くるとは、皆純金の所成なればなり。水に入る量は等く並に皆八萬踰繕那なり、諸の寶樹多し。此山の水を出で及び山頂の厚さの量は皆四萬踰繕那なり、自下の山の體及び水に持變山の内海の深廣は、竝に皆八萬踰繕那なり。八功德水は其中に盈滿せり。狗勿頭華、鉢頭摩華、優鉢羅華、芬荼利華有りて遍く水上に覆へり。徳水とは、一には甘、二には冷、三には軟、四には輕、五には清淨、六には臭はず、七には飲む時喉を損せず、八には飲み已りて腹を傷めず、自下の七つの大海の深量も前に同じ、大海の中の八功德水と四色蓮華も津知すべし。

第二の山とは、梵に伊沙駄羅山と云ふ、此には持軸と云ふ、峯は車軸の如くなればなり、水の出ること二萬踰繕那なり、厚の量も亦然り。持軸山の内海の廣さは四萬踰繕那なり、八功德水、四色の蓮華は前の如し。

第三の山とは梵には竭地洛迦山と云ふ、此れ寶樹の名なり、此方の樹木に似たり。山の上に此寶樹多し、樹に従ひて名と爲す、水を出づること一萬踰繕那なり。厚さの量も亦然り、此山の内海の廣さは二萬踰繕那なり、八功德水、四色の蓮華は前の如し。

第四の山とは、梵には蘇達梨舍那と云ふ、此には善見と云ふ、見るもの善と稱するが故なり。水を出づること五千踰繕那なり。厚さの量も亦然り。善見山の内海の廣さは一萬踰繕那なり、八功德水、四色の蓮華は前の如し。

第五の山とは、梵には頰濕縛羯拏と云ふ、此には馬耳と云ふ、山の形馬耳に似たるが故

なり。水を出づること二千五百踰繕那なり、厚さの量も亦然り。馬耳山の内海の廣さは五千踰繕那なり、八功德水、四色の蓮華は前の如し。

第六の山とは、梵には毘那但迦山と云ふ、此には象鼻と云ふ、山の形象鼻に似たるが故なり。水を出づること一千二百五十踰繕那なり、厚さの量も亦然り。象鼻山の内海の廣さは二千五百踰繕那なり、八功德水、四色の蓮華は前の如し。

第七の山とは、梵には尼民達羅山と云ふ、此は是れ魚の名なり、山の形魚の背に似たるが故なり、水を出づること六百二十五踰繕那なり、厚さの量も亦然り。此山の内海の廣さは一千二百五十踰繕那なり、八功德水、四色の蓮華は前の如し。

第八の山とは、梵には斫迦羅山と云ふ、此には鐵圍と云ふ、純鐵の所成なればなり。水に入るること上の如し、水を出ること三百一十二半踰繕那なり、厚さの量も亦然り。鐵圍の内海の廣さは三億二萬二千踰繕那なり、其水は鹹苦なり。

中に於て大洲に四有り、中洲に八有り、小洲は無數なり。人と傍生と餓鬼と捺落迦等は其中に雜居せり、其業力に隨ひて、所住は各各異有り。

四洲形數等の頌
瞻と勝と高との洲は量二千なり
車箱と半月とは地の形勢なり
一と二と五と千とは壽と年となり

牛貨の一洲は餘五百たり
瓔珞と圓滿とは西北の國なり
六と一と二と五とは丈尺の量なり

【六】次に四洲を
【瞻：高】南瞻部
洲東勝身洲、北俱
盧洲。
【牛貨】西牛貨洲
【車箱と半月】南

洲、形車輪の如しと。半月は東洲を指す。

【閻浮樹】 北洲、

【一：千】 一は一百歳、次は千、

【六：五】 六は六尺、一、二、三、四、五、六は各丈なり、南東西

【注すらく云云】 以下長行、初に別して一世界に約して釋す。

【閻浮樹】 閻浮樹の果汁石に滴りて金に化す、色、赤黄にして、更に紫眞の氣を帶ぶといふ。

【智論に云云】 以下、因みに廣く南瞻部洲の有情の善因果と、國土の靈地等を明す。

【壽命は百歲】 佛世の人壽に約していふ。

【金剛座】 摩揭陀國菩提樹の垣の正中に有り、金剛の

三品の五戒及び無我との

因縁相感して其像を現す

注すらく、瞻部洲とは樹に従ひて名と爲す、舊には閻浮提と云ふは訛なり。『起世經』に云はく、「閻浮樹の下に閻浮樹積金聚有り、高さ二十由旬なり」と。南瞻部洲は北は廣く南は狹し、三邊は量等しくして、各二千踰繕那なり、南邊は唯廣さ三踰繕那半なり、人面も亦然り。『智論』に云はく、「下品の五戒を持てば、則ち其中に生ず」と。身の長け三肘半なり、凡そ肘の量は長け一尺八寸、即ち六尺三寸なり。或は長け四肘、即ち七尺二寸なり、自下の肘量は竝にこれに準ぜよ、壽命は百歲なり。唯此洲の中に金剛座有り、上地際を窮め、下金輪に踰れり、一切の菩薩は皆登りて覺を成ず。釋迦牟尼佛は、生を迦毘羅衛國に示して三乗の法を説き、滅を拘尸那國に示して、雙樹に涅槃す。法住に記して云はく、「正法千年、像法一千五百年、末法一萬年なり」と。中印度の北に九の黒山有り。北に雪山有り、雪山の北に香醋山有り、雪の北、香の南に無熱惱地有り、縱廣は五十踰繕那なり。池の東の銀牛の口より唃伽河を出す。池の南の金象の口より信度河を出す、池の西の璃瑠馬の口より縛芻河を出す、池の北の頗胝師子の口より徙多河を出す、流れて四海に入る。其香山の中に無量の緊那羅有りて住す。復二の窟有り、乾闥婆王有りて住す、此窟の北に於て娑羅樹王有り。名けて善住とす、八千の樹有りて周匝し圍繞す。中に象王有り。亦善住と名

く、八千の象と與にして眷屬たり。『瑜伽論』に云はく、「五百の牡象と與にして眷屬爲り」と。毎月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

と。每月十五日には帝釋の前に往きて、侍衛し行立す。若し閻浮提に輪王の出づること有

所成にて周り百餘歩あり、賢師の千佛之に坐して金剛定に入る。

【一切菩薩】賢劫中の補處の菩薩。【法住を處して云はく】大悲經及び祇園精舎の銘文に依りていふ。

【法住】遺法久しく世に住するの意。【婆羅樹王】堅固と譯す、語木を凌駕する大木なれば王といふ。

【瑜伽論】卷二。【輪王】四輪王即ち金銀銅鐵輪王をいふ。

【仁王經】卷下、受持品。【起世經】第一闕。【浮洲品】。【俱舍論】第十一世間品。

【釋迦如來】得師子國の尊者、難陀蜜多羅の法住記に依りていふ。【諸の聖弟子】十六羅漢を指す。【起世經】第一闕

るときは、最少の一象をして象寶と爲す。皆餘福に由りて是威神有り。二中洲とは、『正理論』に云はく、「瞻部洲の邊の二中洲とは一には遮末羅と名く、此には猫牛と云ふ、多くの羅刹婆居せり。二には筏羅遮末羅と名く、此には勝猫牛と云ふ、亦人の住する有り、身形卑陋なり」と。『仁王經』に云はく、「南閻浮提には大國十六、中國五百、小國十千なり」と。

然るに四大洲は同一の日月なれば晝夜に増減あり、並に短長有り、起世經に準ずるに、四時に異り有り、南洲は増勝なり、東西には少し別あり、北洲には異なること無し、寒からず熱からず節候調和なり。東毘提河洲とは、此には勝身と云ふ。舊には弗婆提と云ふは訛なり。『起世經』に云はく、

「東弗婆提に一の大樹有り、迦曇婆と名く、其本縱廣は七由旬有り、地に入ること二十一由旬、高さ百由旬なり。枝葉は垂れ覆ふこと五十由旬なり」と。『俱舍論』に云はく、「三邊は各各二千踰繕那有り、東邊は三百五十踰繕那なり。地形は半月の如し、人面も亦然り」と。

中品の五戒を持すれば則ち其中に生ず。身の長は八肘なり、計すれば一丈四尺四寸なり、壽命は二百五十歳なり。釋迦如來の諸の聖弟子は、彼洲の中に有りて說法加利す、修行する者有れば亦果證を得。二中洲とは、一には提訶と名く、此には勝と云ふ、二には毘提訶と名く、此には勝身と云ふ、皆人の住する有りて身形卑陋なり。西瞿陀尼洲とは、『起世

經』に云はく、「此には牛施と云ふ、一の大樹有り、鎮頭迦と名く、其本縱廣は七由旬有り、地に入ること二十一由旬、高さ百由旬なり、枝葉は垂れ覆ふこと五十由旬なり。下に石牛有り、高さ一由旬なり、故に名を立つるなり。『俱舍』に云はく、「西牛貨洲は周圍にして缺

くること無し、人面も亦然り、徑二千五百踰繕那なり、周圍は三倍せり」と。上品の五戒

【淨洲品】

【俱舍】 第十一世

【釋迦・得】 法住

記に依るに、寶頭

盧、白の眷屬千阿

羅漢と多分は此洲

に住すといふ。

【起世經】 第二卷

多羅究留洲品、

【起世經】香樹云

云【第一卷、第二

卷の取意の文。

【二中洲：陋なり】
俱舍論に依りてい

【是の如く云云】

以下、第二に、化

土に約して一三千

世界の量を明す。

三千界の數量に就

を持てば則ち其中に生ず。身長は十六肘なり。計れば二丈八尺八寸なり。壽命は五百歲な
 り。釋迦如來の諸の聖弟子は、彼洲の中に至りて説法化利す。修行する者有れば果證を
 得。二中洲とは、一には舍迦と云ふ、此には詔と云ふ、二には囑怛羅縵怛里拏と云ふ、此
 には上儀と云ふ、皆人の住する有り、身形卑陋なり。北俱盧洲とは「起世經」に云はく、
 「憍怛羅究流、此には高上と云ふ」と。地形は夏方なり、四面は各二千踰繕那有り、人面
 も亦方なり、上品の五戒十善を持し、無我觀を修すれば則ち其中に生ず。身の長三十二肘
 なり、計れば長五丈七尺六寸なり、定めて壽は千歲なり。「起世經」に云はく、「香樹衣樹有
 り、香を取り衣を取るに枝は自ら垂れ下る、衣食は共に用て人に親疎無し、男女愛染のと
 きに共に樹下に至る、若し是れ所視なれば樹の枝は本の如し。若し非觀なれば樹は爲に枝
 を低る、即ち彼人の爲に百千の敷具を出して、意の所意に隨ひて、歡娛愛樂せしむ、大小
 便利に地は自ら開合す、彼若し命終すれば必ず欲天に生ず、屍を道中に輿るに悲哭する者
 無し、鳥有り高逝と名く、山より飛び來りて、死人の髮を銜みて遠く洲渚に置く、餘の三
 洲に於て最上高勝なれば鬱單越と名く」と。二中洲とは、一には矩拉婆、此には勝邊と
 云ふ、二には憍拉婆、此には有勝邊と云ふ、皆人の住する有り、身形卑陋なり、如上の洲
 等は皆是れ人及び鬼畜等の所住處なり、是の如きの一須彌、一日月、一四洲等を一數と爲
 して一千に至る、是を小千世界と云ふ、又小千を以て一數として千に至る、是を中千と爲
 す、又中千を以て一數と爲して千に至る、是を三千大千世界と爲す。是れ則ち盧舍那所居

いて初禪以下に於て計すると、三界に通ずるとの二説あり、俱舍十一、正理論三十一、瑜伽第二、智度論第二は前者に屬し、金光明、樓炭經等は後に屬す。

【具に：如し】華嚴經、智度論等。

【佛：出現す】賢劫の一千佛。

【七】以下五趣を明す。

【順正理論】二十一の左。

【下の四趣】欲界の四趣。

【器と及び有情】所住の國土と五趣

【三界の中：分有り】以下三界五趣を明すに初此文正理論第二十一の十三紙取意。

【善と染と：非ず】界趣の體を明す。

【有情：中有等】五蘊積集の有情と器世間と中有生有

【五の名：故に】五趣の名義を明す

の千葉の蓮華の一葉なり、一葉の中に百億の須彌と百億の日月と百億の四天下と有り、是の如きの千葉の中に各各に三千大千世界有り。是千箇の三千大千世界の中の四洲等は、皆是れ人趣等の住處なり、是の如く十方に無量の世界海有り、繁を恐れて述べず、具に説くこと別の如し。此大洲の中には、増劫の時には四種の輪王出づ、減劫の時には佛出現す。

(七)次に五趣を明す。五趣とは三界に通ず。『順正理論』に云はく、「那落迦等の下の四趣の全と及び天の一分となり、謂はく六欲天なり。器と及び有情とを總じて欲界と名く、是の如きの欲界に總じて二十處有り、地獄と洲と異れば分ちて二十と爲す。八大地獄を地獄異と名く、及び四大洲となり。是の如きの十二に六欲天と傍生と餓鬼とを併すれば、處は二十と成る。若し有情界は自在天より無間獄に至り、若し器世界は乃し風輪に至る、是れ欲界の攝なり。三界の中に於て五趣有ることを説かば、唯欲界に於て四趣の全有り、三界に各天趣の一分有り。云何が五と爲すや、體と名と是れ何ん。謂はく、前の所説の地獄と傍生と鬼と、及び人と天と、是を五趣と爲す。善と染と無記と有情と無情と及び中有等は、皆是れ界の性なり、趣の體は唯無覆無記に攝す、唯是れ有情にして中有に非ず。五の名を辨せば、那落をば人と名け、迦をば惡と爲す、人多く惡を造りて其中に墮墜す、是に由るが故に那落迦趣と名く。傍生と言ふは舊には畜生と云ふ、彼趣、多分は身横に住するが故に、又類多なるが故に、愚癡多きが故に、名けて傍生と云ふ。餓鬼と言ふは、謂はく餘生の中に意びて他の物を盜み、慳貪等を習へばなり、亦怯劣多くして、其形は瘦悴して身心輕躁

【餘生】 前生。

【下上界・業】 自下は廣く、獄鬼畜修羅人の五趣の廢立を明す。此は結前生後の文なり。

【染善は趣の因】 五趣の果報を善惡の業因に從へて分ち、下の十惡の引滿二業に約して分別するに簡ぶ。

【七】 初に地獄趣を明す。

【執・觀ん】 情謂の地獄は地下にありて、隔歴して重苦を受くるを顯す

【人惡】 邪落迦の漢名。

【順正理論】 卷三十一の五右。

なり、故に餓鬼と名く。人とは思慮多きが故に。天とに光明威徳皆熾盛なるが故に。下

と上界との趣には、染善は趣の因なり、染中の差別は十惡の業に由る。故に『正法念』に云はく、「上は地獄、中は餓鬼、下は畜生なり」と、此等の文に依りて、次第を建立す。

一には地獄の趣を明す。寒熱二の八大地獄の類
地獄は何れの處にか有る
二八の大人惡有り
寒熱は魚鳥に似たり
刀劍は雨滴の如し
人間の三業の過は
身口の業を放にすること莫れ

注すらく、地獄とは『順正理論』に云はく、「此瞻部洲の下二萬踰繕那を過ぎて、阿鼻
旨有り、深廣は前に同じ、謂はく各二萬なるが故に、彼底此を去ること四萬踰繕那なり、
餘の七の地獄は無間の上在り。其七とは何ん。一には極熱、二には炎熱、三には大叫、
四には號叫、五には衆合、六には黑繩、七には等活なり。八捺落迦には増各十六あり、
謂はく四門の外には各四増有り、皆名を異にするに非ざるを以て、但し其定數を標す」
寒捺落迦に亦八種有り。一には頽部陀、二には尼羅部陀、三には頽嘶吒、四には隴隴婆、
五には虎虎婆、六には囉鉢羅、七には鉢特摩、八には摩訶鉢特摩なり。此中の有情は嚴寒

動もすれば寒熱の射を招く
冥路には苦聚多し
孰れか自心の中に觀ん
炎寒にして信通すること無し
炮炙は何れの年にか窮る
割鬻は幾く許りにか終らん

冥路には苦聚多し
動もすれば寒熱の射を招く

孰れか自心の中に觀ん
炎寒にして信通すること無し

炮炙は何れの年にか窮る
割鬻は幾く許りにか終らん

冥路には苦聚多し
動もすれば寒熱の射を招く

【二と三と三】初二は身、次三は聲後三は瘡に苦あり
 【輪圍山】鐵圍山有が説かく、婆沙の師の説、俱舍に在り。
 【餘の孤地獄】八寒八熱の餘の孤獨なるもの。
 【或は多二一】多有情即ち三已上七以下、二有情、一有情の意。
 【無間と；故に】獄卒の有無を明す
 【異類の獄卒】牛馬頭等の阿防羅利をいふ。
 【初は聖；訛せり】獄卒に獄中に投げ落さるる初刹那時には、尙ほ人語を用ふ。
 【九】以下、別して八熱地獄を明す
 【囉陀那】集施と譯す。要義を集めて、衆生に施す意
 【等活；五逆罪】造罪の種別によりて、惡果に差異あるを示す、詳細は

に逼められて、身と聲と瘡との變ずるに隨ひて、差別の相名を立つ、謂はく二と三と三と其次第の如し。此寒地獄は四洲を繞る輪圍山の外の極冥闇所に在り、多くは賢聖を誘するに由りて、是の如きの苦果を招く。有が説かく、此れ皆熱地獄の傍に在りと。餘の孤地獄は、或は多、二、一の各別の業の招なり。或は江河、山間、曠野に近く、或は地下、空中、餘處に在り。無間と大熱と及び炎熱との三には、中に於て皆獄卒の防守すること無し、大叫と號叫と及び衆合との三には、少に獄卒有り、琰魔王の使、時時に往來して彼を巡檢するが故に。其餘は皆獄卒の爲に防守せらる、有情無情の異類は獄卒防守して、罪の有情を治罰するが故に。一切の地獄は身形は皆豎なり、初は理語に同じ、後には漸く乖訛せり。『正法念經』には、「十六の別處に、各異名有り。若し輕業を造れば即ち別處に生じ、具に重業を造れば、根本の中に生ず」と。
 此より但略して八大地獄を明さん。八熱地獄の因果の囉陀那、
 等活は善人を殺し
 衆合は身の三業なり
 大叫は五種の業
 極熱は七惡に由り
 壽命と身量とは
 注すらく、等活とは、『正法念經』に云はく、「若は善人、若は受戒の人、若は善行の人
 具に説くこと經論の如し
 無間は五逆罪なり
 炎熱は殺と盜と見と酒となり
 黑繩は盜業を加ふ
 號は殺と盜と見と酒となり
 無間は五逆罪なり
 具に説くこと經論の如し

長行參照。

【正法念經】第六地獄品取意の文。

【黑繩：千歲なり】正法念經地獄品取意の文。

【若し王云云】此は一切の妄語中、最上の妄語の相を釋成す。

【王と等しき】儲君又は大臣。【正直と爲す】大丈夫の言、金鐵よりも堅しとす。

を殺さんころに、樂たのしんで行まわじ多く作なし、普おま遍れく究くま竟やうし、命いのち根こんを斷たち已はりて、心こころに悔けを生しやうぜざれば
 等とら活かつ地ち獄じやくに墮おす。四よ天王てんわうの五ご百ひゃく年ねんを以もつて、彼か一いつ晝じつ夜やと爲なし、此この晝じつ夜やに乗のりじて、月つきと爲なし年ねん
 と爲なす、壽あは五ご百ひゃく歲さいなり、此この晝じつ夜やを取とりて、三さん十じゆの晝じつ夜やを月つきと爲なし、十じゆ二にの月つきを年ねんと爲なし壽あは五
 べしに准こす。黑くろ繩じゆとは、若もし人ひと有ありて殺ころし、善ぜん人にんの財さい物ぶつを偷ちゆう盜たうし、若もし受じゆ戒かいの人にん、若もし行ぎやう善ぜん
 の人にんに於おて、樂たのんで行まわじ多く作なし、盜ぬすんで本ほん處じよを離はなれて、心こころに悔けを生しやうぜずんば黑くろ繩じゆ地ち獄じやく
 に墮おす。三さん十じゆ三さん天てんの壽あは一いつ千せん年ねんを以もつて彼か一いつ晝じつ夜やと爲なす、此この晝じつ夜やに乗のりじて月つきと爲なし年ねんと爲な
 して、壽あは一いつ千せん歲さいなり。衆しゆ合ごうとは、若もし人ひと有ありて、殺ころ生しやうと偷ちゆう盜たうと邪じや行ぎやうとに於おて樂たのんで
 行まわじ多く作なし、普おま遍れく究くま竟やうし、若もし人ひと、尊そん者じやの妻さいを邪じや行ぎやうすれば、衆しゆ合ごう地ち獄じやくに墮おす。夜や摩ま
 天てんの二に千せん年ねんを以もつて彼か一いつ晝じつ夜やと爲なして、此この晝じつ夜やに乗のりじて月つきと爲なし年ねんと爲なして、壽あは二に千せん歲さい
 なり。號ごう叫けうとは、若もし人ひと有ありて殺ころと盜ぬすと邪じや見けんと飲いん酒じゆとに於おて、樂たのんで行まわじ多く作なし、若もし
 は酒さけを以もつて衆しゆ僧そうと、若もし持ち戒かいの人にんと、若もし禪ぜん定ぢやうの者ものとに與あたへて、心こころを則すなはち濁じやく亂らんせしむれば
 號ごう叫けう地ち獄じやくに墮おす。都と史し多た天てんの四よ千せん年ねんを以もつて彼か一いつ晝じつ夜やと爲なし、此この晝じつ夜やに乗のりじて月つきと爲なし年ねんと
 爲なして、壽あは四よ千せん歲さいなり。大だい叫けうとは、若もし殺ころと盜ぬすと邪じや行ぎやうと飲いん酒じゆと妄ま語ごとに於おて、樂たのんで行まわじ
 じ多く作なし、若もし王わうと王わうに等とらしきとを、謂いうて正せい直ぢやくと爲なす、二に人にん對たいして、口くちに正せい說せつせず
 して、財さいを失しひ命いのちを斷たんずるは、大だい叫けう地ち獄じやくに墮おす。化け樂らく天てんの八はち千せん年ねんを以もつて彼か一いつ晝じつ夜やと爲なし、
 此この晝じつ夜やに乗のりじて月つきと爲なし、年ねんと爲なし、壽あは八はち千せん歲さいなり。炎えん熱ねつとは、若もし人ひと有ありて堅けん重じゆうに殺ころ
 と盜ぬすと邪じや行ぎやうと飲いん酒じゆと妄ま語ごと復また邪じや見けんと有ありて、樂たのんで行まわじ多く作なし他人たにんに向むかひて施せも無なく、

【復持戒淨行云】此下、最極惡邪行の相を示す。

【重心】猛利強盛なる大惡の加行心

【二〇】以下餓鬼趣を明す。

【前年…ども】過去入中に於て紅顏の容貌なりしをいふ。

【起世經】卷四。
【縱廣】南北を縱といひ、東西を廣といふ。
【不善果】正しく

捨も善惡の果報も無しと説かば、炎熱地獄に墮す。他化天の壽萬六千年を以て彼一晝夜と爲し、此晝夜に乗じて月と爲し年と爲して、壽命は一萬六千歳なり。極熱とは、若し殺と盜と邪行と飲酒と妄語と邪見と有りて、復持戒淨行の童子と善比丘尼の、未だ曾て戒を犯さざるとに於て、其をして退壞せしめて罪福無しと言ふは、大熱地獄に墮す、壽命は半中劫なり。無間とは、若し人有りて重心をもて、母を殺し父を殺し、佛身より血を出し、和合僧を破し阿羅漢を殺さば、阿鼻地獄に墮す。若し一逆乃至五逆を造れば、長は百由旬乃至五百由旬なり、苦を受くること一倍乃至五倍なり、壽は一中劫なり。

二に餓鬼趣を明さん。餓鬼趣の頌

慳心にして財を散ぜずんば

涕唾にも自在なること無く

前年には摘るべきの色なれども

今日は寒枯の樹

親親も知問を絶し

少きを分ち甘きを割く者は

注すらく、諸鬼の住處とは『起世經』に云はく、閻浮洲の南に當りて、鐵圍山の外に閻

魔王の宮殿住處有り、縱廣正當にして六千由旬なり、七寶の所成なり。閻羅行樹花果、

美妙にして衆鳥和鳴す。不善の果の故に晝夜六時に赤融銅有り、諸の宮殿等は盡く變

定んで餓身を感じ來る

河に臨めば炎火開く

骨立ちて面は灰の如し

葉飛んで見る者は哀む

獨長夜の臺に泣く

居然として此災を脱る

は眞悲並に殺生業に約す。

【赤銅】 熱赤銅湯。

【正理論】 卷三十

一。

【鬼に三種有り】

此下無間地獄の伴類を明す。

【藥叉】 能嗽といふ、人を嘔食す。

【恭畔茶】 藥形といふ、舊に冬瓜といふ。

【正法念經】 第十六卷より第十七卷に至る餓鬼品の取意文。

【前の二經】 起世經、正法念經。

【多の差別】 三種九種、三十六種等。

【針口：謂へり】

正法念經に三十六種を列ぬる中、今は、第二、第三、第四、第五、第八、第十九、第二十、第三十六を擧ぐ。

じて鐵針と爲りて、王の口を張りて銅を寫す、口の中より次第に焦然して下より出づ、諸鬼を都領して罪人等を治す」と。『正理論』に云はく、「諸鬼の本住は琰魔王國なり、此より展轉して餘方に散趣す、此瞻部洲の南邊、直に下ること深さ五百由旬那の量を過ぎて、琰魔息と云ふ。王の都有り、縱廣の量も亦爾り。鬼に三種有り、謂はく無と少と多との財なり。三に各各三を分つ、故に九類と成る。大勢鬼とは、謂はく諸の藥叉と及び羅刹婆と恭畔茶と等なり、所受の富樂は諸天と同じ。或は樹林に依り、或は靈廟に依り、或は山谷に居し、或は空宮に處す。諸鬼は多分形豎にして行く、劫初の時に於ては皆聖語に同じ、後には處別に隨ひて種種に乖訛せり。鬼は人間の一月を以て一日と爲し、此月歲に乗じて壽は五百年なり。『正法念經』に云はく、「餓鬼の世界は、閻浮提の下五百由旬に住す、長さ三萬六千由旬なり、三十六種有り。一切の餓鬼は皆慳嫉の因縁に爲りて生ずる所なり、種種の心を以て、種種の業を造り、飢渴の火の爲に、其身を焚燒せらる。人中の十年を一晝夜と爲して壽は五百歲なり。此より下の不同に略して八類を明す、然も前の二經と『瑜伽』と此より下は唯、正、餓鬼の囑陀南に曰はく、

三十六種の餓鬼等は、人間の一月を一日と爲して、針口は慳嫉にして雇ひて人を殺す、糞鬼は慳惜して穢食を施す、皆慳嫉の因業に由りて生ず、此月歲に乗じて五百年なり、食吐は夫婦惑して妬みて食す、無食は人を托けて囚へて食を斷つ

人間の一月を一日と爲して、針口は慳嫉にして雇ひて人を殺す、糞鬼は慳惜して穢食を施す、皆慳嫉の因業に由りて生ず、此月歲に乗じて五百年なり、食吐は夫婦惑して妬みて食す、無食は人を托けて囚へて食を斷つ

水鬼は灰酒し施を行ぜず

欲色は姪法をもて不淨にして施す

熾然は財を奪ひて王臣に奉る
魔身は邪法を眞諦と謂へり

【不淨食】 殘食。

【欲色鬼云云】此等の二、經卷十七卷取意の文。
【若は男、若は女】童男童女。

注すらく、針口鬼とは、若し人有りて慳嫉にして、財を以て人を雇ひて殺戮を行ぜしむ。若は夫、妻をして沙門等に施さしむるに、其婦慳惜にして、實に有るを無しと言はば、針口鬼の中に墮す、壽命は前の如し。食吐鬼とは、若し婦人有りて、其夫を誑惑して自ら美食を噉ふ、或は丈夫有りて妻は異心無きに、便ち妬意を起して、獨美食を食すれば食吐鬼鬼の中に墮す、壽命は前の如し。食糞鬼とは、若し人有りて、慳惜にして不淨食を以て沙門等に施すに、彼知らずして已に便ち之を食すれば、食糞鬼鬼の中に墮す、壽命は前の如し。無食鬼とは、若し人有りて、慳嫉にして自ら強力を恃みて、良善を枉誣して、之を圜圜に繋ぎて人の糧食を禁じ、其をして死を致さしめ、悔恨を生ぜざれば、無食鬼鬼の中に墮す、壽命は前の如し。食水鬼とは、若し人有りて、酒をうるに水と灰の汁とを加へて愚人を惑し、布施を行ぜず福德を修せず。禁戒を持せず、作し已りて悔いざれば、食水鬼鬼の中に墮す、壽命は前の如し。熾然鬼とは、若し人有りて、貪嫉にして人の財を枉奪し、人の城郭を破し人民を殺害し、抄掠して財を得て王と大臣とに奉りて、轉凶暴を増せば熾然鬼鬼の中に墮す、壽命は前の如し。欲色鬼とは、若は男、若は女、姪女の法を行じて、此に由りて財を得て、非福田に施すは不淨心の施なれば、欲色鬼鬼の中に墮す、世人は説いて如意夜叉と云ふ、壽命は前の如し。魔身鬼とは、若し邪道を行じ邪見の法を説

【非偏田】 外道梵
土破戒無備の沙門
【妨礙・夢】 行食
の時、坐禪の時、
睡眠の時に現じて
作す。

【二】 以下畜生趣
を明す。

【順正理論】 卷三

【生類の顯形】 衆
生の類の黑白(顯)
長短(形)あるをい

【少きは：傍】 僅
少なる者を除き、
多くは四足を以て
歩行す。

【正法念經】 第十
八畜生品
【伴行】 三正以上
行動を共にす。

【正法念】 第十八

き、是れ眞諦なりと謂うて正法を信せざれば、魔羅身餓鬼の中に墮す、若は諸の比丘の
行時と食時とに、爲に妨礙と惡聲と惡夢とを作す、壽命は前の如し。

三に畜生趣を明さん。傍生趣の顯
畜生は何れの處よりか出づる
黒と白とを辨ぜずして
賢聖の誠を信すること無ければ
悠悠たる彼狂子
強弱五に食することを爲す
式微たり彼己の者

注すらく、『順正理論』に云はく、「傍生の所止は、謂はく水陸空なり、生類の顯形は無
邊に差別せり、其身の行相は少きは豎にして、多きは傍なり。水羅刹婆と及び緊捺落等の
如きは、傍生の攝なりと雖も、形豎にして行く、本は海中に住し、後に五趣に流す。初は
聖語に同じ、後には漸く乖訛せり」と、『正法念經』に云はく、「諸の畜生を見るに、種
種差別にして三十四億有り。心の自在なるに隨ひて五道に生ずれば、五道の中に於て畜生
の種類其數最も多し、種種の相貌、種種の色類有りて、行食同じからず、群り飛ぶこと各
異なり、憎愛違順すると伴行雙隻すると、同生共に遊となり。然るに『正法念』及び『起
世經』、『正理』、『瑜伽』に多くの建立有り、憎と愛と恐怖と四生と四食と、水陸空を行く

本是れ愚癡の人なり
情を任にし亦身を任にせり
寧ろ後世の辛を知らんや
此は是れ傍生の因なり
枉寔は誰に向ひてか陳べん
羴羊の神を放にするに莫れ

羴羊の神を放にするに莫れ

羴羊の神を放にするに莫れ

羴羊の神を放にするに莫れ

羴羊の神を放にするに莫れ

羴羊の神を放にするに莫れ

【起世經】第五。
【正理】論第三十。
【瑜伽】第二。
【交通】交會の異名。
【論及び經】正理瑜伽の二論。
【正法念經】起世正法の二經。
【正法念經】卷十八畜生品。

【邪法】外道の經書及び因明等。

となり。因果は寔に繁にして、備に擧ぐることを爲し難し。又難陀等は是れ傍生なりと雖も、然も其威徳は諸の天衆に勝れたり。阿素洛は諸の天衆と違諍し交通して譚曲多きが故に、或は天鬼畜の三趣の中に收む。然るに『正法念』の修羅に二有り、鬼と及び畜生となり。論及び經に准じて、此三種を分つ、雜類の傍生と龍の修羅と等なり。初の雜類に於て、『正法念經』に依りて、略して七類を明さん。

傍生の喘陀南

傍生の一趣は類は極めて多し

怨對は邪法をもて邪論議すれば

相隨は愛心をもて施して契を結べば

怖畏は強賊して聚落を破すれば

化生は蠶を養ひ及び蟲を殺し

濕は諸の水蟲龜等を殺し

三毒未だ斷ぜずして世通を得て

染心をもて牛馬等を和合せしめ

是の如き等の類は壽は定ること無し

注すらく、怨對とは、若し人有りて邪見にして邪法を習學し、互相に諍論すれば、後に

怨對畜生の中に生じて還相殺害す、謂ゆる蜣蛇と黃鼯と馬と及び水牛と鳥と角鴨と等なり、

水陸空に生じて形は無邊なり

蜣蛇鳥鴨となりて互に殺害す

必ず鴛鴦鴿鳥等に生ず

後に麋鹿多怖の中に生ず

外道火祀すれば化生に生ず

邪見にして蟲を殺して天を祭る等なり

瞋を起して國を破すれば卵生に生ず

邪見非禮ならしむれば胎の畜に生ず

多分は傍行なる故に之を名とす

【命命】大般若經に其命鳥といひ又比翼といふ。名義集には生、命、命、其命の名出づ【麋】小鹿の如くにして美なるをいふ。

【世俗通】五神通をいふ。

【邪見非禮】經には邪行非禮に作る即ち邪行は邪姪の異名にて荒姪の業行をいふ。【嚴顏】可畏の面色。【三】次に龍趣を

明す。

此類は極めて多し、壽量は定むること無し。相隨とは、若し人有りて、生死の爲の故に布施を行ずる時、尋いで共に願を發さく、「當來世に於て常に夫妻とならん」と、後に命命と鶻と鴿鳥とに生じて、多く樂んで愛欲す、此類は極めて多し、壽量は定むること無し。怖畏とは、若し人有りて、喜んで強賊を作して、鼓を撃ち貝を吹きて聚落を破壊し、大音聲を作して、諸の恐怖ならしむるが如きは、靈鹿の中に生じて心常に恐怖す、此類は極めて多し、壽量は定むること無し。化生とは、若し人有りて、蠶を養ひ蠶を殺すに、蒸し煮て水に漬せば、無量の火鬚蟲を生ず、有は諸の外道有りて、取りて火を以て燒きて、天に祀りて福を求むれば、化生の畜生の中に生じて、種種の異類有り、此等は極めて多し、壽量は定むること無し。濕生とは若し人有りて、邪見にして龜蠃と魚と蟹と蜂蛤と、池中の細蟲と弊中の細蟲とを殺害し、或は邪見にして天に事へ、蟲を殺して祭祀すれば、濕生の畜生の中に生ず。未だ貪欲瞋癡を斷ぜず、禪定を修學し世俗通を得、因縁有るが故に瞋恚の心を起して國土を破壊すれば、卵生の飛鳥鸚鵡等の中に生ず、此類は極めて多し、壽量は定むること無し。胎生とは、若し衆生有りて、愛欲の心を以て牛馬を和合し、其をして交會せしめ、或は他人をして邪見非禮ならしむれば、胎生の畜生の中に生ず、此類は極めて多し、壽量は不定なり。

次に龍趣を明さん。亦これ傍生趣の攝なり。

顯火は龍趣を感す

嚴顏にして遇すべからず

【毒氣】四毒中の
第三氣毒。
【金翅鳥】金翅鳥を
いふ、龍を食とす

【起世經】第五諸
龍金翅鳥品。
【娑伽羅】此には
鹹海といふ、七金
山の外の第八の海
住處に約して立名
す。

【其樹の：有り】
四方の諸宮を明す
に、初に四生に約
して明す。

【正法念經】第十
八畜生品取意の文

熱沙は身の上に雨り

皮膚は、幾か銷脱する

修羅は索を挽きて來り

閻浮に不善を行すれば

人道に若し惡無ければ

身を割くは猶忍ぶべし

畏るべし一瞋の報

嗟蟲は霧の下に聚る

毒氣は數數霧を爲す

金鳥は翅を搏ちて附く

非法は禍を作すこと屢なり

善龍は泉を下し注ぐ

何に況んや罵聲の句をや

長時に懼れを免れざることを

注すらく、「起世經」に云はく、「龍と及び金翅鳥とに各各四生有り、謂はく卵胎濕化なり。

大海水の下に娑伽羅龍王宮有り、縱廣八萬由旬にして七寶所成なり、園苑泉地に衆鳥和鳴

す。依低羅山非此には持の内海に難陀、婁波難陀の二の大龍の宮有り。大海の北に、諸の

龍王と及び金翅鳥との爲に一の大樹を生ず、名けて居吒奢摩離と曰ふ。此には鹿聚其樹の

根本は周七由旬、地に入ること二十一由旬、高さ百由旬なり、遍く五十由旬に覆へり。

其樹の東面に、卵生の龍と及び卵生の金翅鳥との宮有り、南面には、胎生の龍と及び胎生

の金翅鳥との宮有り、西面に濕生の龍と及び濕生の金翅鳥との宮有り、北面に化生の龍と

及び化生の金翅鳥との宮有り。此等の諸宮は、並に皆縱廣六百由旬にして、衆寶をもて

莊嚴せりと。『正法念經』に云はく、「若し瞋癡多きものは、大海の中の深さ萬由旬の龍

の所住の城に生ず、名けて戲樂と曰ふ、縱廣正等にして三千由旬なり。龍王は中に溝て

【布施：ならず】

施與するも虚志を起し、高慢なれば淨淨ならず。

【瞋恚：生ず】

瞋心を以てし、且つ世の樂報を願求せば其果は龍身を受くとも。

【和修吉龍王】

多頭と譯す。

【德叉迦龍王】

多正と譯す。

【跋難陀】

經に跋陀羅といふ、魏に賢龍といへり。等とは虚醜多等の六龍を等取す。

【三】以下、阿修羅趣を明す。

り。一には法行、二には非法行なり。一は世界を護り、二には世間を壞す。法行龍王の住處の宮殿には熱沙を雨らさず。謂はく前世に於て外道の戒を受け、布施を行すれども而も清淨ならず、瞋恚の心を以て、願くば龍の中に生ず、福德を憶念して法行に隨順するを以て熱沙の苦は無し、然れども其頂上に龍蛇の頭有り。其を名けて、七頭龍王、象面龍王、和修吉龍王、德叉迦龍王、跋難陀龍王等と曰ふ。善心を以ての故に、時に由りて雨を行し、諸の世間の五穀をして成就し、豐樂安隱ならしむ、実雹を降さず、佛法僧を信じ、四天下に於て甘雨を降し澍ぐ。非法の龍王の所住の處には、常に熱沙雨り、宮殿、及び其眷屬を焚燒す、磨滅して復生す、其を名けて惱亂龍王、番迅龍王、黑色龍王、多聲龍王といふ。若し諸の衆生善法を行ぜず、父母に孝せず沙門を敬せざれば、是の如きの惡龍勢力を増長し、四天下に於て惡雲雨を起して、五穀成ぜず能く世間を壞す。若し閻浮提の人、法行に隨順すれば、五十七億の龍衆流を注ぐ」と。此に彼經に依りて、略して二類を明さん。非法行龍王とは、若し人有りて瞋恚の心を以て、僧房、聚落、城邑を焚燒すれば、大海の中に生じて毒龍の身を受け、迭共に瞋惱し毒を吐きて相害す、命の極めて長きものは壽一申劫なり。法行龍王とは、若し人有りて、外道の戒を受け不淨の施を行じ搗食を持以て、惡戒の者及び諸の賤人とに與ふ、故に龍の中に生ず、往の福德を憶うて法行に隨順す、命の極めて長き者は壽一申劫なり。

（釋し）
四に阿修羅を明さん。阿修羅の類

【天】 切利天。

【起世經】 第五の阿修羅品。

【轉摩質多羅】 珠林に、響高又は穴居と譯すといふ。大海中より大音を以て己が名を叫びまた阿含に居すと長阿含にも釋あり九頭千眼、手は九百九十九、八脚等といふ。
【正法念】 同經第十八畜生品、四地阿修羅の中、第一の取意の文。第一【雜色】 青黃赤黒をいふ。
【天と等し】 帝釋天と比類す。

祕密曼荼羅十住心論 卷第一

詔曲憍心をもて布施を作せば
心に甘露を食りて天帝と寇ふ
日輪眼を射れば四光を放ち

四王の雨の如くなる劍に忍へず
其身盡大にして山に踞りて坐せり
壽命は八千出でんことを願はず

注すらく『起世經』に云はく、須彌山の東、千由旬を過ぎて、大海の下に轉摩質多羅阿修羅王の國土有り、縱廣正等にして八萬由旬なり。一の大樹有り。蘇質怛羅波吒羅と名

く、其本、周圍は七由旬に滿ち、地に入ること二十一由旬、高さ百由旬、枝葉は五十由旬を蔭覆す。其宮は皆是れ七寶をもて合成せり、園苑行樹衆鳥和鳴す。其次に復一切の諸

の小修羅等の宮有り」と。『正法念』に云はく、「天の怨敵を阿修羅と名く、略して二種有り。一には鬼道の所攝、二には畜生の所攝なり。鬼道の攝とは魔身餓鬼なり、神通力有り。畜

生の攝とは大海の中に住す。羅睺阿修羅王なり。欲界の中に於て、身を大小に化すること意に隨ひて能く作す。時に阿修羅、天女を觀んと思はうて、雜色の珠玉を以て甲冑と爲して、

光明晃昱として身は須彌の如し、珍寶の光明は青黃赤黒なり、心大いに憍慢して天と等と謂へり。若し閻浮提に正法を行ぜず、父母に孝せず、沙門を敬せず、法行に依ら

ざれば、諸天の勢力は悉く爲に減少す、若し閻浮提に正法を修行し、父母に孝養し、沙

命終して必ず修羅道に至る
天帝經を誦すれば蓮に入ることを早し
月を見る時には憂陀島に遊ぶ
天に昇りて還りて墜ちて幾か憂惱する

心性不直にして顛倒を愛す
冥冥として長夜に徒に生老す

冥冥として長夜に徒に生老す

心性不直にして顛倒を愛す

冥冥として長夜に徒に生老す

冥冥として長夜に徒に生老す

冥冥として長夜に徒に生老す

冥冥として長夜に徒に生老す

冥冥として長夜に徒に生老す

【若し天出て云云】
怪き日蝕の縁。

【業果】 業とは修
羅手を以て日光を
障ふ、果とは日光
隠覆せらるるをい
ふ。

【豊儉を言ふ】 豊
年なり凶作なりと
いふ。

【又阿修羅云云】
異なる月蝕の所由
を明す。

【或は復修羅云云】
希なる震動の事由
を述す。

【五穀の貴賤】 五
穀の高下。

【正法念に依り云
云】 以下は正法念
經の旨要を採り、
四種阿修羅の因果
を明す。十八卷よ
りに二十卷に至る文
に依る。

【羅睺阿修羅】 (羅
husta) 執月と譯
す。帝釋と戰ふ時
手を以て日月を執
り光を蔽ふと。

門を恭敬すれば、一切の諸天の勢力は増長す。時に四天王即ち修羅の所住に當りて、空中より諸の刀劍を雨らす。若し天出でされば、修羅昇らんと欲す、日は千光を出して、其目を映障して天宮を見しめず、即ち右の手を舉げて、以て日輪を障へ手より四の光を出す、青、黄、赤、黒なり。閻浮提の中の邪見の論師は、業果を識らずして妄りに豊儉を言ふ。又阿修羅は海上に行きて月を見て、常に憂陀延山に遊ぶ、天に往き昇らんと欲うて、手を以て月を障ふるに四種の光を出す。諸の呪術の師は、妄に豊儉を言ふ。或は復修羅は威を奮ひて怒を繼にして震吼すること雷の如し。諸國の相師は天獸下ると言ひ、妄に豊儉と五穀の貴賤とを言ふ、或は王者の災變吉凶を言ふ、或は兵起らん深齋して福を求めよと言ふ。當に知るべし、皆是れ閻浮提の中に、善と不善とを行じて、能く斯を感ずることをしと。

【正法念】に依りて、略して四地を明さん。第一地とは、若し婆羅門有りて、第一聰慧にして四交道に於て諸の病人に施し、一の佛塔を惡人の火燒せるを見て如來の塔を救ふ、而れども由信無く常に鬪戰を愛するものは、羅睺阿修羅の中に生ず。人間の五百年を彼一晝夜と爲し、壽は五千歳なり。此三十の晝夜を取りて一月と爲し、十二月を一年に爲し、若し人有りて大施會を作して、外道を供養して淨施を行せず、種種の食を以て破戒雜行の人に施し、心に正思すること無し、是の如く施し已るものは、陀摩羅阿修羅の中に生ず、人間の六百年を彼一晝夜と爲し、壽は六千歳はり。第三の地とは、若し人有りて、節會の日に因りて種種に博戲し、此に因りて財を得て不淨施を行じ、食を以て破戒の病人に施す、心

【陀摩羅阿修羅】骨明と譯す。經中に勇健阿修羅ともいふ。

【節會】衆人會合し任意に戲樂する日、入節日等を言ふに非ず。

【華鬘阿修羅】法華玄贊に一伎難施とは華鬘に當る梵に吠摩質咀、此に綺畫といふ、毘摩質多羅は訛なり」と、以て知るべし。

【第四地云云】以下第二十卷取意の文。

【業果】業とは出家沙門を惡口するをいふ、果には第四阿修羅地（不動）に生ず。

【鉢阿婆】經に鉢阿婆に作る、王の

人趣を明す。

【地持云云】以下即是我師に至るまで、道宣の諸經要集第十三、二十紙

に正思すること無し、是の如く施し已るものは、華鬘阿修羅の中に生ず、人間の七百年を彼一晝夜と爲し、壽は七千歳なり。第四の地とは、若し人有りて、邪見にして業果を識らず、第一精進持戒の人の來るを見て、其求乞に従ひて乃ち一食を施し、而も是言を作す、「汝は下賤の人なり、何の福德か有らんと」と、鉢阿婆阿修羅の中に生ず、人間の八百年を彼一晝夜と爲し、壽は八千歳なり。

五に人趣を擧ぐ。人趣の中には二種の行有り、謂はく十種の善と惡となり、惡は三途に墮し、善は三天に昇る。

十惡の頌
三途の因業は是れ十惡なり
數取の云爲動作の咎は
身の三口の四意の根本の
過を知りて必ず改むれば賢聖に齊し

注すらく、「地持論」に云はく、「殺生の罪は能く衆生をして三惡道に墮せしむ、若し人中に生ずれば、二種の果報を得。一には短命、二には多病なり」といへり。是の如きの十惡に、一一に皆五種の果報を備ふ。一には殺生は何が故にか地獄の苦を受くるや、其れ殺生は衆生を苦むるに以るが故なり。所以に身壞し、命終すれば、地獄の衆苦、皆來りて已を切む。二には殺生は何が故にか出でて畜生と爲るや。殺生は慈憫有ること無くして、行人

一業必ず五種の因と爲る
誰か知らん來世に苦辛多きことを
三毒蔓延して人をして淪ましむ
善男善女よ怒りて仁を爲せ

一業必ず五種の因と爲る
誰か知らん來世に苦辛多きことを
三毒蔓延して人をして淪ましむ
善男善女よ怒りて仁を爲せ

一業必ず五種の因と爲る
誰か知らん來世に苦辛多きことを
三毒蔓延して人をして淪ましむ
善男善女よ怒りて仁を爲せ

一業必ず五種の因と爲る
誰か知らん來世に苦辛多きことを
三毒蔓延して人をして淪ましむ
善男善女よ怒りて仁を爲せ

より二十八紙までの具文を撰す。

【地持】八卷。菩薩地持經といふ。

北涼曇摩讖の譯、瑜伽の菩薩地持同本異譯。

【雜寶藏經】十卷元魏吉迦夜譯す。

百二十一の因縁を擧げて、人に作福と持戒を勉む。

【華報】華報と果報は世の華果に寄せて、果報の熟不春華は報なれども秋の果實に比せば未だし、唯秋の菓のみ實果とす、合法は思ふべし。

【五】二に偷盜を明すに、一惡餘惡を引起することを示す。

【八身・縁】初に世間の財を盗む

倫に乖くに以るが故に、地獄の罪畢りて畜生の身を受く。三には殺生は何が故にか復餓鬼と爲るや。其れ殺生は必ず慳心に縁りて、滋味を食著するに以て復餓鬼と爲る。四には殺生は何が故にか人に生じて短壽を得るや。其れ殺生は物の命を殘害するに以るが故に短壽を得。五には殺生は何が故にか兼ねて多病を得るや。殺生は違適して衆患競ひ集るに以るが故に、多病を得るなり。當に知るべし殺生は是れ大苦なり。又『雜寶藏經』に云はく、

「時に一の鬼有りて、日連に曰して言さく、我常に兩肩に眼有り、胸に口鼻有りて、常に頭有ること無し、何の因縁の故ぞ。日連答へて言はく、汝、前世の時、恆に剽膺の弟子と作りき、若し人を殺す時には、汝常に歡喜の心有りて、繩を以て髻に著け之を挽く、是因縁を以ての故に、此の如きの罪を受く」と。此は是れ惡行の華報なり、地獄の苦果は方に後世にあるなり。復一の鬼有りて、目連に白して言さく、「我身は常に塊の如き肉にして、手、眼、耳、鼻等有ること無し、恆に蟲鳥の爲に食せられて、罪苦堪へ難し、何の因縁の故にか爾る。答へて言はく、汝、前世の時に、常に他に藥を與へて、他の兒胎を墮す、是故に此の如きの罪を受く」と。此は是れ華報なり、地獄の苦果は方に後身に在りといへり。又其殺生に縁りて貪害滋く多し、滋く多きに以るが故に、便ち義讓無くして劫盜を行す。今身に偷盜して、與へざるを取れば、死して即ち常に鐵窟地獄に墮して、遐劫の中に於て諸の苦惱を受くべし。受業既に畢りて畜生の中に墮す、身常に重きを負ひ、驅蹙捶打せられて餘息有ること無し、所食の味は唯水艸を以てす、此中に處して無量に生死す、本

【微善】人中の引業、即ち讀誦陀羅尼の人を吹く風縁なり。二に三寶物を盗むを明す。

因縁に以り若し微善に遇ひ、劣人身に復すれば、恆に僕隸と爲りて驅策走使せられ自在なることを得ず、債債未だ畢らざれば聞法することを得ず、此に縁り苦を受けて輪廻無窮なり。當に知るべし此苦は皆偷盜に縁る。今身に光明を隱蔽し、光明を以て三寶に供養せず、反て三寶の光明を取りて以て自ら燃せば、死して即ち黒耳、黒繩、黒闇地獄に墮して、遐劫の中に於て諸の苦惱を受くべし。受苦已に畢りて、螻蟻の中に墮して光明に耐ざるなり。此中に在りて無量に生死す。本因縁により若し微善に遇うて、劣人身に復すれば、形容黧黑にして垢膩不淨なり、臭處穢惡にして人に厭遠せらる、雙眼盲瞶して天地を視ず。當に知るべし光明を隱蔽すること亦偷盜に縁る故なり。故に『地持論』に云はく、「劫盜の罪は亦衆生をして三惡道に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得。一には貧窮、二には共財にして自在なることを得ずといへり。劫盜は何が故に地獄に墮するや。其れ劫盜は人の財を剝奪し偷竊して、衆生を苦しむるに以るが故に、身死して即ち寒氷地獄に入りて備に諸苦を受く。劫盜は何が故に出でて畜生と爲るや。其れ人道を行せざるに以るが故に、畜生の報を受けて身常に重きを負ひ、穴を以て人に供して其宿債を償ふ。何が故にか復餓鬼に墮するや。慳食を以て便ち劫盜を行するに縁り、是を以て畜生の罪畢りて復餓鬼と爲る。何が故にか人と爲りて貧窮なるや。其れ劫盜は物をして空乏ならしむるに縁りて、所以に貧窮なり。何が故にか其財にして自在なることを得ざるや。其れ劫盜は偷奪して官に没るるに縁りて、若し財錢あれば則ち五家の爲に、共せられて自在な

【六】三に邪姪の
多果を明す。

ることを得ず。當に知るべし劫盜は二の大苦なり。又『雜寶藏經』に説かく、「時に一の鬼有り、目連に白して言さく、大徳、我腹は極て大にして囊のごし、咽喉手足は甚だ細きこと針の如くにして飲食を得ず、何の因縁の故に此の如きの苦を受くるや。目連答へて言はく、汝前世の時に、聚落の主と作りて自の豪貴を恃みて、飲酒して縱横に餘人を輕欺し、其飲食を奪ひて衆生を飢困せしむ、是因縁に由りて此の如きの罪を受く。此は是れ華報なり、地獄の苦果は方に後に在り。復一の鬼有り、目連に白して言はく、常に二の熱鐵の輪有り、兩の腋の下に在りて、身體を轉りて焦爛す、何の因縁の故にか爾るや。目連答へて言はく、「汝前世の時に、衆僧の爲に筒を作るに二番を盗み取り、兩の腋の底に挿む、是故に此の如きの罪を受く。此は是れ華報なり、後に方に地獄の苦果を受くべし」といへり。

(二六)又盜を以ての故に心貞正ならざるに緣りて、情を恣にして姪姪す。今身に姪姪すれば現世には凶危ありて常に自ら驚恐す。或は夫主と邊人との爲に知られて、時に臨みて殃を得、刀杖をもて刑を加へ、手足分離せられて乃至命を失ふ。死して地獄に入りぬれば之を鐵床に臥せしめ、或は銅の柱を抱かして、獄鬼火を燃して以て其身を燒く、地獄の罪畢りて當に畜生を受くべし、鶏、鴨、鳧、雀、犬、豕、飛蛾なり。是の如きの無量に生死して、遯劫の中に於て諸の苦惱を受く、受苦既に畢りて本因縁に以り、若し微善に遇うて劣人身に復すれば、閻門姪亂にして妻妾貞しからず、若し寵愛有れば人の爲に奪はる、常に恐怖を懷きて危いこと多く安んずること少し。當に知るべし、危苦は皆邪姪に緣

【邪姪は何が故云
云】五果を明す。

【二七】四に妄語の
多果を明す。

りて生ずることを。故に『地持論』に云はく、「邪姪の罪は亦衆生をして三惡道に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得。一には婦貞潔ならず、二には意に隨ふ眷屬を得ずといへり。邪姪は何が故に地獄に墮するや、其れ邪姪は非分を干犯して、物を侵して苦みを得すに以る、所以に命終して地獄の苦を受く。何が故にか邪姪出でて畜生と爲るや、其れ邪姪は人理に順ぜざるに以りて、所以に獄を出でて畜生の身を受く。何が故に邪姪は復餓鬼と爲るや、其れ姪は皆同じく慳愛なるに以る。慳愛の罪の故に復餓鬼と爲る。何が故にか邪姪は婦貞潔ならざるや、他の妻を犯するに緣るが故に、得る所の婦は常に貞正ならざるなり。何が故に邪姪は意に隨ふ眷屬を得ざるや、其れ邪姪は人の寵する所を奪ふに以る、故に其眷屬は意に隨ふを得ず、所以に復人の爲に奪はる。當に知るべし邪姪は三の大苦なることを『雜寶藏經』に説くが如し、「昔一の鬼有り、目連に白して言さく、我物を以て自ら頭を蒙籠せり、亦常に人來りて我を殺さんことを畏れて、心常に怖懼すること堪忍すべからず、何の因緣の故に爾るや。答へて言はく、汝前世の時に外色を姦犯して、常に人の見んことを畏れ、或は其夫主の捉縛り打ち殺さんことを畏れ、或は官法の之を都市に鬻せんことを畏れて常に恐怖を懷く、恐怖相續するが故に此の如きの罪を受く。此は是れ惡行の華報なり、後に方に地獄の苦果を受くべし」といへり。

又其邪姪に緣るが故に、發言皆妄なり。今身に若し妄に衆生を苦惱すれば、死して則ち當に啼哭地獄に墮して、還劫の中に於て諸の苦惱を受くべし。受苦既に畢りて餓鬼の中

【二八】五に兩舌の
多果を明す。

に墮し、此に在りて苦惱し無量に生死す、本因縁に以り、若し微善に遇うて劣人身に復すれば諸の疾病多く、疴癘虚弱にして頓乏楚痛す、自ら苦毒に嬰り人に愛念せられず。當に知るべし此苦は皆妄語に縁りて生ずることを。故に『地持論』に云はく、妄語の罪は亦衆生をして三惡道に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得。一には多く誹謗を被り、二には人の爲に誑さる」といへり。何が故に妄語は地獄に墮するぞや。其れ妄語は不實にして、人をして虚爾として苦を生ぜしむるに縁る、是を以て身死して地獄の苦を受く。何が故にか妄語は出でて畜生と爲るや。其れ欺妄は人の誠信に乖くに以る、所以に獄を出でて畜生の報を受く。何が故に妄語は復餓鬼と爲るや。其れ妄語は皆同じく慳欺に縁る、慳欺の罪の故に復餓鬼と爲る。何が故に人の爲に多く誹謗せらるる。其れ妄語は誠實ならざるに以るが故なり。何が故に妄語は人の爲に誑さるるや。其れ妄語は人を欺誑するに以るが故なり。當に知るべし妄語は四の大苦なり。

又其妄語に縁りて兩舌を致さしむ。今身には言に慈愛無く、讒謗毀辱し、惡口雜亂す、死して即ち當に拔舌烋銅犁耕地獄に墮して、遐劫の中に於て諸の苦惱を受くべし。受苦既に畢りて畜生の中に墮して糞穢を啖食す、鶻鷲鳥の如く舌根有ること無し、此中に在りて無量に生死す、本因縁に以り、若し微善に遇うて、劣人身に復すれば、舌根具せず口氣臭惡にして瘡癩零灑なり、齒齋白ならずして滋歷疎少なり、脫善言有れども人に信用せられず當に知るべし。讒亂は皆、兩舌に縁りて生ずることを。故に『地持論』に云はく、

「兩舌の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得。一には繁惡の眷屬を得、二には不和の眷屬を得」といへり。何が故に兩舌は地獄に墮するや。其れ兩舌は人の親愛を離れしむるに緣る、別離し苦しむる故に地獄の苦を受く。何が故にか兩舌は出でて畜生と爲るや。其れ兩舌は鬪亂す、事野干に同じきに緣りて畜生の身を受く。何が故にか兩舌は復餓鬼と爲るや。其れ兩舌は亦慳嫉するに緣るを以てなり、慳嫉の罪の故に復餓鬼と爲る。何が故に兩舌は人と爲りて繁惡の眷屬を得るや。兩舌を以て人の朋儔をして、皆惡を生ぜしむるに緣るが故なり。何が故にか兩舌は不和の眷屬を得るや。兩舌を以て人の親好を離けて、不和合ならしむるに緣るが故に。當に知るべし兩舌は五の大苦なることを。

【九】六に惡口の多果を明す。瑜伽論五十九、珠林九十三に釋出づ。

【閻別剗劍】宮刑に處せられ、足を斷たれ、入墨せられ、鼻を切らる。

又兩舌に緣りて、言輒ち麤惡なり。今身に惡口を以ての故に鬪亂殘害し、更相に侵伐して、諸の衆生を殺すに緣りて、死して即ち刀兵地獄に墮し、還劫の中に於て諸の苦惱を受くべし。受苦既に畢りて畜生の中に墮し、脚を抜き勝を賣り、脛を輸れ髀を喪され、還劫の中に於て諸の苦惱を受く、受苦既に畢りて此中に在りて無量に生死す。木因緣を以て若し微善に遇うて劣人身に復すれども、四肢は具せず。閻別剗劍、形體殘毀せられ鬼神に衛られずと人に輕棄せらる。當に知るべし衆生を殘害することは、皆惡口に緣りて生ずることを。故に『地持論』に云はく、「惡口の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得。一には常に惡音を聞き、二には言説すべき所あれば恆に

訟諍有りといへり。何が故にか悪口は地獄に墮するや。悪口する所は、皆人を害せんと欲するに以りて人聞いて苦を爲す、所以に命終して地獄の苦を受く。何が故にか悪口は出でて畜生と爲るや。其れ悪口は人を罵りて、以て畜生と爲すに以りて、所以に獄を出でて即ち畜生と爲る。何が故にか悪口は復餓鬼と爲るや、其れ慳吝に緣りて干觸する時は惡口す、所以に畜生の苦畢りて復餓鬼と爲る。何が故に悪口は人と爲りて常に惡苦を聞くや。其れ發言蠱鄙なるを以て、聞くところ常に惡口なり。何が故に、惡口は言説すべき所に恆に諍訟有るや。其惡口は、衆徳に違逆するに以りて、説言する所有れば常に諍訟を致す。當に知るべし惡口は六の大苦なることを。

【三〇】七に綺語の
多果を明す。
【義益なし】義利
實益なき意、無益
の雜談をいふ。

又其惡口に緣りて、言は輒ち浮綺にして都て義益無し、義益無きが故に今身に即ち憍慢を生ず、死して即ち當に束縛地獄に墮し、遐劫の中に於て諸の苦惱を受く。受苦既に畢りて畜生の中に墮して、唯し水艸を念じて父母の恩養を識らざるなり、此中に在りて無量に生死す。木因縁に以りて、若し微善に遇うて劣人身に復すれども、邊地に生在して忠孝仁義を知らず、三寶を見ざるなり。若し中國に在れば、短陋僞儒にして人に陵蔑せらる。當に知るべし憍慢は皆、無義調戲不節に緣りて生ずることを。故に『地持論』に云はく、「無義語の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得。一には所有の言語人信受せず、二には言説する所有れども、明了なること能はずといへり。何が故にか無義語は地獄に墮するや。語既に非義なり、事戚く彼れを損す、所以に命終し

【三一】八に貪欲の
多果を明す。
【沸屎地獄】八大地獄の各各に、副
地獄十六づつあり
即ち遊増地獄とい
ひ、罪人の遊賢す
べく増加されたる
獄、沸屎は其一。

て地獄の苦みを受く。何が故にか無義語は出でて畜生と爲るや。語は無義なるに縁りて人
倫の理に乖く、所以に地獄を出でて畜生の身を受く。何が故にか無義語は復餓鬼と爲るや。
語は無義の故に慳慳に障へらる、慳慳に因るが故に、復餓鬼と爲る。何が故にか無義語の罪
は、出生して人の爲に言語する所有れども人信受せざるや。語は無義なるに縁りて承
すべきに非ず。何が故にか無義語は、言説する所あれども明了なること能はざるや。語は
既に無義なる皆暗昧に縁る、暗昧の報の故に明了なること能はざるなり。當に知るべし無
義語は、七の大苦なることを。

【二】又無義語に縁るが故に、廉讓なること能はずして、貪欲をして厭ふこと無からしむ。今
身に慳貪にして布施せざれば、死して即ち當に沸屎地獄に墮して、退劫の中に於て諸の
苦惱を受くべし。受苦既に畢りて畜生と餓鬼の中に墮し、衣食有ること無く資くるに人を
仰ぐ、所噉の糞穢も與へざれば得ず、此中に在りて無量に生死す、本因縁に以り、若し微
善に遇うて劣人身に復すれば、飢寒裸露し困乏にして常に無し、人既に與へざれば求む
れどもまた得ず、縦ひ纖毫も有れば即ち剝奪に遇ふ、守り苦しむこと無方にして身を亡し
命を喪す。當に知るべし布施せざるは、皆貪欲に縁りて生ずることを。故に『地持論』に
云はく、「貪欲の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得。
一には多欲、二には猷足有ること無し。何が故にか貪欲は地獄に墮するや。其れ貪欲に縁
りて身口を作動して物を苦しむ、所以に身死して地獄の苦を受く。何が故にか貪欲は出で

【三】九に瞋恚の
多累を明す。

【長短云云】善惡
を云爲せられ、其
長所を説かず、其
短所をいふなり。
【何故に瞋惱云云】
以下、離して五累
を釋す。

て畜生と爲るや。此食欲に緣りて動すれば人倫に乖く、是故に獄を出でて即ち畜生と爲る。何が故にか食欲は復餓鬼と爲るや、此食欲に緣りて得れば必ず貪惜す、貪惜の罪の故に復餓鬼と爲る。何が故に、食欲は復多欲なるや。此食欲に緣りて所欲 彌多ければなり。何が故に食欲は満足有ること無きや。此食欲に緣りて貪求して厭ふこと無ければなり。當に知るべし食欲は八の大苦なることを。

又食欲は意に適はざるに緣るが故に、則ち憤怒して瞋恚を起すこと有り。今身に若し瞋恚多き者は、死して即ち當に泥犁地獄に墮し、歷劫の中に於て具に衆苦を受くべし。受苦既に畢りて畜生の中に墮し、毒蛇虺蝮虎豹豺狼と作る、此中に在りて無量に生死す。本因緣に以りて、若し微善に遇うて、劣人身に復すれば復瞋恚多く、面貌醜惡にして人に憎惡せらる。唯親友とならざるのみに非ず、實には赤眼に見んことをも喜ばざるなり。當に知るべし忿恚は、皆瞋惱に緣りて生ずることを。故に『地持論』に云はく、「瞋恚の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得。一には常に一切の爲に其長短を求められ、二には常に衆人の爲に惱害せらるといへり。何が故に、瞋惱は地獄に墮するや。此瞋惱は被害して苦惱するに緣るが故に、地獄の苦を受く。何が故にか瞋惱は出でて畜生と爲るや、此瞋惱は仁恕すること能はざるに緣りて、所以に獄を出でて畜生の身を受く。何が故に瞋惱は復餓鬼と爲る、此瞋惱は慳心より起るに緣りて、慳心の罪の故に復餓鬼と爲る。何が故にか瞋惱は常に一切の爲に其長短を求めらるるや。此瞋惱は含容

【三】第十に邪見の多果を明す。
【正道】佛法の三寶四諦等。

【何が故にか邪見云云】以下、別して五果を釋す。
【神俗】世間に祀る天夜叉等の鬼神。
【正路】三寶を崇敬するをいふ云。
【此邪見は慳貪と相應俱起して、互に相離れざること明す。】

すること能はざるに縁るが故に、一切の爲に其長短を求めらる。何が故にか瞋惱は常に衆人の爲に惱害せらるるや。此瞋惱は人を惱害するに縁りて、人も亦惱害す。當に知るべし瞋惱は九の大苦なることを。

又其瞋惱に縁りて、邪僻を懷きて正道を信ぜざるなり。今身に邪見にして人の聽法誦經を遮し自ら滄探すれば、死して即ち當に聾癡地獄に墮し、退劫の中に於て諸の苦惱を受くべし。受苦既に畢りて畜生の中に墮して、三寶四諦の聲を聞けども、是れ善なりと知らず、殺害鞭打の聲をも是れ惡なりと知らず、此中に在りて無量に生死す、本因縁に以り、若し微善に遇うて劣人身に復し、人中に生存すれども聾瞽にして聞かず石壁に異ならず、美言善響絶えて覺知せざるなり。當に知るべし聽法を阻礙するは、皆邪見に縁りて生ずることを。故に『地持論』に云はく、「邪見の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得。一には邪見の家に生じ、二には其心、詭曲なり」といへり。何が故にか邪見は地獄に墮するや、邪見を以て唯し邪道と及び神俗とのみに向ひて、佛法僧を謗し三寶を崇めず、既に崇信せざれば人の正路を斷じて、苦に遭はしむることを致すに縁る、所以に命終して阿鼻獄に入る。何が故にか邪見復畜生と爲るや、邪見を以て正理を識らざるに縁る、所以に獄を出でて畜生の報を受く。何が故にか邪見は復餓鬼と爲るや、此邪見は慳心慳著し戻僻して捨てず、捨てずして慳著するに縁りて復餓鬼と爲る。何が故にか邪見は邪見の家に生ずるや、此邪見は僻習せる纏心なるに縁る、所以に人と爲りて邪

【是の如きの云々】
以下總じて上の諸
惡の過を結ぶ。

【即ち是れ我師】
反惡爲善の行人を
他の罪業苦報の人
に望めて云ふ。

【三】上來は、總
じて煩惱業苦の三
通に約し、異生眞
恙を明し、異生眞
に別して外道に就
いて唯迷理の見惑
の心品を明す。

【諸の外道】三十
大外道。

【時と大と云々】
初八句は三十外道
の名字を擧げ、後
二句は其宗計は皆
迷理の見惑なるを
示す。

【注すらく…なり】
正しく三十の計を
明すに、初に時外
道。

【彼偈】智論第一
中の偈を引用する

【時の自性を觀ぜ
ず】時法を計度し

見の家に生ず。何が故にか邪見は其心詭曲なるや。此邪見は中正にあらざるに緣るが故なり、所以に人と爲りて心常に詭曲なり。當に知るべし邪見は十の大苦なることを。是の如きの一一に微細の衆惡罪業無量無邊なり、皆地獄に入りて備に諸苦を受くること、算數して知るべきに非ず、且く略して言ふのみ。若し能く惡に反して善をなさば、即ち是れ我が師なり。

次に羶羊外道を明さん。諸の外道の囉陀南。

時と大と相應と二の建者と

自然と内我と人量を執すると

識と藏と知者と及び見者と

世梵と人と勝と常定を計すると

是の如きの三十の大外道は

注すらく『大日經』に復計有時と云ふは、謂はく一切の天地の好醜は皆時を以て因となす

と計す、彼偈に言ふが如し、時來れば衆生熟す、時至れば則ち催促す、時は能く人を覺悟せしむ、是故に時を因と爲す」と。更に有る人の言はく、一切の人物は時の所作にあらずと雖も、然も時は是れ不變の因なり、是れ實有の法なり、細の故に見るべからず、華實等の果を以ての故に時有り」と知るべし。何を以ての故に。果を見て因有りと知るが故に

此時法は不壞なるが故に常なり」と。亦時の自性を觀ぜざるを以ての故に、是の如きの妄計

自在と流出と尊貴を計すると

遍嚴と壽者と數取趣と

能所の二執と内外の知と

顯生の二聲と非聲と

て能生不變の外我とし、是れ色心の分位に假立せる虚假不實の法なるを知らずと。
【經に地等…説く】
第二の五六の計を明す。

【經に瑜伽…名く】
第三に瑜伽の我を明す。瑜伽は此に相應と譯す。

【因果を離る】
三世に常住するを以て、本無今有の造作の因果を離れたる意。

【心の…故に】
心の自性は相那利那に滅して相續するを觀見せず。

【經に建立…有り】
四に建不建の對計を明す。

【經に若自…なり】
五に第六七八計を明す。

【自在天…生ず】
自在天を以て、萬物創造すとす。

【十二門論】
觀作者門第十の文。

を生ずるなり。經に地等變化と云ふは、謂はく地、水、火、風、虚空なり。各各に執して眞實と爲す者有り。或が言はく、地は萬物の因と爲る。一切の衆生と萬物とは、地に依りて生ずることを得るを以ての故に。地の自性は、但し衆縁和合するによりて、有なりと觀ぜざるに以るが故に、是を見を生じて地を供養する者は當に解脫を得べしと以へり。次に有が計すらく、「水は能く萬物を生ず、火風も亦爾り」と。或が計すらく、「萬物は空より生ず、謂はく空は是れ眞解脫の因なり、宜しく供養し承事すべし」と。皆廣く説くべし。經に瑜伽我と云ふは、謂はく定を學する者の、此内心相應の理を計して眞我と以爲へり、常住不動にして眞性湛然たり、唯し此のみ是れ究竟の道にして因果を離れたりと。心の自性を觀するにあらざるが故に、是の如きの見を生じて眞我と以爲り、但し此理に住するを、即ち解脫と名く、經に建立淨、不建立無淨と云ふは、是中に二種の計有り、前の句は謂はく一切法を建立する者有り、此に依りて修行するを之を謂うて淨と爲す。次の句は謂はく、此建立は究竟の法に非ず、若し建立無きは謂ゆる無爲なり、乃ち眞我と名く、亦前の句の所修の淨を離れたり、故に無淨と云ふ。猶ほ私の自性を觀ぜざるによりて、是の如きの見を生ずること有り。經に若自在天、若流出及時と云ふは、謂はく、「一類の外道の計すらく、自在天は是れ常なり、是自在は能く萬物を生ず」と。「十二門論」の中に難じて云ふが如し、「若し衆生は是れ自在の子ならば、唯樂を以て苦を遮すべし、苦を與ふべからず、亦但し自在を供養せば、則ち苦を滅して樂を得べし。而も實には爾らず、但し自ら苦樂の

【陶師子】 陶器製造人。

【經に尊…生ず】 六に第九の那羅延を造主とする計を明す。

【經に自然…同ず】 七に第十の自然の計を明す。初印度次に漢土の計類を示す。

因縁を行いて自ら報いを受く、自在天の作には非ず。亦若し自在、衆生を作すと云はば、誰か復此自在を作すぞや、若し自在自ら作すと云はば則ち然らず、物の自作に非ざるが如し、若し更に作者有りといはば、則ち自在と名けずと。計流出とは、建立と大いに同なり、建立は心より一切の法を出すが如し、此中の流出は、手の功に従ひて一切の法を出すが如し。譬へば陶師子の、埴を挺し無間にして種種の差別の形相を生ずるが如し。次に時と云ふは、前の外道の宗計と少しく異なり、皆自在天の種類なり。經に尊貴と云ふは、此は是れ那羅延天なり。外道の計すらく、「此天は湛然常住にして不動なり、而も輔相有りて萬物を造成す」と。譬へば人主の無爲にして治するに、有司命を受けて、之を行するが如し。能造の主は、更に尊貴する所の者無きを以ての故に尊貴と名く。又此宗の計すらく、「尊貴は一切の地、水、火、風、空處に遍ぜり」と。昔論師有りき、彼宗計を伏せんと欲ふが故に、天祠に往詣して彼の天像の身上に於て坐して飲食す。西方には飲食の殘を極不淨と爲るに以りて皆共に忿怒す。論師の言はく、「所宗の如くならば、豈一切處の地、水、火、風、空界に遍ずる相に非ずや。」答へて言はく、「是の如し。」論師の言はく、「彼即ち地、水、火、風ならば我も亦是の如し、之を以て相入するに、何の不可なる所有りてか忿怒するや。」と。彼衆默然として報を加ふること能はざるなり。亦私の自性を觀ぜざるに猶るが故に、是の如きの妄計を生ず。經に自然と云ふは、謂はく一類の外道計すらく、一切の法は皆自然にして有なり。之を造作する者無し、蓮華の生じて色の鮮潔なるが如きは誰

【經に：明すべし】八に第一の内我ありとする計を明すこれ離離の我なり【難者の云はく云云】十二門論觀作者の文。
 【經に人量：然らば】九に第十二の人量と神我等同の計。
 【經に遍：名けんや】十に第十三遍嚴の事を小我の所爲とする計。

か染むる所ぞ、棘刺の利き端は誰か削り成す所ぞ。故に知んぬ諸法は皆自爾なることを。有る師難じて云はく、今目に世人の舟船室宅の類を造作するを觀るに、皆衆縁に従りて有なり、自然に成ずるには非ず、云何が自爾なるや。若し有なりと雖も未だ明了ならず、故に人の功を須ちて之を發すと謂はば、是れ亦然らず、既に人の功を須ちて之を發さば、即ち是れ縁に従りて自然の有に非ざるなり。大唐に所有ゆる老莊の教に、天自然の道を立つ、亦此計に同じ。經に内我と云ふは、有が計すらく「身中に心を離れての外に別に我の性有り、能く此身を運動して諸の事業をなす」と。難者の云はく「若し是の如くいはば、我は則ち無常なり。何を以ての故に。若し法は是れ因なると及び因より生ずるとは、皆無常なるが故に。若し我は無常ならば、則ち罪福果報皆悉く斷滅しなん」と。是の如き等の種種の論議は、校量の中に至りて廣く明すべし。經に人量と云ふは、謂はく神我の量は人身に等し、身小なれば亦小なり、身大なれば亦大なりと計す。『智度』に云はく「有が計すらく、神の大小は人身に隨ふ、死壞する時に神また前に出づ」と。即ち此と同なり。然るを彼宗は、我を以て常住自在の法と爲す、今既に身の大小に隨ふといはば、已に是れ無常なり、故に知んぬ然らざるなり。經に遍嚴と云ふは、謂はく、此神我は能く諸法を造す、然るに世間に尊勝遍嚴なることは、是れ我の所爲なりと計す。自在天の計と小しく異なる。『中論』に自在を破して云ふが如し「自在天は何が故に盡く樂人を作し、盡く苦人を作さずして、而も苦者と樂者と有るや。當に知るべし愛憎より生ず、故に自在にあらず」とい

【中論】寫倒なるべし、十二門論中の意、
【經に若壽…生ず】十一に第十四の壽者を明すに、初に有命の計、次に有命の計を明す。

【數取趣者…計す】數取趣に生じ、數取止まざるも、常恒不變の人我有りとす。

【三種の法印】一諸法無常なり、二諸法無我なり、三涅槃寂靜なりと。

へり。今遍業とは、既に能く諸の福業を造すと云ふといへども、而も業を以て苦を造すること能はず、何んが遍業自在と名けんや。經に若壽と云ふは、謂はく、有る外道の計すらく、一切の法乃至四大艸木等には皆壽命有るなり、艸木の伐り巴りて續生するが如き、當に知るべし命有りと言ふことを。又彼夜は則ち卷合す、當に知るべし亦常識有りて睡眠するに以るが故に」と。難者の云はく、若し斬伐せられて還て生ずるを見て、有命なりと以爲ば、則ち人の一支を斷つに復増長せず、豈命無からんや。合昏木の如きを眠有りといはば、則ち水の流れて晝夜に息まざるは、豈是れ常に覺めたるならんや。皆我の自性を觀ぜざるに由るが故に、種種の妄見を生ずるなり。經に、補特伽羅と云ふは、謂はく、彼宗には數取趣者有りと計す、一皆是れ一我なり、但し事に隨ひて名を異にするのみ」と。若し今世より後世に趣くこと有るは、是れ則ち識神を常とす。識神、若し常ならば、云何が死生有らん、死をば此處に滅するに名け、生をば彼處に出づるに名く、故に神常なりと言ふことを得ず。若し無常なりと言はば、則ち我有ること無けん。佛法の中の犢子道人と、及び説一切有者との如きは、此兩部は三世の法有りと言ふ。若し定んで過去、未來、現在有らば、則ち數取趣者有るに同じて、佛の三種の法印を失す。西方の諸の菩薩は種種の量を作して、彼宗計を破すなり。經に若識と云ふは、謂はく、有る一類の執すらく、「此識は一切處に遍ぜり、乃至地、水、火、風、虚空界にも、識皆其中に遍滿せり」と。此れ亦然らず、若し識神遍常ならば、獨能く見聞覺知すべし、而るに今要す根塵和合するに由りて

【經に阿頼耶同す】十四に第十七阿頼耶外道を明す。

【第八識】唯識所立の阿頼耶識の別名。

【經に知者無きなり】十五に知と見との外道を明す。

【一は六作す】一は六根を、六根は六根を作さず。

【根塵和合有り】六根六塵和合して六識知見す。【經に能執作す】十六に能所執の二計。

方て識生すること有り、則ち汝が識神は所用無きに爲んぬ。又若し識神は五道の中に遍せば、云何が復死生有るや、故に知んぬ爾らざるなり。經に阿頼耶と云ふは、是れ執持含藏の義なり、亦是れ室の義なり。此宗の説かく、「阿頼耶有りて能く此身を持てり。造作する所有りて萬像を含藏す、之を攝すれば則ち所有無し、之を舒すれば則ち世界に滿つ」と。佛法の中の第八識の義には同じからず。然も世尊は密意を以て如來藏を説いて阿頼耶と爲せり。若し佛法の中の人、自心の實相を觀ぜずして分別し執著すれば、亦我見に同す。經に知者見者と云ふは、謂はく、有る外道の計すらく、「身中に知者有りて能く苦樂等のことを知る」と。復有が計すらく、「能見は即ち是れ眞我なり」と。『智度』に云はく、「目に色を觀るを名けて見者とし、五識をもて知るを名けて知者と爲す、皆是れ我計なり、事に隨つて名を異にするなり」と。難者の云はく、「汝能見は是れ我なり」と言はば、彼能聞能觸知者も是れ我なりと爲んや不や、若し皆是ならば六根の境界は五に相知らず、一は六を作すべからず、六は一を作すべからず。若し我に非ざる者の有りと云はば、是れ亦疑に同す。故に知んぬ根塵和合して知見する所有り、別の我無きなり」と。經に能執所執と云ふは、謂はく、有る外道の言はく、「身中は識心を離れて別に能執者有り。則ち是れ眞我なり。能く身口を運動して諸の事業を作す」と。或は有が説いて言はく、「能執者は但し是れ識心なり、其所執の境界を乃ち眞我と名く、此我は一切處に遍ぜり」と。然れども内外の身受心法の性は、皆縁より生じて自性有ること無し。是中には所執と能執との執すら尙し不可得なり。

【經に内知：我なり】十七に内外知の二十。

何に況んや我をや。亦我の自性を觀せざるに猶るが故に、是説を作すなり。經に内知外知と云ふは、亦是れ知者の別名なり、分ちて二計と爲す。有るが計すらく、「内知を我とす、謂はく身中に別に内證の者有り、即ち是れ眞我なり」と。或は「外知を以て我と爲す、謂はく能く外塵の境界を知る者は、即ち是れ眞我なり」と。經に社怛梵と云ふは、云はく、

【經に社：出すのみ】十八に第二十

四の外道の計。【經に若：のみ】十九に、若：のみ二十

九に、若：のみ二十

【智度】論第三十

【唐の三藏】玄非

【經に摩：のみ】二十に第二十六の外道の計。

【智度】論第十二

【初：時】受胎の時。

【其身を成す】母胎に住する三十八箇の七日の位をいふ。

【經に常：爲す】二十一に第二十七の外道の計。

【經に聲：如し】二十二に第二十八九の計。

知者外道の宗計と大いに同なり、但し部黨別異なるが故に特に之を出だすのみ。經に若摩奴闍と云ふは、「智度」には翻じて人と爲す、即ち是れ人執なり。具さに譯せば、當に人生と言ふべし、此は是れ自在天道の部類なり、人は即ち人より生ずと計するが故に、以て名と爲す。唐の三藏の、意生と云ふは非なり、末耶は是れ意なり今は末奴と云ふ、聲轉すれば義別なり、誤れるのみ。經に摩納婆と云ふは、是れ毘紐天道の部類なり、正翻には勝我と云ふべし、言は我は身心の中に於て最も勝妙なりと爲す。彼常に心中に於て、我は一寸計なるべしと觀ず。「智度」に亦云はく、「有が計すらく、神は心中に在りて微細なること芥子の如し、清淨なれば名けて淨色と爲す、或は豆麥の如し、乃至一寸なり、初て身を受くる時、最も前に在りて受くること、譬へば像骨の如し、及び其身を成ずることは像の已に莊れるが如し」と。唐の三藏の、翻じて儒童と爲るは非なり、儒童といは梵には摩拏婆と云ふ、此には納と云ふ、義別なり誤れるのみ。經に常定生と云ふは、彼外道の計すらく、「我は是れ常住なり破壊すべからず、自然に常に生じて更に生ずること有ること無し、故に以て名とす」と。經に聲と云ふは、即ち是れ聲論外道なり。若し聲顯者の計す

【縁を待ちて】内
 聲は即ち明瞭等、
 外聲は即ち四大等
 の縁を待ち生ず。
 【本生】初生の意
 【異計】内聲常、
 外聲常、内外聲常
 等計す。
 【餘處】唯識、因
 明等の論。
 【非聲…爲す】二
 十三に第三十の外
 道の計。恐くは勝
 論外道ならん。
 【無善…在す】一
 切の聲は善惡を顯
 す能詮なり、然る
 に今是を撥無す、
 故に所詮の善惡亦
 無し、故にかくい
 ぶ。
 【楞伽經】十卷楞
 伽の第一問答品。
 【瑜伽論】第六よ
 り第七に至る中に
 説く。
 【智度】論第三十
 五。

らく、「聲の體は本有なり、縁を待ちて之を顯す、體性は常住なり」と。若し聲生者は計
 らすく、「聲は本生なり、縁を待ちて之を生ず、生じ已りて常住なり」と。彼中に復自ら異
 計を分つ、餘處に廣く釋するが如し。非聲とは前の計と異有り、彼は聲は遍常なりと計
 す、此宗は悉く撥して無と爲して、無善惡の法に墮在す、亦聲字無き處、此を以て實と
 爲す『楞伽經』には百八部の邪見を説き、『瑜伽經』には十六の計を説き、『智度』には十六
 知見を説けり。

ひみつまんぼらじふぢうしんらんまきうだいいち
 秘密曼茶羅十住心論卷第一

祕密曼荼羅十住心論

卷第一

愚童持齋住心第二

第二の住心は、六
心三歸五戒八齋戒
十善戒等を行じ、
並に三綱五常を學
するに約し、果報に約
す。若し、人中の四
種輪王粟散王と四
洲八洲五百洲等の
百官人民等是なり
【終】以下十善戒
の終まで正し善心
品に就て、當住心
の行相を明す。初
に正しく此教に依
る【愚童】無智蒙昧
心を餘へていふ。
【持齋】護持して
失犯するなきを持
と云ひ、一日不食
の齋戒を齋といふ
これ此住心所攝の
善心六ある中、初
の種子心に約して
立名す。

【萬劫】久遠劫。

【寂種】第一住心に喩ふ。

【一念の善業】此

は喻中に帶ぶる法

説にして種子心な

り。【歡喜を…供養す】

愚童持齋心とは、即ち是れ人趣善心の萌芽、凡夫歸源の濫觴なり、萬劫の寂種、春雷に遇うて甲圻け、一念の善業、時雨に沐して牙を吐く。歡喜を節食に發し、檀施を親疎に行ず、少欲の想始めて生じ、知足の心稍發る、高德を見て尊重し伎樂を具して供養す。過を知りて必ず改め、賢を見て齊からんと思ひ、初て因果を信じ、漸く罪福を諾す、親親に孝し、忠を國主に竭す、不及の善は生じ、探湯の惡は休す。内外の三歸此より發り、人天の十善是に因りて修行す。痲、葉、華、果、受用、無畏、殊勝、決定、是の如きの十地相續して生ず。羶羊の冬樹は乍ちに春苑の錦華を披き、異生の石田は忽に秋畝の茂實を結ぶ。人天の十地此に於て初て開け、三乘の位次相續して發る。

故に大日尊の説きたまはく、復次に祕密主、愚童凡夫の類は、猶し羶羊の如し、或時に一法の想生すること有り、謂ゆる持齋なり、彼此少分を思惟して歡喜を發起し、數數に修習す。祕密主、是れ初の種子の善業の發生するなり。復此を以て因と爲し、六齋日に於て父母男女親戚に施與す、是れ第二の牙種なり。復此施を以て非親識の者に授與す、是れ第

二の住心は、六心三歸五戒八齋戒十善戒等を行じ、並に三綱五常を學するに約し、果報に約す。若し、人中の四種輪王粟散王と四洲八洲五百洲等の百官人民等是なり【終】以下十善戒の終まで正し善心品に就て、當住心の行相を明す。初に正しく此教に依る【愚童】無智蒙昧心を餘へていふ。【持齋】護持して失犯するなきを持と云ひ、一日不食の齋戒を齋といふこれ此住心所攝の善心六ある中、初の種子心に約して立名す。【萬劫】久遠劫。【寂種】第一住心に喩ふ。【一念の善業】此は喻中に帶ぶる法説にして種子心なり。【歡喜を…供養す】

法に約して人中の善心所行相を擧ぐ。

【不及の休す】論語に「善を見れば及ばざる如くす、不善を見れば湯を探る如くす」と。

【内外の生ず】心續生を明すに、初は如常の談を本として第二三住心の續生を示し、次に抱葉以下は今經説に約して心續生を明す。

【内外の三歸】内の三歸は人中の所修、外の三歸は梵下、四韋陀典、此法を傳ふる者を三寶とし所歸依とす

【抱葉決定】受用以下は第三の住心、前の四心は第二の住心。

【十地】十心をいふ。
【無辛・發る】十住心の續生を明す
【二】以下引證の一段。初に引支。釋して云はく云

三の抱種なり。復此施を以て器量高德の者に與ふ、是れ第四の葉種なり。復此施を以て歡喜して伎樂の人等に授與し、及び尊宿に獻ず、是れ第五の敷華なり。復此施を以て親愛の心を發して之を供養す、是れ第六の成果なり」と。

釋して云はく、世間に久遠より來、展轉相承して善法の名有り、然も達理の心を以て、種種に推求すれども得ること能はず、後時に歎然として自ら念生すること有り、我今節食持齋せんと、即ち是れ善法なり。然れども猶佛法の中の八關戒にはあらず。彼節食自誠するに由るが故に、緣務減少して、我をもて飲食足り易く、馳求の勞苦を生ぜざらしむと覺る。爾時、即ち少分不著の心を生じ、其心歡喜して安穩なることを得。此利益を見るに由るが故に、數數に之を修習すること有り。即ち是れ最初に微き善惡を識るが故に、種子心と名くるなり。

經に「復此を因と爲すに以りて、六齋日に於て、父母、男女、親戚に施與す、是れ第二の牙種生なり」と云ふは、此れ六齋日は即ち是れ『智度』の中には上代の五通仙人、勸めて此日をして斷食せしむ、既に善法に順じ又鬼神の灾横を免る、彼に廣く説くが如し。貪求を止息して、内に利樂を獲ることを見るに由るが故に。此法を修習して、增長することを得しめんと欲するが故に、持齋の日に於て、己が財物を捨てて六親に與ふ、自ら我に守護の憂無く、他人をして愛敬せしめ、孝義の譽を獲と念ふ。此因果を見るを以ての故に、轉た歡喜を生ず、歡喜するが故に善心稍く増す、由し種子より牙を生ずるが如し。

【云】以下釋義に六ある中、初に種子心を明す。

【遠理の心】異生凡羊の人の計度分別の妄心をいふ。

【種種に能はざる】善法の體を推求するも其を得る能はずと。

【八關戒】八齋戒の異名。八惡を闕闕して諸惡を起さず。

【經に：如し】二に牙種心を明す。

【智度】論の第十三の取意の文。

【守戒の憂無く】財物無ければ盜賊來らざる故に。

【經に：なり】三に抱種心を明す。

【非親識の者】六親の外の人をいふ。經に：由漸なり。四に業種心を明す。經に：華種なり。五に教化心を明す。化して轉ずる意。諸人の憂苦を轉じて和利と喜樂を生ぜしむ。

經に「復此を以て非親識の者に授與す、是れ第三の抱種なり」と云ふは、謂はく、此守齋の善法を成ぜんとして、無貪惠捨の心を修習す、數習に由るが故に善心漸く增長して、復能く非親識の人に施與す。此平等施心の功德利益を見るが故に、爾時、善前は倍復増廣なること、猶し牙莖の滋く盛んにして、未だ葉を生ぜざる時の如し、故に抱種と名くるなり。

經に「復此施を以て、器量高德の者に與ふ、是れ第四の業種なり」と云ふは、謂はく、以に能く惠捨を習行す。此を因と爲すに藉りて、漸く能く所施の境を覺擇す、是の如きの人は德行高勝なり、我今宜しく親近して之を供養すべしと。即ち是れ慧性漸く開け、善知識に遇ふの由漸なり。

經に「復此施を以て、歡喜して伎樂の人等に授與し、及び尊宿に獻ず」と云ふは。謂はく、慧性漸く開け、復所施の境を覺別して、其利他の益を見る。伎樂の人は能く大衆を化して、其をして歡喜せしむるを以ての故に、樂其功を賞す。凡そ此の如き類衆多なり、是を以て等と云ふなり。尊宿とは昔舊にして、見聞する所多く、及び學行高く、尙くして世の師範とする所なり。其尊利する所多きを以ての故に、誠を推し歡喜して之を施與す。亦我施時の心をして倍歡喜せしむるが故に、即ち是れ華種なり。

經に「復此施を以て親愛の心を發して之を供養す、是れ第六の成果なり」と云ふは、謂はく、所習醇熟して直歡喜するのみに非ず、復能く親愛の心を以て、尊行の人に施與す。

【樂其功を】樂の字後人の傍註、誤りて本文に入りたるか。

【華種】今の住心を前四に望めば果なるも、第六に相望すれば選つて種たればなり。

【六に成果心なり】六に成果心を明す

【二】上來は大日經所説の六心に就き、第二の住心所修の善行を明し、此より下、果報住心の前に至るまで餘致所説に約して人乘の因行を明す

【二歸五戒六云云】三歸は七衆通受なるも、今は且く在家の二衆に約し、五戒八戒は唯在家に約し兼ねて出家の五衆にも通ず

【己を勉投す】綱邪の三歸を明す

【來業】來世の衰榮なり、人中の衰微繁榮は善惡の業因に由る

【此より相續】内

又前の施の因縁に由りて、法利を聞くことを得て、彼内に勝徳を懷けりと知り、能く欲等を出離せりと謂つて、狎習親附して之を供養す。初の種子に望むれば即ち是れ成果の心なり。

三歸五戒八禁の竅

嬰兒の母在らず

必ず死せんこと疑慮無し

衆生佛に歸せざれば

已を勉めて三寶に投ずれば

五常持ち犯さざれば

八禁能く修習すれば

三途何んぞ必ずしも怖れん

昇墜は他の意に非ず

持齋の心は必ず三歸を求めて修す。五戒八戒十善は此より相續して修行す。初に三歸とは、佛、尸利に因りて三歸を説き、末伽に因りて五戒を説き、伽王の爲に十善を説き、提

謂長者の爲に六齋を説く。三歸は勸めて邪を捨てしむ、五戒は其行惡を防ぐ、十善は其をして貴を招かしむ、六齋は其をして樂を得しむ云云。『毘尼母』に云はく、三歸に五種有り。

一には潮邪の三歸、二には五戒の三歸、三には八戒の三歸、四には十戒の三歸、五には具

犢子の所依無きは

豺狼悉く走り歸く
魔鬼總て來り圍む
諸天敢て違せず
來業に美名を飛す
人天に光暉を作す
諸佛は毎に威を加へたまふ
衰榮は我是非なり

の三歸より相續する意。

【初に三歸云云】以下は別して四種の戒を辨釋す。

【佛戶利云云】以下は全く端正論第一卷の文を録す。

【毘尼母論八卷あり、五論の一。今の文は第一卷の取意】

【散脂】具には散脂修摩といふ、名義集四に、此には翻じて密にといふ、因著密なる故にと

【灌頂】具には佛光大灌頂新呪經といふ、十二卷あり、今は第一卷の文。

【是の如き】藏本に女人に作る、珠林所引の經亦同じ

戒の三歸なり」と。今日く第一の翻邪の三歸を明さん。問ふ、「歸の意云何。」答ふ、「三寶を以て所歸の境と爲して、救護して侵陵せしめざらしめんと欲するなり。人の、罪を王に得るとき他國に投り向ふ。彼王語て云はく、「汝無畏を求めば我境を出づること莫れ、我教に違ふること莫れ、必ず相救護せん。」といふが如し。衆生も亦爾り。魔に繫屬すれば生死の過有り。三寶に歸向して佛教に違せざれば魔繫屬すること無し。如何となれば佛戒は身を活して人多く益を得ること、甘露を飲んで纏痾を瘳するが如し。故に『觀佛三昧經』の第六に云はく、「昔童子有り、佛の三歸を受けて散脂鬼の損を被ることを免る」等と云。」

問ふ、「此翻邪の三歸を受くるは何ん。」答ふ、「其れ邪を信せしより來、久く非境に耽著するに、今忽ちに善を發して佛法に歸投し、創て三歸を以て其邪倒を翻す、心を易へて佛に歸信して、弟子と爲るが故に翻邪と名くるなり。『灌頂經』に云はく、「時に異道の鹿頭梵志有り、佛の所に來到して稽首作禮して白して言く、今異學を捨置して三歸五戒を受けんと欲ふと。佛の言はく、善哉、善哉、善哉、善哉、汝能く餘道を捨置して我に歸命せば、其徳無量にして稱説すべからずと。梵志の言はく、諾、身を終るまで奉行して、敢て毀壞せじと。爾時、佛、爲に授け已て梵志に告げて言はく、汝一心に三歸を受け已ぬ、我常に汝と及び十方の人の爲に、天帝釋所遣の諸の鬼神に勅して、以て男子と是の如き等の輩とを護らしめん。三十六部の神王有り、此諸の善神に凡そ萬億恆沙の鬼有りて以て眷屬と爲す。相を陰し番に代りて以て、男子と是の如きの輩とを護らしめんと。」云云。諸神の名字は

云云。諸神の名字は

云云。諸神の名字は

云云。諸神の名字は

云云。諸神の名字は

云云。諸神の名字は

云云。諸神の名字は

云云。諸神の名字は

云云。諸神の名字は

云云。諸神の名字は

【經に云はく】 觀佛三昧海經。

【四】 以下五戒を明す。

【五戒】 五星なり二十八宿は天に隨ひて左轉すれば經と爲し、五星は右疑すれば緯といふ【五嶽】 支那の五方の高山。【戒に天地云云】 以下、内外典を引き、五戒の濫觴と五常の名義の本據と五行の萬物の本初なるを明す。【三綱】 君は臣の綱、父は子の綱、

具には經に之を説くが如し。經に云はく、「三歸を受くるを以て、龍、鳥難を免る」云。偈に曰はく、

昔の邪心を捨てて
人天稽首し

（四つぎ）

戒を受けて正に歸すれば
諸佛同じく慶びたまふ

次に五戒を明さん。夫れ五戒は外書に五常の教有るに同じ。謂はく仁、義、禮、智、信なり。懲傷して殺さざるを仁と曰ふ、害を防ぎて姪せざるを義と曰ふ、故に心に酒を禁ずるを禮と曰ふ、清察して盜せざるを智と曰ふ、法に非ざれば言はざるを信と曰ふ、此を五徳と爲す。造次にも虧くべからず、須臾にも廢すべからず、王者之を履んで以て國を治め、君子之を奉じて以て身を立つ、用ゐて躉替すること無し、故に五常と曰ふ。天に在りては五緯と爲し、地に在りては五嶽と爲し、處に在りては五方と爲し、人に在りては五藏と爲し、物に在りては五行と爲し、之を持つを五戒と爲す。故に『天地本起經』に云はく「劫初の時には人地肥を食す、一の衆生有りて頗ちに五日の食を取る、因りて盜戒を制す。地肥を食するを以て貪欲を生ず、因りて姪戒を制す。姪欲に以るが故に共に相欺奪す、因りて殺戒を制す。求欲に以るが故に妄語詭曲なり、因りて不妄語戒を制す、飲酒に以るが故に昏亂して非を行す、因りて酒戒を制す。五戒の興を討尋するに、其來れること久し、天地の始に崩し、萬物の先に形る。『論語』に云はく「殷は夏の禮に因る、損益する所知んぬべし 三綱五常を謂ふなり」と。疏に云はく、三綱とは、夫婦父子君臣を謂ふなり、五常と

【多論】 具には薩婆多毘尼毘婆沙、亦是薩婆多論といふ、八卷あり、薩婆多律五論の一。以下二論一律を擧げて、五戒を受くる品類差別を明する【智度論】 第十三卷の二十三紙取意の文。

【凡そ五戒云云】 此は十誦律に依て全に五戒を受くる中、更に復分限受の徴少の善行を許す

【十誦律】 第二十卷の文。

【薩婆多論】 第一の十二紙。

【後の一は是遮】 飲酒は佛の遮制する所の意。

「天に六氣有り、雨、晦明なり。降りて五味を生ず、鹹く、火の味は苦く、土の味は甘し、皆陰陽風雨に由て生ず。發れて五色を爲す。辛が色は白し、酸が色は青し、鹹が色は黒し、微れて五聲と爲る。」
 聲は商、青が聲は角、黒が聲は羽、赤が「多論」に云はく、「五戒を受けんと欲はば先づ三師を受け、黄が聲は宮なり、徴は驗なり」
 乃し不飲酒に至る、若し一戒を受くる是を一分と名く、若し二三戒を受くる、是を少分と名く、若し四戒を受くる是を多分と名く、五戒をば是を滿分と名く」といへり。此分の中に於て何れの分なりとも受けんと欲せば、當に意に隨ひて之を受くべし。凡そ五戒を受くる時は、或は晝、或は夜受くる等も亦小善を獲。故に「十誦律」に云はく、「女人有りて夜は多く姪を行じ樂ひて晝の戒を受くるに緣て、當來に晝は快樂を受け、夜の間は苦を受く、因果相感を以ての故なり。或は獵師有りて晝は食して生を殺せば便ち夜の戒を受く、來報に夜は多く樂を受け晝は日に苦を受く」と言へり。分限の心を以て晝夜の戒を受くれば、果報の苦樂に此不同有り、故に亦小善と曰ふ。「薩婆多論」に云はく、「問ふ、五戒の中に幾か是れ實戒なるや。答ふ、前の四は是れ實なり、後の一は是れ遮なり。同じく結する所には、放逸の根本にして能く四戒を犯するに以りてなり、迦葉佛の時は優婆塞有り、飲酒に由るが故に他の妻を姪し、他の鶏を盗みて殺す。他人來りて問ふ時に、答へて作さずと言うて、便ち妄語を犯すが如し、亦能く四逆を造る」と云。若し五戒を持すれば便ち二十五の善有りて、恆に人身を衛護するに人の左右に在り、富宅門戸の上に於て、萬事をし

て吉祥ならしむ、諸神の名字は廣くは『灌頂經』に説くが如し。偈に曰はく、

五戒は身を資く
人天に趣を受く

往いて遊行する所に
鬼神遊り去る

【五】 以下八戒を明す。

【成實論】 全十六卷ある中、今の文は第九卷に出づ。

【近事】 諸佛の法に親近し承事する意。

【近住】 阿羅漢に近づきて住する意

【戒消災經】 一卷四紙あり、今引いて五八の戒師の不同を辨す。

【齋法經】 佛説齋經といふ、今は一日持齋の福祐と世間の廣大の金銀等の財福との優劣を按量す。

【神足月】 毎歲正五九月の三長齋月をいふ。

【當に成ず】 當來に涅槃の道果を成ずる意。

【十】 次に十善を明す。

【十善】 次に十善を明す。

次に八戒を明す。『成實論』に云はく、「五戒を得するを名けて優婆塞となす、此には近事に云ふ、七戒を得するを名けて優婆塞と爲す、此には近住と云ふ」と。『戒消災經』に云はく、「五戒の法は有は俗人と及び鬼との邊に就いても之を受く、自妻を離れず身機觸なるに縁るが故なり。八戒は乃ち是れ淨行の法なり。要らず須らく五衆の邊に就いて受くべきなり、八戒を持する人は淨行を生ずるが故なり」と。『齋法經』に云はく、「譬へば天下の十六大國の人の、中に滿つを衆寶をば稱説すべからざるが如きも、一日佛の齋法を受くる、其福に比せんに如かざるなり」と。『善生經』に云はく、「八戒を受くる者は五逆罪を除きて、餘の一切の惡皆消滅す」と云。帝釋、偈を説いて云はく、

六齋と神足月とに
此人福德を獲ること

偈に曰はく、
八戒之を受くれば

當に聖道を成ずることは
善神擁護す

次に十善を修することを明さん。十善の彌陀南、

持することの堅固なるに由る

持することの堅固なるに由る

持することの堅固なるに由る

持することの堅固なるに由る

持することの堅固なるに由る

持することの堅固なるに由る

持することの堅固なるに由る

持することの堅固なるに由る

持することの堅固なるに由る

【思道義語】是は
大師、義を以て、
思審語、順道理語
義語の三を合す。

【華嚴に云はく云
云】八十華嚴經第
三十五の取意。初
に諸善法戒に約し
て五重の十善を説
く文なり。
【人天の因と及び
有頂】初後を擧げ
て中間の七天を示
す義門なり。

殺と怨恨とを離れて利慈を生ずれば
盜せず知足にして衆生に施しすれば
邪好を遠離して染心無ければ
所有の妻妾侵奪せられず
妄語せざる者は常に實言なり

兩舌語を離れて離間すること無ければ
諸の悪口を離れて柔軟の語なれば
思道義語にして綺語を離るれば
他の財を食せず心に願はざれば

嗔を離れて慈を生ずれば一切に愛せらる
八邪見を離れて正道に住するは
是の如きの十善の上中下は

【華嚴經】に云はく、「十善業道は是れ人天の因と、及び有頂の因となり。三乗の賢聖も亦
皆修習す。此と別なることは、彼は皆劫に入り、劫より賢に至り、賢より聖に至る、此は
唯し劫外なり、或は具不具或は散或は定、三有の因と爲るなり」と、彼經に云ふが如し。

「十善業とは、菩薩は性殺生を離れて怨恨を懷かず、常に利他慈念の心を生ず。性偷盜せ
ず、自の資財に於て常に止足を知り、乃至艸葉をも與へざれば取らざるなり。性邪淫せず

端正長命にして諸天護る
資財壞せずして天上に生ず
自妻にすら知足せり況んや他女をや
是れ圓寂の器にして生死を出づ
一切皆信じて供すること王の如し
親疎堅固にして怨の破する無し
勝妙の色を得て人皆慰んず
現身に即ち諸人の敬を得
現に珠寶を得て後に天に生ず
輪王の七寶此に由りて得
是れ菩薩の人なり煩惱を斷ず
粟散と輪王と三乗との因なり

性邪淫せず

性偷盜せず

【有頂】無色界の第四は、界果の最頂なれば、今引

【此と：因と爲る】此は華嚴所明の五重十善に就て、五乘の所修を簡ぶ。此とは人天乘、彼とは三乘を指す。

【彼等】十信中の頓漸二悟の菩薩の劫。菩薩所經の三祇の善功をいふ。今は十信成就不退に約して入劫といふ。

【或は散：爲る】散心に於て十善行を修せば、天の因たり、四禪四定中に於て十善行を修せば、上二界の果を招く。

【彼經に云ふ云云】次に攝律儀戒に約して十善戒を説く。而して十聖中、第二離垢地所修の十善を説くも、經文善巧にして世間凡夫所修の十善に同じて説く。

【有頂】無色界の第四は、界果の最頂なれば、今引

して自妻に知足す、他妻他女には尚染心無し、何に況んや事に従はんや。性妄語せずして常に實語を作す、乃至夢の中も亦妄語せず、何に況んや故に犯さんや。性兩舌せずして諸の衆生に於て離間の心無し、此語を將て彼に向ひて説かず、彼語を將て此に向ひて説かず、他を破することを爲すが故なり。性惡口せず。謂はく毒害の語と蠱獮の語と鄙惡の語と怨結の語となり、常に柔軟の語と悅意の語と、人の心に入る語と、人の愛樂する語とを作す。性綺語せずして、常に思審義語と、道理に順ずる語と、巧みに調伏する語とを樂ふ。性貪欲せずして他の財物に於て貪心を生ぜず、願はず求めざるなり。性瞋恚を離れて、諸の衆生に於て常に慈心を起し、常に思うて仁慈利益を順行す。性邪見を離れて三正道正見正直に住して誑無く誑無し。若し能く斷る者は是れ菩薩の行なり」と。「仁王經」に云はく、「中下品の善は業散王なり」と。中下品を修すれば人中に王と爲る。三界に生ずるの因此に準じて悉にすべし。自下の十善は是れ「正法念經」なり。不殺生とは「正法念經」に云はく、「謂はく、殺生を離れ世間の一切衆生を攝取して無畏を施與すれば、諸根端正にして長命の業を得、羅刹諸天常に隨ひて擁護す、乃至命終して天世間に生ず」と。不偷盜とは經に云はく、「偷盜せざる者は大貪網を出づ、若し王と、王と等との一切も皆信ず、所有の財物失せず壞せずして、諸の福田の中に皆能く捨施す、乃至命終して天世間に生ず。不邪行とは經に云はく、「邪婬を離るる人は善人に讚めらる、所有の妻妾を、能く侵奪するもの無し。設ひ衰損すること有れども妻妾に嫌れず諸の善法を攝す、是れ涅槃の器なり、乃

【自妻に知足す】

世間に寄同する故に斯く説く、實には地上の菩薩は不爭の染欲を離る。

【事に従はんや】女身に觸るる等の事なし。

【思審義語】思審語に義語とを合せしならん。

【正法念經】第二十善業道品の文

【知識】知己をいふ。天台の妙疏二の一によれば、一名を聞くを知と爲し、形を見るを識と爲す、或は形を見るを知と爲し、心を見るを識と爲すといへり。

【七】以下は果報の住心を明す、これ所感の果なり。而して今は十善所感の粟散、輪王の

至命終して天世間に生ず」と。不妄語とは經に云はく、「妄語を離るれば世間の人一切皆信ず。設ひ財物無けれども、一切の世人供養すること王の如し、彼所生に隨ひて常に男子と爲る、乃至命終して天世間に生ず」と。不兩舌とは、經に云はく、「兩舌を離るる者は知識、親友、兄弟、妻子皆悉く堅固なり、王と及び怨家と悪兄弟と等も破壊すること能はず、乃至命終して天世間に生ず」と。不惡口とは經に云はく、「惡口を離るる者は、勝妙の色を見して眞實の人に信ぜらる、滑語軟語するをもつて一切の人に於て皆悉く安慰せらる、一切の財物皆悉く得易し、乃至命終して天世間に生ず」と。不綺語とは經に云はく、「綺語を離るる者は即ち現身に世間の敬重を得、善語正語なるをもつて世に尊重せらる。少しく軟語を説くに人をして解し易からしむ、乃至命終して天世間に生ず」と。不貪とは經に云はく、「貪不善業を離るる者は、現在世に於て一切の財物及び珠寶等、皆悉く豊饒にして人に侵奪せらるること無し、乃至命終して天世間に生ず」と。不瞋とは經に云はく、「瞋不善の業を離るる者は、豊財大富にして一切に愛念せらる、怖畏の惡處に能く便を得ること無し、輪王の七寶此に由りて得、乃至命終して天世間に生ず。不邪見とは經に云はく、「邪見を離るる者は正見を修習す、一切の結使不饒益の法皆悉く斷滅し、能く生死に於て厭離心を起す、乃至命終して天世間に生ず」と。

次に異生の不正治の國王を明さん。
異生の不正治國王の毘陀南、

果のみを明し、他は第一卷所住の器界の中に、因みに四洲八洲等の人民の三品の五戒所感の身壽の果報を明せしを以て略せしか。初に金光明經に依て明し餘は凡聖南を除き餘は凡聖界地章の文。

【不正理】不正治と同じ。小補韻會に「一民を治むるを理といふ」と。
【俱舍論】世間品の取意の文。
【金光明：親近す】同經第六卷、第八卷の所説を引く。
【經に云はく】金光明第六卷四天王護國品の文。
【我並に：事あらん】兼ねて災變の文を引く。

滅劫の有情は衆惡盡んなり
大人の器に非ざれば輪王無し
正法を信ぜず惡人を親み

甚深の妙法流布せざれば
繫縛殺害辜無きに及ぶ
好んで非法を行じて正治無ければ

護國の諸天及び藥叉
國土に飢饉及び疾疫あり

富樂壽命已に減少せり
但し法と非との二種の王のみ出づ
經王及び持人を重んぜず
諸天藥叉亦聞かず
大臣輔相諂佞を懷く
王位久しからず諸天忿る
國界を棄捨して他方に往く
種種の災變數數現す

釋して曰はく、不正理とは、『俱舍論』に云はく、「滅劫の時に於ては有情の富樂壽量損減し、衆惡漸く盛んなり、大人の器に非ざれば轉輪王無し」と。『金光明經』に、王の不正治に總じて二の緣有り、一には正法を信ぜざれば天龍捨て去る。二には正法を行ぜざれば惡人に親近すと。不正信とは經に云はく、「爾時、四天王具に佛に白して言さく、『若し人王有りて其國土に於て、此經有りて雖も未だ曾て流布せしめず、心に捨離を生じ聽聞せん」と樂はず、亦供養し尊重し讚嘆せず、四部の衆の、經を持する者を見て亦尊重せず、遂に我等と及び餘の眷屬の無量の諸天とをして、此甚深の法要を聞くことを得ずして、威光と及び勢力と有ること無からしめん。我並に眷屬及び藥叉等悉く皆捨て去る。其國に當に種種の災禍有るべし、國位を喪失し一切の人衆に皆善心無く、多く他方の怨賊侵掠す

【不行正法とは云】以下不行の文を引く、初に第六卷四天王品。【又偈に云はく】第八卷王法正論品の文。

【王の不正理云云】以下は、王の十善を行ぜざるに由り災變不吉あるを明す。

ること有り、國內の人民諸の苦惱を受け無量百千の災惟惡事あらん。不行正法とは經に云はく、「唯繫縛し殺害し嘖諍することのみ有りて、互相に讒誑して枉げて辜無きに及ぶ。又偈に云はく、

若し王非法を作し

正法を以てせざれば

國中の最大臣と

其心詭佞を懐いて

正法に由りて王と爲れども

國人皆破壊すること

五穀と衆の華菓との

國土飢饉に遭ふことは

王位久しく安んぜじ

彼忿を懐くに由るが故に

王の不正理の災變は後の如し、並びに「金光」による經に云はく、「唯繫縛、殺害、嘖諍のみ有りて、

互相に讒誑して枉げて辜無きに及ぶ」と。又云はく、「彗星數出で兩日並び現じ、傳蝕恆なること無し、黑白の二の虹に不祥の相を表し、星流れ地を動し、井の内に聲を發す」と。又

云はく、「暴雨惡風して時節に依らず、常に飢饉に遭うて苗實成らず」と。又云はく、「國の

惡人に親近し

斯に因りて衰損を受く

及以び諸の輔相と

並に悉く非法を行す

而も其法を行ぜざれば

象の蓮池を踏むが如し

苗實皆成ぜず

王の正法を捨つるに由れり

諸天皆忿恨す

其國當に破亡すべし

重んずる所の大臣狂横して身死す、所愛の象馬等亦復皆散失す」と。又云はく、「處處に兵戈有りて人多く非法に死す、惡鬼來りて國に入り疾疫遍く流行す」と。又云はく、「小力にして勇勢無く所作堪能ならず、鬼魅遍く流行の處に隨ひて羅刹を生ず」と。又云はく、「諸天の教と及び父母の言とに順ぜざるは、此は是れ非法の人なり、仁に非ず孝子に非ず」と。

次に異生の、正を以て國を治むる王を明さん。

正治の國王の隕陀南

八萬四千の瞻部の王有り

宮殿を莊嚴して經法を講ぜしめ

正法を修行して惡業を遮し

慈悲謙讓にして十善を修すれば

風雨時に順じて五穀成じ

釋して曰はく、『金光明經』に云はく、「此瞻部洲に八萬四千の城邑聚落有り、八萬四千

の諸の國王等有り。各其國に於て諸の快樂を受くるに皆自在を得、相侵奪せずして

咸く少欲利樂の心を生ず、其土の人民自然に樂を受く」と。此經文に準するに、王の正

治は要らず三緣を具す。一には放逸せずして有徳に親近し、二には正信をもて是經を聽受

し、三には王法を犯せるをば正法をもて治損す。故に下の經に云はく、「未來世に於て、若

【金光明經】第六
四天王護國品の文

【次に異生の云云】
上に不正治の國王
を明し、竟りて、今
は正治國王を明す

【又偈に云はく云云】第八卷王法正論品の文。天竺には劫初輪王以來、十善を以て國家を治むるを王法とす。今は王法の制令を明す。

【又云はく云云】以下は正治の利益を明すに八文を擧ぐ。初五は第六卷後三は第八正論品に依る。

し人王有りて自身と后妃と王子と内外の城邑宮殿とを擁護し、王位尊高にして自在昌盛し、自の國土に於て、怨敵及び諸の憂惱災厄の事無からしめんと欲するが爲には、是の如きの人王は放逸して心をして散亂せしむべからず」と。又云はく、「當に恭敬を生じ誠を至して慇懃に宮室を莊嚴し、種種に嚴飾して法師の所に於て大師の想を起し、端心正念にして是經王を聽くべし、王自ら香を燒きて是經を供養すれば、彼時の香煙一念の頃に於て虚空に上昇して、即ち我等諸天釋梵龍神等の宮に至りて、變じて香蓋と成りて金光照耀す。佛、四王に告げたまはく、「此一念の香は能く十方恆沙の佛土に遍じて、咸く共に世尊に稱讚せらる。是故に我等當に是王を護りて其衰患を除くべし」と。又偈に云はく、

國人惡業を造るに

斯れ正理に順するに非ず

若し惡を見て遮せざれば

遂に王の國內をして

王捨てて禁制せざれば

治擯すること法の如くすべし

非法便ち滋長して

奸詐日に增多ならしむ

又云はく、「所有の財寶豐足して受用す、相侵奪せず惡念を起さずして、咸く少欲利樂の心を生ず」と。又云はく、「其土の人民自然に樂を受け、上下和睦して猶水乳の如し、情相愛重して歡喜遊戲す」と。又云はく、「慈悲謙讓にして善根を増長す、是因縁を以て此瞻部洲安隱豐樂にして人民熾盛なり」と。又云はく、「寒暑調和にして時序を乖かず。日月星宿常の度虧ること無く、風雨時に隨ひて諸の災横を離る」と。又云はく、「資産の財寶悉

く皆豐盈にして心慳鄙無く、常に惠施を行じ、十善業を具して天衆を増長す」と。又云はく、「和風常に節に應じ、甘雨時に順じて行じ、苗實皆善く成じて人に飢饉する者無し」と。又云はく、「善を以て衆生を化し、正法をもて國を治め、勸めて正法を行せしめ、當に我宮に生ぜしむべし」と。又云はく、「彼一切の人をして十善を修行せしむれば、率土常に豐樂にして國土安寧なることを得」と。

【八】次に佛爲優填王説王法正論經を引いて證す。初七行半の文を除き白餘の文を全引す【云何が王の過失以下十過を擧ぐ。

【云何が王云云】以下、王の功德を明す。
【王の種性】一本性の下尊高の二字あり。

又【王法正論經】に云はく、「爾時、世尊、優填王に告げて曰はく、大王今應當に王の過失と王の功德と王の衰損と王の可愛の法と、及び能く王の可愛の法を起發するとを了知すべし。云何が王の過失とならば、大王當に知るべし王の過失とは、略して十種有り、王若し是の如きの過失を成就すれば、大府庫有り、大臣の佐有り、大軍衆有りと雖も歸仰すべからず。何等をか十と爲す。一には種姓高からず、二には自在を得ず、三には立性暴惡なり、四には猛利に憤發す、五には恩惠賒薄なり、六には邪佞の言を受く、七には所作古の先王の制に順ぜず、八には善法を顧みず、九には是と非と勝と劣とを監みず、十には一向に縱蕩にして専ら放逸を行す。云何が王の種姓不高と名くるや。謂はく庶臣有りて類に有らずして生じ、宿の尊貴に非ずして王位を暴紹す、是を種姓不高と名く。云何が王の不自在と名くるや。謂はく帝王有りて諸の大臣輔相官僚の所制を被りて所欲に隨はず、所作常に諫約有り、妙五欲に於て亦意の如く歡娛し遊戲せざるなり、是の如きを王の不得自在と名く。云何が王の立性暴惡と名くるや。謂はく帝王有りて諸臣の類、或は餘人等の

小(こ)さき愆(えん)過(か)を犯(とが)するを見て、即(すなは)ち面(めん)に對(たい)して惡(あく)惡(ご)の言(ごん)を發(は)し、咆(ほう)勃(ぼつ)忿(ふん)恚(い)し頻(ひん)蹙(しやく)貶(へん)黜(ちつ)、設(て)ひ對(たい)面(めん)せざれども彼(かれ)を背(そむ)きて餘(よ)に向(むか)ひて前(まへ)の黜(ちつ)罵(め)罵(め)の事(こと)を作(な)す。或(ある)は長(なが)時(とき)ならざれども是(こゝろ)の如(ごと)きの對(たい)面(めん)暴(ぼう)惡(ご)と背(そむ)面(めん)暴(ぼう)惡(ご)とを捨(す)てざるなり、是(こゝろ)を帝(てい)王(わう)の立(た)性(せい)暴(ぼう)惡(ご)と名(な)く。云(い)何(か)が王(わう)の猛(まう)利(り)憤(ふん)發(はつ)と名(な)くるや。謂(い)はく國(こく)王(わう)有(あ)りて諸(しよ)の群(ぐん)臣(しん)の小(こ)さき愆(えん)過(か)有(あ)り、少(すく)き違(ちが)越(えつ)有(あ)るをみ、便(た)は封(ほう)祿(ろく)を削(けつ)り妻(さい)妾(せつ)を奪(うば)ひ去(い)け、即(すなは)ち重(おも)き法(ほう)を以(もつ)て之(これ)を刑(けい)罰(ばつ)す、是(こゝろ)の如(ごと)くなるを王(わう)の猛(まう)利(り)憤(ふん)發(はつ)と名(な)く。云(い)何(か)が王(わう)の恩(おん)惠(ゑい)賒(せ)薄(はく)と名(な)くる。謂(い)はく、國(こく)王(わう)有(あ)り、諸(しよ)有(あ)る群(ぐん)臣(しん)等(とう)親(せ)近(きん)侍(じ)衛(ゑ)する事(こと)、極(きよく)めて清(せい)白(はく)にして善(よ)く其(その)心(しん)に稱(な)ふと雖(い)ども、而(しか)も微(み)劣(りやく)の莛(てい)言(ごん)を以(もつ)て慰(ゐ)諭(よ)して、其(その)に祿(ろく)を頒(わ)ち賜(たま)ひて勳(くん)庸(よう)を酬(ちゆう)賞(しょう)するに圓(えん)滿(まん)なる事(こと)能(あた)はず、常(つね)の式(しき)に順(じゆん)ぜずして或(ある)は損(そん)耗(こう)し已(や)り、或(ある)は稽(けい)留(りゆう)し已(や)りて、然(しか)して後(のち)に方(かた)に與(あた)ふ、是(こゝろ)の如(ごと)きを王(わう)の恩(おん)惠(ゑい)賒(せ)薄(はく)と名(な)く。云(い)何(か)が王(わう)の邪(じや)佞(ねい)の言(ごん)を受(う)くと名(な)くる。若(も)し帝(てい)王(わう)有(あ)りて諸(しよ)の群(ぐん)臣(しん)の、實(じつ)に忠(ちゆう)政(せい)に非(あら)ず憲(けん)式(しき)を閑(なら)はず、潛(ひそ)かに補(ほ)佐(さ)を謀(はか)り、佞(ねい)心(しん)偏(へん)黨(たう)にして善(ぜん)政(せい)を修(おそ)めず良(りやう)賢(けん)を妬(ねた)嫉(しやく)するを見て、是(こゝろ)の如(ごと)き等(とう)の人の所(しよ)進(しん)の議(ぎ)を信(しん)用(よう)す。此(こゝろ)因(いん)緣(えん)に由(よ)りて王(わう)務(む)財(さい)寶(ほう)虛(きょ)しく善(ぜん)政(せい)と稱(しょう)して竝(なら)びに皆(みな)衰(すい)損(そん)す、是(こゝろ)の如(ごと)きを王(わう)の邪(じや)佞(ねい)の言(ごん)を受(う)くと名(な)く。云(い)何(か)が王(わう)の先(せん)王(わう)の所(しよ)制(せい)に順(じゆん)ぜずと名(な)くる。謂(い)はく國(こく)王(わう)有(あ)りて究(きゆう)め察(さつ)する事(こと)能(あた)はず、審(まじ)かに諸(しよ)の群(ぐん)臣(しん)等(とう)を簡(かん)擇(たく)せず、種(しゆ)種(しゆ)の務(む)國(こく)の法(はふ)事(じ)の中(なか)に於(お)いて、委(あ)任(にん)するに堪(た)へざるに而(しか)も之(これ)を任(にん)せず、賞(しょう)資(し)すべき者(もの)をば而(しか)も之(これ)を刑(けい)罰(ばつ)す、刑(けい)罰(ばつ)すべき者(もの)をば之(これ)を賞(しょう)資(し)す。又(また)此(こゝろ)群(ぐん)臣(しん)大(たい)朝(てう)會(かい)に處(あ)りて、餘(よ)論(ろん)未(ま)だ終(しゆう)へざるに言(ごん)を發(は)し、間(かん)絶(てつ)して敬(けい)はす懼(こ)らさずして諫(かん)諍(じやう)を興(おこ)す、法(はふ)に依(よ)りて善(よ)く奉(ほう)行(ぎやう)する事(こと)能(あた)はず、正(ただ)しく能(よ)く先(せん)王(わう)

の教命に任せず、是の如きを即ち先王の所制の法に順せずと名く。云何が王の善法を顧みずと名くる。謂はく國王有りて因果を信ぜず、當來の善不善の業と、人天の果報とを悟らず、情に隨ひて身語意業三種の悪行を造作し、時に以て惠施し修福し、持齋し戒を學し、陀羅尼業の灌頂法門を受くること能はず、四無量心に於て廣濟を興さず、是の如きを王の善法を顧みずと名く。云何が王の是と非と勝と劣とを鑒みずと名くるや。謂はく國王有りて、諸の大臣輔相官僚に於て、用心顛倒して善く忠信伎藝智慧の差別を了知せず、知らざるに以るが故に、忠信に非ざるに忠信の想を生じ、伎藝に非ざるに伎藝の想有り、惡慧の所に於て善慧の想を生じ、善慧の所に於て惡慧の想を生ず。又諸の群臣等の年耆衰邁にして曾て久時に於て親近侍衛するに、其無藝を知りて遂に敬愛せず、爵祿を賜はず、其賞を酬いず、他の凌蔑を被れども捨てて而も問はず、是の如きを王の是と非と勝と劣とを鑒みずと名く。云何が王の一向に縱蕩にして専ら放逸を行すと名くる。謂はく帝王有りて、妙五欲に於て一向に沈没し耽著し嬉戲して、時に誠愼すること能はず、是の如きを即ち一向縱蕩にして専ら放逸を行することを爲すと名く。若し國王有りて是の如きの十種の過失を成就すれば、大府庫有り、大輔佐有り、大軍衆有りと雖も、久しからずして國界自然に突亂して歸仰すべからず。當に知るべし此十の過失の初の一は、時の王の種性の過失、餘の九は是れ王の自性の過失なり。

云何が王の功德と名くる。大王の功德とは略して十種有り。一には種性尊高なり、二に

は大自在を得、三には性暴悪ならず、四には憤發輕微なり、五には恩惠猛利なり、六には正直を受く、七には所作諦かに思うて善く先教に順ず、八には善法を顧戀す、九には善く差別を知る、十には自ら縱蕩せず放逸を行ぜず。云何が王の種性と名くる。謂はく國王有りて、宿善根を植ゑ、大願力を以ての故に王族に生じ、國位を紹繼して萬姓を恩養し三寶を淨信す、是の如きを王の種姓尊高と名く。云何が王の大自在を得と名くる。謂はく帝王有りて、自ら所欲に隨ひて妙五欲に於て歡娛し遊戯し、賞賜すべき所を意に隨ひて作す、百僚等に於て出す所の教命宣布して滯ること無し、是の如きを王の自在を得と名く。云何が王の性暴悪ならずと名くる。謂はく國王有りて、諸の群臣を見るに、違せる少小しき愆犯等の事行りと雖も、能く容忍して即ち貶黜せず墨言を發さず、亦對面して憤發せず、亦内意に祕匿せず、是の如きを王の性暴悪ならずと名く。云何が王の憤發輕微と名くる。謂はく國王有りて、諸の群臣等、大愆有りて大違越有りて雖も、而も一切に其封祿を削り其妻妾を奪はず、重き法を以て之を刑罰せず、過の輕重に隨ひて矜降を行ふ、是の如きを王の憤發輕微と名く。云何が王の恩惠猛利と名くる。諸の群臣有りて親近し侍衛して、其心清白に其心調順なれば、王即ち時時に正しき圓滿の軟言を以て慰諭し勳庸を頒ち賜ひて、彼をして損耗稽留し劬勞怨恨ならしめず、親近すべきこと易く、承事すること難からず、是の如きを王の恩惠猛利と名く。云何が王の正直の言を受くと名くる。謂はく國王有りて、諸の群臣等の、實に忠正有りて濁無く偏無く、善く憲式を閑ひて情に違叛無し。

其王是の如き等の人の所進の言議を信用すれば、國務財寶悉く皆成就し、名稱遠布して黎庶咸く歡ぶ、是の如きを王の正直の言を受くと名く。云何が王の所作諦かに思うて先王の教に順ずと名くる。謂はく國王有りて、性能く究め察し、審に能く諸の群臣等を簡擇して、種種の務公の法事中に於て委任に堪へざる者をば之に任せず、委任に堪ふる者をば之に委任す、賞賚すべき者をば正しく賞賚し、刑罰すべき者をば正しく刑罰す。凡そ爲す所有るには、審に思ひ、審に擇んで、然して後方に作して亦率暴ならず。其群臣等朝會に處すと雖も、終に言を賣して餘論を間絶せず、要す言の終るを待ちて諫諍を興し、其王の教の如く而も善く奉行す、是の如きを即ち先王の教に順ずと名く。云何が王の善法を順應すと名くる。謂はく帝王有りて、因果と善不善の業と人天の果報と有ることを信じて、慚恥を具足して情を恣にし身語意の三種の惡行を作さず、時時に慈悲し修福し持齋し曼荼羅を建立して灌頂の法を受け、而も護摩を設けて聖衆を供養し、四無量心をもて常に廣濟を懷く、是の如きを王の善法を順應すと名く。云何が王の能く是と非と勝と劣とを鑒みると名くる。謂はく國王有りて、諸の大臣輔相百僚に於て、心に顛倒無く能善く忠信伎藝智慧の差別を了知し、若は有、若は無、故に實の如く知りて、其無き者に於ては輕んじて之を遠ざけ、其有る者に於ては之を敬愛す。又諸臣等の年耆衰邁し曾て久時に於て親近し侍衛するに、無勢無力を知ると雖も、然れども昔恩を念うて轉た敬愛を懷きて輕慢せず、爵祿勳庸分賞替ること無し、是の如きを王の能く是と非と勝と劣とを鑒みると名く。云

【云何が名けて云
云】以下王の衰損
門を明す。

【是】一本に時に
作る。

何が王の自ら縦蕩ならず。放逸を行ぜずと名くる。謂はく國王有りて、妙五欲に於て沈没し傲慢し嬉戯せず而も耽著せず、能く時に於て誠愼し方便をもて作すべき所を作し、群臣を慰勞す、是の如きを王の自ら縦蕩ならず放逸を行ぜずと名く。若し王、是の如きの功德を成就すれば、府庫無く、大輔佐無く、大軍衆無しと雖も、久しからずして國界自然に豊饒にして歸仰すべし。大王當に是の如きの十種の王の功德を知るべし。初の一をば種性功德と名け、餘の九は自性功德なり。

云何が名けて王の衰損門と爲る。大王當に知るべし王の衰損門に略して五種有り。一には善く觀察せずして而も群臣を攝す。二には善く觀察すと雖も而も恩惠無く、縦ひ恩有れども時に及ぶことを得ず。三には専ら放逸を行じて國務を思はず。四には専ら放逸を行じて府庫を守らず。五には専ら放逸を行じて善法を修せず、是の如きの五種を皆悉く名けて衰損門と爲す。云何が王の善く觀察せずして而も群臣を攝すと名くる。謂はく國王有りて群臣等に於て究め察すること能はず、審に忠信伎藝智慧の差別を簡擇せず、攝して親侍と爲し、加ふるに寵愛を以てし、厚く爵祿を賜ひ重く寄處に委し、而も相委任して數軟言を以て相慰諭す、然れども此群臣に謂ゆる財寶多く損費すること有り。若し冤敵に遇ふときは、軍陣有ることを惡んで先づ退敗す。破散を懼るるに以りて便ち奔背を生じて、主を戀ふこと無し、是の如きを王の善く觀察せずして群臣を攝すと名く。云何が王の善く觀察すと雖も而も恩惠無く、縦ひ有れども是に非ずと名くる。謂はく國王有りて性能く觀

【事】 一本に時に作る。

【而も時時に】 一本に一時を得ずして一に作る。

【要】 一本に密に作る。

察し、審に能く是の如きの忠信伎藝智慧を簡擇して、攝して親侍と爲れども而も寵愛せず、其才を量らず爵祿を賜はず、形れる要處に於て委任せず、忽ちに一時に於て王寇敵に遇うて、軍陣有ることを悪めども怖畏せず、事急難の時に臨みて諸の臣等に於て方に寵爵を行じ、而も更言を以て慰諭す。時に群臣等共に相謂て曰はく、「王、今者に於て危迫の因縁をもて、方めて我等に於て覓く恩恵を行へども長久の心に非ず」と、此事を知り已りて、忠信伎藝智慧有りとは雖も、悉く隠して現せず、是の如きを王の善く觀察して而も群臣を攝すと雖も、恩恵の行無く、縱ひ有れども時に非ずと名く。云何が王の専ら放逸を行じて國務を思ざると名くる。謂はく國王有りて和好すべき所作所成の國務等の事に於て、而も時時に獨り空閑に處し、或は智士と共に正しく和好の方便を思惟せずして、施等の事及び賞賚すべきに乖き、乃至軍陣の所作所成の要務等の事をも、勉に意に在かざる、是の如きを王の専ら放逸を行じて、國務を思はずと名く。云何が王の専ら放逸を行じて、府庫を守らざると名くる。謂はく國王有りて實事業を營みて諸務を觀ず、王門宮廷庫藏を禁ぜず、國家の察要を婦人に説き向ひ、乃ち捕獵博戲の事の中に於て、財寶を費損して慎み護らず、是の如きを王の専ら放逸を行じて府庫を守らずと名く。云何が王の専ら放逸を行じて善法を修せずと名くる。謂はく國王有りて、世の所知の柔和醇實聰慧辯才得理解脫の所有的沙門婆羅門に於て、數近き禮敬して、云何なるか是れ善、云何なるか不善、云何なるか有罪、云何なるか無罪、云何なるか有福吉祥法門なりと諮詢して、諸惡を遠離するこ

【云何が名けて云】以下、王の可愛の法を明す。

【云何が善能云云】次に、王の可愛の法を發起する事を明す。

【正化の法】一本王化の法に作る。

【未だ：者】一本に「未だ降伏せざる者」に作る。

と能はず、説ひ聞くことを得れども以て依つて修行せず、是の如きを王の専ら放逸を行じ善法を修せずと名く。若し國王有りて、是の如きの五の衰損門を成就せば、當に知るべし此王は現世の果報を退失し、乃至來世には人天の福を失す。謂はく前の四門は現に福利を失し、最後の二門は來世の果報を退す。云何が名けて王の可愛の法と爲る。大王當に知るべし略して五種有り。謂はく王の可愛可樂可欣可意の法なり。何等をか五と爲す。一には人に敬愛せらる。二には自在増上なり。三には能く冤敵を摧く。四には善く身を攝養す。五には能く善事を簡ぶ。是の如きの五種は是れ王の可意の法なり。

云何が善能く王の可愛の法を發起する。大王當に知るべし略して五種有りて、善能く王の可愛の法を發起す。何をか五と爲すことを得る。一には世間を恩養し、二には英勇具足し、三には善權方便有り、四には正しく境界を受け、五には善法を勤修す。云何が王の養生を恩養すと名くるや。謂はく國王有りて性本より知足にして能く謹慎を爲し、無貪白淨の法を成就し、所有の庫藏力に於て貧窮孤露に給施し、柔和忍辱にして多く莠言を以て國界を曉諭す、諸有る群臣故に違犯して免すべからざる者有れども、罪を量りて矜恕し實を以てし時を以てし理の如く治罰す、是の如きを王の正化の法を以て養生を恩養するが故に、世間に敬愛せらるることを感ずと名く。云何が王の英勇具足と名くる。謂はく國王有りて神策墜ちず、武略圓滿して未だ降らざる者をば之を降伏し、已に降伏せる者をば之を攝護す、是の如きを王の英勇具足と名く。云何が王の善權方便と名くる。謂はく國王有

【年の三長】 具には三長齋月といふ、毎歲正五九月に、特に持齋して善根を増長せしむるをいふ。

りて一切の好事分明に了知して、方便を以て能く和して彌黨を攝受するが故に、一切の寛敵を摧伏することを得。云何が王の正受境界と名くる。謂はく國王有りて善能く腐庫の増減を籌量して、慳せず怪せず平等に受用し、其時候の所宜に隨ひて給與す。臣佐と親族と王等と及び伎樂の人と有りて、又疾有る時には、宜しき所を食せしめ宜しからざる所を避くべし。謂は食性を減ひて方に以て之を食せしむ。若し食して未だ消せず、或は食して痢するをば皆食せしむべからず、共に食すべき者をば獨食すべからず、所有の精味分布して歡ばしむ、是の如きを王の正しく境界を受けて、遂に能く善巧に自身を攝養すと名く。云何が王の善法を勸修すと名くる。謂はく國王有りて淨の信、戒、聞、捨、慧を具足す。淨信の處に於て了に他世を信じ、及び當來の善不善の業と人天の果報とを信す、是の如きを名けて淨信を具足すと爲す。淨戒を受持すとは、年の三長と毎月の六齋とに於て、殺生と及び偷盜と邪行と妄言と飲酒との、諸の放逸處を遠離する。是の如きを王の淨戒を具足すと名く。淨聞處に於てすとは、現世の業と及び當來の果とに於て、徳を修め業を進め樂ひて般若微妙の法門を聽き、意を専らとし、心を勤めて究竟して通達す、是の如きを王の淨聞を具足すと名く。淨捨の心に於てすとは、慳貪を遠離し手を舒べて惠施して、常に福を修して圓滿平等なるべし、是の如きを王の淨捨を具足すと名く。謂はく、淨慧を具足する處に於てすとは、實の如く、有罪と無罪と修と不修との勝劣を了知す。方便をもて多聞戒行の沙門に親近し、諸惡邪教の者を遠離す。善く三種を知る。果報圓滿と士用圓滿

【九】勸修利益の一段なり。

と功德圓滿となり。謂ゆる國王有りて帝業を繼習し、所生の宗族聰明明慧にして、府庫の財寶用に應じて虧けざる、是の如きを名けて果報圓滿と爲す。若し諸の國王有りて善權方便をもて、恆常に成就し英勇進退にして善く藝能に達す、是を即ち名けて士用圓滿と爲す。若し諸の國王有りて正法を任持して諸の内宮の王子大臣と共に惠施を修し、好んで善事持齋受戒慈三摩地門上妙の梵行を行じ、頻に護摩の息災増益を作し、曼荼羅を建て、具に灌頂を受く、是を功德圓滿と爲す。若し能く是の如く行する者を淨慧具足と名く。復次に大王當に知るべし、我已に王の過失と、王の功德と、王の衰損門と、王の可愛の法と、及び能く王の可愛の法を發起することを説きつ。是故に大王、毎日晨朝に若は讀み若は誦せよ、此れ祕密の王教なり、之に依て修行するを即ち聖王と名け即ち法王と名く。諸佛菩薩天龍八部、日夜に加持し恆常に護念して、能く世間の風雨時に順じ兵甲休息し、諸國朝貢し福祚無邊にして國土安寧に壽命長遠なることを感す。是故に當に一切の利益を獲て現世安樂なるべし。爾時、優填王、佛の所説を聞いて踊躍歡喜して信受奉行すと。次に輪王を明さん。輪王とは已に賢聖の位に入れり、是れ嬰童心に有すと雖も、然れども是れ人間の王なるが故に、次に之を叙ぶ。

四種の輪王偈陀

金銀銅鐵の四輪王は
長く三界の苦輪海を別れ

大心を發起して十善を修す
増劫富樂の時に出現す

【爾時…奉行すと】
以上聖教所説分竟りて、次に依教奉教分なり。
【二】上來は中下品の十善所感の人中異生の業散王の正不を明し、自下は上品十善所生の賢聖花報の人中の四輪王を明す。

【賢聖位】 三賢十聖の位。

【上品の十善】 下なり。土は總じて四輪王に通じ、今の四句は別して四輪王を明す。

【初地】 合す。此六句は俱に金輪聖王を明す。

【天と齊し】 帝釋四王等を齊同す。

【轉輪聖王云云】 別して金輪王を説く、此は正しく下の十住論文を頌す

【威儀】 行住坐臥【大事】 四天下の王民を化するをいふ。

上品の十善は鐵輪王なり

十住は銀輪三天下なり

初地と二地とも金輪なり

宮殿樓閣は天と齊し

土地平坦にして坑險無く

轉輪聖王の伽陀

輪王に四種の如意の徳有り

身上に病無きは是れ第二なり

壽命長遠にして十善を以て化す

端嚴にして愛すべきこと満月の如し

威儀安祥にして輕躁ならず

大勢力を具することは帝釋の如し

所言誠實にして未だ曾て兩つならず

散せず亂せず迦羅鳥の如し

能く施し戒を持ちて常に笑を含む

威徳尊嚴にして能く忍辱なること

其性の猛厲にして疾く事を辨じ

十住は銀輪二天下なり

十住は金輪四天下なり

七寶具足して十善をもて化す

國界豐饒にして人熾盛なり

大小便の時に地閉合す

色も無具は第一の徳なり

人民深く愛するを第三と爲す

天宮充滿し惡趣滅す

能く世間を照すこと猶し日の如し

威力項鍊にして大事に堪へたり

財寶富饒なることは多聞に似たり

音聲深遠にして聽解すること易し

美濃和雅にして聞く者悦ぶ

未だ曾て眉を皺めて惡眼をもて視ず

猶し大地と須彌山との如し

善能く思量して乃ち事に従ふ

【四種の兵】象、馬、車、歩。

【金輪寶の伽陀】以下七寶の伽陀は下所引の十住論中の文に依るなり。此中の七寶は聖位の金輪王の所持する所の最勝の七寶なり。

大智慧を具して經書に通じ

巧に能く論說して義を分別す

千子圍繞して天子の如し

地水虚空に障無くして住す

四種の兵は勢力具足し

甘香美食自然に有なり

施作するに曾て兵仗を用ゐず

内外に敵無くして陰謀を絶つ

諸寶妙事の所住の處

歸無きには歸爲り舍無きには舍爲り

輪王聖主に無量の徳有り

金輪寶の伽陀

千輻の金輪は十五里なり

百種の藥叉共に守護し

種種の華璽間錯して按れり

寶蓋上を覆ひて妙香を燒き

飛行速疾にして風と念との如し

兼て伎藝と竿と呪術とを解す

深心なること海の如くして量るべからず

威徳勇猛にして能く敵を破す

宮殿樓閣は釋天に均し

淨行と居士と皆共に愛す

國界日に増して損滅せず

法を以て治化して天下安し

諸の災横と疾疫と飢と爲し

諸善福徳の依止する所なり

怖畏には怖を除き惱者には離れしむ

略して是の如きの小分の相を説く

種種の珍寶をもて其輶を莊れり

天女拂を執りて亦侍立す

五種の伎樂常に隨逐せり

行く時に雜華散木の香有り

諸る所即ち諸の怨衰を滅す

【鳥王】 金翅鳥王

象寶の伽陀

象寶は本身にして銀山の如し

神獄の大象の中より出生せり

馬寶の伽陀

馬寶の色相は孔雀の如く

主兵臣寶の伽陀

貴家に生長して身に疾無し

憶念深遠にして直にして柔軟なり

主藏臣寶の伽陀

富相具足すること天王の如く

善く諸寶を知り善く出入す

如意寶の伽陀

如意寶の形は大鼓の如し

華璫莊嚴して高幢に在けば

玉女寶の伽陀

身體は修直にして肥瘦せず

細密漉皮にして事に堪へず

能く虚空を飛ぶこと鳥王の如し

伊羅象王等を摧壞す

疾きこと金翅鳥王の飛べ

大勢力有りて形體淨し

經術に通達し王を敬愛す

種種の伏藏常に透うて行く

千萬の業文常に従ひて行く

光明は日の如くにして十六を照す

能く衆生をして希願を滿ぜしむ

身肉は次第にして肌膚實てり

身は安く堅牢にして多羅樹の如し

【主藏臣寶】 輪王
所有の珍寶を主る
大臣。

【主兵臣寶】 王所
屬の象、馬、車、
歩の四兵を主る將
軍。

【十六】 十六由旬
のこと。

【玉女寶】 輪王妃

額は廣く平長にして吉盡の文有り

眼精は白黒の色分明なり

眉の毛は初月のごとし高く曲りて長し

鼻端は光澤有りて臍く圓にして直し

齒の色は珠を貫ねて雪珂の如し

腹は臍にして現ぜず臍は圓にして深し

兩の乳は頻果と雙へる鴛鴦との如し

跟は圓にして廣く躡は臍にして柔濡なり

頭髮は青細にして潤ひて亂れず

毛孔よりは常は妙梅檀を出し

身體は柔濡にして迦天の衣の如し

心に詔曲無くして信慚愧有り

坐起言語に王の意を得たり

天衣髮香をもて其身を莊れり

釋して曰はく、賢位の輪王とは「仁王經」

に云はく、「十善の菩薩は、大心を發して長く三界の苦輪海を別る。中下品の善は粟散王、上品の十善は鐵輪王、習種は銅輪二天下、銀輪は三天性種性なり。道種堅徳の轉輪王は七寶の金光四天下なり」と。經に準ぜば十善は

兩頬は深からずして俱に平滿せり

眼暖は青種にして亂れず

厚からず薄からず高下ならず

耳は濡長にして無賈の環を垂れたり

丹唇は頻果の如くにして麤細ならず

脊背は平直にして龜の背の如く足てり

圓に起ちて垂れず濡かにして鮮淨なり

膝は圓にして現ぜず金柱の如し

其身の芬馨なることは香斂の如し

口中よりは亦青蓮の香を出す

象牛馬轆魚園の文有り

時を知りて方便有りて王の意を攝す

衆好圓備して天女の如し

歌舞戲笑して王をして喜ばしむ

に云はく、「十善の菩薩は、大心を發して長く三界の苦輪海を別る。中下品の善は粟散王、上品の十善は鐵輪王、習種は銅輪二天下、銀輪は三天性種性なり。道種堅徳の轉輪王は七寶の金光四天下なり」と。經に準ぜば十善は

【二】 以下長行釋

【賢位の輪王】 三

【仁王經】 舊經上

【十善の菩薩】 十

【中下品云云】以下は明して十善所感の果報を説く。初に蒙散王を説くは同交故來の意あり。【上品・輪王】信滿不退の入住の菩薩に約す。【智種・下】此は苦薩の種姓に約して三賢の名を立つ。【二天下】東南二洲。【三天】東南西。【經に準ずば】仁王經に準ずば、四位を以て四輪王に配す。【故に四輪王】在り。【十信を以て】初發心住に入れて別位とせざる故に三賢とにいふ。【順正理に云云】仁王經の文を引用し終りて、次に順正理論第三十二の十二氣以下の文を引く。【應道】王命に應じて前に在り、王の行を引導す。

鐵輪、十住は銅輪、十行は銀輪、十廻向は金輪なり、故に四輪王は三賢の位に在り、【順正理】に云はく、「此洲の人の壽命無量より乃し八萬歳に至るまでに、轉輪王生ずること有り、八萬を減ずる時には有情の富樂壽量損減して衆惡漸く盛んなり、大人の器に非ず、故に輪王無し。此王は輪の旋轉し應道するに由りて、一切を威伏すれば轉輪王と名く」と。【施設足】の中に四種有り」と説く、金、銀、銅、鐵の輪應ずること別なるが故に。謂はく鐵輪王は一洲界に王たり、銅輪王は二洲界に王たり、銀輪王は三洲界に王たり、金輪王は四洲界に王たり。故に契經に言はく、「善王刹帝利種に生在して灌頂位を紹ぐに十五日に於て齋戒を受くる時に、首身を沐浴して勝齋戒を受けて高臺の殿に昇り、臣僚輔翼するとき東方に忽ちに金輪寶現すること有り、餘の轉輪王も應に知るべし、亦爾り」と。輪王は佛の如くにして二俱に生ずること無し。一切の輪王は皆傷害すること無くして、伏せしめて勝つ事を得りて、各其所居を安じて、勸導して十善業道を修せしむ、故に輪王は死して定んで天に生ずることを得。經に説かく、「輪王世に出現すれば、便ち七寶世間に出現すること有り、謂ゆる輪寶と象寶と馬寶と珠寶と女寶と主藏臣寶と主兵臣寶となり」と。象等の五寶は有情の所攝なり、珠輪の二寶は乃ち是れ非情なり。【論】に輪王を説くに賢と言はざれども、經に依りて通會するに賢聖なること知るべし。四種の輪王の差別は後の如し並びに正理。金輪王とは、謂はく金輪王は諸の小國の王各自ら來り迎へて我等が國土豐饒安穩なり。唯願くは大王親り教勅を垂れたまへといふ。銀輪王とは、若し銀輪王は

【施設足】 六足論の

【齋戒】 一日不食にして、十善戒を受くるをいふ。

【東方を忍ぶ】 俱舍論世間品に説く。

【小乘】 此は小乗論の當分に非ざれども大乘經に依て小乘所説の輪王の實體を判ざるが故に、三賢の菩薩に當る。

【四種の輪王云云】 一切の輪王は必ず闍浮提に受生し、自餘の諸國を統御す、今正理論三十二の十六紙に由りて示す。

【三】 上來地前三賢の菩薩の花報たる四輪王を明す、是は界地章上の四十一紙より四十二紙に至る具文、自下傳及遊法までは同章上卷四十七紙より四十八紙に至る具文。地上聖位の菩薩の花報の金

自ら彼土に往く、威嚴近づき至れば彼方めて臣として伏す。銅輪王とは、彼國に至りて威を宣へ徳を競ひて、彼方めて勝を推づる。鐵輪王とは、若し彼國に至りて威を現じ陣を列ね尅勝して便ち止む。

又聖位の金輪王とは、「仁王」「華嚴」には並に闍浮提の王と作ると云ひ、「瑜珈論」には轉輪王と作りて瞻部洲に居して四天下に王たりと云ふ。「起世經」の中には俱聖王とのみ言ひて初地と指さず。彼經に云はく、「闍浮提の内に轉輪聖王、世に出現する時、四天下に王として十善の法を行じ七瑞寶を具す。一には金輪寶、千幅と鬘鬘と有りて内外金色なり、能く未だ伏せざるを伏す、輪王の爲の故なり。此洲の中に於て最勝の地を擇ふに、東西七山

旬南北十二由旬なり、即ち其夜に於て諸天即ち來下して宮殿を造立す、金銀琉璃頗黎の四寶をもて嚴飾す。二には象寶、潔純白と名く、六牙有りて七支地を柱ふ。三には馬寶、長毛と名く、色青く體潤ふ、竝に能く空に騰る、動するに時を移さずして四天下を周る。四には珠寶、昆瑯璃の色にして光明を流出す。五には女寶、進止姝妙にして觀んと樂ひ厭ふこと無し。六には主藏臣寶、報得の天眼有りて洞かに伏藏を見る。七には兵將寶、善く四兵を理へて行走集散すること王の心に合ふ」と。「正法念經」の七寶も此に同じ。

然れども一一の寶の功用倍多し。「起世」に又云はく、「輪王終歿すれば七寶皆隱る、四種の寶城變じて博土と爲り、人民減小して磨滅すること須臾なり」と。聖位の輪王の風化は後の如し。「正法念經」に云はく、「珠に八徳を具す、百由旬の内には心行正直なり、一

輪王を論ず。

【仁王】 上卷教化

【華嚴】 第三十五

の十地品。

【瑜伽論】 第四卷

十四氣。

【彼經】 起世經第

二轉輪王品の取意

【七支】 四足と尾

と根と首。

【正法念經】 第二

卷の十善業道品に

第九の不離業道を

説く中に、廣く輪

王七寶の功德を明

す。

【起世に又云はく】

第二轉輪王品最末

の文。

【四種の寶城】 金

銀琉璃瓔珞。

【風化】 轉輪王の

政德自ら、情非情に

及ぶをいふ。

【正法念經】 第二

卷十善業道品の文

【起世經】 第二卷

十三紙取意の文。

【自下六文皆同じ】

【三】 長行釋の中

第二に論を引用し

て別して金輪を述

切の所求皆悉く満足す」と。【起世經】に云はく、「此閻浮提、清淨平正にして荆棘及び

諸の丘坑有ること無し」と。又云はく、「世間の種種の資産豐饒にして、珍琦の樂寶具足

せずといふこと無し」と。又云はく、「坑坎厠澗雜穢有ること無し、大小便利には地自ら開

合す」と。又云はく、「此閻浮提皆悉く快樂し、人民熾盛にして穀食豐饒なり」と。又云

はく、「常に夜半に於て雲を興して雨を注ぎ、清涼の風有りて潤澤し流散す」と。又云は

く、「此閻浮提の一切土地自然に沃壤にして鬱茂滋液なり」と。

【十住論】に云はく、「第二地の菩薩此地に住して常に轉輪王と作る、第二地をば十地中

に於て名けて離垢と爲す、慳貪は十惡の根本なり、永く盡すが故に名けて離垢と爲す。菩

薩是地の中に於て深く尸羅波羅蜜を行す。是菩薩若し未だ欲を離れざれば、此地の果報の

因縁の故に四天下の轉輪聖王と作りて、千輻の金輪の種種の珍寶をもて其輞を莊嚴し瑱瑠

璃を嚴と爲し、周圍十五里なるを得。百種の藥又神共に守護する所なり。能く虚空に飛行

して四種の兵を導き轉ずること、輕捷にして迅疾なること金翅鳥王の如く、風の如く念の

如し、所詣の處に諸の衰患を滅し怨賊を降伏す。一切の小王皆來りて歸伏し、親族人民

愛敬せずといふこと莫し。普く能く聖王の妃となることを照明す、種種の華鬘璣珞をもて

間錯し莊校し、五種の伎樂常に之に隨逐し、奇妙の寶蓋其上に羅覆せり。行く時には種種

の華と香の碎末を梅檀と有りて常に而も供養し、眞黒の沈水、牛頭の梅檀、黃の梅檀を

燒きて以て其身に塗る。其輪の兩邊に、天女白拂を執持して侍立せり、種種の珍寶を以て

す。

【十住論】 具には

十住毘婆沙論とい

ふ十五婆あり龍樹

の造。今の文は第

十卷にあり。

【尸羅波羅蜜】 尸

羅は戒と譯す。在

家出家小乘大乘等

の一切の戒行なり

【千輪の金輪云云】

以下任持の七寶を

明す。

【五種の伎樂】 琴

琵琶、箏、簫、黃

筍、未詳。

【而も】 藏本に而

に作る、今は寫誤

か。

【沈水】 名義集三

に曰く一阿伽嚧此

に沈香といふ乃至

地に著きて積むこ

と久く外は朽腐し

其心堅き者を水に

置けば則ち沈むる

沈香といふと。

其蓋と爲す。其輪に種種の希有の事有りて、而も用て莊嚴せり、是を金輪寶一切を具足すと名く。象の相は身大にして而も白きこと眞銀山の如し、神獄の大象衆の中より生出して能く虚空に飛行し、伊羅婆那安闍那王と摩那等の諸大家王を皆能く摧御す、是を白象寶具足と名く。馬の相は色孔雀の頸の如し、其體疾きこと金翅鳥王の如くにして飛行無礙なり、是を馬寶と名く。貴家の中に生じて身に疾病無く、大勢力有りて形體淨潔なり、憶念深遠にして直心柔軟なり、持戒堅固にして深く王を敬愛し、能く種種の經書伎術に通達す、是を主兵臣寶と名く。財主天王の如く富相具足せり、千萬億の種種の諸寶の伏藏常に隨逐して行く、千萬億種の諸の藥叉神の眷屬隨從せり、皆是れ先世の行業の報なり、善く知りて金銀、帝青、大青、金剛摩羅竭、車渠、馬瑙、珊瑚、頗梨、摩尼、瑣珠、瑠璃等の種種の寶物を分別し、悉く能善く知りて多少を出入せしむ、宜きに隨ひて能く用ひて能く王の願に滿つ、是を居士寶と名く。光明は日月の如くにして十六山句を照す、形は大鼓の如くにして能く種種の毒蟲、惡氣、疾病、苦痛を滅す、人天の見る者珍愛せざること莫し、好華瓔珞以て莊嚴と爲す。帝幢に處在すれば威光奇特にして、能く衆生をして希有の心を發し大歡喜を生ぜしむ、是を珠寶と名く。其手の爪の甲は紅赤にして薄し、其形は修直にして高隆なり、潤澤にして肥えず瘦せず、身肉次第にして肌膚厚く實てり、細密の薄皮にして苦事に堪へず、身安く堅牢にして多羅樹の如し、身上の處處に吉字明了なり、吉樹の文畫有りて其身を莊嚴せり、象王、牛王、馬王の畫の文と、幅蓋の文と魚の文と蘭林

【經書】 四吠陀論等。

【帝青】 寶の名。華嚴普義には、四陀羅尼羅の最尊第一といふ。

【其手の爪云々】 第七に、玉女寶を示す。

【吉字】 吉は稱美の詞、字は身皮上に現する細密なる縱横の筋を交といひ字といふ。

【横心に三有り】 脛の横の文字三節ありと。

【頻婆葉】 藏本に頻婆葉に作る。名菩薩三には、相思といひ果の色丹く日つ潤なりとあり

【耳は濡か】 藏本に「耳は濡か」に作る

【迦提伽】 滿清中の鳥、若し人身に觸るれば、疲乏なく飢渴憂悲苦惱忽ちに消すと。

等の文と其身上に現ぜり。蹠は平にして現ぜず、足は龜の背の如し、足の邊は俱に赤し、

眼は圓にして廣し、睛は臙にして柔軟なり、膝は圓にして現ぜず、脛は金柱の如し、芭蕉樹の如し、象牙の鼻の如し、澄澤光潤なり、臙圓にして直し、横文に三有り。腹は臙にして現ぜず、臙は圓にして而も深し、脊背は平直なり、乳は頻婆葉の如く、雙べる鴛鴦の如し、圓に起つて垂れず、柔軟にして鮮淨なり。又其臂は纖く臙圓にして且つ長く、節は隠れて現ぜず。其鼻は端直にして臙ならず、現出すること大ならず小ならず、孔は覆ひて現ぜず、兩頬は深からず平滿にして高からず兩邊俱に滿てり、額は平にして長し、吉畫の文有り、耳は濡かにして垂れ無賈の環を著けたり、齒は眞珠の貫けるが如く、月の初めて生ずるが如く、雪の如く珂の如し。唇は丹霞の如く頻婆葉の如し、上下相當て豔ならず細ならず赤瑱珠の貫けるが如し。眼は白黒の精二つの色分明にして、長廣を莊嚴して光明清淨なり。其腋は青く靨く長くして亂れず、眉の毛は厚からず薄からず、高からず下からず、月の初めて生ずるが如く、高く曲りて長く、兩邊相似たり。髪は細くして潤澤にして亂れず、其身は芥露にして常に香氣有り二種種の上好の香氣を聞けるが如し。身の諸孔より常に眞妙の梅檀の香を出して、能く人の心を悅ばしむ、口中には常に青蓮華の香有り。身體は柔軟にして迦提伽天衣の細滑の事の如し、一切具足せり。心に誦曲無く直信にして慚愧有りて深く王を愛敬す。時を知り方を知りて善く方便有りて王の心を攝取す、坐起言語に能く王の意を得、王の意に隨ひて行ず。常に愛語を出すことは人間の徳女の如

して現ぜず、臙は圓にして而も深し、脊背は平直なり、乳は頻婆葉の如く、雙べる鴛鴦の如し、圓に起つて垂れず、柔軟にして鮮淨なり。又其臂は纖く臙圓にして且つ長く、節は隠れて現ぜず。其鼻は端直にして臙ならず、現出すること大ならず小ならず、孔は覆ひて現ぜず、兩頬は深からず平滿にして高からず兩邊俱に滿てり、額は平にして長し、吉畫の文有り、耳は濡かにして垂れ無賈の環を著けたり、齒は眞珠の貫けるが如く、月の初めて生ずるが如く、雪の如く珂の如し。唇は丹霞の如く頻婆葉の如し、上下相當て豔ならず細ならず赤瑱珠の貫けるが如し。眼は白黒の精二つの色分明にして、長廣を莊嚴して光明清淨なり。其腋は青く靨く長くして亂れず、眉の毛は厚からず薄からず、高からず下からず、月の初めて生ずるが如く、高く曲りて長く、兩邊相似たり。髪は細くして潤澤にして亂れず、其身は芥露にして常に香氣有り二種種の上好の香氣を聞けるが如し。身の諸孔より常に眞妙の梅檀の香を出して、能く人の心を悅ばしむ、口中には常に青蓮華の香有り。身體は柔軟にして迦提伽天衣の細滑の事の如し、一切具足せり。心に誦曲無く直信にして慚愧有りて深く王を愛敬す。時を知り方を知りて善く方便有りて王の心を攝取す、坐起言語に能く王の意を得、王の意に隨ひて行ず。常に愛語を出すことは人間の徳女の如

して現ぜず、臙は圓にして而も深し、脊背は平直なり、乳は頻婆葉の如く、雙べる鴛鴦の如し、圓に起つて垂れず、柔軟にして鮮淨なり。又其臂は纖く臙圓にして且つ長く、節は隠れて現ぜず。其鼻は端直にして臙ならず、現出すること大ならず小ならず、孔は覆ひて現ぜず、兩頬は深からず平滿にして高からず兩邊俱に滿てり、額は平にして長し、吉畫の文有り、耳は濡かにして垂れ無賈の環を著けたり、齒は眞珠の貫けるが如く、月の初めて生ずるが如く、雪の如く珂の如し。唇は丹霞の如く頻婆葉の如し、上下相當て豔ならず細ならず赤瑱珠の貫けるが如し。眼は白黒の精二つの色分明にして、長廣を莊嚴して光明清淨なり。其腋は青く靨く長くして亂れず、眉の毛は厚からず薄からず、高からず下からず、月の初めて生ずるが如く、高く曲りて長く、兩邊相似たり。髪は細くして潤澤にして亂れず、其身は芥露にして常に香氣有り二種種の上好の香氣を聞けるが如し。身の諸孔より常に眞妙の梅檀の香を出して、能く人の心を悅ばしむ、口中には常に青蓮華の香有り。身體は柔軟にして迦提伽天衣の細滑の事の如し、一切具足せり。心に誦曲無く直信にして慚愧有りて深く王を愛敬す。時を知り方を知りて善く方便有りて王の心を攝取す、坐起言語に能く王の意を得、王の意に隨ひて行ず。常に愛語を出すことは人間の徳女の如

【舍脂】毘摩質多阿修羅王の女。

【天文の衣鬘】藏本に天衣天鬘に作妙好なれば天物と名くるが故に、天の字を冠す。

【又轉論云】以下、轉輪王所有の四徳を示す。

【四には壽命長遠】第四徳の初に壽命長遠を擧げ以下三十徳を合せ明すは他の徳の中、壽命最も重きが故に初に擧ぐといふべし

し、衆好具足して色は提盧多摩天女の如し、清淨分明なることは月の十五日の如し、晝

文炳現せることは帝釋の夫人舍脂の如くにして、天文の衣鬘天の香を著し、多く天の光明の金摩尼珠を以て其身を莊挾せり。善く歌舞伎樂娛樂戲笑の事を知り、善く方便有りて意に隨ひて能く王をして歡喜を發さしむ。一切の女中に是女を最と爲す、是を玉女寶と名く。又轉輪聖王に四如意の徳有り。一には色貌端政なることは四天下に於て第一無比なり、二には病痛無し、三には人民深く愛す、四には壽命長遠なり。衆生を教誨するに十善業を以てす、能く諸天の宮殿をして充滿せしめ、能く阿修羅の衆を滅す、能く諸の惡趣を薄くし善處を増益す。能く衆生の爲に多く利事を求めて施作する所有るには兵仗を用ひず、法を以て治化して天下安樂なり、外には敵國の畏無く、内には陰謀の畏無し。又其國の内には疫病飢餓と及び諸の灾横衰惱との事無し。一切の邊王皆歸伏する所なり、多くの内には疫病飢餓と及び諸の灾横衰惱との事無し。一切の邊王皆歸伏する所なり、多くの脊屬有れば能く疾く人を攝して更に能く國界を侵害すること有ること無し。其四種の兵は勢力具足せり。諸の婆羅門と居士と庶人と皆共に愛敬す。甘香美食は自然にして有り、國界日に増して損滅有ること無し。善能く經書、伎藝、算數、呪術に通達して、皆悉く受持せり。巧みに能く論說して義趣を分別す。群臣具足して悉く威徳有り。常に財施を行するに能く及ぶ者無し。千子端政にして諸の天子の如し、威徳勇健にして能く強敵を破す。所任の宮殿堂閣樓觀は四天王と帝釋との勝殿の如し。王の教誨する所能く壞すること有ること無し。四天下に於て唯此王のみ有りて、威相具足するが故に能く及ぶ者無し。

【迦羅婆類伽鳥】

亦是伽陵頻伽といふ此に姓伽鳥といひ中尊を養するに餘鳥に勝れたりといふ。

【大事】 天下を治むる政道を總じて名く。

【大丈夫の相】 三十一相を具ふ。

【法眼】 生得の五眼の中の法眼、諸法の善不善、漏無漏等を分別す。

【諸寶妙事云云】 以下、結成す。

【轉輪あり】 此一文は總結するなり。

音聲深遠にして聴き易く解り易し、不散不亂にして迦羅婆類伽鳥の如し。美濡和雅にして聞く者悦ぶのみ。眷屬心を同じて狙壞すべからず。所住の處は地水虚空に無障無礙なり。威力の猛士にして大事に堪へたり。念うて耆老に問うて人を欺誑せず。心に妬嫉無くして非法に忍びず嗔恨有ること無し。威儀安祥にして輕躁ならず。所言誠實にして未だ曾て兩舌せず。施を行じ戒を持ち、常に笑を含んで未だ曾て眉を皺めて悪眼をもて人を視ず。利を退失する者には之が爲に利を作し、已に利有る者には深く敬を知らしむ。慚愧の心を懷いて大智慧有り、威徳尊嚴にして能く忍辱なり。大丈夫の相有りて其性猛厲なり、諸の所爲の事疾く能く成辦す。先に正しく思量して、然して後に乃し行ず、王に法眼有りて所爲殊勝なり、善く思量する者は乃ち輿に事に従ふ。若し任へざる者は更に賢明を求む。善く福德を集めて財物清淨なり、能く自ら防護して禁戒を破せず。多く財寶に饒なること毘沙門王の如し、大勢力有ることは天帝釋の如し、端嚴にして可愛なることは猶し滿月の如し、能く照すことは日の如し、能く忍ぶことは地の如し、深心なることは海の如し、苦樂の爲に傾動せられざることは、須彌山王を風の搖すこと能はざるが如し。諸寶妙事の所住の處、諸善福德の依止する所なり。是れ諸の一切世間の親族なり、諸の苦惱の者の歸趣する所なり、歸無きには歸と作り、舍無きには舍と作る。怖畏有る者には能く怖畏を除く、轉輪聖王に是の如き等の相有り。

秘密曼荼羅十住心論卷第二

秘密曼茶羅十住心論

卷第三

嬰童無畏住心第三

【此住心には、總じて天乘の因果を攝す三界六趣中に住るとは正しく其因行とは凡夫外道に住する凡夫外道の十善業道を護持し、六行の事觀を修し、餘ては天上に居する諸天子の不放逸の行、其果報は、三界諸天微沙の依正二報なり。】

【嬰童無畏】 嬰童とは初生の無智味劣心を取て、通じて六道の凡夫と名くる喩名、無畏とは三寶に歸依し十善を修して三途の扼縛を脱す、其心に畏るる所無きをいふ。

【一】 白下初に淺略釋の中、初に正しく大綱を釋す。

【二】 蟻蟲・風す。初二の住心を喻ふ、初は泥上に匍ふは第一住心の一向行惡に喩へ、魚は泥を出でて清水に

夫れ蟻虫は定んで蟻に非ず、鯢魚必ずしも鯢に非ず、泥を出でて乍ちに虚空を拂ひ水を搏ちて忽ちに風上に臥す、羝羊の人を之に讐ふ。愚童の心も亦如なり、羝羊自性無きが故に善に遷り、愚童内重力の故に苦を厭ふ。戒を護りて天堂に生じ、善を修して地獄を脱するが如きに至りては、下を惡むの心稍稍發り、上を欣ふの願初めて起る。於是に歸依を彼天龍に求め、虔誠を此神鬼に盡す、拔苦の悲を仰ぎ興樂の懺を祈る、影は形に隨ひて直く、響は聲に逐うて應ず。三途の苦果は前因を畢りて出で、四禪の樂報は今縁に感じて昇る。因果は信ぜずんばあるべからず、罪福は愼ますんば有るべからず、鐘谷の應良に以有り。嬰童は初心に據りて名を得、無畏は脱縛に約して稱を樹つ。

故に文に云はく、「復次に秘密主、彼戒を護りて天に生ず、是れ第七受用の種子なり。復次に秘密主、此心を以て生死に流轉するとき、善友の所に於て是の如きの言を聞く、此は是れ天なり大天なり、一切の樂を與ふる者なり。若し虔誠に供養すれば一切の所願皆滿つ、謂ゆる自在天梵天なり、乃至彼是の如くなるを聞いて心に慶悅を懷きて愍重に恭敬し隨順

浮ぶは、第二住心に善心を發すに喩ふ。

【泥を出て云云】

第三住心の生天解脱に喩ふ、泥を三途に、水を人間に、虚空と風土を天上に比す。

【三途の…昇る】

前世の十惡業因の果書きて惡趣より人天に生じ、今世に十善六行を行じて四禪の樂報を得前二句は羝羊の脱苦遷善、後二句は愚童の修定生天なり。

【初心】 譬説に就

かば咳兒氣弱劣弱の心、法起に就少ば凡夫初起の微少の有漏の善心。

【二】 二に引證釋義。初に護戒生天の文。

【此は是…大天】

天とは三界の諸大天とは諸天を對じていふ。

【此は戒…明す】 大師の自註にして

修行す。秘密主、是を愚童異生の生死流轉の無畏依の第八の嬰童心と名く外の三寶に歸依すること。釋して云はく、復次に秘密主、彼戒を護りて天に生ず。是れ第七受用の種子なりとは、謂はく已に能く着施を造し其利益を見る、即ち三業の不善は皆是れ衰惱の因縁なり

と知んぬ。我當に之を捨て戒を護りて住すべしと。戒を護るに由るが故に現世には諸の善利を獲、大名聞有りて身心安寧なり。倍復賢善を増廣すれば命終して天に生ずること

を得。譬へば種果已に成じて其實を受用するが如し、故に受用種子と曰ふなり。又云はく、一の種子より百千の果實を成ず、是一一の果實より復若干を生ず、展轉して滋育すること

勝て數ふべからず。今此受用果の心復て後心の種子を成ずること亦復是の如し、故に受用種子と曰ふなり。

經に云はく、「秘密主、此心を以て生死に流轉するとき、善女の所に於て是の如きの言を

聞く、此は是れ天なり大天なり、一切の樂を與ふる者なり。若し虔誠に供養すれば一切の

所願皆滿つ、謂ゆる自在天等なり、乃至彼是の如くなるを聞いて心に慶悅を懷き、慇重に

恭敬し隨順し修行す。秘密主、是を愚童異生の生死流轉の無畏依の第八嬰童心と名く」と

は、已に尊行の人をば宜しく親近供養すべしと知り、又戒を持して能く善利を生ずること

を見る、即ち是れ漸く因果を識る。今復善知識の、此大天有りて能く一切の樂を與ふ、若

し虔誠に供養すれば所願皆滿つと言ふを聞いて、即ち能く歸依の心を起すなり。未だ佛法

を聞かずと雖も然も此諸天は善行を修するに因りて此善報を得と知り、又漸く解して勝田

此れ通じて七八二の經文の大意を示す。即ち大日經所説の順世八心の中、七八二心は次の如く十善と三歸との轉勝次第なり。【釋して云く云云】以下第七心を解す【已に能く】前の人乘の六心に能く【三業の不善】十惡業。【善善】十善戒。【種果】前の第六の成果。【其實を愛用す】七心は第六心の因種所生の子實を愛用して藏内に收むる如し。【一の種：成ず】第七心の果還つて種となり第八心を成ず。【若干】第九殊勝心、第十の決定心をいふ。【受用果の心：如し】第七心、八九十心の種心となるを指す。

を甄別するなり。復佛法の殊妙を聞かば、必ず能く歸依し信受すべし、故に世間の最上心と爲く。問うて曰はく、「前には自在天等は皆是れ邪計なりと説く、今は復て此等に歸依するは是れ世間の勝心なりと云ふ、前と何んぞ異なること行るや。」答へて曰はく、「前は是れ因果を識らざるの心にして但諸法は是れ自在天等の所造なりと計するのみ。今は善根熟するに由るが故に、生死流轉の中に於て無畏依を求め、彼行因を效て冀うて勝果を成ぜんと欲するが故に、前の計に同ぜざるなり。商羯羅とは、是れ摩醯首羅の別名なり、黒天とは梵音には嚧捺羅といふ、是れ自在天の眷屬なり。龍尊とは是れ諸の大龍なり。俱吠羅等とは皆世に宗奉する所の大天なり。梵天后とは是れ世間に奉尊する所の神なり。然るに佛法の中には、梵王は欲を離れたるをもて后妃有ること無し。波頭摩より以下に、謂ゆる得又迦龍、和修吉龍、商佉龍、羯句摘劍龍、大葦華龍、俱里劍龍、摩訶津尼龍、阿地提婆龍、薩陀龍、難陀等の龍は皆是れ世間に奉尊する所の神なり。天仙とは謂はく、諸の五通の神仙なり、其數無量なり、故に名を列ねず。圍陀とは是れ梵王の演ぶる所の、四種の明論なり、大圍陀論師とは、是れ彼經を受持する能教授の者なり、能く出欲の行を開示するを以ての故に歸依すべし。彼部類の中に於て梵王は猶し佛の如し、四圍陀典は猶し十二部經の如し、此法を傳ふるものは猶し和合僧の如し。時に彼是の如き等の世間の三寶を聞いて歡喜し歸依し隨順し修行す、是れ第八生死凡夫の無畏依なり。

又云はく、「祕密主、世間の因と果と及び業との、若は生じ、若は滅するを、他主に繫屬

【三】次に第八心を解す。

【勝田】最勝の福田。福田に恩田、悲田、敬田の三ある中、今は第三に當る。

【問うて云はく云】前の三十外道の計を邪計とし、

羊心に屬し、今の交は此等の諸天に歸依するを歎じて勝心とし無畏心に屬す故に問あり。

【商羯羅】摩醯首羅に、毘遮舍の三

種ある中の一。惣別相對中の別名。

【略捨羅】商羯羅の忿怒身ともいひ摩醯首羅の化身ともいふ。

【龍尊】波頭摩等

【梵天后】外道の説に依れば初禪以上尙ほ實類の女身を計す。

【園陀】吠陀論をいふ、諸の實事を明すが故に明論ともいふ。

して空三昧生ず、是れ世間の三昧道と名く」とは、釋して云はく、謂はく一切の世間の三昧は、要を以て之を言はば、究竟の處に至りて皆因と果と及び因より果を辨する時の所有の作業とを滅壞す。謂はく此三事の、若し生じ若し滅するを皆他に繫屬す、他は謂はく神我なり。然る所以は、若し行人正因縁の義を解せずして諸禪を修證すれば、必ず當に自心を計著して以て内我と爲す。彼世間の萬法は心に因りて有なることを見て、則ち神我に由りて生ずと謂へり。設令内我に依らずとも必ず外我に依る、即ち是れ自在梵天等なり。若し深く此中の至隨を求むれば、自然に因果を撥除して唯我性獨り存す、乃至一法として心に入ること無くして空定を證す。最も是れ世間究極の理なり、是故に三行を盡すに垂として還りて三途に墮す。禪定の中に於て種種の世間の勝智を發し五神通を具すと雖も、其宗趣を研くに終に是處に歸す。故に斯一印を以て一切世間の三昧道を統收す。これは諸の三昧を表はす。

外道に九十六種の大外道と九萬三千の眷屬の外道と有り。總て十六と爲す。十六外道の

囑陀南、

因の中に果有るは雨際の計なり

去來實有は勝と時となり

常を計する論者は伊師迦なり

靜慮と天眼とをもて實常なりと計す

緣に従りて顯了するは數と聲との執なり

我實有なりと計するは犢子等なり

全と分と有と無と俱非との常なり

無繫は宿を計して餓ゑて巖に投ぐ

【田欲の行】五欲を出離する清淨の梵行。

【四種の明論】聲明、因明、工巧明、醫方明か。

【四】自下は大日經具緣品所説の五種三味道の初、世

證し、別して禪定を修して上二界に生ずることを明す

【世間】外道所修の四靜慮等は唯有漏定なる故にいふ

【究竟の處】空三昧。

【三事】因、果、業の分別起の我。

【諸禪】四禪及び四空。

【禪定の中：發し】四禪八定中に於て六行不淨安般等の諸の有心無心の有漏の事觀を發すをいふ。

【是處】心想都盡の空三昧。

【五】上は疏釋を緣して略して宗要

自在の變化は世間の因なり
害を正法と爲すは肉を食せんが爲なり
不死矯亂は秘して別せず

欲界の人天と色の靜慮と
空見論者は一切無なりとす

鬪諍劫の時の諍行者は
清淨を計する者は死河に浴す

吉祥論者は博蝕の時に
釋して曰はく、第一に因中に果有りと執する論者。梵には伐利婆と云ふ、此には雨際と

云ふ、即ち劫毘羅僧佉が弟子なり。雨際外道は因は常恆にして具に果の性有りと計す。第二に從緣顯了なりと計する論者。此に二の別有り。一には數論外道なり、法體は本より有

なれども、衆緣に從ひて顯ると計す。二には聲論外道なり、聲の體は是れ常なれども但緣に從ひて宣吐して顯了なりと計す。第三に去來實有なりと計する論者。此に二の別有り。

一には勝論、二には時論外道なり。過去有りと計し未來有りと計す、其相成就せること猶し現在の如くにして實有にして假に非ずと。第四に我は實有なりと計する論者。即ち彼數

と勝と離繫と獸主と赤衣と遍出となり、即離蘊を計す、非即非離は犢子部等なり、並に我は實有にして而も是れ一なり常なりといふ。第五に常を計する論者。伊師迦外道等なり、

丈夫時等は不平の因なり
上下は邊有り邊は邊無しといふ
諸法無因は定と尋とに依る

無色の細色とは斷滅して無なり
尋定等に依りて是の如く説く

我は是れ最勝なり餘は下劣なりといふ
或は狗戒露炊等を持す

事成ぜずと爲して日月を供す

を明し、自下は能修の人と修定に別あることを明す【因の中供具】十六外道の所計を顯す。

【伐利婆】此には雨と名く、雨際に生れたるが故に。

【劫毘羅僧法】本師外道の名、僧位は所造の論名、佛法に從まば數論外道といふ。

【法體は本より有り】中間二十三諦の法體は第一自性諦の中に自然に本有なり。

【聲論外道】園陀論師。外道の本名は鵝、又は食米齋仙人といふ、彼所造の六句義論を勝論と名くに依り、外道の名とす。

【數と勝】數論と勝論。

【離繫】尼處子、今は唯健陀弗咀羅といふ、離繫子とは翻名。

全常なり分常なり有想常なり無想常なり俱非常なりと計す。靜慮に由依て宿住智を起し及び天眼に由りて妄りに實常なりと計す。第六に宿作を計する論者。謂はく無繫外道なり、彼所計は世間の士夫の現に受くる所の苦は皆宿作の惡の因と爲すに由る、勤めて精進するに由りて舊業を吐くと執す、故に自ら餓る巖に投げ諸の苦行を修す。第七に自在を計する論者。凡そ諸の世間の士夫の所受は彼自在の變化を以て因と爲し、或は餘の丈夫と時と方と本際と自然と虚空と極微と我との等の不平等の因なりと計す。第八に害を正法と爲すと計する論者。謂はく淨觀劫の諸の婆羅門、肉を食せんと欲するが爲に妄りに論を立てて言はく、「若し祠の中に於て諸の生命を害して能く祀るものと、所害のものと、若し諸の助伴のものとは皆天に生ずることを得」と。第九に邊無邊等を計する論者。謂はく即ち諸の靜慮に依止するが故に彼世間に於て有邊の想に住し、無邊の想と俱と不俱との想に住するなり、上下には邊有り、傍に於ては無邊なり。第十に不死矯亂を計する論者。謂はく四種の不死矯亂外道なり。若し人來りて世出世の道を問ふこと有らば、彼便ち稱して云はく、「我は不死淨天に事ふ。淨天秘密にして計別すべからず」等といふ。第十一に諸法無因の見を計する論者。謂はく無因外道なり。謂はく靜慮に依り及び尋伺に依りて一切の法は因無くして而も起る、我及び世間皆無因より生ずと計す。第十二に斷を計する論者。謂はく七事の斷滅を計す、欲界の人と天と色の四靜慮の曇の四大色とは病の如し箭の如し、四無色處の細色は癩の如し、若し我死して後に斷滅して有ること無しとす。第十三

【歌主】梵名を播
 輪鉢多といふ。
 【通出】梵名を波
 利阻羅拘迦といふ
 遍く諸俗世間を出
 離する意。
 【即離蘊】即蘊と
 は我の體即是れ蘊
 なりといふに名け
 離蘊とは我の體蘊
 に非ざるをいふ。
 【或子部】筏遊氏
 外道を贊子外道と
 名け、歸佛して出
 家せるを贊子部と
 いふ。
 【伊師迦】演密鈔
 三に云はく一此に
 は堅固といふ、是
 れ山の名亦は草の
 名一と。
 【或は餘：我】諸
 法所生の因を、大
 梵王、時節、方角
 本際（過去の初道）
 自然、虚空、極微
 神我とす。
 【不平等の因】能
 所生齊からざるの
 義なり。能生の自
 も所生の夫所受
 の苦樂は皆是れ多

に空見を計する論者。謂はく尋伺に依り或は靜慮に依りて斷見外道是の如きの見を起す、
 因果も無く施與も有ること無し、祠祀も有ること無し、定んで妙行と及與び惡行との二業
 の果報も無し、乃至世間に眞の羅漢も無しと計す。第十四に最勝を計する論者。謂はく闍
 諍劫の諸の婆羅門は是れ最勝の種なり、刹帝等は是れ下劣の種なり、諸の婆羅門は是
 れ梵王の子にして腹口より生ずる所なり、餘は則ち爾らずといふ。第十五に清淨を計す
 る論者。謂はく有が妄に計す、殘伽河等に於て支體を沐浴するは、所有の諸惡悉く皆除
 滅して第一清淨なり」と。復有外道の計すらく、「狗戒を持し、或は油黑戒を持し、或は
 露形戒を持し、或は灰戒を持し、或は白苦戒を持し、或は糞穢戒を持し、及び現の涅槃を
 計して清淨と爲す。第十六に吉祥を計する論者。謂はく尋思に依り或は靜慮に依りて、
 但世間の日月の傳蝕し、星宿の度を失するを見て事成ぜずと爲す、故に勤めて日月星
 等を供養し大いに呪を誦し茅師を安置す、謂はく曆數の者、是の如きの計を作す。
 (六) 次に修定を明す。定とは梵には禪那と云ふ、舊には思惟修と言ひ亦は功德林と云ふ、新
 には靜慮と云ふ、義翻じて定と爲す、所觀の境に於て心所をして專注せしむるを性と爲
 す。若しは三昧耶と云ふ、此には等持と云ふ、若しは三摩地と云ふ、此には等至と云ふ、若し
 三摩耶多と云ふ、此には等引と云ふ、若しは三摩鉢底、三摩鉢帝と云ふ、此には均等と云ふ、
 皆是れ定なり。地繫には八つ有り、四禪と四空となり。界繫に二つ有り、謂はく色と無色
 となり、多の差別有り唯し異生を辨す。自下は順正理論に依し初靜慮とは「正理論」に云はく、

なり無常なり。

【淨鏡劫】劫末五

濁惡世の時。

【後世間】此娑婆

三千大千世界のこ

と。

【俱と不俱との想】

有邊亦無邊、非有

邊非無邊の想。

【不死淨天】無想

の天子。彼は五百

大劫の長壽の果報

なるを知らず、不

生不滅常住の天と

計す。

【斷を計する論者】

【斷見外道】彼が所

計の五現涅槃なり

論の具文に、諸天

微妙の五欲に於て

堅著し攝受し、嬉

戯娛樂し、意の儘

に受用するを現法

涅槃とし、又有る

外道の、若し欲惡

不善の法を離れて

初靜慮乃至第四靜

慮に住するを現法

涅槃と爲す。

【大いに呪を誦し】

「世俗の無間には總じて欲界を緣するに麤苦障の三の隨一の行相有り、諸の解脫道には初

の根本を緣するに靜妙離の三の隨一の行相有り。謂はく上中下有り。三品の因に隨ひて當

に三天處に生ずべし。第二靜慮とは論に云はく、「世俗の無間には總じて初禪を緣するに麤

苦障の三の隨一の行相有り。諸の解脫道には二靜慮を緣するに、靜妙離の三の隨一の行

相有り、謂はく上中下有り、三品の因に隨ひて當に三天處に生ずべし」と。第三靜慮とは

論に云はく、「世俗の無間には總じて二禪を緣するに麤苦障の三の隨一の行相有り、諸の

誤ならん。陰陽
【層數の者】 道士。

【六】 次に所修の
定の差別を明す。
初に定の名義と別
名を示す。

【功德林】 功を積
みて徳を成ず、林
とは徳一に非ざる
を顯す。

【心心所】 同時俱
起の第六識の心王
と正しく能觀の慧
の心所。

【界繫に云云】 下
は界地に約して修
定の相を釋す。

【順正理論】 第二
十一、第六十六、第
二十一、第四、第
二十一。

【世俗】 有漏觀な
る故にいふ。

【癡苦障】 頌疏に
寂靜に非ざる故に
癡と爲し美妙に非
ざる故に苦と爲し
出離に非ざる故に
障といふ、靜妙離
の三は之に翻ず。

【行相】 能觀の心
上に現ずる、麤等

あり、大いに分ちて三と爲す。一には欲界、二には色界、三には無色界なり。

三界の諸天の總頌
欲、色、無色の三界の天は
無色界の天に四種有り
日月星等の遊空天は
欲界の九天の因の頌四天王天の中に日月星の三

下品の三種は十善を修して
中品の三種の十善戒は
上品の三種の十善業は
是の如きの九種の欲界の天は
六天の身量と壽命と成姪との頌
四と初と夜と觀と樂と他化と
五と六と七と八と九と十との歳なり
身の長は半里と一と一つ半と
人間の五十と及び百年とを
是日月を以て年歳を數へて
自上の四天の壽命等は

星月日の天宮に生ずることを得
四と初と時分との三天處なり
都と樂と他化天とに生ずることを得
皆三三の十善より來る

是の如きの六天は初生の時は
是の如きの形體をもて膝に化生す
二里と二半と及び三里となり
一晝夜と爲して月歳を成す
四王は五百、初は一千なり
重重に倍增すること應當に知るべし

の六種の影像。
【根本】 土地の離
生喜樂地。

【謂はく上中下】
自下の三句は上の
文と一連に非ず、

蓋し今章は大衆
伽に同じて、四靜
慮に於て十八天を
立つる故に、經部
中の上座の義を用
ふ。

【三天處】 初禪中
の三天處。

【二靜慮を緣す】
土地の定生喜樂地

【三天處】 少光、
無量光、極光の三
天處。

【三靜慮】 土地の
離喜妙樂地。

【三天處】 少淨、
無量淨、遍淨の三
天。

【四下三】 第四禪
に九天ある中、廣
果已闍の三天處。

【三天處】 無雲と
彌生と廣果。

【無色界云云】 上
は正理を引いて、
開いて四禪の厭下

欣上の六行觀を明

六欲の諸天は皆染心なり

時分は相抱く觀は手を執る

欲界の六天、海を去る數量の伽陀

四王は四萬山

時分は十六萬

化樂は六十回

是の如くに六欲天

初の二は地居天

初の欲界に六天有り。一には四天王天、二には初利天居天と爲く。三には夜摩天、四

には觀史天、五には化樂天、六には他化自在天なり。已上の四をば空

第一の四天王天に亦三種有り。一には下の三の層級、二には日月星宮、三には四大王

天なり。一に下の三の層級を明さば、『俱舍論』に云はく、「蘇迷盧山に四の層級有り、始め

水際より第一の層を盡すまで相去ること十千輪躡那の量なり、第二第三の層も亦各各十千

量なり、此三の層級は傍に出でて圍繞せり、最初の層級は出でたること十六千なり、第二

第三は八四等の千の量なり、最下は藥叉神、堅手と名くるの所住なし。持鬘は第二に住し、

恆橋は第三に住す、此三は皆是れ四大天王の所攝なり」と。『起世經』に云はく、「鉢手夜叉

の宮は縱廣六十由旬なり。上の二は次での如く四十と二十との由旬なり、七重の欄楯有

四と初との地居は形を交へて姪す

化樂は相咲ふ化他は視る

初利は八萬句

觀史は三十二

他は百二十八萬なり

海を去ること一一に倍せり

後の四は雲を地と爲す

三には夜摩天、四

し竟る、自下は俱舍に依て、合して四空に亦六行を修することを釋す。

【苦塵障】 俱舍の論文に屬苦塵障に作る。

【彼四の近分云云】 自下は義引なり。

【愛・放】 四無色は近分若は根本同じく攝受なれば能化の十四心。

【神通】 神境通。七心上來は正しく心品に約して第三住心を明して、自下は正しく果報に就いて明す。

【異生を明す】 外道の護戒生天を指す。

【欲界】 無間より他化天まで、男女參居して諸の染欲多し、故に欲界といふ。

【色界】 初禪梵天より色究竟まで、女形なく欲染なく

り、七寶の所成なり、樹林地沼有り、衆鳥和鳴す。四大王天の處と及び帝釋等の宮とは、青衣の樂又有り、並に皆此類なり、大力の鬼なり。二に日月星宮を明す。是を亦は遊虚空天と名く、古には遊宮と名く。『智度論』に云はく、「下の下品の十善を修すれば、諸の星宮に生ず、下の中品の十善を修すれば月宮に生ず、下の上品の十善を修するときは日宮に生ず、並に燈明等を施するなり」と。『俱舍論』に云はく、「日月衆星は妙高の半に齊し、

風に依りて而も住す。謂はく諸の有情の業の増上力をもて、共して風を引いて起して妙高山を繞りて、空中に日等を旋環し運持して停墜せざらしむ。日は五十一踰繕那、月は五十踰繕那、星は最小なるは唯一俱盧舍、其最大なるは十六踰繕那なり。日輪の下面は頗

抵迦寶なり、火珠の所成にして能く熱く能く照す、月輪の下面は頗抵迦寶なり、水珠の所成にして能く冷しく能く照す。唯し一日の日月普く四洲に於て夜半と日没と中との晝夜に増減有り、四大王天の天衆の所住なり。若し空居の者は日月等の宮に住し、若し地居天は妙高の層級に住す、七金山の上に亦天居すること有り、是れ四大王の所部の村邑なり」と。

即ち身量と壽量とは四王天に同じ。三に四大王天とは、『起世經』に云はく、「妙高の半腹の東面に提頭頼吒天王の宮有り、上賢と名く、南面に毘樓博又天王の宮有り、善現と名く、西面に毘樓勒又天王の宮有り、善觀と名く、北面は毘沙門天王なり。彼には三の宮有り。

一には毘舍羅婆と名く、二には伽婆鉢帝と名く、三には阿茶槃多と名く、此諸宮は等し、並に皆縱廣六十由旬なり、七重の欄楯有り七寶の所成なり」と。若し異生等、中の下品

り、七寶の所成なり、樹林地沼有り、衆鳥和鳴す。四大王天の處と及び帝釋等の宮とは、青衣の樂又有り、並に皆此類なり、大力の鬼なり。二に日月星宮を明す。是を亦は遊虚空天と名く、古には遊宮と名く。『智度論』に云はく、「下の下品の十善を修すれば、諸の星宮に生ず、下の中品の十善を修すれば月宮に生ず、下の上品の十善を修するときは日宮に生ず、並に燈明等を施するなり」と。『俱舍論』に云はく、「日月衆星は妙高の半に齊し、風に依りて而も住す。謂はく諸の有情の業の増上力をもて、共して風を引いて起して妙高山を繞りて、空中に日等を旋環し運持して停墜せざらしむ。日は五十一踰繕那、月は五十踰繕那、星は最小なるは唯一俱盧舍、其最大なるは十六踰繕那なり。日輪の下面は頗抵迦寶なり、火珠の所成にして能く熱く能く照す、月輪の下面は頗抵迦寶なり、水珠の所成にして能く冷しく能く照す。唯し一日の日月普く四洲に於て夜半と日没と中との晝夜に増減有り、四大王天の天衆の所住なり。若し空居の者は日月等の宮に住し、若し地居天は妙高の層級に住す、七金山の上に亦天居すること有り、是れ四大王の所部の村邑なり」と。即ち身量と壽量とは四王天に同じ。三に四大王天とは、『起世經』に云はく、「妙高の半腹の東面に提頭頼吒天王の宮有り、上賢と名く、南面に毘樓博又天王の宮有り、善現と名く、西面に毘樓勒又天王の宮有り、善觀と名く、北面は毘沙門天王なり。彼には三の宮有り。一には毘舍羅婆と名く、二には伽婆鉢帝と名く、三には阿茶槃多と名く、此諸宮は等し、並に皆縱廣六十由旬なり、七重の欄楯有り七寶の所成なり」と。若し異生等、中の下品

【富嚴高大なり。】
【無色界】空無邊處等は四心のみに有りて色の影響なし。【欲界の九天云々】以下、別して明すに、初に欲界の諸天。

【八】以下界地章下巻の文を抄録して六欲天の依正二儀を釋す。

【第一の四云々】六欲天の第一、四天王天を釋す。

【俱舍論】第十一世間品の數意の文【蘇迷盧山】蘇由旬といふ、球林第三十里、印度の俗には三十里、摩訶所載は唯十六里といへり。

【傍に圍繞せり】如高山より傍出して四方を圍む。

【八四】八千、四千の意。

【起世經】第一闍浮洲品。

【七重の欄楯】夜叉の所住の層級

の十善を修するときは則ち其中に生ず。『俱舍論』に云はく、「蘇迷盧山の第四層級は海を去ること四十千なり、傍に出づること二千の量なり。四大王天と及び眷屬と共に住止せる所なり」と。又云はく、「中に於て最下の地に依りて居する天は形を交へて姪を成す、人と別なること無し。彼天の中の男女の膝の上に隨ひて、童男童女歎爾に化生すること有り。彼天の初生は五歳の人の如し、生れ已て身形速かに成滿することを得て身の長半里なり、其壽量は人間の五十年を彼一晝夜と爲して壽五百歳なり。華の閉合と諸鳥の鳴靜と天衆の寤寐とに依りて晝夜を建立す」と。彼放逸せざれば當に自上に生ずべし、若し放逸なる者は便ち退墮するが故に。

二に初利天を明す。初利天とは此には三十三天と云ふ、『俱舍論』に云はく、「海を去ること八萬踰繕那なり、三十三天は蘇迷盧の頂に住す、其頂の四面は各各八十千なり。山の頂の四角に各一の峰有り、高廣の量等しくして五百踰繕那なり。藥叉神有り、金剛手と名く、其中に止住して諸天を守護す。山の頂上に於て善見宮有り、面二千五百にして周萬踰繕那なり、金城の量の高さ一踰繕那半なり、其地平坦にして赤金の所成なり、俱に百一の雜寶を用て嚴飾せり、是れ天帝釋の所都の大城なり。中に殊勝殿有り、面二百五十、周千由旬なり。城の外の東北に圓生樹有り、三十三天の欲樂を受くる處なり。外の西南の角に善法堂有り、諸天時に集りて如法不如法の事を詳論す」と。『起世經』に云はく、「帝釋宮の外に三十三天宮有り」と、若し異生等、中の中品の十善を修すれば則ち其中に生ず。『俱舍』

【青衣の樂叉】 智

度論百に、山頂に

見と名く、九百九

十九門の邊に十六

の書衣大方の鬼神

ありて城中を護る

といふ。

【燈明等】 起世經

第十に飲食、騎乘

衣裳、華鬘、瓔珞

塗香、床敷、燈油

を布施すと。今後

一を擧げて餘七を

等取するならん。

【俱舍論】 第十一

世間品取意の文。

【共に風を引て】

姪に毘風風又は毘

鬪婆といふ、此に

猛風といひ、日月

を運轉す。

【日は…那なり】

宮殿の分量。

【俱舍論】 俱舍論

疏寶の記十一には

鳴喚といひ、麟記

には二里なりとい

ふ。

【日輪：照す】 熱

冷照の因を示す。

【顯抵迦】 水精を

に又云はく、「中なかに於ておこな第二の地ちに依りよに居こする天てんは形ぎやうを交まへてへん婬じやうを成なす、人にんと別べつなること

無し。彼天かてんの中なかの男女なんによの膝ひざの上うへに隨したがひて童男どうなん童女どうにょの歎なげ爾にとしてして化生けしやうすること有あり、初生しよしやうは

六歳ろくさいの人の如ごとし、生しやうじをりて速すみかに成なじて身みの長なが一里いちりなり。其その壽量じゆりやうは人間にんげんの一百いっぴやく年ねんを彼かの一

晝夜ちゆうやと爲なす、壽命じゆみやう千歳せんさいなり。華けの閉合へいごふと諸鳥しよちゆうの鳴靜みやうじやうと天象てんしやうの窳寐じゆみとに依よりて晝夜ちゆうやを建立けんりつす」と

と、彼放逸かれはういつせざれば當まさに自じ上じやうに生しやうすべし、若もし放逸はういつなる者ものは便よち退墮たいだするが故ゆゑに。

三さんに夜摩天やまてんとは此こゝに時分じぶんと云いふ。『俱舍論くしやうろん』に依よれば海うみを去さること十六萬じふろくまん踰繕那ゆせんななり。此こゝ

天てんは空くうに依よると寶雲ほううんを地ちと爲なすとなり。若もし異生いしやう等とう、中なかの上品じゆうばんの十善じふぜんを修しゆすれば則すなはち其その中ちゆう

に生しやうす。『俱舍論くしやうろん』に云いはく、「夜摩天やまてん衆しゆは纜わうに抱かかりて婬じやうを成なす、彼天かてんの中なかの男女なんによの膝ひざの上うへに

隨したがひて、童男どうなん童女どうにょ歎なげ爾にとしてして化生けしやうすること有あり、彼天かてんの初生しよしやうは七歳しちさいの人の如ごとし、生しやうじをりて

速すみかに成なじて長なが一里いちり半はんなり」と。彼放逸かれはういつせざれば當まさに自じ上じやうに生しやうすべし、若もし放逸はういつなる者ものは

便よち退墮たいだするが故ゆゑに。

四しに都支多天とししたてんとは此こゝに知足ちそくと云いふ、『俱舍論くしやうろん』に依よらば海うみを去さること三十二萬さんじふにまん踰繕那ゆせんななり

と、寶雲ほううんを地ちと爲なす。下天げてんは放逸はういつなり上天じやうてんは闇鈍あんどんなり、故ゆゑに知足ちそくと云いふ、一生いっしやう補處ふじよの菩薩ぼさつ

は當まさに其中そのちゆうに生しやうすべし。若もし異生いしやう等とう、上かみの下品げばんの十善じふぜんを修しゆすれば則すなはち其中そのちゆうに生しやうす。『俱舍論くしやうろん』

に云いはく、「手てを執しゆりて婬じやうを成なす、彼天かてんの膝ひざの上うへに隨したがひて童男どうなん童女どうにょ化生けしやうすること有あり、初生しよしやうは八

歳さいの人の如ごとし、速すみかに成なじて長なが二里にりなり」と。彼放逸かれはういつせざれば當まさに自じ上じやうに生しやうすべし、若もし

放逸はういつなる者ものは便よち退墮たいだするが故ゆゑに。

秘 密 曼 荼 羅 十 住 心 論 卷 第 三

九 七

(227)

【四大王天云云】

白下は分齊する有情の攝攝分齊を明す

【御身・同じ】

上來は俱舍の取意

今は起世經に由りて三宮の身壽分齊を明す

【起世經】第六卷

四天王品の取意

【提頭額吒天】持國天

【毘樓博叉】維詰と釋す

【俱舍論】第十一の十氣取意の文

【半思】三明なりといふ

【彼放逸・生ず】十善を修行し五欲を制せば、初利天等に生る

【二に初利云云】欲界の第二天を明す

【俱舍論】第十一の十紙以下取意の文

【三に夜摩云云】欲界の第三天を明す

【夜摩とは須炎或は須夜摩といひ

五に化樂天とは「俱舍論」に云はく、「海を去ること六十四萬踰繕那なり、寶雲を地となす。樂うて自化の諸の妙欲の境を受く、彼自化の妙欲の境の中に於て自在に而も轉ず」と。

若し異生等、上の中品の十善を修すれば則ち其中に生ず。樂變化天は唯し相向ひて笑ふ、笑へば即ち姪を成ず、謂はく彼天の膝の上に男女化生すること有り、初生は九歳の人の如し、速かに成じて長二里半なり」と。彼放逸せざれば當に自上に生ずべし、若し放逸なる者は便ち退墮するが故に。

六に他化自在天とは「俱舍論」に依らば「海を去ること一百二十八萬踰繕那なり、寶雲を地と爲す。彼他化の妙欲の境の中に於て自在に而も轉ず、故に他化と曰ふ、欲界の頂なり」と。

若し異生等、上の上品の十善を修する時は則ち其中に生ず、他化自在は相視て姪を成ず、彼天の膝の上に隨ひて男女化生すること有り、初生は十歳の人の如し、速かに成じて長三里なり」と。彼放逸せざれば當に自上に生ずべし、若し放逸なる者は便ち退墮するが故に。

摩波旬天とは「起世經」に云はく、「他化天の上、初禪の下、中に於て魔波旬の宮殿有り」と。身光は上より劣に、下よりも勝れたり、威力自在にして佛と力を拘らぶ、他化に屬して攝す。更に別に聞かず。

第二に色界を明す。色界の四禪の十八天の伽陀、

色界の十八の諸天等には 皆三種の因縁に由りて生ず

梵衆と梵輔と大梵天と 此れは三天を禪初と名く

梵衆と梵輔と大梵天と

此れは三天を禪初と名く

此れは三天を禪初と名く

此れは三天を禪初と名く

此れは三天を禪初と名く

此れは三天を禪初と名く

此れは三天を禪初と名く

此れは三天を禪初と名く

此れは三天を禪初と名く

譯して妙喜といふ、又は炎摩といひ、時分と譯す。【時分】光記に、彼天の中に、時時に多分快樂なる哉と唱ればなりと。寶の記に、五欲の境を受くるに時分を知るが故に名くと。

【寶雲】七寶の密雲。

【四に都文云云】欲界の第四天を明す。都支多是舊に兜率陀、譯して妙

足又は知足といふ。五欲の樂に於て、喜足心を起せば又喜足ともいふ。

【五に化樂云云】欲界の第五天を明す。具には化自樂天といふ、これ自ら五塵を化作して娛樂する故なり。

新譯には樂變化(ゲウヘンゲ)略して樂化天といふ。【樂變化】半なり俱舍の文。【六に他化云云】

【六に他化云云】

寶雲を地と爲す天女無し身みんの長ながは半はんと一いちと一由半いちゆはんとなり

【第二靜慮】少光せうこうと無量むりやうと極光淨ごくこうじやうと

下の有漏うりうは羅苦障らくしやうなりと厭いとひ下中上げちゆうじやうに順じゆんじて三天さんてんに生しやうず

【第三靜慮】少淨せうじやうと無量むりやうと遍淨天へんじやうてんと

下の有漏うりうの羶等じやうとうの三さんを厭いとひ身みんの長ながは十六じふろくと三十二さんじふにと

【第四靜慮】無雲むうんと福生ふくじやうと廣果天くわうくわてんと

善現ぜんげんと善見ぜんけんと色究竟しきくじやうと初はじめの三さんは異生いじやうの厭いとと欣げんとなり

【十八禪支の頌】初はじめと三さんとは各各おのづか五支ごしなり

色界しきがいの天てんの中には晝夜ちゆうや無し壽命じゆみは半劫はんきやくと一いちと一由半いちゆはんとなり

是まの如ごとき三天さんてんを二禪にぜんと爲なす

二にの根本こんぽんは靜妙離じやうめうりなりと欣げんふ身みんは二にと四しと八はちとの踰繕那ゆぜんななり

上かみに生しやうず下げに退たいすること放ほうと不ふとに由よる

是かくの如ごときの三天さんてんを三禪さんぜんと名なく三さんの五支ごしの靜等じやうとうの三さんを欣げんふ六十四ろくじふしとの踰繕那ゆぜんなの量りやうなり

無想むさうと無繁むはんと無熱天むねつてんと此これ是この九天きゅうてんを第四だいしと名なく

下中上げちゆうじやうに住じゆして初はじめの三さんに生しやうず

二にと四しとは各各おのづか四有しやうり

欲界の第六天を明す。此天は餘の劣天子をして種種の樂具を變化せしめて自在に受用す。

【魔波旬天】兼ねて明す。魔は梵に於て殺者、惡者といふ。波旬は正しく波卑夜といひ、譯して惡者、惡愛といふ。これ釋尊時代に出で第六天の魔王を波旬といふ。今は二者を存す。

【起世經】 第一圓淨洲品。

【九】 第二に色界を明す。

【梵衆と】 一半となり。初に初禪を頌す。

【禪初】 恐くは寫倒せしか。

【半と】 半となり。半とは半由旬即ち八里。次の如く梵衆、梵輔、大梵の身長。

【半劫】 半となり。二十中劫、四十中

尋と伺と喜と樂と定と

初の五は初の五支なり

淨と喜と樂と一境と

不苦樂と及び定とは

色界の十八天の海を去る量の伽陀

二百五十六萬と

梵衆と輔天と次の如し

一千二十四萬と

四千九十六萬とは

八千九百九十二は

一萬六千三百

三萬二千七百

無量と遍淨との二天の

六萬五千五百

十三萬千七十

二十六萬二千

廣果天の數量なり

捨と念と知と樂と禪となり

二の五は三の根本なり

捨と念との各清淨と

次の如く二と四との四なり

五百一十二萬とは

大梵は二淨の中に住せり

二千四十八萬と

少と無と極との三天の數なり

此は是れ少淨の海を去るなり

八十四萬由旬と

六十八萬踰繕とは

海を去る數量なり配して知るべし

三十六萬は無雲なり

二萬由延は福生なり

一百四十四萬は

無想天の別の處無し

劫、六十中劫をいふ。
 【下の有漏】初禪の九品の惑の過患の上(上)に生じ下に退す。第三禪に生じ欲の三惡趣に退下するをいふ。
 【五支】捨、念、知、樂、定。
 【無繁・色究竟】五淨居大なり。
 【十八禪支】四禪の定心と相應し俱起する心所、其實體を窮れば唯十一なり。尋、伺(不定地法中の二)喜、樂捨、念、慧、定(大地法中の六)輕安、信、行捨(大善地法中の三)。
 【初と三とは各五支】初禪に尋、伺喜、樂、等持の五三禪に行捨、正念行慧、樂受、等持の五。
 【二と四とは各四支】二禪に内等淨、喜、樂、等持、第四禪に行捨清淨、念、清淨、非苦樂受、

五十二萬四千
 一百四萬八千
 二百九萬七千
 四百一十九萬
 八百三十八萬
 無繁と無熱と善現と
 次の如く海を去る量なりと知るべし
 四欲と三禪との諸天は
 『正理論』の八十に云はく、「色界に生ずる者は三緣有るが故なり。一には因力に由る。謂はく先の時に於て近と及び數修とを起因と爲すが故に。二には業力に由る。謂はく先會上地の生を感ずる順後受業を造れり、彼業の異熟將に起りて現前せんとするに、勢力能く進んで彼定を起さしむ。若し未だ下地の煩惱を離れざれば、必定して上地に生ずべきこと無きを以ての故に。三には法爾力。謂はく器世界將に壞せんとする時、下地の有情法爾に能く上地の靜慮を起す、此位に於ては所有の善法法雨の力に由りて皆増盛なるを以ての故に。諸の色界の中に生ずるに於て靜慮を起すこと有る時には、上の二緣と及び法爾力とに由るなり。若し欲界に生じて上定を起す時には、一一に應に知るべし教力に由ることを加ふ。教力に由るとは謂はく人の三洲なり。天も亦聞くべし、微なるが故に説かず」と俱

二百八十八萬と
 五百七十六萬と
 一百五十二萬と
 四千三百四萬と
 八千六百八萬とは
 善見と究竟との五天の
 初後二二倍數なり
 寶雲の地なり四禪には無し
 一には因力に由る。

【樂】輕安の心所の義名。

【一境】定の善名の如く、四禪と四禪との四支の意。

【少・極】少光、無量光、極光淨の三天。

【初後二二倍數】此句は總結にして初の二禪と後の二禪とは倍數なりといふ意、或はいふ二二は一一の寫誤初の梵衆より後の究竟に至るまで一なるべしとの意。

【二】以下は長行釋、初に總じて釋す。

【三には法爾力】世界壞せん時定を法爾に得、煩惱を法爾にまづ斷ず。

【上定】色無色上二界の定。

【人の三洲】須彌四洲の中、北洲を除く。

【天】欲色二界の

舍の十一に云はく、「色界の天衆は初生の時に於て身量周圍にして妙衣服を具す。一切の天衆は皆聖言を作す、謂はく彼言詞は中印度に同じ」と。又云はく、「色界の天の中には晝夜の別無し、但劫數を以て壽の短長を知る、彼劫壽の短長は身量と數等し。謂はく若し身量半踰繕那なれば壽量も半劫なり、若し彼身量一踰繕那なれば壽量も一劫なり、乃至身量の長萬六千なれば壽量も亦同じく萬六千劫なり」と。

先に靜慮天の名を列ぬ、自下には名に依りて具に釋す。初靜慮に三天有り、梵衆天と梵輔天と大梵天となり。第二靜慮に三天有り、少光天と無量光天と極光淨天となり。第三靜慮に三天有り、少淨天と無量淨天と遍淨天となり。第四靜慮に九天有り、無量天と福生天と廣果天と無想天と無煩天と無熱天と善現天と善見天と色究竟天となり。梵衆天とは「正理論」に云はく、「大梵の所有と所化と所領との故に梵衆と名く」と。「論」に依りて云はば海を去ること二百五十六萬踰繕那なり、寶雲を地と爲す。若し異生等の初の近分に依りて世俗の無間に欲の有漏を厭ふに、麤苦障の三の隨一の行相有り。諸の解脫道に初の根本の五支の靜慮を欣ふに、靜妙離の三の隨一の行相有り。離生喜樂の下品に順住するものは則ち其中に生ず。身の長は半踰繕那、壽量は半劫なり、即ち二十の中劫なり、大の半を劫と爲す。上に生じ下に退くことは準説して知ぬべし。梵輔天とは「正理論」に云はく、梵王の前に於て行列し侍衛するが故に梵輔と名く」と。「論」に準ずるに海を去ること五百一十二萬踰繕那なり、寶雲を地と爲す。若し異生等の初に依りて世道に欲の有漏を厭

諸天。【一切の天衆】二禪以上を除き、六欲天と色の初禪をいふ、二禪以上は言語なし。【俱舍の十二】同論十三紙。【又云はく】俱舍論第十一の十七紙【二】以下、別して釋す、初に第一靜慮。【梵衆天とは云云】先づ第一靜慮中の三天を釋す。【若し異生云云】俱舍論の第二十四と正理論の第六十六に依りていふ。【欲の有漏】欲界の五趣の有漏。【離生喜樂】樂生の三の中の一。初靜慮の三處の生中に此樂を受く。これ欲界の惡を離れて喜樂を生ずればなり。【大の半…爲す】初禪中の壽劫の定は、八十増減大劫の半を以て一

ふに、羅苦障の三の隨一の行相有り、諸の解脫道に初の根本の五支の靜慮を欣ふに、靜妙離の三の隨一の行相有り。離生喜樂の中品に順住するものは即ち其中に生ず。身の長は一踰繕那、壽量は一劫なり、即ち四十の中劫なり、人の半を劫と爲す、上に生ずると下に退くと準説して知んぬべし。大梵王とは、『正理論』に云はく、「廣善の所生なる故に名けて梵と爲す、此れ梵即ち大なり故に大梵と名く」と。彼中間定を獲得するに由るが故に、最初に生ずるが故に、最後に没するが故に、身の長は一踰繕那半、壽量は一劫半なり、即ち六十中劫なり、人の半を劫とす。梵輔天に居するに高臺の圍繞するが如し。大梵と梵輔と壽量居にして別地有るに非ざることは、尊の處座を四衆の圍繞するが如し。大梵と梵輔と壽量と身量と無尋と受と等皆別有るが故に。小乘には唯凡有り大乘には亦聖有るが故に。初靜慮の地は小千界に等し。

【二二…】第二靜慮に三有り、少光天とは、『正理論』に云はく、「白地の天の内に光明最少なるが故に、少光と名く」と。『論』に準ぜば海を去ること一千二十四萬踰繕那なり、寶雲を地と爲す。若し異生等は二の近分に依りて世道の無間に、下の有漏を厭ふに離の三の隨一有り、諸の解脫道に二の根本の四支の靜慮を欣ふに、靜の三の隨一有り、定生喜樂の下品に順住するものは即ち其中に生ず。身の長は二踰繕那、壽量は二劫なり、此より上には大の全を劫と爲す、生上と退下とは準説して知んぬべし。無量光天とは、『正理論』に云はく、「光明殊勝にして量測り難し、故に無量光と名く」と。『論』に準ぜば海を去ること

劫として劫壽を計す。

【上に生じ：知んぬべし】梵輔天に生じ、欲界人天等に退下することは已に説ける六欲の女段に準ぜよ。

【初に依て世道に】初の近分に依て世俗の無間道にの意

【大梵王】珠林五梵輔は臣、大梵を君とするは、初禪のみに有りといふ

【彼中間定：故に】果に約して大の言を釋す。

【餘の處座：如し】佛具等を人中の四衆圍繞するを、梵輔天に驗ふ。

【大梵と：故に】正理論に、上座の宗計に十八天を立つる所以を述する文なり。

【初靜慮：等し】初禪三天の四方の廣量を明す。即ち三千界中の小千界にて、千の四洲と

と二千四十八萬踰繕那なり、寶雲を地と爲す。若し異生等は二の近分に依りて世道の無間に下の有漏を厭ふ、靈の三の隨一有り、諸の解脫道に二の根本の四支の靜慮を欣ふに靜の三の隨一有り、定生喜樂の中品に順住するものは即ち其中に生ず。身の長は四踰繕那、壽量は四劫なり。生上と退下とは準説して知んぬべし。極光淨天とは「正理論」に云はく、「淨光過く自地の處を照すが故に極光淨」と名く」と。「六論」に準ぜば海を去ること四千九十六萬踰繕那なり、寶雲を地と爲す。若し異生等は二の近分に依りて世道に下を厭ふに靈の三の隨一有り、諸の解脫道に二の根本の四支の靜慮を欣ふに、靜の三の隨一有り、定生喜樂の上品に順住するものは即ち其中に生ず。身の長は八踰繕那、壽量は八劫なり、生上と退下とは準説して知んぬべし。第二靜慮は中千界に等し。

第三靜慮に三天有り。少淨天とは「正理論」に云はく、「意地に樂を受くるを説いて名けて淨と爲す、自地の中に於ては此淨最も劣なり。故に少淨と名く。『論』に準ぜば海を去ること八千一百九十二萬踰繕那なり、寶雲を地と爲す。若し異生等は下の有漏を厭ふに、靈苦障の三の隨一有り、三の根本の五支の靜慮を欣ふに、靜妙離の三の隨一の行相有り、離喜樂定の中の下品に順住して、即ち其中に生ず、身の長は十六踰繕那、壽量は十六劫なり。生上と退下とは準説して知んぬべし。無量淨天とは「正理論」に云はく、「此淨轉増して濶り難きが故に無量淨と名く」と。「六論」に準ぜば海を去ること一萬六千三百八十四萬踰繕那なり、寶雲を地と爲す。若し異生等は下の有漏を厭ふに、靈の三の隨一有り、三の

乃至于の六欲天なり。
 【二】次に第二靜慮の三天を明す。【光明最少】口中より放光して説語すること少きをいふ。
 【一の近分】第二靜の近分。
 【一の根本の四支】第二靜の根本の信喜樂定の四支。
 【靜の三の隨一】靜の三を擧げて妙離の二を示す。
 【定生喜樂】第二靜慮の三處中に受くる樂、初禪より第二禪に入れば無比の喜樂を生ずればなり。
 【六の全】八十中劫。
 【極光淨天】光音天ともいふ。
 【淨光遍く名く】口中より放つ清淨の光明、第二靜慮を遍く照すなり。
 【中千界に等し】三千界中の中世界なり。千の小千界

根本の五支の靜慮を欣ぶに靜の三の隨一有り、離喜樂定の中品に順住して即ち其中に生ず、身の長は三十二踰繕那、壽量は三十二劫なり。生上と退下とは準説して知んぬべし。遍淨天とは『正理論』に云はく、「此淨は周普せり、故に遍淨と名く、意更に樂として能く此に過ぎたる無きことを顯すなり」と。『論』に準ぜば海を去ること三萬二千七百六十八萬踰繕那なり、寶雲を地と爲す。若し異生等は下の有漏を厭ひ、三の根本の五支の靜慮を欣ぶ、離喜樂定の上品に順住して即ち其中に生ず、身の長は六十四踰繕那、壽量は六十四劫なり。生上と退下とは準説して知んぬべし。第三靜慮は大千界に等し。
 【四の靜慮に九天有り】無雲天とは『正理論』に云はく、「以下の空中の天の所居の地は雲の密合せるが如し、故に説いて雲と名く、此より上の諸天は更に雲地無し、無雲の首に在り、故に無雲と説く」と。『論』に準ぜば海を去ること六萬五千五百三十六萬踰繕那なり。若し異生等は下を厭ひ上の四支の靜慮を欣ぶ、下品に順住して即ち其中に生ず。身の長は一百二十五踰繕那、壽量は一百二十五劫なり。身壽俱に三を減ずることは異受と究竟に順ずるとの故なり。生上と退下とは準説して知んぬべし。故に自上をば不動と名く。八支患を離るるが故に。福生天とは『正理論』に云はく、「更に異生の勝福なる有りて方に往いて生ずる所なるが故に説いて福生と名く」と。『論』に準ぜば海を去ること十三萬一千七十二萬踰繕那なり。若し異生等は四の近分に依りて下の有漏を厭ふに塵の三の隨一有り、四の根本の四支の靜慮を欣ぶに靜の三の隨一有り、中品に順住して即ち其中に生ず、身の長は

を集めたるもの百
萬の四劫と乃至
百萬の六劫天あり
【二】以下第三靜
慮の三天を明す。
【意地に「愛く」
第六意識に樂を受
く。下三地の如き
喜貪を離るるを淨
といふ。

【三の根本五支】
第三禪の根本の行
捨、正念、正慧、
樂受、定の五。
【樂受、定の五】
【四】以下第四靜
慮の九天を明す。
【上の四支】行捨
と念と捨受と定。

【身壽俱に云々】
今前の遍淨天の身
壽の六十四に倍せ
ずして三輪結那を
減ずる理由を擧ぐ
【異受と「故なり」
俱舍光記に、變異
受より、初て不變
異受を修すること
難きが故に。又色
究竟天の萬六千を
成ぜん爲に三を減
ずと。

【故に百上…故に】
俱舍二十八に云は

二百五十踰繕那、壽は二百五十劫なり。生上と退下とは準説して知んぬべし。廣果天とは「正理論」に云はく、「居在の場所異生の果の中には此れ最も殊勝なり、故に廣果と名く」と。【論】に準せば海を去ること二十六萬二千一百四十四萬踰繕那なり。若し異生等は四の近分に依りて下の有漏を厭ふに、靈の三の隨一なり、四根本の四支靜慮を欣ふに靜の三の隨一なり、上品に順住して即ち其中に生ず、身の長は五百踰繕那、壽量は五百劫なり、生上と證寂と準説して知んぬべし。無想天とは「俱舍論」に云はく、「法有り能く心心所をして滅せしむ」と、想を滅の首と爲せば無想天と名く。謂はく廣果天は高勝の處有り、異生外道は後の靜慮に依り、彼無想は爲眞の解脫なりと執して、出離の想を起して此定を修す、定は是れ善なる故に能く彼天を招く。身量壽量は廣果に同じきが故に、彼より没し已て必ず欲界に生ずるに五趣不定なり。先に定行を修せし勢力盡くるが故に、彼に於て更に定を修すること能はざるが故に、箭をもて空を射るに力盡くれば墮つるが如くなるが故に。無繁天とは「正理論」に云はく、「繁は謂はく繁雜なり、或は謂はく繁廣なり、繁雜無き中に此れ最初なるが故に、繫廣天の中に此れ最劣なるが故なり」と。【論】に準せば海を去ること五十二萬四千二百八十八萬踰繕那なり。樂慧の上流は三緣の爲の故なり、受生と現樂と遮煩惱退となり。必ず先きに第四靜慮を雜修す。是の如く有漏の中間の刹那と前後の刹那の無漏と雜るが故に。下品の三心は無繁に生ずるが故に。無熱天とは「正理論」に云はく、「已に善く雜修靜慮の上中品の障を伏除し、意樂調柔にして諸の熱惱を離るる

く、下三靜慮を有動と名くるは災患有る故なり、今第四靜慮を不動と名くるは無災患の故なりと。
 【八災患】尋、伺四受、入息、出息【勝幅】捨念清淨の因行。
 【下の有漏を厭ふ】無間道の智を起して厭ふ。
 【四の根本：欣ぶ】解脫道智を起して欣ぶ。
 【廣果天】華嚴には福愛天といふ。
 【俱舍論】第五分別根本品の取意。
 【法有り】不相應行異熟果の法ありと。

が故に無熱と名く」と。『論』に準ぜば海を去ること一百四萬八千五百七十六萬踰繕那なり、樂慧の上流は三緣の爲の故なり。彼等の根は最も堪能なるを以ての故に。諸の樂行の中に彼最勝なるが故に。是の如く有漏の中間の利那と前後の利那の無漏と雜するが故に。中品の六心は無熱に生ずるが故に。善現天とは『正理論』に云はく、「已に上品の雜修靜慮を得ぬれば、果位彰れ易きが故に善現と名く」と。『論』に準ぜば海を去ること二百九萬七千一百五十二萬踰繕那なり、樂慧の上流は三緣の爲の故に、受生と現樂と遮煩惱退となり。必ず先づ第四靜慮を雜修す。彼等の根は最も堪能なるを以ての故に。諸の樂行等に彼最勝なるが故に。是の如く有漏と無漏と雜するが故に。上品の九心は善現に生ずるが故に。善見天とは『正理論』に云はく、「雜修の定障の餘品至りて微なるをもて、見ること極めて清徹なる故に善見と名く」と。『論』に準ぜば海を去ること四百一十九萬四千三百四萬踰繕那なり。樂慧の上流は三緣の爲の故に受生と現樂と遮煩惱退となり。必ず先づ第四靜慮を雜修す、彼等の根最も堪能なるを以ての故に。諸の樂行の中に彼最勝なるが故に。是の如く有漏と無漏と雜するが故に。然も上勝品の十二心現前して善見に生ずるが故に。阿伽膩吒天とは、此には色究竟天と云ふ。色究竟天とは『正理論』に云はく、「更に色處として有色の中に於て、能く此に過ぎたること無ければ究竟と名く」と。『論』に準ぜば海を去ること八百三十八萬八千六百六十六萬踰繕那なり、樂慧の上流は三緣の爲の故なり、彼等の根は最も堪能なるを以ての故に。諸の樂行の中に彼最勝なるが故に。是の如く有漏と

も、立世阿毘曇論の云何品の説は一ならず。

【無想定】無想定。

【無繁天】以下の五天を五那含天、又は五淨居天と名

け、第三果の不還の聖者の所居士なり。

【樂慧・樂の故に】

俱舍論二十四の取節の文は略して樂慧の那含、靜慮を雜修する四事の固由を明す。

【樂慧の上流】色

界の五種(中般、生般、有行般、無行般、上流般)の那含の、上流般の隨

一の、上流とは

【上流】上流とは

上行の義。不還の聖者上天に生じて入涅槃するを雜二あり、一に不雜修の樂定那含、二に難修の樂慧の那含といふ樂慧の上流とは第二をいふ

【三緣】次の受生

無漏と雜するが故なり、然も上極品にして十五心を経て究竟に生ずる故に。此は色界頂なり、上には色無きが故に。

【第三無色界】自下は唯異か、無色界天の伽陀

空と識と無所と非非想と

空と識と無との近に依りて無間に

空と識と無とを欣ふに靜等の三有り

非想の異生是の如く念す

上と相違して寂靜妙なり

壽は二と四と六と八萬との劫なり

非非の一處は必ず下に生ず

【正理】の八十に云はく、「色無色に生ずるは總じて二緣有り。一には因力に由る、二には業力に由る、具に引くこと前の如し」と。諸の上二界の中に生在して無色定を起すと有るは、因と業との力に由る、法爾力には非ず。無雲等の天は三災の爲に壞せられざるが故に。若し欲界に生じて無色定を起すには、前の二が上に於て效力に由ることを加ふるに、上に準じて知んぬべし。無色の所居と及び有無の色とは、大小乘等の所説不同なり。

【起世經】に云はく、「阿迦尼の上に更に請天有り、空無邊等と名く」と。又「正理論」に

「經部師の云はく、然るに無色界には心等相續して別の依有ること無しと。上座部の云

是の如きの四處を無色と名く

下の有漏を厭ふに巖等の三有り

四蘊をもて身と爲て其中に生ず

唯非想非非想のみ有りて

此は是れ解脫なるをもて其中に生ず

三處の上と退とは亦逸と不となり

箭をもて空に射るに力盡きて墮つるが如し

此は是れ解脫なるをもて其中に生ず

三處の上と退とは亦逸と不となり

箭をもて空に射るに力盡きて墮つるが如し

此は是れ解脫なるをもて其中に生ず

三處の上と退とは亦逸と不となり

箭をもて空に射るに力盡きて墮つるが如し

此は是れ解脫なるをもて其中に生ず

三處の上と退とは亦逸と不となり

箭をもて空に射るに力盡きて墮つるが如し

此は是れ解脫なるをもて其中に生ず

三處の上と退とは亦逸と不となり

箭をもて空に射るに力盡きて墮つるが如し

乃至遮煩惱退をいふ。
【下品の三心】 五那含生天の別因なり俱舎の須疏に雜修の五品（下、中、上、上勝、上極品）を説く中、初品の三心をいふ。即ち初に一の無漏、次に一の無漏を起す。
【上上品階】 定に下乃至上極の五ありに同じく障にも五あり。逆次に上極際を無繁天乃至下品をば色究竟に配す。今無熱天に於て上上品と云うて上勝と言はざるは、上勝品は上三品の中是れ中品なる故なり。
【彼等の根】 根の字、恐くは持の誤なり、光の記に、等持の堪能と、樂行の最勝なるとの故に、先づ第四靜慮を雜修すといふ故に。
【諸の樂行等】 等

はく、言はく無色界には心と心所と更互に相依して三の蘆束相依して住するが如しと」
『俱舍論』に「一切有の云はく、無色界の中には都て處有ること無し、色法無きに以て方所の差別に四有り、謂はく空無邊等なり。此四は處に由りて上下有るには非ず。但生に由るが故に勝劣殊なること有り。對法の諸師の説かく、「彼心等は衆同分と及與び命根とに依りて相續することを得」と。大衆部の云はく、「然も無色界に細の色身有り」と。『阿含經』に云はく、「舍利弗入涅槃の時に、色無色の天空中にして涙を下すこと春の細雨の如し」、「波闍波提入涅槃の時に色無色の天、佛邊に側立せり」と。然るに大乘の『唯識論』等には、無色界には定果の色有りて業果と通果との色無しと許す。故に『瑜伽』の五十三に云はく、「無色界の中には定境、色有りて能く一切を變ず」と。故に五十四に云はく、「色無色の天は身を萬億に變じて共に毛端に立てり」と。『華嚴經』に云はく、「菩薩の鼻根は無色界の宮殿の香を聞く」と。『仁王經』に云はく、「無色諸天の所散の華は、華は須彌の如く香は車輪の如し」と。諸師の不同具に引くこと上の如し。若し色無しと言はば二界の中なるべし、色有りと許さば何ぞ色の上にあることを妨げん。
 無色界の中の天處に四有り。一には空無邊處天、二には識無邊處天、三には無處有處天、四には非想非非想處天なり。一には空無邊處とは『俱舍論』に云はく、「加行を修する時に無邊空を思うて第四禪を離れて生ずるをもて空無邊處と名く」と。然るに異生等は空處の

【定障の餘】五品の障の餘殘たる下の一品。

【此は色界：故に】色界總結の文。上の四天には色なくして心のみ有るをいふ。

【二五】次に無色界を明す。初に伽陀。

【四蘊】受想行識の上と相違。上來の修觀、即ち前七地と及び二無心地の其とは相違する意。

【二六】二に長行釋なり。正理論八十の十五紙取意の文。

【因力】等流因。業力。順後業。

【若し欲界に生じて】欲界の中の人三洲なり、六欲天と北洲の人を除く。

【有無の色】有情の依身。

【起世經】第一闕

淨洲品。

近分に依りて、諸の無間道に下の有漏を厭ふに、蘊の三の隨一有り、諸の解脱道に空の根本を欣ふに、靜の三の隨一有りて即ち其中に生ず。四蘊をもて身を成じ、命根と衆同分とに依るなり、壽命は二萬劫なり、生上と退下とは準説して知んぬべし。二に識無邊處とは『俱舍論』に云はく、「加行を修する時に無邊の識を思うて、空無邊處を離れて生ずるをもて識無邊處と名く」と。然るに異生等、識處の近分に依りて諸の無間道に下の有漏を厭ふに、蘊の三の隨一有り、諸の解脱道に識の根本を欣ふに、靜の三の隨一有りて即ち其中に生ず。四蘊をもて身を成じ命根と衆同分とに依るなり、壽命は四萬劫なり、生上と退下とは準説して知んぬべし。三に無所有處とは『俱舍論』に云はく、「加行を修する時に無所有を思うて、識無邊處を離れて生ずるをもて無所有處と名く」と。然るに異生等は、無所有處の近分に依りて、諸の無間道に下の有漏を厭ふに、蘊の三の隨一有り、諸の解脱道に無所有の根本を欣ふに、靜の三の隨一有りて即ち其中に生ず。四蘊をもて身を成じ命根と衆同分とに依るなり、壽命は六萬劫なり、生上と退下とは準説して知んぬべし。四に非想非非想とは、『俱舍論』に云はく、「想の味劣なるに由るなり、謂はく明勝の想無ければ非想の名を得。味劣の想有るが故に非非想と名く」と。然るに異生等、非想非非想處の近分に依りて加行を修する時に、是の如きの念を作す、諸想は病の如く箭の如し雍の如し、若し想全く無くば、便ち癡闇に同じ、唯非想非非想の中にのみ上と相違せる寂靜美妙なること有り」と。解脱道滿して即ち其中に生じ、四蘊身を成ず、壽は八萬劫なり、

【正理論】第二十
一の十紙以下の取
意。

【上座部】二十部
中の部に非ず、經
部中の室利邏多な
り。

【心と心所】依し
て、有部所立の、
心の外に別に同分
等を以て依とする
に簡ぶ。

【三の蘊】正理、
俱舍、唯識等の論
は二に作る。

【俱舍論】第八世
間品。

【一切有】説一切
有部。

【莫熱生云云】業
報所感の有情の心
心所法。

【阿含經】增一阿
含經第十八、第四
十九の取意の文。

【波闍波提】摩訶
波闍波提のこと、
又は大愛道、大生
主といふ、釋迦を
養育せし伯母。

【唯識論等】第二
卷、及び顯揚論第
【業果の色】欲色

此を有頂と爲く、後には下に生ずるが故に。

これは天乘に二種の義有り。一には淺略、二には深祕なり。初の淺略は前の説の如し、

深祕とは後の眞言門是なり、謂ゆる嬰童無畏住心とは是れ謂ゆる天乘なり、若し只淺略の

義のみを解すれば、則ち生死に沈淪して解脱を得ず、若し眞言の實義を解するときは、則

ち若は天、若は人、若は鬼畜等の法門は皆是れ祕密佛乘なり。故に文に云はく、「我則ち天

龍鬼等」と云言はく我とは則ち大日如來なり。「大日經」に諸の天人鬼等の眞言有り、其

數無量なり、是の如きの眞言は五字を本と爲す、彼五字の眞言に曰はく、

耽舍半含閻

初の字は如如なり、上に空點有り即ち如如不可得なり大空に同ず、具に説くこと別の如

し。又諸の世天等の普明の心眞言有り。

噓迦噓迦迦囉也、薩嚩提婆那迦夜乞叉、健闍躡、阿修羅揭露荼緊那羅、摩呼羅伽、徧、

訶唵駱夜、那也迦沙也、費只多囉揭帝、莎訶。

若し廣説せば三界の中の二十八種の天に各々に眞言有り、若し略して攝せば皆此一の眞

言に攝す、外金剛部其數無量なりと雖も、而も五類と八部とに攝し盡す。噓迦噓迦とは、

世間なり、即ち是れ暗冥の義なり、謂ゆる無明なり、此字に俱に皆阿の聲有り、即ち本無

の義なり、無暗は即ち是れ眞實の明なり。阿噓迦は是れ明なり、迦囉は作なり、謂ゆる是

れ照の義なり、明を作すなり、明相を作して此八部等の普現の身を現するに以て、彼閻を

【二界の四大極微新造の共業所感の器界と別業の色身。】

【通果の色】 色界天子、四無慮に依て變現する色をいふ。

【二界】 欲色界の原上。【色の上】 色界の原上。

【七】 上來總釋し寛り次に別釋するなり。

【俱舍論】 第二十八分別定品等の取意。

【然るに…生ず】 俱舍論第二十四の取意。

【近分】 色究竟と空無邊處の中間の近分の意。

【四義】 五蘊の中色蘊を除く。

【諸想】 四禪並に下二無色。

【後に…故に】 八萬劫を経て欲界に生ず。

【八】 上來は廣く淺略を明し、以下略して深秘を辨ず。

除いて明行を作さしめ、世間をして明ならしむ。薩縛とは、一切なり、提婆とは、天なり、那迦とは、龍なり、夜乞叉、健闍驪、阿修羅、揭露荼、緊那羅、摩呼羅伽並に八部の名なり、備とは、等なり、諸部を攝す、訶囉駄夜とは、心なり、那也迦沙也とは、攝なり、此八部等の心を攝して明を作さしむるなり、貴只多囉揭帝とは、種種の行なり、亦是れ巧色の義なり、類に隨ひて一切の可愛樂の身を示現するを巧色と名く、亦是れ雜色の義なり、種種の行と種種の雜色との法門を以て世間の暗を除くことを爲す、即ち是れ諸明の中の無比の義なり、顯句義は是の如し。若し深秘の釋ならば一一の字に皆字門の義を以て釋す。且つ初のこの一字を體と爲す、即ち是れ一切諸法相の義を字相と爲す、字義とは一切の諸法相不可得の義なり。言はく一切世間の緣起の法は種種の色、種種の形、種種の相を具す。若し阿字門に入らば悉く一切の相を離る、離相の相は相として具せずといふこと無し。是れ則ち法身の普現色身にして各々に四種曼荼羅を具す。若し衆生有りて能く此義を解せば、則ち世間の眞言と大日の眞言と無二無別なり。若し深秘を解せざれば則ち途に觸れて縛を爲し、生死を出でて解脫を證することを得ず、一一の字門も是の如く釋すべし。所有の人天外道等の無量の法教は皆悉く一のこの眞言に攝し盡す、此一字を誦すれば即ち一切の人天の法門を持するに爲る。若し深秘の義を解せば此門より則ち法界身を證す。故に經に云はく、世尊一切智智を得て、無量の衆生の爲に廣演分布し、種種の趣、種種の性欲に隨ひて種種の方便道をもて一切智智を宣説したまふ。或は聲聞乘道、或は緣覺乘道、

【二十八種の天】六欲、十八禪、四空。

【外金剛部】曼荼羅のそれをいふ。

【五類】上界天、虛空天、地居天、遊虚空天、地下天、此八部。

【波闍】實類の六道世間。

【顯句義】當論に深祕の智中、眞言を解するに、更に顯句と深祕の兩釋を爲す。即ち顯句義とは梵字を翻じて漢語となし、所詮の義を明にし、世天の門別徳に就て釋するをいひ、深祕とは直ちに梵字に就て一門即普門の釋をなすをいふ。

【六門の義】字相字義の二門。

【一切世間緣起の法】三種世間の因緣生起の諸法。

或は大乗道、或は五通智道、或は願うて天に生じ、或は人中及び龍、夜叉、乾闥婆に生じ、乃至摩睺羅伽に生ずる法を説く、各各に彼言音に同じ、種種の威儀に住す、而も此一切智の道は一味なり、謂ゆる如來の解脱味なり」と。又云はく、「又執金剛普賢蓮華手菩薩等の像貌を現じて、普く十方に於て眞言道句の法を宣説したまふ、謂ゆる初發心より乃し十地に至るまで次第に此生に満足す」と。等と言ふは八部天鬼等の外金剛部なり。又大毘盧舍那如來、諸佛菩薩天龍鬼等の眞言の印を説き訖りて、即ち祕密主に告げて言はく、「是の如く上首の諸の如來の印は、如來の信解より生ず、即ち菩薩の轉輪に同ず、其數無量なり、乃至身分の舉動住止は應に知るべし皆是れ密印なり、舌根所轉の衆多の言説は應に知るべし皆是れ眞言なり」と。

ひみつてんだらふちうしんろんまじのだいさん
祕密曼荼羅十住心論卷第三

秘密曼荼羅十住心論 卷第四

唯蘊無我住心第四

【以上三卷は世間一箇の心を明し、自下は更に出世の七種住心を述す。若し是を大小三車を以て分たば、此は小乗にして羊車に屬し、二乗にては聲聞なり。唯蘊無我とは人空法有の意。】
 【初に、淺略釋し、初に略して綱要を明すに五、初に大意。】
 【尺蠖云云】此二論は智度論第十八第六十六に出て、外道の生上退下に比類す。
 【出欲の術】外道は六行觀を修し、三界の修惑を斷ず、今は欲愛住地に約して出欲といふなり。
 【斷縛の觀】縛とは貪瞋癡の三縛、縛とは無漏四諦の觀智。
 【大覺】涅槃甚深の義を覺知する意釋迦をいふ。

初に大意とは夫れ尺蠖は申びて還りて屈し、車輪は仰ぎて亦低る。非想の八萬は上空を射すれども下に墮つ、外道の三昧は有を盡さんと欲すれども還りて没す。出欲の術を願ふと雖も未だ斷縛の劍を得ず、人我の空を解らずして何んが法空の理を覺らん、是故に生死に流轉して涅槃を得ず、大覺其是の如くなるを慙みて解脱の道を説きたまへり。生空を唯蘊に遮し、我倒を幻炎に譬ふ。二百五十の戒は身口の非を防ぎ、三十七の菩提は身心の善を起す。時を告ぐれば則ち三生六十、果を示せば則ち四向四果なり。識を説くには唯六種、法を攝するには則ち五位なり。四諦四念に其觀を瑩き、六通八解に其證を得。生死を厭怖して身智を灰滅し、湛寂を欣仰して虚空に等同なり。是れ則ち聲聞自利の行果羊車出欲の方便なり、大體此の如し。

二に攝教とは、大日尊、秘密主に告げて言はく、「世間の三妄執を越えて出世間の心生ず、謂はく是の如く唯蘊無我を解了す」と。釋して云はく、諸の外道等は我我所有りと計す、是の如きの妄執に因りて生死を出でず、非想非非想處に生ずと雖も、還りて復墮落す。

【生空を：虚空に等同】此文は所化の聲聞の修證の法門を明す。
 【我例を：譬ふ】雜阿含十に色受想諸行諸識を聚沫、水泡、炎、芭蕉、幻に喩ふ。今は二を擧げて他の三を顯す。
 【生死を：厭怖；等同なり】菩提心論に灰身滅智を以て涅槃に趣くこと太虚空の如し湛然常寂なりといふに依る。
 【羊車】法華譬喩品。聲聞に喩ふ。
 【二】二に攝教を明す。此に能所攝の差あり能攝とは唯蘊無我の一句、所攝は諸部の小乘所明の三藏の教法なり。
 【人空法有の理】人空とは今いふ無我、法有とは唯蘊の義。
 【二】三には三昧を明す。

故に佛、聲聞を求むる者の爲に、人空法有の理を説きたまへり。謂ゆる人とは、則ち人我等なり、法とは則ち五蘊等の法なり。此唯蘊無我の一句の中に、一切の小乘の法を攝し盡す。故に今、聲聞乘を唯蘊無我住心と名くるなり。

三に三昧を明さば、『大日經』に云はく、「復次に祕密主、聲聞衆は有緣地に住して生滅を識り、二邊を除きて極觀察智をもて不隨順修行の因を得、是を聲聞の三昧道と名く」とは、阿毘曇に明すが如きの九想、八念、背捨、勝處、一切入、三三昧等を皆住有緣地と名く。此等の三昧に依りて方便を爲すが故に、其心をして恬然として靜ならしむ。正觀察を得て、世間出世間の法は皆悉く因有り緣有り、世間は集を以て因と爲し、苦を以て果と爲す、出世間は道を以て因と爲し滅を以て果と爲すと覺りぬ。『毘尼』の中に要を擧げて之を言ふ、謂ゆる諸法は緣より起る、如來是因を説きたまふ。彼法は因緣を以て盡す、是大沙門の説なりと言へり。因緣生滅を知るを以ての故に、有無の見を滅し斷常の二邊を遠離す、眞諦の智生ずることを得るが故に極觀察智と名く、能く極めて觀察するを以ての故に倒せず謬せず、故に名けて諦と爲すなり。無明より老死に至るまで此れ有なるが故に彼有なり、是生ずるが故に彼生ず、乃至輪廻無際なり。若し此に隨ひて輪轉する、之を名けて順と爲す。既に四眞諦を見已りて、生死の流に研きて聖道を隨行す、乃至能く自ら我生已に盡くせり、梵行已に立せり、所作已に辨ぜり、後行を受けじと記説す、是を不隨順と名く。是の如きの種種の不隨順の行は、要らず三昧を因と爲すが故に不隨順修行の因を得

【四】因に聲聞乘の名を釋す。

【華嚴經】唐經第三十五取意。

【五】地位を辨ず大乘同性經。

【十地】前五は凡位、後五は聖地。

【法華論の聲聞云】此より下、廣く法義を釋ぶる前までは、界地草上の具文を抄出せり。

【俱舍論】實聖品の見修の惑。見惑の八十八使、修惑の八十一品。

【五停心經云云】以下廣く見道前の七方便を明す。

【論に云はく】俱舍論二十二の十四紙の取意。

【承奉食】俱舍には供奉食に作る。

【多尋伺・持す】持息念を散す。多尋伺とは散亂心の衆生尋求伺察して種種に計度分別するなり。

と曰ふ。聲聞の三昧は復諸部の異說種種不同なりと雖も、但し是の如きの法印に合ふ者れば即ち正行と名く、若し是の如きの印無き者は是を邪行と名くるなり。

四に名を釋せば『華嚴經』に云はく、「上品の十善をもて自利の行を修す、智慧狭劣なるを以て三界を怖れ大悲を闕きたり、他に從ひて聲を聞いて解了することを得。故に聲聞と名く」と。

五に地位とは、『大乘同性經』に云はく「聲聞に十地有り。一には受三歸地、二には信地、三には信法地、四には内凡夫地、五には學信戒地、六には八人地、七には須陀洹地、八には斯陀含地、九には阿那含地、十には阿羅漢地なり、是を十種の聲聞の地と名く」と。

『瑜伽論』の聲聞地と『俱舍論』とは廣略を異と爲す、速は即ち三生、遲は六十劫に於て、前の七方便は淺より深に至るなり。見修の惑を斷するに、四沙門の果を立つるなり。五停心と四念處と四聖諦となり、七支の別解脱戒は是れ其學處なり。五停心觀とは多食の衆生は不淨觀を修し、乃至多尋伺の衆生は持息觀を修す。初の不淨觀に二有り、一には別、二には通なり。別して四食を治すとは『論』に云はく、「不淨觀を修することは、正しくは

貪を治せんが爲なり、然るに食の差別に略して四種有り。一には顯色食を治するには青瘀等を緣じて不淨觀を修す。二には形色・食を治するには食せらるる等を緣じて不淨觀を修す。三には妙觸食を治するには蟲蛆等を緣じて不淨觀を修す。四には承奉食を治するには屍不動を緣じて不淨觀を修す。通じて四食を治すとは、若し骨鎖を緣じて不淨觀を修すれば、

貪を治せんが爲なり、然るに食の差別に略して四種有り。一には顯色食を治するには青瘀等を緣じて不淨觀を修す。二には形色・食を治するには食せらるる等を緣じて不淨觀を修す。三には妙觸食を治するには蟲蛆等を緣じて不淨觀を修す。四には承奉食を治するには屍不動を緣じて不淨觀を修す。通じて四食を治すとは、若し骨鎖を緣じて不淨觀を修すれば、

【阿那阿波那】 遣
來遣去といふ。

【別相：性なり】
二に別相念住を明
す。以下皆俱舍の
賢聖品の取意。

【勝止】 定をい
ふ。觀をもて。此
に修する毘鉢舍那
の觀、即ち慧なり

【自と共との相】
自相とは身受心
各の性をいひ、共
相とは一切諸法共
有する相、即ち一
切の有爲は皆非常
の相一切の有漏は
皆苦の性、一切法
は空非我の性な
をいふ。

【總相念：修す】
三に總相念住を明
す。

【彼觀行者】 別相
中の觀熟の人。

【緣總：修するな
り】 別相念住の中
に於て觀の熟不
約して緣緣不雜緣
の二類を論ず。

【煖善：出なり】
自下は四善根の相
を明す。

通じて能く是の如きの四食を對治するなり。多諍伺を治するに息念と言ふは、阿那阿波那
なり。謂はく息入を持し謂はく息出を持するなり。別相念住とは已に修して勝止を成滿す
るに依りて、觀をもてするに四念住を修するなり。如何が四念住を修習するや。身念住を
觀するに自と共との相を以てす。謂はく身は皆不淨の性なりと觀するなり。受念住を觀す
るに自と共との相を以てす。一切有漏は皆是れ苦の性なり。心念住を觀するに自と共との
相を以てす。一切の有爲は皆無常の性なり。法念住を觀するに自と共との相を以てす、及
び一切の法は空無我の性なり。總相念住とは、彼觀行者、總じて所緣の身等の四境を觀
じて、四行相を修するなり。緣總雜法念住の中に居して身受心法を觀するに、總じて無常
觀を修し、緣總雜法念住の中に居して身受心法を觀するに、總じて苦觀を修し、緣總雜法
念住の中に居して身受心法を觀するに、總じて空觀を修し、緣總雜法念住の中に居して身
受心法を觀するに、總じて無我觀を修するなり。煖善根とは分位長きが故に能く具に四聖
諦の境を觀察し、及び能く具に十六行相を修す。苦聖諦を觀するに四行相を修す。一には
無常、二には苦、三には空、四には無我なり。集聖諦を觀するに四行相を修す。一には因、
二には集、三には生、四には緣なり。滅聖諦を觀するに四行相を修す。一には滅、二には
靜、三には妙、四には離なり。道聖諦を觀するに四行相を修す。一には道、二には如、三
には行、四には出なり。頂善根とは山の頂の如くなるが故なり。此も亦煖の如くなれど
も、此は轉勝するが故に更に頂の名を立つるなり。忍善根とは四諦の理に於て此れ最勝

【同類：生ず】六因中の同類因を離れて初無漏見道を引生ず。

【四沙門云云】此下、諸の無漏以下は俱舍論二十四の十六右の具文。

【諸の無漏道】八十九の無間斷脫擇滅無爲。

【能く勤：故に】能く勤修功勞して見思の煩惱を止息す。

【須陀洹云云】以下四向四果を明す俱舍論二十三、第二十四の意を以て説く。詳くは下に至りて知るべし。

【欲界の苦：名く】見道十六心の中、初十五心を見道、第十六心道預智已下阿羅漢向までを修道といふ。

【六】以上略して綱要を明せしを以て、自下廣く法義を述ぶるなり。

なるが故に、退墮すること無きが故なり。然も此忍法に下中上有り、下品の忍とは、謂はく具に四聖諦の境を觀察し、十六行を修して具に三界を縁するなり。中品の忍とは、欲色、無色の聖諦、行相を漸く滅じ漸く略して乃し二念と欲の苦諦との境に至るなり。上品の忍とは、中の無間より勝れたる善根を起して、一行一刹那なるを上品の忍と名く。世第一法とは、上品の忍の如く、欲の苦の一行唯一刹那なり。同類因を離れて聖道を引いて生ず、故に最勝と名くるなり。

四沙門の法とは、諸の無漏道は是れ沙門の性なり、此道を懐く者を名けて沙門といふ、能く勤勞して煩惱を息むるを以ての故に。須陀洹とは、謂はく欲界の苦聖諦の境を縁じて無漏攝の法智忍生ずること有り、乃至道預智を預流果と名くるなり。斯陀含とは謂はく欲の修惑を一を斷じてより六に至る、一たび天上に往き、一たび人間に來りて般涅槃するを一來果と名くるなり。阿那含とは欲の九品を斷ず、此類に七つ有り、色に行くに五つ有り、無色に行くに四有り、必ず還來せざれば不還果と名くるなり。阿羅漢とは謂はく初定の一品より初と爲して、有頂の第九を斷ずる無間金剛喻定に至る、盡智生ずるに至りて阿羅漢と成りて受生せざるが故に。

聲聞藏の法門と並に修證の位次とに略して八門有り。第一に二十部の異執を明し、第二には所立の法門を明し、第三には進修の位を明し、第四には斷惑の依地を明し、第五には所斷の惑を明し、第六には斷惑得果を明し、第七には定不定性を明し、第八には理に大小

【七】第一に二十部の異執を明す。【體毘履】此に譯して着宿といふ、上座部のこと。

【出世は非倒の法】出世間無漏法は顛倒ならざる法なりと。

【八】此下、第二に論頌を録し、大師自ら頌を作りて七十五法の名を釋す。

無きことを明す。

第一に二十部の異執を明すとは『宗輪論』等に依るに自ら二十部有り。『文殊問經』の頌に曰はく、

摩訶僧祇部に

體毘履に十一有り

十八と及び本の二とは

是も無く亦非も無し

具に釋すること餘の如し、然も此二十部を攝して六宗と爲す。一には我法俱有宗。此宗

の所計は、我と法との二種皆有りと密林山と經量と法上部となり。二には有法無我宗。此宗

の所執は、法は則ち實有なり、我は則ち爲れ無なりと聞と雪山と飲光部となり。三に法無去

來宗。此宗の所執は、現法は是れ有なり去來は爲れ無なりと山と西山と北山と化地と法藏部

となし。四には現通假實宗。此宗の計すらく、世出世の法は皆假名及び眞實に通ずといふに

一部あり、即ち五には俗妄眞實宗。世法は顛倒にして但假名のみ有り、出世は非倒の法な

説假部なり。此に一部あり、即六には諸法但名宗。此宗の所計は、若は世間の法、若

れば是れ眞實なり。此に一部あり、即七には諸法眞實宗。此宗の所計は、若は世間の法、若

は出世の法、但假名のみ有りて而も實體無しといふ。此に一部あり、即八には諸法眞實宗。此宗の所計は、若は世間の法、若

は出世の法、但假名のみ有りて而も實體無しといふ。此に一部あり、即九には諸法眞實宗。此宗の所計は、若は世間の法、若

は出世の法、但假名のみ有りて而も實體無しといふ。此に一部あり、即十には諸法眞實宗。此宗の所計は、若は世間の法、若

は出世の法、但假名のみ有りて而も實體無しといふ。此に一部あり、即十一には諸法眞實宗。此宗の所計は、若は世間の法、若

第二に所立の法門を明すとすは『俱舍』等の論に準ずるに、七十五法有りて一切法を攝し盡す、總じて此法を束ねて以て五位と爲す、頌を作りて曰はく、

【一切法】 有無爲等。

【彼識が依の淨色】 五識の所依たる五根、體清淨なる故に。

【色に二】 顯色、形色の二。

【或は二十】 顯色の十二青黃赤白、影光明闇雲煙塵霧形色の八、長短方圓高下正不正。

【聲に唯八】 有執受の大種を因とする有情名の可意聲不可意聲。同じく非有情名の可意聲不可意聲。無執受の大種を因とする有情名の可意聲、不可意聲。同じく非有情名の可意聲不可意聲。

【觸に十一】 地水火風輕重滑澁、飢渴冷。

【心王に一云云】 以下心王、心所有法を明す。今心王に一とは六識を合して一と爲す。

色に十一、心に一有り

不相應に十四有り

色に十一とは五根と五境と無表色となり。

彼識が依の淨色を

五境とは『俱舍』の頌に曰はく、

色に二或は二十有り

味に六有り香に四種有り

無表色とは不可見無體色なり。心王に一とは『俱舍』の第四に云はく、集起を心と名け、思量を意と名け、了別を識と名く」と。王とは三業を集起するに自在を得るが故に。心所に四十六とは此に六位有り。一に大地法に十有り、『俱舍』の頌に曰はく、

受と想と思と觸と欲と

勝解と三摩地となり

二に大善地法に十有り、『俱舍』の頌に曰はく、

信し及び不放逸と

二根と及び不害と

三に大煩惱地法に六有り、頌に曰はく、

癡と放逸と懈怠と

心所に四十六有り

無爲の法に三種有り

五根とは『俱舍』の頌に曰はく、

眼等の五根と名く

聲に唯八種有り

觸は十一を性と爲す

慧と念と作意と

一切の心に遍ぜり

輕安と捨と慍と愧と

勤となり唯し善心に遍ぜり

不信と憍沈と掉となり

不信心と憍沈と掉となり

不信心と憍沈と掉となり

不信心と憍沈と掉となり

不信心と憍沈と掉となり

不信心と憍沈と掉となり

不信心と憍沈と掉となり

【勝解】對境に向ひて、此事は此の如し、又は是の如く非ずと殊勝の解を起すをいふ。

【不相應】今十四を立つ、是れ非色非心の實法なりといふ。

【同分】有情の身相業用は展轉して相似するを同といひ、分とは因の義にて、實の法體ありて彼同が爲に因となる、同が分即ち依主釋なり。

【虚空・二滅】虚空無爲、擇滅非擇滅無爲。

【九】第三に進んで見道に趣く功用の行を修する七方便の位を明す、初に順解脱分位。

【總じて五位】五釋を列するも、作釋には初二のみ有り、後三位は聲聞の五位の廢立を示さんとして擧ぐるのみ。

四に大不善地法に二有り、頌に曰はく、

無慚と及び無愧とは

五に小煩惱地法に十有り、頌に曰はく、

忿と覆と慳と嫉と憍と

六に不定地法に八有り、頌に曰はく、

尋と伺と及び悔と眠と

不相應の十四とは頌に曰はく、

得と非得と同分と

命根と四相と

無爲法の三種とは頌に曰はく、

虚空と及び二滅となり

此七十五法を三科の門に攝し盡す、三科と言ふは『俱舍』の頌に曰はく、

聚と生門と種族とは

【九】第三に進修の位を明すとは、總じて五位有り。一には順解脱分位と名く。二には順決擇分位と名く。三には見道位、四には修道位、五には無學位なり。初に順解脱分とは解脱は即ち涅槃なり、體諸縛を離るるが故なり、此位彼に順ず、故に是名を得。如何が解脱分の善を種殖するや。謂はく諸の有情、人中に生在して或は一食を施し或は一戒を持ち

唯し不善心に遍ぜり

害と恨と諍と誑と憍となり

貪と瞋と慢と疑となり

無想の二と滅定と

及び名と句と文との身なり

【正理】第五十九の初取意の文。

【三生に解脱分】解脱とは阿羅漢果なり。分の字俱舍の本文になし。

【二〇】自下順決擇分を明す、決擇とは四諦の理を見る勝慧に名け、分とは部分の義。

【修持】修治の誤か。

て、深く解脱を樂ひて願力に持せらるるを、便ち解脱分の善を種殖すと名くるなり。『正理』に云はく、「初修行の者は、當に解脱に於て深き意樂を具し、涅槃の徳を觀じて生死の過に背くべし、先づ善友に近づくを樂行の本と爲す」といへり。『俱舍』の二十三に云はく、「諸有ゆる創て順解脱分を殖うるものは、極速は三生に方に解脱分を得。謂はく、初生には順解脱分を起し、第二生には順決擇分を起し、第三生に於て便ち入聖し乃至解脱を得。譬へば種を下すと苗成すると實を結ぶとの三位不同なるが如し。身法性に入ると成就と解脱との三位も亦爾なり」と。此に三生と言ふは、極速の者に據りて説くなり、若し極速の者は即ち六十劫なり、遅に非ず速に非ざる中間は知んぬべし。

二には順決擇分を明さん。中に於て二を分つ、初には進修の加行を明し二には正しく順決擇分を明す。初の加行に三有り。一には清淨の戒に住して三慧を修習し、二には身器を修持し、三には入修の要門なり。『俱舍』二十二に云はく、諸有る發心して將に見諦に趣かんとするは、先づ清淨の尸羅に安住して、然して後に聞所成等を勤修すべしと思修との所成とを。世觀此三慧の相を釋して言はく、「謂はく修行者は至教を聞くに依りて生ずる所の勝慧を聞所成と名く、正理を思ふに依りて生ずる所の勝慧を思所成と名く、等持を修するに依りて生ずる所の勝慧を修所成と名くるなり」と。二に身器を修持すとは『論』に云はく、身器の清淨なるは略して三因に由る、何等をか三と爲す。一には身心の遠離、二には喜足小欲、三には住四聖種なり。身の遠離とは相雜修することを離る、心の遠離と

【五停心云云】 自下隨釋する中七あり、初に第一方便を明す。
【緣起觀】 十二緣起觀。

は不善の尋を離るるなり。一には喜足小欲とは、喜足と言ふは不善無きなり、小欲と言ふは謂はく大欲無し、無貪の善根を以て性と爲す。三に四聖種に住すと、一には衣服に於て喜足するは聖種なり、二には飲食に於て喜足するは聖種なり、三には臥具に於て喜足するは聖種なり、四には有と無有とに於て煩惱を斷ぜんと樂ひ聖道を修せんと樂ふなり、皆無貪喜足を以て體と爲す」と。『論』に云はく、「何の義を顯さんが爲に四聖種を立つるや。解脫を求めて佛に歸して出家せんが爲なり」云。

三に入修の要門とは、見道前に七方便有り、此七方便は聖諦に遊踐して、能く生死を超え涅槃の果を證す。一には五停心觀、二には別想念處、三には總相念處、四には煖、五には頂、六には忍、七には世第一法なり。五停心觀とは、一には多貪の者は不淨觀を修し、二には多瞋の者は慈悲觀を修し、三には多癡の者は緣起觀を修し、四には多著我の者は界分別觀を修し、五には多尋伺の者は數息觀を修す。此五種を以て其心を停息すれば五停心と名く。此五つ有りと雖も、入修の要は唯二門有り。一には不淨觀、二には持息念なり。故に『俱舍』の頌に曰はく、

入修の要は二門なり

不淨觀と息念となり

貪と尋と増上なる者

次第の如く修すべし云

『婆沙』に云はく、「不淨觀と持息念とを佛法の中に於て涅槃甘露の門と爲す」と云。此不淨觀は體是れ無貪なり、不淨の境を緣じて貪心を對治す、境に従へて名と爲して不淨觀

【顯形】 顯色、形

【自世】 三世各各の自世の法。

【既に有漏】 不淨觀は假想と相應するを以て有漏なりと。

【離染…有り】 曾得の離染得と、未曾得の加行得と有りといふ。

【若し増…淨なり】 一に持息念を明す。

【俱舍】 二十三の一左。

【俱有と相應の法】 俱有の四相と心王及び大地法大善地法等に通じていふ

と名く。此觀は能く四種の境の食を治す。謂はく青瘀を緣じて不淨觀を修するは顯色食を治す、食せらるる等を緣じて不淨觀を修するは形色食を治す、蟲蛆等を緣じて不淨觀を修するは妙觸食を治す、屍不動を緣じて不淨觀を修するは供奉食を治す、若し骨殖を緣じて不淨觀を修するは、通じて能く是の如きの四食を對治するなり。所依の地とは通じて十地に依らば、謂はく四靜慮と四近分と中間と欲界となり。其所緣とは唯欲界の所見の顯形を緣す、此に由るが故に知んぬ、是れ人趣の中の三洲なり北を除く。若し是れ生法は能く自世を緣じ、若し不生の法は通じて三世を緣するなり。既に勝解の作意と相應すれば唯是れ有漏なり。離染得と及び加行得と有り。若し尋増の者は持息念を修す。『論』に云はく、「持息念と言ふは、即ち契經の中に説く所の阿那阿波那念なり。阿那と言ふは謂はく息入を持するなり、是れ外風を引いて身に入らしむるの義なり。阿波那とは謂はく息出を持するなり、是れ内風を引いて身を出さしむるの義なり。此觀は慧を以て體性と爲す。持息念と言ふことは、慧、念力に由りて此を觀じて境と爲すが故に名と爲すなり。此相圓滿するに總じて六位有り。一には數、二には隨、三には止、四には觀、五には轉、六には淨なり、廣くは『婆沙』等の説の如し。

別相念處觀とは、七方便の中の第二の方便なり。此別相念住の體に三種有り。一には自性念住。聞思修の三慧を以て性と爲す、故に『俱舍』に云はく、「自性念住は慧を以て體と爲す、此に三種有り謂はく聞等の所成なり」と。二には相雜念住。慧と所餘の俱有と相應

【自相共相云云】
以下は所觀の境相を辨ず。

【一切の苦集云云】
以下は共相を示す神泰の疏には初の苦集を三諦といふ恐くは後人、道の字を脱するか。

【一切の有爲の法】
泰疏には有爲無爲の法とあり。

【身の自性：境なり】
此下別して自相を明す。

【總相念：如し】
第三方便總相念住を明す。

【廣くは論に説く】
俱舍論二十三の初煖法とは：如し

【煖法とは：如し】
第四方便煖法を明す。

【謂はく云云】
俱舍二十三の三右の文。

との法を以て體と爲す。三には所緣念住、慧の所緣の七十五法を以て體と爲す。前に説く不淨と持息とは是れ聞思の慧なり、即ち修慧に入るの方便門なり、此二門に由りて心便ち定を得ればなり。舍摩他と毘鉢舍那とを修す、舍摩他此には止と云ふ、毘鉢舍那此には觀と云ふ、即ち是れ定慧の二行を修習するなり。自相共相を以て身受心法を觀す、此身受心法の各別の自相を名けて自相と爲す。一切の苦集は有爲にして皆無常の性なり、一切の苦集は有漏にして皆是れ苦の性なり、一切の有爲の法は定んで空と非我との性なりとするを名けて共相と爲す。身の自性とは大種の造色なり、受と心との自性は自名に顯すが如し。法の自性とは七十五法の中に身と受と心とを除いて餘の六十二の法なり、是れ即ち別相法念住の境なり。念住とは境に於て心をして散ぜざらしむ、故に念住と名く。總相念とは即ち七方便の中の第三の方便なり、慧を以て性と爲す。彼觀行者總雜法念住を緣するの中に居して、總じて所緣の身等の四境を觀じて四行相を修す、謂ゆる無常と苦と空と無我となり、故に總相念住と名く。此順解脱分の善根は、佛の出世に遇うて唯人の三洲にして方に能く之を種う。廣くは『論』に説くが如し。

煖法とは是れ七方便の中の第四の方便なり。謂はく總緣共相法念住を修習して、漸次に成就して上上品に至る、此念住の上上品より後、順決擇分の善根生ずること有るを名けて煖と爲す、慧を以て性と爲す。此法初に起ること、譬へば火を鑽るに煖なるを前相と爲すが如く、眞智も亦爾り義喻相似す、故に煖の名を立つ、是法は能く煩惱の惑の薪を燒

【眞智】 見道無漏の四聖諦の智。

【頂法：…異なるなり】
第五方便頂法を明す。

【最勝云云】本論に此下に「人の頂の如く」の句あり。恐くは脱するか。【山南山北】忍位以上、煖位以前に喩ふ。

【忍法：…故に】第六方便忍法を明す

く、道の前相なり、義は火の前相の如し、相に従ひて名を立つ、故に名けて煖法と爲す。此煖善根は分位長きが故に、能く具に四聖諦の境を觀察し、乃至具に十六行相を修す。苦諦を觀するに四行相有り。謂はく非常苦空非我なり。集諦を觀するに四行相有り。謂はく因集生緣なり。滅聖諦を觀するに四行相有り。謂はく滅靜妙離なり。道聖諦を觀するに四行相有り、謂はく道如行出なり、是を十六と爲す、具には『俱舍』の如し。頂法とは是れ七方便の中の第五の方便なり、此は前の煖善根に下中上品有り、漸次に增長して第三品の成滿に至るの時に、善根生ずること有るを名けて頂法と爲す、此法も亦慧を以て自性と爲す。此は轉煖に勝るるを以て更に異名を立つ、前の二種の善根の中に此法最勝なり故に頂法と名く。或は此は是れ進退の兩際にして、猶し山の頂の進んでは山の南に向ひ、退いては山の北に還る如くなるに由りて、故に名けて頂と爲す。故に『婆沙』に云はく、「煖は邪教を受けず、頂は善根を斷ぜず、忍は惡趣に墮せず、世第一法は凡夫と作らず」といふ、『俱舍論』の文稍稍異なるなり。忍法とは七方便の中の第六の方便なり。彼頂善根に下中上品有り、漸次に増上して第三品の成滿に至るの時に、善根生ずること有るを名けて忍法と爲す。此法も亦慧を以て自性と爲す。四諦に於て能く忍可する中に、煖頂に形るに此れ要勝たるが故に之を名けて忍と爲す。然るに此忍法に上中下有り、下中二品は頂法と同等なり。謂はく四聖諦の境を觀じ、及び能く具に十六行相を修す。然も下品に於ては三十二を具す、中は漸漸に略す。上品は唯し欲界の苦諦を觀ず、世第一と相隣接するが故に。

【世第…名く】第七方便世第一法を明す。

【聖道】見道。

【此四善根云云】

自下更に前四善根を合して一位と爲して釋す。

【未至】初禪の近分をいふ。

【是法の報】煖法の果報。

【喜樂捨受】色界の心法。

【四相】不相應中の四相。

【有】三有。

【二】第四に斷惑の智の所依の定地を明す。

【三】無色・唯初禪の三分・中間・下

近分・初禪中の大梵天。

世第一法とは是れ七方便中の第七の方便なり、此は上品の忍の無間に善根生ずること有るを名けて世第一法と爲す。此法も亦慧を以て自性と爲す。上品の忍に同じて欲界の苦諦を緣じて、一行相を行修するに唯し一刹那なり、此も有漏なるが故に名けて世間と爲す、後に形るに最勝なるが故に第一と名く、前に對すれば等無間緣と作り士用力有りて、同類因を離れて聖道を引生して士用果と爲す、故に第一と名くるなり。此四善根をば亦是順決擇分と名く、修慧を以て體と爲す。皆六地に依る、謂はく四靜慮と未至と中間となり、欲界の中には闕して等引無きが故に。無色にも亦無し、煖等の四種の善根無きことは、見道の眷屬なるに以てなり。又無色界には欲界を緣ぜず、故に見道無し、見道の中には欲界の苦を先づ遍知すべきが故に、欲界の集を先づ斷すべきに以るが故に。此四善根は是れ有漏なるが故に、能く色界の五蘊異熟を感ず、故に『涅槃』に云はく、「是法の報は色界の五蘊を得」と。然も助滿の爲に圓滿因と作り、喜樂捨受の心所法と、色觸二處と、四相と及び得とを感得す、牽引因と作て、命根と衆同分と眼等の五根とを感ずること能はず、有に憎背するが故に。

【二】第四に斷惑の依地を明すとすは、四禪と三空と未至と中間との九地を依と爲す、若し次第の者は、唯し未至地に依りて三界の惑を斷じ盡す。若し超越の者は、四根本と未至と中間とに依りて亦皆能く斷ず、此所依は不定なり、謂はく聲聞種姓の、若し未至定に依りて煖を起すは、即ち此地に依りて頂忍世第一法を起し正性離生に入る、乃至若し第四靜慮に依

【第四：附り】先
 に未至に依て煖法
 を起せば、後に第
 四靜慮に依て四善
 を起し入見道す。
 【見所斷云云】因
 みに離生を明す。
 【婆沙】第三及び
 第七。
 【二】第五に見修
 二道中の所斷惑を
 明す。
 【見惑】是れ入見
 道の時斷ぜらるる
 惑、又五見を以て
 體とする故に名く
 【修惑】見惑を斷
 じて後更に眞理を
 思惟修習して斷ず
 る惑の意、又舊に
 思惑といひ又俱生
 起の惑ともいふ。
 【三十一】三十二
 は見惑、四は修惑。
 【三十一】二十八
 の見惑三の修惑。

りて煖を起すは、即ち此地に依りて預忍世第一法を起し正性離生に入る。或は復餘の地に依る者は、若し未至定に依りて煖を起するは、彼初靜慮に依りて煖預忍世第一法を起し正性離生に入る、乃至第四靜慮も亦爾り。見所斷の惑は、諸の有情をして諸の惡趣に墮し、諸の劇苦を受けしむ。譬へば生食の久く身中に在りて、能く種種の極苦惱の事を作すが如し。是故に此惑を説きて名けて生と爲す。見道に能く滅す、故に離生と名く。復次に見等の惑有り、剛強にして伏し難きこと豹の懽悞するが如し、故に説きて生と名く、見道能く滅す故に離生と名く、自餘の義は廣くは『婆沙』の如し。

第五に所斷の惑を明すとは、所述の不同に二有り、理と事となり。迷理の煩惱を名けて見惑と爲し、事に迷する者を名けて修惑と爲す。迷理の惑とは且つ苦諦に迷するに十煩惱を起す、謂はく身邊二見と邪見と見取と戒禁取と貪と瞋と慢と疑と無明となり。集諦に迷ひて七煩惱を起す、謂はく邪見と見取と貪と悲と慢と疑と無明となり。滅諦に迷ひて七煩惱を起すは集諦と同なり。道諦に迷ひて八煩惱を起す、謂はく邪見と見取と戒禁取と貪と瞋と慢と疑と無明となり。事法に迷するに四煩惱を起す、謂はく貪と悲と慢と無明となり。此欲界の中に總じて三十六有り、色界には悲を除けば三十一有り。所以は何んとなれば、彼界は定地にして心皆軟滑なれば違情の事無し、故に悲を起さざるなり。無色も亦爾なり。三十一有り。迷事の煩惱は欲界に四を具す、上二界の中に各三なり、悲を除きて六有り、故に三界の迷理の煩惱に八十八有り、迷事の煩惱に總じて十種有り、故に三界の中に總じ

【三】第六に斷惑得果を明す。

【順決擇分】 標等四加行位にて十六行相を以て三界の四諦の境を觀す。

【此より已去】 順決擇分已去。

【得果に二種】 自下正く斷果を明す

此下、作釋に四、預流、一來、不還、羅漢の斷證なり。

【次第の行者云云】 初に預流の斷證を明す。

【後に苦法：有り】 十六心に約して斷

を示す苦法忍を第一とし道類智を第十六心とす。

【第八の無間：斷ず】 且く見道の斷惑を明す。

【第八の無間、第八の解脫】 十六心を二に分つに八心を無間道、八智を解脫道とす。今は道類忍と道類智を指す。

て九十八使有るなり。

第六に斷惑得果を明すとは、見道位の前の順決擇分には、四諦を觀すと雖も而も由し

未だ見所斷の惑を斷ぜず、未だ眞諦を見ざるなり。此より已去に、無漏道を以て迷理の惑を斷じて、親り諦理を見れば見道の名を得、此位を亦是は正性離生と名くるなり。此見道已上の聖に二十七有り。總頌に曰はく、

信と見と身と慧と俱と

七反と家と并びに種と

退と思と護と住法と

總じて有爲無漏の五蘊と擇滅無爲との六法を以て體と爲す。得果に二種有り、一には次第、二には超越なり、且く次第を説きて後に超越を論ぜん。次第の行者は忍位に在りて未

至禪に依りて、八諦十六の觀行を修するに、略して唯欲界の苦を觀するに至る、次に世

第一の利那の心なり。後に苦法忍を以て無間道と爲し、乃至道類智を解脫とするに總じて

八無間八解脫有り。第八の無間を近の無間と爲して、第八の解脫の一利那の中に盡く三

界の見諦の煩惱を斷ず。唯是れ無漏なり、頃に九品の見所斷の惑を斷ずるが故に。修道に

二有り、通じて有漏と無漏との道を用ふるが故なり、須陀洹果を證す。須陀洹とは名けて

預流と爲す。問うて曰はく、『此預流の名は何の義に目くとや爲ん、若し初て聖道を得るを名

けて預流と爲せば、即ち預流の名は四向四果の八人の後より前に向ひて數へて初向の第八

向果に各四有ると

中と生と有と無と上と

堪達と並に不動となり

【此より已去】 順決擇分已去。

【得果に二種】 自下正く斷果を明す。此下、作釋に四、預流、一來、不還、羅漢の斷證なり。【次第の行者云云】 初に預流の斷證を明す。【後に苦法：有り】 十六心に約して斷を示す苦法忍を第一とし道類智を第十六心とす。【第八の無間：斷ず】 且く見道の斷惑を明す。【第八の無間、第八の解脫】 十六心を二に分つに八心を無間道、八智を解脫道とす。今は道類忍と道類智を指す。

【須陀洹果云云】

上には向を主として惑を明し、下は果に就いて得果を示す。

【預流】 初果をいふ、聖者の流類に入るをいふ。

【後より…第八人】 羅漢果を第一として預流向を第八とするをいふ。

【後より…爲くべきや】 後の道類忍を第一とし、苦法忍を第八とする意

【見道位の中…名四聖と爲す】 見修を開きて四聖と爲す。

【信に由りて】 他

の言教を信ず。【欲界の修惑…故に】 二に一來向より第四向までの失徳の品數を明す。【初に所治の品數を擧ぐ。】

人に目くべきや。又釋す、八忍の中に後より前に向ひて苦法忍を數へて預流と爲くべきや。』答ふ、『此預流の名は初果を得るに目く、第八には目けざるなり。見道位の中の聖者に二有り。一には隨信行、二には隨法行なり。根の利鈍に由るが故に此名を立つ。隨信行とは信に由りて隨ひて行すれば隨信行と名く。隨法行とは彼先の時に於て自ら契經等の法を披閱するに由りて、隨ひて行する義の故に故に此名を立つ。修道位の中には諸の鈍根の者の轉ずるを信解と名け、諸の利根の者の轉ずるを見至と名くるなり。

欲界の修惑に其九品有り、色界の初禪に九品有り、乃至非想にも亦九品有り、即ち是れ九九八十一品なり。失と徳とに各九品を分つ、謂はく下と下の中と下の下と下の下の下の中と中の上と上の下と上の上と上の上となり。應に知るべし此中、下の下が、下品の道の勢力は、能く上が上品の障を斷じ、是の如く乃至上の上品の道の勢力は、能く下が下品の障を斷ず。上上品等の諸の能治の徳は、初には未だ有らざるが故に、此徳有る時はは上品等の失已に無きが故に。欲界の修惑の九品の中に、未至定に依りて初の一品乃至五品を斷ずるを斯陀含向と名く。第六品を斷じて、第六の解脫道の起するとき斯陀含果を證す。唐には一來と云ふ、此人一たび人間に來りて般涅槃するが故に一來と名く、天に向ふも亦爾り、薄貪瞋癡とは、唯下品の三品の惑のみ有るが故に。欲界惑の七八品を斷ずる者をば阿那含向と名く。第九品を斷じ盡す第九の解脫道に阿那含果を證す、唐には不還と云ふ、必ず還りて欲界に來生せざるが故に。亦是五下結斷と名くるなり。那含に七有り。一

【四】此章は、相宗大乘の所立に準じて、二種性を以て有餘無餘の羅漢果の廻不廻心の別を判ず。

には中般、二には生般、三には有行、四には無行、五には上流、六には樂慧、七には樂定なり。樂慧とは色の淨居に生ずるに五那含有る是れなり、樂定とは色界の惑を斷じて無色界に生ずればなり、名けて上流と曰ふ。彼初品を斷じてより、非想の第九品の無礙道に至る來を羅漢向と名く。彼非想の第九の惑を斷じ盡す解脫道の中にして羅漢果を證す。羅漢に六有り、一には退法、二には思法、三には護法、四には安住法、五には堪達法、六には不動法なり。此六が中に於て、前の五種は先の學位の信解の姓より生ず、即ち此を總じて時愛心解脫と名く。要らず時を待ち及び解脫するを以ての故に。不動法とは此を即ち名けて不動心解脫と爲す、退動無く及び心解脫するを以てなり、亦是説きて名けて不時解脫と爲す、時を待たず、及び解脫するを以ての故に。此は學位の見至の姓より生ず。此羅漢果に二の涅槃有り。一には有餘、二には無餘なり。結惑を斷じ盡して身智猶存するを名けて有餘と曰ふ、身智俱に亡するを名けて無餘と曰ふなり、此四果を總じて沙門と名くるなり。

第七に定不定性を明すとは、應果を得る人に二種の別有り。一には定性、二には不定性なり。若し定性の者は此位に住して灰身滅智して無餘界に入るなり。不定性の者は善知識に遇ひて廻心向大して變易身を受けて大行を修し終に正覺を成ず。『瑜珈論』の疏に云はく、問ふ、諸の阿羅漢の有餘依涅槃界の中に住するは、何等の心に住してか、無餘依般涅槃界に於て當に般涅槃すべきや。答ふ、一切の相に於て復思惟せず、正しく眞如界を思ひて漸

【五】第八に能彼の教(經律)二邊に分隔なきを明す。【六】鹿野律師。南山の道。鹿野云云。世尊說法一音を以てするも解了する所萬差なるをいふ。

く滅定に入りて轉識等を滅す。次に異熟の、所依止を捨つ、異熟識取ることあること無きに由るが故に、諸識等生ずることを得んと謂はず、餘法の清淨無爲の離垢の眞如法界のみ在り。」といへり。若し此文に依らば、一切の阿羅漢は無餘依涅槃界の中に於て般涅槃せんと欲する時には、要す滅盡定に入りて方に次に即ち無餘涅槃に散る。問ふ。若し爾らば慧解脫の阿羅漢は般涅槃せざるべしや。答ふ。二の釋有り、廣くは疏に述ぶるが如し。第八に理に分隔無きことを明すとすは宜律師の云はく、「原みれば夫れ大小二乘の理に分隔無し、機に對して業を設け病を除くを先と爲す、故に鹿野の初唱は本聲聞の爲なれども、八萬の諸天は便ち大道を發す、雙林に滅を告げて終に佛性を顯はせども、而も聽衆有りて果に羅漢を成ず。此を以て之を推するに悟解は心に在り、唯教指のみにあらず。故に世尊、世に處して深く物機に達せり。凡そ施爲する所は必ず威儀を以て主と爲す云。『勝覺經』に云はく、「毘尼とは即ち大乘なり」云。『智度論』に云はく、「八十部は尸羅波羅蜜」と云。『摩耶經』に云はく、「年少の比丘觀り衆中に於て毘尼を毀訾す、當に知るべし是を法滅の相と爲す」云。又云はく、「初心の居士は聲聞の律儀に同じて、譏嫌戒を護ること性重と別無し」云。『大般若經』に云はく、「佛、鹿野に於て初て法輪を轉じたまふに、無量の衆生聲聞の心を發し、無量の衆生緣覺心を發し、無量の衆生菩提心を發し、初地二地三地乃至十地を證すと云ふ」と云。是の如く文證一に非ず、上の如きは聲聞の人の所修所證なり。四阿含等の經二百四十部六百一十八卷、摩訶僧祇及び根本有部と等の律五十四部四百十

【見】 現時の意。

【二六】 自下深祕の釋なり。

六卷『大毘婆沙』、『發智』、『六足』等の論三十六部六百九十八卷、是れ其所宗の三藏の法門なり。我聖朝に見に傳ふる所の數此の如し、天竺の所有甚だ多し。然れども其要旨は此に出でず、是れ則ち謂ゆる羊車なり。

【二六】 喩して曰はく、『大日經』に聲聞の眞言有り、眞言に曰はく。

初の醴字に詞の聲有り、是れ行是れ喜なり、即ち聲聞の行なり、伊の聲有り即ち聲聞の

三昧なり、次の靚字に多の聲有り、即ち聲聞所入の如如なり、鄔の聲有り三昧なり、次に鉢字有り、聲聞所見の第一義諦なり、羅字を帶せり、即ち小乗の離する所の六塵なり、帝

也といふは乗如の義なり、是れ聲聞所乘の乘なり、毘に縛の聲有り是れ縛なり、縛は則ち煩惱なり、伊の聲有り、則ち無縛三昧なり、揭多とは離なり行なり、已下は怖障の義なり、聲聞の人は生死を厭怖すること極めて切なるが故に。此眞言は是れ法佛の如來大悲願

力をもて有情を利せんが爲に之を説きたまへり。若し衆生有りて此法を以て道に入るべき者には、此門より大悲藏に入れしむ、是れ則ち法界の一門法身の一徳なり。若し此意を得れば聲聞乘は即ち是れ佛乘にして無二無別なり、若し知るべからざる者は、則ち菩薩の

毒、大士の魔なり、詳かにせずんばある可からず。

祕密曼荼羅十住心論卷第四

祕密曼荼羅十住心論 卷第四

一三三

秘密曼荼羅十住心論 卷第五

拔業因種住心第五

【一】此住心は緣覺乘に當る。緣覺の名に就て兩種あり一は所觀の法門に緣す。即ち十二因緣の法に於て覺悟す。二には得道の因緣に就て釋す。現事の緣を釋して覺悟す。飛花落葉を見るが如し。

【二】隨釋に淺略深祕ある中、今は淺略釋にして、初に密教に依て解す【鱗角】獨居して道を悟るを、麒麟の一角なるに喩ふ【部行】部類伴黨有りて同一の獨悟の行を行ずるなり共に無佛の世に出て無師獨悟するは一なり

【因緣を三觀し】十二因緣を觀ず。【四五】四大五蘊【四相】生住異滅【二】以下經を引きて釋す。大日經住心品の文。

(一) 拔業因種心とは、鱗角の所證、部行の所行なり。因緣を十二に觀じ生死を四五に厭ふ。彼華葉を見て四相の無常を覺り、此林落に住して三昧を無言に證す。業惱の株杻此に猶て抜き、無明の種子之に因りて斷ず、爪犢遙かに望んで近づかず、建聲何んぞ窺窺することを得ん。湛寂の潭に游泳し無爲の宮に優遊す、自然の戸羅授ること無くして具し、無師の智慧自我にして獲。三十七品は他に由らずして悟り、蘊處界善は藍を待たずして色有り。身通をもて人を度して言語を用ひず、大悲闕けて無く方便具せず、但自ら苦を盡して寂滅を證得す。

(二) 故に經に云はく、「業煩惱の株杻無明の種子の、十二因緣を生ずるを抜く」と。復云はく、「是中に辟支佛は復少き差別有り、謂はく三昧分異にして業生を淨除す」と。釋して云はく、「十二因緣と謂ふは、『守護國界經』に云はく、『復次に善男子、如來は一切の靜慮、解脫、等持、等至に於て煩惱を伏滅すると生起するとの因緣皆實の如く知りたまへり。佛云何が知りたまふ、謂はく衆生の煩惱の生起することは、何の因を以て生じ何の緣を以て生ずと。

【又云はく】 同經

具緣品の文。

【守護國界經】 具

に守護國界主陀羅

尼經といふ、十卷

あり當文は第五に

出づ。

【此中の煩惱云云】

此下別して明すに

二門ある中、初に

正しく生滅を説く。

【謂はく、老死を

緣となす】六對あ

り、俱に十二支の

生起次第を明す。

初に過去兩對。

【不正思惟】 邪思

惟。

【行：爲す】 二に

過行一對。

【識を：爲す】 三

に現在の七對。

【有を：爲す】 四

に現當一對。

【生を：爲す】 五

に未來の一對。

【復次に善：生ず

る故に】此下は大

乘所談の迷悟互融

不二一體の法門を

明す。

惑を滅して清淨なることは、何の因をもて能く滅し、何の緣を以て能く滅すといふことを知りたまへる」と。此中の煩惱生ずる因緣とは、謂はく不正思惟なり、此を以て其因と爲し、無明を緣と爲す、無明を因と爲し行を緣と爲す、行を因と爲し識を緣と爲す、識を因と爲し名色を緣と爲す、名色を因と爲し六處を緣と爲す、六處を因と爲し觸を緣と爲す、觸を因と爲し受を緣と爲す、受を因と爲し愛を緣と爲す、愛を因と爲し取を緣と爲す、取を因と爲し有を緣と爲す、有を因と爲し生を緣と爲す、生を因と爲し老死を緣と爲す、煩惱を因と爲し業を緣と爲す、業を因と爲し食を緣と爲す、隨眠煩惱を因と爲し現行煩惱を緣と爲す。此は是れ煩惱の生起の因緣なり。

云何が衆生諸の煩惱を滅する所有の因緣とならば、二種の因有り二種の緣有り。云何が二と爲す。一には他に從ひて種種の隨順の法聲を聞き、二には内心に正念を起すなり。復次に二種の因有り二種の緣有りて、能く衆生をして清淨に解脱せしむ。謂はく奢摩他心一境の故に毘鉢舍那能善巧の故に。復次に二種の因有り二種の緣有り、不來智の故に。如來智の故に。復二種の因緣有り、微細に無生の理を觀察するが故に。解脱に近きが故に。復二種の因緣有り、具足行の故に。智慧解脱現在前の故に。復二種の因緣有り、謂はく盡智の故に。無生智の故に。復二種の因緣有り、隨順して眞諦の理を覺悟するが故に。隨順して眞諦の智を獲得するが故に。此は是れ衆生の煩惱を除滅する清淨の因緣なり、如來悉く知りたまへり。復次に善男子、煩惱の因緣數量有ること無ければ、解脱の因緣も亦

【三】上來大門第一下大門第二に釋名するなり。

【業】六趣の業因は善惡二業に通ずるも今は十惡業を擧ぐ。

【四】上來は密教に依るの解竟り、以下第二に顯教に依る釋なり五段ある中、皆經論文を引きて廣く緣覺の教理行果を明す。

【華嚴經】新經第三十五十地品の文

數量有ること無し、或は煩惱有りて能く解脫の與に以て因縁と爲る、實體を觀するが故に。或は解脫有りて能く煩惱の與に以て因縁と爲る、執著を生ずるが故に。又云はく、緣覺は因果を觀察し無言説の法に住して轉ぜず。言説無きことは一切の法に於て極滅語言三昧を證すればなり。

釋して云はく、業とは惡業なり、因とは則ち十二因縁なり、種とは無明の種子なり。聲聞の極觀察智を以て唯蘊無我を解了するが如きは、厭怖の心重きを以ての故に、疾く煩惱を斷じ自ら涅槃を證して、十二因縁の實相を分析し推求すること能はず。辟支佛は智慧深利なるが故に、能く總別の相を以て深く之を觀察す、一切の集法は皆自定れ滅法なりと見る、此れ聲聞と異れり。又辟支佛は一切の集法は皆悉く涅槃の相の如くなりと觀じて、種種の有爲の境界の中に於て、皆亦戲論の風息んで能く此二種の三昧を證す。故に業煩惱の株杓及び無明の種子を抜くといふ、是れ即ち辟支佛の學處證處なり。此拔業因種の一句の中に、悉く辟支佛乘を攝し盡す故に、緣覺乘を拔業因種住心と名くるなり。

一華嚴經一に云はく、上品の十善自利清淨にして、他教に従はず、自ら覺悟するが故に。大悲と方便と具足せざるが故に。甚深緣生の法を悟解するが故に」と。『大乘同性經』に云はく、辟支佛に十種の地有り。一には苦行具足地、二には自覺甚深十二因縁地、三には覺了四聖諦地、四には甚深利智地、五には八聖道地、六には覺了法界虛空界衆生界地、七には證寂滅地、八には六通地、九には微祕密地、十には習氣漸薄地なり、是を十種の辟支

【薄悲】 諸有情に對し慈悲劣薄なる意。

【中根】 緣覺に名

【慢行の類】 無師無敵の世に獨出せんことを願求する一類。

【云何…名く】 二に第二相を釋す。三類ある中、下は初類を釋す。

【蘊善巧…故に】 三乘所修に十善巧あり。今緣覺に約して六を擧ぐ。蘊(五蘊)處(十二處)界(十八界)緣起(十二緣起)處非處(善因樂果、惡因惡果)諦(四聖諦)の

佛地と名く」ど。『瑜伽論』の第三十四に云はく、「云何が獨覺地なる。當に知るべし此地に五種の相有り、一には種姓、二には道、三には習、四には住、五には行なり。云何が獨覺の種姓なる。謂はく三相に由りて正しく了知すべし。一には本性獨覺。先に未だ彼菩提を證得せざる時に薄塵の種姓有り、此因縁に由りて憤悶の處に於て心に愛樂せず、寂靜の處に於て深心に愛樂す。二には本性獨覺。先に未だ彼菩提を證得せざる時に、薄悲の種姓有り、是因縁に由りて正法を説き、有情を利する事に於て心愛樂せず、思務に小たる寂靜住の中に於て深心に愛樂す。三には本性獨覺。先に未だ彼菩提を證得せざる時に、中根の種姓有り、是れ慢行の類なり、是因縁に由りて深心に無師無敵を希願して菩提を證す。云何が獨覺の道なる。謂はく三相に由りて正しく了知すべし。謂はく有る一類は獨覺種姓に安住して、百劫を経て佛の出世に値ひて、親近し承事し成就し相續して、專心に獨覺の菩提を證せんことを求む。蘊善巧に於て、處善巧に於て、界善巧に於て、緣起善巧に於て、處非處善巧に於て、諦善巧に於て勤めて修學するが故に、當來世に於て速かに能く獨覺の菩提を證得す、是の如くなるを名けて初の獨覺の道と爲す。復有る一類は、佛の出世に値ひて善士に親近し正法を聽聞し理の如く作意して、先より未だ起さざる所の順決擇分の善根に於て、引發して起せしむ、謂はく煖頂忍なり。而れども力能として、即ち此生に於て法現觀を證し沙門果を得ること無し。復蘊善巧を修し、處善巧を修し、界善巧を修し、緣起善巧を修し、處非處善巧を修し、諦善巧を修するが故に、當來世に於て能く法現觀を

【當來世】 第百劫満の最後身。

【獨覺の菩提】 麟等獨覺の菩提。

【復有る一類】 第一類即ち部行獨覺。

【法現觀】 見道。復有る一類。第一類は本性獨覺なり。

【一切種】 二乘聖位の一切種類。

【云何が獨覺の習】 三に第三相を明す習とは三十七菩提分法を修習す。

【資糧】 六善巧。

【云何が獨覺の住】 四に第四相を明す住とは住處。

證し沙門果を得、是を第二の獨覺道と名くるなり。復有る一類は佛出世に値ひて善士に親近し、正法を聽聞し理の如く作意して法現觀を證し沙門果を得。而れども力能として一切種に於て至極し究竟し畢竟じて垢を離れ、畢竟じて梵行邊際の阿羅漢果を證得すること無し。復雜善巧を修し、處善巧を修し、界善巧を修し、緣起善巧を修し、處非處善巧を修し、諦善巧を修するが故に、出世の道に依りて當來世に於て、極究竟に至り畢竟じて垢を離れ、畢竟じて梵行邊際の阿羅漢果を證得す、是を第三の獨覺道と名く。云何が獨覺の習なる。謂はく有る一類は初の獨覺道に依りて百劫を満足して資糧を修習す、百劫を過ぎ已りて無佛世に出で、師無くして自ら能く三十七菩提分法を修し、法現觀を證し獨覺の菩提の果を得、永く一切の煩惱を斷じて阿羅漢を成するなり。復有る一類は或は第二に依り或は第三の獨覺道に依る、彼因縁に由りて無佛世に出でて、師無くして自ら能く三十七菩提分法を修し、或は法現觀を證して乃至阿羅漢果を得、或は沙門果を得。至極し究竟し畢竟じて垢を離れ、畢竟じて梵行邊際を證得し、最上の阿羅漢果を證得す。當に知るべし此中には初の習に由るが故に、獨覺を成する者をば麟角喻と名く。第二第三の習に由るが故に獨勝を成する者を部行喻と名くるなり。云何が獨覺の住なる。謂はく初の所習の麟角喻の獨覺は、孤林に處することを樂ひ、獨居住せんと樂ひ、甚深の勝解を樂ひ、甚深の緣起の道理を觀察せんと樂ひ、最極の空無願無相の作意に安住せんと樂ふ。若し第二第三の所習の部行喻の獨勝は、必ずしも一向に孤林に處せんと樂ひ、獨居住せんと樂はず、亦は部衆と共に相

【空：相】 三三昧亦是三解脱門といふ是なり。
【若し第二：如し】 部行獨覺の住處。
【云何が獨覺の行】 五に第五相を明す行とは行相をいふ

【五】 此一解は誰人の義なるを知らざるも、大師以て擧げて二覺を明す初に獨覺を明す。

【瑜伽】 論第三十五獨覺地の取意の交。

【部行とは云云】 次に部行獨覺を明す。

【法華】 譬喩品の文。葉舍利弗等の辟支佛根性の人に就いていふ。

【諸縁：竟んぬ】 此一節は凡夫地に六行觀を以て下入

雜住せんと樂ふ、所餘の住相は麟角喩の如し。云何が獨覺の行なる。謂はく一切の獨覺は隨ひて彼の村邑聚落に依りて住して、善く其身を護り善く諸根を守り善く正念に住す。隨ひて彼の村邑聚落に入りて、或は乞食を爲し、或は他下劣の愚昧を濟度するに、身をもつて濟度して語言を以てせず。何を以ての故に。唯身相のみを現じて彼が爲に説法して、言を發さざるが故に種種の神通の境界を示現す、乃至心に誹謗する者をして歸向を生ぜしめんが爲の故に。又彼一切は應に知るべし本來は一向趣寂なることを。

或は云はく、「獨覺を明さば此に二種有り。一には麟角喩獨覺、二には部行獨覺なり。麟角喩とは曾て百劫に於て因行を修するを以て、自乘の解脫に於て深く善根を種ゑ、最後身の時に無佛世に出でて、但世間に所有る草木の春は生じ夏は榮え秋は衰へ冬は落つるを觀じて、無常を悟りて便ち無學を成ずること、猶し麟の角のごとく、獨一無二なるが故なり。故に『瑜伽』に釋して云はく、「常に善寂と名く」といふ。部行とは是人は本より是れ緣無師自悟にして永く世間を出づ、故に獨覺と名く」といふ。部行とは是れ佛爲に十二因縁の種姓なり、常に樂ひて十二因縁の法を觀察するをもて、最後身に於て佛爲に十二因縁の法を説くに値ひて道を悟ることを得。故に『法華』に云はく、「佛世尊に従ひて法を聞きて信受し慇懃に精進して自然の慧を求め、獨善寂を樂みて深く諸法の因縁を知る、是を辟支佛乘と名く」といふ。此は衆多の部類有りて行ず、故に部行と名く。此二りの成覺は見修の惑を斷するに都て一百六十心有り。諸の緣覺乘は、法爾として皆凡夫位の時に於て、

地の五部の諸惑を斷ずるを明す。

【十六心】 八忍八智。

【法忍法智】 欲の四法忍四法智。

【二心】 無間と解脱。

【次に大覺云云】 此下因みに小乗の佛果を陳ぶ。

【四波羅蜜】 戒、忍、進の四。

【戒、忍、進の四】 戒、忍、進の四。

【釋合糅して雜集論といふ、今雜集論第十三の中、第二出離差別に三乗の別あるうち、獨覺差別の一段を引く】

【不定】 定とは獨覺の種子無始より有せるをいふ。

【麟喻覺】 不定とは三乘種あり、是れ後大乘に轉向す。

【部麟二覺に通ず】 (部麟二覺に通ず)

【七】 以下は慈恩の對法鈔(雜集論述記)第八の文、初に四類の濫。

無所有處已下の諸惑を先ちて已に斷じ竟んぬ。後に見道に入るに十六心有り、前に説くが如し、但し法忍法智は斷惑せざること知んぬべし。修所斷の惑を斷ずるに、上の八地の地毎の九品に、各二心有れば合して一百四十四心有り、前の見位に通ずれば總じて一百六十心有るのみ。次に大覺を明さば小乗の成佛に總じて四階有り。一には三無數劫に於て有漏の四波羅蜜を修行して、禪定と般若との種智の因と爲るを除くなり。二には百劫の中に於て相好の因を修す。三には最後身に出家して已後に、有漏の四禪四無色定を修して、非想已下の所有の諸惑を斷ず。四には菩提樹下にして三十四心に斷惑成佛す云。

『對法論』の第十三卷に云はく、「獨覺乘の補特迦羅とは、謂はく獨覺の法性に住せる、若は定、不定性なり。是中根は自ら解脱を求めて弘の正願を發し、貪縁を厭離する解脱の意樂を修し、及び獨證菩提の意樂を修す、即ち聲聞藏を所縁の境と爲して、精進して法隨法行を修行す。或は先に未だ順決擇分を起さず、或は先に已に順決擇分を起し、或は先に未だ得果せず、或は先に已に得果せり。無佛世に出でて、唯内に正しく思惟して聖道現前するとき、或は麟角の如く獨住し、或は復獨勝部行として苦際を盡すことを得。若し先に未だ順決擇分を起さざると、亦得果せざると、是の如き等は方に麟角を成じて獨住す、所餘は當に獨勝部行を成すべき等」云。

(七) 或は云はく、先に未だ順決擇を起さざると、乃至先に已に得果すといひて下に云ふ、未起決擇分と未得果と、此二つは廻心して麟角を成じ、所餘は衆出を成ずとは、此中の已

【衆出】 部行獨覺をいふ。

【法師】 西河寺の靈雋法師。

【又聲聞…語す】 二に廻心の別を明す。

【毘婆沙】 第七卷ノ下紙の文。

【俱舍論】 新譯第二十三。舊譯第十七卷の文。

【若し已に…語す】 此下廻心の練不を明す。

【解脱分】 恐くは是れ六十劫中の滿位の順決擇分なるべし、抄主の寫誤ならん。

【獨覺の解脱分】 百劫の練行を修する當位。

【善根位】 百劫練根行の滿位。

【大智度論】 瑜伽論の誤か、當文は論卷六十四にあり

【此中に云ふ】 自下は三に正しく對法論文の四類廻心の文を釋す。

得順決擇分と未得果と何の異ぞや。法師の云はく、「今大乘には云ふ、未だ決擇分を得ずして廻心する者は、唯此れ鱗角を成じ、餘の三句は衆出を成ず。何んとなれば、已決と未得果といふは、言已に對句を成ずるが故に」と。此義然らず、下に解するが如し。又聲聞より廻心して緣覺に入ることは、煖頂忍より廻心して世第一法の位に至らざるなり、前の三位には多利那有り、世第一法は唯し一利那なるが故に轉勝することを得ざるを以てなり。若し『毘婆沙』の使健度の如し。又『俱舍論』の偈に云ふが如し、「三を轉ずれば餘なり。釋して曰はく、聲聞の三善根を轉じて、正覺に異る獨覺乘を成ず」と。世第一法にはあらず、只一利那にして廻心せざるが故に、此は小乗の義なり。今大乘は然らず。義に曰はく、世第一法も亦多利那なり。何を以てか知ることを得とならば、即ち此前の論の文に、「世第一法は即ち此生」と云ふが故に、利那利那なるに非ざらんや。若し此義を以てせば四位俱に廻心することを得べし。又世第一法は出觀することを得ざるなり、唯觀の中に在りて、云何ぞ廻心することを得ん、亦得ざるなり、唯前の三位のみなり。又不定性の人には、各三乗の種子有るに以りて、若し廻心し已れば即ち獨覺の種子より獨覺の果を生ず、羅漢等も廻心して亦獨覺を成ずるに以るが故に。若し已に聲聞にして六十劫に解脱分を修習し、廻心して獨覺に入る時には衆出を成ず。若し獨覺の解脱分等と善根位等との中に至りて、更に四十劫練する者は鱗角を成ずる此なり。『大智度論』に云はく、「已に決擇分を得れば衆出を成ず」といふは、練根せずして涅槃に入るに約して語す。此中に未だ決擇分を起さざると、

【若し已に六十劫云云】此は聲聞中の極達の者に約し又先きの下に極速及び中間の類に就いていふ。
 【三生の人等】乃至五十劫等を示す
 【此人：成るや】聲聞順解分の此人は、獨覺の部麟二覺の何れなりや
 【獨覺の位】解脱分と順決擇分。
 【或は百劫或は四十劫】先に未修の人と、先に已修の人に就く。
 【決擇分の六十四】瑜伽の五分中の攝決擇分六十五紙左の文。
 【其れ已に：有り】此は通じて論所明の二類を標す。
 【修習せるとは】漸く決擇分に至り修習せると、唯三生を経るに第三生の決擇分位に至りて未だ修習せざるとの意。

及び未だ得果せざると、廻心して麟角を成すと云ふは、此中の有義に、大の義には若し未だ決擇を起さずして廻心に至る者は、皆麟角を成すと云ふ、大小乗成く然なり、此義決定せり。疑ひて曰はく、若し已に六十劫をば未だ廻心せざる時に修習し、廻心し已るに及んで更に四十劫修習するは爾るべし、若し已に六十劫修せりと雖も、廻心し已りて更に四十劫練根せざると、又先に六十劫の人に非る、但三生の人等の、廻心して後にも修習せざるとは、未だ決擇分を起せずと雖も、已に多く修習せざるが故に、此人は何者を成するや。義に曰はく、此人は一向に利根なり、先に未だ修習せずして已に廻心すると、及び未だ廻心せざる時に、已に六十劫修習して廻心するとは、必ず獨覺の位を経るに、或は百劫或は四十劫修習して必ず麟角を成す、異文無きが故に。決擇分の六十四の文に解するが如し。其れ已に決擇分の位に入りて廻心する者に二人有り。一には已に六十劫を経て修習せると、及び未だ修習せざるとは、廻心し已りて更に四十劫と、及び百劫と練根せる此人は、定んで麟角を成するが故に、『論』に復未得果の者麟角を成すること有りと云ふ。二には六十劫を経已りて廻心すると、及び未だ六十劫已らずして廻心するとは、廻心し已りて四十劫乃至百劫を経て修習せずんば、此人は衆出を成す。故に『論』に『已に決擇分を起する者、獨勝部を成す』と云ふ。故に『論』に已に決擇分を起すは衆出を成す、未得果の者は麟角を成すること有りと云ふ。此二文に同じからざること有り、餘の三果向の廻心して麟角を成すには非ず、已得果に由るが故に。

【其廻心云云】此下、四に三乗の廻心を明すに能所趣に分つ。初に能趣を明す。

【又其れ廻心：位ぞや】二あり。初は二乘廻心して大乘に至る位を徹して聲聞廻心を徹して獨覺に趣く位を問ふなり。

【大乘：至る】大乘五十一位中、聲縁の二乗は十信中の初位に至る。

【縁境位行】縁境は聲聞識を指し、位行とは本性獨覺中の不定性に約していふ。

【八】以上對法論抄第十の具文を引き竟り、自下は龍樹所造の顯密の兩論を引き勸誡する一段なり。

其廻心する時には三乘各何の位等に於てかするとならば、大義に曰はく、若し二乘の人、廻心向大することは、初發心より乃し二乗の無學を得るに至る已來は皆得。其れ果を成ずるに同じからざるごと有り、前に釋するが如し。若し大乘と獨覺との退する等をば下の退の中に至りて釋せん。又其れ廻心する時に至る所と、廻心して取果する處とは何れの位ぞや。釋して曰はく、大乘には並に初行の位に至る。其れ廻心して獨覺を取ること有る者、縁境位行も聲聞と相似するを以ての故に何れの位にも隨ふ。解脫分より廻心するは、即ち次第に獨覺の此位に至る、又還りて獨覺の初行の位に至ることは、根性の異なるを以ての故に位を超ゆべからざればなり。若し已に決擇分の善と及び果とを得て已去の者は、皆次第に隨ひて獨覺の此位に至る。問ふ、『其獨覺の果を取る時刻には、須らく那含果を取りて後に方に獨覺の果を取るべしや。』『非想地は、有漏心の所厭に非ざるを以ての故に。廣くは前に釋するが如し。』

龍猛菩薩の『菩提心論』に云はく、『又二乗の人は、聲聞は四諦の法を執し、縁覺は十二因縁を執す、四大五陰は畢竟磨滅すと知りて、深く厭離を起して衆生執を破し、本法を勤修して其果を尅證す、本涅槃に趣くを究竟と以爲へり。眞言行者當に觀すべし、二乘の人 は人執を破すと雖も猶法執有り、但し意識を淨めて其他を知らず、久久に果位を成じ灰身滅智を以て其涅槃に趣くこと、太虚空の湛然として常寂なるが如し、定性有る者は發生すべきこと難し、要らず劫限等の滿を待ちて、方に乃ち發生す、若し不定性の者は劫限を

論すること無く、縁に遇へば便ち廻心向大す。化城より起ちて三界を超えたりと爲し以へり。謂はく宿働を信ぜしが故に乃し諸佛菩薩の加持力を蒙りて、方便を以て遂に大心を發す、乃し初十信より下、遍く諸位を歴て三無數劫を経て、難行苦行して然して成佛することを得。既に知んぬ聲聞緣覺は智慧狭劣なり、亦樂ふべからず」と。「十住論」に云はく、「復二の過有り、疾く遠離すべし。一には聲聞地を貪し、二には辟支佛地を貪するなり。偈に云はく、

若し聲聞地と

是を菩薩の死と名く

地獄に墮すと雖も

若し二乘に墮すれば

佛の命を愛する者は

是の如く佛に作らんと欲はば

嗚して曰はく、此乘に二種の意有り、一には淺略、二には秘密なり。淺略の意は前に已

に説くが如し。秘密の義とは、「大日經」に緣覺の眞言有り、此一字の眞言に一切の緣覺乘の法を攝し盡す。彼眞言に曰はく、

可畏可畏可畏可畏

闍字門は一切諸法無言説の義を顯す、是れ則ち緣覺所證の極なり。若し衆生有りて此法

門より得度すべき者には、即便ち此眞言の法を誦持すれば法界胎藏に入ることを得しめたまふ、亦是れ法佛の一體萬徳の一なり、此義を知らずんば深く哀愍すべし。胎藏の曼荼羅に、所以に聲聞緣覺を置く、良に深意有るなり。

秘密曼荼羅十住心論卷第五

【池縁とは聲縁の自調自度なるに對して立て、大乘とは羊鹿の小乘に簡ぶ名。】

【一】初に略して大割を明す。

【建爪】建立外道の似心。非有似有の心。

【是に於て生ず】智度論に出づ。劫數を説くに方百由旬の大城に芥子満し百歲毎に一芥子を持去ると、方百由旬の石を、百歲毎に過戸輕擲の旣衣を以て擲うて盡くにも劫つぎずと。是の盡る時あるを一劫とす。

【三種の云云】五位の階級を明す。

【三種の轉】廣深退、難修退、難證退。

【四弘】願じて苦

祕密曼荼羅十住心論

卷第六

他緣大乘住心第六

【一】大士の法有り、樹てて他緣乘と號す、建爪を越えて高く昇り、聲縁を超えて廣く運ぶ、二空三性に自執の塵を洗ひ、四量四攝に他利の行を濟ふ。陀那の深細を思惟し幻焰の似心に專注す。是に於て芥城踏きて還りて滿ち、巨石躡て復生ず。三種の練磨は初心の退せんと欲するを策し、四弘の願行は後身の勝果を仰ぐ。等持の城を築きて唯識の將を安じ、魔旬の伏陣に征て煩惱の賊帥を伐つ、八正の軍士を整へて縛るに同事の繩を以てし、六通の騎騎を走せて殺すに智慧の劍を以てす、勞績を封するに五等の爵を以てし、心王を冊つるに四徳の都を以てす。勝義勝義太平の化を致し、廢詮談旨無事の風を扇ぐ。一眞の臺に垂拱し法界の殿に無爲たり。三大僧祇の庸是に於て帝と稱せられ、四智法王の號本無くして今得たり。爾れば乃ち藏海には七轉の波を息め、蘊落には六賊の害を斷つ。無分の正智は眞常の函に等しく、後得の權悲は諸趣の類に遍す、三藏の法令を製して三根の有情を化し、十善の格式を造りて六趣の衆生を導く。乘を言へば即ち三つ、識を談すれば唯し八つ、五性に成否有り、三身は則ち常と滅となり。百億の應化は同く六舟を泛べ、千葉

を離れしめ、樂を得せしめ、發心、斷惡修善せしめ、早作佛せしむ。【等持】定を城に比す。

【二】自下卷末まで、廣く此乘の所有る法義を述ぶ。初に淺略釋の中に、先づ能攝の住心を明す。

【梵音云云】此下縁に無他を分ちて釋す。

【楞伽】四卷本の第二第八、第一、【解深密】第一、

【瑜伽】第七十六、【唯識】第三、第六、第八、第九。

【三】上來は今經の説に就いて能攝の住心を明し、自下は法相宗の所談に就いて廣く所攝の人を明すなり。

の牟尼は等く三駕を授く。法界の有情を緣するが故に他緣なり、聲獨の羊鹿に簡ぶが故に大の名あり、自他を圓性に運ぶが故に乘と曰ふ、此れ乃ち君子の行業菩薩の用心なり。北宗の大綱蓋し此の如し。

然るに此乘に二種の義有り、謂はく淺略と深祕と是れなり。多名句を以て一義理を説くは、此れ即ち淺略なり、一一の言名に無量の義を具するは即ち是れ眞言深祕なり。初に淺略を顯し、次に深祕を明さん。初に淺略とは大日尊、祕密主に告げて言はく、復次に祕密主大乘の行有り、無緣乘の心を發して法無我の性なり。何を以ての故に。彼往昔に是の如く修行せし者の如きは、蘊の阿頼耶を觀察して、自性は幻、陽、炎、影、響、旋火輪、乾闥婆城の如しと知るとは、釋して曰はく、即ち是れ第二重に、法無我性を觀することを明すなり。梵音には莽鉢羅といふ、是れ無の義なり、亦是れ他の義なり。謂ゆる他緣乘とは、謂はく平等の大誓を發して法界の衆生の爲に菩薩の道を行す、乃至諸の一闍提と及び二乘の未だ正位に入らざるとの者をも、亦當に種種の方便を以て拆伏し攝受して、普く同く是乘に入れしむべし、此無緣の大悲に約る故に他緣乘と名く。又無緣乘とは此偈祇に至りて始て能く阿陀那深細の識を觀察して、三界は唯心なり、心の外に更に一法として得べき者無しと解了す。此無緣の心に乘じて大菩提の道を行すが故に無緣乘と名く。【楞伽】解深密】等の經と【瑜伽】唯識】等の論とに説く所の、八識三性三無性皆是れ此意なり。

法相大乘は此を以て宗と爲す、此れ則ち謂ゆる菩薩乘なり。菩薩とは梵には菩提薩埵と

【初の資糧六云】
自下總じて五位の
第一資糧位を明す
【唯識論頌】 第九
卷。

【攝論】 無性の論
第七卷。

【即ち：攝む】 唯
識頌の初半を釋す

【眞勝義性】 第四
の勝義勝義諦。

【大善：位なり】
攝論頌の初半を釋
す。

【善根力：爲し】
清淨力を釋す。

【大願：爲す】 増
上力を釋す。

【惡友：能はず】
堅固心勝進を釋す

【此位】 資糧位。

【菩提の果：練す】
此下唯識の後半を
述ぶるに三段あり
初に兩名の異を示
す。

【此位の：能はざ
ればなり】 正しく
佛頌の義を解する
に初に菩薩の修行
を明す。

【此位には：練す】
此下轉じて三練廢

云ふ、二字を略去するが故に菩薩と云ふ。「唯識」瑜伽に皆五位を明す。五位と言ふは資糧と加行と通達と修習と究竟位との等なり。

初の資糧位とは「唯識論」の頌に、

乃し未だ識を起して

二取の隨眠に於て

「攝論」に云はく、

清淨と増上力と

菩薩の初て

即ち初に深固の大菩提心を發すより、乃し未だ順決擇の識を起して、唯識の眞勝義性に住せんと求めざるに至るまで、此に齊して皆是れ資糧位に攝む。大菩提心は善根力を以て自體と爲し、大願を以て緣と爲し、退屈せずして策發することを爲す、惡友に遇ふと雖も破壊すること能はざるなり。此位には未だ識相を伏除すること能はず、即ち地前三十心は皆是れ此位なり。菩提の果に望めて生死を出づることを求むるは、此れ自利の爲なり、故に資糧と名く、涅槃の果に望むるは即ち有情の爲にす、利他に約するが故に解脫分と名く。此位の菩薩は因と善友と作意と資糧との四の勝力に依るが故に、唯識の義に於て深く信解すと雖も、而れども未だ能所取空なりと了すること能はず、多く外門に住して菩薩の行を修す、二取の隨眠に於て未だ伏滅して、彼をして、二取の現行を起さざらしむること

堅固心をもて勝進するとを
無數三大劫を修すと名く

唯識の性に住せんと求めざるに至るまでには
由し未だ伏滅すること能はずと

を釋す。

【麤を練す】他

己の妙善布施等を自

て練行するに比較し

【四】白下別して

三賢に就て辨ず。

初に十住位を明す

【發趣】梵網經の

説に、地前三賢を

十發趣、十長養

十長養、十金剛と

名くるに依る、此

十種の法は初發心

して大乘に趣入す

る意。

【行不：故に】二利

の行を修して退屈

せざるをいふ。

【十力の處非處云

云】此は十力の初

の處非處智力を擧

げて他を等取す。

【十法】勤修養佛

樂住生死、主導世

間令除惡業、以勝

妙法常行教誨、歎

無上法、學佛功德

生諸佛前、恒蒙攝受

方便、演說寂靜三

昧、讚歎遠離生死

輪廻、爲苦衆生作

能はざればなり。此位には二障未だ伏除せず、勝行を修する時に三の退屈有り」と雖も、

而れども能く三事をもて其心を練磨す。一には無上正等菩提は廣大深遠なりと聞いて、心

便ち退屈するには、他の證し已るを引いて練す。二に施等の波羅蜜多は甚だ修すべきこと

難しと聞いて、心便ち退屈するには己を省て増増修練す。三には諸佛圓滿の轉依は、

極めて證すべきこと難しと聞いて、心便ち退屈するには麤を引いて妙に況して練す。

三賢位の中に初に十住とは、習種性即ち發趣なり、行不退を成するが故に住の名を立

つ。「佛地經」に依るに、第二の七日に初刹利の妙勝殿に在して説きたまふと。「華嚴」に云

はく、「爾時、法慧菩薩、佛の神力を承けて、菩薩無量方便三昧より起ちて菩薩の十住を説

きたまふ、十方に千佛刹微塵數の諸佛有す、同く法慧と名く、現前加被したまふ、十方に

十千佛刹の微塵數の菩薩有す、同く法慧と名く、雲のごとく集りて證を作す」と。自下の

は、皆華嚴經の文なり。

十住の心とは、一には、發心住とは、三有り。一には發心の緣。佛法僧と及び苦の衆生

とを見て菩提心を發す。二には所求の法。謂はく十力の處非處等を求めて心を發すなり。

三には所學の法。勤めて十法を學す、菩薩の心をして轉た増廣ならしめんと欲すればなり。

二に治地住とは二有り。一には利他の行、諸の衆生に於て十種の心を發す、謂はく利益心

等なり。二には自利の行、勤めて十法を學す、謂はく誦習多聞と虚閑寂靜と近善知識と發

言和悦とは、菩薩をして大悲を増長せしめんと欲するをもつてなり。三には修行住とは二

【地等】地界と水
 火風の三界、色無色界
 【欲等】色無色界
 を等取す。
 【十法を成就す】
 生貴住の下には七
 法を擧げ、初三を
 略す。一、永く
 退轉せず。二、諸
 佛の處に於て深く
 淨信を生ず。三、
 善く法を觀察す。
 【二には上十法】
 今十法の初三を
 擧ぐ。即ち一二三
 は過去未來現在の
 一切の佛法を了知
 し、四五六は三世
 一切の佛法を修學
 し、七八九は三世
 一切の佛法を圓滿
 し、十は一切諸佛
 の平等を了知す。
 【救護…安樂する
 等】十心の初三な
 り。四に哀愍、五に
 度脱、六に一切衆
 生の諸災難を離れ
 しむ、七に生苦
 を出でしむ、八に
 淨信を發生せしむ
 九に調伏を得しむ
 十に咸く涅槃を證

有り。一には煩惱を治するの行。十種の行を以て一切の無常と苦と空と無我等とを觀
 ず。二には小乘を治する行。勤めて十法を學す、謂はく衆生界と法界と世界と地等と欲等
 とを觀察して、菩薩をして智慧明了ならしめんと欲するなり。四に生貴住とは二有り。一
 には聖法の中に生じて十法を成就す、衆生と國土と世界と業行と果報と生死と涅槃とを了
 知するなり。二には上佛法を求めて十法を應學す、三世の一切佛法を了知す、増進して三
 世の中に於て心に平等を得せしめんと欲するなり。五に具足方便住とは二有り。一には利
 他の行十心を起す、所修の善根は皆一切衆生を救護し饒益し安樂する等の爲なればなり。
 二には自利の行、勤めて十法を學す、衆生の無邊を知る等なり、其心をして轉た復増勝に
 して染著する所無からしめんと欲するなり。六に正心住とは二有り。一には決定信、十種
 の法を聞くに心定んで動ぜざるなり、讀佛毀佛と讀法毀法と讀毀僧との等なり。二には決
 定智、勤めて十法を學す、謂はく一切法の無相と無體との等なり。其心をして不退轉の無
 生法忍を得せしめんと欲するなり。七に不退住とは二有り、一には不退行、十種の法を聞
 いて堅固にして不退なり、有佛無佛と有法無法との等を聞く、二には不退智、勤めて十法
 を學す、一即多なりと説き、多即一と説く等なり、増進して一切の法に於て善能く出離せ
 しめんと欲するなり。八には童眞住とは二有り。一には得勝行、十種の業に住す、謂は
 く身と語と意との行に失無きと、衆生の種種の欲と解と界と業との等を知るとなり。二に
 緣淨土、勤めて十法を學す、謂はく一切の佛刹を知る等なり、増進して一切の法に於て能

せしむ。

く善巧を得せしめんと欲するなり。九に法王子住とは二有り。一には利衆生行、善く十法を知る。謂はく善く諸の衆生の受生を知ると、煩惱の現起を知るとの等なり。二には求菩提行、勤めて十法を學す、謂はく法王處善巧と法王處軌度との等なり、増進して心に障礙無からしめんと欲するなり。十に灌頂住とは三有り。一には度衆生、十智を成就す、無数の衆生を開示し調伏するとの等なり。二には得深法身と及び身業と神通と變現となり、法王子等も亦知ること能はざるなり。三には所知廣、勤めて十智を學す、一切種智を増進せしめんと欲するなり。

【五】次に十行位を明す。

【有爲を…故に】一一の行の相狀に厭有爲(法身行)求菩提(報身行)愍有情(化身行)の三義を含むを示す。

【第二七：説く】

【無違逆行】舊に【無志行】ともいふは無志行といふ諸劇苦を受け而も求法濟生の念息まざるをいふ。

十行。十行とは長養性なり、修起を行と名く、有爲を厭ふが故に、菩提を求むるが故に、有情を悲愍するが故に、二諦を修するに依りて中品の障を伏す。第二七日に炎魔天の寶莊嚴殿に在りて説きたまふ。爾時、功德林菩薩、佛の神力を承けて菩薩善思惟三昧より起ちて菩薩の十行を説きたまふ、十方に萬佛刹微塵數の菩薩有り、同く功德林と名く、雲の如く集りて作證すと。

一には歡喜行とは、施を修するに二有り。一には自ら喜を生じて大施主と爲りて、凡そ所有の物悉く能く惠施す。二には他の喜を生ず、此行を修する時に一切を愛樂す、身肉を以て一切に充足せんことを願ふ、自身と施者とを見ず、其をして永く安隱快樂を得せしむ。二に饒益行とは、戒を修するに二有り。一には自利の行、淨戒を護持して六塵に著せず、假使那由他の天の諸の魔女有りて、端正殊麗なれども戒を傾くること能はず。

【善現行】菩薩は人法共に性相なしと悟り三業寂靜にして無縛著なれども而も利生の念を止めず、善巧攝化するをいふ。
 【空に順ずる行】空諦即ち自利行。假【有に隨ふ行】諦即ち利他の行。假【無著行】諸法寂滅を觀する故に一切に於て所著なく求法傳燈す。舊に尊【難得行】重行といふ。
 【善法行】菩薩、四無疑と陀羅尼門と諸善慧の法を得て、衆生のために清涼地となり、正法を守り佛種を絶しめざるをいふ。
 【十種の身】入無邊法界非趣身、入無邊法界諸趣身、不生身、不壞身、不實身、不壞身、不遷身、不壞身、一相身、無相身。

二に利他の行、未だ度せざる者をして度し、解脱し調伏せしむる等なり、心常に甚深の智慧に安住す。三に無違逆行とは、忍を修するに二有り。一には自利、常に忍法を修して謙下し恭敬す、假使那由他の衆生有りて言語をもて毀辱し、器仗を以て逼害すとも心淨にして歡喜す。二には利他、此身空寂にして我我所無きをもて、自他をして覺悟し心に退轉せざらしむ。四に無屈撓行とは精進に二有り。一には自利の行、第一精進なり、煩惱を斷ずるが故に、一切衆生の諸根の勝劣を知らんが爲の故に。二には利他の行、設ひ衆生の爲には微塵數の劫を経て苦を受くれども、彼衆生をして永く諸苦を脱し、乃し究竟に至らしむ。五に離癡亂行とは、定を修するに二有り。一には癡亂を離れて正念を成就す、此に死し彼に生ずとも、入胎出胎するに心に癡亂無し。二には深法を悟る、恐怖の聲悅意の聲等を聞くとも而も壞すること能はず、諸の三昧の同一體性を知り、一切智に於て不退轉を得るなり。六に善現行とは、慧を修するに二有り。一には空に順ずる行、三業清淨にして虛妄無きが故に、無相甚深にして眞實に住す。二には有に隨ふ行、諸の衆生の常に癡闇に處するを念す。若し未だ調伏せざるをば、我當に先づ成就し調伏することを作して、必ず菩提に至らしむべし。七に無著行とは、方便を修するに二有り。一には取著すること無し、念念の中に於て僧祇の界に入り、見佛聞法するに皆所著無し。二には諸の有情を利す、一切の法は幻の如く、諸佛は影の如く、菩薩の行は夢の如く、說法は響の如しと觀じて、自利利他清淨に満足す。八に難得行とは、願を修するに二有り。一には利他の行な

【眞實行】三世の佛の眞實語不二語

を學し、説の如く行じ、行の如く語

り、言行相應し虚假ならざるをいふ

【三八】第三に十廻向位を明す。

【一】によ云云】第一廻向を明す。

【二】によ云云】第二十三卷十四向品の文。

【二】によ云云】第二十四卷の文

【一切佛廻向】等一切佛廻向なるべし、寫誤か。

【五】によ云云】新經第二十五の所説。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

【六】によ云云】經第二十五の十紙より第二十八末に至りて説けり。

り。譬へば船師の、此岸と彼岸と中流とに住せずして、而も能く運度して此より彼に至る

が如し、菩薩も亦爾なり。二には報を求めざるなり、一縷一毫及び一字の讚美の言を求

めず、安隱なる彼菩提に至らしめんが爲の故なり。九に善法行とは、力を修するに二有り。

一には無礙力、四無礙解を得て假使那由他の衆生ありて、各別に問ふ所をも皆爲に酬對して

疑惑を除かしむるなり。二には示導力、十種の身を成就して等く爲生の爲に清凉地と作り、

能く一切の佛法の源を盡す故に。十に眞實行とは、智を修するに二有り。一には十力智、

第一誠諦の語を成就して衆生の是處非處を知る智等なり。二には現神力、念念に遍く十方

世界に遊びて、如來の自在神力を示現し、親近する者有れば歡喜清淨ならしむ。

十廻向。十廻向とは不可壞性の十金剛なり。已が所修を廻して趣向すること有るが故に、

衆生と菩提と涅槃とに廻施するに不可壞性なり。第二七日に都史天の一切の妙寶所莊嚴殿

に在して説きたまふ。爾時、金剛幢菩薩、佛の神力を承けて菩薩智慧光明三昧より起ちて

菩薩の十廻向を説きたまふ。十方に十萬佛刹微塵數の諸佛有す、同く金剛幢と名く、現前

加被したまふ、百萬佛刹微塵數の菩薩有す、同く金剛幢と名く、雲の如くに集りて證を作

す」と。一には救護一切衆生離衆生相廻向とは、此菩薩の修する所の六度四無量心は、一

切衆生の爲に燈と作り炬と作りて無明の闇を破す。此文に三有り。一には衆生に廻施し、

二には菩提に廻向し、三には一切の法の眞實性に廻向するなり。二に不壞廻向とは此菩薩

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

は佛法僧に於て不壞の信を得、三乘等に於て心轉た増長し、念念に佛を見て阿僧祇の供具

【七に隨順云云】
經第九卷所說。

【一切衆生を濟度せんと願す。】

を以て諸佛を供養するなり。文の三前の如し、此善根を以て一切衆生を度脱し清淨の智を得、寂滅の性を證せんと欲ふが爲に等なり。三に一切佛廻向とは、此菩薩は去來現在の諸佛の廻向の道に隨順し修學して、一切色乃至觸法の、若は美若は惡を見て愛憎を生ぜざるなり。文の三前の如し、此善根を以て衆生に授け、金剛の菩提心に安住し實際に住す。四に至一切處廻向とは、此菩薩善根を修習するに、實際の如く處として至らざること無からんと願ひ、去來現の劫の佛の正覺を成ずるに、不可説の香雲摩尼の供養を以てせんことを願ふ等なり。文の三前の如し、此善根を以て普く衆生を攝し、如來智に入り法界に充遍せん。五に無盡功德藏廻向とは、此菩薩は普く諸の清淨業を行じ、不可思議の自在三昧に入りて、善巧方便をもて能く佛事を作し、佛の光明を放ちて普く世界を照す。文の三前の如し、己が善根を以て衆生界に及ぼし、薩婆若に趣き遍く法界に入るのみ。六に隨順堅固一切善根廻向とは、此菩薩は或は帝王と爲れども刑せず罰せず、四攝法を以て諸の衆生を攝するに、七寶妻子手足支分を歡喜して盡く施す。文の三前の如し、彼善根を以て諸の衆生を願とし智慧海に入る、實際に安住せん等なり。七に隨順一切衆生廻向とは、此菩薩は隨ひて積集する所の、一切の善根無量の三昧に入り、智慧を以て一切衆生の心行の差別を觀察し、咸く清淨ならしむ。文の三前の如し、此善根を以て一切衆生を願とし、無上智に住し平等に清淨ならしめん。八に眞實相廻向とは此菩薩は正念明了にして其心堅住し、智慧の明を得て善知識の爲に攝受せらる、如來の慧日明かに其心を照して永く

【九に無著云云】
經第三十一卷の所説。

【十に等法云云】
經第三十二初より第三十三終まで説く。

【七】資糧位の釋
竟り、次に第二に
加行位を明す。
【論】唯識論第九
【少物】眞如相。

【煖等の四法云云】
四善根の中、煖頂
の二は四尋思觀な
り、所取の空を觀
ず、是を初位とい
ひ、忍世の二位は
四如實實なり、是
れ能取の空を觀ず
是を後位といふ。

癡冥を滅す。文の三前の如し、此善根を以て衆生界を盡し、等正覺を成じ法界に周遍せしめん。九に無著無縛解脫廻向とは、此菩薩は一切善根に於て心に尊重を生じ、普賢菩薩の行願を修習し、佛の灌頂を得て一念の中に於て方便地に入る。文の三前の如し、此善根を以て衆生を開悟し、大智慧を得て佛境界に住す。十に等法界無量廻向とは、此菩薩は離垢の總を以て其頂に繋け、法師位に住して廣く法施を行じ、諸の衆生の爲に調御師と作り一切智道を示す。文の三前の如し、是の如きの行を修して、普く衆生の爲にし、一切智を成じ法界に充滿せん。

二に加行位を明さん。加行位とは第十の廻向の末なり、『論』に云はく、

現前に少物を立て
是れ唯識の性なりと謂へり

所得有るを以ての故に
實に唯識に住するには非ずと

菩薩先に、初無數劫に於て、善く福德と智慧との資糧を修す、見道に入りて唯識の性に住せんが爲に、復加行を修して二取を伏除す、謂はく煖と頂と忍と世第一法となり。此四を總じて順決擇分と名く。謂はく見道の中には彼無漏なるが故に名けて眞實と爲す。此煖等の四は彼分に順ひ越けば順決擇分と名く、前の順解脫は既に初て發心して究竟の果を求むるが故に遠し、此順決擇は見道に隣近するが故に近し。煖等の四の法は四尋思と四如實智との初と後との位に依りて立つ。四尋思とは名と義と自性と差別とは、假のは有り實のは無しとす、實の如く遍く此四も識に離れ、及び識も有に非ずと知るを如實智と名

【現觀せしむ】無
漏の妙智頓に現前
し、妙理を對觀し
且つ二障を斷滅す
斷證明朗なる故に
名く、又はれ見道
の異名。

く。是の如く煖と頂とは能取の識に依りて所取の空なりと觀す。下忍の起する時には境の空相を印す、中忍の轉する位には能取の識の於へに、境の如く是れ空なりと順樂し忍可す。上忍の起する位には能取の空を印す、世第一法には變べて空相を印す。皆相を帶するが故に未だ實を證すること能はざる故に。説かく、菩薩、此四の位の中には猶現前に於て、小物を安立して是れ唯識の眞勝義の性なりと謂へり、彼空と有との二相、未だ除かざるを以てなり、相を帶せる觀心は所得有るが故に、實に眞唯識の理に安住するに非ず。是の如きの義に依りて『厚嚴經』に云はく、「菩薩は定位に於て影は唯是れ心なりと觀じて義想を既に滅除す、審かに唯し自の相のみなりと觀す。是の如く内心に住して所取は有に非ず、次に能取も亦無なりと知る、後には無所得に觸すといへり。此加行位には唯し能く伏除す。全に未だ滅すること能はず。安立諦と非安立諦との於へに俱に學し觀察す、當來の二種の見を引かんが爲の故なり、非安立諦は是れ正しき所觀なり、二乗の唯し安立のみを觀するが如きには非ず。菩薩の此煖等の善根を起すことは、方便の時には諸の靜慮に通ずと雖も、而も第四に依りて方に成滿することを得、最勝の依に託して見道に入るが故に。唯欲界の善趣の身に依りて起す、餘は慧と厭との心、殊勝に非ざるが故に、故に『顯揚』に云はく、極感なるをもて惡趣に非ず、極欣なるをもて上二に非ず、唯欲界の人天にのみ佛出世し現觀せしむ」との文に依る。煖善根とは、明得定に依りて下の尋思を發し所立無しと觀するを、立てて煖位と爲す、謂はく此位の中に創て所取の名等の四法は皆自心の變なり、

【八】三に通達位を明す。

【論】唯識論第九の位。

【智と眞如】根本智と眞如の理。

【相見】相分（所縁の境）見分（能縁の用）。

假の施設せるは有り、實のは得べからずと觀す。頂善根とは、明増定に依りて、上の尋思を發して所取無しと觀するを、立てて頂位と爲す。謂はく此位の中には重ねて所取の名等の四法は、皆自心の變なり、假の施設せるは有り、實のは得べからずと觀す。忍善根とは印順定に依りて、下の如實智を發して、所取を無するが於には決定して印持す、能取を無する中にも亦順樂忍す、既に實境として能取の識に離れたること無し、寧んぞ實識として所取の境を離れたること有らんや。世第一善根とは、無間定に依りて上の如實智を發して二取の空を印するを世第一法と立つ、謂はく前の上忍には唯能取の空のみを印す、今の世第一法には二空を雙べて印す。眞見を起すが故に初阿僧祇劫の滿なり。

三には通達位を明す。通達位とは謂はく、聖種性なり見道位なり、論に云はく、若し時に所縁の於に

爾時唯識に住す

智都て所得無くなんぬ
二取の相を離るるが故に

若し時に菩薩、所縁の境の於に、無分別智都て所得無くなんぬ、種種の戲論の相を取らざるが故に、智と眞如と平等平等なり、俱に能取と所取との相を離るるが故に。有る釋には此智には相と見と俱に無し、有る釋には此智には相と見と俱に有なり、有る釋には此智には見は有りて相は無し、相無くして取るは相をば取らずと説ける故に、此れ正義なり。加行の無間に此智の生ずる時に、眞如に體會するを以て通達位と名く、初て理を照す故に亦は見道と名く。此に二種有り。一には眞見道。謂はく即ち説く所無分別智なり、實

【二障非隨眠】顯顯所知の二障の分別起の煩惱。

【多刹那】無間、解脫、勝進の三道をいふ。

【一心】一心眞見道。

【前の眞見道は：攝す】二智の攝屬【初のは賢位に在り】第一思現觀は資糧三賢位に在りと。

【後のは：收む】第六は佛果に收む【見と俱に思す】見道無漏智と俱起す。

【多の百門云云】下に明せり。即ち百三昧を證して百の如來を見奉る等をいふ。

【九】第四に修習位を明す。

【華嚴經】新經第三十四、十地品の文。

【唯識論】第九。

【唯識論】第九。

【唯識論】第九。

【唯識論】第九。

に二空所顯の眞理を證し、實に二障の分別の隨眠を斷ず、多刹那に事方に究竟すと雖も、即ち一無間一解脫一勝進にして、而も相等しきが故に總じて一心と説く。此に復二有り、漸と頓との斷なるが故に。二には相見道。此に復二有り。一には非安立諦を觀するに三品のの心有り、二には安立諦を緣するに十六心有るが故に。前の眞見道には唯識の性を證し、後の相見道には唯識の相を證す、二が中には初勝れたり故に頌に偏に説く。前の眞見道は根本智に攝す、後の相見道は後得智に攝す。此二の見道に六現觀を攝すとは、謂はく思現觀と信現觀と威現觀と智諦現觀と邊智諦現觀と究竟現觀となり。此眞見道には彼第四の現觀の少分を攝し、此相見道には彼第四と第五との少分を攝し、初のは賢位に在り、思に由りて成ずる所なり、後には是れ果に收む、謂はく盡智等なり、第二と三とは見と俱に起すと雖も而も自性に非ず、故に相攝せざるなり。菩薩此二の見道を得る時には如來の家に生じ極喜地に住し、善く法界を達し、諸の平等を得し、常に諸佛大集會の中に生ず、多の百門に於て已に自在を得、自ら久しからずして大菩提を證し、能く未來を盡し一切を利樂すべしと知るが故に。

【九】第四に修習位。修習位とは十地の通名なり、依持して生長するが故に名けて地と爲す。『華嚴經』に云はく、「金剛藏の言はく、我諸佛の國土に有りて其中の如來に十地を説かさる者を見ず」と。『唯識論』に云はく、

無得なり不思議なり

是れ出世間の智なり

【轉依】轉とは轉捨轉得の義、依は所依の義、性相には眞如をいふも用宗は第八識なり。此中に所藏する二障の種子は所轉捨の法、菩提と涅槃は所轉得の法なり。第八は此二の所依なれば轉依といふ。【二障の種子】俱生の煩惱所知障の種。【塵重】種子、又は習氣。【廣大の轉依】佛果。

二の塵重を捨つるが故に

便ち轉依を證得す

菩薩前の見道より起ち已りて、餘の障を斷じて轉依を證得せん爲に、復數數無分別智を修習す、此智は所取と能取とを遠離せり、故に無得と説く、妙用測り難ければ不思議と名く。二取の隨眠は是れ世間の本なり、唯此のみ能く斷ずるを出世間と名く。二障の種子に塵重といふ名を立つ、彼をして永く滅せしむ。故に説いて捨と爲す。此にして能く彼の二の塵重を捨するが故に、便ち能く廣大の轉依を證得す。數數無分別智を修習して、本識の中の二障の塵重を斷ずるに由るが故に、能く依他起の上の遍計所執を轉捨し、及び能く依他起の中の圓成實性を轉得す。煩惱を轉ずるに由りて大涅槃を得、所知障を轉じては無上覺を證得す。云何が二種の轉依を證得する。謂はく十地の中に十勝行を修し、十重障を斷じ十眞如を證得す、二種の轉依を斯に由りて證得す。轉依の位の別なること略して六種有り。一には損利益能轉、謂はく初の二の位なり。二には通達轉、謂はく通達位なり、謂はく見道に在り。三には修習轉、十地の行に在り。四には果圓滿轉、謂はく究竟位なり。五には下劣轉、謂はく二乗の位なり。六には廣大轉、謂はく大乘の位なり。此が中の意は廣大轉依を説く、二の塵重を捨して證得するが故に。轉依の義別に略して四種有り。一には能轉道、二障の種を伏すと謂はく永斷するとの故に。二には所轉依、持種は本識なり迷悟は眞如なり。三には所轉捨、所斷は二障なり、所捨は有と無となり。四には所轉得、所顯は涅槃なり、所生は菩提なり。此四義の中には所轉得を取る、顕に證得轉依の言を説くが故に。

然るに初地より覺道を成ずるに至るまでの諸地の不同は皆此位の攝なり、名を列ね相を辨ずること下の如く應に知んぬべし。第二七日に他化自在天宮摩尼寶藏殿に在す。爾時、金剛藏菩薩、佛の神力を承けて菩薩大智慧光明三昧より起ちて菩薩の十地を説きたまふ。爾時、十方に十億佛刹微塵數の諸佛有り、同く金剛藏と名く、現前に加被したまふ。十億佛刹微塵數の菩薩有り、同く金剛藏と名く、雲のごとくに集りて證を作す。

【第一に云云】以下十地の行相を明す、今は初なり。
【仁王經】 舊譯上卷教化品の文。
【華嚴經】 新經第三十四の十紙の文初に釋名。
【此善・配せよ】 離怖畏を明す。
【此善・大捨と爲す】 二利を明す。

第一に歡喜地とは、『仁王經』に云はく、「若し菩薩百佛國中に住し閻浮提の四天王と作る、百法門を修し二諦平等の心をもて一切衆生を化す」と。『華嚴經』に云はく、「佛子菩薩歡喜地に住して、多くの歡喜と多くの淨信と多くの無惱害と多くの無瞋恨とを成就す、諸佛の法を念じ、諸菩薩の法を念じ、清淨波羅蜜を念じ、入一切如來智を念じ、佛境界の中に生ずるが故に、一切菩薩平等性の中に入るが故に、一切の怖畏を遠離するが故に皆歡喜を生ず。此菩薩は已に五の怖畏を遠離することを得るが故に。謂ゆる不活畏と惡名畏と死畏と惡道畏と大衆威德畏となり。已に我想を離れて自身を愛せず、何に況んや資財をや、故に他の供を求めずして一切衆生に給施するが故に。我見を遠離し我想無きが故に、決定して佛菩薩を離れざるが故に、世に等しき者無し、況んや勝れたる有らんや。故に此を即ち次の如く五の怖畏に配せよ。此菩薩は大悲を首と爲し、廣大の志業有りて、能く沮壞すること無きなり。諸佛の教法を敬順し尊重し、日夜に善根を修習して厭足すること無きが故に、善知識に親近するが故に、多聞を求めて厭足無きが故に、一切智地を求むるが故に、

【力無畏不共】十力四無畏十八不共法。

【助道法】三十七菩提分法。

【十度の離れず】偏多を明す。

【唯識論】第九の文。

【異生性；俱起せざる故に】斷障を明す。

【一種を斷す】煩惱の分別起の種

【此は即ち；名けんや】問答料簡す

異生性の分別起は初地入心見道通達

位所斷の惑、十重障の中に何をか初

地住出の通達位の所斷の障なるやと問ふ。

【住と滿】初地の二心。

【進んぐ斷すべき障】俱生の所知障

【三時の道】初地中の三僧祇、即ち入住出の三心。

如來の力無畏不共の佛法を求むるが故に、諸波羅蜜と助道法とを求むるが故に。乃至凡そ所有の物倉庫七寶頭目手足皆惜む所無し、諸佛の廣大の智慧を求めんが爲なり、是を大捨と爲す。十度の中には檀波羅蜜を行じ、四攝の中には布施偏多なり、餘も修せざるには非ず、力に隨ひ分に隨ふなり。多くは閻浮提の王と作る、諸の所作の業、佛法僧を念ずることとを離れず、乃至一切種と一切智智とを具足することを念ずることを離れず」と。唯識論に云はく、「極喜地とは初に聖性を獲、具に二空を證し、能く自他を益して大喜を生ずるが故に。施波羅蜜多を行す、此に三種有り、謂はく財施と無畏施と法施となり。異生性障を斷す。謂はく二障の中の分別起の者なり、彼種に依りて異生性を立つるが故に。二乘の見道の現在前する時には、唯一種を斷ずるを聖性を得と名く、菩薩の見道の現在前する時には、具に二種を斷ずるを聖性を得と名く。二の眞見道の現在前する時には、彼二障の種必ず成就せず、猶し明と闇と俱起せざるがごとくなる故に。此は即ち通達なり、何をか修習と名けんや、住と滿との中に時既に淹久し、理として進んで斷すべき所の障を斷すべし、爾らずんば三時の道、別なること無かるべし。故に菩薩は現觀を得已りて、復十地の修道の位の中に於て、唯永に所知障を滅する道のみを修す、煩惱障を留めて助願受生す、二乘の速かに圓寂に趣くが如くには非ずと説く、故に修道の位には煩惱を斷せず、將に成佛せんとする時に、方に頓に斷ずるが故に。遍行眞如を證す、謂はく此眞如は二空に顯はされて、一法として在らずといふこと有ること無きが故に。『華嚴經』に云はく、「此

【百如來】 報佛。

【四には…成就す】
此二種は化身攝化分齊を明す。

【百法明…入る】
蘊處界等の百法明門を證す。

【第二に…如し】

【離垢】 破戒の惑法を棄捨するなり

【上品の十善】 三重の中、解教二乘所修の十善を略し菩薩所修のみを引く。

【十方四無…得るなり】 此下佛乘の上品の十善を明す。

【此菩薩無量…故に】 離垢の名義を明す。

【四攝の法…作る】 増勝の行果を明す

地の菩薩は、勤めて精進を加へて、一念の頃に於て百三摩地を證し、淨天眼を以て諸の佛國を見、二には百如來を見、三には百世界を動し、身も亦能く彼佛世界に往きて大光明を放つ。四には化して百類と爲りて、普く他をして見せしめ、五には百類の所化の有情を成就す。六には若し身を留めんと欲へば百劫住することを得。七には前後際百劫の中の事を見る。八には知見をもて能く百法明門に入る。九には化して百身と作る。十には身に皆能く百菩薩の眷屬を現す。若し菩薩殊勝の願力を以て、自在に示現することをいはば、是數に過ぎたり、乃至百千億劫にも數知すること能はず」と。

第二に離垢地とは「仁王經」に云はく、「若し菩薩、千佛國の中に住し初利天の王と作り千の法門を修し、十善道を以て一切衆生を化す」と。「華嚴經」に云はく、「佛子、菩薩摩訶薩、二地に入らんと欲はば當に十種の心を起こすべし、謂ゆる正直心と柔順心と堪能心と調伏心と寂靜心と純善心と不雜心と無願戀心と廣心と大心とを以て、第二の離垢地に入ることを得。此菩薩是念を作さく、十不善道は是れ三惡趣の因なり、十善業道は是れ人天乃至有頂處の因なり、上品の十善は修治清淨にして心廣くして無量なるが故に、悲愍を具足すると衆生を捨てざると、諸佛の大智を希求するとの故に、乃至十方四無所畏を證するが故に、一切の佛法皆成就することを得るなり。此菩薩は無量百千億那由他劫に於て、慳嫉破戒の垢を遠離するが故に。四攝の法の中には愛語偏多なり、十度の中には戒波羅蜜多を修持す、多く輪王と作る」と。「唯識論」に云はく、「二には離垢地、淨尸羅を具して能く微

【第三…いふ】三

に發光地を明す。三

【發光地】菩薩、

四禪八定と大乘教

の四種の總持を得

聞思修三慧の光を

發生する故に名く

【十萬の法門】華

嚴にいふ百千三昧

等。

細の毀犯を起する煩惱の垢を遠離するが故に。戒波羅蜜多を行す、謂はく攝善法戒と攝律儀戒と饒益有情戒となり。邪行障を斷じ最勝眞如を證す、謂はく此眞如は無邊の徳を具して、一切の法に於て最も勝れたりと爲すが故に」と。『論』に準せば多の千門に於て已に自在を得と云ふべし。『華嚴經』に云はく、「一刹那の頃に於て千の三摩地を證し、淨天眼を以て諸の佛國を見、二には千の如來を見、三には千の世界を動し、身亦能く彼佛世界に往きて大光明を放つ。四には化して千類と爲りて、普く他をして見せしめ、五には千類の所化の有情を成就す。六には若し身を留めんと欲へば千劫住することを得。七には前後際千劫の中の事を見る。八には知見して能く千法明門に入る。九には化して千身と作る。十には身に皆能く千菩薩の眷屬を現す」と。然るに『仁王經』に依らば、二地の菩薩は切利天の王と爲るといふ。若し『華嚴經』には轉輪聖王と作るといふ、二説不同なり、具に引くこと上の如し。

第三に發光地とは、『仁王經』に云はく、「若し菩薩十萬佛國の中に住し炎天王と作りて十萬法門を修す、四禪定を以て一切衆生を化す」と。『華嚴經』に云はく、「佛子菩薩摩訶薩、第三の發光地に入らんと欲はば、當に十種の深心起すべし。謂ゆる清淨心と安住心と厭捨心と離貪心と不退心と堅固心と明盛心と勇猛心と廣心と大心となり、是十心を以て第一地に入ることを得。此菩薩は四禪四空に於て、次第に隨順して無量の神力を得、能く大地を動し一身を多身と爲し、多身を一身と爲す、或は隠れ或は顯る、石壁山の障も往く所

無礙なること猶し虚空の如く六通具足せり。此菩薩は忍辱心と柔和心と謙順心と悦美心と不嗔心と不動心と等、皆轉た清淨なり。四攝の中に於ては利行偏多なり、十度の中には忍辱波羅蜜偏多なり、餘をも修せざるには非ず、力に隨ひ分に隨ふ、多くは三十三天の王と作る」と。「唯識論」に云はく、「三に發光地とは、勝定と大法の總持とを成就して、能く無邊妙慧の光を發すが故に。忍辱波羅蜜多を行す、謂はく耐怨害忍と安受苦忍と諦察法忍となり。闇鈍障を斷じ勝流眞如を證す、謂はく此眞如より流する所の教法は、餘の教法に於て極めて勝れたりと爲すが故に」と。「華嚴經」に云はく、「一念の頃に於て百千の三摩地を證し、淨天眼を以て諸の佛國を見、二は百千の如來を見、三には百千の世界を動じ、身も亦能く彼佛世界に往きて、大光明を放つ、四には化して百千の類と爲り、普く他をして見せしむ。五には百千類の所化の有情を成就す。六には若し身を留めんと欲へば、百千劫住することを得。七には前後際百千劫の中の事を見、八には知見して能く百千法門に入る。九には化して百千の身と作る。十には身に皆能く百千の菩薩の眷屬を現す」と。然るに『仁王經』に依らば、三地の菩薩は夜摩天の王と作るといふ、若し『華嚴經』には三十三天の王と作るといふ。

【第四に：如し】
四に焰慧地を明す

第四に焰慧地とは、『仁王經』に云はく、「若し菩薩百億佛國の中に住し、兜率天の王と作りて百億の法門を修す、道品を行じて一切衆生を化す」と。「華嚴經」に云はく、「佛子菩薩摩訶薩、第四地に入らんと欲はば、當に十法明門を修行すべし、謂ゆる衆生界と法界と世

【身受心法を觀じ】
四念住。

【未生と已生云云】
四正勤。

【生ぜ・斷ずるも】
の故に。未生惡と已生惡とに就いていふ。

【生ぜ・故に】
未生の善と已生の善とに就いていふ。

【念覺云云】
七覺支、八正道を示す。

【禪定・道】
四神足、五根、五力、七覺支、八正道。

【六識・攝す】
第七識と俱なるを簡ぶ。等とは我所邊見、我慢、我愛を等取す。

【初・行ぜざりぬ】
此下、難を設けて釋す。

【施・修】
施戒忍。

【華嚴經・如し】
兩經所明の同異を明す、仁王乃至上の如しとは異を辨ず。

【華嚴經・如し】
兩經所明の同異を明す、仁王乃至上の如しとは異を辨ず。

界と虚空界と識界と欲界と色界と無色界と廣大信解界と天心信解界とを觀察す、此十法明門を以て焰慧地に入ることを得。此菩薩の修行は身受心法を觀じ、未生と已生との不善法を生ぜざらしむると斷ずるとの故に、未生と已生との善法を生ぜしむると失せざるとの故に。信と進と念と定と慧との根力等と、念覺分と擇法と精進と喜と輕安と定と捨との等の覺分と、正見と正思惟と正語と正業と正命と正精進と止念と正定との等の禪定と根と力と覺と道とを修す。四攝の法に於ては同事偏多なり、十度の中には精進波羅蜜偏多なり、此地には當に夜摩天の玉と作る」と。「唯識論」に云はく、「四には焰慧地は最勝の菩提分法に安住して、煩惱の薪を焼く慧焰増するが故に、精進波羅蜜多を行す、謂はく被甲精進と攝善精進と利樂精進となり。微細煩惱現行障を斷ず。第六識と俱なる身見等に攝す。最下品なるが故に、作意せずして緣するが故に、遠きより隨ひて現行するが故に説いて微細と名く、彼は四地の菩提分法を障ふ、四地に入る時に便ち能く永斷す。初二三地に施と戒と修とを行するは相世間に同なり、四地に菩提分法を修得するをもて方めて出世と名く、故に能く永に二の身見の等きを害す。第七識と俱にして我と執する見等は、無漏道と性相達せるが故に、八地以去のみに方めて永に行ぜざりぬ。無攝受眞如を證す、謂はく此眞如は繫屬する所無し、我執等の依取する所に非ざるが故に」と。「華嚴經」に云はく、「一念の頃に於て百億の三摩地を證す、乃至身皆能く百億の菩薩の眷屬を現す」と。「仁王華嚴」の二説は上の如し。

【第五：如し】五に難勝地を明す。【善勝地】菩薩此地に至れば、俗諦の無分別智と眞諦の無分別智と俱起せしむるが故に、難と云ひ、前四地に勝るる故に勝といふ。

【世間の伎藝】聲明算數、圖書、方聲樂、歌舞音樂等。

【安住靜慮：慮】靜慮の三。現法樂住に安住すると、六通を引發すると、利樂有情の事を辨ずるとなり。

【類差別無し】生死涅槃と平等一味にして種類別なしと。

第五に難勝地とは、『仁王經』に云はく、「若し菩薩、千億佛國の中に住し、化樂天の王と作りて千億の法門を修す、二諦四諦八諦をもて一切衆生を化す」と。『華嚴經』に云はく、「佛子菩薩摩訶薩、第五地に入らんと欲はば、當に十種の平等清淨心を以て趣入すべし、謂ゆる過去の佛法の平等と、未來の佛法の平等と、現在の佛法の平等と、戒平等と心平等と、除見疑悔平等と道非道智平等と、修行知見平等とに於てし、一切菩提分法上上觀察平等と、教化衆生清淨心平等とに於てす、此十種の平等清淨心を以て、第五地に入ることを得。此菩薩は如來の護念を受くるが故に不退轉の心を得、實の如く此は是れ苦聖諦なり集聖諦なり滅聖諦なり道聖諦なりと知る、善く世俗諦と第一義諦とを知る、此菩薩は衆生を利益せん爲の故に、世間の伎藝該習せざること廢し。四攝法を行す、十度の中には禪波羅蜜偏多なり、多くは兜率天の王と作る」と。『唯識論』に云はく、「五には極難勝地は眞と俗と兩の智の行相の互に違するを合して相應せしむること極めて難勝なるが故に。靜慮波羅蜜多を行す、謂はく安住靜慮と引發靜慮と辨事靜慮となり。下乘般涅槃障を斷ず、生死を厭ひ樂ひて涅槃に趣かしむること、下の二乗の苦を厭ひ滅を欣ふに同なり。彼は五地の無差別道を障ふれば五時に入る時に便ち能く永に斷ず。類無別眞如を證す、謂はく此眞如は類差別無きこと、眼等の類、異有るが如くには非ざるが故に」と。『華嚴經』に云はく、「一念の頃に於て千億の三摩地を證し、淨天眼を以て諸の佛國を見、二には千億の如來を見、三には千億の世界を動し、身も亦能く彼佛世界に往きて大光明を放つ。四には

化して千億の類と爲りて普く他をして見せしむ。五には千億の類の所化の有情を成就す。六には若し身を留めんと欲へば千億劫に住することを。七には前後際の千億劫の中の事を見、八には知見して能く千億の法門に入る。九には化して千億の身と作る。十には身に皆能く千億の菩薩の眷屬を現す」と。教に二説有り具に引くこと前の如し。

【第六：如し】六に現前地を明す。

【現前地】此地の菩薩勝智を起して十二因縁を觀じて染淨なしと觀ずる智を現前せしむるをいふ。

【三脱門】空無相無願。

第六に現前地とは『仁王經』に云はく、「若し菩薩、十萬億佛國の中に住して他化自在天の王と作り、十萬億の法門を修す、十二因縁の智をもて一切衆生を化す」と。『華嚴經』に云はく、「佛子、菩薩摩訶薩、第六地に入らんと欲はば、當に十平等の法を觀察すべし、謂ゆる無相の故に平等なり、無體の故に、無生の故に、無滅の故に、本來清淨の故に、無戲論の故に、無取捨の故に、寂靜の故に、幻夢影響等の如くなるが故に、有無不二なるが故に。是の如く一切の法自性清淨なりと觀じて、隨順して違ふること無くして、現前地に入ることを得。此菩薩は大悲を以て首と爲して世間の生滅を觀ず、謂はく業を田と爲し識を種と爲し、無明の闇に覆はれ愛水を潤と爲す、我慢漑灌し見網增長して名色の牙を生ず、名色增長して五根を生じ、諸根相對して觸を生ず、乃至終沒するを死と爲す、是の如く十種をもて順逆に諸の縁起を觀じ三脱門を修す。此地の中に住して般若波羅蜜偏多なり、多くは善化天の王と作る」と。『唯識論』に云はく、「六に現前地、縁起に住せる智、無分別の最勝の般若を引きて現前せしむるが故に。般若波羅蜜多を行す、謂はく生空の無分別慧と、法空の無分別慧と、俱空の無分別慧となり。麤相現行障を斷ず、無染淨

【第七：如し】七に遠行地を明す。此地の菩薩純無相觀に住して、遠く世間と二乗との有相の行を出過する故に名

眞如を證す、謂はく此眞如は本より性、染も無く亦後に方に淨なりと説くべからざるが故に」と。「華嚴經」に云はく、「一念の頃に於て百千億の三摩地を證し、淨天眼を以て、諸の佛國を見、二には百千億の如來を見、三には百千億世界を動じ、身も亦能く彼佛世界に往きて大光明を放つ。四には化して百千億の類と爲りて善く他をして見せしむ。五には百千億類の所化の有情を成就す。六には若し身を留めんと欲へば百千億劫に住することを得、七には前後際の百千億劫の中の事を見、八には知見して能く百千億の法門に入る。九には化して百千億の身と作る。十には身皆能く百千億の菩薩眷屬を現す」と。一文不同なり、具に引くこと上の如し。

第七に遠行地とは「仁王經」に云はく、「若し菩薩百萬億の佛國の中に住し、初禪の王と作りて百萬億の法門を修す。方便智願智をもて一切衆生を化す。『華嚴經』に云はく、「佛子、菩薩摩訶薩、第七地に入らんと欲はば、當に十種の方便慧を修すべし、謂はく空無相無願三昧等を修するなり、是の如きの十種の方便慧は殊勝の行を起して第七地に入ることを得。第六地より來能く滅定に入る、今此地に住して能く念念に入り念念に起ちて而も作證せざるなり、大方便を以て生死を示現すと雖も、而も恆に涅槃に住す、眷屬圍繞すと雖も而も常に遠離を樂ふ、願力を以て三界に生を受くと雖も、世法の爲に染せられず、佛境界を得と雖も而も魔の境界を示現し、外道に同することを示す、如實三昧智慧光明を獲て隨順し修行す、一切二乘能く及ぶこと有ること無し、悉く能く一切衆生の諸惑の泥滝を乾竭

す。十度の中には方便波羅蜜偏多なり、多くは自在天王と作る」と。『唯識論』に云はく、「七には遠行地、無相住の功用の後邊に至りて世間と二乗との道を出過するが故に。方便善巧波羅蜜多を行す、謂はく廻向方便善巧と拔濟方便善巧となり。細相現行障を斷ず、彼は七地の妙無相道を障ふれば、七地に入る時に便能く永に斷ず、斯に由りて七地に二愚と及び彼蠱重とを斷ずと説けり。一には細相現行愚、即ち是れ此中に生有り執する者なり、猶流轉の細生の相を取るが故に。二には純作意勤求無相愚、即ち是れ此中に滅有りと執する者なり、尙還滅の細滅の相を取る故に、純ら無相の於に作意し勤求して、未だ空の中に有的勝行を起すこと能はず。法無別眞如を證す、謂はく此眞如は多の教法に種種に安立すと雖も異なること無きが故に」と。『華嚴經』に云はく、「一念の頃に於て百千億の那由他の三摩地を證し、淨天眼を以て諸佛を見、乃至身に皆能く百千億の那由他の菩薩眷屬を現す」と。教に二説有り、具に引くこと前の如し。

【第八：如し】八
【不動地を明す】
【不動地】此地の菩薩は、妙無相智一切の有相と功用と諸煩惱とに鼓撃せらるるなきをいふ。

第八に不動地とは、『仁王經』に云はく、「若し菩薩百萬の微塵數の佛國中に住し二禪の梵王と作り、百萬の微塵數の法門を修し、雙照の方便神通智をもて一切衆生を化す」と、『華嚴經』に云はく、「佛子、菩薩摩訶薩、一切の心意識の分別を離れ、一切方の如虛空性に入るを無生法忍と名く、此忍を成就して不動地に入ることを得。此菩薩摩訶薩は、菩薩の心、佛心、菩提心、涅槃心すら尙現起せず、況んや復世間の心を起せんや。此菩薩の本願の故に、諸佛世尊其前に現じて言はく、『善い哉善い哉善男子、此忍は第一にして諸佛の法に順

【忍門】 無生法忍

【七勤】 應趣果德

勤、愍念衆生勸、

令憶本誓願、詞同

二乘勤、指事令成

勸、勿生止足勸、

悉應通達勸。

【大梵王たり】

初禪の天王にして

而も初禪天下の一

千の六欲天等の王

たり。

【前の五地云云】

相を辨ずるに初に

前を簡び後に異ん

ず。

【相と土】 何の相

を現ぜんと欲する

も自在なり、金銀

珠寶等の相の如き

是れ、土とは大小

の土。

【生空の智と果】

第六識の生空の無

分別智と滅定と後

得智。

【不増減眞如】 染

法滅するも滅する

なく淨法増するも

増あるなきなり。

【華嚴：如し】 重

ねて同異を辨ず。

す、然れども我等が所有の十力四無畏十八不共の諸佛の法は、汝今未だ得ざるなり、爲に

成就せんと欲せば勤めて精進を加ふべし、復此忍門に住することをも放捨すること勿れ、

乃至第七勤已りて、一念の頃に於て生ずる所の智業、若しは不可説の三千大千世界におい

て、衆生身の信解の差別に隨ひて普く其中に於て受生を示現し教化成就す。十度の中には

願波羅蜜偏多なり、多くは大梵天王と作り千世界に王たり」と。「唯識論」に云はく、「八に

は不動地、無分別智任運に相續して相と用と煩惱とに動ぜらるること能はざる故に。願波

羅蜜多を行す、謂はく求菩提願と利樂他願となり。無相中行加行障を斷ず、無相觀をして

任運に起せざらしむればなり。前の五地には有相觀は多く無相觀は小し、第六地に於ては

有相觀は小く無相觀は多し、第七地の中には純無相觀互に相續すと雖も而も加行有り。無

相の中に加行有るに由るが故に、未だ任運に相と及び土とを現ずること能はず、是の如き

の加行は八地の中の無功用的道を障ふるが故に、若し第八地に入ることを得る時には便ち

能く永に斷ず、彼を永に斷ずるが故に二の自在を得。八地已上には純無漏道任運に起

るが故に、三界の煩惱永に現行せず、第七識の中の細の所知障は猶現起す可し。生空の

智と果とは彼に違せざるが故に。不増減眞如を證す、謂はく此眞如は増減の執を離れ、淨

と染とに隨ひて増減有るにあらざるが故に。即ち此を亦相土自在所依眞如と名く、謂はく

若し此眞如を證得し已んば、相を現じ土を現ずること俱に自在なるが故に」と。「華嚴

經」に云はく、「一刹那の頃に百萬の三千世界微塵數の三摩地を證す、乃至菩薩の眷屬有

【第九：如し】九に善慧地を明す。【善慧地】此地の菩薩、勝妙智を得て善く説法し利生する故に名く。【四無礙解】後得智の意中にあるを四無礙智又は四無礙解といふ口に發あるを四無礙辯といふ。

り」と。二經の不同俱に引くこと上の如し。

第九に善慧地とは「仁王經」に云はく、「若し菩薩百萬億阿僧祇の微塵數の佛國の中に住し、三禪の大梵王と作り、百萬億の阿僧祇の微塵數の法門を修す、四無礙智をもて一切衆生を化す」と。「華嚴經」に云はく、「佛子、菩薩摩訶薩、廣大の神通を具し差別の世界に入り、力無畏不共法を修し、諸佛に隨ひて法輪を轉じ、大悲本願力を捨てじと欲して、第九の善慧地に入ることを得。此地は大法師と作りて法師の行を具す、善能く如來の法藏を守護し、無量の善巧智を以て四無礙解を起し、菩薩の言辭を用ひて法を演説す、此菩薩は四無礙を起すこと暨も捨離すること無し。何等をか四と爲す、謂はく法と義と詞と樂説との無礙智なり、法は諸法の自相を知り、義は諸法の別行を知り、詞は錯謬無しと知り、樂説は斷盡すること無し、假使不可説の世界の有ゆる衆生一刹那の間に皆無量の言音を以て而も問難を興すこと、各各に不同ならしむるを、菩薩、一念の頃に於て悉く、能く領受し、仍一音を以て普く爲に解釋して、各の心樂に隨ひて歡喜を得せしむるなり。十度の中には力波羅蜜最勝なり、多くは二千世界主の大梵王と作る」と。「唯識論」に云はく、「九に善慧地は、微妙の四無礙解を成就して能く十方に遍じて善く法を説くが故に。力波羅蜜を行す、謂はく思擇力と修習力となり。利他中不欲行障を斷ず、利樂有情界の事の中に於て、勤行せんと欲はずして己が利のみを修せんと樂はしむ、彼は九地の四無礙解を障ふ、九地に入る時便ち能く永斷す。智自在所依眞如を證す、謂はく若し此眞如を證得し已りぬれば、無

疑解に於て自在を得るが故に」と。『華嚴經』に云はく、「一念の頃に於て百萬阿僧祇の國土の微塵數の三摩地を證し、淨天眼を以て諸の佛國を見、二には百萬阿僧祇の國土の微塵數の如來を見、乃至百萬阿僧祇の國土の微塵數の菩薩を現して以て眷屬と爲す。若し菩薩殊勝の願力自在に以りて示現することは此數に過ぎたり、乃至百千億那由他劫にも數知すること能はず」と。教に二説有り、具に引くこと前の如し。

【第十に…能にず】
十に法雲地を明す
【仁王經】 上卷教
化品。

【三界の源】 唯識
は第八を、起信は
根本無明を源とす
【白法】 善法。

第十に法雲地とは『仁王經』に云はく、「若し菩薩不可説不可説の佛國の中に住し、第四禪の天王三界主と作り、不可説不可説の法門を修し、理盡三昧を得て佛の行處に同なり。三界の源を盡して一切衆生を教化す」と。『華嚴經』に云はく、「佛子、初地より乃至第九地に至るまで、是の如きの無量の智慧を以て觀察し已りて、善く思惟し修習し觀察し、善く白法を満足し無邊の助道法を集む。大福德智慧を増長し廣く大悲を行じ、世界の差別を知り衆生界の稠林に入る。如來の所行處に入り、如來に隨順する寂滅の行を證し、常に如來力無畏不共の佛法を觀察するを、名けて一切種と一切智智とを得る受職の位と爲す。乃至佛子、此地の菩薩は、自の願力を以て大悲の雲を起して大法の雷を震ひ、通と明と無畏とを以て電光と爲し、福德智慧を以て密雲と爲す。種種の身を現じ周旋往返し、一念の頃に於て普く十方の百千億那由他の世界微塵國土に遍くして大法を演説す、魔怨を摧伏すると復此數に過ぎたり、微塵國土に於て諸の衆生の心の所樂に隨ひて甘露の雨を霑ぎて一切衆惑の塵焰を滅除す、是故に此地を名けて法雲と爲す。乃至此地には多くは摩醯首羅天

【大法の智雲】眞如を縁する智慧。
 【衆徳の水】彼に藏する陀羅尼門、三摩地門。
 【空の如くなる羸重】廣大無邊なる惑智二障の羸重。
 【法身に依る故に】所證所依の法身に法身より無量殊勝の功德を出生して充滿せしむ。
 【所起の事業】智より起す大神通。
 【二愚と龜重】次所明の二愚と其種子。

王と作り、法に於て自在にして能く衆生と聲聞と獨覺と一切菩薩の波羅蜜との行を授く。法界の中に於て所有の問難をもて能く屈する者無し、布施、愛語、利行、同事の所作の諸業に、皆佛法僧を念ずることを離れず、乃至一切種と一切智智とを具足せんと念ずること「唯識論」に云はく、「十に法雲地、大法の智雲、衆徳の水を含み、空の如くなる羸重を蔽ひ、法身に充滿せしむるが故に。智波羅蜜多を修す、謂はく受用法華智と成就有情智となり。諸法中未得自在障を斷ず、謂はく所知障の中の俱生の一分なり、諸法に於て自在を得ざらしむ。彼は十地の大法の智雲と及び所含藏と所起の事業とを障ゆれば、十地に入る時に便ち能く永に斷ず、斯に由りて十地に二愚と及び彼羸重とを斷ずと説く。一には大神通愚、即ち是は此中の所起の事業を障ふる者なり、二には悟入微細秘密愚、即ち是は此中の大法の智雲と及び所含藏とを障ふる者なり、此地には法に於て自在を得と雖も、而も餘の障有るをもて未だ最極とは名けず。業自在等所依眞如を證す、謂はく若し此眞如を證得し已れば、普く一切の神通の作業と總持と定門とに於て皆自在なるが故に」と。『華嚴經』に云はく、「菩薩復是念を作さく。我一切衆生に於て首たり勝たり、若し勤めて精進を加ふれば、一念の頃に於て十不可說百千億那由他の佛刹微塵數の三昧を得、乃至爾所の微塵數の菩薩を示現して以て眷屬と爲す、若し菩薩の殊勝願力を以て、自在に示現せんことは此數に過ぎたり、若し修行、若し莊嚴、若し信解、若し所作、若し身、若し語、若し光明、若し諸根、若し神變、若し音聲、若し行處、乃至百千億那由他劫にも數知す

ること能はず」と。

【二〇】五に究竟位を明す。此位は功成し事畢る故に名く。初に因みに十地の滿を明す。【十地經】天親の十地論第十二卷に出づ。【瓔珞經】上卷の賢聖學處品の取意の文。【華嚴經】新經第三十九卷二紙の取意。此下受灌滿頂を明すに、初に菩薩の受職を示す。

五には究竟位。究竟位とは『十地經』に云はく、「妙淨土有り三界を出過せり、十地の菩薩當に其中に生ずべし」と。『瓔珞經』に云はく、「三僧祇を滿ぜる十地の菩薩、四禪の上の自在宮に於て百劫に相好を修し、千劫に威儀を學し、萬劫に變化を學んで、將に正覺を成ぜんとするに蓮座に昇る」等なり。『華嚴經』に云はく、「佛子、菩薩摩訶薩、受職地に入れば即ち百萬阿僧祇の三昧皆現在前することを得、其最後の三昧をば受一切智勝職位と名く。此三昧現前する時に、大寶蓮華有りて忽然として出生せり。其華廣大にして量百萬の三千大千世界に等し、衆の妙寶を以て間錯し莊嚴せり、一切世間の境界に超過せり、出世善根の生起する所なり、恆に光明を放ちて普く法界を照す、諸の天處に能く有る所に非ず、毘瑠璃と摩尼寶とを莖と爲し、栴檀王を臺と爲し、馬瑙を鬚と爲し、闍浮檀金を葉と爲し、衆寶を藏と爲し、寶網彌覆せり、十三大千世界の微塵數の蓮華を以て眷屬と爲す。爾時に菩薩、此華座に坐して身相の大小正しく相稱可へり、無量の菩薩を以て眷屬と爲し、各餘華に坐して周匝し圍遶せり、一一に各百萬三昧を得て大菩薩に向ひて一心に瞻仰す。佛子、此大菩薩と並に其眷屬との華座に坐する時に、所有の光明と及び言音と普く十方法界に充滿す、一切世界咸悉く震動して惡趣休息し國土嚴淨なり、同行の菩薩來集せざること靡し。佛子、此菩薩華座に坐する時に、兩足の下より光を放ちて普く十方の諸の大地獄を照す、兩膝輪より光を放ちて普く十方の諸の畜生趣を照す、齊の

中より光を放ちて普く十方の閻羅王界を照す、左右の脇より光を放ちて普く十方の人趣を照す、皆衆苦を滅す、兩手の中央より光を放ちて普く十方一切の諸天と阿修羅とを照す、兩肩の上より光を放ちて普く十方一切の聲聞を照す、其項背より光を放ちて普く十方の辟支佛身を照す。其面門より光を放ちて普く十方の初始發心より乃至九地の諸の菩薩を照す、兩の眉間より光を放ちて普く十方の受職の菩薩を照す、其頂上より百萬阿僧祇の三千大千世界の微塵數の光明を放ちて、普く十方一切世界の諸佛如來の道場衆會を照して、諸の摩尼を雨らして以て供養を爲す。復十方を繞ること十匝を經已りて、諸の如來の足下より入る。爾時、諸佛、某の世界の中の某の菩薩摩訶薩受職の位に到ると知りて、眉間より清淨の光明を出したまふを増益一切智神通と名く。普く盡虚空遍法界を照し已りて、而も此菩薩の會上に來至す、周匝し右繞し莊嚴を示現せること已りて、大菩薩の頂上より入りぬ。爾時、菩薩百萬の三昧を得るを名けて、已に受職位を得るの境界と爲す、十力を具足して佛數に墮在す、若は身と座と俱に世界に遍ぜり」と。

『唯識論』の究竟位の頌に云はく、

此は即ち無漏界なり

安樂なり解脱身なり

不思議なり善なり常なり

大牟尼なるを法と名く

此といふは、謂はく此前の菩提泥槃の二轉依の果なり、即ち是れ究竟の無漏界に攝す。諸漏永く盡きて漏の隨増するに非ず、性淨にして圓かに明かなり、欲に無漏と名く。界と

【二】正しく究竟位を陳ぶるに、初に頌の具文を引き次に釋の要義を摘録す。

【唯識論】第十卷

【清淨：四智心品】
圓成眞如と、成事、
妙觀、平等、大圓
の四智心品。

【滅と道】 法界と
四智。

【此轉依：故に】
第二句を釋す。

【此は又：名く】
第三句を釋す。

【大覺：故に】 第
四句を釋す。

【五法】 眞如と四
智。

【是の如く云云】
自下、二に諸門分

は是れ藏の義なり、此が中に、無邊の希有の大功德を含蓄するが故に。清淨法界と四智
 心品とは滅と道との諦に攝む、故に唯無漏なり。謂はく佛の功德と及び身と土との等は、
 皆是れ無漏種姓に生ぜられたり、故に佛身の中には十八界の等は皆悉く具足して而も純
 無漏なり。此轉依の果は又不思議なり、尋思と言議との道を超過するが故に。此は又是れ
 善なり、白法の性なるが故に、清淨法界は生滅を遠離して極めて安隱なるが故に。四智
 心品は妙用無方なり、極めて巧便なるが故に。二種は皆願益の相有るが故に、不善に違す
 るが故に、俱に説きて善と爲す。此は又是れ常なり、盡くる期なきが故に、清淨法界は
 生も無く滅も無く性變易無し、故に説きて常と爲す。四智心品は所依常なるが故に、斷盡
 することも無きが故に亦説きて常と爲す、自性常には非ず、因より生ずるが故に。此は又
 安樂なり、逼惱無きが故に、清淨法界は衆相を寂靜せり、故に安樂と名く、四智心品
 は永に惱害を離れたり、故に安樂と名く。二乘の所得の二轉依の果は、唯永に煩惱障
 の縛のみを遠離せり、殊勝の法無きが故に但解脱身とのみ名く。大覺世尊は無上の寂默の
 法を成就したまへり、故に大牟尼と名く。此牟尼尊の所得の二果は、永に二障を離れた
 れば亦是は法身と名く。無量無邊の力と無畏との等の大功德の法に莊嚴せられたるが故に、
 體と依と聚との義をもて總じて説きて身と名く。故に此法身は五法を以て性と爲す、淨法
 界のみを獨法身と名くるには非ず、二轉依の果をば皆此に攝するが故に。

是の如きの法身に三の相別なること有り。一には自性身、謂はく諸の如來の眞淨の法

別の論文を摘取す
論に七門ある中、
今は初の二(三身
別相門、五法攝三
身門)を示し、次
に後の三門を録し
中の二門を略す。

【未登地】 三賢四
善根。

【然るに…報身な
る故に】 五法攝三
門なり。

【受相と…故に】
次に合して後の三
門を録す。

【三身と…同なる
こと有り】 第六門
の文意。

【淨穢と…攝なる
有り】 第七門の文
意。此二文を除き

他は第五門の意。
【三】 以上は所攝
の顯人の下、正し
く人の行位を明せ

界なり、受用と變化との平等の所依なり、大功徳の法の所依止なるが故に。二には受用身
此に二種有り。一には自受用、謂はく諸の如來の、三無數劫に無量の福と慧との資糧を
修集して、起したまへる所の無邊の眞實の功徳と、及び極めて圓に淨き常遍の色身となり、
相續して湛然なり、未來際を盡して恆に自ら廣大の法樂を受用す。二には他受用、謂はく
諸の如來の平等智に由りて示現したまへる微妙の淨功徳の身なり、純淨土に居して十地
に住せる諸の菩薩衆の爲に大神通を現じ、正法輪を轉じて衆の疑網を決して、彼をして
大乘の法樂を受用せしむ、此二種を合して受用身と名く。三に變化身、謂はく諸の如來
の成事智に由りて變現したまへる無量の隨類の化身なり、淨と穢との土に居して、未登地
の諸の菩薩衆と二乗と異生との爲に、彼根の宜きに稱ひて通を現じ法を説きて、各各諸
の利樂の事を獲得せしめたまふ。然るに佛の三身は即ち五法なるが故に、所證の眞理は謂
はく即ち法身なり、四智の菩提は即ち報身なるが故に。受用と變化とは大悲力の故に、利
他の無漏の因縁成就したまへる有り、三身と三土とに或は異或は同なること有り、大小勝
劣にして前後改轉すること有り、淨穢と報化との漏と無漏との攝なる有り、性と相とは身
土の差別にして無邊なること有り、諸の教中に廣く顯示するが如くなる故に。
此北宗には唯識と二諦との二の義を以て深極の祕要と要す、故に略して大綱を出さん。
慈恩法師の『唯識義』に云はく、「第一に出體とは此に二種有り。一には所觀の體、二には
能觀の體なり、所觀の唯識といふは、一切の法を以て自體と爲す、通じて有無を觀じて唯識

しを以て、次に兼
ねて宗の要義を述
す。即ち五重唯識
と四種の二諦と、
四種體と六離合釋
となり。今は初唯
識章、二諦章を明
す。

【一切の法】 遍依
圓の三性。

【略して五重有り】
五重唯識は、所觀
の境に於て、愈よ
り細に至り、寬よ
り狭に至り、漸次に
省略するに五重の
次第あり。

【情有理無】 妄情
にては有と計する
も、理としては無
と觀す。

【無著の頌】 攝大
乘論中卷、無性の
論第六。

【二に】 自性と差
別の二。

【實智】 四如實智
觀。

【義】 所取の境。

と爲すが故に。略して五重有り。一には遺虛存實識。遍計所執は唯虛妄より起して都べて
體用無しと觀じて、正しく空と遣るべし、情有理無なるが故に。依他と圓成とは諸法の體
實二智の境界なりと觀じて、正しく有と存すべし、理有情無なるが故に。無著の頌に云は
く、

名と事と互に客と爲る

二に於て亦當に

實智は義は無し

彼無きが故に此も無し

其性尋思すべし

唯量と及び唯假とありと推すべし

唯分別の三のみ有りと觀す

是れ即ち三性に入るなりと

『成唯識』に言はく、「識の言は總じて一切の有情に各八識と六位の心所と所變の相見と
分位の差別と及び彼空理に顯はされたる眞如と有りといふことを顯す。識が自相なるが故
に、識と相應するが故に、二が所變なるが故に、三が分位なるが故に、四が實性なるが故
に、是の如きの諸法は皆識に離れざるを以て總じて識の名を立つ。唯の言は但愚夫の所執
の、定んで諸識に離れて實に色等有りといふことを遮す」といへり、是の如き等の文の誠
證一に非ず。無始より來我法を執して有と爲し、事理を撥して空と爲すに由るなり、故
に此觀の中に遣といふは空觀なり、有執を對破す。存とは有觀なり空執を對遣す。今、空
と有とを觀じて而も有と空とを遣る、有と空と若し無くば亦空と有とも無かるべし。彼空
と有とに以りて相待して觀成す、純に有、純に空ならば誰か空有らん、故に離言の法性

【六位の心所】 遍行等の五十一の心所。

【相見】 相見二分【分位の差別】 色心の分位假立の二十四不相應法。

【空理に眞如】 人法二空所顯の眞如。

【識が故に】 五種の唯識なり。即ち一、八識心王を識が自相の唯識が相應の唯識。三、十一種の色を識が所變の唯識。四、二十四不相應を識が分位の唯識。五、六無爲法を識が自性の唯識と名く。

【無始より云云】 以下釋成す。

【離言の法性】 無相平等の如如の理體。

【此方便に依り云云】 遣存空有の善巧方便亦是れ進趣の方便。

【一切の位】 貨糧等の五位。

に證入せんと思はば、皆此方便に依りて入るべし、有と空と皆即ち決定せりと謂はんとに非ず。眞觀を證する位には有にも非ず空にも非ず、法に分別無し、性離言なるが故に。要す空を觀じて、方に眞を證すと説くことは、謂はく要す彼過計所執の空を觀じて、門とならずが故に、眞性に入ればなり、眞體は空に非ず。此唯識の言は既に所執を遮す、若し實に諸識の唯なる可き有りて執せば、既に是れ所執なるを以て亦除遣すべし。此最初の門の所觀の唯識をば一切の位に於て思量し修證すべし。二には捨濫留純識。事と理とは皆識に離れずと觀ずと雖も、然も此内識に境有り心有り、心が起ることは必ず内境に託して生ずるが故に、但識のみを唯と言ひて唯境とは言はず。『成唯識』に言はく、「識は唯内にのみ有り、境は亦外にも通ず、外に濫ぜんことを恐るる故に但唯識といふ。又諸の愚夫は迷ひて境に執して煩惱と業とを起して生死に沈淪して、心のみと觀じて勤めて出離を求むることとを解らざるなり、彼を哀愍するが故に唯識の言を説く、自ら心のみと觀じて生死を解脱せしむれども、内境も外の如く都無なりと謂はんとに非ずと。境は濫有るに由りて捨てて唯と稱せず、心の體は既に純なれば留めて唯識と説く」と。『厚嚴經』に云はく、「心と意と識との所縁は皆自性に離るるに非ず、故に我一切は唯識にして餘は有ること無し」と説く。

華嚴等に三界は唯心なりと説けり。『遺教經』に云はく、「是故に汝等當に好く心を制すべし、之を一處に制するときは事として辨ぜずといふこと無し」と等は皆此門の攝なり。三には攝末歸本識。心内所取の境界は顯然なり、内の能取の心の作用も亦爾なり、此見相

三には攝末歸本識。心内所取の境界は顯然なり、内の能取の心の作用も亦爾なり、此見相

三には攝末歸本識。心内所取の境界は顯然なり、内の能取の心の作用も亦爾なり、此見相

三には攝末歸本識。心内所取の境界は顯然なり、内の能取の心の作用も亦爾なり、此見相

三には攝末歸本識。心内所取の境界は顯然なり、内の能取の心の作用も亦爾なり、此見相

三には攝末歸本識。心内所取の境界は顯然なり、内の能取の心の作用も亦爾なり、此見相

三には攝末歸本識。心内所取の境界は顯然なり、内の能取の心の作用も亦爾なり、此見相

三には攝末歸本識。心内所取の境界は顯然なり、内の能取の心の作用も亦爾なり、此見相

【二には云云】 五重唯識の第二を明す。

【事と理】 依他と圓成此二は識に在りて識を離れず。

【内心に有り】 心とは能縁の心境とは所縁の境。細言せば四分の中相分は境、三分は心なり。

【心と意と識】 第八、第七、餘の六

【相分】 相分と眞如。

【三には云云】 三に攝末歸本識を明す此れ見相の末を攝して自體分に歸す。

【所取能取】 相分見分をいふ。

【種種の相】 我法の相。

【能變は唯三】 心意識。

【四には云云】 四に隱劣顯勝を明す。今心王を擧げて心所を説かず、

心王勝るればなり

【貪等】 瞋等の根

分は俱に識に依りて有なり、識の自體の本を離れば末法必ず無なるが故に。『三十頌』に言はく、

假に由りて我法と説く

彼は識が所變に依る

種種の相轉すること有り
此能變は唯三つなり

『成唯識』に説かく、「變は謂はく識の體が轉じて二分に似るなり、相と見と俱に自體に依りて起するが故に」と。『解深密』に説かく、「諸識の所緣は唯識が所現なり」と、相見の末を攝して識の本に歸するが故なり、説く所の理事眞俗の觀等は皆此門の攝なり。四には隱劣顯勝識。心と及び心所と俱に能く變現すれども、但唯心とのみ説きて唯心所に非ること、心王は體殊勝なり、心所は劣なり勝に依りて生ず、劣を隠して彰さずして唯勝法のみを顯すなり。故に慈尊の説かく、

心二に似て現すと許す

或は信等に似る

是の如く貪等に似たり
別の染と善との法無しと言へり

心の自體能く變じて彼見と相との二に似て現すと雖も、而も貪信等の體も亦各各能く變じて自の見と相とに似て現す、心は勝れたるを以ての故に心は二に似たりと説く、心所は劣なるが故に隱して説かざるなり、能似にあらざるには非ず。『無垢稱』に言はく、「心垢なるが故に有情垢なり、心淨なるが故に有情淨なり」の等は皆此門の攝なり。五には遣相證性識。識の言の表する所は具に理と事と有り、事をば相用と爲して遣りて取らず、理をば

本九惑と二十隨惑等を取す。

【貪信等の體分】貪信等の自體分。

【無垢稱】維摩經第二弟子品の文。

【五には云云】五に遣相證性識を明す。此は九十四の有爲の事を遣りて六無爲を證して唯識とす。

【義】今は實蛇の體をいふ。

【彼分】繩の體是れ衆多の麻なるをいふ。

【知んぬぬいふこと】此は言智を證するは、先の外執の如く迷亂なれば除遣すべきに譬ふ。

【此れ即ち一重なり】總じて上來廣く明す五重唯識を結す。

【能觀…爲す】大門第二に能觀の唯識の自體を明す。

【別境の慧】第六意識相應の別境の心所の中、第五の

性體と爲して作證することを求むべし。『勝鬘經』には自性清淨心と云ふなり、『攝論』の頌に言はく、

繩に於て蛇の覺を起し

彼分を證見する時は

此中の所説は、繩の覺を起す時に蛇の覺を遣るをば、依他の覺を觀じて所執の覺を遣るに喩ふ。繩の衆分を見て繩の覺を遣るをば、圓成を見て依他の覺を遣るに喩ふ。此意の即ち顯

はさく、所遣の二覺は皆依他起なり、此染を斷するが故に、所執の實蛇と實繩との我法復情に當らざりぬ。依他に於て遣ると稱するを以ての故に、皆互に除遣するには非ず。蛇は妄に由りて起れり、體用俱に無し、繩は麻に藉りて生ず、假用無きには非ず。麻をば眞理

に譬へ、繩をば依他に喩ふ。繩と麻との體と用とを知れば、蛇の情を自ら滅しぬ。蛇の情滅するが故に、蛇情に當らざるを所執を遣ると名く、依他を聖道を須ひて斷するが如くに

は非ず。故に漸く眞に入るには蛇は空なりと達して繩の分を悟る、證眞觀の位には眞理を照して俗事彰る、理と事と既に彰れぬれば我法便ち息みぬ、此れ即ち一重の所觀の體なり。

能觀の唯識は別境の慧を以て自體と爲す云。然るに總じて遍く諸教所説の一切の唯識を詳にするに五種に過ぎず。一には境唯識、『阿毘達磨經』に云はく、「鬼と傍生と人と天と

各其所應に隨ひて等き事において心異なるが故に、義は眞實に非ずと許す」と。是の如

慧の心所。
【然るに云云】大
門第三に能所觀の
體を合して、五種
ら唯識の不同を分
別す。初に境唯識
なり。

【阿・經】未渡の
經、但し攝論の第
四に所引。

【義は：許す】所
縁の境界の義は眞
實の四異に非ずと
許す意。

【華嚴深密等】華
嚴に三界唯一心、
深密に諸識所緣唯
識所現といふを指
す。

【分別所分別】見
相二分。

【處と境】内の六
處、外の六境

【無垢識】第九識
佛果地の無漏の淨
分を以て第九に置
けり。

【此中の…云云】
第三大門の總結の
文。

【三】自下は唯識
義章を引く大門第
二なり。此門中、

き等の文に但唯識の所觀の境を説く者は皆境唯識なり。二には教唯識。自心の執着による
等の頌なり、『華嚴』、『深密』等に唯識と説くの教は皆教唯識なり。三に理唯識。三十頌に
言はく、

是諸の識轉變して
此に由りて彼は皆無し

是の如く唯識の道理を成立するは皆理唯識なり。四には行唯識。菩薩於定位等の頌と四
種の尋思と如實智との等は皆行唯識なり。五には果唯識。『佛地經』に云はく、『大圓鏡智に
は諸の處と境と識と、皆中に於て現す』と。又、『如來功德莊嚴經』に云はく、

如來の無垢識は
一切障を解脫す

『唯識』に亦言はく、

此は即ち無漏界なり
安樂なり解脫身なり

是の如きの諸説の唯識の得果は皆果唯識なり、此中の所説の五種の唯識に、總じて一切
の唯識を攝して皆盡くせり云。

又類差別を顯さば、其圓成の眞性識は若し加行と後得との觀するは是れ共相にして別相
には非ず、總じて遍法を緣するを以ての故なり。根本智の觀するは是れ別相にして共相に

分別と所分別とあり
故に一切唯識なりと

不思議なり善なり常なり
大牟尼なるを法と名くと

圓成實性と依他起性に就き各増數に約して、識の差別一ならざるを明す【或は因と果云云】此下、依他に約して其増數を論ず。【因と果】有漏位と無漏位。【因果俱に二】本識と轉識。【決擇分】瑜伽の六十三の文。【識生】能變の體を出す、第八識を指す。【義と有情】第八所變の法。五座の境と五根の有情。【我と了】變似我即ち第七第八の見分を緣じて執じて我とす。變似了即ち前六識所變の境色等の六境。【異熟】第八識。【多くは説く】第八に多名あり、今何んぞ異熟を擧ぐるやの妨雜を通ず。答へて賴耶の三位の内、二に通ずといふ。

は非ず、諸法を別に知るが故なり。乃至或は因と果とに體は俱に一識なれども、作用は多と成ると説くは、一類の菩薩の義なり。或は因と果とに俱に二なりと説く、決擇分の中の有心地に説かく、謂はく、本識と及び轉識となり」と。或は唯因に三を説く。『辨中邊』に云はく、

識が生ずるときには變じて義と
有情と我と及び了とに似たり

『三十唯識』に云はく、

謂はく異熟と思量と
及び了別境との識なりといへり

多くは異熟性なり、故に偏に之を説く、阿陀那の名は理、果に通じて有り。或は因と果とに俱に三と説く、謂はく心と意と識となり。或は唯果に四と説く、『佛地經』等に四智品と説けり。或は因と果とに俱に六と説く、『勝鬘經』の中に六識と説けり。或は因と果とに俱に七と説く、諸教に七心界と説けり、或は因と果とに俱に八と説く、謂はく八識なり。或は因と果とを合して九と説けり、『楞伽』の第九の頌に云はく、

八と九との種種の識は
水中の諸波の如くなり

『無相論』と『同性經』との中に依りて、若し眞如を取りて第九と爲せば、眞俗を合説するが故なり。今は淨位の第八の本識を取りて以て第九と爲す、染淨の本識を各別に説くが故なり。『如來功德莊嚴經』に云はく、

如來の無垢識は
是れ淨なり無漏界なり

【淨位の第八】 佛果無漏の第八。
【二四】 唯識義章を引き畢りて大文第二に二諦義を引く法苑義林章第二卷中の第四章。

【二五】 兼ねて宗の要義を明す科の下初に唯識章二諦章を明せしを以て、第二に四種の教體を明し、次に六離合釋を明す、今は其第二なり。

【初に相歸性體】 相とは有爲の諸相依他起の法、性は無爲の性は是れ圓成實性。

一切の障を解脱せり

圓鏡智と相應すといふ

【二四また】 二諦義に云はく、「瑜伽」と「唯識」との二諦に各四重有り、世俗諦の四名とは、一には世間世俗諦、實諦と名く、二には道理世俗諦、諦と名く。三には證得世俗諦、諦と名く。四には勝義世俗諦、立諦と名く。勝義諦の四名とは、一には世間勝義諦、諦と名く。二には道理勝義諦、諦と名く。三には證得勝義諦、諦と名く。四には勝義勝義諦、諦と名く。前

談旨一眞法界なり」と。

又云はく、「第四の勝義勝義諦とは、謂はく非安立の廢詮

又四種の體を以て諸の教體を釋せり、故に略して之を出さん。

初に攝相歸性體とは、教は即ち眞如なり。

「般若論」に云はく、亦說法者に非ず

應化は眞佛に非ず

說くこと無く言相を離れたりと

【第二に攝境從識體とは、若し根本を取らば能說者の識心を體と爲す。若し枝末を取らば能聞法者の識心を體と爲す。故に天親の云はく、

展轉して増上力をもて

二識決定を成ず

第三に攝假從實體とは、一切の内教の體は唯是れ聲なり、名句文は體は是れ假有なるに

【應化】相好圓滿の丈六の佛。

【說法者に非ず】法身を眞の教主とすればなり。

【六】第三大門に六合釋を明す。

【持業】體の上に用を持する意。眼根といふが如し、眼は體、根は用、體に此用を持するなり。

【同依：名く】大も乘も同じく一の體に依る、其體の功あればなり。

【依主釋】攝大乘論の如き、攝大乘品を釋するの論、即ち是なり。

【有財釋】心所有法の如し、心は心王、心王の所有なるが故にいふ。

【相違釋】二體相違せるものを集めて一名とせるもの教觀の如き如と觀とを合して一名とす。

由りて實に隨ひて説く。故に「對法論」に成所引聲と説きて、名等を成所引と名くとは説かず。

第四に相用別論體とは、唯根本の能說法者の識が上に、現する所の聲名句文を取りて以て教體と爲す、假と實と義用殊なるが故に。此中の四の體は義用に約して分つ、眞俗の法相理に乖かざるが故に其には法苑の總聊簡に説くが如し。

又六合釋有りて一切の法の得名の所以を釋す、故に次に略して之を出さん。此六合釋は義を以て之を釋せば、亦名けて六離合釋と爲すべし。初には各別に釋するを之を名けて離と爲し、後には總合して解するを之を名けて合と爲す。此六とは何んぞ。一には持業釋、二には依主釋、三には有財釋、四には相違釋、五には鄰近釋、六には帶數釋なり。初の持業釋といふは亦は同依と名く。持といふは謂はく任持なり、業といふは業作用の義なり、體能用を持すれば持業釋と名く。同依と名くることは、依は謂はく所依なり、二義同く一の所依の體に依れば同依釋と名く、大乘と名くるが如きなり。依主釋とは亦は依士と名く、依とは能依なり、主とは法體なり、他の主の法に依りて自名を立つるを以て依主釋と名く。

或は主は是れ君主なり、一切の法體を名けて主と爲ることは、喻に従へて名と爲り。臣は王に依る、王が臣なるが故に名けて王臣と曰ふが如くなり。士は謂はく士夫なり。有財釋とは亦は多財と名く、有財に及ばざるなり。財は謂はく財物なり、自を他の財に従へて己が名を立つるを有財と爲す、世の有財の如くなれば亦是れ喻に従へて名と爲り。相違釋と

【鄰近釋】 隣近なる法の、強き者に從へて立名す。四念處の如し、其の體慧なれども俱起する念の力強きを以て名く。

【帶數釋】 數量を帶びし名。五蘊十二處等。

【更に釋名云云】 六釋を除きて他の釋名ありと。

【七】 此下は、論の勝義菩提心の文段に於て所寄齊の第六住心の行相を説き能壽齊の眞言の行者の捨劣得勝を勸誡する文なり

【八】 上來淺略の義を明せしを以て自下深祕釋を爲す

は名既に二義有り、目くる所の自體各別に於て、兩體互に乖けども、而も總じて稱を立つる、是れ相違釋なり。鄰近釋とは俱時の法の義用増勝なるに、自體を彼に從へて其名を立つるを鄰近釋と名く、有尋及び有伺等と説くが如きなり。諸の相應の法は皆是れ此體なり。帶數釋とは、數は謂はく一十百千等の數なり、帶は謂はく挾帶なり、法體に數法を挾帶して名と爲るを帶數釋と名く、【二十唯識論】と説くが如きなり。此六釋の中に各各多説有り、煩しく述ぶること能はず。此中の六釋は、且く共傳に依りて略して體義を示す、其れ廣く相を辨ずることは餘處に説くが如し。謂はく此六が中の初の持業釋は、八轉聲に於て何れの聲の中にか釋する、乃至帶數釋も亦爾なり、皆別處の如し。更に釋名有り『宗輪』の疏の如し、繁多を恐れ厭ひて且く綱要を指す。

龍猛菩薩の『菩提心論』に云はく、「又衆生有りて大乘の心を發して菩薩の行を行じ、諸の法門に於て遍修せざること無し、復三阿僧祇劫を経て六度萬行を修し、皆悉く具足して然して佛果を證す。久遠にして成ずることは、斯れ所習の法教の致に次第有るに由る、所以に亦樂ふべからず」と。

次に祕密の義とは如上の無緣乘の法は即ち是れ彌勒菩薩の三摩地門なり、是三昧は則ち謂ゆる大慈三昧なり。亦是れ大日如來の四行の一なり、一切如來の大慈無量なるを悉く彌勒と名く。此菩薩亦普遍大慈發生三昧に住して自心の眞言を説きたまへり。

凡そオボクテオボクテオボクテ

祕密曼荼羅十住心論卷第六

釋して云はく、阿耨單闍耶といふは無能勝の義なり、薩縛薩埵といふは一切衆生なり、奢也といふは心性なり、謂はく彼先世に習行する所の諸根性類なり。奴搗多といふは知なり、謂はく能く衆生諸根性行を了知するなり、句義は是の如し。深祕の義に云はく、初の咒字を體と爲す、即ち是れ本不生なり、生とは生老病死の一切の流轉の法なり、彼即體常に自ら不生なる、是れ咒字の義なり、諸法の自性不生なりと知るを以てなり、是故に一切衆生に於て上勝有ること無しと爲す。上といふは無等なり。又能く法體の不生なることを知るが故に、群機の一切の心性を達鑿して、現覺せざる所なし、彼所應度の者に隨ひて之を成就する、即ち是れ慈中の上なり、遍く衆生に施して窮盡有ること無し。是故に若し衆生有りて、能く通達して此法を受持し讀誦すれば、行者久しからずして即ち彌勒の行に同じて、早く大慈三昧を證するなり。此一の眞言に悉く法相の法門を攝す。若し此一の眞言を誦すれば則ち彌勒の所證に入る所證の一切の法を持するに爲りなんぬ、即ち三大劫を經すして一生に成佛することを得てん。常途の説に云はく、「彌勒菩薩は位十地に居して當來に成佛す」と、此の如きの説は謂ゆる未了の言なり。

秘密曼荼羅十住心論 卷第七

【此は第二劫中の終の住心なり。第二劫中に大乘中の性相機實の宗教を明すに前の第六を相宗權教に配し第七を性宗實教と爲し殊に住心の相は三論の所談に親し

【一】初に淺路の釋の中、初に略して大綱を述するに初に如常の義に約し二諦の無礙を明す。

【夫：一水】此は實相の空理に諸位の假有を含藏し、空理は假有の本なるを明す。

【大虛空廓】眞諦の無相空寂に比す【越】於なり。【一氣】大虚は是れ元初の一氣なるを顯すなり。【象】天地貫通の氣に象れり。

【巨壑】眞諦の一相一財なるに比す【千品】世諦の非一なるに比す。法

覺心不生住心第七

(二) 夫れ大虚空廓として萬象を越一氣に含み、巨壑溟濔として千品を爰一水に孕む、識に知んぬ一は百千が母爲り、空は即ち假有の根、假有は有に非ざれども有有として森羅たり、絶空は空に非ざれども空空として不住なり、色は空に異らざれば諸法を建てて宛然として空なり。空は色に異らざれば諸相を混して宛然として有なり、是故に色即ち是れ空なり、空は即ち是れ色なり、諸法も亦爾り、何物か然らざらんや。水波の不離に似たり、金莊の不異に同じ、不一不二の號立ち二諦四中の稱顯る。空性を無得に觀じ、戲論を八不に越ゆ。時に四魔戰はざるに面縛し、三毒殺さざるに自ら降す。生死即ち涅槃なれば更に階級無し、煩惱即ち菩提なれば斷證を勞すること莫し。然りと雖も無階の階級なれば五十二位を壊せず、階級の無階なれば一念の成覺を礙へず。一念の念に三大を経て自行を勤め、一道の乘に三駕を馳せて化他を勞す。唯蘊の無性に迷へるを悲み、他縁の境智を阻みたるを歎く、心王自在にして本性の水を得、心數の客塵は動濁の波を息む。權實の二智は圓覺を一如に證し、眞俗の兩諦は教理を絶中に得、心性の不生を悟り境智の不異を知る。斯れ乃ち南宗

華玄論に百千萬の河水の流をいふ。

【二】業は略して常住心の大綱を明し、自下は經を引き疏を録して廣く釋す。

【心主自在…覺る】當住心の相即無礙自在の修證。

【心王】第八佛性眞識の心王。

【有無】不變隨緣の有爲の諸法と隨緣不變の無爲の眞理。

【一轉の開明】他緣乘に契めて、覺心不生の一重の轉勝をいふ。

【心王は…覺る】覺自心本不生を釋す。四みに心王は第八佛性の眞識、心所は七轉謔妄心を指す。

【證…は云云】大海を心王に、波浪を心所に、緣(風)を外の六塵に比す。

の綱領なり。

故に大日尊祕密主に告げて言はく、「祕密主、彼れ是の如く無我を捨つれば心主自在にして、自心の本不生を覺る。何を以ての故に。祕密主、心は前後際不可得なるが故に」と。釋して云はく、心主といふは即ち心王なり。有無に滯らざるを以ての故に、心に罣礙無くして所爲の妙業、意に隨ひて能く成ず、故に心主自在と云ふ。心主自在といふは、即ち是れ淨善提心の、更に一轉の開明を作して前劫に倍勝することを明すなり。心王は猶し池水の性の本より清淨なるが如し、心數の淨除は猶し客塵の清淨なるが如し、是故に此性淨を證する時、即ち、能く自ら心の本不生を覺る。何を以ての故に。心は前後際俱に不可得なるが故に。譬へば大海の波浪は緣より起するを以ての故に、即ち是れ先にも無く後にも無し、而も水性は爾らず。波浪の緣より起する時、水性は是れ先にも非ず、波浪の因緣盡くる時、水性は是れ後に無きにも非ざるが如く、心王も亦復是の如し、前後際無し。前後際斷するを以ての故に、復境界の風に遇ひ緣に隨ひて起滅すと雖も、而も心性は常に生滅無し。此心の本不生を覺るは即ち是れ漸く阿字門に入るなり。是の如きの無爲生死緣因生境等の義は、『勝鬘經』、『寶性』、『佛性論』等の中に廣く明すが如し。本不生と謂ふは兼ねて不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不去、不來等を明す、三論家には此八不を擧げて以て究極の中道と爲す、故に吉藏法師の二諦方言と佛性ととの等き章に盛んに此義を談す、今略して綱要を出さん。

の綱領なり。故に大日尊祕密主に告げて言はく、「祕密主、彼れ是の如く無我を捨つれば心主自在にして、自心の本不生を覺る。何を以ての故に。祕密主、心は前後際不可得なるが故に」と。釋して云はく、心主といふは即ち心王なり。有無に滯らざるを以ての故に、心に罣礙無くして所爲の妙業、意に隨ひて能く成ず、故に心主自在と云ふ。心主自在といふは、即ち是れ淨善提心の、更に一轉の開明を作して前劫に倍勝することを明すなり。心王は猶し池水の性の本より清淨なるが如し、心數の淨除は猶し客塵の清淨なるが如し、是故に此性淨を證する時、即ち、能く自ら心の本不生を覺る。何を以ての故に。心は前後際俱に不可得なるが故に。譬へば大海の波浪は緣より起するを以ての故に、即ち是れ先にも無く後にも無し、而も水性は爾らず。波浪の緣より起する時、水性は是れ先にも非ず、波浪の因緣盡くる時、水性は是れ後に無きにも非ざるが如く、心王も亦復是の如し、前後際無し。前後際斷するを以ての故に、復境界の風に遇ひ緣に隨ひて起滅すと雖も、而も心性は常に生滅無し。此心の本不生を覺るは即ち是れ漸く阿字門に入るなり。是の如きの無爲生死緣因生境等の義は、『勝鬘經』、『寶性』、『佛性論』等の中に廣く明すが如し。本不生と謂ふは兼ねて不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不去、不來等を明す、三論家には此八不を擧げて以て究極の中道と爲す、故に吉藏法師の二諦方言と佛性ととの等き章に盛んに此義を談す、今略して綱要を出さん。

【三】三論玄義の文を引く前までは大乗智論第一卷二諦義の取意の文なり。示すに五段あり初に大意。

【教を學す】教の二諦を學するなり

【常途の諸師】開善寺の智藏、莊嚴寺の慧旻、光宅寺の法雲の三師

【教論】言教なり諸佛二諦に依りて有と説き空と説くをいふ

【於諦】色等は未だ曾て有無ならざれども、凡に於ては有なるを俗諦とし、聖に約して空なるを眞諦と名く

【凡夫の於失】失なり此三凡の實有の於諦如來無所得の於諦、二乘小聖人の偏空の於諦、凡は世諦、後二は眞諦なり。

(三)に二諦と謂ふは蓋し是れ言教の通詮と相待の假稱と、虛寂の妙實と、窮中の極號となり。

『中論』に云はく、「諸佛は常に二諦に依りて法を説きたまふ。一には世諦、二には第一義諦なり」と。故に二諦は唯し是れ教門にして境界に關らざるなり、而も學者に其巧拙有りて遂に得失の異有り。若し巧慧有りて此二諦を學すれば無所得を成ず、巧慧無き者の、教を學すれば即ち有所得の失を成ず、故に常途の諸師或は言に智解を含み、或は辭に聖教を兼ぬれども、同く境界を以て諦と爲す、今は此に同じからず。問ふ、『中論』に云はく、「諸佛は二諦に依りて法を説く」と。『涅槃經』に云はく、「衆生に隨順するが故に二諦を説く」と、是れ何れの諦ぞや。」答ふ、「能依は是れ教諦なり、所依は是れ於諦なり。」問ふ、「於諦を失となし教諦を得とするや不や。」答ふ、「凡夫の於をば失と爲し、如來の於をば得と爲す、聖人の於は亦是得、亦是失なり。而るに師の云はく、「於諦を失と爲し教諦を得と爲すとは乃ち是れ學教成迷なり」と。本の於は是れ通途、學教の於は別迷なり。通途は是れ本、別迷は是れ末なり、本は是れ前の迷、末は是れ後の迷なり。問ふ、「何れの意をもてか凡聖の二の於諦を聞かや。」答ふ、「凡聖の得失を示して凡を轉じて聖と成らしめんとなり。」問ふ、「於諦を失となせば何を以てか諦と言ふや。」答ふ、『論』の文に自ら解すらく、「諸法は性空なれども世間には顛倒して有と謂ふ、世人に於て實とする、之を名けて諦と爲す、諸の賢聖は顛倒は性空なりと眞知す、聖人に於て是れ實なれば之を名けて諦と爲す」と。此は即ち二の於諦なり。諸佛は此に依りて説きたまへば、名けて教諦と爲るの

【一には云云】所依の凡聖二の於諦は諸佛に於ては實なり。故に能依の教も亦實なり。【二には云云】諸佛有無の能詮の教を説くに、能く所詮の中道實相の至理を表す。【四には云云】能化の佛二諦の教法を説きて利生するに約していふ。【他家云云】以下他家の義と比對して明す、他家とは梁の三大法師。【他家は有無】有とは俗諦、無とは眞諦。【有得無得】有所得、無所得。【他は：理と爲す】以下の四重は小の二家と大の二論師に對して自の二諦を明す。【二と不二】空有の二と非空有の不

み。』問ふ、『教を若爲が諦と名くるや。』答ふ、『數の意有り。一には實に依りて説くが故に所説も亦實なり、是故に諦と名く。二には如來は誠諦の言なり、是故に諦と名く。三には有無の教を説くに實に能く道を表す、是故に諦と名く。四には法を説いて實に能く縁を利す、是故に諦と名く。五には説いて顛倒せず是故に諦と名く。』

他家の二諦と十種の異有り。一には理教の異。彼に明さく、二諦は是れ理なり三假は是れ俗、四絶は是れ眞なればなり、今明さく、二は是れ教なり不二は是れ理なり。二には相無相の異。他家は有無に住するが故に、是れ有相なり、今明さく、有は不有を表す、無は不無を表す、有無に住せざるが故に無相と名く。三には得無得の異。他家は有無に住するが故に有得と名く、今明さく、有無に住せざるが故に、無得と名く云。他家は但有を以て世諦と爲し、空を眞諦と爲す、今明さく、若は有、若は空、皆是れ世諦なり、非空非有を始めて眞諦と名く。三には空有を二と爲し、非空有を不二と爲し、二と不二とは皆是れ世諦なり、非二非不二を名けて眞諦と爲す。四には此三種の二諦は皆是れ教門なり、此三門を説くことは不二を悟らしめんが爲なればなり、無所依得を始めて名けて理と爲す。問ふ、『前の三をば皆是れ世諦とし不二をば眞諦と爲すや。』答ふ、『此の如し。』問ふ、『若し爾らば理と教と何の異ぞ。』答ふ、『自ら二諦を教と爲し不二を理と爲す者有り、皆是れ轉側、縁に適うて妨ぐる所無し。』問ふ、『何が故に此四重の二諦を作すや。』答ふ、『毘曇の事理の二諦に對して第一重の空有の二諦を明し、成論師の空有の二諦に對して、汝が空有の二諦は是

【大乘師の復言は】
【問ふ云云】
の垂角を問ふに、
第十の今家の所
起す。

【如來は：有無】
因縁とは機縁なり
法體は實には無名
相なるを、佛機縁
に隨ひて、不有の
法を假に有と名け
不無の法を假に無
と名く。

【四】大乘玄論文
の下、第二に二諦
の名を釋す。
【唯し一諦】不二
中道の第一義諦。
【若し二の於諦】
義なり。多義を以
て釋名す。

れ我が俗諦なり、非空非有方に是れ眞諦なり、故に第二重の二諦有り。大乘師の依他と分別との二を俗諦と爲し、依他の無生と分別の無相と不二眞實との性を、眞諦と爲すに對して今明さく、若は二、若は不二皆是れ我家の俗なり、非二非不二方に是れ眞諦なりと、故に第三重の二諦有り。大乘師の復言はく、三性は是れ俗なり、三無性の非安立諦を眞諦と爲す。故に今明さく、汝が依他分別の二と眞實不二との是安立諦なると、非二非不二の三無性の非安立諦なるとは皆是れ我が俗なり、言亡慮絶するは方に是れ眞諦なり。問ふ、「若し有無を以て教と爲し、非有非無の理を表すとならば、何んぞ非有非無の教を以て非有非無の理を表さずして、必ず有無の教を以て非有非無の理を表すや。」答ふ、「月を以て月を指すべからず、指を以て月を指すべし、若し利根の人には、是の如く説くべし、但凡夫は有無に著するが故に、有無を以て非有非無を表す。」問ふ、「若し於諦を以て衆生の爲に説かば、更に其患を増すべし、何を以てか二の於諦に依りて説法するや。」答ふ、「凡夫は有に著し二乗は空に滞る、今明さく、如來は因縁の有無なれば假有假無なり、假有の故に不有なり、假無の故に不無なり、云何が患を増せん云。」

名を釋せば、若し他の釋の如きは、俗は浮虚を以て義と爲し、眞は眞實を以て名と爲す、世は是れ隔別を義と爲し、第一は莫過を旨と爲す、此は是れ名に隨ひて義を釋す、是れ義を以て名を釋するに非ず、若し爾らば世間の法には字のみ有りて義無しと謂ふべし。今明さく、俗は不俗を以て義と爲し、眞は不眞を以て義と爲す。若し具足して之を論せば非俗

【若し因縁教云云】
以下は五の中、後

四義なり、後
【或は誠：釋す】
五義中の第二義。

【此二の教云云】
第二義。

【教は必ず差違せ
ず】能詮の教、所

詮の理と差はずと
【五】以下第三に

立名を明す。
【初に立名】初二

名は華嚴と申論、
無所有とは大品經

正法とは華嚴、無
住とは維摩經に依

る。
【提羅：如し】此

喻は涅槃經第二十
三高貴德王菩薩品

の中に出づ。因縁
に因縁あると、因縁

なきとある中、是
は後者に屬する例

なり。
【第二に絶名云云】

以下は上來の立名
は無名相の法體上

非不俗を以て四句を遣り、俗の義と爲すべし、但し今は他の浮虚は是れ俗の義といふに對し
今不俗を義と爲すと明す、是を出世の法には字も有り義も有りと名くるなり。諦の義を釋
するに四家有り云。今明さく、此眞俗は是れ如來の二種の教門なり、能表を名と爲せば則
ち二諦有り、若し所表に從うて名と爲せば則ち唯し一諦なり、故に只審實を以て義と爲すに
あらず。若し二の於諦は即ち審實を以て諦と爲す、若し因縁の教に就かば諦に即ち多義有り。

非ず。或は誠諦の言を以て諦を釋す、此二の教は不二の道を表す、教は必ず差違せざれば即ち是
れ諦の義なり、名に依りて諦を釋することは是の如し。若し義に依りて諦を釋せば、諦は不
諦を以て義と爲す、此は是れ豎に論ず、若し横に諦を論ぜば諸法を以て義と爲す、例せば
眞俗の義の中に説くが如し云。

立名とは三門をもて分別す、前に立名を辨じ、次に絶名を辨じ、後に釋名を辨せん。

初に立名とは、不眞不俗とは、亦是れ中道なり、亦是無所有と名け、亦是正法と名け、
亦是無住と名く。此非眞非俗は無名なれども今假りに名を立つ、此名は無名の所立の名な
ることを以てす、提羅波夷は眞に油を食せざれども、強いて食油と爲るが如し。二諦も亦
爾なり、其眞は不眞を表し、俗は不俗を表するに以て假に眞俗と言ふ、其假言なるを以て
名を得、物の功も無く、物に應名の實も無し。淨名經に云はく、「無住の本に從ひて一
切の法を立つ、無住には即ち本無し」と。大品に云はく、「般若は猶し大地の如し萬物を出
生す」と。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり云。第二に絶名を辨す。常途の相傳

生す」と。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり云。第二に絶名を辨す。常途の相傳

生す」と。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり云。第二に絶名を辨す。常途の相傳

生す」と。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり云。第二に絶名を辨す。常途の相傳

生す」と。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり云。第二に絶名を辨す。常途の相傳

生す」と。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり云。第二に絶名を辨す。常途の相傳

生す」と。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり云。第二に絶名を辨す。常途の相傳

生す」と。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり云。第二に絶名を辨す。常途の相傳

生す」と。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり云。第二に絶名を辨す。常途の相傳

生す」と。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり云。第二に絶名を辨す。常途の相傳

生す」と。般若と正法と無住と此三は眼目の異名なり云。第二に絶名を辨す。常途の相傳

【世諦は絶名ならず】世間所有の情非情等の諸法は聖人親しく應物の名を立つればなり。

【今明さく云云】今家の正義を述す【二諦皆如】二諦の體に約していふ

【六】二諦の體を明す。此れ本文の第五段の釋に當る

は世諦は絶名ならずと、成論の文を引いて劫初の時に物に未だ名有らず、聖人名字を立つ、鮮衣等の物の如し、故に世諦は絶名ならず。眞諦と佛果とは三師不同なり。光宅の云はく「此二つ皆絶名ならず、眞諦には眞如實際の名有り、佛果には常樂我淨の名有り、但し眞名を絶し妙名を絶せず」と。莊嚴の云はく「此二は皆絶名なり、佛果は二諦の外に出づ、是故に絶名なり、眞諦は本より來自ら空なり、四句を亡し百非を絶する故に絶名なり」と。開善の云はく云。今明さく、一往論を爲さば、何んすれぞ得ざらん、然も理實の説には非ず。今問ふ、「若し劫初に物に名詔を作るとならば、眞諦も無名なるを以て名詔を假る者なり、眞と何んが異なる。」又問ふ、「火の名は當に火に即すとや爲ん火を離れたりや、若し此火の名は火に即せば火を呼ぶに即ち口を焼くべし、若使火の名は火を離るれば何が故に水を得ざるや。故に知んぬ體に即離して名有るに非ず、若し口の中に在りて火の上に在らずんば、是れ即ち火には絶名なり。且復從來の蛇床虎杖は世諦の絶名なり。」復問ふ、「人は是れ何物ぞ、人の頭手等をば何の意を以て人と呼ぶや、強いて爲に名を立つ、豈皆絶するに非ずや。」次に三家を難ぜん云。今明さく、四句を以て之を辨せん。一には俱絶、二には俱不絶、三には眞絶俗不絶、四には俗絶眞不絶なり。二諦俱絶と言ふは二諦皆如なり、奈んが皆不絶なることを得ん。一諦俱不絶とは、是如の相を得るをもて名けて如來と爲す、是二の如の相を得るをもて、所以に皆不絶なり云。

二諦の體を釋すること常の解は同じからず云。今の意は第三の諦有り、彼には第三の諦

【第三の諦】 中道
 第一義諦。他の五家を指す。
 【彼】 彼の五家を指す。
 【華嚴經】 六十華嚴經第五卷の文。
 【涅槃經】 第十三聖行品の文。
 【仁王經】 下卷取意文。
 【第一重】 二諦の外に一の體中を立つ、開門の所明。
 【問ふ何者】 中なるのみ。四重中の後三重に準じて、體用の假中を分別せば何者が體假なると問ふ。
 【用假】 俗諦、體假とは眞諦。
 【有無は】 中なり。中道に約していふ。用中。中道に約せば有無と非有無の二。
 【用假】 二諦中の假諦に約せば有無と非有無とを俱に名く。

無し、彼は理を以て諦と爲す、今は教を以て諦と爲す、彼は二諦を以て天然の理と爲す。今明さく、唯し一實諦なれども方便して二と説く。唯し一乘なれども、方便して三と説くが如し。問ふ、「何れの處の經文にか中道を二諦の體と爲す。」答ふ、「中論」に云はく、「因緣所生の法は我即ち是れ空なりと説く、亦爲是假名なり。亦是れ中道の義なり」といへり。因緣所生の法とは是れ俗諦なり、即ち是れ空とは是れ眞諦なり、亦是れ中道の義とは是れ體なり。『華嚴經』に云はく、「一切の有無の法をば非有無なりと了達すべし」といへり。『涅槃經』に云はく、「衆生に隨順して二諦有り」と説く」といへり、故に教門を以て諦と爲す。『仁王經』に云はく、「有諦と無諦と中道第一義諦といへり、故に知んぬ、第三諦有ること」。問ふ、「教諦は是れ一體とや爲ん、是れ異體とや爲ん。」答ふ、「前に言ふが如し、中道を體と爲すが故に是れ一體なり。」問ふ、「若し一體なりと言はば、他家の一體と何んが異なるや。」答ふ、「他家は定んで一、定んで異、定んで亦一亦異なり、今明さく、第一重に約するが故に此語を作す、第二第三第四重に至りては、一とも言ふべからず異とも言ふべからず。」問ふ、「於諦は是れ一體とや爲ん、是れ異體とや爲ん。」答ふ、「二の妄情に約せば二體と爲す、爾れども終には兩物有ること無し、眼病の空華を見るに空に異して華無きが如し、故に一の中道を以て體と爲す。」問ふ、「假有假無をば二諦と爲し、非有非無をば中道と爲すや。」答ふ、「二往は中と假との義を開くが故に、假は中に非ず中は假に非ざるなり、究竟して而も言はば假も亦是れ中なり。故に『涅槃經』に云はく、「有無は即ち是れ非

【體中】二諦中約せば非二と非不二をいふ。【體中】中道に約せば、非二非不二を同じく名く。【合して四假】の【合】第四重に前三種を以て俗諦とし其不三の理を眞諦とす。今第四重に於て中假を論ぜば前二を總合して四假四中自ら第四重の圓假圓中を成ず【七】第五に中道を明すに初に八不に就いて二諦中道を明す。【師】攝異興皇寺の法師大師。【八不を釋し】中論の初の四緣品に八不を明すをいふ。【八】次に三論玄義の取意の文を擧ぐ。初に總じて三論宗を明す。【一切の有病】凡夫外道二乘等。【義を破す】外道二乘方廣道人の有所得の執を破す。

有非無なり」といへり、亦中をも假と爲すことを得、一切の言説は皆是れ假なるが故に。』問ふ、「何者か是れ體假用假なる、何をか體中用中と爲すや。」答ふ、「假有假無は是れ用假なり、非有非無は是れ體假なり、有無は是れ用中なり、非有非無は是れ體中なり。復言はく、有無と非有非無とは皆是れ用中と用假となり、非二と非不二とは方には是れ體假と體中となり、合して四假と四中と有るは、方には是れ圓假圓中なるのみ。」中道を明さば、初には八不に就いて中道を明し、後には二諦に就いて中道を明す。初の【合】中に師に三種の方言有り、第一の方言に云はく、八不を釋して初に在く所以は、一切の有【合】所得の心を洗淨せんと欲すればなり。所得の徒は、此八計の中に墮せずといふこと無し、小乗の人の言ふが如し、謂はく解の生ずべく惑の滅すべき有り、乃至衆生は無明より流するは來なり、本に反り源に還るが故に去なり、今八不は横には八迷を破し堅には五句を窺む。彼生と滅とを求むるに、得ざるに以るが故に不生不滅と言ふなり。生と滅と既に去りぬれば不生不滅と亦生滅亦不生滅と非生滅非不生滅との五句自ら崩れぬ。又「三論玄」の文に云はく、「三論は部帙には異有り」と雖も、而も同じく無所得の正觀を以て宗と爲す。然る所以は此論には、一切の有所得の邊病を破除して、無依無得不二の中道を明す、故に三論に執を破するに用異なれども正觀は別なること無し。故に『無量義經』に云はく、「水の穢を洗ふ義は同じけれども、井と池とに約して異と爲すが如し。今用の不同に約するが故に所宗の差別を辨す。『中論』は二諦を以て宗と爲す。二諦を用ひて

【正觀】不二一體の正觀。

【今用云云】教に就いて別宗を辨ず用とは不二中道の體に對して名く、即ち二諦二智の教門是なり。

【中論は云云】以下三論の所宗を別釋するに、彼部陝の廣次略に就て漸次に列す。初に廣論の一部の旨歸正所明の法門を明す。

【二智】佛所具の權實二智。

【十二門論】同論二十三左觀性門第八の文。

【問云云】以下問答釋成す。初に學教の迷入を明す。

【有をば名く】空即有なるが故に有は空を離れて存するに非ず。

【方廣道人云云】智度論第一卷の所說。

宗と爲す所以は、二諦は是れ佛法の根本なり、如來の自行化他は皆二諦に由ればなり。自行二諦に由るとは『瓔珞經』の佛母品に、二諦は能く佛を生ずるが故に二諦は是れ佛母なり」と明すが如し。蓋し二智を取りて佛と爲す、二諦は能く二智を生ずるが故に二諦を以て母と爲す、即ち是れ如來の自徳圓滿したまふことは二諦に由るなり。化他の徳は二諦に由るに、如來に所説の法有りて衆生の爲に說法したまふことは常に二諦に依る。故に『中論』に云はく、諸佛は二諦に依りて衆生の爲に說法したまふ」と。是れ化他の徳は二諦に由るなり。自行化他二諦に由ると知る所以は『十二門論』に云はく、「二諦を識るを以ての故に則ち自利、利他及び共利を得」といふ、即ち其事なり。二諦は是れ自行化他の本なるを以ての故に、二諦を申明して以て論の宗と爲す。則ち一切衆生をして具に自他の二利を得せしむ。

問ふ、「何の人の二諦に迷すれば、論主迷を破して二諦を申べたまふや。」答ふ、「三種の人有りて二諦に迷ふ。一に小乘五百部なり、各の諸法の、決定の性有り」と執して、畢竟空を聞いては刀をもて心を傷くるが如し。此人は第一義諦を失す、然も既に第一義諦を失す、然も既に第一義諦を失す、然も既に第一義諦を失す。然る所以は、空が宛然として有なるが故に、有をば空が有と名く。方に是れ世諦なり、彼既に空を失すれば、亦是れ有にも迷す、故に世諦を失す、五百部の執は如來の二諦の外に出でたり。二には方廣道人一切の法は龜毛兎角の如し、罪福報應無しと謂へり。此人は世諦を失す、然るに有は宛然として空なるが故

【瓔珞經】 下卷の佛母品。
 【又青目論云云】 中論第一觀因緣品の長行釋。
 【世諦の中…有り】 此は開門に約して三種の中を論ず。初二は用中、後一は體中なり。
 【兩ながら擧ぐ】 三論通宗の不二中道と、廣論用別の二諦の宗となり。
 【其論】 八不二諦をいふ。
 【不二の義】 三論通宗の不二中道即ち體中なり。
 【其二の義】 三論用別の二諦宗の義。
 【問ふ佛云云】 瓔珞經中に明す。

に空をば有が空と名く、既に空が有を失すれば亦有が空をも失す、斯の如きの人は亦二諦を失す。又諸の外道も亦二諦を失す。有見の外道の如きは眞諦に迷ひ、空見の外道は世諦に迷ふ。又凡夫は有に著するが故に眞諦に迷ひ、二乘は空に滯れば世諦に迷ふ。今、此迷を破せんとして二諦を申明す、故に二諦を用ひて宗と爲す。問ふ、「何を以てか此論に二諦を以て宗と爲すと知ることを得る。」答ふ、「瓔珞經」に云はく、「二諦は不生不滅乃至不來不去なり」といへり。今の論には正しく八不を明す、故に知んぬ二諦を以て宗と爲す。又青目、論の意を序するに、外人二諦を失すれば、龍樹是等の爲の故に此『中論』を造することを明す、即ち知んぬ、外道の迷失を破せんとして二諦を申明す、故に二諦を以て宗と爲す。』問ふ、「既に『中論』と名く、何を以て中道を用ひて宗と爲すして、乃ち二諦を以て宗と爲すや。」答ふ、「即ち二諦は是れ中道なり、既に二諦を以て宗と爲せば、即ち是れ中道を宗と爲すなり。然る所以は還二諦に就いて以て中道を明す、故に世諦の中と、眞諦の中と非眞非俗の中道と有り。但し今は名と宗とに兩ながら擧げんと欲ふが故に、中と諦と互に説く、故に宗には其諦を擧げ名には其中を題す。若し中道を以て名と爲し、復中道を以て宗と爲せば、但不二の義のみを得て其二の義を失するが故なり。』問ふ、「佛は何が故に二諦を明し給ふや。」答ふ、「佛法は是れ中道なりと示さんと欲するが故なり、世諦を以ての故に不斷なり、眞諦を以ての故に不常なり、所以に二諦を立つ。又二慧は是れ三世の佛の法身父母なり、第一義有るを以ての故に般若を生じ、世諦有るを以ての故に方便

を生ず。實慧と方便とを具するが故に三世十方の佛有す。又第一義を知るは、是れ自利なり、世俗諦を知るが故に能く他を利す、共じて二諦を知るときは則ち共利を得。又二諦有るが故に佛語皆實なり、世諦を以ての故に有と説く、是れ實なり、眞諦の故に空と説く、是れ實なり、所以に二諦を明す。

【九】次論の宗を明す。是れ百論にして全部二卷十品あり提婆の著【所申】所釋と言はんが如し。佛經の二諦は論藏の二智の爲に所申となる。【能申】能釋と言はんが如し。菩薩の論は正しく二慧を説す、此慧は佛の二諦を申ぶるなり。

【一〇】三に略論の宗を明す。是れ十二門論を指す、龍樹の作なり。【境と智】境とは二諦中の眞諦、智とは二智中の實智

次に『百論』には邪を破し二諦を申ぶ、具には破空品の末に説くが如し、亦二諦を以て宗と爲すべし。但し今は『中論』と互に開避せんと欲して、『中論』は二諦を以て宗と爲し、『百論』は二智を以て宗と爲す、諦と智と互に相成することを明さんと欲ふなり。問ふ『百論』は何が故に二智を用ひて宗と爲すや。答ふ、『提婆と外道と對面し擊揚して一時の權巧の智慧を鬪はしむ、但提婆の權智は巧みに能く邪を破し、巧に能く正を顯せども、而も實には所破も無し亦所顯も無し、故に實智と名く。一論の始終に此二智を明す、故に二智を以て宗と爲す。『中論』は内と諍ふ一時の權巧にあらず、但共に同じく二諦を擧するの人と二諦の得失を諍ふ故に、二諦を以て宗と爲す。則ち『中論』は所申を用て宗と爲し『百論』は能申を用て宗と爲す、佛と菩薩との能所、共に相成することを明さんと欲ふなり。

次に『十二門論』は亦内迷を破して二諦を申明すれば、亦二諦を以て宗と爲すべし、但今は三論の不同を示さんと欲して、宜く境と智とを以て宗と爲すべし。言ふ所の境智とは『論』に云はく「大分の深義は謂ゆる空なり、此義を通達すれば則ち大乘に通達するなり、

六波羅蜜を具足して障礙する所無し」といふなり。大分深義とは謂はく實相の境なり、實相の境に由りて般若を發生す、般若に依るが故に萬行成ずることを得。則ち是義なり。故に境と智とを用て宗と爲す。

【二】 自下は別して廣論を陳ぶ。

【經に云はく】 涅槃經第二十七、師

子吼菩薩品の文、

【本偏病事なり】

對偏盡偏二中を明し、次に絶對中を明す。

【出處】 生死の苦を出て涅槃の樂に處せしむ。

【經に云はく】 珍

海は大集經第十三

の文といひ、聖然

は華嚴經第三十五

取意の文といふ。

問ふ「論を『中論』と名く、中に幾の種有るや。」答ふ、「既に稱して中と爲す、則ち多に非ず一に非ず、義に隨ひ縁に對して多と一とを説くことを得。言ふ所の一中とは一道清淨なり、更に二道無し、一道とは即ち一の中道なり。言ふ所の二中とは、即ち二諦に約して中を辨す。謂はく世諦の中と眞諦の中となり。三中と言ふは二諦の中と及び非眞非俗の中となり。四中と言ふは謂はく對偏中と盡偏中と絶待中と成假中となり。對偏中とは大小の學人の斷常の偏病に對す、是故に對偏中と説くなり。盡偏中とは大小の學人斷常の偏病有れば則ち中を成すとせず、偏病若し盡きぬれば即ち名けて中と爲す。是故に經に云はく、『衆生の見を起すに凡そ二種有り。一には斷、二には常、是の如きの二見を中道と名けず、無常無斷を乃ち中道と名く』といへり、故に盡偏中と名く。本偏病に對す、是故に中有り、偏病既に除けば中も亦立せず、中に非ず偏に非ざれども、衆生を出處せしめんが爲に強いて名けて中と爲るを絶對の中と謂ふなり。故に此論に云はく、『若し始終有ること無きときは中當に云何が有なるべけんや』と。經に云はく、『二邊を遠離して中道にも著せず』といへり、即ち其事なり。成假中とは有無を假と爲し非有非無を中と爲す、非有非無に由るが故に有無を説く、此の如きの中は假を成ずるに爲て成假中と謂ふなり。然る所以は

【無戲論】文殊の無分別の正體智を以て、一切法に於て四種の戲論を絶離して、四智を轉得する意。
 【五字輪】阿羅婆婆義の五字。
 【謂ゆる…羅なり】以下、證に由りて法曼を明す。
 【故に六波羅…名く】次に便に三國の流傳を明す。初に印度の弘通。
 【順中論】二卷、元魏瞿曇般若流支譯。
 【唐の三藏…傳ふ】支那の傳來を述す。
 【中觀】中觀論即ち中論をいふ。
 【入唐…名く】次に日本の相承を述す。
 【是は此れ…云云】以下、秘に歸して總じて結す。

觸知して我を憶念する者有れば、皆諸乘に於て畢定を得、乃至一切の願を滿す。此菩薩は久く已に成佛せり、謂ゆる普見如來なり、或は普現如來と云ふ、大悲加持力を以て童子の身を示す、顯の義は是の如し。深祕の義とは凡の一字を體と爲す是れ大空の義なり、大空は即ち大自在なり、大自在は則大我なり、大我は能く大空を證す、大我は一切の法に於て無著無得なり、是れ則ち如來の智慧なり。若し平等の慧を得れば、一切の法に於て戲論を絶つ、是故に亦無戲論如來と名く。故に『金剛頂經』に云はく、「時に薄伽梵一切無戲論如來、復轉字輪般若理趣を説きたまへり」と。釋經に云はく、是れ則ち文殊師利菩薩の異名なり。轉字輪とは是れ五字輪の三摩地なり。謂ゆる「諸法は空なり無自性と相應する故に」とは、金剛界の曼荼羅の中の金剛利菩薩の三摩地なり。「諸法は無相なり無相性と相應するが故に」とは是れ降三世曼荼羅の中の忿怒金剛利の三摩地なり。「諸法は無願なり無願性と相應するが故に」とは、是れ遍調伏曼荼羅の中の蓮華利の三摩地なり、「諸法は光明なり般若波羅蜜多清淨なるが故に」とは、一切義成就の曼荼羅の中の寶利菩薩の三摩地なり云。謂ゆる空、無相、無願とは、是れ三解脱門なり。大般若等の諸の空無相等を顯す經は、皆是れ文殊師利菩薩の三摩地法曼荼羅なり。故に『六波羅蜜經』に云はく、「文殊師利菩薩をして所説の般若藏を受持せしむ」といへり。龍樹菩薩此般若藏に依りて『中觀』『十二門論』を作りて三解脱中道正觀を示す。龍樹菩薩の弟子提波菩薩『百論』を作て二乘外道等の執を破す。無著菩薩は『順中論』を造し、世親菩薩は『百論』の釋を

作り、清辨菩薩は『中論』の釋を造る、此を『般若燈論』と名く、護法菩薩は『廣百論』の釋を造る。唐の三藏玄奘法師譯して大唐に傳ふ、秦の姚興の時、鳩摩羅什三藏、青目所作の『中觀』の釋を譯して四卷と爲す。吉藏法師、中、百、十二の三論に依りて廣く章疏を造りて盛んに三解脱門を傳ふ。入唐の學生智藏、道慈法師等受學して此間に傳ふ、是を三論宗と名く。

是は此れ、人に名くれば則ち文殊師利菩薩、法に約すれば『大般若波羅蜜多經』と曰ふ。此の如きの經論等の所詮の無量の教義等は、悉く文殊の一の卍字の眞言に攝し盡す、若し此一字を觀誦すれば則ち大空三昧を證して文殊菩薩に等同なり。此大空の慧を證する時は、能く一切の諸法の本來不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不去、不來等を知る。『中論』の初に八不を説く良に以有り、是大慧は亦是れ大日尊の萬德の一なり。故に善無畏三藏の云はく、『文殊師利は是れ大日如來の智慧なり、大日如來を離れて別に慧有らず』と云。

祕密曼荼羅十住心論卷第七

祕密曼荼羅十住心論

卷第八

【一】初に淺略の釋の下、初に略して大綱を明す、次に初に所攝の經に約して明すに、初に儒典に對して示す【百會】本人の頂にあり、今如來を無上土と呼ぶ故に義を以て佛に名く【華胥】印度をいふ。

【三帥】二乘、人天に喩ふ。【狂醉の黎元】孔子の教を學ばざる百姓。

【黔首・歸らず】釋教を信ぜざる民靈蕭山に歸らずと【七十の達者】孔子の門人三千人を影顯す。

【萬千…信ず】法華の同聞衆を擧げて如來の説を信ずるを示す。

【度内・入らず】機教不相應を示す度内とは聖人法度の域内。

若し夫れ孔宣震旦に出でて五常を九州に述べ、百會華胥に誕れて一乘を三帥に開く。於是に狂醉の黎元は住して進まず。癡闇の黔首は往いて歸らず、七十の達者は頗る其堂に昇り、萬千の羅漢は乃ち金口を信ず、度内の五常は方圓合はず、界外の一車は大小入らず。是故に三七に樹を觀じ四十に機を得つ。初には四諦方等を轉じて人法の垢穢を洗ひ、後には一雨の圓音を灑いで艸木の芽葉を霑す。蓮華三昧に入りて性徳の不染を觀じ、白毫の光を放ちて修成の遍照を表するが如きに至りては、會三歸一して佛智の深多を讚じ、指本遮末して成覺の久遠を談ず。寶塔騰踊して二佛同座し、娑界震裂して四唱一處なり、髻珠を賜ひ瓔珞を獻ず、利智の鷲子は吾佛の魔に變ぜるかと思ひ、等覺の彌勒は子の年の父に過ぐることを惟む。一實の理、本懷を此時に吐き、無二の道、満足を今日に得。爾れば乃ち羊鹿薨れて露牛疾し、龍女出でて象王迎ふ。二種の行處は身心の室宅に宿り、十箇の如是は止觀の宮殿に安す。寂光の如來は境智を融して心性を知見し、應化の諸尊は行願を願みて分身、相に隨ふ。寂にして能く照し、照にして常に寂なり。澄水の能く鑒るに似、

一道無爲住心第八 亦是如實知自心と名け 亦是空性無礙心と名け

若し夫れ孔宣震旦に出でて五常を九州に述べ、百會華胥に誕れて一乘を三帥に開く。於是に狂醉の黎元は住して進まず。癡闇の黔首は往いて歸らず、七十の達者は頗る其堂に昇り、萬千の羅漢は乃ち金口を信ず、度内の五常は方圓合はず、界外の一車は大小入らず。是故に三七に樹を觀じ四十に機を得つ。初には四諦方等を轉じて人法の垢穢を洗ひ、後には一雨の圓音を灑いで艸木の芽葉を霑す。蓮華三昧に入りて性徳の不染を觀じ、白毫の光を放ちて修成の遍照を表するが如きに至りては、會三歸一して佛智の深多を讚じ、指本遮末して成覺の久遠を談ず。寶塔騰踊して二佛同座し、娑界震裂して四唱一處なり、髻珠を賜ひ瓔珞を獻ず、利智の鷲子は吾佛の魔に變ぜるかと思ひ、等覺の彌勒は子の年の父に過ぐることを惟む。一實の理、本懷を此時に吐き、無二の道、満足を今日に得。爾れば乃ち羊鹿薨れて露牛疾し、龍女出でて象王迎ふ。二種の行處は身心の室宅に宿り、十箇の如是は止觀の宮殿に安す。寂光の如來は境智を融して心性を知見し、應化の諸尊は行願を願みて分身、相に隨ふ。寂にして能く照し、照にして常に寂なり。澄水の能く鑒るに似、

【法明道】心の不生際を覺り、其心淨住にして大慧光明を放ち、諸佛所行の道を見るなり【釋して云云】以下註解す。

【法身・無爲】是は俱に究竟覺位のは證の絶理なれば眞理といふ。【諸の顯・初門なり】此は顯密二教の說相に約し顯果密因を成じ初門の言を釋す。

【又下の文云云】此は此住心の當分の遮情無相の理觀を明す。

【相も無く】常虛無物の謂に非ず、且く一乘圖識の觀解を以て、前三乘の隔歴の法門を遮すなり。

【迹補處に鄰る】迹とは迹門の菩薩【三】白下は、本宗の祖說を證成す【天台山】山に華頂佛流唐溪の三嶺

是故に秘密主、我れ諸法を説くこと是の如し、彼諸の菩薩衆をして、菩提心清淨にして其心を知識せしむ。秘密主、若し族姓の男、族姓の女、菩提を識知せんと思はば、當に是の如く自心を識知すべし。秘密主、何んが自心を知るとならば、謂はく若は分段、或は顯色、或は形色、或は境界、若は色、若は受想行識、若は我、若は我所、若は能執、若は所執、若は清淨、若は界、若は處、乃至一切の分段の中に求むるに不可得なり。秘密主、此れ菩薩の淨菩提心門なり、初法明道と名く。と。釋して曰はく、謂はく無相虛空相及び非青非黃等の言は、並に是れ法身眞如一一道無爲の眞理を明す、佛、此を説いて初法明道と名く。【一度】には入佛道の初門と名く。佛道と言ふは金剛界宮大日曼荼羅の佛を指す、諸の顯教に於ては是れ究竟の理智法身なれども、眞言門に望むれば是れ則ち初門なり。大日世尊及び龍猛菩薩並に皆明かに説きたまへり、疑惑すべからず。又下の文に云はく、「謂ゆる空性は根境を離れて相も無く境界も無し、諸の戲論を越えて虛空に等同なり。有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離れ」とは、亦是れ理法身を明す。無畏三藏の說かく、「行者此心に住する時、即ち釋迦牟尼の淨土毀せずと知る。佛の壽量長遠の本地の身と、上行等の從地涌出の諸の菩薩と、一處に同會すと見、對治道を修する者は、迹は補處に鄰ると雖も、然も一人をも識らず、是故に此事を秘密と名く」と、此理を證する佛を、亦常寂光土の毘盧遮那と名く。

大隋の天台山の國清寺の智者禪師、此門に依りて止觀を修し法華三昧を得、即ち「法華」

あり、是れ天の三台星に應ずる故にいふ。

【此門】 決華一乘法。

【心を観ずる云云】 此下正しく十乘觀法を明す。

【一に心是れ云云】 別釋の文を摘探するに初に觀不思議境の文。

【一界に十界を具す】 一界に十界を具すれば自ら一界に五陰と衆生と國土との三十種世間を具す。

【四】 上は性徳の境に約して明し、自下は賢聖の化他思議境を明す。

『中論』、『智度』を所依として一家の義を構ふ、止觀を修し兼て門徒の爲に説いて云はく、

「正しく止觀を修すとは、乃至心を觀するに十法門を具す、一には觀不可思議境、二には起慈悲心、三には巧安止觀、四には破法遍、五には識通塞、六には修道品、七には對治助開、

八には知次位、九には能安忍、十には無法愛なり。一に心は是れ不可思議の境と觀ずるとは、

夫れ一心に十法界を具す、一法界に又十法界を具すれば百法界有り、一界に三十種の世間を具す、百法界には即ち三千種の世間を具す、此三千、一念の心に在り、若し心無きとき

んば已みなん、介爾にも心有れば即ち三千を具す。亦心は前に在り、一切の法は後に在り

と言はざれ、亦一切の法は前に在りて一心は後に在りと言はざれ。若し一心より一切の法を生ずといはば、此れ則ち是れ縱なり。若し心一時に一切の法を舍すといはば、此れ即ち

是れ横なり、縦も亦不可なり、横も亦不可なり、只心は是れ一切の法なり、一切の法は是れ心なり、故に縦に非ず横に非ず、一に非ず異に非ず、玄妙深絶せり。識の識る所に非ず、

言の言ふ所に非ず、所以に稱して不可思議境と爲すこと意此に在り」と。

又云はく、『四句俱に皆説くべし、因も亦是なり、縁も亦是なり、共も亦是なり、離も亦是なりと説く、若し盲人の爲に乳を貝の若し糝の若し雪の若し鶴の若しと説く、若し盲、

諸説を聞いて即ち乳を解することを得。世諦に即して是れ第一義諦なり。當に知るべし。

終日に説き終日に説かず、終日に雙べて遮し、終日に雙べて照す、破に即して即ち立し、

立に即して即ち破す、經論皆爾なり。天親、龍樹は内鑒冷然として外に時の宜きに適ひて

【俱に説く…べし】若し第一義諦に就けば四句俱に説くべからず、世諦に就かば俱に説くべき意。

【若し便…爲るなり】此は化他の説法教化の大體を明す。

【無明…言ふべし】此は眞妄和合の心源の第八を觀じて諸法を生ずる根本と爲るに約す。

【眠法…如し】眠の心所、第六識心王に依りて夢あるをいふ。

【一心は一切心云】此下、選た教體によりて、前三種世間界如等に歷て、専ら妙境三諦の相を示す。

【一心】惣無明の心の心。

【一陰】五陰中の隨一、一切陰とは五陰を合していふ。此下三科に約す。【一衆生は…一切】

各各權りに據る所なり。而れども人師偏に解し、學者苟くも執ず、遂に矢石を興して各各一邊を保ちて大いに聖道に乖けり。若し此意を得ば俱に説くべからず俱に説くべし。若し便宜に隨はば無明、法性に法として一切の法を生ずと言ふべし。眠法の心に法として則ち一切の夢事有るが如し。心と縁と合すれば則ち三種世間三千の相性皆心より起す。一性少なりと雖も無に非ず、無明多しと雖も有に非ず、何者なれば一を指して多とすれば多も多に非ず、多を指して一とすれば一も少に非ず、故に此心を名けて不可思議の境と爲すなり。

一心は一切心なり、一切心は一切心なり非一非一切なり、一陰は一切陰なり、一切陰は一切陰なり非一非一切なり。一入は一切入なり一切入は一切入なり非一非一切なり、一界は一切界なり一切界は一切界なり非一非一切なり。一衆生は一切衆生なり一切衆生は一切衆生なり非一非一切なり。一國土は一切國土なり一切國土は一切國土なり非一非一切なり。一相は一切相なり一切相は一切相なり非一非一切なり、乃至一究竟は一切究竟なり、一切究竟は一切究竟なり非一非一切なりと解するが若きは、遍く一切の法に歷て皆是れ不可思議の境なり。法性と無明と合して一切の法陰界入等有りといふが若きは即ち是れ俗諦なり、一切の界入は是れ一法界といふは、即ち是れ眞諦なり、非一非一切といふは即ち是れ中道第一義諦なり、是の如く遍く一切法に歷て不思議の三諦に非ずといふこと無し。一法一切法といふが若きは、即ち是れ「因緣所生の法は是は爲れ假名にして」假觀なり。一切法即一法といふが若

衆生世間。

【一國土：一切】

【一相：一切なり】

【十如に約す】

【決性と無明云云】

【教體の意によりて】

【前の所歴を結んで】

【三諦等を成す。正】

【初に三諦を成す。】

【一法一切法：如】

【し】二に三觀を成】

【ず此は中論第四の】

【四諦品に、四句の】

【頌を結びて三觀を】

【明す文に合す。】

【因縁所生：智な】

【り】三に三智を成】

【隨情の：無し】

【四に三語を成す。】

【傾を：解す】五】

【に三趣を成す。】

【此等は：爲す】

【此下、不思議の妙】

【境の上に三觀等を】

きは「我れ即ち説く是れ空」にして空觀なり。非一非一切といふが若きは即ち是れ中道觀

なり。一空一切空なれば假中として空ならずといふこと無し、總じて空觀なり。一假一切

假なれば空中として假ならずといふこと無し、總じて假觀なり。一中一切中なれば空假と

して中ならずといふこと無し、總じて中觀なり。即ち『中論』に説く所の不可思議の一心

三觀なり。一切の法に歴て亦是の如し。因縁所生の法といふが若きは、即ち方便隨情にし

て道種の權智なり。一切法一法我れ説く即ち是れ空といふが若きは、即ち隨智にして一切

智なり。非一非一切を亦中道の義と名くといふが若きは、即ち非權非實にして一切種智な

り。上に例せば一權一切權なり、一實一切實なり、一切非權非實なり、遍く一切に歴て是

れ不可思議の三智なり。隨情の若きは即ち隨他意語なり、隨智の若きは隨自意語なり、非

權非實の若きは即ち非自非他意語なり、遍く一切の法に歴て漸頓と不定との不思議の教門

に非ざることを無し。傾を解するが若きは即ち心を解す、心尙し不可得なり、何ぞ當に趣非

趣有るべけんや。漸を解するが若き即ち一切の法の心に趣くことを解す、不定を解するが

若きは即ち是趣に過ぎざることを解す。此等は名異にして義同なり、行人に軌則するを呼

んで三法と爲し、所照を三諦と爲し所發を三觀と爲し、觀成するを三智と爲し、他を教

ふるを呼んで三語と爲し、宗に歸するを呼んで三趣と爲す。若し斯意を得つれば一切に類

して皆法門を成す、種種の味、煩を嫌ふこと勿れ。

又四種の三昧を修して菩薩の位に入ることをして明して云はく、「行法衆多なれども略して其

なり。

【又云はく】 止觀

第一五の法、一念

三昧の文なり。

【是を最要】 一心

三昧

【上ハ】 止觀第五

六兩卷に第四の破

法體を論す。今は

第六之四三十三紙

の文。

【横豎】 二門をい

ふ。

【一心】 總の無明

の一心及び縁の食

等の一心。

【無生門】 四門中

の空門、是觀の要

門に當る。

【無明の一念之法】

事道の三千に約す

【即空…三觀】 理

具の三千に約す。

【等の法】 三智の

中の一切智道種智

四を言ふ。一には常坐、二には常行、三には半行半坐、四には非行非坐なり、亦是隨自
 意なり亦是覺意と名く。通じて三昧と稱することは調直定なり。『大論』に云はく、善心は
 一處に住して動せず、是を三昧と名く一と。法界は是れ一處なり、止觀は能く住して動ぜ
 ざるなり、四行を緣と爲して心を觀ず、緣に籍て調直なり、故に通じて三昧と稱す。又云
 はく、「根塵相對して一念の心起するに即空、即假、即中なり、是を最要とす」と。
 又云はく、「横豎一心にして止觀を明さば、上の所説の如きは横豎深廣にして一切の邪執
 を破し、一切の經論を申べ、一切の觀行を修し、一切の根縁に返りて廻轉無窮なり、言
 煩して見離し、今當に結束して其正意を出すべし。無生門の若き千萬重疊なれども、只是
 無明一念の因縁所生の法なり、即空即假即中の不思議の三諦なり、一心三觀、一切種智、
 佛眼等の法なるのみ。無生門既に滿なり、諸餘の横門も亦復是の如し。種種に説くと雖も、
 只一心三觀なり、故に横も無く豎も無し、但一心に止觀を修す。又云はく、「衆生と言ふは
 貪恚癡の心は皆我有りと計す。我は即ち衆生なり、我は心の起するに遂ふ、心に三毒を起
 すを即ち衆生と名く。此心起する時即空即假即中なり、心に隨ひて念を起するに止觀具足
 す、觀をば佛知と名け、止を佛見と名く。念念の中に於て止觀現前す、即ち是れ衆生佛知
 見を聞くなり。此觀成就するを初隨喜品と名く、讀誦扶助して此觀轉明して第二品を
 成す。行の如くにして説いて心を資くること轉明にして第三品を成す。兼て六度を行じて
 功德轉た深ければ第四品を成す、具に六度を行じ事理滅すること無くして第五品を成す。

【七】止觀第七之四、三十四紙、第十に無法愛を明す文。
 【薩婆若海】此に佛果をいふ。
 【首楞嚴】此に健相といふ、三昧の名。

六根淨に轉入するを相似の位と名く。故に『法華』に云はく、「未だ無漏を得ずと雖も而も其意根清淨なり」と。此の若く相似の位より進んで銅輪に入りて無明を破し無生忍を得るに四十二地の諸位有り。故に『法華』に云はく、「是の如く無漏清淨の果報を得」といへり。亦是れ「三賢十聖果報に住す、唯佛一人のみ淨土に居す」といへり、聖賢を以て佛に例するに、妙覺を指すに是れ報なり。

又云はく、「若し法愛を破すれば、三解脱に入りて眞の中道を發す、所有の慧身に由りて悟らずして、自然に薩婆若海に流入す。無生忍に住するを亦寂滅忍と名く、首楞嚴を以て遊戲神通し、大智慧を具すること大海水の如し、所有の功德唯し佛のみ能く知りたまふ」と。今、止觀進趣の方便は此に齊るのみ。入住の功德をば今論する所無し、後に當に重釋すべし。是十種の法を大乘觀と名く、是乘を學する者を摩訶衍と名く行の相と爲す。

此一道無爲の住心に二種の義有り。謂はく淺略といふは前の如し、深祕の義とは下の所説の眞言門の義是なり。言は一道無爲住心の所説の法門は、是れ觀自在菩薩の三摩地門なり、所以に觀自在菩薩の手に蓮華を執りて、一切衆生の身心の中に本來清淨の理有ることを表す。無明三毒の泥中に沈淪し、六趣四生の垢穢に往來すと雖も、染せず垢ならざること猶し蓮華の如し、是本來清淨の理を一道無爲と名く。是一道を亦は一乘と名く、謂ゆる佛乘なり。乘は能運載に約して名を得、道は能開通に據りて稱を立つ、名は二つ別なりと雖も理は則ち一なり。是觀自在菩薩、普等三昧に住して自心の眞言を説きて曰はく、

初の一句は即ち是れ一切如来なり。謂はく十方三世の諸佛なり。次の句は觀の義なり、

彼の所の觀を用ふるが故に諸如来觀と名く、即ち是れ平等觀なり、即ち是れ普眼觀なり。

次の句は體なり、謂ゆる大悲を體と爲す、猶し金人の彼自體純に是れ金なるを以ての故に

金人と爲るが如し、此菩薩も亦爾なり、純に大悲を以て體と爲す。囉囉囉といふは、囉は是

れ塵垢の義なり、阿字門に入れば即ち是れ無塵垢なり、三の重ぬる所以は三毒三界三業三

等を除けばなり。此三重の塵垢を除くに由りて、速かに本來清淨一道無爲の理を證す。

此眞言は初の阿字を以て體と爲す。薩字は一切諸法諦の義なり、觀自在菩薩、普眼力を

以て一切諸法を觀じ、不倒不謬なるが故に諦と名く。諦は審なり、所觀の理事徹底し審

諦ならざること無きが故なり、『法華經』の題目の梵名に云はく、

阿耨多羅三藐三菩提

初の阿字は亦是れ薩字なり、此經も亦初の一字を體と爲す、經内の一切の句義は皆此一

字の義を説けり。譬へば易の一爻に、能く六十四卦及び十翼等の萬象を含むが如し、故に

觀自在菩薩は此一字を以て眞言と爲す。此菩薩をば亦是れ得自性清淨如来と名く、故に『金

剛頂經』に云はく、「時に薄伽梵、得自性清淨法性如来、復一切法平等觀自在智印を説

きたまふ」と。釋經に云はく、「得自性清淨法性如来とは、是れ觀自在菩薩の異名なり。

謂ゆる世間一切欲清淨の故に則ち瞋清淨なり」とは、此れ則ち金剛法菩薩の三摩地な

【八】 自下は深秘釋なり。

【此眞言云云】 次に別して種子を陳ぶ。

【此菩薩をば云云】 此菩薩の果名によりて説明す。

【法華經と云云】 通じ彼宗教を開く。

【法曼荼羅】 曼荼羅に大、三、法、翔の四種ある中、

今は法曼荼羅をいふ。これ諸尊の種子を書けるもの、一名

種子曼荼羅ともいふ。

種子曼荼羅ともいふ。

【多名顯句】 長行
偈頌をいふ。

【經論疏等】 法華
經、中觀論等並に

天台の三大部たる
法華玄義法華文句

摩訶止觀等を指す
【故に法華儀軌云

云】此下經を引き
て證成す。

【若し妙法云云】
修行の次第を示す

【若し是の如き】
なりと】此下顯綱

を誦む。

り。謂ゆる世間一切垢清淨の故に則ち一切罪清淨なり」といふは、此れ則ち金剛利菩薩の三摩地なり云

『法華經』と及び餘の觀音部の經等とは、皆是れ觀自在菩薩の法曼荼羅なり、其の一字の眞言を以て悉く攝し盡せり。天台の智者禪師、『法華經』、『中論』、『智度論』等に依りて

止觀の法を修し、『四教義』、『禪門』、『觀心論』を撰し、兼ねて弟子等の爲に説く。上足の弟子灌頂、法華の『玄文』、『文句』、『止觀』各各十卷を記す、後の弟子湛然、『文句』、『玄義』

『止觀』等の私記を作る、是を天台法華宗と名く。此の如く法門は並に是れ法王の一職、法界の一門なり、百字輪の一の可字より流出するを以て、攝末歸本すれば悉く一字に含め

り。若し衆生有りて此門より法界に入る應き者には、觀音の身を現じて此法教を授けたまふ、若し能く受持し讀誦すれば、速かに解脫を得て觀音菩薩に等同なり。若し此眞言の密

義を得れば、一切の法教皆悉く平等平等なり。若し多名顯句の經論疏等に依りて修行する者は、徒らに年劫を積み空しく身心を費せども法界に證入することを得ざるなり。

故に法華の儀軌經に云はく、「一切衆生の身中に皆佛性有り如來藏を具せり、一切衆生は無上菩提の法器に非ざること無し。若し此の如きの法を成就せんと欲はば、應當に先づ是

の如きの四縁を具すべし。一には善知識に親近す、即ち是れ灌頂阿闍梨なり。二には正法を聽聞す、正法とは是れ妙法蓮華經なり。三には理の如く作意す、如理作意とは即ち

是れ瑜伽の觀智なり。瑜伽觀智とは即ち是れ本尊及び眞言印等を觀念するなり。四には法

隨法行す、法隨法行とは謂はく奢摩他と毘鉢舍那とを修するなり、即ち無上菩提を證するに堪任せり。若し『妙法蓮華經』を修持せん、若は男若は女、則ち修真言行に依りて、密に菩薩の道を行すべし。當に先づ大悲胎藏大曼荼羅に入り、並に護摩の道場を見て、身中の業障を滅除し、阿闍梨の共灌頂を與ふることを得て即ち師に従ひて念誦儀軌三昧耶を受け、護身結界し迎請供養し、乃至己身普賢大菩薩の身に等同なりと觀すべし。若し是の如きの増上縁を具せざる者は、所有の此の如きの經王を讀誦し修習すれども、速疾に三昧を證成することを得難し。一一の印契儀軌眞言當に灌頂阿闍梨の處に於て、躬ら決擇を稟授すべし、専ら檀に作す者をば、是を則ち名けて越三昧耶と爲す、傳と及び受者と俱に重罪を獲るなり」と。

祕密曼荼羅十住心論卷第八

秘蜜曼茶羅十住心論 卷第九

極無自性住心を解するに多義あるも今法門を以て約すれば華嚴にして佛の驚覺を蒙りて更に轉じて逆趣心を生ずる者はなり。【一】初に顯略の綱を明す。

【夫れ深甚云云】此より下鑿知諸法に至るまで、華嚴の心佛無差別の法門を明す。中に於て此章は世の深高廣遠なる者を擧げて心佛の難思を對量す。

【麼噓】此に海といふ。

【近くして云云】此下正しく心佛を明す。

【空に遍す】融三世間の故に。

【巧藝】竿を善くせる二人の名、巧歴衆藝。

【離婁和阿那律】離婁と阿那律。天眼を有せし二人。

極無自性住心第九

極無自性住心といふは、今此心を釋するに二種の趣有り。一には顯略趣、二には秘密趣なり。顯略趣とは、夫れ深甚なるは麼噓、峻高なるは蘇迷、廣大なるは虚空、久遠なるは芥石なり。然りと雖も芥石も竭き磷らぎ、虚空も量りつべし、蘇迷は十六萬、麼噓は八億那なり、近くして見難きは、我心なり、細にして空に遍するは、我佛なり、我佛は思議し難し、我心は廣にして亦大なり。巧藝心迷ひて竿を擲げ、離律眼盲して見ることを休む。禹が名舌斷え、夸が歩み足別る。聲縁の識も識らず、薩埵の智も知らず。奇哉の奇、絶中の絶なるは其れ只自心の佛か。自心に迷ふが故に六道の波鼓動し、心原を悟るが故に一大の水澄靜なり。澄靜の水には影萬像を落し、一心の佛は諸法を鑒知す、衆生此理に迷ひて輪轉絶ゆること能はず、蒼生太だ狂醉して自心覺ること能はず。大覺の慈父其歸路を指したまふ、歸路は五百由旬なり。此心は則ち都亭なり、都亭は常の舎に非ず、縁に隨ひて忽ちに遷移す、遷移して定れる處無し、是故に自性無し、諸法自性無きが故に卑を去け尊を取る、故に眞如受熏の極唱、勝義無性の祕告有り。一道を彈指に驚かし、無爲を未

【馮が：別る】大萬は山海經を造り、萬物に名を立て、夸父は日影を追うて走るといふ古事を引き用ふ。

【自心に云ふ】自下、不能覺までは生佛の心體同なるも迷悟の用異なるを明す。初に一心緣起を標す。

【大覺云云】上に所攝の心佛を明し、竟り、二に能攝の住心を明す。初に大覺とは大日世尊門。

【五百由旬】華嚴一乘法門を指す。【此心は云云】自下は極無の名を釋す。

【都亭】客舎。第九住心を續生に約せば、第十心に向ふ中間心なる故に【一道を彈】覺す【密佛の驚覺】

【等空之心】爲る【八九住心の轉昇を】

極に覺す、等空の心、是に於て始めて起り、寂滅の果、果還りて因と爲る。是因是心、前の顯教に望むれば極果なり、後の祕心に於ては初心なり。初發心の時に便ち正覺を成ずと、宜く其れ然る可し。初心の佛其德不思議なり、萬德始て顯れ一心稍稍現す。此心を證する時三種世間は即ち我身なりと知り、十箇の量等は亦我心なりと覺る。

盧舍那佛始め成道の時、第二七日に普賢等の諸大菩薩等と廣く此義を談じたまへり、是れ即ち謂ゆる『華嚴經』なり。爾れば乃ち華藏を苞んで以て家と爲し法界を籠めて國と爲す。七處に座を莊り八會に經を聞く。此海印定に入りて法性の圓融を觀じ、彼山王の機を照して心佛の不異を示す。九世を剎那に擧して一念を多劫に舒ぶ、一多相入し理事相通す、帝網を其重重に譬へ鏡光を其隱隱に喻ふ。遂使て覺母に就いて以て發心し、普賢に歸して證果す、三生に練行し百城に友を訪ふ。一行に一切を行じ一斷に一切を斷す。初心に覺を成じ十信に道圓なりと云ふと雖も、因果異ならずして五位を経て車を馳せ、相性殊ならずして十身を渾じて同歸す、斯れ則ち華嚴三昧の大意なり。

故に大日如來祕密主に告げて言はく、「謂ゆる空性は根境を離れて相も無し境界も無し、諸の戲論を越えて虚空に等同なり、有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離れて極無自性心生ず」と。善無畏三藏の説かく、「此極無自性心の一句に悉く華嚴教を攝し盡す」と。所以は何んとなれば、華嚴の大意は始を原ね終を要むるに眞如法界不守自性隨緣の義を明す。故に法藏師の『五教』に云はく、若し眞如一向に有り」と計せば二

【此心は云云】自下は極無の名を釋す。

示す。等空の心とは第九住心始起の遍一切處の淨菩提心。

【寂滅の果云云】第八住心の果還て第九住心普賢の因となる。

【是因云云】此一段は從顯入密に約して、顯果密因を釋す。

【前の顯教】近くは前の他緣一道の兩住心をさす。

【後の祕心】第十住心の三句の中の根究竟の二心を指す。

【初發：然るべし】舊華嚴第九梵行品の文。

【初心の佛】初發心の成佛。

【真心を證す】直往の眞言行者、即ち能寄齊第九極無自性心。

【三種世間】所寄齊の華嚴の教主、十身具足の盧舍那佛をいふ。

の過失有り。一には常の過、謂はく隨緣せざるが故に染に在りて隱に非ず、故に了因を待たず、故に即ち常の過に墮す。問ふ、「諸の聖教の中に並に眞如を説いて凝然常と爲す、既に緣に隨はず豈是れ過ならんや。」答ふ、「聖の眞如を説いて凝然と爲すことは、此は是れ緣に隨ひて染淨と成る時、恆に染淨と作れども而も自體を失せず、是れ即ち無常に異らざるの常なり、不思議常と名く、諸法と作らざる情所謂の如きの凝然と謂ふには非ざるなり。若し諸法と作らずして凝然なりと謂はば、是れ情の所得なるが故に即ち眞常を失せん。

彼眞常は無常に異らざるの常なるを以てなり。無常に異らざるの常は、情の外に出でたるが故に眞常と曰ふ。是故に經の中に「不染にして染」とは常にして無常と作ることを明すなり。「染にして不染」とは無常と作る時に常を失せざることを明すなり。問ふ、「教の中に既に無常に異らざるの常に就くが故に、眞如を説いて凝然常と爲せば、何が故に常に異らざるの無常に就くが故に眞如を説いて無常と爲さざるや。」答ふ、「教の中に亦此義を説けり、故に經に云はく、「如來藏とは苦樂を受けて因と俱に若は生じ若は滅す」と。經に云はく、「自性清淨、心は無明の風に因りて動じて染心と成る」等なり。此教理に以るが故に眞如は常に異らざるの無常なり、故に緣に隨ひて體を隠して是れ非有なり。問ふ、「眞如は是れ不生滅の法なれども、既に無常に異らざるの常なるが故に説いて常と爲し、常に異らざるの無常なるが故に無常と説くことを得と云はば、亦云ふべし、依他は是れ生滅の法なれども、亦常に異らざるの無常と、無常に異らざるの常との義有ることを得べきや。」答ふ、

嚴經の意に依て此乗の趣を達す。

【兩れば……】次に別して對句を以て明すに、初に能化の說法に就て明す。初に經の會處。

【此海印……】此下、機を擧げて説くを示す。

【九世を云云】自下の所明は十玄門のうち、第八の十世福法異戒門、第二の一多相容不同門、第四の因陀羅微細境界門の三を示す。

【鈍光】破樂球。今は一刹に無量刹を入れて前後なく一時に並照するをいふ。

【遂使云云】二に所化の得益を明す。

【初心云云】同融行布二門の渾融を明す。

【五位】十信より十地までなり。

【三】二に證を引きて廣く釋するに

亦並に行ふことを得るなり。何を以ての故に。諸の緣起無常の法は即ち無自性にして方に緣起を成ず、是故に常性に異らずして而も無常なることを得。故に經に云はく、「不生不滅は是れ無常の義なり」と。此れ即ち常に異らずして無常と成るなり。又諸の緣起は即ち是れ無性なるを以て、緣起を滅して方に無性と説くに非ず、是れ即ち無常に異らざるの常なり。故に經に云はく、「色即是空なり色滅の空に非らざるが故に」と。又云はく、「衆生即ち涅槃なり、是に滅せざるが故に」と云ふ等なり。此中の二義と眞如の二義と相配して知るべし。此れ即ち眞俗雙融して二にして無二なり、故に「論」に云はく、「智障極めて盲暗なるもの、眞俗を謂つて別執す」とは此謂なり。是故に若し眞如情所謂に同じて凝然常なりと執せば、即ち緣に隨ひて其自體を隠さず、了因を假らざれば即ち常の過に墮するなり。又若し緣に隨ひて染淨を成ぜずんば、染淨等の法には即ち所依無からん。依無くして法有らば又常に墮するなり、染淨の法は皆自體無くして眞に頼りて立つるを以ての故に。二に斷の過とは如情の有は即ち眞の有に非ず、眞の有に非ざるが故に即ち眞を斷ず。又若し有と云はば即ち染淨に隨はざれば、染淨の諸法には既に自體無からん、眞又隨はざれば法有ることを得ざるも亦是れ斷なり。

三藏又云はく、「行者是の如きの微細の慧を得る時に、一切の染淨の諸法を觀するに、乃至少分由し鄰虚の如きも緣より生ぜざる者無し。若し緣より生ずるは即ち自性無し、若し自性無きは即ち是れ本不生なり、本不生は即ち是れ心の實際なり、心の實際も亦復不可得

初に住心の名義を明すに初に經文、次に疏釋なり。【謂ゆる、離れ】八九の住心に通じていふ。

【善無畏・盡す】此は第三卷具緣品に、四心を以て一切佛法を統攝する中の、極無自性心所攝の分齊を明す文を引く。

【眞如法界】三乘所説の眞如を簡びて法界の二字を加ふ。

【不守自性】本覺無明の熏を受けて自性を守らず隨緣無碍なるをいふ。【五教】五教章中卷の文。

【一には常の過】以下別釋の中、斷常の過失を擧ぐるに、初に常の過失を明す。【經】勝鬘經の取意の文。【經に云はく如來】云云。【四卷楞伽の】第四の文。次は起

なり、故に極無自性心生と曰ふ。此心を前二劫に望むれば、由し蓮華の盛に敷けたるが如し。若し後の二心に望むれば即ち是れ果復て種と成る故に、經に「是の如き初心を佛成佛の因と説く」と曰ふ。前の二劫とは他緣、一道の二種の住心を指す、又極無自性心に眞如法身驚覺の緣力を蒙りて、更に金剛際に進むことを明すことは、「大日經」及び「金剛頂經」等に據るに云はく、「時に婆伽梵、大菩提普賢大菩薩、一切如來の心に住したまふ、寂滅無相平等究竟眞實なり。時に金剛界の一切如來、受用身を現じて彈指し驚覺して告げて曰はく、善男子、汝が所證は是れ一道清淨なれども、未だ秘密金剛三摩地を證せず、此を以て足りぬと爲すこと勿れと。時に一切義成就菩薩、一切如來の驚覺に由りて、即ち無色身三昧より起ちて一切如來を禮して白して言さく、世尊如來、我所行の道を教示したまへ、

何んが修行し何んが是れ眞實なる。一切如來異口同音に彼菩薩に告げて言はく、善男子、當に自性を觀察する三摩地に住すべしと。此より已後に五相成身の眞言を説く。此五相の眞言の加持に由りて大日尊の身と成ることを得」と。是の如きの明證一に非ず、繁を恐れ

て述べず、一道清淨と言ふは即ち是れ一乘一如等の理是れなり。
又華嚴宗には五教と十玄と六相と華嚴三昧とを以て至要と爲す、故に略して之を出さん。
藏公の『金師子章』に曰はく、「此金師子を釋する一章に略して十門を作りて分別す。一には緣起を明し、二には色空を辨じ三には三性に約し、四には無相を顯し、五には無生を説き、六には五教を論じ、七には十玄を勸し、八には六相を括り、九には菩提を成じ、十に

信の文。

【語の縁起無常】

此下、常を全うするの無常を明す。

【經に云はく不生云云】維摩經弟子品の文。

【又語の云云】無常に即するの常を明す。

【經に云はく】維摩經入不二品の文。

【二に斷…斷なり】二に斷の過を明す。

【眞の有】眞如の妙有。

【眞又云云】眞如隨緣せざれば、染淨の諸法あらずと。

【四】此下、第三劫の三箇の住心の前後續生に約して、極無の名義を對釋する文を引證す。初に八九相望して極無を釋するに初に八の觀附。

【一切染淨の諸法】所觀の境、即ち三千の諸法。

【難處】極微の異

は涅槃に入る。一に縁起を明さば、金に自性無きを以て、工巧匠の縁に隨ひて遂に師子起すること有り、起は但是れ縁なるが故に縁起と名く。二に色空を辨ぜば、師子の相は虚にして唯是れ眞金なるを以て師了は有ならず、金體は無ならず、故に色空なり。又空に自體無し、色に約して以て明さば、幻有を礙へず故に色空と云ふ。三に三性に約せば、師子の情有を名けて遍計と爲し、金性の不變を號して圓成と云ふ、金師子の似有を稱して依他と云ふ。四に無相を顯すとすは、金を以て師子を收むるに、金の外に更に師子の相として得べきこと無し、故に無相と云ふ。五に無性を説くとすは、正しく師子の生を見る時に、祇是れ金のみ生ず、金の外に更に一物無し、師子には生滅有りと雖も、金の體は本より増減無し、金に増減無きを以ての故に無生と曰ふ。六に五教を論ぜば、此金師子は唯是れ因縁の法なり、念念に生滅して實に師子として得べき無きを愚法の聲聞教と名く。第二に即ち此縁生の法は、各自性無し、徹底唯空なるを大乘始教と名く。第三に言はく、復徹底唯空なりと雖も幻法宛然なることを處へず。縁生と假有との二相雙べて存するを大乘終教と名く。第四には即ち此二相互に奪し兩ながら亡じて情謂存せず、俱に力有ること無し、互に立し雙べて泯じて名言路絶し、心を栖すに寄無きを大乘頓教と名く。第五に即ち此れ情盡き體露るるの法なり、混じて一塊と成して大用を繁興し、起ること必ず全く眞なり、萬像紛然として參へて雜せず、一切即一にして皆同無性なり、一即一切にして因果歴然なり、力用相收不舒自在なるを一乘圓教と名く。

名。

【本不...際】 法性眞如の理體に歸す【心實際】 一心の本源眞如本覺如來藏自性清淨心。人に約せば究竟理智法身。

【心の實...得】 第八の住心以て究竟となす佛果も、後の住心に望むれば無自性なりと。

【道清淨...是なり】 所驚覺の言を釋す。

【一乘一如等】 第八の住心。【五】 以下は華嚴一乘の教義を示すに、章疏を引きて證とす。

【金師子章】 沙門法藏、則天后の爲に、殿内なる金師子を指して述べし華嚴の教義を述べし。

【五教云云】 第六に師子に約して自宗所立の五教、小乘教、始教、終教、頓教、圓教を論ず

七に十玄を勸すとは、一には云はく、此金と師子と同時に成立し、圓滿具足するを同時

具足相應門と名く。第二には金と師子と相容成立して一多礙ふること無し、中に於て理事

の諸相各不同なり、或は一或多、各自位に住するを一多相容不同門と名く。第三に

は若し師子を見れば即ち唯師子にして金無し、即ち金は隠れ師子は顯る、若し金を見れば

即ち唯金にして師子無し、即ち金は顯れ師子は隠る。若し兩處に看れば即ち俱に顯れ俱に

隠る。隠るるをば秘密と名け顯るるをば即ち顯著と名く、故に秘密隱顯俱成門と名く。第

四には即ち此師子の眼耳支節の一一毛處各々に全く師子を收む。一一の毛處の師子同時に

頓に一莖毛の中に入る、一一の莖毛の中に各々に皆無邊の師子有り。又復一一の毛に此無

邊の師子を載せて、還りて一の莖毛の中に入る。是の如く重重無盡無盡にして帝網天珠の

如くなるを、因陀羅網境界門と名く。第五には此師子の眼に師子を收め盡せば、即ち一切

純に是れ眼なり、若し耳に師子を收め盡せば、即ち一切純に是れ耳なり。若し諸相同時に

相收めて悉く皆具足すれば、即ち一一皆純、皆雜なり。又一一に皆是れ圓滿藏なり、故

に諸藏純雜具德門と言ふ。第六には師子の諸根一一の毛頭に皆各全く師子を收め盡して、

一一に皆徹遍せり、師子の耳は即ち眼、眼は即ち鼻にして自在に成立すること、障礙無き

が故に、故に諸法相即自在門と名く。第七には此師子の、或は隠れ或は顯れ、若し一若は

多と、定純定雜と有力無力と、此に即し彼に即するとの、主伴輝を交へて理事齊く現じ、

皆盡く相容し、礙へずして安立し微細に成辨す、故に微細相容安立門と名く。第八には

【十支】具には十玄縁起無礙法門を以て無盡の義を顯す。五教章中卷に詳解す。参照すべし。

【薩婆若海】薩婆若此は一切智といふ。即ち根本智なり。智徳深廣なるを海に喩ふ。二相俱に盡きて云云。師子と金の二相を觀じて金の

此師子は是れ有爲の法にして、念念に生滅して刹那も間無し、分ちて三際と爲す、爲く過去現在未來なり。此三際に各過去現在未來有り、三三の位を總て以て九世を立つ、即ち更に束ねて一數の法門と爲す。復九世十世各に融隔の不同有り、雖も相由りて成立し、通隔無礙にして相同して一念と爲す、故に十世隔法異成門と名く。第九には即ち此師子と金と或は隠れ或は顯れ、或は一或は多、自性有ること無く心に由りて廻轉す、事と説き理と説く、成有り立有るが故に唯心廻轉善成門と名く。第十には此師子を説くは用て無明を表し、此全體に託しては具に眞性を彰す、二事合説して阿頼耶識に況して正解を生ぜしむるを、名けて託事顯法生解門と爲す。

第八に六相を括るとは、言はく一の師子は是れ總相なり、五根の差別は是れ別相なり、共して一縁起を成ずるは是れ同相なり、眼耳各相是ならざるは是れ異相なり、諸根合會して師子有ることを得るは是れ成相なり、諸根各自位に住するは是れ壞相なり。第九に菩提を成せば、此には道なり覺なりと云ふなり。眼に師子を看るの時、一切の有爲の法は、更に壞することを待つべからず、本來寂滅にして諸の取捨を離れたりと見る、即ち此路に於て薩婆若海に流入するが故に名けて道と爲す。無始より已來所作顛倒して一として實體有ること無しと解するが故に名けて覺と爲す。畢竟じて一切種智を具するを成菩提と名く。第十に涅槃に入るとは、此師子と金とを見るに、二相俱に盡きて煩惱生ぜず、好醜現前すれども心安きこと海の如し。妄想都て盡きて諸の逼迫無し、纏を出でて障を離れ永

外に師子を見ず、師子の外に金を見ざるをいふ。

【煩惱：現前】煩惱の前に好醜あり今二相俱絶せば心境俱寂なるを不生といふ。

【二】自下は大門口に貞元新華嚴の大疏を引き、圓行圓位の大綱を示す。

【澄觀】唐の代州五臺山清涼寺の僧華嚴宗第一祖（西紀七三七—八三八）

【七】自下大門第三に、華嚴五教止觀を引證す。當論は第五門のみ抄録す。

く苦源を絶するを入涅槃と爲すなり。
又澄觀法師の新華嚴の疏に云はく、「頓に諸行を成ずとは、一行即ち是れ一切行なるが故に。此に復二義有り。一には心觀に約す。二には性融に約す。今謂はく一念相應して能く頓に具し成ず。謂はく此心を知るは即ち是れ佛智なり、佛智は即ち是れ無念なり。無念の心體は内外に著すること無く、諸過自ら防ぎ諦理を忍可し身心の相を離れ寂然として動ぜず、了かに性空を見、善く有無に達して進んで妙覺に詣る、是れ眞の修習なり、決斷分明にして十度具せり、十度既に爾なり、餘行も例して然なり、故に一行を修して一切行を成ず。二に性融に約すとは、一行に隨ひて法性に稱ふを以ての故なり、法性融攝するが故に、此一行は性に如うて普く收めて、行として具せざることを無し、廣くは下に説くが如し」と。

又云はく、「七に地位を知らしむとは、同じく一道を修して佛果に至るに階差有るが故に。虚室の千燈の同じく空に遍すと雖も、前後の明に微著有ることを妨げざるが如し。若し此位無くんば徒に妙行を修せん。此位を知らずんば、或は明りに上流に濫し或は少を得て足んぬと爲ん。此に亦二種有り。一には行布の位なり、初後の淺深五位の差別なり。二には圓融の位なり。一に一切を攝して一一の位の滿に即ち成佛を説く。一位の中に具に一切の諸位の功德を攝す、信に果海を該ね初發心の時に便ち止覺を成ず」と。上の二の相攝は行に例して説け。

又杜順和尚の華嚴三昧に云はく、「但し法界緣起は、惑へる者は階り難し、若し先に垢心

攝は行に例して説け。
又杜順和尚の華嚴三昧に云はく、「但し法界緣起は、惑へる者は階り難し、若し先に垢心

【杜順】華嚴宗の初祖（西紀五五八—六四〇）
【維摩經】弟子品中の迦旃延章の文中の圓明法界緣起

【問うて云はく】自下問答釋成するに二に分つ、初に漸機の見入なり、次に【經】楞伽經文。

【八】自下は漸機の見入を明す。
【一】には徴して云云。小乗所説の三科の事法に同じ彼の惡見迷事を徴責して、一乘の理法界の言亡絶解の正見を顯す。
【六種】名、事、體相、用、因。

を濯はずんば、以て其正覺に登ること無し。故に『大智論』に云はく、「人の鼻下に糞有れば沈麝等の香を臭ぐとも亦臭しと爲るが如し」と。故に『維摩經』に云はく、「生滅の心行を以て實相の法を説くこと無かれ」と。故に須らく先づ計執を打ちて然して後に方に圓明に入るべし。若し直に色等の諸法の緣に從ふは、即ち是れ法界の緣起なりと見ることに有るは、必ずしも更に前方便を須ひざるなり。もし其れ直に此に入ることを得ざる者をば、宜く始より終に至るまで、一一に徴問して惑を斷じ迷を盡し、法を除き言を絶し、性を見、解を生じて、方て爲れ意を得せしむることを致す可きのみ。問うて云はく、「云何が色等の諸法を見て、即ち大緣起法界に入ることを得るや。」答へて曰はく、「色等の諸事は本より眞實にして、詮を亡じ即ち妄心及ばざるを以てなり。故に經に云はく、「言説は施行の別なり、眞實は文字を離れたり」と。是故に眼耳等の事を見て、即ち法界緣起の中に入るなり。何となれば皆是れ實體の性無ければなり、即ち無體に由りて幻相方に成ず、緣より生ずるは自性の有に非ざるを以ての故に、即ち無性に由りて幻有を成ずることを得るなり。是故に性相渾融し全收して一際なり。所以に法を見て即ち大緣起法界の中に入るなり。」
問ふ、「既に空有無二にして即ち融通に入ると言はば、如何が復眼耳等を見て即ち法界に入る」と云ふや。答ふ、「若し能く空有を見ることは是の如くなる者は、即ち妄見の心盡きて方に理に順じて法界に入ることを得。何を以ての故に。緣起法界は見を離れ情を亡じて萬像を繁興することを以ての故なり。」問ふ、「既に是の如くなることを知んぬ、何なる方便を以

【二には法云云】
 第二方便なり。前
 の大乘始教の無生
 門に寄同し、一乘
 法界縁起を顯し誘
 引す。
 【顛倒の心】第六
 識。
 【色香味：以て】六
 識所縁の六塵の境
 【二には法を示し
 て】法とは法界縁
 起の色香味等の事
 法の意。
 【三には法は云云】
 第三方便なり。即
 ち前の終頓二教に
 寄同し、一乘法界
 縁起の法門を示す

てか入ることを得せしむるや。』答ふ、『方便同じからずして略して三種有り。一には徴し
 て見をして盡さしむ。如く事を指さば、問うて何者か是れ眼なりやと云ふ、已前の小乗の
 中の六種に之を簡ぶが如くにせよ。若し一切諸法但名門の中に入れて收むれば、一法とし
 て名に非ざるもの有ること無し。復須く其眼等は是れ名のみなりと知る所以を責む可し。
 是の如く展轉して其所以を責めて、其をして言を亡じ解を絶せしむ。二には法を示して思
 はしむ。此に復二門有り。一には顛倒の心を剝いて決し盡す。如く事を指せば、色香味觸
 等を以て、其妄計を奪ひて倒惑なることを知らしむ、有らゆる執取は法に順ぜず、即ち是
 れ意識の無始の妄見熏習の所成にして、無始より急曳、生を三界に續けて輪環すること絶
 えす。若し能く此執は即ち是れ縁起なりと覺知すれば當所無生なり。二には法を示して疑
 を斷せしむ。若し先に妄心を識らずんば法を示すとも反りて倒惑を成ぜん。若し法を示して
 見せしめずんば、迷心還りて空に著せん。所以に先づ妄心を剝きて後に乃ち法を示し見せ
 しむべし。三には法は言を離れ解を絶つことを顯す、此門の中に就きて亦二と爲す。一に
 は遮情、二には表徳。遮情と言ふは、問ふ、『縁起は是れ有なるや。』答ふ、『不なり即ち空の
 故に。縁起の法は無性にして即ち空なればなり。』問ふ、『是れ無なりや。』答ふ、『不なり
 即ち有の故に。縁起の法は即ち無始より有を得るに由るを以ての故なり。』問ふ、『亦有亦無な
 りや。』答ふ、『不なり、空有圓融し一にして二無きが故に。縁起の法は空有一際にして二
 相無きが故なり、金と莊嚴の具との如く之を思へ。』問ふ、『非有非無なりや。』答ふ、『不

【九】上は前四教の權方便に寄せて一乗の見解を明して下は頓教に明して初に所縁の境に約して示す。

なり、兩存を礙へざるが故に。緣起の法は空有互に奪ひて同時に成ずるを以てなり。問ふ、『定んで是れ無なりや。』答ふ、『不なり、空有互融して兩ながら存せざるが故に。緣起の法は空は有を奪ひ盡して唯空にして有に非ず、有は空を奪ひ盡して唯有にして空に非ず、相奪ふこと同時にして兩ながら相變べて混ず。』二に表徳とは、問ふ、『緣起は是れ有なりや。』答ふ、『是なり幻有は無に非ざるが故に。』問ふ、『是れ無なりや。』答ふ、『是なり無性は即空の故に。』問ふ、『亦有亦無なりや。』答ふ、『是なり兩存を礙へざるが故に。』問ふ、『非有非無なりや。』答ふ、『是なり互に奪ひて變べて混ずる故に。』又緣起を以ての故に是れ有なり、緣起を以ての故に是れ無なり、緣起を以ての故に是れ亦有亦無なり、緣起を以ての故に是れ非有非無なり。乃至一と不一と亦一と亦不一と非一と非不一となり、多と不多と亦多と亦不多と非多と非不多となり。是の如く是多と是一と亦是多と亦是一と非非是多と非非是一と非非多と非非一となり。即と不即との四句は之に準ぜよ。是の如く遮表圓融無礙なることは、皆緣起自在に由るが故なり。若し能く是の如くなる者は、方に緣起の法を見ることを得。何を以ての故に。圓融一際にして法に稱つて見る故に。若し同時ならずして前後に見る者は、是れ顛倒の見にして正見に非ざるなり。何を以ての故に。前後の別見は法に稱はざるが故に。

問ふ、『是の如く見ること已んぬ、云何なる方便をもて法界に入らんや。』答ふ、『入方便と言ふは、即ち緣起の法の上に於て、消息して之を取れ。何となれば、即ち此緣起の法は

【答ふ入：取れ】此は總じて答ふ自下の大章は初に緣起の法は、空有無礙なれば或は空、或は有と取ることを妨げざるを明す【既に全く性云云】次に凡聖無礙を明す。

【其大小】大乘の菩薩、小乘の聲聞緣覺は、本より性起を具すを示す【一切も亦云云】六道の凡夫を云ふ

【經】維摩經第二嚴經光明覺品の文【又云はく】舊華嚴經第三十の十忍品。

【即入】相即相入の意。

【〇】次に能緣の智に就きて明す【即ち法界の事理の緣起法界の事理の二法、如理如量の普眼智の所知なりといふ。

【即入】相即相入の意。

即空にして無性なり、無性によるが故に幻有方に成ず。然れども此法は、即ち全く無性の性を以て其法と爲るなり、是故に此法は即ち無性にして而も相存することを礙へず。若し無性に非ずんば性起成せざらん、自性不生にして皆緣に従ふを以ての故なり。既に全く性を收め盡す、性は即ち無爲なれば分別す可からず。其大小に隨ひて性は固かならずと云ふこと無し。一切も亦即ち性を全うして身を爲す。是故に彼を全うして此と爲し、性に即して幻相を礙へず。所以に一に衆多を具し、既に彼此全體相收むるに彼此の差別を礙へざるなり。是故に彼が中に此有り、此が中に彼有り。故に經に云はく、「法は法性に同じて諸法に入るが故に」と。解して云はく、法とは即ち緣起幻有の法を擧ぐ。同性とは緣起即空にして此相を礙へざるが故に、全く彼を收めて此と爲す。彼即空にして彼相を礙へざるを以ての故に。既に此彼全收するに相皆壞せず、是故に此が中に彼有り、彼が中に此有り。但彼此相收するのみに非ず、一切も亦復是の如し。經に曰はく、「一が中に無量を解し無量の中に一を解す、轉轉して生じ實に非ざるをもて、智者は畏るる所無し」と。又云はく、「法の中に於て衆多の法を解し、衆多の中に一法を解了す」と。是の如く相收めて彼此即入し、同時に顯現して前無く後無し、一に隨ひて圓融して即ち彼此を全うす。

【〇】問ふ、「法既に是の如し、智は復如何。」答ふ、「智は法に順ひて一際緣成なり、冥に契ひて差無し、頓に現するとも先後無きに非ず。故に經に云はく、「普眼の境界は清淨の身なり、我今演說す、人諦かに聽け」と。解して云はく、普眼とは即ち是れ法と智と相應して

【問ふ若し此珠云云】二に一球成網の義を明す。

【問ふ若し唯云云】三に一球、多中に入りて多珠を貫通するを明す。

【問ふ西南の邊云云】四に一多の影融するを明す。
【答ふ云云】此下所現の影に約して答ふ。

【縱令云云】多文の脱落あるべし。
【點ずといはば】下
【一前後に點ず有べし】云何ぞ一時
【一切球の上に皆點ずること有らん】
【は即ち是れ一切球といふべきなり】

るなり。何を以ての故に。此珠の内を離れて別の珠無きが故に。』問ふ、『若し此珠の内を離れて一切珠無くんば、此網は即ち但一球の所成ならん、如何ぞ多珠を結んで成すと云はんや。』答ふ、『只唯獨一の珠によりて、方始て多を結んで網と爲す。何を以ての故に。此一珠も獨り網を成するに由るが故に。若し此珠を去れば全く網無きが故に。』問ふ、『若し唯獨一の珠ならば、云何して結んで網を成すと云はんや。』答ふ、『多珠を結んで網を成することは即ち唯獨一の珠なり。何を以ての故に。一に是れ總相なり、多を具して成するが故に。若し一無くんば一切も無きが故に、是故に此網は一球を以て成するなり。一切一に入ることも準じて思ひて知んぬ可し。』問ふ、『西南の邊の一球に、總じて十方一切珠を收め盡して餘無しと雖も方に各々に珠有り、云何ぞ網は唯一珠をもて成すと云ふや。』答ふ、『十方の一切珠は、總じて是れ西南方の一類の珠なり。何を以ての故に。西南邊の一球は即ち十方一切の珠なるが故に。若し西南の邊の一球は即ち是れ十方一切の珠なりと信ぜずんば、但墨點を以て西南邊の一球に點じ著くる時に、即ち十方珠の中に皆墨點有り、既に十方の一切珠の上に皆墨點有り、故に知んぬ十方の一切珠は即ち是れ一球なることを。十方の一切珠は是れ西南の邊の一球に非ずと言はば、豈是人一時に遍く十方の一切珠を點すべけんや、縱令、遍く十方の一切珠を點すといはば即ち是れ一球なり、此一を始と爲ることは既に爾なり、餘を初と爲ることも亦然なり、重重無際にして點點皆同じ、杳杳として原ね難し、一を以て成すること、咸く畢んぬ。斯の如きの妙喻を法に類して之を思へ。

【一】以上は喻の玄義を明せしを以て、次に喩を以て法に合するなり。

【本合部：伏す】

此偈は舊華嚴經第四卷に在り、能化の佛の身説を明す但し如來の法身乃至奉しとは第三卷の頌。

【二】上來淺略の釋竟りて自下秘密の義を以て當住心を觀ずる一段なり。

【三】上所引の經顯の句義。

法は然の如くに非ずとも喩は非喩に同じ、一分相似するが故に以て言を爲す。何となれば此珠には但影のみ相渉入することを得て其實は各の珠なり、法は然の如くには非ず、全體交徹す。故に經に云はく、「非喩を以て喩と爲す一等といへり。諸有る行者喩に準じて之を思へ。」

盧舍那佛の過去の行は

無量無數にして邊際無し

如來の法身は不思議なり

色相を示現することは衆生の爲なり

一切佛刹微塵の中に

弘誓の佛海に音聲を震ひて

佛刹海をして皆清淨ならしむ

彼一切處に自在に遍す

無色無相にして倫匹無し

十方に化を受くるに現せずと云ふこと塵し

盧舍那自在力を現す

一切衆生の類を調伏す

次に秘密趣とは、自上所説の極無自性住心は、是れ普賢菩薩所證の三摩地門なり、亦是れ大毘盧舍那如來の菩提心の一門なり。故に普賢畏三藏の説かく、「東南方の普賢菩薩とは何ぞや、普賢とは是れ菩提心なり、若し此妙因無くんば終に無上の大果に至ること能はし」と。故に經に云はく、「時に普賢菩薩、佛境界莊嚴三昧に往して自心の眞言を説きたまふ」

顯の句義に云はく、「初の句は普なり、次は去なり、往なり、微羅闍とは離塵垢なり、謂

はく一切の障を除く。達摩爾闍多とは法生なり、謂はく法界の體性より生ず。摩訶摩訶と

【秘義に云云】二
に秘の字義を明す
初に種子の體。

【此の字云云】二
に十二轉に約す。
具には第十卷に在

は、上の凡字は是れ第五の字なり、一切處に遍す、即ち是れ大空なり、空中の大なれば名けて大空と爲す、巖に重ねて之を言ふ、更に等比と爲ることを得べき者無きが故に名けて大と爲す、重空の中に更に無比なり」と。意の言はく、等とは即ち是れ諸法畢竟平等なり、進とは是れ逝の義なり、謂はく佛は普逝にして正覺を成す、然るに此平等の法界は、無行無到なり、云何が來去有らんや。次に即ち釋して云はく、「能く垢を離れ一切障を除くを以て、即ち是れ勝進の義なり、無行にして而も進むを最も善逝と爲く。是の如く進行して、能く法生を成ずるは、即ち是れ平等の法性より佛家に生るるに以るが故なり。次に大の中の大と言ふは、即ち等等無礙にして證の中の大空なり、大空とは佛の境界なり。秘義に云はく、「初のの字を以て體と爲す、喜なり因なり、謂ゆる菩薩の行を修行するなり。若し衆生有りて、此法門に従ひて受持し或は觀照せば、即ち普賢の門に同じして、久しからずして能く佛境 界莊嚴三昧自在の力を得ん。喜とは隨喜なり、他の善を見て猶し己が如くにす、平等觀に任して嫉妬を離るるが故に。因とは因縁なり、菩提心を因と爲し大悲萬行を縁と爲して三密方便を修行し、娑羅樹王の萬德華果を成就す。此の字に十二轉の聲字有り、即ち是れ十二地なり、中の七字を除きて菩提の因行證入方便なり、中間は則ち大悲の句に攝す、是五字は則ち五佛五智なり、則ち普賢一門の五佛なり、是五佛に各各に十佛刹微塵數の四種曼荼羅を具す、是四種曼荼羅に各各に不可説不可説の屬曼荼羅を具す。のの一字をいふ如く自餘の字等も亦復是の如し。

【二四】此下、展轉述釋す。

【今此説云云】因みに對辨を作すに初に立義。

又喜とは歡喜と喜悅と喜樂との義なり。謂ゆる大安樂適悅の義なり。「金剛頂經」に大安樂金剛薩埵と名くるが故に。經に云はく、「時に薄伽梵、一切如來大乘現證三昧耶一切曼荼羅の持金剛勝薩埵、三界の中に於て調伏して餘無し、一切義成就金剛手菩薩摩訶薩、重ねて此義を顯明せんと欲するが爲の故に、灑悟微笑して左の手に金剛慢印を作し、右の手に本初の大金剛を抽擲して勇進の勢を作し、大樂金剛不空三昧耶の心眞言を説きて衷と曰ふ」と。釋經に云はく、「此字は因の義なり、因の義とは謂はく菩提心を因と爲す、即ち一切如來の菩提心なり、亦是れ一切如來の不共眞如の妙體と恆沙の功德とは皆此字より生ず、此一字に四字の義を具す、且く𑖀字もって本體と爲す、𑖀字は阿字より生ず、𑖀字は一切法本不生に由るが故に、一切法因不可得なり、其字の中に汗の聲有り、汗の聲とは一切法損減不可得なり、其字の頭の上に圓點半月有り、即ち𑖀字と爲す。𑖀字とは一切法我不可得の義なり。我に二種有り、謂ゆる人我と法我となり、此二種は皆是れ妄情の所執なり、名けて増益の邊と爲す。若し損減増益を離るれば即ち中道に契ふ」云云

今此説に依らば、一切如來の不共眞如の妙體と恆沙の功德と皆此𑖀字より出生す。諸の顯教は皆眞如を以て諸法の體性と爲す、佛華法華等も亦此眞如を以て至極の理と爲す。今此眞言法教は𑖀字を以て一切眞如等の所依と爲す。眞如は則ち所生の法なり、眞言は則ち能生の法なり。眞如の法體すら猶し此より生ず、何に況んや能證の人をや。能證の佛も既に亦此の如し、何に況んや所説の法教をや。能證所證平等無二なりと云ふと雖も、然

【二門】 生滅門と眞如門。

【誰か眞如云云】 二に決擇するに、初に唯密の談を疑ふの問。

【佛菩薩共に云云】 此下は顯密の説を證して答ふ。文を引くに五あり。

【經】 一に圓覺經の文。二に起信論の文。

【又云はく云云】 三に密論の要を摘録するに、釋摩訶衍論第二卷を引く

も猶二門の眞如に於て究竟の説を作す。亦三種世間互相に圓融して、無盡無盡の義を説くと雖も、迹を此域に逗め影を此床に休む、無盡の教義は一の聲より出づ、三種の圓融は二門の境に優遊す。誰か眞如に更に所依有ることを信ぜん。佛菩薩共に此説有り。經に云はく、「善男子無上法王に大陀羅尼門有り、名けて圓覺と爲す、一切清淨の眞如を流出す」と。一切清淨と言ふは、眞如に無量淺深差別有り、故に一切と云ふ、一切の言其意甚深なり。「論」に云はく、「摩訶衍とは總なり、説に二種有り、云何が二と爲す。一には法、二には義なり。言ふ所の法とは謂はく衆生の心なり、是心は則ち一切世間の法、出世間の法を攝す、此心に依りて摩訶衍の義を顯示す。何を以ての故に。是心眞如の相は即ち摩訶衍の體を示すが故に。是心生滅因縁の相は能く摩訶衍の自體相用を示すが故に。言ふ所の義と即ち三種有り、云何が三と爲す。一には體大、謂はく一切法眞如平等にして増減せざるが故に。二には相大、謂はく如來藏に無量性功德を具するが故に。三には用大、謂はく能く一切世間出世間の善因果を生ずるが故に」と。謂はく世間とは心生滅門なり、出世間とは心眞如門なり、三種世間を過ぐるが故に出世間と名く。又云はく、「心生滅門の正智、所證の性、眞如の理は、何の門の所攝ぞ。生滅門の所攝なり、眞如門には非ず、分界別の故に。二門の眞如に復何の別か有る。眞如門の理は理自ら理なるが故に。生滅門の理は智自ら理なるが故に。此生滅門に就きて更に四重の眞如本覺有り、具には「論」に説くが如し、佛華所説の三種世間圓融の佛は、則ち四種の鏡の中の第二に當るなり。

【四種鏡云云】 同
論第三卷の文。

四種鏡と言ふは一には如實空鏡、二には因熏習鏡、三には法出離境、四には緣熏習鏡なり。第一の鏡とは一切の心と境界の相とを遠離す、法として現す可きもの無きが故に。性淨本覺の體性の中には一切の攀緣慮知の諸の戲論識を遠離して、一味平等の義を成ずるが故に名けて如と爲す。一切の虛妄境界の種種の相分を遠離して、決定眞實の相を成就するが故に名けて實と爲す。遠離の義を顯示せんと欲ふが爲の故に名けて空と爲す、鏡は謂はく喻の名なり。此中の鏡は即ち摩訶跋婆珠鏡なり。此鏡を取りて一處に安置して、珠鏡の前の中に種種の石、種種の物を置むる時に、彼珠鏡の中に餘像は現せずして、唯し同類の珠のみ分明顯了なる故に。如實空鏡も亦復是の如し。此鏡の中に於て、唯し同じく自類清淨功德のみ安立し集成して、種種の異類の諸の過患の法は皆遠離するが故に。此は眞如門の法を表す。二に因熏習鏡とは性淨本覺は三世間の中に皆悉く離れず、彼三を熏習して一覺と爲して一大法身の果を莊嚴す、是故に名けて因熏習鏡と爲す。三種世間とは、一には衆生世間、二には器世間、三には智正覺世間なり。衆生世間とは衆生は謂はく異生性界なり、器世間とは謂はく所依止の土なり、智正覺世間とは、謂はく佛菩薩等是なり。此中の鏡とは謂はく輪多梨華鏡なり。輪多梨華を取りて一處に安置して周く諸物を集むるに、此華熏に由りて一切の諸物皆悉く明淨なり。又明淨の物の華の中に現前して皆悉く餘無し、一切諸物の中に彼華現前することも、亦復餘無きが如し。因熏習鏡も亦復是の如し。一切の法を熏じて清淨覺と爲して悉く平等ならしむ」と。此は三百門

【又經に云はく】
四に雜部の經を引
く。初に守護國界
經の文。

の法を表す。次の二種の鏡は、染淨本覺と及び應化身とを表す、住心に於て無用なり、故に出さず。

又經に云はく、「佛、祕密主に告げて言はく、一の陀羅尼有り、名けて守護國界主と曰ふ。是真言とは毘盧舍那佛色究竟天にして、天帝釋及び諸の天衆の爲に已に廣く宣説したまふ。我今此菩提樹下金剛道場に於て、諸の國王及與び汝等が爲に略して説かん。汝當に諦に聽くべし。善男子、陀羅尼の母は謂ゆる字なり、所以は何んとなれば三字和合して一字を爲すが故に。謂はく初の字は、是れ菩提心の義なり、是れ諸の法門の義なり。亦無二の義なり、亦諸法果の義なり、亦是れ性の義なり、自在の義なり。猶し國王の黑白善惡、心に隨ひて自在なるが如し。又法身の義なり。第二の字は即ち報身の義なり、第三の字は是れ化身の義なり。以て三字を合し共じて字と爲す、義を攝すること無邊なるが故に一切陀羅尼の首と爲す、即ち是れ毘盧舍那佛の眞身なり。我無量無數劫の中に於て、能く十波羅蜜を習ひて最後身に至りて六年苦行せしかども、阿耨多羅三藐三菩提を得て毘盧舍那と成らざりき。道場に坐せし時、諸佛猶し油麻の如く虚空に遍滿せり、諸佛同聲にして我に告げて言はく、善男子、云何が成等正覺を求むる。我佛に言して白さく、我は是れ凡夫なり、未だ求むる處を知らず、唯願くは慈悲を以て我爲に解説し給へと。是時に佛同じく我に告げて言はく、善男子、諦に聽け、當に汝が爲に説くべし、汝今宜く當に鼻端に於て淨月輪を想ひて、月輪の中に於て唵字の觀を作すべしと、是觀を作し已り

て、後夜分に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。善男子、十方世界の恆河沙の如くなる三世の諸佛、月輪に於て唵字の觀を作さずして成佛することを得と云はば此處有ること無し」と。今此等の文に依るに悉字は是れ法身なり、法身は則ち眞如なり、眞如法身、悉く皆唵字の一聲より出づ、何に況んや諸餘の法門をや。當に知るべし、眞言は一切の法の母爲り一切の法の歸趣なり。

【又論に云はく云六】五に重ねて論の要を説す。初に第十卷の文。

又論に云はく、「諸佛甚深廣大義とは、即ち是れ通じて前の所説の門を總攝す。謂ゆる通じて三十三種の本數の法を攝するが故に。此義云何。諸佛と言ふは、即ち是れ不二摩訶衍の法なり。所以は何となれば、此不二の法を彼佛に形づくるに、其德勝れたるが故に。彼佛とは、眞如生滅の二門の佛と及び三大義の佛とを指す。大本華嚴契經の中に是の如きの説を作す。「其圓圓海徳の諸佛は勝れたり、其一切の佛は圓圓海を成就すること能はず、劣なるが故に」と。「一切佛と言ふは即ち本末二門の佛なり。若し爾らば何が故に分流華嚴契經の中に是の如きの説を作す、盧舍那佛は三種世間を其身心と爲し、三種世間に法を攝するに餘無し、彼佛の身心も亦復攝せざる所有ること無きか。答ふ、「盧舍那佛に三世間を攝すと雖も、攝と不攝との故に過無し。」攝不攝と言ふは即ち上の所説の性海と因海との攝不攝是なり。」

【又眞如生滅云云】次に第二卷の文。

又眞如生滅の二門も是の如し、故に文に云はく、「是二種の門に皆各の總じて一切の法を攝す」とは、即ち是れ法門該攝圓滿門なり。謂はく眞如門を以て一切の法を攝するに、一

【又云はく何が故云云】三に第一卷の文に

一の法として眞如に非ざることを無し。生滅門を以て一切の法を攝するに、一一の法として生滅に非ざること無きが故に。然れども眞如門には、生滅門の一切の法を攝すること能はず、又生滅門には、眞如門の一切の諸法を攝すること能はず。而も總攝一切法と言ふは、總じて生滅の一切の法を攝するが故に。總じて眞如の一切法を攝するが故に。所以は何となれば是の如きの二門は皆悉く平等にして各各別なるが故にと。

又云はく「何が故に不二摩訶衍の法は因縁無きや。是法は極妙甚深にして獨尊なり、機根を離れたるが故に。何が故にか機を離れたる。機根無きが故に。何んが建立を須ふる。建立に非ざる故に。是摩訶衍の法は諸佛の所得なりや。能く諸佛を得ず。諸佛は得するや。不なるが故に。菩薩二乗一切異生も亦復是の如し、性徳圓滿海是なり。所以は何となれば、機根を離れたるが故に。説教を離るるが故に。初に諸佛と云ふは是れ眞如門の諸佛を指す。次の諸佛は亦眞如門の佛なり。能得とは言はく不二門の諸佛なり、其徳勝れたるが故に能く眞如門の諸佛を攝得す。次に諸佛を攝得す。次に諸佛とは生滅門の佛を指す。意の言はく、生滅門の諸佛は不二門の諸佛を攝得するや。不故とは是れ答の辭なり。生滅門の諸佛は眞如と不二との佛を攝得することを言ふ」と。又云はく「八種の本法は因縁より起る、機に應ずるが故に。説に順ずるが故に。何が故にか機に應ずる。機根有るが故に。是の如きの八種の法の諸佛は得せらるるや。諸佛は得せらる。諸佛を得ずや、不なるが故に。是の如きは修行種因海是なり、所以は何となれば、機根有るが故に。教説有るが

故に」と。初に諸佛と言ふは種因海の本法の八佛を指す、次に諸佛と言ふは末法の八佛是なり。言はく本の八佛は末の八佛を攝することを得。次に諸佛とは不二性徳の佛を指す、言はく本末の八佛は圓圓海の佛を攝することを得ず、是の如きの諸佛は皆悉く平等平等にして虚空法界に遍満すと云ふと雖も、然れども猶本末各各差別なり、末佛は本を以て所依の境と爲す、勝劣差有り、是故に劣を以て勝を攝することを得ざるなり。人既に是の如し法も亦是の如し、華嚴所説の三種世間の佛は是れ則ち種因海の佛なり、故に性徳海の佛を攝することを得ざるなり」と。

經論の明證是の如し、末學の凡夫強ひて胸臆に任せて難思の境界を判攝す可からず、高きに居て低きを攝すれば功德無量なり、劣を執して勝を潛すは定んで深底に入る。信ぜずんばある可からず、愼まざるばある可からず。是の如く諸佛及び所説所證の教理境界は悉く一字に攝し盡す、有智の薩埵極て善く思念せよとのみ。

秘密曼茶羅十住心論

卷第十

【秘密莊嚴】身口意の三密を以て曼荼を莊嚴して美麗ならしむるをいひ略して密嚴ともいふ。

【一】初に名を牒して略釋す。

【自心】衆生自己の貪瞋毒の一切の妄心即ち是れ本有淨菩提心の意。

【自身】分段の肉身。以下は衆生の肉身は遍一切處の如來の妙色身の意。

【調ゆる：比せん】以下金胎兩部曼荼羅に依て別稱の秘密莊嚴を釋す。

【曼茶羅】(Mandala) 略して曼茶といふ。體に就かば壇又は道場と譯し義に就かば輪圍具足又は聚集と譯す。

【四種曼茶羅】大(摩訶)、三昧耶、法(遠塵)、羯磨曼茶羅。

【二】自下、證を引いて廣く釋す。

秘密莊嚴住心第十

(一) 秘密莊嚴住心とは、即ち是れ究竟して自心の源底を覺知し、實の如く自身の數量を證悟す。謂ゆる胎藏海會の曼茶羅と、金剛界會の曼茶羅と、金剛頂十八會の曼茶羅とは是なり。是の如きの曼茶羅に、各各に四種曼茶羅四智印等有り。四種と言ふは、摩訶と、三昧耶と、達磨と、羯磨と是なり。是の如きの四種曼茶羅其數無量なり、刹摩も喩に非ず、海滴も何んぞ比せん。

經に「云何が菩提、謂はく實の如く自心を知る」と云ふは、此れ是一句に無量の義を含めり、豎には十重の淺深を顯し、横には摩數の廣多を示す。又「心續生の相は諸佛の大秘密なり、我今悉く開示す」と云ふは即ち是れ豎の説なり、謂はく初羶羊の闍心より、漸次に闇を背き明に向ふ求上の次第なり。是の如きの次第に略して十種有り、上に已に説くが如し。又云はく「復次に三藐三菩提の句を志求するものは、心の無量を知るを以ての故に身の無量を知る、身の無量を知る故に智の無量を知る、智の無量を知るが故に即ち衆生の無量を知る。衆生の無量を知るが故に即ち虚空の無量を知る」と。此は即ち横の義なり、

初の三反は住心の通名を成ぜん爲に通じて十住心を説く文を説く。【大日經第一住心品文、】

【大日經第二卷、】

【大日經王、】第六卷百字果樹應品、

【二、】上來は能住の心身理智法身に就いて正しく住心の通名を釋し、自下は所住の曼茶羅に就いて正しく秘密莊嚴の別名を釋す

【經】初に六百字果樹應品文、

【句】梵に談鉢とす。所住處と譯す。

【四】以下、別して法曼茶羅の種子眞言文字に、自ら難誦人體及下三密の用あるを明す。

【經】大日經第二卷入曼茶羅具眞言品、

【梵字】十六摩多中の初の一字を舉

衆生の自心其數無量なり、衆生狂醉して覺せず知せざるなり、大聖彼機根に隨ひて、其數を開示したまふ。唯蘊、拔業の二乘は但六識を知り、他縁、覺心の兩教は但八心を示し、一遣、極無は但し九識を知る。釋大衍には十識を説き、大日經王には無量の心識、無量の身等を説く。

是の如きの身心の究竟を知るは、即ち是れ秘密莊嚴の住處を證す。故に經に云はく、「若し大覺世尊大智灌頂地に入りぬれば、自ら見に三三昧耶の句に住す」と。三三昧耶と謂ふは、一には佛部三昧耶、二には蓮華部三昧耶、三には金剛部三昧耶なり。是の如きの三昧耶の諸尊其數無量なり、一一の諸尊に各四種曼茶羅を具す。佛部は即ち身密、法部は即ち語密、金剛部は即ち心密なり。

眞言と謂ふは且く語密に就いて名を得、若し具には梵語に據りて曼茶羅と名く、龍猛菩薩は祕密語と名く。且く語密の眞言法教に就いて、法曼茶羅心を顯示せば、經に云はく、「云何なるか眞言法教、謂はく咒字門は一切諸法不生の故に。誑字門は一切諸法作業不可得の故に。呪字門は一切諸法等虚空不可得の故に。咒字門は一切諸法一切行不可得の故に。𑖀字門は一切諸法一合相不可得の故に。𑖁字門は一切諸法離一切遷變の故に。𑖂字門は一切諸法影像不可得の故に。𑖃字門は一切諸法生不可得の故に。𑖄字門は一切諸法戰敵不可得の故に。𑖅字門は慢不可得の故に。𑖆字門は長養不可得の故に。𑖇字門は怨對不可得の故に。𑖈字門は執持不可得の故に。𑖉字門は如如解脫不可得の故に。𑖊字門は住處不可得

の故に。𑖋字門は執持不可得の故に。𑖌字門は如如解脫不可得の故に。𑖍字門は住處不可得

げて他の字母を攝在す。

【是の如き諸の云云】以下轉聲に約して人法不二四曼不離の義を釋す。

【初の迦字に約して別釋するに、初に十二地に配す。】

【二一の尊】大曼荼羅尊形の人體階位の十二地。

【中間の八字】伊顛願萬萬奧與。伊初後の四字。阿阿と暗惡の四字。

【因行證入】第一の發心點、第二の修行點、第十一の菩提點、第十二の涅槃點。

【一の字】量なり。此は五轉字を轉釋して、更に五佛五智に配す。

【五佛五智】能具の人と所具の法。即ち寶幢佛、花鬘敷佛、阿彌陀佛、鼓音佛、毘盧遮那佛と五智たる大圓鏡智、平等性智、

の故に。ア字門は施不可得の故に。イ字門は法界不可得の故に。ウ字門は第一義諦不可得の故に。エ字門は不堅如聚沫の故に。オ字門は縛不可得の故に。カ字門は一切有不可得の故に。キ字門は乘不可得の故に。ク字門は塵垢不可得の故に。ケ字門は一切相不可得の故に。コ字門は言語道斷の故に。カ字門は本性寂の故に。ク字門は性鈍不可得の故に。ケ字門は一切諦不可得の故に。カ字門は一切諸法因不可得の故に。コ字門は一切處に遍して、一切の三昧に於て自在に速に能く一切の事を成辨し、所爲の義利皆悉く成就す。

是の如きの諸の字門は各各に十二轉聲の字を具す。且く初の五字に就いて十二轉なり、

五字(阿)五字(香)五字(不)五字(亦)五字(亦)なり、此十二字は、即ち一一の尊の十二地なり。中間の八字を除て初後の四字は即ち求上門の因行證入なり、更に悉く字有り、即ち是れ方便具足の義なり。

一一の字門の五字は即ち各各の門の五佛五智なり、是の如きの五佛其數無量なり、五佛は即ち心王、餘尊は即ち心數なり、心王心數其數無量なり。故に文に云はく「等く薄伽梵大智灌頂に入りぬれば、即ち陀羅尼形を以て佛事を示現す」と。又云はく「秘密主、

我語輪の境界廣大にして、遍く無量の世界に至る清淨門を觀ぜよ、其本性に加うて類に隨ひて法界を表示し、一切の衆生をして皆歡喜を得せしむ」と。又云はく「心の無量を

知るが故に四種の無量を得。得已んぬれば最正覺を成じ、十智力を具し四魔を降伏し、無所畏を以て而も獅子吼したまふ」と。又「五種の阿字は即ち是れ正等覺心なり、即ち此字

より聲を出して説法す、即ち是れ説者なり即ち是れ聽者なり」と。即ち是れ法曼荼羅身の

妙觀察智、成所作智、法界體性智をいひ、次の如く東西南北中に配す。

【故に文云云】以下、法曼荼羅に三密あることを證成す。初に大日經百字果相應品の文【等く】本經に無し、疏に若の字に作る。

【大智灌頂】如來の第十一地。此地に住して大智灌頂に入り、能く如來の事をなす。

【陀羅：現す】羯磨身を翻轉して法門身と成り、三密の業用を現す。

【又五種の阿字】自下は悉地出現品の文、五種の阿字なりとは五轉の阿字なり。

【即ち是れ：明す】法は出現品を指し陀羅尼形以下は百字果相應品を指す。

【五】三に通じて四種曼荼羅に依りて

佛の事業なり、陀羅尼形と及び語輪とは即ち法曼荼羅身を明す。法門身既に爾り、何に況んや餘身をや。

今「此大日經」には、是の如きの無量の四種曼荼羅身の住處と及び說法利益とを明す、是れ則ち秘密無盡莊嚴の住處なり。故に經に云はく、「一時、薄伽梵、如來加持廣大金剛法界宮に住したまふ、一切の持金剛者、皆悉く集會す」とは、釋して云はく、此は總じて大

秘密究竟心王如來大毘盧遮那五智四印と、及び心數微塵數の眷屬とを明す。薄伽梵とは總じて摩訶薩尊の德號を擧ぐ、具に釋すること疏の如し。住とは能所の二住を顯す、言ふこ

ころは各各の諸尊自證三昧の句に住するなり。如來加持廣大金剛法界宮とは、是れ則ち五佛の異名なり、大日と寶幢と閻闍と彌陀と天鼓とに次の如く配せよ。復次に如來とは大曼

荼羅身なり。下の文に説く所の、胎藏の曼荼羅是なり。金剛とは則ち三昧耶身なり。第四の卷の所説の密印及び轉轉是なり。法界とは則ち達磨曼荼羅身なり。第二、第五の所説の種子、字輪等の眞言是なり。加持といは事業威儀の身なり、此は三種の身に通ず。廣大とは各各の身量虚空法界に同じきことを明す。故に下の文に「世尊の身語意は平等にして身

量虚空に等同なり、語意の量も亦是の如し」と云ふ。宮と言ふは所住處なることを顯す。今此心王の如來無始無終にして各各に自法界三昧に安住せり。故に下の文に云はく、「時に薄伽梵大日如來、廣大法界加持をもて、即ち是時に於て法界胎藏三昧に住して入佛三昧を説きたまふ」と。

時に釋迦牟尼佛は寶處三昧に住して、自心及び眷屬の眞言を説き、是の

明す。

【大日經】 第一卷 住心品。

【故に經云云】 初

中、以下惣じて五

成就を説く文を引

く。

【住とは云云】 二

に住處成就。

【各各の諸尊】 四

重唱壇の諸尊。

【自語：句】 內心

の三摩地法。句と

は所住處の義。

【復次に：身なり】

以下は四種曼茶羅

に配釋す。

【下の文】 第一具

緣品。

如く普賢は佛境界莊嚴三昧に住し、彌勒は發生普遍大慈三昧に住し、觀自在は普觀三昧

に住し、金剛手は大金剛無勝三昧に住す」と等の類は皆悉く是なり。無量の十佛刹微塵

數の三部五部の諸尊の四種曼茶羅、各々に自證の三昧に住する是なり。一切の持金剛者皆

悉く集會す」とは、此は心數の妙眷屬を明す。心王所住の處には處す塵沙の心數有り、

心數をもて眷屬と爲す、今者心王の毘盧遮那、自然覺を成ず、爾時、一切の心數、即ち金

剛界の中に入りて、如來内證の功德差別智印と成らずといふこと無し。是の如きの智印は

唯し佛と佛とのみ乃し能く之を持したまふ。菩提義に約すれば、則ち無量無邊の金剛印有

り、佛陀義に約すれば、則ち無量無邊の持金剛者有り。斯衆德は悉く皆一相一味にして、

實際に到るに由るが故に集會と名く。金剛と言ふは、五部の諸尊の所持の法界幟幟なり、

獨、三、五股、輪、劍、摩尼、蓮華等の種種の三昧耶身を通じて金剛と名く、金剛は常恆

不動不壞能壞の義を表す。

又「如來信解遊戲神變より生ぜる大樓閣寶王は、高くして中邊無し、諸の大妙寶王を

もて種種に間飾せり、菩薩の身を師子座と爲す」と云ふは、釋して云はく、大衆已に集れ

ば說法の處有るべし、故に次に所住と樓閣と及び師子座とを明すなり。此楼閣寶王と及び

師子座とも、亦是れ如來の身なり。其れ高うして窮り無し、當に知るべし廣にして亦無際

なり、邊不可得なるを以ての故に亦復中も無し。此は是れ遍一切處の身の所住の處なり、

當に知るべし是の如きの樓閣も亦一切處に遍す、則ち是れ三昧耶身なり。又經に、其金剛

曼茶羅具緣眞言品

【第二の餘取意。】

【時に釋迦云云】
一門の所證を示す文。第二普通眞言藏品の取意。

【一切の持】集會と名く。大日釋迦の文なり。以下三に衆成號を明す。【心王の毘盧遮那】密藏曼荼羅中臺の教主。

【一切の心數】四佛四菩薩外三重の衆衆。

【是の如きの智】表す。正しく經文を消釋す。

【斯衆德】名く。釋文の皆悉集會を釋す。

【此より下金剛頂經の文前までは、大疏を抄録す初に別して二成就の文を説く、初に處成儀の文。】

【又經に】疏の如し。次に衆成就を明す。初に内眷屬次に釋云云。二

【七】上來自性身に大眷屬を明す。

を名けて虚空無垢執金剛と曰ふ、乃至金剛手秘密主是の如きを上首として十佛刹微塵數等の持金剛衆と俱なりき一と云ふ。釋して云はく、謂ゆる虚空無垢より、秘密主等の微塵數の金剛に及ぶまでは、皆是れ毘盧遮那如來の内證の智印なり。謂ふ所の十佛刹微塵數とは、

如來の差別智印は其數無量なり、算數譬喩の能く知る所に非ず。且く如來の十種の智力を以て、各各一佛刹微塵に對して以て衆會の數を表す。然れども此毘盧遮那内證の德は加持

を以ての故に、一一の智印より各各の執金剛の身を現す、形色、性類皆表象有り、各各本

緣性欲に隨ひて衆生を引攝したまふ。若し諸の行人慇懃に修習して能く三業をして本尊

に同ぜしむ、此一門より法界に入ることを得るは、則ち是れ普く法界門に入るなり。次に

經に「及び普賢菩薩、慈氏菩薩、妙吉祥菩薩、除一切蓋障菩薩等の諸大菩薩、前後に圍繞

して法を演説す」と云ふは、釋して云はく、次に菩薩衆を列ぬるに四聖者を以て上首と爲

す。前に明す諸執金剛は一向に是れ如來の智印なり。今此菩薩は義に定慧を兼ね又慈悲を

兼ねたり、故に別に名を受くるなり、亦是れ毘盧遮那内證の功德なり。執金剛に十佛刹微

塵の衆有るが如く、當に知るべし諸菩薩も法門相對するに、亦十佛刹微塵の衆有ることを。

加持を以ての故に、各各法界の一門より現じて、一善知識の身と爲すことを得。此四菩薩

は則ち是れ佛身の四德なり、偏闕する所有れば、則ち無上菩提を成ずること能はず、是故

に列ねて上首と爲して以て塵沙の衆德を統ぶ、具に名義を釋すること疏の如し。

次に經に云はく、「謂ゆる三時を越えたる如來の日、加持の故に身語意平等句の法門なり。

の説會を明せしを以て、自下は四法身の説益を明す、初に能化身の説の中、自性身の説の時に示現す、二、受用身の説、三、變化身の説、四、又、直説す、等流身の説、【謂ゆる有り】所化の得益。

【普賢：示現するなり】次に實行の當機を化するに就いて初に權類無用次に實類の所用を明す。

【師子王云云】以下別して文句の要を解す。

【一平等身】法身の三密中の身密、六人を三密に配すれば地水火(身)空風(語)識(意)なり

時に彼菩薩には普賢を上首と爲し、諸執金剛には祕密主を上首と爲し、毘盧遮那如來加持の故に、身無盡莊嚴藏を奮迅示現し、是の如く語意平等無盡莊嚴藏を奮迅示現したまふ。毘盧遮那佛の身或は語或は意より生ずるに非ず、一切處に起滅邊際不可得なり。而も毘盧遮那の一切の身業、一切の語業、一切の意業、一切處、一切時に有情界に於て眞言道句の法を宣説したまふ。又執金剛、普賢、蓮華手菩薩等の像貌を現じて、普く十方に於て眞言道清淨句の法を宣説したまふ。謂ゆる初發心より乃し十地に至るまで、次第に此生に満足す、緣業生の增長せる有情類の業壽の種を除いて、復牙種生起すること有り」と。釋して云はく、將に此平等の法門を説かんとす、故に先づ自在加持を以て大衆を感動して、悉く普門の境界祕密莊嚴不可思議未曾有の事を現じたまふ。普賢祕密主等の上首の諸の仁者は、則ち此れ毘盧遮那の差別智身なり、是の如きの境界に於て久く已に通達せり。然も此諸の解脱門所現の諸の善知識、各無量の當機衆を引いて同じく法界曼荼羅に入る、此初入法門の實行の諸の菩薩を僉益せんが爲の故に、如來加持して大神通力を奮迅示現するなり。師子王の將に震吼せんと欲するとき、必ず先づ其身を奮迅し、材力を呈現して然して後に聲を發するが如く、如來も亦爾なり、將に必定師子吼して、一切智門を宣説せんと欲ふが故に、先づ無盡莊嚴藏を奮迅示現す。謂ふ所の莊嚴とは、謂はく一平等の身より普く一切の威儀を現す、是の如きの威儀は密印に非ざること無し、一平等の語より普く一切の音聲を現す、是の如きの音聲は眞言に非ざること無し、一平等の心より普く一切の

【八】大日經文を以て當住心釋し竟りて、以下は金剛頂經の文を以てす。今註釋を加へざるは、是兩部中の最深秘の經なるが故なり。

本尊を現す、是の如きの本尊、三昧に非ざること無し、然れども此一の三業差別の相は皆邊際無し、度量すべからず、故に無盡莊嚴と名くるなり。

又「金剛頂經」に云はく、「一時、薄伽梵、金剛界遍照如來、諸尊の徳を歎す。五智所成の四種法身には法界體性智なり、即ち是れ五方の佛なり、次の如く東南西北中に配して之を知れ、

四種法身とは一には自性身、二には受用身、三には變化身、四には等流身なり、を以て本有の金剛此は性徳の法界體性自在大三昧耶察智なり。自覺本初智なり大菩提心普賢滿月智なり不壞金

剛光明心殿中に於て、謂はく不壞金剛とは總じて諸尊の常住の身を歎す、光明心とは心の覺徳を邊の義なり、此れ是三密は彼五邊百非を離れて獨り非中の中に住す、等觀十地も見聞すること能はず、謂ゆる法身自證の境界なり、亦是れ成所作智なり、三密の業は皆此より生ず、已上の五句は總じて住處を明す、住處の名は則ち五佛の

秘號妙徳なり、密意知るべし。自性所成の眷屬、金剛手等の十六大菩薩と、及び四攝行の天女使と、金剛内外の八供養の金剛天女使と、各に本誓加持を以て自ら金剛月輪に住し、

本三摩地の標幟を持す、皆以て微細の法身秘密心地の十地を超過せる身語心の金剛なり。此は三十七根本自性法、

遍滿す、諸地の菩薩能く見ること有ること無し、俱に熾然の光明自在の威力を覺知せず。此は三十七尊の根本の五智の各の恆沙の性徳を具することを明す、若し次第に約つて常三三三に於て不

壊の化身をもて有情を利樂して、時として暫くも息むことなし。謂はく三世とは三密なり、とは業用なり、言ろは常に金剛三密の業用を以て、三金剛自性の阿闍佛光明遍照の印、清淨

世に亘りて自他の有信をして妙法の樂を受けしむ。

あらず、亦隨喜したまはず。何を以ての故に。是諸法は法是の如くなるを以ての故に、若しは諸の如來、出現し、若は諸の如來出でたまはされども、諸法、法爾として是の如く住す、謂はく諸の眞言法爾の故に一といへり。解して云はく、如來の身語意は畢竟して等きを以ての故に、此眞言の相は譬字皆常なり、常なるが故に流せず、變易有ること無し、法爾として是の如く造作の所成に非ざるなり、若し造作すべくば則ち是れ生法なり、法若し生有らば則ち破壞すべし、四相に遷流せられて無常無我なり、何んが名けて實實語と爲すことを得んや。是故に佛の自作にもあらず、他をして作さしむるにもあらず、設令ひ能作有りともし、亦隨喜したまはず。是故に此眞言の相は、若は佛の世に出興し、若は出世せず、若は已説、若は未説、若は現説法、法位に住して、性相常住なり、是故に必定印と名く。衆聖は道同なり、則ち是れ大悲曼荼羅の一切の眞言と、一一の眞言の相とは皆法爾なり。

【二〇】二に眞言家の祖の傳法を明す。
 【七葉】七世。
 【阿闍梨耶】唐に軌範と言ふ。
 【一】三に眞言の隨緣に約して明す。初に最初の佛、時機を待ち言心俱絶の教法を説き給ふ所由を明す。

【一】「已に知んぬ、法爾として住して、人の能く作すこと無きことを。若し然らば誰か傳へん。」
 答ふ。「初め大日尊より下青龍の阿闍梨に至るまで七葉の大阿闍梨耶有り。其法を摩訶毘盧遮那究竟大阿闍梨耶、金剛薩埵大阿闍梨耶、龍猛菩薩大阿闍梨耶、龍智菩薩、金剛智三藏、大廣智三藏、青龍寺の惠果阿闍梨と曰ふ。是の如きの大阿闍梨等轉轉して授けたまふ。」

【二】「下中付法傳來を知んぬ、最初の説相云何。經に、秘密主、正等覺を成する一切知者一切」

【今此眞言云云】正しく今の文を解す。
【相續の中】間斷あることなき第八講をいふ。

【佛道場】動ぜざるなり。出興等の文を解す。

【普門を云云】外
部雜類普現の色身
【若し行者云云】行者の妄見を誡む是れやがて瑜伽の行者をして、因縁生に即して法界を悟らしめんとするなり。

見者、世に出興して自ら此法をもて、種種の道を説き、種種の樂欲に隨ひて、乃至種種の諸趣の音聲をもて加持を以て眞言道を説きたまふ」と云ふ。解して云はく、斯意の言はく、如來自證の法體は佛の自作にも非ず、餘の天人の所作にも非ず、法爾常住なれども而も加持神力を以て世に出興し衆生を利益したふ。今此眞言秘密の身口意は、則ち是れ法佛平等の身口意なり、然も亦加持力を以ての故に世に出現し衆生を利益したまふ。如來無礙知見は一切衆生の相續の中に在りて、法爾に成就して缺減有ること無し。此眞言の體相に於て、實の如く覺らざるを以ての故に、名けて生死の中の人と爲す、若し能く自ら知り自ら見る時を、則ち一切知者一切見者と名く。是故に是の如きの知見は、佛の自ら造作したまふ所にも非ず、亦他に傳授したまふ所にも非ざるなり。佛、道場に坐して是の如きの法を證し已りて、一切の世界は本より以來常に是れ法界なりと了知して、即時に大悲心を生じたまふ、云何が衆生は佛道を去ること甚だ近うして自ら覺ること能はざると。故に此因縁を以て、如來、世に出興して還りて是の如きの不思議法界を用ひて、種種の道を分作し、種種の乘を開示し、種種の樂欲の心機に隨ひて、種種の文句方言を以て、自在に加持して眞言道を説きたまふ。機感の因縁に従ひて生ずと雖も、而も實際を動ぜざるなり。善巧方便をもて爲さざる所無しと雖も然も佛の所作に非ず。普門をもて異説すと雖も、而も但佛の知見を以て衆生に示悟す。若し行者此眞言の十喻の中に於て、妄に有爲生滅を見て更に心垢を増せば、則ち如來の本意に非ざるなり。復次に、世尊、未來世の衆生は鈍根なるを以て

の故に、二諦に迷うて俗に即して真なることを知らず、是故に慇懃に事を指して言はく、「祕密主、云何が如來の眞言道、謂はく此書寫の文字を加持す」と。世間の文字語言は實義なるを以て、是故に如來は則ち眞言の實義を以て之を加持したまふ。若し法性を出でて、外と別に世間の文字有りといはば、則ち是れ妄心の謬見なり。都て實體の求むべき無けれども、而も佛、神力を以て之を加持すといはば、是れ則ち顛倒に墮して、眞言には非ざるなり、已に所加持の處を知んぬ、如來、何なる法を以てか加持したまふや。故に「佛次に、祕密主、如來は無量百千俱胝那由多劫に、眞實諦語と四聖諦と四念處と四禪足と十如來力と六波羅蜜と七菩提寶と四梵住と十八佛不共法とを積集し修行したまへり、祕密主、要を以て之を言はば、諸の如來の一切智智と一切如來の自願智力と自願智力と一切法界加持力とをもて、衆生に隨順して其種類の如く、眞言教法を開示したまふ」と言ふは、謂はく如來の無量阿僧祇劫に集むる所の功德を以て、而も遍一切處の普門加持を作したまふ、是故に一一の言名成立の中に隨ひて、皆因陀羅宗の一切義利成就せざること無きが如くなるが故に。又此一一の功德は則ち眞言の相に同じく、法性自爾にして造作の所成に非ざるなり。

【三】次に能所加持を明すに、初に所加持の處。

【皆因陀羅宗云云】演密鈔六に、天帝釋自ら聲論を造る

云何が眞言教法ぞや。謂はく凡て五阿字乃至代字等有の字は爲れ本母なり。各各の字に十二轉有りて字を生ず、此各各の十二を本と爲して、一合二合三合四合等の増加字有り、都て計すれば一萬に餘れり。此一一の字門に無量無邊の顯密の教義を具ふ。一一の

に是の如き義あるが故に」と、知るべし。【又此一云云】

【經文の眞實諦語等を消釋するに、其等の功德法門と眞言の阿字等の梵字と同じく法爾に互に加入し攝持するを以て、能所加持となることを明す】
【三】以下は字數を擧ぐ。初に摩多體文。

【謂はく丸云云】初二字は十六摩多の初二なり第三字より體文の字。乃至は中間十九字を略し、等は五字を等取す。【本母】根本の字

【各各の字：餘れり】體文の聲と摩多の韻と諸字を共生するを明す。【衆生の機：是なり】以下、能生の諸教を明す。【四】以下、簡濫

聲、一一の字、一一の實相は、法界に周遍し一切諸尊の三摩地門と陀羅尼門と爲る。衆生の機根量に隨ひて顯教密教を開示す。密教とは大毘盧遮那十萬頌の經、及び金剛頂瑜伽十萬頌の經是なり。顯教とは他受用應化佛釋迦如來所說の五乘五藏等の經是なり。

問ふ、『華嚴』『般若』『涅槃』等の經に、皆四十二字を説けり。此經の四十九字と何んが別なる。答ふ、『華嚴』『般若』所說の字門とは是れ末なり、『涅槃』の所説は是れ本母なりといへど、雖も然れども但淺略の義を説いて之が深祕の義を祕せり。問ふ、『悉曇』の字母は世間の童子も皆悉く誦習す、此眞言教と何んが別なる。答ふ、『今世間に誦習する所の悉曇章とは、本は是れ如來の所說なり、梵王等轉轉傳授して世間に流布せり。同じく用ふと云ふと雖も、然も未だ曾て字相字義眞實の句を識らず、是故に但世間の四種の言語を詮して如義の眞言を得ず、義語を知らざるは皆是れ妄語なり、妄語は則ち四種の口業を長じ三途の苦因と爲る、若し眞實の義を知るときは則ち一切の罪を滅して一切智を得。譬へば毒藥の知ると知らざると、損益立ちどころに驗有るが如し。云何が如實義を知る。且く丸等の五轉に各各本不生と寂靜と邊際不可得等の義有り。又阿字に諸法性の義と、因の義と果の義と、不二の義と法身の義と有り、即ち是れ大日如來の種子眞言なり。此五轉は即ち五佛の種子眞言なり、求上門に約すれば則ち因行證入の方便なり。此一文字に一百二十の義及び無數の義理を具す、具には『守護國經』に説くが如し。此字義を解するを名けて法自在王菩薩、及び大毘盧遮那佛と曰ふ、自餘の一一の字義も亦復是の如し、諸佛菩薩無量無量の身去を起し、

問答に三、初に顯密兩經の字門の差違を問ふ。

【華嚴】 舊經第五十八入法界品。

【般若】 大品の第六廣乘品。

【涅槃】 南本第八の文字品。

【等】 文殊問經上の字母品、大集經の第四陀羅尼自在王品等。

【問ふ悉曇云云】 以下は、世出世の字に就いて明す。

【四種の言語】 釋論に五を説く。一

相言説。二、夢言説。三、妄執言説。四、無始言説。五

如義言説。前四は虛妄説、第五のみ眞理を説じ得。

【此一字に一百云云】 阿字を指す。

【問ふ、三摩盧云云】 三に顯教中の説を決擇す、初に二教

【答ふ、得】 眞言陀羅尼を以て秘と

名け、長行例頌を

無礙劫を歴て一一の字門の義を説かんに、劫は猶し盡くべし、眞言の實義は窮盡すべからず、即ち是れ實の如く字義を知るなり。

問ふ、毘盧遮那の所説をば秘密と名け、釋迦の所説をば顯教と名くといはば、釋迦の所説の中にも亦眞言及び秘密の名有り、之と何んが別なる。答ふ、『釋迦所説の眞言は、多名句に簡びて秘の名を得、彼眞言の義も亦續續量に返へり。』法華『涅槃』涅槃等にも亦秘の名有り、各所望に隨ひて斯名有り、律儀は世間の外道に望めて秘の名を得、法華は二乘を引攝するに約して斯名有り、『涅槃』は佛性を示すに據りて之を得、世間の外道の經書の中にも亦斯名有り、各各所愛所珍に隨ひて之に名くるのみ、並に是れ小秘にして究竟の説に非ず。『大日經』に勝上大乘句の心續生の相は諸佛の大秘密と説く。秘密に約するに大小有り。眞言にも亦大小有り、故に『菩提場經』に云はく、『我をば眞言と名け、亦は大眞言と名く』といへり。初に眞言とは應化身所説の眞言なり、次に大眞言とは究竟法身所説の眞言なり。問ふ、『眞言と大眞言と何んが別なる。』答ふ、『譬へば大乘と小乗との如し。若し淺略門に就いて説かば淺深有り。』云何が不同なる。且く初の阿字に就いて釋せば、世天乃至如來所説の眞言に皆阿字有り、是れ阿字本不生の義なり。此不生に於て無量の不生有り。世間呪術の眞言は寒熱等の病を除くに約して不生と説く、護世四王の眞言は、疫癘等の不起に約して不生と説く、帝釋の眞言は十不善と災横との不起に約して義を明す。梵王の眞言は欲覺の不起に約して不生と説く、大自在の眞言、聲聞の眞言は盡無生

顯と稱するをいふ
【大日經】 第一住
心品の文。

【眞にも大小云云】
以下、眞言の稱に
約して明すに、初
に引證略釋す。

【菩提場經】 菩提
場所説一字頂輪王
經第三卷、末法成
就品に一百九十五
名を説く中の二。

【此不生に於て云
云】以下、別釋す
世間呪術乃至大自
在眞言までは世間
の阿字に約して明
す。

【護世、帝釋】 欲
天の二。

【梵王、大自在】
色天の二。因みに
大自在天は大師に
義を以て加ふ、疏
には無し。

【聲聞の云云】 出
世の不生に就いて
明すに、初に小乘
の眞言。

【盡無生智】 盡智
と無生智。

智ちに約やくして不生ふしやうと説とく。緣覺えんかくの眞言しんごんは十一因緣いんえんの不起ふきに約やくして不生ふしやうと説とく。諸しよの菩薩ぼさつの眞しん言ごんは各おの各おのの諸通達しよつうだつに約やくして不生ふしやうと説とく。他緣乘たえんじやうは生法しやうぽふの二空にくうと二障にじやうの不生ふしやうとに約やくして義ぎを明あす。覺心かくしん不生ふしやう乘じやうは諸しよの戲論けいろんの不生ふしやうに約やくして義ぎを説とく。一いち道だう無爲むゐ乘じやうは無明むみやうの不動ふどうに約やくして不生ふしやうを明あす、極無自性ごくむじじやう乘じやうは約やくして。

ひみつまんぞうじふじゆしんごんまきのだいじよ
秘密曼荼羅十住心論卷第十

三
論
玄
義

宗 典 部	第 十 七 卷
-------------	------------------

龍樹の著なる中論、百論も、提婆の作十二論の陶女の深義を顯すに破邪顯正の二門を以てせるも、別しては中論の玄義を開顯するを以て要旨とす。

【慧日道場】 隋の煬帝、揚州に建立せるもの。

【吉藏】 三論宗の祖。嘉祥大師これなり。西紀五四九一六二三。

【一】 三論の宗要を叙ぶるに二門を開く、初に三論の歸趣を示すに、破邪顯正の二門を以てす。

【大歸】 大いに邪執を排し正中に歸せしむる意。

【適化無方】 隨宜に説法して一概に非ざるをいふ。

【九十六術】 外道の六師に、各十五種の異解を出すをいふ。

【五百の異部】 小

三論玄義

慧日道場沙門吉藏 命を奉じて撰す

(一) 總じて宗要を序ぶるに、開いて二門と爲す。一には通じて大歸を序べ、二には別して衆品を釋す。初の門に二有り。一には破邪、二には顯正なり。

夫れ適化無方にして、陶誘一に非ず。聖心を考ふれば、息患を以て主と爲し、教意を統ぶれば、通理を以て宗と爲す。但九十六術は火宅に栖みて淨道と爲し、五百の異部は、見網を縈らして泥洹と爲す。遂に鹿苑をして坵墟となし、鷲山をして荆棘とならしむ。善逝之を以て、働を流し、薩埵所以に大いに悲む。四依、此が爲に興り、三論斯に由りて作る。但論は三有りと雖も、義は唯二轍なり。一には曰はく顯正、二には曰はく破邪なり。

邪を破するときは則ち下沈淪を拯ひ、正を顯すときは則ち上大法を弘む。故に領を振ひ綱を提ぐるに、理は唯斯二なり。

但邪謬紛綸として、備に序ぶべきこと難し。三論の斥する所、略して四宗を辨す。一には外道を擯き、二には毘曇を折け、三には成實を排し、四に天執を呵するなり。問ふ、「何の義を以ての故に、遍く衆師を斥くるや。」答ふ、「論主は其原を究め、其理を盡さんと

乗の中の異計をいふ。

【善逝】佛十號の第五。修伽陀(ひんび)の義。善く因より果に逝きて歸らざる意にて、再び迷はざるをいふ。

【四依】能く正法を護持し、世間の依憑となる人に、四種あるをいふ。

【一】次に廣く三論の宗要を釋す。初に總じて四宗を破するに、所破の體を出す。

【毘曇】阿毘曇の略。新に阿毘達磨といふ。これ論藏の總名なれども常に小乘薩婆多部の論(發智)六足、婆沙、俱舍)等をいふ。

【毘婆沙】阿梨跋摩(Haryasama)の略譯して薩子鎧といふ、或實宗の祖。

【二】以下、別して四宗を破するに、初に外道を摧破す

なり。一源究らざれば、則ち戲論滅せず、毫理も盡さざれば、則ち至道彰れず。源として究めざること無きを以て、群異乃ち息み、理として盡さざること無ければ、玄道始めて通ず。是を以て斯文に遍く衆計を排す。『問ふ、』既に法として究めざること無く、言として盡さざること無ければ、應に遍く群異を排すべし。何が故に但四宗を斥くるや。』答ふ、『初の一をば外と爲し、後の三をば内と爲す。内外並に收まりぬ。毘曇には有を明し、成實には空を辨じ、空有俱に攝す。斯二をば小と爲し、方等をば大と稱し、大小該羅す。略して四迷を洗へば、則ち紛累都べて盡くるのみ。』問ふ、『此四執の優降云何ぞ。』答ふ、『外道は二空に達せずして、横に人法を存し、毘曇は已に無我を得れども、法の有性を執す。跋摩は、具に二空を辨ずれども、照は猶未だ盡きず。大乘は乃ち言は究竟なれども、但、封執して迷を成す、淺より深に至りて、四宗の階級なり。』問ふ、『外道の邪言は、破と稱することを得べし、餘は内教爲り、何ぞ亦破することを得るや。』答ふ、『總じて破顯を談ずるに、凡そ四門有り。一に破して收めず、二に收めて破せず、三に亦は破し亦は收む。四に破せず收めず。言、道を會せざれば、破して收めず。説必ず理に契へば、收めて破せず。教を學して迷を起せば、亦は破し亦は收む。其能迷の情を破して、所惑の教を收取するなり。諸法の實相は言忘慮絶す。實に破すべき無く、亦收むべき無し。上の三門を混じて、一相に歸す。斯四句を照すに破立皎然たり。此より以來は總じて申破を明し、言ふ所の外道を摧くとは、夫れ至妙虛通なる之を目けて道と爲す、心道の外に遊ぶが故

【夫れ…名く】以下、外道の名を釋す。

【至妙虚通】至極微妙虚通無礙なる意。佛法の正道をいふ。

【總じて西域云云】以下、天竺の四執を明す。

【問ふ、云何なる云云】以下、別開別答に四あり。初に邪因邪果問答なり。

【七計例して然り】中論の初に出づ。

【問ふ、如何なるをか無因云云】第二無因有果問答。

【交謝の宅報應の場】三界の依正二報は、生死交々謝し、苦樂報應する宅場なり。の意。

【莊周の齊物篇に出づ】これに因みて印度の無因外道を斥す。

に外道と名く、外道は多端なり、略して其二を陳べん。一には天竺の異執、二には震旦の衆師なり。總じて西域を論ずるに九十六術あり、別して宗要を序ぶれば、則ち四執盛んに行はる。一には邪因邪果を計し、二には無因有果を執し、三には有因無果を立て、四に無因無果を辨するなり。問ふ、「云何なるをか名けて邪因邪果と爲す。」答ふ、「有外道の云はく、大自在天は能く萬物を生ず、萬物、若し滅すれば、還りて本天に歸す。故に自在と云ふ。天若し曠れば四生皆苦み、自在若し喜べば則ち六道咸く樂む。然も天は物の因に非ず、物は天の果に非ず。蓋し是れ邪心の畫く所なり、故に邪因邪果と名く。」自在既に耐り七計例して然り。難じて曰はく、夫れ善は樂報を招き、惡は苦果を感ず、蓋し是れ交謝の宅、報應の場なり、義理に達せざるを以ての故に、斯謬を生ず。又夫れ人類は人を生じ、物類は物を生ず。人類を生ずれば、則ち人還りて人に似たり。物類物を生ずれば、物は還りて物に似たり。蓋し是れ相生の道なり。而るに一天の因、萬類の報を産すと謂ふ、豈謬りにあらずや。問ふ、「云何なるをか名けて無因有果と爲すや。」答ふ、「復外道有り。萬物を窮推するに、由籍する所無し。故に無因と謂ふ。而も現に諸法を觀るに、當に知るべし果有ること。例せば、莊周の魍魎影に問ふが如し、影は形に由りて有り、形は造化に因る。造化は則ち所由無し、本既に自ら有り、即ち末も他に因らず。是故に、因は無くして而も果有るなり。」問ふ、「無因と自然と、此に何の異有りや。」答ふ、「無因は其因無きに據り、自然は果有るを明す。義に約すれば不同なれども、猶是れ一執なり。」難じて曰はく、夫れ因果

【有人の言はく云云】これ莊子の自然觀を擧げて救ふなり。

【萬化】因縁を以て萬差の諸法生ずるをいふ。

【自を論ずれば云云】自は自然にして、謂ゆる果を指し、他とは因を指す。これ因果の義を決掃す。

【問ふ云何なるをか】有因云云【第三に有因無果問答】神道の道佛道のこと。

【義は丘は昏し】丘は孔丘、且は別且の意、其説は一世の事を明して、未だ神識相續して未來の果を感ずるを明さす。

【經に云はく】七女經。

【問うて曰はく】此句蓋し衍文なり

【問うて曰く云ふ】第四、無因無果問答。

相生することは、猶し長短相形あるがごとし。既に其れ果有らば、何んが因無しといふことを得ん。如し其れ因無ければ、何んが獨り果有らんや。若し必ず因無くして果有らば、則ち善は地獄を招き、惡は天堂を感ぜん。問うて曰はく、有人の言はく、自然に因有り、自然に因無し。萬化不同なれども皆自然に有り、故に前過に同する無けん。答へて曰はく、蓋し未だ之を審に察せざるが故に、斯謬を生ず。如し其れ精く究むれば、理として必ず然らず。夫れ自を論ずれば、他に非ざるを謂ひて、義と爲す。必ず是れ因は他にしてい、則ち自に非ず。故に自は則ち因にあらざ、因は則ち自にあらざ。遂に因にして復自なりと云はば、則ち義は鋒稍を成す。問ふ、云何なるをか名けて有因無果と爲すや。答ふ、斷見の流は唯し現在のみ在りて、更に後世無しといふ。類せば、草木の盡くること一期に在るが如し。難して曰はく、夫れ神通は幽玄なれば惑ふ人昧きこと多し。義は丘を經れども未だ曉らず、理は且に涉りても而も猶昏し。唯し佛宗のみ有りて乃ち其致を盡す。經に云はく、雀瓶中に在るとき、羅敷をもつて其口を覆ふ、穀穿るとき雀飛びて去るが如し。形壞しぬれば神走ると。匡山の慧遠釋して曰はく、火の薪に傳るは、猶し神の形に傳るがごとし、火の異薪に傳るは、猶し神の異形に傳るがごとし。前の薪は後の薪に非ざるをもつて、則ち指窺の術の妙なることを知りぬ。前の形は後の形に非ざるをもつて、則ち情數の感深きことを悟りぬ。形の一生に朽つるを見て、便ち識神俱に喪ひぬと謂ひ、火の一木に宛まるをもつて、乃ち終期都て盡きぬと曰ふことを得ず。問うて曰はく、後學、黄

【六師云云】涅槃經第十八の文。闍王の六惡臣、己が崇敬する六師の説を擧げて闍王に説く、今第一惡臣月稱の語。
 【四邪の間：爲り】已上述べたる四邪見の中、最惡なるをいふ。
 【問ふ、斯紛謬云】次に四邪の出現時を問答す。
 【四】以下、震旦の三徒を述す。
 【三玄】周易、老莊をいふ。
 【釋の僧肇云云】百論序の疏に出づ
 【淨名經】古維摩經。
 【九部】佛の教説形式を分ち九部とす。一、修多羅。二、伽陀。三、本事。四、本生。五

帝の言を稱して曰はく、「形は麤ゆと雖も神は化せず、化に乗じて變に至ること窮無し」と
 彰に三世を言はずと雖も、意は已に未來の不亂を明せり。問うて曰はく、「云何なるをか
 名けて無因無果と爲す。」答ふ、「既に後世に果を受くることを撥無しして、亦現在の因無き
 が故なり。六師の云はく、「黒業有ること無く、黒業の報有ること無し、白業有ること無く、
 白業の報有ること無し」と。四邪の間、最も尤弊爲り、現在には善を斷じて、後には惡趣
 に生ず。」問ふ、「斯紛謬は何の時より起るや。」答ふ、「釋迦未だ興ざりしとき、盛んに天
 竺に行はれ、能仁既に出でて此謬計を殄つ。佛滅度の後に柯條更に繁く、龍樹後に興り
 て、重ねて剪伐を加ふ。」

次に震旦の衆師を排す。一には法を研め、二に人を黜べん。問うて曰はく、「天竺の四術
 は既に是れ外言より、震旦の三玄をば應に内教と爲すべきや。」答ふ、「釋の僧肇の云はく、
 老子莊周の書を読む毎に、因に歎じて曰はく、美なることは即ち美なり、然も神を棲し累
 を冥するの方は、猶未だ盡きず。後に『淨名經』を見て、欣然として頂戴す。親友に謂
 うて曰はく、「吾所歸の極を知れりと。遂に俗を棄てて出家す」と。羅什昔三玄と九部と極を
 同うし、伯陽と牟尼と行を抗ぶるを聞いて、乃ち喟然として歎じて曰はく、「老莊は玄に
 入る、故に應に耳目を惑し易すかるべし。凡夫の智、孟浪の言、之を言ふこと極に似たれ
 ども而も未だ始より詣らず。之を推するに盡るに似て、未だ誰も至らざるなり」と。略し
 て六義を陳べ、其優劣を明さん。外は但一形を辨じ、内は即ち朗かに三世を鑒、外は則ち

未曾有。六、因緣七譬喻。八、紙夜九、優婆提舍。【伯陽】 翠子の字【外は但云云】六義の中、初に時世相對、二に通不相對、三に俗有相對、四に眞無相對、五に兩際相對、六に緣觀相對。【内は一際を絶句の理に冥す】今、出世の人法四句を絶するのみならず世間の人法も亦四句を絶すと明す。これ生死涅槃二なるが故なり。【秦人】 偈摩と羅什の指す。【問ふ、伯陽の道虚云云】 以下無相大虚問答。【什摩とは抑揚】 二佛は、同を異とし、深を淺とし、外を抑へ内を揚ぐるはこれ正言に非ず佛に諂ふなりといふ。【問ふ、牟尼の道は道を眞諦云云】 次

五情未だ達せず、内は則ち六通の微を窮むるを説く。外は未だ萬有に即して太虚と爲さず、内は假名を壊せずして、實相を演ずるを説く。外は未だ無爲に即して、萬有に造ぶこと能はず、内は眞際を動ぜずして、諸法を建立するを説く。外は得失の門を存し、内は二際を絶つての理に冥す。外は未だ境智兩ながら泯ぜず、内は則ち緣觀俱に寂たり。此を以て之を詳かにするに、短羽の鸞翼に於ける、坎井の天地に於ける、未だ喻ふるに足らず。其れ懸なり。秦人、其懐を疑ふ。吾復何をか言はんや。問ふ、伯陽の道は、道を太虚と曰ふ、牟尼の道は、道を無相と稱す。理源既に一なれば、則ち萬流並に同じ。什と摩とは抑揚して、乃ち佛に諂へるなり。』此玉、彌善疏は無爲を以て道體と爲す。答ふ、伯陽の道は、道虚無を指す、牟尼の道は、道四句を超えたり。淺深既に懸なり、體何に由りてか一ならん。蓋し是れ子道に倣ふなり、余が佛に諂ふには非ず。』問ふ、牟尼の道は、道を眞諦と爲す。而も體は百非を絶せり。伯陽の道は、道を杳冥と曰ふ、理四句を超えたり。彌驗するに、體一なり、奚ぞ淺深有らん。』此れ梁の武帝の新義、佛經を用ひ眞空を以て道諦と爲す。答ふ、九流統攝し七略該含すれども、唯有無を辨じて、未だ絶四を明さず。若し老教にも亦雙非を辨ずと言はば、蓋し砂を以て金に糅ふるなり。盜牛の論に同じ。』周弘政、張懷は、並に老の雙人を覆ぶ第二。問ふ、佛をば大覺と名け、老をば天尊と曰ふ。人は同じく上聖にして、法は俱に妙極なり。苟くも異を存せんと欲せば、將に不二の玄門を杜きて、得一の淵府を傷くるに非ずや。』蓋し是れ道士は、三洞靈寶等の經を用ひて義を立つ。答ふ、悉達は宮に處して、方に金輪聖帝を紹ぎ、

【杳冥】 深遠幽寂の意。

【九流】 一、儒流。二、道流。三、陰陽流。四、法流。五、名流。六、墨流。七、縱橫流。八、雜流。九、農流。

【七略】 一、輯略。二、六藝略。三、諸子略。四、詩賦略。五、兵書略。六、術數略。七、方技略。上と共に前漢書藝文志に出づ。

【盜牛の論】 涅槃經に出づ。今、道士雙非の語を盗みて、その旨趣を知らざるをいふ。

【人を數ぶ第二】 以上研法の段竟り第二に人を數ぶるに、初に天尊大覺問答。

【神明】 須彌山の精神のこと。

【五】 第二に毘曇を破斥す。初に宗を立つ。

三論玄義

能仁は俗を出でて、遂に三界の法王と爲る。老は周朝の柱史と爲る。清虛は是れ九流の派なり、子若し人を一にし、法を同じからしめんと欲せば、何んぞ堯皐と安明と共に、高きことを等くし、瑩燭と日月と、照すことを齊しとするに異らん。一問ふ、一同人とは之れ五情なり、異人とは之れ神明なり。迹は柱史爲れども、本は實に天尊なり。實に據りて談ずるに、齊しきこと之に一貫せり。一答ふ、漢書には、亦品類を顯して、伯陽を以て賢と爲す。何晏、王弼は、老は未だ聖に及ばずと稱せり。設令、孔は是れ儒童にして、老は爲れ

迦葉なり、同じく聖迹なりと雖も、聖迹は同じからず。若し圓かに十方に應じて、八相成佛するは、人を大覺と稱し、法を出世と名く。小利は即ち人天の福善を生じ、大益は即ち三乘賢聖有り。斯の如きの流をば上迹と爲すなり。孔は素王と稱して、有を説いて儒と名け、老は柱史に居して、無を談じて道と曰ふが如きに至りては、益を辨するに、即ち人の、聖を得ること無し、利を明すには、即ち止世間に在り、此の如きの類をば、次迹と爲すと。

毘曇を折する第二。一は宗を立し、二は破斥す。薩衛の門人有りて、其宗を序べて曰はく、「阿毘曇とは無比法と名く。無漏の慧根、理に會して凡を隔つ、其功冠絶せり、故に無比と云ふ。四執の外に超え、三界の表を越えたり。群聖の讚歎する所、六道の歸崇する所なり」と。敢て言を抗ぐることを有らば、當に之を屈するに、理を以てすべし。問ふ、「夫れ

理を立てんと欲せば、先づ須らく宗源を序ぶべし。未だ知らず、毘曇には凡そ幾種か有る

を立つ」と。

を立つ」と。

を立つ」と。

を立つ」と。

を立つ」と。

を立つ」と。

を立つ」と。

を立つ」と。

【薩衛】 講家卷上に薩婆多といふ、頭書、移註共にその依憑未詳とせり【理を云云】 大乘中道の理を立つること。【八捷度論】 阿毘達磨發智論。

【毘婆沙】 大毘婆沙論、健陀羅國王迦賦色迦王の請により製作す。

【雜心】 雜阿毘曇論十一卷。【六分の毘曇】 六分の毘曇論をいふ。集異門足論、法蘊足論、施設足論、護身足論、品類足論、界身

や。」答ふ、「部類甚だ多し、略して其六を明さす。一には、如來自説の法相毘曇なり。一盛んに天竺に行れしも震旦に傳はらず。二は極に隣に聖に亞げるを、舍利弗と名く。佛語を解するが故に、阿毘曇を造る。凡そ二十卷有り。此土に傳來せり。三には、佛滅度の後、三百餘年に、三明六通の大阿羅漢有り、姓は迦旃延、「八捷度」を造れり、凡て二十卷あり、此土に傳來せり。言ふ所の八とは、一には雜、二には使、三には智、四には業、五には大、六には根、七には定、八には見なり。捷度と言ふは、之を翻じて聚と爲す、其八義に各部類有るを以て、之を以て聚と爲すなり。四には、六百年の間に五百の羅漢有り、是は旃延が弟子なり。北天竺に於て、共に「毘婆沙」を造りて、八捷度を釋せり。毘婆沙とは、此に廣解と云ふ、西涼州に於て譯出す、凡そ百卷有り、兵火に值うて之を燒き、唯六十卷のみ現在す。止三捷度を解するなり。五には、七百餘年に法勝羅漢有りて、婆沙の太だ博きを嫌ひ、略して要義を撰して、二百五十の偈を作り、「阿毘曇心」と名く。凡そ四卷有り、亦此土に傳はれり。六には、千年の間に達磨多羅有り。婆沙の太だ博く四卷の極めて略なるを以て、更に三百五十の偈を撰して、四卷に足して、合せて六百の偈あり、名けて「雜心」と爲すなり。其間に復六分の毘曇有り。釋論に云はく、「日蓮、和須密、及び餘の論師と共に造れり」と、並に此土に傳はらず。唯、衆事分毘曇は、是れ六の内の一なり、此土に之れ有り。復「甘露味毘曇」二卷有り、未だ作者を詳かにせず、並に此土に傳れり。毘曇は、部類不同なりと雖も、大宗は有を見て、道を得ることを明すなり。

足論なり。

【衆事分毘曇】十

二卷、尊者世友造

求那跋陀羅、菩提

耶舍共譯。

【甘露味毘曇】尊

者置沙造、失譯。

【五】以下、正し

く破斥するに十門

あり。

【至道に云云】二

に別して述するに

十。初に至道に乖

くことを明す。

【七辯】捷、迅、

應、無疎謬、無斷盡

凡所演說豐義味、

一切世間最上妙辯

なり。

【五眼】肉、天、

慧、法、佛眼の五

【釋迦室を掩ひ】

如來初成道三七日

に於て思惟して未

だ説かざるは、室

を掩ひ門を閉づる

に似たるをいふ。

(五はしやくたいに)

破斥第二。凡そ十門有り。一には至道に乖き、二には衆見を挾け、三には大教に違し、

四には小筌を守り、五には自宗に迷ひ、六には本信無し、七には偏執有り、八には本を學

するに非ず、九には眞言を弊り、十には圓旨を喪ふ。蓋し無比の名は餘有り、明す所の理

は足らず。但し遠く方等に乖くのみならず、亦近く三藏に迷ふ。略して十門を擧げて、其

虚實を顯す。至道に乖くとは、夫れ道の狀爲るや、體は百非を絶し、理は四句に超えたり。

之を言はんとすれば其眞を失ひ、之を知らんとすれば其愚に反く、之を有としぬれば其性

に乖き、之を無とすれば其體を傷く。故に七辨音を輟め、五眼照を冥くせり。釋迦、室を

掩ひ、淨名は、口を杜ぐ、豈有を以て道と爲すべけんや。第二に衆見を扶くといふは、然

も道は實に有に非ず、遂に有を見て道を得たりと言ふは、乃ち是れ有を見るなり、道を見

るには非ざるなり。故に『淨名』に云はく、『法をば無染に名く、若し、法に染せば、乃

ち是れ染著なり、法を求むるには非ざるなり。又夫れ有を見るをば、名けて有見と爲す、

道を見るには非ず。故に『法華』に云はく、『邪見の稠林の若し有若は無等に入り、此諸見

に依止して、六十二を具足す』と。問ふ、『若し有無を執する、此に何の失か有るや。』答

ふ、『正觀論』に云はく、『淺智は諸法の、若し有若は無等を見る。是れ則ち、見を滅する

安隱の法を見ること能はず』と。彼に於て大なる過有り。第三に大教に違すといふは、

『思益經』に云はく、『未來世に於て、惡比丘有りて、有相の法をもつて聖道を成ずること

を得と説かん』と。佛は此勅を垂れて、懸かに將來を誡む。既に惡人と曰ふ、理として是

【五部】曇摩多
薩婆皆帝婆、迦葉
毘、彌沙塞、婆蹉
富羅

れ邪説なり、大教に違背せり、宜しく須らく之を破すべし。第四に小筌を守るといふは、夫れ未だ源を識らざる者の爲には、之を示すに流を以てして、流を尋ねて以て源を得しむ。未だ月を見ざる者には、之に示すに指を以てして、指に因りて、以て月を得しむ。流を窮むるときは、則ち唯是れ一源なり。指を亡するときは、則ち但是れ一月なり。蓋し是れ如來、小を説くの意なり。而るに異曇の徒は、小宗を執固して、大道に越かず、筌を守りて實を喪ふ、故に「一闢」を造りて之を破す。第五に自宗に迷ふといふは、諸の聖弟子、述作する所有るは、本經を通ぜんが爲なり。而るに阿含の文に、親しく無相を説けり。故に善吉は法空を觀じて道を悟り、身子は空定に入りしかば佛歎じたまふ。阿毘曇の人は但有を見るを明すが故に、自ら本宗に迷ふなり。第六に本信無しといふは『文殊問經』に云はく、「十八及び本の二とは、皆大乘より出でて、是も無く亦非も無し。我未來に起ると説く」と。十八とは、謂はく、十八部の異執なり。及び本の二とは、根本は唯二部なり。一には大衆部、二には上座部なり。而るに阿毘曇は、是れ十八部の内の薩婆多部なり。大乘より出でたり。即ち大は小が本爲り。而るに小を執するの流、大乘を聞いて信ぜず。是を以て之を破す。問ふ、「何を以てか小を執するの人は、大法を信ぜざるを知るや。」答ふ、「智度論」に云はく、「旃延が弟子、龍樹に答へて云はく、我大乘を聞くに心都て信せずと。故に外國には、小乘を執する者は、大乘を學する人と、河を分ちて水を飲む」といふ。第七に偏執有りとはいふ、「大集經」に云はく、「五部有りと雖も、並に如來の法界、及び大涅槃を妨

【五部：妨げず】
實相即ち無二なるが故に、三乗の果なく、法界二なるが故に、乘に三あることなし。
【四縁】因縁と、次第縁と、縁縁と、増上縁となり。

【本起經】 同經舍利弗日連來學品の中の文。
【身子】 舍利弗。

げず」と。而も阿毘曇の人は自宗を保執して、他の説を排斥す。便ち法界に違し、大涅槃を拒ぐ。累障既に深し、宜しく須らく傷歎すべし。第八に本を學するに非ずとは、『大品經』に云はく、「四縁を知らんと欲せば、當に般若を學すべし」と。外人龍樹に問うて云はく、「四縁を學せんと欲せば、應に毘曇を學すべし、云何が乃ち般若を學すべしといふや。論主答へて曰はく、『初めて毘曇を學すれば、解すべきに似如れども、轉た久しく推求すれば、則ち邪見を成ず』と。問うて曰はく、『毘曇を學すれば、云何が乃ち邪見を成ずるや。』答ふ、『若し四縁より諸法を生ずと言はば、誰か復四縁を生ずる。若し四縁は更に他より生ぜば、則ち他は復他に從ふべし。是の如くして無窮なり。若し其れ四縁は自然にして有り、他より生ぜずといはば、萬物も亦應に四縁に由らざるべし。當に無因に墮すべし、故に從はば則ち無窮なり、窮まらば則ち無因なり。此二門に由らば、則ち因果を信ぜず。故に久しく毘曇を學すれば、邪見を成ず。』第九に眞言を弊るといふは、『大集經』に云はく、「甚深の義をば説くべからず。第一義諦には聲言無し。陳如比丘は諸法に於て、眞實の知見を獲得すといへり」と。『本起經』に云はく、「類轉沙門は、即ち五人の一なり。身子の爲に、偈を説いて云はく、一切の諸法は本より因緣空にして主無し、心を息むれば本源に違す、故に號して沙門と爲すと。身子之を聞いて即ち初果を得たり」と。大小の二經を尋ぬるに、皆空を見て聖を成ずと明せり。而るに阿毘曇は、有を觀じて道を得と謂ふ、故に眞言を隱覆せり。第十に圓旨を喪ふといふは、『涅槃經』に云はく、「衆生をして、深く眞諦を識

【七】以下、成實宗の人を排斥す。初に義を立つ。

【鳩摩羅陀】(Kumaradhara)

【僧祇】摩訶僧祇譯して大衆といふ窟内の結集を上座部とするに對して窟外の結集をいふ

【近く名相に在り】所説は三世實有法體恒有なりといふを指す。

【赤縣】震旦の別名。

【成：理なり】成實の名義を釋す。此論能く實理を成ずる意。

【五聚】初發聚、苦諦聚、集諦聚、滅諦聚、道諦聚。

【八】第二に排斥す。

らしめんと欲す、是故に如來は俗を宣說す」と。若し衆生をして、俗諦に因らずして眞を識らしめば、諸佛如來は終に俗を説かず。毘曇の流は、俗有を知ると雖も、眞空を悟らず。既に眞空に惑へば、亦俗有に迷ふ。是故に眞俗二ながら、俱に並に喪へり。

成實を排斥する第三。一には義を立て、二には排斥す。訶梨跋摩が高足の弟子有り、其宗を序べて曰はく、『成實論』は佛滅度の後、九百年の内、訶梨跋摩といふもの有り、此には師子鎧と云ふものの所造なり。其人、本は是れ薩婆多部の鳩摩羅陀が弟子なり。其所釋の近く名相に在るを慨きて、遂に輟を僧祇に徙して、大小兼學せり。九經を鑽仰し五部を激汰して、再び邪霧を卷きて、重ねて慧目を舒ぶ、是に於て、道を屬賓に振ひ、聲を赤縣に流す」と。成といふは是れ能成の文なり、實といふは謂はく所成の理なり。二百二品十六卷の文は、四諦に章を建て、五聚に義を明す。説既に精巧なり、歸衆林の若し。問ふ

『跋摩は既に八纏を排斥し、五部を淘汰す。成實の宗は正しく何の義に依るや。』答ふ、『有人の言はく、『善を擇びて從ひ、能有れば必ず録す。衆師の短を棄てて、諸部の長を取

る』と。有人の言はく、『復群異を斥け排すと雖も、正しく曇無德部を用ふるなり』と。有人の言はく、『偏に毘曇を斥けては、専ら譬喩を同ず』と。眞諦三藏の云はく、『經部の義を用ふるなり』と。『俱舍論』を檢するに、經部の義は、多くは成實に同じ。』

排斥第二。問ふ、『成實は是れ小乘の論とや爲ん。是れ大乘とや爲ん。大小を舍むとや爲ん。』答ふ、『有人の言はく、『是れ大乘なり』と。有人の言はく、『是れ小乘なり』と。

【珉玉の精蘊】白
玉と精石の精蘊の
意。

【今十義云云】以
下成實論の大小
屬を證するに十義
を以てす。初に舊
序を引きて示す。

【悟は中に由らず】
悟は方等の理によ
らざるをいふ。二
【論に依りて徴す】

有人の言はく、「大乘の意を探りて、以て小乗を釋す、具に大小を含むと。夫れ珉玉の精蘊は、蓋し是れ耳目の覩る所なり、尙昏明の殊鏡有り、況んや妙道の眞偽は、言亡慮絶せり。豈識り易からんや。今十義を以て證するに、則ち明けし是れ小乘にして、大乘には非ず。一には舊序をもつて證し、二には『論』に依りて徴し、三には大の文無し、四には條例有り、五には本宗に迷ふ、六には大小を分つ、七には優降を格す、八には相即無し、九には解行を傷る、十には世人を検す。舊序をもつて證する第一。昔羅什法師は『成實論』を翻して云はく、『成實論』は佛滅度の後、八百九十年に闍賓の小乘學者の匠、鳩摩羅陀の上足の弟子、訶梨跋摩の造る所なり。其『論』に云はく、「色香味觸は實なり、地水火風は假なり」と、精巧に餘有り、實を明すこと足らず、推して之を究むるに、小乘の内の實ならくのみ。大乘に比するに、復龍燭を螢耀に於けると雖も、未だ喻ふるに足らず。其れ懸なりと。或は、有人の言はく、「此論は滅諦を明すこと、大乘と致を均くせり」と。羅什聞いて歎じて曰はく、「秦人の深き識無きこと、何ぞ乃ち此に至れるや。吾毎に其普く大乘を信する者を疑ふ」と。當に知るべし、悟は中に由らずして、識るべきに迷へり。『成實』は是れ羅什の所翻、僧叡は講論の始爲り。後學前匠に孤負すべからず。『論』に依りて徴する第二。『成實』の文に云はく、「諸の比丘異論種種なれども、佛皆聽せり。故に我正しく三藏の内實義を論ぜん」と欲す」と。訶梨自ら云はく、「正しく三藏を論ず」と。故に知んぬ『成實』は、

【迦葉集む】迦葉阿難は、王舎城に於て三藏を結集し（聲聞藏）、文殊彌勒は鐵圍山に於て摩訶衍（菩薩藏）を集むといふ。

【大のべし】三に成實論中、大乘の文なしといふ。

【條例に互けん】四に經論に互りて條例を擧げ證す。

理は是れ小乘なり。若し斯論に亦大を明すと云はば、過門人に在り、跋摩の答に非ず。問ふ、「何を以てか三藏は、是れ小乘なりと知るや。」答ふ、「法華」に云はく、「亦小乘三藏の學者に親近せざれ」と。大の照未だ圓ならざれば、小の法に榮す容きを恐る。故に智形をして宜しく隔つべし。行止を共にすること勿れ。大士を誡めて、小人に親近すること勿らしむれば、則ち三藏は大乘に非ずといふことを知る。「智度論」に云はく、「迦葉阿難は三藏を結集し、文殊彌勒は大乗藏を集む」と。外人問うて云はく、「何の故に三藏の内に於て、大乘を集めざるや。」論主答へて云はく、「小乘は大を受けざるをもつて、小の内に大を集むべからず。」と。此を以て之を推すに、但是れ小乘なるのみ。大の文無き第三。原るに夫れ「論」を作るには、皆佛の言を引く。龍樹の大を釋するが如きは、還りて大經を引けり。訶梨は小經を解して、唯小を將て證せり。二百二品は、並に四阿含を探る。十六卷の文に竟に方等無し。此を以て之を詳にするに、即ち知んぬべし。條例有る第四。問ふ、「若し『成實』は小を釋して、大を兼ね明すことを許さず、亦應に『三論』は大を解して小を兼ね明すべからざるべし。」答ふ、「義に條例有り、相濫すべからず。佛經に二有り。一は小乘、二は方等なり。若し大乘を明すには、必ず兼ねて小を辨す、若し小乘を辨するには、兼ねて大を明さず。故に大乘經の初には小乘衆有り『小乘經の首には菩薩僧無し。大を示すには、能く小を包ぬれども、小には大を含まず。佛經既に兩り。論に在りても例するに然なり。大乘の論には、兼ねて小乘を明かせども、小乘の論は、兼ねて大

【弟子の論】別しては成實論をいふ【如來の經】別しては小乘經をいふ以下は、成實論を以て經を推し、經既に大を説かず、論また大を説かずといふなり。

を明さず。若し弟子の論に、大を探りて小を釋すといはば、如來の經の義も、亦應に然るべし。則ち巨細互に兼ねれば、何をか大小と名けん。本宗に迷ふ第五。問ふ、『成實論』の文に、盛んに生法二空を辯ぜり。『大品』に四諦平等を明すと、義既に異なること無し。故に知んぬ、應に、是れ大を探りて、小を釋すべし。』答ふ、『四阿含の教の内に、二空有り。』論』に二空を明すは、則ち還りて三藏を釋するなり。云何が、乃ち大を探りて、小を解すと言はん。又、身子が毘曇も、亦二空を辯ぜり、是れ小にして大に非ず。詞梨の『論』も、義亦應に同じかるべし。』問ふ、『身子が毘曇も、亦大を探りて小を釋す、』成實』と例同なり。彼既に大を探れば則ち此は専ら小に非ざるべし。』答ふ、『身子が所造は、還りて佛の毘曇を釋せり。佛説既に是れ小乘なり、彼『論』寧ろ大を探ると言はんや。』大を分つ第六。問ふ、『小には一空を明し、大には二空を辨ぜば、差別有るべし。既に同じく其れ二空なり。大小何んが異なる。』答ふ、『同じく二空を辨ずと雖も、二空は不同あり、略して四種を明す。一には小乘は法を拵きて空を明し、大乘は本性空寂なり。二には小乘は但三界内の、人法二空を明す、空の義即ち短し、大乘は三界内外の人法並に空なりと明す、空の義は即ち長ぜり。三には小乘には但空を明して、未だ不空を説かず。大乘には空を明して、亦不空を辨ず。故に『涅槃』に云はく、聲聞の人は但空を見て、不空を見ず。智者は空及以不空を見る』と。空とは、一切の生死なり、不空とは、謂はく大涅槃なり。四には小乘をば名けて、但空と爲す。謂はく、但空のみに住す、菩薩を不可得空と名く、

【空も亦不可得】
 單空に非ずして、
 空は四句絶非の絶
 對境なるをいふ。
 【優降…のみ】
 七
 に二乘の空の優劣
 を示す。
 【累教…】
 喝累品
 に同じ。
 【相即…なり】
 八
 に論に相即を説か
 ざるを示す。
 【空法】
 法空を指
 す。彼は未だ相即
 相融の法門を知ら
 ず、ただ法空のみ
 を證す。
 【佛の智…生ぜず】
 大を欣ばざるを顯
 す。
 【何を以て云云】
 小乘の所説に就て
 重ねて相即の義な
 きを問ふ。
 【解行…勿れ】
 九
 に布施觀を述べて
 難す。
 【涅槃經】
 同經第
 二十四高貴徳王
 品。
 【成實實には布施
 を見ず】
 立假品の
 文意。

空も亦不可得なり。故に知んぬ、二空を明すと雖も、空の義異有り、故に大小を分つ。優降を格す第七、龍樹は『般若』の累教品を釋して云はく、「善吉は生法二空を觀ず、菩薩の二空に比せんと欲するに、譬へば毛孔の空を、十方の空に比するが如し」と。即ち小空をば淺と爲し、大空をば深と成す『成實』の明す所は、但是れ聲聞の空にして、大士の所得に非ざるのみ。相即無き第八、『法華』の信解品に云はく、「四大聲聞、自ら所得の空を述べて云はく、我等長夜に空法を修習す、無生と無滅と無小と無大と無漏と無爲となり。佛の智慧に於て、貪著を生ぜず」といへり。『成實』に辨する所、此と全く同じ。故に知んぬ、大には非ざるなり。問ふ、『何を以てか然ることを知る。』答ふ、『法華』の文は、聲聞の空を證するに、空に即して有を觀じ、有に即して空を觀すること能はざるを辨す。故に相即無し。『成實』の所説も亦相即無し。若し相即を明さば、應に空有は並べて觀すべし、若し空有並べて觀すれば、大乘と何の別かあらん。問ふ、『何を以てか小乘の義は、相即無しと知るや。』答ふ、『釋論』に云はく、「小乘の内には、生死は即ち畢竟空なりと明さず」と。唯し大乘のみ乃ち説けり。故に爾ることを知るなり。『解行を傷る第九。』『涅槃經』に云はく、「若し以て聲聞辟支佛の心に布施無しと言はば、是れ即ち名けて破戒邪見と爲す」と。小乘の人は、空觀に入りて布施を見ざれば、大乘の行を破す、故に破戒と云ふ。大乘の解を破するが故に、邪見と云ふ。而るに『成實』には布施を見ざる、是れ實の法空なりと明して、以て宗極と爲す、大乘と爲らんと欲はば、小心を起す勿れ。』世人を檢ぶる第

【我天竺に在り云】鳩摩羅陀、羅什を歎じて、朗月の照すが如しといひ、小乗の人を呵するを述す。

【履道…爲す】齊王の、大乘の道を履むに喩況す。

【問ふ云云】以下問答決疑に七。初に毘曇に對して明す。

【求那跋摩】 Gon. Sramana 譯して功德鑑といふ。闍賓

十。秦の弘始七年に、天竺に刹利有り、海に泛び長安に至る。羅什の、大乘の學を作すを聞いて、『正觀論』等を以て、諮うて之を驗す。什公共が爲に敷拆するに頂受を爲して絶數すること已むこと能はず。已にして什公に白して曰はく、「當に此明を以て、唯を天竺に震ふべし、何に由りてか此摩尼を藏みて、乃し邊地に在すや。我天竺に在りしとき、諸の論師に聞いて深く闍賓の小乗學者鳩摩羅陀、自ら朗月の照と稱するを怪しむ」と。偏智小才、此喩に非ざればなり。而るに訶梨、其師の、才を以て自ら傷み、智を以て自ら病むを惜むが故に、此論を作りて、以て有法の實を辨じ、其實に依るの假を明す。故に成實を以て名と爲す。天竺の刹利の言を用ひて之を驗するに、跋摩は師資皆小乗の學なり。爰に齊の司徒文宣王に至りて、誠に三寶を信じ、毎に嘉瑞を感ず。齊の永明十年十月を以て、名徳五百餘人を延請して、普弘寺に於て敷講す。文宣王、毎に大乘の經論を以て、履道の津涯、正法の樞鍵と爲す。而るに後生本を棄てて末を崇む。即ち諸の法師を請じて此『成實』を鈔して、以て九卷と爲り。周顛に命じて序を作らしむ。専ら小論を弘めて、大乘の業を廢せんことを恐るればなり。爾より已後、爰に梁武に至りて、盛んに大乘を弘めて、成實の衆師を排拆す、具に記すべからず。問ふ、「若し十義を以て、成實を小乗と爲すことを證せば、毘曇と優劣云何。」答ふ、「求那跋摩遺文の偈に云はく、「諸論に各異端なれども、修行すれば理は無二なり、偏執すれば是非有り、達者は違諍無し」といへり。又釋論に云はく、「四種の門有り。一には阿毘曇門、二には空門、三には毘勒門、此には饒藏と云

國の王種。宋の文帝元嘉八年建業に來り經律十數部を譯す(西紀三六七—四三三)

【釋論云云】 智度論第十八には前三のみ、今は加補するが。

【波若】 般若に同じ。

【問ふ云云】 二に展轉問答。初に述意の中、一に成實を明し、二に毘曇を申ぶ。

【問ふ云云】 三に勝劣問答。

【犢子部云云】 智度論第一の文。

【譬喻部】 本經部ともいふ。

【問ふ釋論云云】 四に二三問答。【釋論】 智度論第三十五。

ふ。四には非空非有門なり。波若方便を得ずして、毘曇門を學すれば、則ち有の見に墮す。空門を學すれば則ち空見に墮す、毘勒門を學すれば、則ち亦空亦有の見に墮す、非空非有門を學すれば、則ち愚癡の論に墮す。若し波若を得て、心に染著無ければ、機に隨ひ化に適うて、道を通じ人を利するに、相違背すること無し。而るに成實と毘曇とは各空有を執して、互に相排斥して、道を障へ見を増して、皆佛旨を失ふなり。問ふ「空に會して結を斷じて、方に道を得べきのみ、有を鹽みるの心、何んぞ能く凡を隔てん。故に知んぬ、毘曇は宗に乖き、成實は理を得たり。」答ふ、「若し空を見ては聖を成じ、有は凡を隔てずと言はば、三藏の教門は、應に道を得ること無かるべし。釋迦の小乗の一化は、徒然として虚設になんぬ。成實の後に興るを待ちて、方に大利有るべきや。豈然るべけんや。」問ふ、「毘曇は但し人空を明し、成實は具に二空を明す。云何が兩論に優劣有ること無きや。」答ふ、「小乗の内に於て、三品を分てり。一には俱に二空を得ず。犢子部の「四大和合して眼法有り。五陰和合して別に人法有り」と云ふが如し。此れ下根の人なり。二には薩衛の流は、但し人空を得て法空を得ず、次根の人と爲すなり。三には譬喩と、訶梨との流は、具に二空を得、上根の人と爲すなり。空の義に約すれば淺深あり。則ち毘曇を小乗の劣と爲し、成實をば小の内の勝と爲すなり。問ふ、「釋論」に云はく、「佛滅度の後に分ちて二分と爲す。一には但人空を信じて、法空を信ぜず。二は俱に人法二空を信ず」といへり。但し應に二のみ有るべし。何んぞ三を分つことを得んや。」答ふ、「犢子は眞觀に入るが故

【答ふ云云】 入観しては、我なく、出観しては我ありと見るなり。

【問ふ三論云云】 五に前後問答。

【問ふ若し云云】 六に著述問答。

【保冥】 保執冥昧の意。

【問ふ有人云云】 七に過失問答。

【驛論】 驛は駄驢即ち車馬のこと、今成實論は大小論の中間論なるべきをいふ。

【九】 大段第四に大執を呵す。

【満字と稱す】 毘伽羅論の文字の具足するに名く、今

に、則ち我空を見る、俗諦に出づれば、別に人體有りといふ。龍樹は其入観の義邊に約するが故に、但し二に分つなり。』問ふ、『三論には外道と毘曇とを斥すること、斯事爾るべし。而るに龍樹は前に興り、訶梨は後出でたり、時節遙に隔れり、何に由りてか相破するや。』答ふ、『俱に執著をして、即便ち破を被らしむ。何んぞ前後を論ぜんや。若し前の論は後の迷を破せずといはば、亦應に古の方は今の病を治せざるべし。扁鵲が術も末世には益無けん。』問ふ、『若し法勝と訶梨とは、小論を著して、以て三藏を通じ、馬鳴と龍樹とは、大教を作りて、以て方等を弘む。巨細流を分てり、何んぞ相破することを俟たん。』答ふ、『佛の小乘を説くことは、本大を詮せんが爲なり、保冥の徒は、指を守りて月を忘れたり。經に自ら之を斥せり、故に論主は佛に依れり。』問ふ、『有人の言はく、『成實論』は大を探りて小を釋す』と。此に何んの過か有る。』答ふ、『上に已に之を明せり、必ず此迷有り。今當に更に述ぶべし。大を探りて小を釋せば、則ち小にも大にも收まらず、進みては自牛を馳せず、退きては羊鹿に駕することを失ふ。驛論の言、之を驗すこと久し。』
大執を呵する第四。初には宗を立て、次には破斥す。有る大乘師の曰はく、四衛三玄をば、並に外教と爲す、毘曇と成實とは、蓋し是れ小乘なり。理を明すこと周からず、文に在りて足らず。既に大乘を障ふ、宜しく須らく破すべし。自に方等の教示は衆聖軌轍なり。教をば満字と稱し、理をば無餘と曰ふ。之を信すれば、則ち福を獲ること無邊なり、毀謗すれば莫大の罪を招く。但し須らく甘露を伏膺し、法橋を頂戴すべし。破すべからず。問

は了義究竟の大乗教をいふ。

【夜光】寶珠の名隋侯の思を知りて蛇來りて授くといふ。

【五時と言ふは云】以下、別して明すに、五時を辨じ、初に慧觀の判教を示す。

【三假】一、因成假。二、相續假。三、相待假。【四忘】四句を忘絶する意。【絶す】二に執を破す。

ふ、「必ず是れ夜光ならば、宜しく應に頂受すべし。正に恐くは多く偽寶を雜へたり、須らく之を陶汰すべし。若し瑕無しと謂はば、其要を陳ぶへし。」答ふ、「大乘は博奥なり、具に明すべからず、其樞鍵を統ぶれば、略して二意を標す。一には教を辨するに、五時を出づ。二には凡を隔つることは、宗二諦に歸す。五時と言ふは、昔涅槃初て江左に度る。宋の道場寺の沙門慧觀、仍て經序を製す、略して佛教を判するに、凡そ二科有り。一には頓教。即ち華嚴の流なり。但し菩薩の爲に、具足して理を顯す。二には始鹿苑より終り、鶴林に競るまで、淺より深に至る、之を漸教と謂ふ。漸教の内に於て、開いて五時と爲す。一には三乘別教なり。聲聞の人の爲には、四諦を説き、辟支佛の爲には、十二因縁を演説し、大乘の人の爲には、六度を明す。行因各別なれば、得果不同なり。謂はく、三乘の別教なり。二には波若は通じて三機を化す。謂はく、三乘通教なり。三には「淨名」と「思益」とは、菩薩を讚揚して、聲聞を抑挫す。謂はく、抑揚教なり。四には「法華」は彼三乘を會して、同じく一極に歸す。謂はく同歸教なり。五には涅槃をば常住教と名く。五時より已後、復改易すと雖も、屬して其間に在り、教は五時なりと雖も、二諦を出でず。三假を俗と爲し、四忘を眞と爲す。彼四忘に會ふが故に、三乘の賢聖有り。

執を破する第二。前には五時を責め、次には二諦を難ぜん。問ふ「既に五時有り、云何が大小を分つや。」答ふ、「初の一をば小と爲し、後の四をば大と爲す。」問ふ、「道理として大乘有りとや爲ん、大無しとや爲ん。如し其れ大有らば、則ち是れ有の見なり、若し大

【次に五時云云】
以下、別して五時
を難ず。

【大品經】 無作品
に出づ。

【法華經】 譬喻品
に出づ。

【涅槃經】 第十四

【智度論】 第一百
卷に出づ。

【地持論】 第三に
出づ。

【正觀論】 觀因緣
品の文。

無しと言はば、何んの所立かある。又若し大有りて小に異すと謂はば、則ち小有りて大に異しなんぬ、名けて二見と爲す。『大品』に云はく、「諸の二有る者は、道無く果無し」と。

涅槃に云はく、「明と無明と、愚なる者は二と謂へり」と。又若し實に大乘有らば、有所得と名くべし。有所得の者は魔の眷屬と爲す、佛の弟子に非ず。又有所得の者は、不動不出にして、乘の義有ること無し、名けて乗と爲さず。又大乗の宗は、永く生死を斷ずるを、

名けて斷見と爲す。涅槃は是れ常なるは、即ち是れ常見なり。乃ち斷常と爲す、何の大か之れ有らん。次に五時を難ぜん。前には總じて難し、次には別して責めん。難じて曰はく、

但し應に大小二教を立つべし、五時を制すべからず。略して三經三論を引いて、之を證せん。『大品經』に云はく、「諸の天子歎じて曰はく、我閻浮に於て、第二の法輪の轉なるを見

る」と。龍樹釋して云はく、「鹿苑に已に小輪を轉じ、今復大法輪を轉ず」と。『法華經』に云はく、「昔波羅捺に於て四諦を轉じ、今靈鷲山に在りて、一乘を説く」と。『涅槃經』に云はく、「昔鹿林に於て小を轉じ、今雙樹に於て大を説く」と。故に知んぬ、教は唯二門にし

て、五時無しといふことを。『智度論』に云はく、「佛法に二有り、一には三藏、二には大乘藏なり」と。『地持論』に云はく、「十一部經をば、聲聞藏と名け、方等大乘をば、菩薩藏と

名く」と。『正觀論』に云はく、「前には聲聞の爲に生滅の法を説き、次には菩薩の爲に、無生滅の法を説く」と。經論を以て之を驗するに、唯二藏有りて五時無し。問ふ、「若し乃

ち皆是れ菩薩藏ならば、華嚴と般若、法華と涅槃との此四は、何の異かある。』答ふ、「須

【次に別して云云】次に別して五時を責む。

【成實】 見一諦品の文。

【大乘】 今は瓔珞經を指す。釋論 智度論第四十三卷の文。

【般若に二種】一は觀照般若は菩薩に限り、二に實相般若は、兼ねて三乘に通ずといふ。

らく四句を識るべし。衆經煥然たり。一には但菩薩を教へて、聲聞を化せず。謂はく、『華嚴經』なり。二には但聲聞を化して、菩薩を教へず。謂はく、三藏教なり。三には顯には菩薩を教へ、密には二乘を化す。『大品』以上『法華』の前の諸の大乗教なり。小乗の人に命じて、大法を説かしむるは、謂はく、顯に菩薩を教へ、密に此法を示し、以て己が任と爲す。窮子に財を付するが如きは、謂はく、密に聲聞を化するなり。四には顯に聲聞を教へ、顯に菩薩を教ふ。法華の教なり。菩薩聞是法疑網皆已除といふは、菩薩を化するなり。千二百羅漢悉亦當作佛といふは、二乘を化するなり。四句の中には、三義をば菩薩藏の内に屬して之を聞き、但二乘を化するをば、三藏教と爲す。

次に別して五時を難す。問ふ、『若し五時を立つれば、何の過か有る。』答ふ、『五時の説は、但し文無きのに非ず、亦復理を害す。若し第一を、三乘別教と名くと言はば、是義然らず。毘曇の宗に依らば、三乘は則ち同じく四諦を見、然して後に道を得といふ。成實の義に就いていはば、但一滅を會して、方に乃ち聖を成す。大乘の宗に據らば、同じく無生に契うて、然して後に凡を隔つ、是れ則ち初教も亦通す。何を以てか別と言はん。次に『大品』は是れ、三乘通教と云ふ、是れ亦然らず。釋論に云はく、『般若は二乘に屬せず、但し菩薩に屬す』といへり。若し『大品』は是れ、三乘通教ならば、則ち通に屬すべし、何が故に、二乘に屬せざる。問ふ、『若し釋論に依りて、般若は但し菩薩に屬すと明さば、經に在りて何が故に、三乘同じく般若を學せよと勸むるや。』答ふ、『般若に二種有り。

【二種の説】 共と不共の一。
【次に淨名云云】 次に抑揚を破す。
【小品】 魔事品の文。

【次に法華云云】 次に同歸を破す。
【天親の論】 天親菩薩の法華經論。
【七處佛性の文】 大乘玄論、法華玄論によれば、方便品、譬喻品、不輕法師品に亘りて佛性を明すと云へり。
【常に涅槃云云】 常に常住を破して涅槃の體を示す。
【涅槃を論ぜば云云】 涅槃經第二十、第二十三、第二十七に廣く説く之を見るべし。

一には摩訶般若、此には大慧と云ふ。蓋し是れ菩薩の所得なり。故に二乘に屬せず。若し實相の境を以て、名けて般若と爲せば、則ち三乘同じく觀ず、故に三乘を勸めて、並に之を學せしむ。經師は二種の説を體らず、便ち般若は是れ三乘通教なりと謂ふ。次に『淨名』は是れ、抑揚教と云はば、是れ亦然らず。『小品』には二乘を呵して癡狗と爲し、『淨名』には聲聞を貶して敗根と爲す、小を挫くこと既に齊しく、大を揚ぐることにならず、何んが『小品』を以て、通教と爲し、『淨名』をもつて、抑揚と爲すことを得ん。次に『法華』を同歸と爲すこと、應に疑ふ所無かるべし。但し五時の説に在りて、同歸を辨ずと雖も、未だ常住を明さず。而るに天親の『論』に、『法華』の初分を釋するには、七處に佛性の文有り、後段の壽量品を解するには、三身の説を辨ぜり。斯れ乃ち究竟無餘なり、不了の教と爲すと謂ふべからず。次に『涅槃』を常住教と爲すといふは、然るに常と無常と、皆是れ對治の用門なり。若し涅槃を論ずれば、體は百非を絶し、理は四句を超えたり。舊宗は但用門を得て、未だ其體を識らず、故に亦旨を失するなり。

次に二諦を難ぜん。二諦を迷失するに、凡そ三人有り。一には毘曇は、定性の有を執して假有に迷ふ、故に世諦を失す、亦假有は宛然として所有無しと知らず、復一の眞空を失す。二には大乘を學する者をは、方廣道人と名く、邪空を執して假有を知らず、故に世諦を失す。既に邪空を執して、正宗に迷ふをもつて、亦眞を喪ふ。三には即ち世に行はるる所、具に二諦を知ると雖も、或は一體と言ひ、或は二體と言ふ、二を立つること成ぜざる

【次に二諦云云】別して二諦を離ず【定性の有】三世實有法體恒有と立つるをいふ。

【二】以上、破邪竟りて、本宗の正義を顯すなり。

【人正と云ふは云云】初に人正を明すに、龍樹を以て正師とす【楞伽經】魏譯本第九卷の文。

をもつて、復眞俗を喪ふなり。問ふ、「眞俗一體といふは、此に何の過有りや。」答ふ、「若し俗と眞との眞ならば、眞も俗も亦眞なるべし。若し眞と俗との俗ならば、俗も眞も亦俗なるべし。若し眞は眞にして、俗は眞ならずんば、則ち俗と眞と異なるべし。若し俗は俗にして眞は俗ならずんば、則ち眞と俗と異になんぬ、故に二途並に塞ぎて、一體成ぜず。」問ふ、「一既に過有らば、異は應に咎無るべしや。」答ふ、「經に云はく、「色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり」と。若し各體なりと言はば、相即すること便ち壞しぬ。若し相即有らば、便ち二體成ぜず。故に進退は通すること無くして、異の義亦屈しぬ。然るに五時立せず、眞俗又傾きぬ、大乘の宗、言將に何か寄せんや。」

【二】顯正第二 上より已來、外道、毘曇、成實、大乘を破す。此より已後は前の四宗の、三論を斥することを序ぶ。故に其邪難を通じて、正理を顯明せん。上に既に過く四宗を斥す、時に於て群難競ひ起りて、咸く疑ふ。龍樹は是れ正師に非ず、所造の『論』は、應に邪法と爲すべし、是故に此章に、次に正義を顯すことを明す。正義は多しと雖も、略して二種を標せん。一には人正を明し、次には法正を顯さん。人正と言ふは、『楞伽經』に、大慧菩薩問ふ、「世尊滅度の後、是法をば何の人か持たん。」と。佛偈を説いて答ふらく、「我が滅度の後に於て、南天大國の中に、大徳の比丘有るべし、龍樹菩薩と名く、初歡喜地に住して、人の爲に大乘を説いて、能く有無の見を破し、安養國に往生せん。」と。次に『摩耶經』に云はく、「摩耶、阿難に問うて曰はく、「佛滅度の後、何の人か法を持たん。阿難答へて曰

【優婆掘多】（一）
Epta 優婆掘多と
もいふ、付法藏の
第五師、佛滅二百
年阿育王時代に
出づ。

【二】法正を明す
に、般若を以て正
とす。
【百梁】漢の武帝
の栢梁臺のこと、

はく、「如來の正法は五百年なり。第一百年には優婆掘多說法教化して、正法住持せん。次の二百年には、尸羅難陀比丘、闍浮提に於て、十億の人を度せん。次の三百年には、青蓮華眼比丘、說法教化して、半億の人を度せん。次の四百年の間には、半口比丘、法要を演說して、一萬人を度せん。第五百年には、寶天比丘二萬人を度せん。八萬の衆生、菩提心を發して、正法便ち滅す。六百年の間には、九十六種の邪見競ひ興りて、佛法を破滅せんと。馬鳴比丘は此外道を摧くべし。七百年の間には、一の比丘有り、名けて龍樹と曰ふ。善巧をもつて、法を説き、正法の炬を燃して、邪見の幢を滅す」と。大小乘の經を尋ねるに、親く龍樹の、邪を破し正を顯すことを記せり。今内外並に呵し大小俱に斥す、何の疑ふ所かあらんや。又馬鳴龍樹をば、佛、誠記する有れども、尙復疑を生ぜば、法勝、訶梨は、經に印する所無し、云何が輒ち受けんや。問ふ、「法勝は乃ち、未だ誠文を見ず、訶梨は亦明據有り。『阿含經』に云はく、「實をば四諦と名く、是故に比丘は、當に四諦を成すべし」といへり。佛、此勅を垂れて、懸に鑿すること有る有り。茲の像末に違びて、允に訶梨に屬す。此法を成ぜんが爲の故に、斯論を造れり。紘宗斯の如し、豈虛構ならんや。』答ふ、『蓋し是れ通じて像末を指せり。豈別して訶梨を主とせんや。故に所據に非ざるなり。』法正を顯す第一。問ふ、「龍樹の著述、部類甚だ多し。『三論』は偏に空にして、究竟に非ざるに似たり。』答ふ、『僧叡昔、什公の門下に在りて、翻譯の宗爲り、其論の序に云はく、夫れ百梁の構興るときは、則ち茅茨の仄陋を鄙む。斯論の紘博なるを觀るときは、

栢木を梁とすと。また梁に百數あり故に名くともいへり。
【百梁と歸む】栢梁の大臺構へらるれば、門外の草庵を歸む。

【問ふ…所ぞや】破斥の細くんば、此論の宗旨は非大非小、亦内外にも非ずと、然らば所據これいかにん。
【正觀生ぜず】無心の妙慧生ぜずの意。

【苦輪】苦樂捨の三苦、廻轉して息まず。
【靈府】中道佛性をいふ。恒沙の性功徳有ること、府の一切の財物を攝聚せるに比す。
【味道】道を好むをいふ。

則ち偏悟の鄙倍を知る」といへり。故に偏に小乘に主として、正は此論に歸す。又前に云ふが如し。天竺の十六大國は、方八千里、向化の緣有りて、並に委誠を爲して、龍樹をば無相佛と爲して、敢へて學者に預るの徒、斯論を翫味して、以て喉衿と爲さざる無し。若し是れ偏空ならば、豈諸國の爲に、重んぜられんや。又羅什は本小乘を執せしかども、此論に因りて、轍を正觀に廻せり。厥後衆師は斯文に藉りて迷を曉めたり、此を以て之を詳かにするに、蓋し是れ究竟無餘の説なり。問ふ、『若し内外並に呵し、大小俱に斥せば、此論の宗旨は、何の依據する所ぞや。』答ふ、『若し心に内外を存じ、情を大小に寄せば、則ち偏邪に墮在し、正理を失ふ。既に正理を失ふときは、則ち正觀生ぜず。若し正觀生ぜざれば、則ち斷常滅せず。若し斷常滅せざれば、則ち苦輪常に運る。内外並に冥し大小俱に寂なるを以て、始めて正理と名く。斯正理を悟らば、則ち正觀を發生す。正觀若し生ずれば、則ち戲論斯に滅す。戲論斯に滅すれば、則ち苦輪便ち壞す。三論の大宗、其意此の若し。蓋し乃ち衆教の旨歸を總ね、群聖の靈府を統ぶ。味道の流、豈斯趣に栖憑せざらんや。』問ふ、『若し内外は並に除き、大小俱に斥せば、乃ち斷見に爲んぬ、何んぞ正宗と名けんや。』答ふ、『既に内外並に冥すれば、則ち斷常斯に寂なり。二邊既に捨つ、寧ろ正宗に非ずや。』難じて曰はく、『夫れ斷有り常有るが故に、之を名けて有と爲し、斷無く常無き、之を目けて無と爲す。既に其れ、是れ無ならば、何に由りてか斷を離れん。』答ふ、『既に斷常斯に寂なれば、則ち有無等く皆離れぬ、更に復無に染すと謂ふべからず。』

【儒墨】孔子と墨翟をいふ。

【夢虎】善見律十明に、四種の夢を明す。四大不和合は夢にして、これ虚にして實にあらず。

【難じて曰はく、若し是無く云云】破邪顯正するに、初に追章問答【篇を命じて】章目を名くる意。【難じて曰はく、既に邪の云云】二に反捨問答。【難じて曰はく、若し邪正云云】三に空見問答。

難じて曰はく、『此通有り」と雖も、終に難を免れず。夫れ有り無有る、之を名けて有と爲し、有無く無無き、始て是れ大無なり、既に其れ無に墮しぬ、何に由りてか斷を離れん。』答ふ、『本有病に對す。是故に無と説く。有無若し消しぬれば、空樂も亦廢す。則ち知んぬ、聖道は未だ曾て有無ならず、何んぞ滯る所有らんや。』難じて曰はく、『是れ有是れ無なるをば、名けて兩是と爲し、非有非無をば、名けて兩非と爲す。既に是非に墮しぬ、還りて儒墨に同じ。』答ふ、『本二是に非ず、故に雙非有り。二是れ既に亡すれば、雙非も亦息みぬ。故に知んぬ、是にも非ず亦復非にも非ず。』難じて曰はく、『是にも非ず非にも非ずんば、還つて二非に墮す、何に由りてか非を免れん。』答ふ、『二是は夢虎を生じ、兩非は還りて空華を見る。則ち知んぬ、本より是とする所無し、今亦非とすること無し。』難じて曰はく、『若し是無く非無くんば、亦邪にも非ず正にも非ず。何が故に篇章を建てて、破邪顯正と稱するや。』答ふ、『夫れ非有り是有る、此を則ち邪と爲す、是も無く非も無きを、乃ち名けて正と爲す。所以に篇を命じて破邪顯正を辨するなり。』難じて曰はく、『既に邪の破すべきこと有り、正の顯すべきこと有るは、則ち心に取捨を存するなり。何んぞ無依と謂はん。』答ふ、『邪を息めんが爲に強て名けて正と爲す。邪に在りて既に息みぬれば、則ち正も亦留まらず、故に心に所著無し。』難じて曰はく、『若し邪正並に冥せば、豈空見に非ずや。』答ふ、『正觀論』に云はく、『大聖の空法を説くことは、諸兒を離れしめんが爲の故なり。若し復空有りと見るは、諸佛の化せざる所なり。水は能く火を滅するが如

【難じて曰はく既に空病云云】四に離化問答。

【問ふ心に…爲す】以下、無依無著を顯すに二、初に試驗問答。

【衆生を引導し離れしむ】權方便を以て執着を離れしむ。

【淨名に云はく】維摩經佛國品の寶積嘆佛の偈。

【世間に著し入り】出入自在にして、空に乖かざるをいふ。

【四依】人天の依止となるに四人あり。一は三賢位四善根を修する人、二は預流果、一來果の人、三は不還果の人、四は阿羅漢の人。

【開士】法を以て開導する士をいふ。

し。今水より還りて火を出さば、當に何を用ひてか滅すべき。醫當を火と爲す、空能く之を滅すべし。若し復空に著せば、即ち藥の滅すべき無し。難じて曰はく、『既に空病に著しぬ、何が故に有藥を服せずして、化を息むと言ふや。』答ふ、『若し有を以て化せば、還りて復有に滞りなん、乃至言を亡するも、便ち復斷に著しなん。此の如きの流、何に由りてか化すべき。』問ふ、『心に所著有れば、何の過か有らん。』答ふ、『若し所著有れば、便ち所縛有り。生老病死憂悲苦惱を解脱することを得ず。故に『法華』に云はく、『我無數の方便を以て、衆生を引導して、諸著を離れしむ』と。『淨名』に云はく、『世間に著せざること、蓮華の如し。常に善く空寂の行に入りて、諸法の相に達すること畢竟無し。如空無所依を稽首す』と。三世の諸佛は、六道の衆生の心に、所著有る爲の故に、出世して經を説き、四依の開士は、大小の學人の心に、所依有るが爲の故に、出世して『論』を造る。故に有依有得をば、生死の本と爲し、無住無著をば經論の大宗と爲す。』難じて曰はく、『若し内外並に冥せば、佛經に何が故に大小兩教を説くや。』答ふ、『法華』に云はく、『是法は示すべからず、言辭の相寂滅せり』と。如來は名相の中に於て、強ひて名相をもつて説けり、故に大小の教門有り。衆生をして、此名相に因りて、無名相を悟らしめんと欲す。而るに封敎の徒、大小を説くを聞いて、更に染著を生ず。是故に『論』を造りて、斯執情を破して、還りて本來寂滅なるを了悟せしむ、故に四依の出世は、佛の如しと爲すなり。』問ふ、『此論をば名けて正觀と爲す、正に幾種有りや。』答ふ、『天に兩日無く、土に二王無

【難じて曰はく若し内外云云】二に施設問答。【法華】方便品初の偈頌の文。【問ふ此論をば云云】以下論名に寄せて顯す。【華嚴】經の第六菩薩明難品の文。

【正に三種】初二は用正、第三は體正。

し教に多門有れども、理は唯一正なり。是故に上來に四宗を破斥す。『華嚴』に云はく、「文殊の法は常に爾なり、法王は唯一法なり、一切無畏の人、一道より生死を出づ」と。但衆生を出處せんと欲して、無名相の法に於て強ひて名相をもつて説く。稟學の徒をして、因りて悟を得せしめん、故に二の正を聞く。一には體正、二には用正なり。非眞非俗を名けて體正と爲し、眞と俗とを名けて、用正と爲す。然る所以は、諸法の實相は言亡慮絶せり、未だ會て眞俗ならず、故に之を名けて體と爲す。諸の偏邪を絶す、之を名けて正と爲す、故に體正と言ふ。言ふ所の用正とは、體名言を絶すれば、物悟るに由無し。有無に非ずと雖も、強ひて眞俗と説く、故に名けて用と爲す。此眞と俗と亦偏邪にあらず、之を名けて正と爲す、故に用正と名くるなり。』問ふ、『既に眞俗と云ふ、則ち是れ二邊なり。何をか名けて正と爲さん。』答ふ、『因縁假有の如き、之を名けて俗と爲す。然れども假有なれば其れ定有と言ふべからず、假有なれば其れ定無と言ふべからず。此假有は二邊を遠離す、故に名けて正と爲す。俗有既に爾なり、眞無も亦爾なり。假無は定無なるべからず、假無は定有なるべからず、二邊を遠離するが故に之を名けて正と爲す。』問ふ、『何が故に體用の二正を辨するや。』答ふ、『像末は鈍根にして多く偏邪に墮せり、四依出世して佛法を匡正す、故に用正を明す。既に正教を識りて、便ち正理を悟るときは、則ち體正有り。但し正に三種有り。一には偏病に對す、之を名けて正と爲し、對偏正と名く。二には偏を盡淨せる、之を名けて正と爲す、謂はく盡偏正なり。三には偏病既に去りぬれば、正も亦留らず。

【正に在りて云云】
上は正觀論の正に就いて顯し、今は兼ねて觀論に約して明す。

【體論】大乘の論如實の説なり。
【用論】小乗の論方便説なり。

【三】以て別して衆品を釋するに、初に經論の相資を明す。これ心源に迷ふが故に經あり經に迷ふが故に論あり、兩者互に資助する所以を説く。

【大品經】夢行品内外並に冥す。涅槃と生死共に空なるをいふ。

【緣觀俱に寂す】生佛共に空なるをいふ。

【大品に云はく諸法云云】通學品の文。

【然るに經に通別有り】以下、相資に約するに、初に

偏に非ず正に非ず、知らず何を以てか之を美ん。強ひて嘆じて正と爲す、謂はく絕對正なり。正に在りて既に然り、觀論も亦爾なり。體正に因りて正觀を發生するを、名けて體觀と爲す。二諦の用に藉りて、二諦の觀を生ずるを、名けて用觀と爲す、故に觀にも二を具するなり。觀は心に辨じて、衆生の爲の故に、實の如く體を説くを、名けて體論と爲す。若し用を説くをば、之を名けて用論と爲す、故に『論』にも二を具するなり。正既に對偏と盡偏と絶待と有り、觀論も亦然なり、前に類して知るべし。

次に經論相資を明さば、『大品經』に云はく、「生死の道長く、衆生の性多しと雖も、菩薩は應に是の如く正に憶念すべし。生死の邊は虚空の如し、衆生性の邊も亦虚空の如し。此中には生死の往來無く、亦解脱する者も無し」と。然るに既に生死無くして、亦涅槃無し。則ち知んぬ、亦衆生及び佛無し。寧ろ經と論と有らんや、故に内外並に冥し、緣觀俱に寂す。然るに生死と涅槃とに非ずと雖も、而も衆生に於て、生死を成す、故に『大品』に云はく、「諸法は無所有なれども、是の如く有なり。既に衆生有るが故に諸佛有り、既に諸佛有れば、便ち教門有り。既に諸佛と教門と有れば、則ち菩薩の『論』有り。諸佛は、衆生の道を失するが爲に、是故に經を説き、菩薩は、衆生の經に迷ふが爲に、是故に『論』を造れり。然るに經に通別有り、論に在りても亦爾なり。言ふ所の經の通とは、通じて衆生の顛倒を息めんが爲に、通じて道門を聞顯せんが爲なり。言ふ所の『論』の通とは、諸の聖弟子の、一切の『論』を造ることは、亦通じて迷教の病を息めて、正道を申明せんが

通別の釋なり。

【二】次に經論の能所の絞絡を明す

【今昔の兩教】法華を今といひ、華嚴の菩薩は華嚴の機迂廻の人は法華の機なり。

爲なり。言ふ所の經の別とは、大小の二縁に赴きて、大小の兩教を説く。言ふ所の『論』の別とは、大小の兩迷を破せんが爲に、大小の兩教を申ぶ、故に大小の二論有るなり。然るに經論の中に就いて、具に能所の義有り。經は二智を以て能説と爲し、二諦を所説と爲す。論は二慧を以て能説と爲し、言教を所説と爲す。斯れ則ち經論、各能所有るなり。

次に經論の能所の絞絡を明すに、四句の不同有り。一には經の能を論の所と爲し、二には經の所を論の能と爲し、三には論の能を經の所と爲し、四には論の所を經の能と爲す。經の能を論の所と爲すとは、如來の二智は即ち是れ、論主の所悟なり。故に『法華』に明さく、「今昔の兩教は、直往の菩薩及び廻小向大の人をして、並に佛慧に悟入せしめんが爲なり」と。故に『涌出品』に云はく、「是諸の衆生は、始て我身を見て、我所説を聞いて、即便ち信受して、如來の慧に入りき」と。此は昔の教は直往の菩薩をして、佛慧に入らしめんが爲なることを明すなり。次に云はく、「先より修習して小乘を學せる者をば除く。我今亦是經を聞いて、佛慧に入ることを得せしめん」と。此は今の教の廻小の人をして、佛慧に入ることとを明す。故に今昔の兩教は、同じく佛慧に入らしめんが爲なることを明す。則ち知んぬ、佛慧は是れ所悟なることを。次に經の所を論の能と爲すことを明すとは、經の所は即ち是れ二諦なり、能く論主の二慧を發生するが故なり。佛の二諦を能生と爲し、論主の二慧を所生と爲すなり。次に論の能を經の所と爲すことを明すとは、論主の二慧は經に由りて發生するなり。次に論の所を經の能と爲すことを明すとは、論主の言教は、能

【問ふ云云】以下問答して、如上の意を明かにす。

【五】次に造論の縁起を明す。

く佛の二諦を申ふればなり。次の四句を會して、二句と爲す。經は若は能、若は所、並に是れ能資なり。論は若は能、若は所、皆是れ所資なり。又論は若は能、若は所、悉く能申と爲す。經は若は能、若は所、悉く是れ所申と爲す、故に合して一能一所と成すなり。次に一句を泯じて以て無句に歸す。能を以て所と爲せば、則ち能は定まれる能に非ず。所を以て能と爲せば、則ち所は定まれる所に非ず。能は定まれる能に非ざるを以て、是れ則ち能に非ず。所は定まれる所に非ざれば、是れ則ち所に非ず。故に能に非ず所に非ず、經にも非ず論にも非ず、佛にも非ず菩薩にも非ず。知らず、何を以てか之を目けん。故に正法を稱して強ひて中實と名くるなり。問ふ、「能は定まれる能に非ざれば、是れ則ち能に非ず、所は定まれる所に非ざれば、是れ則ち所に非ずと、何の文に出でたるや。」答ふ、「中論」の然可燃品に云はく、「若し法の因待して成せば、是法は還りて待を成すべし。今則ち因待無ければ、亦所成の法無し」と。即ち其證なり。

次に別して、造論の縁起を明すといふは、然も『論』を造る所以は、上に明す所の如し。如來は道を失ふが爲の故に經を説き、論主は經に迷へるが爲の故に、『論』を造る。道を失ふが爲の故に、經を説く、此は是れ根本の失なり。論主は經に迷ふが爲の故に、論を造る、此は是れ枝末の失なり。又、佛は道を失ふ者の爲に、經を説く、此失は謂はく、一往の失なり。論主は經に迷ふが爲の故に、『論』を造る、此失は即ち失の中に更に失を起す。然る所以は、其れ道に迷へるを以て、此は是れ一の失なり。如來、經を説くは、道に入らしめ

【問ふ云云】次に
 問答して悉く問す
 初に二部を編し、
 次に前段を評し、
 後に五百を明す。

【進業の...】
 【進業】は進業
 たり更上座とぞ
 もの意。

【大衆部】窟内の
 制便を上座部とぞ
 るに對し、窟外の
 結業を大衆部とい
 ふ。然るに前段百
 年、大天凡を出て
 て、前段を編し、
 後段上座部するに
 至れり。

【進業】Tanna
 次又は進業する時
 の作法。
 【進業】Tanna
 進業として大天
 といふ。

【三進業】於大、
 於寺、於阿羅漢、

んが爲なり。而るに復經に迷へるが故に、是れ失の中の失なり。一往の失といふは、斷はく
 利根の人なり。經を聞いて斷ち悟る。失の中の失とは、斷はく、純根の人なり。問ふ一何
 等か是れ經に迷へるの人なる。答ふ、一即ち是れ諸部の異執なり。一諸部の異執と言ふは、
 或は二部、或は五部、或は十八部、或は二十部、或は五百部なり。二部と言ふは、如來二
 月十五日に、涅槃に入り、諸の聖弟子は四月十五日に王舍城祇園山の中に於て、三藏
 を結集す。爾時に、即ち二部の名字有り。一は上座部なり。謂はく、進業を上座と爲す、
 進業の上なること、陳如は一更なれども、佛は法を以て、進業に付屬せるが爲に、上座部
 と名くるなり。迦葉の稱する所は、但五百人有り。一智度論に依らば、則ち千人有り。二
 には大衆部。即ち窟外の大衆なり、乃ち萬數有り。婆伽波羅漢を主と爲す、此には派出と
 云ふ、常に苦の衆生を遊みて、深隨つればなり。即ち五比丘の中の一人なり。而るに、年
 迦葉より大なり、凡その大衆を教授す。二衆有る所以は、迦葉は、五百の羅漢有りて、前
 に窟内に入りて、三藏を結集す、後に多の人來りて、三藏を結集せんとす。迦葉に之を
 許さず。二の因縁有り。一には五百は背離明の人なるが故に。二には已に竭盡し竟るが故
 に。一智度論に依らば、阿闍世王は、但千人の食を設く、故に諸人來れども得ずと。是より
 り以て、佛滅後の後、百一十六年に至りては、但二部の名字のみ有りて、未だ其數有らざる
 百一十六年の外に、窟主の兒有り、摩訶提婆と名く、端正にして、三進業を行きて
 後に、佛法に入る。凡そ二事有り。一には諸の大衆部を取りて、三藏の中に於て之を

【布薩】具さには布沙他、布嚩他等といひ、善住、善宿、長養と譯す。戒を持ち、善法を長養せしむるをいふ。

【三解脱門】空門、無願門、無相門。

【身子】舍利弗。

釋す。諸の阿羅漢、法藏を結集せし時に、已に此義を簡除す。而るに大衆部は此義を用ひ、上座部は之を用ひず。爾るに因りて諍を起して、遂に二部を成す。二には摩訶提婆、自ら偈を作りて言はく、「餘人衣を染汚す、無明有り疑有り他度す、聖道は言に顯はる、是れ諸佛の正教なり」と。此一偈を以て、戒の後に安置して、布薩誦戒し竟りて、亦此一偈を誦す。此偈に五事有り。一には餘人染汚衣とは、提婆不淨を出して衣を汚す。而るに弟子を誑りて言はく、「我は是れ阿羅漢なり、實には不淨無し。但し是れ天魔如、不淨を以て羅漢の衣を汚せり」と、故に餘人染汚衣と云ふ。然も此一語に虚有り實有り。其れ實には是れ凡夫なり、弟子誑りて上の如き事を記す、是故に虚と爲す。魔女は實に能く、不淨を以て羅漢の衣を汚す、是故に實と爲す。其衆は其所説を諍ふ、或は虚、或は實なりと。故に二部を分つ。二には無明と云ふは、然も羅漢は、乃ち三界受生の無明無し、而も無知習氣の無明有り、故に無明と云ふ。時の衆、或は云はく、「羅漢に無明有り」と。或は言はく、「無明無し」と。此に因りて諍を起す、故に二部を分つ。三には疑と云ふは、須陀洹果は、乃ち三解脱門に於て疑無けれども、而も外事に於て疑有りといふ、故に疑と云ふなり。四には他度とは、鈍根の初果は、自ら初果を得と知らず、善知識に問ふ。善知識爲に、三寶四諦を説くに疑無きは、是れ初果の相なり。其自ら觀察して、方に初果を得と知るが故に、他度と云ふ。五には道聖言所顯とは、然も聖道を得るの時、亦言に顯るる有り。身子の、口に偈を誦する時に當りて、即ち初果を得るが如し、故に言所顯と云ふ。時の衆は此五義

【問ふ此二部云云】
次に執の義を述ぶ

【二百年中云云】

以下、別釋するに
初に大衆部を明す
【三部】一説部、
説出世部、灰山住
部。

【阿難等…三藏】

阿難は修多羅藏、
優婆塞は次に毘尼
藏、迦葉は後に阿
毘曇藏を集む。

を諍ひ、或は是、或は非とす。故に二部を成ずるなり。問ふ、「此二部の執、何の義か異なる。」答ふ、「義の異なること乃ち多し、今略して其一を明さん。大衆部は、生死涅槃は皆是れ眞實と執す。一假名なりと執し、上座部は、生死涅槃は皆是れ眞實と執す。」

二百年の中に至りて、大衆部より又三部を出す。時に大衆部は、摩訶提婆が移度に入りて、央崛多羅國に住す。此國は王舍城の北に在り、此部は「華嚴」「般若」等の大乘經を將て、三藏の中に雜へて之を説く。時の人信する者有り、信ぜざる者有り、故に二部を成

ず。信ぜざる者は、唯し言ふ、「阿難等の三師の誦する所の三藏をば、此れ則ち信すべし、三藏より外の諸の大乘經をば、皆信すべからず」と。復、大乘を信する者有るに、三の因縁有り。一には爾時、猶し親く佛の大乘の法を説くを聞く者有り、是故に信すべし。二には自ら道理を思量するに、應に大乘有るべし、是故に信すべし。三には其師を信する

が故に、是故に信すべし。三部と言ふは、一には一説部なり。此部は、生死涅槃は皆是れ假名なりと執す、故に一説と云ふ。二には出世説部。此部の言はく、「世間の法は顛倒從り業を生じ、業より果を生ず、故に是れ不實なり。出世の法は、顛倒從り生ぜず、故に是れ眞實なり」と。三には灰山住部。前の二は義を執するによりて名を受け、此は住處に因りて目と爲す。此山に石有り、灰を作るに堪ゆ。此部彼山、其れ毘曇は、是れ實教なり、經律は爲

れ權説なりと執するが故に、彼經の偈を引いて云はく、「宜きに隨ひて身を覆ひ、宜きに隨ひて飲食し、宜きに隨ひて住處す、疾く煩惱を斷ず」と。宜きに隨ひて身を覆ふとは、三

三論玄義

【三衣】 一、僧伽梨、家會して授戒等の時に着す。二、多羅僧衣、三、安陀會中着衣と譯し、肌着なり。五條を安陀會、七條を多羅僧衣、九條已上を僧伽梨といふ。

【三百年中云云】 二に多聞部を明す

【二百年の中云云】 三に分別部を明す

【阿耨達池】 瞻部洲の中心、香山の南、大雪山の北にあり、周り八百里、八地の菩薩願力を以て化して龍王となり、中に湛む、

衣有るをも佛亦許し、三衣無きをも佛亦許す。宜きに隨ひて飲食すとは、時食をも佛亦許し、非時食をも亦許す。宜きに隨ひて住處すとは、結果住をも亦許し、結果せざるをも亦許す。疾く煩惱を斷ずとは、佛意は但疾く煩惱を斷ぜしめんとなり。此部は甚だ精進すること、餘人に過ぐ、二百年の中に至りて、大衆部の内より、又一部を出せり、多聞部と名く。大衆部は唯淺義を弘めて、深義を棄てたり。佛世に在せし時、仙人有り、佛に值ひて羅漢を得たり。恆に佛に隨ひて、他方及び天上に往き法を聴く。佛涅槃の時其人見えす。雪山に在りて坐禪せり、佛滅度の後二百年中に至りて、雪山より出でて諸の同行を覓む。大衆部は唯淺義を弘めて、深法を知らざるを見る。其人具足して淺深の義を誦す。深義の中に大乗の義有り、成實論は即ち此部より出でたり。時の人、其所説を信する者有り、故に別して一部を成ず、多聞部と名く。二百年の中に於て、大衆部より更に一部を出せり、多聞分別部と名く。佛世に在せし時、大迦旃延は論を造り、佛の「阿含經」を解す。二百年に至りて、大迦旃延は阿耨達池より出でて、更に前の多聞部中の義を分別す。時の人其所説を信する者有るが故に、多聞分別部と云ふ。二百年の滿に於て一外道有り、大天と名く。爾時、摩伽陀國に優婆塞有り。大いに佛法を弘む。諸の外道は利養の爲の故に皆頭を剃りて出家す。便ち賊住の比丘有り、大天は賊住の主と爲す。大天身自ら出家し、所度の弟子は、大天が衆に依りて出家受戒す。爾時、衆人共に斯事を諍ふ。上座部の云はく、「和上は無戒及び破戒なれども、闍梨は戒有り。大衆亦戒有れば、戒を受くるに則ち得す、

清冷なる水は瞻部洲を潤すといふ。(西域記一)

【二百年に滿つ云】二部を明す、初に因由。

【突吉羅罪】戒律中の罪名。四分律には惡作惡説と譯せり。

【大衆部云云】三に結成す。

【次に上座云云】二に上座部を明す
【富樓那】Purna 譯して滿慈子、満願子、満祝子等といふ。説法第一の佛弟子。

戒は大衆従りて得す。大衆の、和上は無戒なりと知り、與共に戒を受けしむる者は、大衆突吉羅罪を得。問ふ、『戒は既に和上従ひ得せず、何が故に和上の名を稱するや。』答ふ、『受戒せしめて後に、和上は弟子を攝録教誨せんと欲するのみ。薩婆多は此解を用ふ。餘部の言はく、「和上は無戒及び破戒なれば、大衆、戒有れども則ち戒を得せず。戒は和上従り得するが故に」と、此評論に因りて、遂に大天を容さず。徒衆は爾るに因りて、別れて山間に住す。此山の間に於て、義を執すること又異れり、故に支提山部、及び北山部有り。佛の得道及び轉法輪の處なり。大衆の處を支提と名く。此處に山有り、支提山と名く。彼山の北に於て別に山有り、北山部と名くるなり。大衆部合別して數ふるなり。或は五、或は七、或は八なり。五部と言ふは、初には一説部、二には出世説部、三には灰山住部なり。此れ初に破れて三を成す。次に多聞部有り、次に多聞分別部有り、故に五部を成す。七部と言ふは、外道に因りて、分れて二部を成す。謂はく、支提山部と及び北山部となり。前の五は内執に因りて起り、後の二は外道に因りて起る、故に七部を成す。八部と言ふは、則ち根本の大衆部を數ふるなり。

次に上座弟子部とは、佛滅度の後、迦葉、三藏を以て三師に付す、修多羅を以ては阿難に付し、毘曇を以ては富樓那に付し、律を以ては優婆離に付す。阿難世を去るとき、修多羅を以て末田地に付す、末田地は舍那婆斯に付し、舍那婆斯は優婆掘多に付す、優婆掘多は富樓那に付し、富樓那は寤者柯に付す、寤者柯は迦旃延尼子に付す。迦葉より寤者柯に

【四韋陀】 *Pañcavedā* (リゲキダ) *Sūtra-vedā* (サーマキダ) *Yajur-vedā* (ヤジニルキダ) *Atharvavedā* (アタルブキダ)。何れも讃歌を集めし婆羅門教の根本聖典。

【五藏】 經、律、論の三藏に、呪藏、菩薩藏を加ふ。

【善藏部】 善藏部と同じ。歳少くして、賢徳を藏するより名くといふ。

【迦留陀夷】 *Kaṭo* *ḍḍin* 譯して起時、黑曜、黒光等といふ、婆羅門種族にして悉達ノ世師、六群比丘の一。

【説度部】 説轉部ともいふ、種子現在に相續すといふ世に流至すといふ故に名けらる。

の曇無徳部なり。二には賢乗部、三には正量弟子部なり、大正量羅漢有り、其れ是が弟子なり、故に正量弟子部と名く。此三人は人に從ひて名を作す。四には密林部と名く、住處に從ひて名を作すなり。三百年に薩婆多部より復一部を出す、正地部と名く。婆羅門有り、是れ國師なり。正地部と名く。善く四韋陀を解す。出家して羅漢を得、四韋陀の好語を取りて、佛經を莊嚴す。義を執ること又異れり。時の人、其所説を信するもの有り、故に別して一部と爲る。三百年の中に、正地部より又一部を出せり、法護部と名く。其本は是れ目連の弟子なり。羅漢を得て恆に目連に隨ひて、色界の中に往きて、所説の法有れば皆能く誦持して、自ら撰して五藏と爲す。三藏は常の如し、四には呪藏、五には菩薩藏なり。其所説を信する者有り、故に別して一部を成するなり。三百年の中に、薩婆多部より又一部を出す、善藏部と名く。迦留陀夷は是れ其文なり。笈多比丘尼は是れ母なり。七歳にして羅漢を得て、佛に值うて法を聞き、皆能く誦持し、佛語を撰集す。次第相對して、外道を破するを、一類と爲す、衆生の煩惱を對治するを、復一類と爲す。時の人其所説を信する者有り、故に別して一部と爲すなり。三百年中に、薩婆多部より又一部を出す、説度部と名く。謂はく、五陰は此世從り度りて後世に至る、治道を得て乃し滅すといふ。亦是説經部と名く。謂はく、唯經藏を正と爲し、餘の二は皆經を成するのみ。上座部より都合して十一部有り、大衆部には七部有り、合して十八部を成す。根本の二部を足して、二十部と爲す。

【而るに…故なり】
上は第二部を明し、
今は第二に前後を
評す。

【文殊師利經】文
殊師利問經二卷、
梁の扶南の三藏僧
伽婆羅譯。大乘の
諸戒、悉曇の字母
小乘二十部分出を
詳にす。
【部執論】部執異
論一卷、世友菩薩
造、陳の眞諦譯す
異部宗輪論と同本
異譯本なり。
【言ふ所の五百云
云】以下第三に五
百部を明す。

而るに薩婆多傳に異世の五師有り、同世の五師有り。異世の五師とは、一には迦葉、二には阿難、三には末田地、四には舍那婆斯、五には優婆掘多なり。此五人は佛法藏を持つること各二十餘年を得て、更に相付屬するを、異世と名くるなり。同世の五師とは、優婆掘多の世に於て、即ち分れて五部を成ず、一時に並び起るを、同世の五師と名く。一には曇無德、二には摩訶僧祇、三には彌沙塞、四には迦葉維、五には犢子部なり。又『大集經』に亦五部を明せり。『文殊師利經』と『部執論』と及び羅什の分別部論と、此三は皆二十部を明す。五部有り、復二十部の不同有る所以は、其始終異執を取るが故に、二十有り。其當世に盛んに行はるるを取るが故に、但五部と説くなり。而るに五部一時に起と言ふは、則ち上の二十部の義と相違すべし。或は言ふべし、見聞各異るが故なりと。

言ふ所の五百部とは、『智度論』に『波若』の信毀品を釋して云はく、『佛滅度の後、五百歳の後に、五百部有り、佛意を知らず。解脱の爲の故に、諸法は決定の相有るを執して、畢竟空を聞いて、刀の心を傷むるが如し。龍樹、提婆は、諸部の異執、佛教の意を失ふが爲の故に、論を造りて迷を正すなり。問ふ、『論主は、並に諸部を破すとや爲ん、亦破せざる有りや。』答ふ、『凡そ四句有り。一には破して取らず。若し是諸部所説の大小乘經に乖きて、自ら義を立つる者をば、則ち破して取らず。故に『智度論』に、迦旃延が弟子を呵して云はく、『三藏に此説無し、摩訶衍の中にも亦此説無し。蓋し是れ諸の論義師自ら是説を作す』と、即ち是れ其事なり。二には取りて破せず。『文殊問經』に云ふが如し、『十

【六】以下、諸部の通別の義を明す

【攝大乘論】二卷 無著造、元魏の佛陀扇多譯。三卷本陳の眞諦譯。
【地持論】又地持論といふ、北涼曇無讖譯。
【十地論】十二卷 天親造、元魏菩提流支譯。華嚴の十地品の釋。

八及び本の二は、皆大乘より出でたり。是も無く亦非も無し。我説く、未來に起るべし」と。
三には亦是は破し亦は取る。諸部の能迷の執情を破して、諸部の所迷の教を收取す。四には破せず取らず。正道門に就いては、未だ會て破有らず、亦取る所無し」と。

次に諸部の通別の義を明す。論に二種有り、一には通論、二には別論なり。若し通じて大小の二迷を破し、通じて大小兩教を中ぶるを、名けて通論と爲す、即ち『中論』定なり。故に前の二十五品は大迷を破して大教を中べ、後の兩品は小迷を破して小教を中ぶ。二には別論とは、別して大小の迷を破し、別して大小の教を中ぶるを、名けて別論と爲す。『攝大乘論』『地持論』等の如きは、謂はく、大乘の通論なり、『十地論』『智度論』等は大乘の別論なり、『成實論』等の如きは、通じて三藏を中ぶるは、謂はく、小乘の通論なり。馬鳴菩薩の師を脇比丘と名く、四阿舍の優婆提舍を造りて別して修多羅藏を釋す。『善見毘婆沙』は別して毘尼藏を釋す。『智度論』に云はく、『八十部の律は八十部毘婆沙之を釋す』『善見律』は別して師子國の要用の十誦律を釋す、舍利弗は別して佛の九分の毘曇を釋す」と。此の如く別して三藏を釋するが故に、是れ小乘の別論なり。三藏の中に就いて復通別有り。若し具に一藏を釋するを名けて通論と爲し、別して一藏の中の一部を釋するを、名けて別論と爲す。問ふ、『中論』は既に通じて大小を釋す、應に大小の通論と名けて、名けて大乘の論と爲すことを得ざるべし。『答ふ、『大小を釋すと雖も、但大を顯さんが爲なるが故に、是れ大乘論なり。然る所以は、初分に大乘を明し、中分に小乘を明し、後分に還りて大乘を

【七】次に衆論の立名不同を明す。【成實論】第三卷【四論】苦（五受陰と煩惱）と、苦滅と苦滅の道（八聖道）。

明すを以ての故に。是義を以ての故に大乘論と名くるのみ。問ふ、『十二門論は是れ何の論ぞや。』答ふ、『是れ大乘通論なり、始終大迷を破して、通じて大教を申ぶるを以てなり。小乘を破して、別して小乘を申ぶること無きが故に、是れ大乘の通論なり。』問ふ、『百論』は復云何。』答ふ、『百論』は通じて大小を障ふるの邪を破し、通じて如来大小の兩正を申ぶるが故に、是れ大小の通論なり。但始終大乘を明さんが爲の故に、大乘の通論に屬するのみ。

次に衆論の立名不同を明す門。衆論に名を立るに、凡そ三種有り。一に法に従ひて名と爲す、『成實論』等の如し。實は謂はく四論の理にして、成は謂はく能成の文なり。故に云はく、『是法を成せんが爲の故に、斯論を造る』と。謂はく、法に従ひて名を立るなり。二に人に従ひて名を立つ、『舍利弗阿毘曇』等の如し。『智度論』に云はく、『犢子道人此毘曇を受持するを、亦犢子毘曇』と名く』と。三に喻に従ひて名を立つ、『甘露味毘曇』等の如し。亦訶梨跋摩の師鳩摩羅陀は、『日出論』等を造るが如し。四論の立名、並に是れ法に従ひて、人に非ず喻に非ず。中に就いて自ら四種を開く。『大智度論』は所釋の經に従ひて名を立つ。大は謂はく摩訶、智は謂はく般若、度は謂はく波羅蜜、論は經を釋する題なり。故に所釋に従ひて名と爲す。『中論』は理實に従ひて名を立つ。『十二門』は言教に従ひて目と爲し、『百論』は偈句に従ひて稱と爲すなり。若し通じて言を爲さば、四論は通じて中道の理實を顯す、並に理に就いて名を立つることを得。四論は同じく言教有り、理實を開通

【八】 以下衆論の旨歸を明す。

【八倒】 凡夫二乘の迷執する八種の顛倒。常樂我淨（凡樂非我非淨）（二乘の四倒）。

【無量義經】 法華三部經の一。德行品、說法品、十功德品の三より成る一卷あり。

【大品】 大品般若のこと、總じて九十品あり、前六十品は般若を明し、後二十四品は方便道を明す。

する、並に教を以て稱と爲すことを得。同じく偈句有る、通じて偈に從ひて名を立つることを得。今互に相開避せんと欲するが故に、四部の差別有り、所以に立名不同なり。

次に衆論の旨歸を明す門。通じて大小乘經を論ずるに、同じく一道を明す、故に無得正觀を以て宗と爲す。但小乘教は正觀猶遠きが故に、四諦教に就いて宗と爲す。大乘は正しく正觀を明すが故に、諸大乘經は、同じく不二の正觀を以て宗と爲す。但方便の用異なるに約するが故に、諸部の差別有り。應説不應説を明すが如し。今昔開會するを名けて法華と爲す。八倒を破斥し常無常を辨する用を名けて涅槃と爲す。不二の正道を論ずるに至りて更に別異無し。經に在りて既に兩り、論に在りても亦然なり。諸部異り有りといへど、同じく不二の正觀を用て宗と爲す。又經論は宗に同ず。佛正觀を説いて經と爲し、論は正觀を申ぶるを論と爲す。經論の用異れども正觀は別無し。故に『無量義經』に云はく、「水は穢を汚ふの義同ずれども、井池に約して異と爲すが如し」と。昔より今に及ぶまで、一切の諸教は同く斷常の病を治し、同く正道を開す。但今昔に約して教用異なるのみ。今四論は用の不同に約するが故に、四宗の差別を辨ず。『智度論』は正しく『大品』を釋す、而して龍樹は『大品』を開いて二道と爲す。前に般若道を明し、次に方便道を明す。此二道は即ち是れ法身の父母なるが故に、『大品』は實慧方便慧を以て宗と爲し、『論』は經の二慧を申べて、還りて二慧を以て宗と爲す。『中論』の如き、二諦を申べて還りて二諦を以て宗と爲すなり。問ふ、『大品』は何が故に前に般若を明し、後に方便を明すや。『答

を以て宗と爲すなり。問ふ、『大品』は何が故に前に般若を明し、後に方便を明すや。『答

【具に二智の中】大乗玄論の二智義の中をいふ。

【中論】 四諦品の文。
【十二門論】 觀性門の文。

【方廣道人】大乗方廣の空理を惡執して、空見に墮する外道。

既に有に涉りて、即ち能く空を鑿ん。具に二智の中に説くが如し。次に『中論』は二諦を以て宗と爲すことを明す。二諦を用て宗と爲す所以は、二諦は是れ佛法の根本なり。如來の自行化他は皆二諦に由る。自行は二諦に由るとは、『瓔珞經』の佛母品に、二諦は能く佛を生ず」と明すが如し、故に二諦は是れ佛母なり。蓋し二智を取りて佛と爲すに、二諦は能く二智を生ず、故に二諦を以て母と爲す。即ち是れ如來の自徳圓滿することは、二諦に由る。化他の徳に二諦に由るとは、如來は所説の法有りて、衆生の爲に説法すと。常に二諦に依る。故に『中論』に云はく、「諸佛は二諦に依りて、衆生の爲に説法す」と。問ふ、「何を以てか自他の兩徳は並に二諦に由ることを知るや。」答ふ、『十二門論』に云はく、「二諦を識るを以ての故に、即ち自利他利及び共利を得」と、即ち其事なり。二諦は是れ自行化他の本なるを以ての故に、二諦を申明して以て論の宗と爲す。即ち一切衆生をして具に自他の二利を得せしむるなり。二問ふ、「何の人か二諦に迷ひ、論主迷を破して二諦を中ぶるや。」答ふ、「三種の人有りて二諦に迷ふ。一には小乗の五百部なり。各諸法は決定の性有り」と執し、畢竟空を聞いて、刀の心を傷くるが如し。此人は第一義諦を失す。然るに既に第一義諦を失すれば、亦世諦を失す。然る所以は、空は宛然として有なるが故に、有は空の有と名く、方には是れ世諦なり。彼既に空を失すれば、亦是れ有に迷ふ、故に世諦を失す。故に五百部の執は、如來の二諦の外に出づ。二には方廣道人なり。一切の諸法は龜毛兕角の如くにして、罪福報應無しと謂ふ、此人は世諦を失す。然るに有は宛然として空なるが故に、

【疏】 中論疏の初

【今の論】 中論の

【青目】 婆羅門に
して名は青目なり
り、中論の釋を作
る。

【關内】 西に散
東は函谷の中内を
いふ。今の關内省
【善釋】 環堵の
二論等上に掲ぐる
三義を指す。

空は有の空と名く。既に空の有を失すれば、亦有の空を失す。斯の如きの人は亦二諦をも失す。又諸の外道も亦二諦を失す。有見の外道の如きは眞諦に迷ひ、空見の外道は世諦に迷ふ。又凡夫は有に著するが故に眞諦に迷ひ、二乗は空に滯ふれば世諦に迷ふなり。第三の人は二諦の名を得て二諦の旨を失す。斯執は甚だ多し、今略して二種を出す。或は二諦一體と言ひ、或は二諦異體と云ふ、並に二諦の義を成ぜず。具に疏の初に之を序すべきが如し。今此失を破して二諦を申明するが故に、二諦を用て宗と爲すなり。『問ふ、『何を以てか此論は、二諦を用て宗と爲と知ることを得るや。』答ふ、『略して三種有り。一には『環堵』の佛母品に、『二諦とは不生不滅乃至不來不去』と明す。今の論に正しく八不を明す、故に知んぬ、即ち是れ二諦を辨するが故に二諦を以て宗と爲す。二は青目、論の意を序するに、外人二諦を失する、龍樹菩薩是等の爲の故に、此『中論』を造るを明す。即ち知んぬ、外の迷失を破して、二諦を申明するが故に、二諦を以て宗と爲すなり。三には關内の曇影の『中論』の序に云はく、『此論は理の窮らざる無く、言の盡さざる無しを雖も、其要諦を統ぶれば二諦を會通す』と。今還りて舊釋を述ぶるが故に知る、二諦を宗と爲すことを『問ふ、『既に『中論』と名く、何が故にか中道を用て宗と爲さず、乃ち二諦を以て宗と爲すや。』答ふ、『即ち二諦は是れ中道なり、既に二諦を以て宗と爲す、即ち是れ中道を宗と爲すなり。然る所以は、還りて二諦に就いて中道を明すを以ての故に、世諦の中道、眞諦中道、非眞非俗の中道有り。但今は名宗兩ながら擧げんと欲するが故に、中諦互に説く

【又得道智云云】
成實論に、得道智
慧を具する者には
實法を説くといふ
に依る。
【空品の末】 破空
品の終をいふ。

が故に、宗は其諦を擧げ名は其中に題す。若し中道を以て名と爲し、復中道を以て宗と爲せば、但不二の義を得て、其の二の義を失ふが故なり。』問ふ、『經に何が故にして二諦を立つるや。』答ふ、『此に兩義有り。一には佛法は是れ中道なりと示さんと欲するが故に、世諦有るを以て、是故に不斷なり。第一義を以て、是故に不常なり、所以に二諦を立つ。又二慧は是れ三世の佛の法身の父母なり、第一義有るを以ての故に般若を生じ、世諦有るを以ての故に方便を生ず。實慧方便慧を具すれば、十方三世の佛有り、是故に二諦を立つ。又第一義を知るは是れ自利にして、世諦を知る故に能く他を利す。具に二諦を知る、即ち共利を得るが故に二諦を立つ。又二諦有るが故に佛語は皆實なり。世諦を以ての故に有る説く是れ實なり、第一義の故に空を説く是れ實なり。又佛法漸く深し、先に世諦の因果を説いて教化し、後の爲に第一義を説く。又得道智を成就する者には第一義を説き、世諦を説くこと有ること無し。又若し先に世諦の因果を説かずして、直に第一義を説かば、則ち斷見を生ぜん。是故に具に二諦を明すなり。』

次に『百論』の宗を明すとは、『百論』は邪を破して二諦を申明す。具に空品の末に説くが如し、亦應に二諦を以て宗と爲すべし。但今は『中論』と互に相聞避せんと欲すれば、『中論』は二諦を以て宗と爲し、『百論』は二智を用て宗と爲す。即ち諦智は互に相成ずるところを明さんと欲するなり。問ふ、『百論』は何が故に二智を用て宗と爲すや。』答ふ、『提婆は外道と對面し撃揚して、一時の權巧をもて闢ふ智慧なり。但提婆の權巧は巧に能く邪を

破し、巧に能く正を顯す。而して實には所破も無く亦所顯も無きが故に實智と名く。一論の始終に此二智を明すが故に、二智を以て宗と爲す。『中論』は内と一時の權巧を諍はず、但同じく二諦を擧する人と共に、二諦の得失を諍ふが故に、二諦を以て宗と爲す。則ち『中論』は所申を用て宗と爲し、『百論』は能申を用て宗と爲す。佛と菩薩と能所共に相成することを明さんと欲するなり。』

【論に云はく】 觀因縁門の支。

【波若】 Prajñā 智慧、明と譯し一切の智慧の中、無上無比無等なるをいふ。
 【二九】 四論の破申不同を明す。
 【四論】 中、百、十二門論及び智度論を加ふ。

次に『十二門論』の宗を明せば、此論も亦内の迷を破し二諦を申明すれば、亦二諦を以て宗と爲す。但今は三論の不同を示さんと欲すれば、宜しく境智を以て宗と爲すべし。言ふ所の境智とは、論に云はく、「大分の深義は謂ゆる空なり。若し是義に通達すれば、即ち大乘に通達し、六波羅蜜を具足して障礙する所無し」と。大分の深義とは謂はく、實相の境なり。實相の境に由りて般若を發生す、般若に由るが故に萬行成ずることを得、即ち是れ境智の義なり、故に境智を用て宗と爲すなり。

次に四論の破申不同を明す門。言ふ所の破申とは、凡そ三義有り。一には外人の迷敎の病を破するが故に、名けて破と爲し、佛の二諦の敎門を申ぶるが故に、名けて申と爲す。二には佛の正敎を申ぶれば邪迷自ら破するが故に、名けて申破と爲すのみ。三には論主佛の破を申明するが故に申破と名く。諸大乘經は衆生の虛妄を破して、以て一道を顯す。

但末代の鈍根は、如來破病顯道の意を了せず。四依の菩薩、還りて佛の破を申明するが故に申破と名く。是れ經の中に自ら義を立て、論の中に自ら破を明すには非ざるなり。

【邪見品】 中論の末。【瞿曇】 Gautama 釋種の姓。

【乃至】 外道の五種の常法の中、時と方と塵とを乃至とす。

問ふ、「何を以て龍樹は佛の破を申ぶることを知るや。」答ふ、「最後の邪見品に云はく、『瞿曇大聖主は、憐愍して是法を説いて、悉く一切見を斷ず、我今稽首して禮す』と。故に知んぬ論主は佛の破を申明して、自ら破有るに非ざるなり。」問ふ、「經の中に立有り破有り、論主は何が故に一向に破するや。」答ふ、「末世は鈍根にして佛の立破に迷うて、並に皆病を成す。是を以て論主は須く並に之を破すべし。然して後に具に如來の立破を申ぶることを得。」問ふ、「論主、佛の破を申べて論主の破と稱することを得ば、論主、佛の立を申べて、應に論主の立と名くべきや。」答ふ、「亦爾ることを得るなり。」問ふ、「四論の破申云何が同異なる。」答ふ、「三論は通じて衆迷を破し、通じて衆教を申ぶ。『智度論』は別して般若の迷を破し、別して般若の教を申ぶ。三論の中に就いて自ら二類を聞く。『百論』は正しく外を破して傍に内を破す。餘の二論は正しく内を破して傍に外を破す。三論の内を外を破する所以は、一切の衆病は二種を出でず。一に外道の邪畫して迷を起し、二に内人教を棄けて旨を失す。若し斯二を破すれば則ち衆病皆除く。」問ふ、「百論』は外を破すること明文有るべし。何の處にか内を破する文有るや。」答ふ、「破塵品の中に外人内の義を以て證と爲し、論主即ち其所引を破す。具に彼に明すが如し。」問ふ、「何が故に内を破することを得る。」答ふ、「三種の義有り。一には向に之を釋するが如し、外人立つる義成せず、内を引いて證と爲す。故に須らく内を破すべし。二には、内人の立する外道と同じ。虚空常に遍なりと立て、乃至涅槃は身智俱に無しと立つる如き、並に外道と同じ。故

【三相：前後相生】
譬喻部は生は前、次に住、後に滅すといふを指す。

【華法師云云】百論の序、偈華の言なり。外道も三寶及び二十五諦六七諦十六諦と立つること内法と同じければなり。

【蟲の木を食ふ云云】涅槃經第二に説く。

【二〇】以下、別して三論を釋することとを明す。

に須らく内を破すべし。三には外道の立する義内人と同じ、故に須らく之を破すべし。破因中無果品に説くが如し。外道は三相に於て前後の相生を立つるは、譬喻部と同じ。三相の展轉して一時に生ずと立つることは、薩婆多部と同じ、故に須らく内を破すべし。故に聖法師の云はく、「邪辨眞に逼りて殆んど正道を亂す」と。問ふ、「中論」は何が故に傍に外を破するや。』答ふ、「凡そ四義有り。一には『中觀』は法の窮らざる無く、言の説かざる無し。若し一法窮らず、一言も盡きざれば、則ち戲論滅せず中觀生ぜざることを顯さんと欲す。是故に内外並に皆之を破す。二は内人の立する義外道と同じ。故に須らく外を破すべし。三は外道の立する義内人と同じ、故に須らく外を破すべし。四には中實は内に非ず外に非ず、正ならず邪ならざることを顯さんと欲するが故に、須らく外を破すべし。』問ふ、「百論」は外を破す、亦收取の義有りや不や。』答ふ、「亦四句有り。一には破して取らず。即ち是れ外道の邪言なり。中を障へ觀に迷ひ、縁に於て益無く損有り。二には取りて破せず。外道は如來遺餘の善法を偷竊する、今並に之を收む。賊の牛を盜むが如し、即ち其證なり。又外道は各邪心推畫して、冥智内と同じ。蟲の木を食ふに偶字を成すことを得るが如し、亦取りて破せず。三には亦破し亦取る。外道は佛教を偷竊して、旨歸を識らす。今其迷教の情を破して、所述の教を收取す。四には破せず取らず。即ち道門の未だ曾て内外ならざることを顯すなり。

【二〇】次に別して三論を釋することを明す。問ふ、「既に四論有り、何が故に常に三論と稱する

【四依の菩薩】如來の使者となり、末世に法を弘め、天人の依止となる四人。即ち三賢四善根、預流果一來果不還果阿羅漢の【網維】網紀に同じ。のつとり治むること。

【三】次に三論の通別を論ず。

や。』答ふ、『略して八義有り。一には一一の『論』に各三義を具す。一に破邪、二に顯正、三に言教なり、同じく此三義を具するを以ての故に、合して三論と名く。二には三論は具に合して方に三義を備ふ。『中論』は所顯の理を明し、『百論』は邪執を破し、『十二門』は名けて言教と爲す。三義相成するを以ての故に、名けて三論と爲す。三には『中論』は廣論と爲し、『百論』は次論と爲し、『十二門』は略論と爲す、三部は上中下の三品を具する故に三論と名く。四には一切の經論に凡そ三種有り。一には但偈論、即ち是れ『中論』なり。二には但長行論、謂ゆる『百論』なり。三には亦是は長行、亦是は偈論、即ち『十二門論』なり、三部は互に相開避して而も共に相成するを以てなり。五には此三部は同じく是れ大乘の通論なるが故に三論と名く。六には此三部は同じく不二の實相を顯す、故に三論と名く。七には同じく是れ四依の菩薩の所造なり。八には同じく是れ像末の所作なり。但大法を網維せんと欲するなり。

次に三論の通別を論ずる門なり。『智度論』を以て三論に對しぬれば、則ち『智度論』を別論と爲し、三論を通論と爲す。三論の中に就いて自ら三の別有り、即ち三の例と爲す。『百論』を通論の廣と爲し、『中論』を通論の次と爲し、『十二門』を通論の略と爲す。然る所以は、『百論』は通じて世出世を障ふる一切の邪を破し、通じて世出世一切の正を申ぶるが故に、通論の廣と名く。『中論』は但大小二迷を破し、通じて大小の兩教を申ぶ。世間の迷を破し世間の教を申べざるが故に、通論の次と爲す。『十二門』は但執大の迷を破し、大乘

【摩訶衍】大なる乗物の意、今は大乘思想の本質を捕捉し來りて解釋を加ふるをいふ。

の教を申ぶれば通論の略と爲す。問ふ、『何が故に爾るや。』答ふ、『外道の邪興りて、遍く世出世大小一切の教を障ふるが故に、提婆は遍く衆邪を破し、備に衆教を申ぶ。是を以て論に明す、始三歸より終二諦に竟るまで、教の中べざる無く、邪の破せざる無し。』中論』は大小の學人の二教を封執するに對するが爲の故に、但二迷を破して但二教を申ぶ、是を以て論文に大小二章の説有り。『十二門論』は觀行の精要を辨じて、方等の宗本を明すが故に、正しく大迷を破し、獨大教を申ぶ。是を以て論文に、宗に命じて但「略して摩訶衍の義を解す」と説く。』問ふ、『十二門』も亦備に小乘外道を破す、云何が但大迷を破し、但大教を申ぶと言ふや。』答ふ、『備に衆病を破すと雖も、而して正意は大乘を申べんが爲の故に、論文に前には略して大乘を解すと明し、而して後には則ち「末世の衆生薄福鈍根にして、經文を尋ぬと雖も、通了すること能はず」と云ふ。即ち知る大乘の旨を失するを尋ぬるに、但小乘外道の彼大乘を障ふるが故に、須らく之を破すべきのみ。亦小乘外道を以て同じく大乘に入らしめんと欲するが故に、須らく之を破すべし。』問ふ、『百論』に大小兩教を申ぶ、『中論』と何の異か有る。』答ふ、『百論』は總じて大小を申ぶ。然るに『中論』は別して二教を申ぶ、亦『百論』は淺より深に至り、『中論』は深より淺に至る。』問ふ、『何が故に爾るや。』答ふ、『百論』は邪を廻して正に入る始行の人の爲の故に、始三歸より終方等に入るが故に、淺より深に至る。』中論』は諸佛本末の義を示し、大乘を本と爲し小乘を末と爲す、故に深より淺に至るなり。』

【三】以下、四論の用假不同を明す

【十二部經】一切經を十二の種類に分ちて名く、即ち修多羅、祇夜、伽陀、尼陀那、伊帝達摩、阿波陀那、優婆提舍、毘佛略和伽羅
【八萬の法藏】佛所説の教法に多義を藏すれば法藏といひ、其數八萬四千ありといふ
【三】以下四論の對緣不同を明す
【九十八師】六師外道に各弟子十五人あり、是に六師を加ふ
【無方の論】不定の論

次に四論の用假不同を明す門なり。一切の諸法は並に是れ假なりと雖も、其要用を領するに凡そ四門有り。一に因緣假、二に隨緣假、三に對緣假、四に就緣假なり。一に因緣假とは、空有二諦の如き、有は自ら有ならず空に因るが故に有なり。空は自ら空ならず、有に因るが故に空なり。故に空有は是れ因緣假の義なり。二に隨緣假とは、三乘の根性に隨うて、三乘の教門を説くが如し。三に對緣假とは、常を對治するに無常を説き、無常を對治するに是故に常を説くが如し。四に就緣假とは、外人は諸法有りと執す、諸佛菩薩は彼に就いて推求し檢するに竟に得ざるを就緣假と名く。此四の假は總じて十二部經八萬の法藏を收む。然るに四論は具に四假を用ふ、但『智度論』は多く因緣假を用ひて以て經を釋し義門を立つるが故に『中論』『十二門』は多く就緣假を用ひ、『百論』は多く對緣假を用ふ。次に四論の對緣不同を明す門なり。四論を著すに、略して二種を明す。提婆菩薩は論鼓を王庭に震ふに、九十六師一時に雲集して、各名理を建て無方の論を立つ。提婆邪師を面拆し、後に閑林に還りて當時の言を撰集して、以て『百論』と爲す。龍樹菩薩は帷を潛にし著筆し外情を探り取りて病を破し經を申ぶるが故に『中論』を造る。問ふ、何が故にし著筆して以て『論』を造るなり。提婆は既に弟子爲り、物情畏憚せざる所なるが故に、これ之言を交ふ、故に後に集めて以て『論』と爲す。

次に三論の所破の緣に利鈍の不同有るを明す門なり。今略して中百二論を擧げて、衆生

【三】以下、三論所破の縁に利鈍あることを明す。

【三五】以下、別して中論の名顯を釋す。

【影法師云云】出三藏記に編載す。

の悟を得る不同を明す。凡そ四種有り。一には自ら一種根縁有り、『百論』は始に罪福を捨し、終に空有を破するを聞いて、此言下に當りて無生を悟ることを得。二に諸の外道有り、提婆の當時の所破を聞いて、言理俱に屈すと雖も、猶未だ悟ることを得ず、後に出家して竟に佛經を稟受して、方に乃ち悟を得、此れ中根の人なり。三に諸の外道有り、提婆の言を聞いて了せず、經を尋ねて翻じて更に迷を起し、『中論』の爲に破せられて方に悟を得、此れ下根の人なり。四に諸の外道有り、初に提婆の言を稟け、乃至『中論』を尋ねて亦未だ解を得ず、後に十二門觀の玄略に因りて方て乃ち悟を得たり。

次に別して『中論』の名顯を釋する門なり。此論の立名に廣有り略有り。言ふ所の略とは、但『中論』と稱す、故に影法師の序に云はく、『中論』に五百の偈有り、龍樹菩薩の所造なり」と。而して後に但『中論』の兩字を釋す、故に名けて略と爲す。問ふ、『何が故に但『中論』と稱して觀と題せざるや。』答ふ、『中は是れ所論の理實なり、論は是れ能論の教門なり。若し理教を明すが故には、義は周ねからざる無し。言ふ所の廣とは、之に加ふるに觀を以てす。故に影法師の『中論』の序に云はく、『此諸邊を寂する、之を名けて中と爲す、問答拆徴、之を稱して論と爲す』と。亦云はく、『觀とは直に觀は心に辨じ論は口に宣ぶるを以てのみ』と。『問ふ、『何が故に具に三字を題するや。』答ふ、『中に因りて觀を發し、觀に由りて論を宣ぶ、要す三法を備ふる義乃ち圓足す。』』
次第門。問ふ、『此三字に何の次第か有るや。』答ふ、『二種の次第有り。一には能化の次

【名けて經と爲す】
經論の兩名は佛並に弟子に通ず。即ち佛の大小乘經を内論といひ、菩薩の所造を經といふことあり、此旨地持論、付法傳等に明せり。

【義は…此四】謂はく發照說行即ち境智智諦の四。

第一、二には所化の次第なり。能化の次第とは、中は謂はく三世十方の諸佛菩薩の所行の道なり、故に前に中を明す。此道に由るが故に諸佛菩薩の正觀を發生す、故に次に觀を明す。内に正觀有るに由るが故に、佛之を口に宣ぶ、之を名けて經と爲す。四依の菩薩は之を口に宣ぶ、之を名けて論と爲すなり。所化の悟入の次第に約せば、稟教の徒は論に依りて中を識り、中に因りて觀を發す。若し佛に望めては教に因りて理を識り、理に由りて觀を發すなり。次に制立門。但三字を明して、多からず少からざる所以は、略して三義有り。一には諸佛菩薩は凡そ二徳有り。一には自行、二には化他なり。中と觀とは謂はく自行なり、論の一字は即ち是れ化他なり。自行化他は義攝せざること無きが故に、但三字を標す。二には衆生を化するに要必ず三を具す。一には所悟の理有り、二には理に因りて觀を發す、三には觀に由りて論を宣ぶ、故に但三を明すなり。三には中を以て觀に對すれば是れ境智の名なり、觀を以て論に對すれば行證の稱と爲る。中に因りて觀を發すが故に、中を以て境と爲し、觀を以て智と爲すなり。説の如く行するを觀と爲し、行の如く説くを論と爲す。義は唯此四なるを以ての故に、名字は但三の名有るなり。次に通別を論する門なり。通じて言を爲さば、三字は皆中、皆觀、皆論なり。言ふ所の皆中とは、理實には偏ならざるが故に、理を名けて中と爲す、中の理に由りて觀を發せば、觀は偏觀に非ず、觀も亦中と名く、中觀に因りて論を宣ぶ、論は偏論に非ず、論も亦中と名く。三字皆觀とは中は是れ義相觀、觀は是れ心行觀、論は是れ名字觀なり、亦三種般若の如し。中は是れ

【實相般若】般若の實體、本來衆生に具して一切虚妄の相を離れて般若の實性。
 【觀照般若】實相を觀照する實智。
 【文字般若】般若に非ざれども、上の二を詮顯する言教五部、五部並びに大般若經の如きをいふ。

實相般若、觀は是れ觀照般若、論は是れ文字般若なり。三種皆論とは、論は是れ能論なるが故に名けて論と爲し、餘の二は所論なれば亦名けて論と爲すなり。別に就いて言はば、理は實にして偏ならず其中の名を與ふ、智は是れ達照すれば其觀の稱に當る、論は是れ言致なるが故に之を口けて論と爲す。次に互に發盡するを明す門なり。中に就いて中は觀を發し觀は中を發し、緣は觀に盡き觀は緣に盡くる有り。言ふ所の中の觀を發すとは、『涅槃經』に云ふが如し、『十二因緣は不生不滅にして能く觀智を生ず。譬へば胡瓜は能く熱病を發すが如し。觀は中を發すとは、衆生本因緣は是れ生是れ滅と謂うて、是れ中を知らず。正觀を以て檢するに、生滅を得ずして、方に因緣は是れ中なりと悟る。此は則ち觀に因りて中を發す、緣は觀に盡き、觀は緣に盡くとは、凡夫二乘及び有所得偏邪の緣は、菩薩の正觀の内に盡く、故に緣は觀に盡くと名く。觀は緣に盡くとは、邪緣既に盡きぬれば正觀も亦息まん、故に觀は緣に盡くと名く。緣は觀に盡くるが故に緣に非ず、觀は緣に盡くるが故に觀に非ず、緣に非ず觀に非ず、知らず何を以て之を美めん、強て正觀と名くるなり。問ふ、『既に緣は觀に盡き、觀は緣に盡くるを得ば、亦中は觀に盡き觀は中に盡くることを得るや不や。』答ふ、『亦爾ることを得るなり。中は是れ智の境、觀は是れ境の智なり。境は自境ならず、智に因るが故に境なり。智は自智ならず、境に因るが故に智なり。智に由るが故に境なれば境は自境ならず。境に由るが故に智なれば、智は自智ならず。自智ならざれば則ち智に非ず、自境ならざれば則ち境に非ず、故に是れ境は智に盡き、智

【涅槃に云云】第十七梵行品の文。

【華嚴】晋經第三十五如來性起品中の普賢菩薩の偈の文。

【華嚴】第五光明覺品文殊說偈の文

は境に盡く。』問ふ、『亦縁は觀を發し、觀は縁を發すことを得るや不や。』答ふ、『邪縁に由るが故に正觀を顯すことを得、即ち是れ縁は觀を發す。正觀に由るが故に縁は是れ邪を顯す、謂はく、觀は縁を發すのみ。』

次に別して三字を釋するを明す門なり。總じて釋義を論ずるに凡て四種有り。一に依名釋義、二に就理教釋義、三に就互相釋義、四に無方釋義なり。依名釋義とは、中は實を以て義と爲し、中は正を以て義と爲す。中は實を以て義と爲すは、『涅槃』に本有今無の偈を釋して、『我昔本中道の實義無し、是故に現在に無量の煩惱有り』と云ふが如し。觀師の『中論』の序に云はく、『中を以て名と爲すは、其實を照すなり、照は謂はく顯なり、中の名を立てて諸法の實を顯さんと欲する爲の故に、其實を照すと云ふなり。言ふ所の正とは『華嚴』に云はく、『正法の性は一切の言語道を遠離す。一切の趣非趣悉く皆寂滅の相なり。此正法は即ち是れ中道なり、偏を離るるを中と曰ひ邪に對して正と名く』と。摩公の『物不遷論』に云はく、『正觀論』に曰はく、『方を觀じて彼去を知る、去る者方に至らず。故に知んぬ中は正を以て義と爲すなり』と。理教釋義とは、中は不中を以て義と爲す。然る所以は、諸法の實相は中に非ず不中に非ず、無名相の法を衆生の爲の故に、強ひて名けて相と説く、此名に因りて以て無名を悟らしめんと欲す、是故に中を説くは不中を顯さんが爲なり。問ふ、『中は不中を以て義と爲すは、何れの文にか出づる。』答ふ、『華嚴』に云はく、『一切の有無の法は有無に非ずと了達す、若し爾らば一切中偏の法は中偏に非ずと了達す』

【經】涅槃經第十
七梵行品の文。

【華嚴經】光明覺
品の條、即ち一多
相容自在門の所明
是なり。

【經】涅槃經第十
七の文、及び第二
十五鋪子吼品第一
の文。

と。即ち其事なり。言ふ所の互相釋義とは、中は偏を以て義と爲し、偏は中を以て義と爲す。然る所以は、中偏は是れ因縁の義の故に、偏を説いて中を悟らしめ、中を説いて偏を識らしむ。經に云ふ如し、「世諦を説いて第一義諦を識らしめ、第一義諦を説いて世諦を識らしむ」と。四に無方釋義とは、中は色を以て義と爲し、中は心を以て義と爲す。是故に『華嚴經』に云はく、「一の中に無量を解り、無量の中に一を解る」と。故に一法は一切の法を以て義と爲すことを得、一切の法は一法を以て義と爲すことを得。問ふ、中に幾の種か有る。答ふ、「既に稱して中と爲す、則ち多に非ず一に非ず、義に隨ひ縁に對して、多一を説くことを得。言ふ所の一の中とは、一道清淨にして更に二道無し、一道とは即ち一中道なり。言ふ所の二の中とは、則ち二諦に約して中を辨ず。謂はく、世諦の中、眞諦の中なり。世諦は偏ならざるを以ての故に、名けて中と爲し、眞諦は偏ならざるを名けて眞諦の中と爲す。言ふ所の三の中とは、二諦の中及び非眞非俗の中なり。言ふ所の四の中とは、謂はく、對偏中、盡偏中、絶待中、成假中なり。對偏中とは大小の學人斷常の偏病に對す、是故に對偏中と説くなり。盡偏中とは、大小の學人斷常の偏病有れば則ち中を成ぜず、偏病若し盡くれば則ち名けて中と爲す。是故に經に云はく、「衆生の見を起すに凡そ二種有り。一に斷、二に常なり。是の如きの二見を中道と名けず、無常無斷を乃ち中道と名く」と。故に盡偏中と名くるなり。絶對中とは、本偏病に對す、是故に中行り。偏病既に除く、中も亦立せず、中に非ず偏に非ざれども、衆生を出處せしめん爲に強て名けて中

【此論】 觀本際品
【經に亦云はく】
大集經第十二、虛
空藏菩薩、偈讚の
文。

【中假の義】 大乘
玄論二十卷の中、
現に五卷を存する
も見ず、恐くは別
に在りしか。

【僧法】 數論をい
ふ。
【泥團云云】 泥形
は瓶形に異なるも體
よりすれば別なき
をいふ。
【衛世師】 吠世史
迦、譯して勝論と
いふ。
【聲を云云】 鐘聲
を雷に比せば大なる

と爲す、謂はく、絶待中なり。故に此論に云はく、「若し始終有ること無くんば、中は當に云何が有らん」と。經に亦云はく、「二邊を遠離して中道に著せず」と、即ち其事なり。成假中とは有無を假と爲し、非有非無を中と爲す。非有非無に由るが故に有無と説く。此の如きの中は假を成ぜん爲なり、謂はく成假中なり。然る所以は、良に正道は未だ曾て有無ならず、衆生を化せんが爲に假に有無を説くに由るが故に、有無に非ざるを以て中と爲し、有無を假と爲すなり。成假中に就いて、單複疎密横堅等の義有り、具に中假の義に説くが如し。有を説くを單の假と爲し、非有を單の中と爲すが如し。無の義も亦爾り、有無を複の假と爲し、非有非無を複の中と爲す。有無を疎の假と爲し、非有非無を疎の中と爲す。不有の有を密の假と爲し、有の不有を密の中と爲す。疎は即ち是れ横なり、密は即ち是れ堅なり。

次に中の不同を釋する四種有ることを得。一は外道に明す中、二は毘曇に明す中、三は成實に明す中、四は大乗の人の明す中なり。外道に中を説くは、僧法の人の言はく、「泥團は瓶に非ざるに非ず」と。即ち是れ中の義なり。衛世師が云はく、「聲は大と名けず小と名けず」と。勒沙婆が云はく、「光は闇に非ず明に非ず」と。此三師は並に兩非を以て中と爲すも、而も未だ中と爲す所以を知らざるのみ。毘曇の人の中を釋するは、事有り理有り。事の中とは無漏の大王は邊地に在らず。謂はく、欲界及び非想に在らざるなり。理の中とは、謂はく、苦集の理は斷ならず常ならざるなり。成實の人の中道を明すは、論文に「直

らず幣に比せば少ならずと。

【勒沙婆】苦行と譯す、尼乾子即ち離繫師外道。

【光云々】月光を日光に比し明ならず、星に比して闇ならざ。又光は闇に異り明に殊る。寸炎を光とし、室に滿つるを明とすればなり。

【成實の人】成實論一切有無品の文

【中假師】續高僧傳に依るに攝山止

觀の詮法師の弟子

禪衆寺の勇法師、

長于寺の辨法師等

三法を稟けて中假の病を執すと、此等を貶して中假師といふ。

に有を離れ無を離るるを、聖中道と名くと言ふ。而して論師の云はく、「中道に三有り。一に世諦の中道、二に眞諦の中道、三に非眞非俗の中道なり」と。四に大乘人の明す中は、攝大乘論師の「非安立諦は生死に著せず涅槃に住せず、之を名けて中と爲す」と明すが如し。義の本とは無住を以て體の中と爲す。此は是れ合門なり。體の中に於て開いて兩用と爲す。謂はく、眞俗なり、此は是れ用の中なり、即ち是れ開門なり。亦中假師の云はく、「非有非無を中と爲し、而有而無を假と爲す」と。

三論玄義終

昭和六年四月一日印刷
昭和六年四月十日發行

昭和六年四月十日印刷
昭和六年四月十日發行

不許複製

編纂者

昭和國譯大藏經編輯部

代表者 三井品史

發行者

東京市神田區一ツ橋通町二番地
株式會社 東方書院

代表者 三井品史

印刷者

東京市神田區表神保町十番地
同 興舍

代表者 井波康三郎

發行所

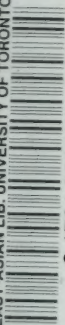
東京市神田區一ツ橋通町二

株式會社

東方書院

電話九段三八四二
振替東京六八一

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3456